
怪盗な季節☆

レルバル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗な季節☆

【Nコード】

N3330L

【作者名】

レルバル

【あらすじ】

俺は永久^{とわはのん}波音。

コソ泥高校生としてそれなりに楽しい生活を送っていた。だが親友の園田仁のひよんな提案によりベルカの遺跡に忍び込む。そこから出てきたのは不思議な美少女。

「僕は…僕は…ベルカ帝国を守るためだけにつくらた最終兵器なんだ。」

二五三一型バトルヒューマン。
通称、大量殺戮破壊最終兵器生命体」

さてと、だれか俺に救いの手を差し伸べてくれる心優しい人はいないだろうか？

いたとしてもこれじゃ助けてはくれないか？

もし助けてくれるとしたら……そうだな。

ジューズおごるぜ。

一缶だけな？

<http://ncode.syosetu.com/n2021p/>

↑外伝です。

本編のキャラが壊れていますがあそこはご愛嬌ということで☆

登場人物紹介

とわはのん
永久波音

普通に過ごす高校生。

怪盗としての威厳などはいっさいもっておらず
わざわざ予告状をだして警備を強化させるなんてあほなこともしない。

いつも学生服である。

ちなみに、ベルトは白色。

防弾繊維で出来ている、鬼灯財閥の特注品である。

さりげなく、女子に人気があったりなかったり。

喫水のバカ。

アホ、ドジ、間抜け。

でもやるときはやるかもしれない子。

シエラ（F・D）

ベルカ帝国最終兵器

髪はシルバーブラックのロングで、目は赤紫。美少女。

学校では庇護欲をしげきするが

波音と二人きりになったりすると軍人のしゃべり方になる。

女であることを相手に意識させないようにするため。

ボクっ娘であり、口下手。

自分をボクと呼ぶのは前に一緒に戦っていた最終兵器の一人称がボクだったため。

波音とは主従関係にある。

でも実質それが瓦解化している可能性は否めない。
名前の由来はベルカの神話、恐怖神から。

メイナ（S・D）

シエラの姉貴。

プロトタイプ

こいつも最終兵器で「S・D」と呼ばれている。
物腰柔らかかに話す。

シエラと双子である。

シエラと違うのはショートヘアぐらい。

シエラと同じく、波音の家に住み着く。

でもあまり活躍の場を与えてもらえないかわいそうな子。
すんません。

そのだじん
園田仁

PCオタク。

旧ベルカ帝国の技術セキュリティに勝てるほどすごい。

イケメンで、運動神経もいい。

勉強もできるので、日本帝国宇宙基地…通称「JAXU」から推薦
依頼が来るほど。

メガネがグッドb

波音の相棒だ。

そしてスペックが今見たらすげえチートで驚いた。

そしてここに出てくるレルバルは筆者とは関係ありません。
というかPN変えてレルバルになったためどっちかというと波音が
先だったりします。

いえ、本当はもっと前のPNだったんですが……。
もう複雑な説明になってきた……。

レルバル（初代PN）

←

ねみえる（二代目PN）

※この時にこの小説を執筆。

←

レルバルに戻す↑今ここ

登場人物紹介（後書き）

今更ながら……ですね。

登場人物紹介だなんて。

遅すぎましたね、本当に。

俺ってバカ。

俺高校生 バイト中（前書き）

どうもはじめまして。

レバルと申します。

ブログから転移（？）させていただいております。

初めてこういうサイトに投稿するのでやや緊張気味です。

<http://unsungtwilight.blog63.fc2.com/blog-category-2.html>

こちらが本家での目次となっております。

僕の趣味が多々入っておりますがなにとぞ読んでいただけるとうれ
しいです。

小説内での矛盾があったらどうか教えてください。

大至急訂正させていただきます。

お楽しみいただけると嬉しいです。

俺高校生 バイト中

「大切なものが消えるとき

三つの死は姿をあらわす。

死は力を使い地上を無に戻す。

死は鬼神となり

恐怖の中で消えていく。

大切なものを失った悲しみと共に」

薄暗い部屋に響く金属音。

パソコンが出している電子音。

部屋は、地下室なのか窓がひとつもなかった。

あるのは、今俺達が入ってきた入り口、そして大金庫への入り口のみだ。

薄暗い部屋に二つの人影が揺らめいている。

一人は大きな金属製の扉のそばに。

もう一人は、扉のそばにあるモニターの戸から配線を引きずり出し自分のPCにつないでいた。

カタカタと、キーボードが鳴る。

画面に、文字が並び回転を始め黒い画面に、四桁の文字が右から次々と並んでいく。

そして…

「よし、あいた」

俺は、自分のPCをいとおしそうになでている奴に話しかける。

「流石だな、仁。」

仁は、PCから目を離し僕の方をみてにやり笑った。

白い歯が、モニターからの光できらめく。

「これぐらい楽勝さ」

仁が、Vサインを送ってくる。

俺もVサインを返した。

そして、扉に手をかけ巨大金庫の中に入る。

ひんやりとした空気が体を包むのが分かった。

期待と緊張の二つで心臓がバクバクと波打っている。

記憶によれば、ここで赤外線センサーが作動しているはずだ。

赤外線暗視ゴーグルを取り出し頭につけ、スイッチを入れる。

キュウウウ…と小さく音がして視界に赤い光線が現れる。

その赤外線に光着色液を吹きかける。

白い霧の後には、赤く光る光の線が残る。

「うわ…」

仁が小さく声をあげる。

赤外線が蜘蛛の巣のように獲物を囲んでいた。

獲物は、赤外線の光で血のように赤くきらめき俺を誘っているよう
だ。

俺は、大きく息を吸い…

公立大塔高校。

1年D組

第二期二〇一二年。

六月二十五日。

朝、午前八時ぴったり。

教室で寝ようとはやくきた俺の心を無視してバーン！と勢いよく教室のドアが開いた。
今日も元気なやつだ。

「なんで放っていったんだ！！波音！！」

そういうながら、俺にタックルをかましてくる男。

こいつの名前は遠田^{そのだじん}仁。

俺の親友で相棒だ。

寝不足でぼんやりしている頭を右手で抑えながら左手で仁の頭を叩く。

眠いんだから騒ぐな。

仁は百五のダメージを受けた。

こいつの後ろからお馴染みのメンバーがぞろぞろ入ってくる。

「うるせーぞ、仁！！」

とか、いいながらかなり怖い顔でジロリと睨む女子。このこえー女子は鬼灯^{ほおずき}詩乃だ。

いままでたてた武勇伝は数知れず。

男子十人相手に勝ったとか…

恐ろしいやつだぜ。

勝てる気がしないからな。雰囲気的にも。

「エロ…それは人類の神秘…」

とか言いながら舞う奴。

^{ながれぎはるか}
流木^{りゅうぎ}遼。

かなりの変態だ。

そしてうるさい。

だが、頭がいい。

捕捉説明。

巨乳好きだ。

朝っぱらからそれはどうかと思うが。

「うるさいよ……？」

で、こいつが村川綾だ。むらがわあや

詩乃の奴と大違いで静かで弱い。(?)

「波音：こいつらなんとかならないのか……？」

そして、頭をフルフルしながら両手を上にあげて
お手上げポーズをとっているのが冬蟬だ。ふゆせみ

後、もう一人クラスの兄貴分がいたがちようちよを追いかけて外に
行ったので説明は省く。

ってか、そのうち説明する。

俺には、仁を除き知らない秘密がただひとつ。

俺の名前は永久波音だ。とわはのん

なんやかんやあって、今バイト中だ。

なんのバイトかというと、それは盗み……

世間からは、怪盗レルバルとか呼ばれてるが

自分で怪盗という位を名乗ったことはない。

そんなに自意識過剰でもないしな。

昨日の獲物はレインボーパワー。

時価五億円の代物だった。

すでに、バイトの雇い主に渡してある。
邪魔だし。

キンコンカーンコン…

チャイムが鳴り今日も俺の生活が幕をあける。

inues.

This story cont

俺高校生 バイト中（後書き）

これからでしょうかよろしくお願いいたします。

波乱の始まり

「おいこら」

いきなり物騒に呼びかけられて正直びる。

後ろを振り向くとうざそうな顔をした先輩が紙パック片手にこつちをにらみつけていた。

「なんすか？先輩？」

俺は眠い頭を振りながら答えた。

「お前、最近うざいんだよ」

案の定だ。

俺は好きでだらけてるんだ。

それを先輩達が目ざとく見つけて絡んでくる。

正直こつちからしたらお前らのほうがうざい。

いちいちそんな絡まなくても…

「そんなわけで、覚悟しろ！」

どんなわけだよ。

先輩はポケットから金属の手袋みたいなものを取り出した。

そして、俺に殴りかかってきた。

俺はそれをきれいによけて…

「起きろ、永久！」

「は、はいいいい！！」

俺は驚いて思わず椅子から飛び跳ねた。

おおきな音がして椅子が倒れる。

くすくす、と女子が笑っている声が聞こえる。

急なことで恥ずかしさよりも混乱で頭がくらくらする。何が起こったんだ!?

「おい、波音! 痕ついてるぞ!!」

そういつて仁が自分のほっぺたを指差した。

その姿が面白かったので思わず笑ってしまう。

反則だろ、その顔は。

ははは…と笑っていると、急に背中にドスと鈍い痛みが走る。

「わしの授業で寝るとはいい度胸だな? ああ? 永久?」

「はは…は…」

社会の教科書片手にギロンとこつちを睨み付けてくる、30代のおっさん…

われらが生徒指導部長の桐梨先生だ。きりなし

「今の話、聞いてたんか?」

寝てたんだから聞いているわけがない。
なのに、わざと聞いてくる桐梨の奴。

「いえ、聞いていませんでした」

正直にハキハキ答えた。

「なら、廊下ではんせいしてこいやああ！」

と一喝されたあと、俺は廊下で正座させられることになった。
正直に答えたのに…

休み時間になった。

真っ先に俺のところに来る奴。

冬蟬。したの名前は梶^{かじ}。

警視庁の息子だ。

「大丈夫か？ 波音？」

心配そうに来てくれるのが俺が俺が兄貴と慕う柊^{ひいらぎ}人^{すいと}。

前回説明を省いてしまった兄貴分とはこのかただ。

なんか、将来刑事になりたいらしく冬蟬の家によく手伝いにいつて
いるらしい。

「ぶぶぶ…だっせえな、波音…」

遼、お前うざいぞ、最近。

「いやみたつぷりだなお前」

「ぶぶぶ…だってお前の寝起きの反応といったら…ぶぶぶ…」

好きで寝たんじゃない、笑うな。

まあ、こいつはこんな奴です。
昔から知ってます。

「遼、その辺にしといてやんな」

ああ、今は詩乃が神様に見えます。

「あれ？　そういえば、仁は…？」

俺が周りを見渡しても仁の姿が見えない。

「「「「そこ」」」」」

五人同時に俺の後ろを指さす。

俺が振り向いた瞬間：けつに異物が刺さる。

「へい、カンチョウだぜ！！」

見りゃわかる。

仁を張り倒したいとおもった瞬間だった。

「そういえば知ってるか？」

昼食の時間、遼から珍しく話題が飛んできた。

「いま、この時代の前にめっちゃくちや栄えた帝国があったんだってよ」

玉子焼きを頬張りながら耳を傾ける。

「んで、今の技術のほとんどは発掘した遺跡の図面からやっとこさわかるところだけを作ってできた機械が多いんだってさ。

その帝国の名前は、ベルカ。かつてこの地球を全土支配していたらしいぜ」

「バカッ！」

詩乃が遼の口をふさぐ。

先生にでも聞かれたら大変なことになるからだ。

この世界ではベルカ帝国のことを話したり研究したりするのは重大な犯罪となってしまう。

その辺、きちんと理解しておいてもらいたい。

ちなみに

おなががいっぱいになった、その日の午後の授業は

綺麗真っ白に記憶に残らずすべては夢の中だったというのは言うまでもない。

「なあ、波音」

帰り道、仁が俺に話しかけてきた。

「遼が言ってたこと、本当らしいぜ。

なんでも、この付近でその帝国の遺跡が見つかったんだってよ。

親父が言う限りにはかなり頑丈な電子ロックで見たこともない金属で囲まれている倉庫が出てきたらしい」

そこで、仁は話をきって大きく息をすった。

言い忘れていたが仁の親父は考古学者だ。

なんか、仁の家に行くたびに忙しそうにパソコンと向き合っていた。ひとりでぶつぶつと「アンペリア」とか「ターシエー」とかつぶやいてる姿は正直夢に出てくるぐらい恐ろしかった。パソコンで発掘の状況なんかを確認しつつ現地にいたりして掘り出し物を見つけて学会に発表してるんだとさ。複雑だなことをしているな。

「…おい、聴いてるのか？ 波音!!」

不意に仁に声をかけられ、俺の過去の思い出ははじけ飛ぶ。

ああ、さらば我が忌まわしき思い出…

「すまん、きいてなかった。もう一回頼む」

ふくれつつらの仁にもう一度とお願いする。

「しかたねえな、もう一回言うぞ？」

俺は、全身全霊で聞くことにした。

「要点をまとめるとだな：

今日、発掘場に忍び込んで倉庫の中にあるものいただこうZE☆」

俺は全身でその言葉を受け止めた。

そして、突っ込みどころのない言葉にしばし沈黙した。

「いいけど、いやな予感が…」

「あくまでも予感は予感だ」

「そりゃそうだけど…」

「いこうぜ！面白いの見つかるかも知れないだろ？」

「でも：電子ロックあるんだろ？」

それに法律上では禁止されているはずじゃ…」

素直に疑問を口にする。

そういったとき、仁がおいおい…と頭を振る。

「誰か忘れてないか？」

それにお前はもう法律やぶりまくってるだろうが」

「お前だろ？でも超古代文明の技術に勝てるのか？」

そう、俺が言った。

勝てるのか、仁？

仁は逆に目をららんと輝かせて言った。

「俺の腕試しのためだ。頼む」

親友にここまで頼まれたなら仕方ない。
俺はしぶしぶ承知するのだった。

だが、俺達はまだ知らなかった。

まさか、倉庫に眠っていたものがあんなに恐ろしいものだったなんて…

This story continues.

波乱の始まり（後書き）

次でヒロイン登場です（笑）

F・D

「準備OKだな」

俺はそう小声でつぶやくと、玄関から仁の家に向かって出発した。

夜の風が肌にひんやりと冷たい。

にゃ。

足元から声が聞こえたので見ると白い猫がこっちを見ていた。頭をなでなですると、また歩き出す。

後ろからついてくる気配がしたが気にしない。

家で飼おうか、こいつ。

俺と仁の家は二十mも離れていない。

だからこそその親友であり、相棒なのだ。

あっというまに玄関に着く。

インターホンを鳴らそうと手を伸ばすが

猫が足の上に乗ってきて気そぞろになった隙に

仁が俺にむかって走ってきた。

いや、飛んできた。

「波音ー！！！」

「で、結局どこなのよ？」

俺は学生服のままベルカの遺跡に向かうつもりだったが

遺跡の場所がどうもよくわからない。

「もうすぐ、もうすぐ♪」

仁が俺に殴られたこぶの後をなでながら歌いだす。
なんて変な歌なんだ。

にゃ〜。

猫も歌いだしたようだ。

ってか、いつまでついてくるんだよ、この猫。

追い払おうと、手を振るが効果なし。

足をぶんぶんふったらそれにじゃれつく始末だ。

どうしようもないことがわかりあきらめることにする。

「どこですか？　そこですよ〜♪っと、ついた」

変な歌とともに土のにおいがあたり一面に漂っている空き地のような場所に着く。

暗闇は一寸先も見えない。

と、おもいたかったのだが…

「こんばんわ、冬蟬どの。あ、柊さんも」

でた。

警察だ。

どうやら親についてきたようだ。

さすが、将来刑事とかになりたい願望があるやつらだと思う。

しかも、スポットライト車まででてきてそこだけ真昼のように明るい。

研究するのはアウトだが、見るのは大丈夫みたいな簡単な法律なのか？

結構抜け道あるじゃねーかよ。
それはいいんだが…

「いるじゃねーか!!」

「いるにきまつてるじゃねーか!!」

俺と仁は小声で相談を始める。

「どうすんねん!!」

「どうするも何もないねんけど」

自家用PC（仁がつくり上げたとにかくすごいノートパソコン）を持ちながら仁が頭を抱える。

これぐらい想定しておけよ。

俺は頭をやれやれと頭を振った。

「これ使うぞ、耳しっかり押さえておけよな」

そういつて俺はかばんをごそごと探り協力者からもらったスタングレネード（強烈な音や閃光で人を気絶させることが出来る）を取り出すと、ピンを抜き放り投げた。

その直後になんともいえない大音量があふれ出す。

耳を押さえても伝わってくる大音量と大閃光。

近くにいた警察隊は気絶してごろごろ横たわっているに違いない。

「ショータイムだっ!!」

俺と仁は走り出した。

「熱反応十…十一…十二…」

どれくらいたったのだろうか。

僕の周りには白骨化した遺体が延々と続いている。

これらはずい最近まで肉がついていて自由に大地を駆け巡っていた。左目にかかった眼帯のスイッチを切り、自分の右手をさする。すると、遠くで変な音がなり熱反応がいつせいに倒れる。

「……………」

音爆弾のたぐいだろうか。

この遺跡細胞を通してからは何も聞こえない。

僕はベルカの遺跡を守るためだけにつくられた最終兵器。

二五三一型バトルヒューマン。

通称、大量殺戮破壊最終兵器生命体。

任務開始からすでに二六四九六時間五十二分三十四秒。

任務終了は来ない。

なぜなら、ベルカ帝国を守るのがこの僕の「使命」なのだから。

「おらっ!!」

仁が吼える。

マジックをせつせと動かしながら俺は仁のほうに顔を向けた。

「いけたか？」

「ま、まだだっ！まだおわってないっ！！」

ふう、とため息をつく俺は再び冬蟬の顔に集中した。

目を中心にいくつもの円を描いていく。

そして、額には「肉」の文字。

鼻の下にはひげを現す線を何本も描いた。

そして、ほっぺたにデカデカと

「肉」と書いてやった。

もちろん、油性で。

「まだか？」

「へへへ…こりやすごいぜ。

昔の文明のくせにおらのPCに逆ハックしてくるとはよ！！！！

ぐははははは！！！！」

だめだ。

ありや目が逝ってる。

冬蟬の顔に余白がなくなったので次の彗人の顔にうつろうとおもった瞬間

ぽんぽんと、肩を叩かれた。

「君達、何をしているのかな？」

そこらへんの住民だろうか。

かなり、怒っている。

スタングレネードの大音量で目をさましてしまったのだろうか。
ミスッたな。

ここが住宅街の真ん中だということをすっかり忘れていた。

「ちっ」

俺は小さくしたうちすると鳩尾に一発。

男がうめいて倒れる瞬間に首に一発叩き込んだ。

男は倒れ動かなくなる。

殺しはしない。

俺は血をみるのがかなり苦手だ。

手足がすくむんだ、血をみると。

「あいたぜっ!!」

仁が叫ぶと同時にピーピーと音がなりながら扉が開いた。

と…中から黒い物体が飛んできて今気絶させた男の頭をぶち抜いた。
脳漿や骨が飛び散る。

あの方だと即死だろう。

「!？」

俺は今起こったことが理解できなかった。

そして、顔を扉に向けた瞬間目の前に死が広がっているのを見てしまった。

「Syonarrallara」

なにやらよくわからない言葉が死の口から発せられる。

機械ともいえない声が耳を振るわせた。
ように：聞こえた。

「ちいっ!!」

全身の筋肉を使って頭をそらす。

その直後、すごい風圧が耳元を通り抜けた。

そしておこる大爆発。

波音を外した弾が一般住宅に命中したのだ。

その家はもう文字通り跡形もない。

灰すらのこらずに家は「消滅」した。

「波音っ!!」

仁が叫ぶ。

おかげで目の前に迫った刃をぎりぎりでとめることが出来た。

制服に穴が開く。

その「刃」は狙いを外したとわかると、あきらめたかのように地面に落ちた。

「な、なんなんだよ、いったい：」

気がついたら俺は汗びっしょりだった。

仁はというとPCを駆使して一生懸命に扉をとじようとしている。

だが、扉はしまらない。

か弱そうな手がそれをさせなかった。

急に閃光が走り扉が変形して、爆発する。

中から現れたのは少女だった。

しかも「美少女」。

その、「美少女」が右手にあれはいったい…？
例えるなら…そう、死神だ。
死神を持ってゆっくりと歩いて出てきた。

「b o k u e k i y o k h a z s g o i」

少女は透き通った声でそう言った。

（ベルカ語！？）

俺はそうおもうと現れた少女をまじまじと見つめた。
左目の変な形をした眼帯、右目の赤紫の瞳、銀の長髪、細い体、整った顔豊かな胸などが
目に飛び込んでくる。

「お、お前は…？」

俺は自分の顔が赤くなるのを感じあわてて少女の胸から目をそらした。

「b o k s i r u m u r i s a y o u
a n a s i k o k s u g
a n n s s u i t a n a i」

そう一言少女は呟くと右手を波音にむかって突き出した。

ガギギ・・・

と嫌な音がして右手が変形していく。
そして現れた、銀の刃。

「な、なんだそれ!？」

勝てるわけがない。

俺なんかにこんな化け物に：

俺にむかって刃がきらめく。

それを右手の指で掴みひねる。

それだけで勢いのついていた少女のからだは宙に浮く。

だが、すぐに体制を整え第二攻撃。

少女の左手に握られていた銃らしきものが火を噴いた。

熱いものが俺の肩を貫くと同時に飛び散る血液。

「つつ!!」

銃弾は貫通してくれたのか、内出血を起こしてはないようだったが、どっちにしろこのままでは死ぬことにはかわりはない。

「Belca horob mon den!! (ベルカはもう滅びたんだ!!)」

波音は少女を止めようと夢中でいざというときのために一ヶ月で習得したベルカ語を話した。

本当は国際法に違反するが協力者が覚えておけと言っていたので一応取得しておいたのが

いまさらになって役に立ったわけだ。

すると少女の動きが止まった。

そして、きれいなピンクの唇が静かに開閉しはじめた。

口からながれでる美しい旋律。

ベルカ語だ。

「boku kieru bcago.

silbereru?

rikaiunoka?

「(ベルカ語がわかるのか?しゃべれるのか?)」

「dei.

sixyadelte」

「(ああ。しゃべれる)」

※ここからはベルカ語を日本語に直して書く。

「ってことは、お前はベルカ人なのか?」

少女は確かにそういった。

「ベルカ人、今で言う日本帝国人だな。

ベルカ人か?ってきかれたらベルカ人だな」

俺はそう返した。

真っ赤な嘘だがこのさい仕方ない。

そもそもベルカ自体が謎の国家なのだ。

誰がベルカ人とか知るわけがない。

「ここは…?」

少女は言った。

「ベルカの都はどこに消えてしまった…?」

「だから言っただろうが」

波音は少女に諭すよに言った。

「ベルカは滅びたって」

「うそだ!!」

急に少女の目から涙がこぼれた。

余りの変化に俺はびっくりするがどうすればいいのかなんて分かるはずがない。

それに肩の痛みが俺を翻弄していることもあって汗が体から噴出す。

「なら、僕はどうやってこれから生きていけばいいの…?」

国がなくなったら、僕が…僕が生きている理由なんか…ない…」

そして、地面に崩れ落ちた。

両手（右手はいつの間にか普通の指に戻っていた）で顔を覆って泣き出す。

水滴が、指の間から零れ落ちて少女の服にしみを作った。

さっきまでの、力強さはどこへやら。

雨が降ってきて、少女が作った大穴に水が溜まっていた。

急に視界が崩れ、出血の限界がとくに過ぎていたことに気がついた。

そして、俺は意識を失った。

チュンチュン：

鳥が鳴いている。

さわやかな朝だ。

そうおもいたかった。

だが：

「起きろ」

「えっ!？」

「えええっ!!!?」

「うるさい」

「な、な、な…」

俺は思わず口をパクパクさせながら指をさす。

その先には昨日の少女が腰に手を当てて立っていた。

inues.

This story cont

F・D（後書き）

また次からは二日に一度の更新となります。
ご了承ください。

守るべき目標

朝。

普通なら鳥が鳴き気持ちのいい朝になるはずだった。
だが、全部ぶち壊した。
こいつのせいで。

「……………」

こつちをずっと見つめる右の赤紫の瞳。
そして、ずっと見つめてくる左の黒い眼帯。

俺は、一般高校生として充実した生活を送っていたはずだった。
だが、仁の遊びに付き合おうとベルカの遺跡に忍び込もうとしたとき
こいつに（少女）に殺されかけたあげく肩を撃たれ大量出血。
でも、なんとか説得してこいつの使命（ベルカを守る）はもう無駄
だということを伝えた。

そこまではいい。

問題点はここからなのだ。

朝起きたら、傷は全快していて夢を見ていたとおもって勢いよくお
きあがろうとした。

だが、昨日の「元凶」がそばにいたのだ。

「な、な、な…」

少女は俺を上から見下している。

ってか俺のベットのの上に四つんばいになって少女の顔のすぐ下に俺の顔がある。

他人からみたらいまからすべきことをしようとしているカップルにしか見えない。

だが、俺達はそんな関係じゃない。

残念ながら。

非常に残念ながら。

ああ、残念ながら。

くどいってか。

「……………」

「あ、あのさ…………どいてくれないか…?」

「……………」

「聞ってるのか?おい。」

「……………」

悟った。

こいつになににいつても無駄だ。

しかもいつまでも少女と呼んでは言いにくくてしかたない。

そんなわけで、俺はこいつの名前を考えようとしたが・・・

「おはようございます」

「はい?」

「おはようございます」

え？

いまこいつなんていった？

おはようございます！？

「え……えっ！？」

このときの俺の顔は他人からみても明らかに青かったであろう。
常人なら誰もが驚くに違いないこのシュチュレーション。

気まずい沈黙の時間が流れる。

……俺なんかいっちゃいけないこと言ったか

すると少女はもう一度繰り返した。

「おはようございます。」

いま……

噛んだよな？

そうおもって少女を見ると自分が噛んだことにいまさら気がついた
のか

かなり顔が赤くなっている。

ピピピピ！！

つと、音が鳴る。

八時である。

学校遅刻ギリギリ範囲である。
だが…

「ど、どいてくれないか？」

少女がどく気配はない。

そうしている押しのけてもいいが昨日みたいに殺されそうになっても困る。

うちに、八時十分、二十分となり俺の遅刻が決定した。

やってしまった。

高校生活初の遅刻である。

（今日、学校休むか……）

そんなことを頭の隅で考えていると、少女が不意にクスリ、と笑ってどいてくれた。

意味が分からない、初めからどいてくれればいいものを。

それだけ俺が考えている顔がおもしろかっただろうか。

ってか、笑うまでお前はどく気がなかったのか。

「で、お前の名前は？」

ベッドからようやく起き上がり、学校へのダイヤルを回す。

そして出てきた事務員さんに休むことを伝え、電話を切った。

朝食を貪り食い、再び自室のベッドに腰掛けたときに俺は思い切って聞いてみた。

「僕はF・D。

名前などない。

僕にあたえられたのは、父がくれたこのアルファベット二文字だ」

驚いたことに少女はしゃべった。

すらすらと、日本語をだ。

しかも一人称が「僕」？

お前、女じゃないのか？

まあ、俺はこういう僕っ娘が好きだから……

と、おいといて少女はベルカ語ではなく日本語をしゃべった。

いつの間に取得したんだろう、と周りを見渡す。

案の定俺の部屋は本で荒れていた。

夜中のうちに読み漁って取得したのだろうか。

次は、ベルカ遺跡から出てきたわけを知りたくて、聞いてみることにした。

好奇心は大切だからな。

「なんで、お前、遺跡からでてきたんだよ？」

すると少女はしばらくためらったそぶりを見せた後、人生の岐路にたたされた大学生のような顔をして
思い切ったように言った。

「僕は…僕は…ベルカ帝国を守るためだけにつくらた最終兵器なんだ。」

二五三一型バトルヒューマン。

通称、大量殺戮破壊最終兵器生命体」

殺戮やらなんやら知らないが、なんかすごいことを聞いてしまった気がする。

だが、こうやって俺の目の前で一生懸命になって話す少女を見てみると普通の人間にしか見えないのだな。

だが、少女がようやくともに口を開いたことに安堵した俺はなぜここにいるのかを聞いてみることにした。

「それは、僕がお前をここまで運んできたからだ。」

きのう、僕にボコボコにやられたお前は大量出血で命が危ないところだった。

だが、銃創ごときの傷なら僕の力ですぐ直すことができる。国を守るという使命を失った僕は、目の前にいたベルカ人、つまりお前だな、の命を救うために治療しだっこしてここまでつれてきた。

国を守るにはまず人を守らないと……と思ったただけだ。以上」

だっこって…

え？

抱っこ…？

まあ、おいというて…

「じゃあ、遺跡に帰れよ。
邪魔なだけだからな」

俺はそう言おうとした。

だが、少女の深刻そうな顔をみるとそんなことも言おうにもいえなくなってしまうた。

とても、悲しそうな顔をしていたからだ。

いままで信じていたものに裏切られたそんな感じの顔だ。

「帰りたいのかえる場所がないんだ。

だから、お前に頼みがあって朝までずっとここでお前が起きるのを待っていた」

俺に向かって少女は口を開いた。

顔を下に向け、かすかに頬を紅くして少女は言った。

「僕の所有者になってくれないか？」

その言葉は俺の頭のなかでこだました。
わんわんと、何回もやかましくこだました。

「え…？お前いったい何いって…？」

まあ、普通の男子ならそういうよな。
普通なら。

遼みたいな変態だったら即効OKだろうが、俺は違う。
普通の男子だからな。

長い沈黙を破るように、少女は理由を言い始めた。

「僕は使命を持たないここに存在する意味がない。

だから、お前を守るといふ使命ができることによって僕はこの世に生きることができる」

さっきの言葉で混乱していた俺に止めをさす気か、お前は。

「つまり……？」

「恥ずかしいのにまだ言わせるのか？

僕のご主人になれっていつてゐるんだっ！！」

少女の顔がたちまち紅葉のような真っ赤に染まっていく。
かなりの勇気が必要だったに違いない。

意外と、恥ずかしがりやのようだ。

「お、おお…」

ひとまず俺はそう答えるしかなかった。
そして、思い出したように少女に言った。

「後、俺の名前は波音だからな。
次からはそうよんでくれよな」

そのあと、少女が何回も波音、波音と呟きまくっていたのは
言うまでもないだろう。

そこまで、一生懸命に覚えんでも……
ああ、汗が出てきた。

太陽がガンガン昇ってガンガン沈んでいく。

そういえば、家族がみんな消えたのもこんな夕日のことだった。
土曜日の夕方だった。

俺の家族四人は遊園地から帰る道の途中、飲酒運転のトラックに
真正面からぶつかられたのだ。

両親、姉ともに即死。

何とか命を取り留めた俺も…

「おい！！こら波音！！！！」

どたどたどた。
がん。

「いてえよ！！なんでなぐるんだごらあ！！」

仁だった。

息を切らしている。

どうやら学校からはしって帰ってきたらしい。

「てめえ、なんでやすんだんだ!!」

俺ひとり今日一日さみしくPCいじってたんだぞ!!」

「勉強しろよ。

それに詩乃とか遼もいるだろうが」

と、そんな感じで一通りグチを言い終わると、仁は手招きした。

「こっちこい」という合図らしい。

それにしたがってついていくと玄関で仁が話し始めた。

「どうするんだ、あの娘」

「正直、俺もそれに困っていたんだよ。

ってか、なんでお前が俺の家に俺をおくっていつてくれなかったんだよ」

「いや、だって、あの娘が自分がやるといって聞かないもんだから
…」

仁がしどろもどろになっていつている間に俺の食事を教えておこう。
丁度ご飯時だからな。

俺の食事などすべて同級生で幼馴染の綾や詩乃に恵んでもらっている。

この二人はすごいお金持ちで俺が通っている学校もこの二人の一族が経営していると聞く。

たまたま、親父がこの二人の一族の同級生でかなり仲がよかったた

めだ。

「さて、どうするかの」

なぜか方言になりながら俺は頭に手をあてた。

「綾や詩乃にまたお世話になるわけにはいかんしなあ」

「波音・・・なんの話だ？」

少女参上。

仁、顔が赤いぞ、顔が。

「んゝいや、この娘のご飯どうしようかなゝっておもってさ」

そういつて、俺は少女の頭に手を載せた。

「それなら心配要らない。

僕、料理うまいから」

「まじで？そうだったら助かるわ。」

「早速冷蔵庫の中のものでご飯作ってくる」

とたとたとたとかけていった。

「で、仁どうしようか。」

俺は仁のほうを向く。

仁はというと

「お前、今誰とはなしていたのかわかってんのか!？」

とでもいいたげな顔をしていた。

いや、わかってるからこそこのボケだ。

早く突っ込んで欲しかったんだよ、俺は。

そして、結論が出た。

今から、村川家に出向くことにする。

今から、綾と詩乃に頼んでご飯と一緒に少女も学校に通えないか？
というのを聞かためだ。

この二人にも怪盗だということは内緒なので少女は道にすててあつたダンボールの

なかで凍えてたということにする。

まあ、二人とも単純だから大丈夫だろう。

必要以上につっこまれても単純にはぐらかせば大丈夫だろう。
多分だが。

「では、行きますか」

俺は綾の家に向かって歩き出した。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

ダンボールに入った少女

「ふう…」

俺は今、村川家の門の前にいる。

なぜなら、ひょんなことから兵器（しかも最終兵器なんたら）をひろってきてしまったからだ。

「にゃ」

ん？

こいつは、あのと時の猫か？

どうやら、綾に拾われたらしい。

純金の首輪までついている。

よかったな、えくと、首輪に書いてある文字…

パトラセツ？

パト○ツシュから取ったのが見え見えだな、おい。

さて、最終兵器の話に戻る。

家においておくにも、食事などはすべて昔からの幼馴染である詩乃や綾に頼りっぱなしだった。

だが、一人居候が増えた。

詩乃達に食事をもらうときもう一人分追加しなければならぬ。それを頼みに綾の家…

大豪邸…通称「村川屋敷」にきたのだった。

塀がはるかむこうまで伸びていて、先が見えない。

この門にたどり着くまで一苦労だった。

ふう。

ため息がでるぜ。

俺はインターホンを押すために指をのばした。だが、さすがに図々しいお願いだとおもい、一度帰ろうかとおもった。

しかし、一人ではとてもではないが無理だ。

俺と居候を養うというのは。

まあ、あいつがアルバイトでもしてくれるというのなら別だが。

いくら、女と言っても最終兵器だ。

しかも、超古代文明の。

なにか仕事ぐらいはできるだろう。

ったく、なにが最終兵器だ。

そうおもって、俺はインターホンのボタンを押した。

ピンポーン……

「どちらさまですか？」

インターホンのスピーカーから老人の声が聞こえる。綾の執事である、いかにもセバスチャンな人だが。たしかああ、行彦さん（ゆきひこ）だったとおもう。

「お、俺だよ。波音だ。」

「おお、これはこれは…わざわざ……」

スピーカーがそう鳴った後
ぎいいと音が鳴り門が開いた。

なんでも、この門はチタニウムと鉄の合金で

一？あたり百二十kgはあるとか：
ちなみに、門全部で約二tは軽く超えるらしい。
まあ、それだけすごいのだろう。
詳しくはよくわからないが。

「波音っ！！」

呼ばれたほうをみると
綾が和服で出てきた。
和服がぴったりと合うな、綾は。
頬が、紅潮している。
かなり、走ったらしい。
どんだけ、ひろいんだこの屋敷は。

「おう、今日は：
その：なんだ：」

「ぱっと見、頼みがあるんでしょ？」

顎に指をあて、綾がいう。
あいからわずの勘のよさに俺は思いっきり脱帽した。

「へへえー、お代官様のいうとおりで：」

「まま、立ち話もなんだから入ってはいって。」

「おじゃまします。」

そういうと、綾はくすくすと毎回笑う。
昔一度、なぜわらうのか？ と聞いたが

「だって、もうここ波音の家同然じゃん」といわれ
とてもおどろいたものだ。

俺のことをそれだけ親身に思ってくれていると知りありがたい気持ちにもなる。

目の前を和服姿の綾が歩く。

その後ろを俺が歩く。

庭は、苔が生えた岩がおいてあったり池があったりとかかなり和風のつくりになっている。

ちなみに、池の中にはかなり大きな鯉が入っていた記憶がある。昔、えさなどをあげたと思う。

五分ぐらい歩き続けただろうか。

そろそろ、俺が歩くのにうんざりし始めたときに

綾が障子を開け、部屋にはいつていった。

俺も、それに続こうとして部屋に入った。

が…

ドン！！

大きな音がして、俺の体が宙にういた。

次の瞬間、お尻に鈍い痛みがつたわり

俺はこけたのだと気がつく。

と、同時に響くきき飽きた笑い声。

「へっへっへ！！！」

遼だ。

なぜ、いるんだ？

俺はそうおもわずにはいられなかった。

なぜなら、今は午後8時。
普通はお出かけ禁止時間である。

「ひっかかったな、波音!!
俺の超高性能ブービー音トラップ!!」

「おい、コラ、遼!!
なんで、お前はいつもそうやって波音に嫌がらせをするかなあ
…」

その言葉の後に「は〜」というため息が聞こえる。
声の調子から詩乃だ。
どうやら、俺は歓迎されまくる客らしい。

「ててて……」

お尻をなでながら部屋に入る。
案の定、鬼灯詩乃と流木遼がいた。
その二人の間に綾も入りながら俺のほうに向かって
ちょいちょいと、手招きした。

「なんで、お前らがいるんだよ」

いらいらしながら俺は言った。
二人っきりで話がしたかったのに。
そういうかけて、怪しく思われるのは嫌なので黙っておく。

「なんでって、遊びに」

それは見りゃわかる。

詩乃はチョコレート棒を食べながらそういった。
極細しか食べない主義らしい。

さっきから、極細だけをお菓子の山から
きれいに抜き取り食べている。
器用なヤツだ。

「じゃなくて、なんで遼がいるんだよ!!」

俺は、痛むお尻に謝りたいなら遼に言えと思いながら
怒りを思いつき言葉に乗せて遼に刺した。

「いちゃ駄目かい？」

遼がむっとした顔で俺をにらむ。

そしてから、しばらく遠くをみる目をする。

ああ、こりゃ考えている顔だな。

考えがまとまったのか、にやりと笑った。

「まさか、綾と二人きりになりたかったとか？」

「なんでやねんっ!!」

すかさず突っ込んでいた。

ちなみに腕は、遼の胸にあたりいい音をたてた。

ボケと突込みが何往復もした後で

俺は本題を思い出し綾と詩乃の方に体をむけ話し始めた。

「あのさ：

綾、詩乃：

頼みがあるんですけども」

「ん」

これは、続けろという合図なのだろうか。

五秒ぐらいまってもなんにもいわないということは肯定だろうと勝手に解釈して再び俺は話し始めた。

「あのですね。」

昨日、俺が街を歩いていたらすね。

ずぶぬれのダンボールの中にですね。

美少女が入っていてですね。

それで、あの、その…」

肝心なところでいつもしどろもどろになる。

これは俺の悪い癖だと、俺は頭の隅でおもった。

「つまり、食料の量を増やしてほしいと？」

「はい」

「OK」

「はい？」

「OKだってば」

予想以上に早いOKに俺は正直言っ戸惑った。

が、何もこれ以上話さなくていいとおもって安堵した。

正直、ぶっつけ本番で来たのでなにも考えてなかったのである。こう見えてもこの三人は頭がよく、矛盾を突くなどわけもない。

昔、嘘をついたがすぐにこの三人にはばれた記憶がある。
単純とかいったが、なんか気休めになってきたな。

「なにしたか知らないけどなんか拾ったんでしょ？
あんたも物好きだねえ」

「まあ、そこが波音のいいところなんだけどね」

詩乃はそうつけたして手に取ったお茶を一気に飲みほした。
使わなかった左手は再びチョコレート棒を探し求めてわさわさうごいた。

まだ食う気かこいつは。

「ははは…まあそういうことになっておいてくださるとうれしいです」

俺も詩乃に負けじとチョコレート棒を探して口に入れる。

とにかくOKしてくれて本当によかった…

ありがとうな、詩乃。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

ダンボールに入った少女（後書き）

読んでくださっている方本当にありがとうございます。

テスト週間などもあり少し遅れ気味ですが

こつこつがんばっているので

どうかこれからあきれずによりしくお願いします。

なにこの展開

深夜二時。

その日は、冷たい風が吹いていたので

男は窓をしめていた。

都市から離れた山の中にその男の家はあった。

世間の騒がしさから逃げたいという気持ちもあるし

今の日本を支えている財閥の頭という役目と

一娘の父親という役目に疲れを感じてもいたからだ。

だからせめて家ぐらいは：と、森を切り開きバカデカイ城に男は住んでいた。

机の上に広がっているのは今月の決算表だ。

その収入の欄を見てみるとダイヤなどを売り払った金
が
上乗せされていた。

最近では、これが助けになると、男は唇をすこし緩めた。

男は、腰が痛み出したので伸びをしようと思い椅子を少し引いた。

もう、歳だなあ、とか思いながら椅子から立とうとして足に力を
い
れた

そのとき、ギィ：と小さく窓がきしみ冷たい風が吹いてきた。

「おつかれ、今晚の獲物は？」

男は紙に視線を戻し背後から現れた男：

いや、俺に尋ねた。

「なかなかの獲物だったよ」

そういいながら俺ははめていた手袋を外した。
そして上に着た防弾制服を脱ぎ、椅子にかける。
重いけど頑丈なんだ、これが。

「で、物は？」

「これだろ？」

そういいながら俺はポケットのなかから小さな包みを出した。
男はそれを受け取り、中を念入りに確かめはじめた。

「その、お菓子食ってもいいか？」

俺は男の机の上に乗っているお菓子を目ざとく見つけた。

「…うむ。」

「あんがとさん」

ピーナッツ入りクッキーか。
なるほど。

「なかなかうまい、うん」

俺はたちまち一枚を平らげ二枚目に手を伸ばし始めた。
そのあいだ男は袋の中から出てきたダイヤを手の上で転がしながら
念入りに値踏みをして、また袋に入れなおし金庫に放り込んだ。

「紅茶もあるが？」

「俺はそんなに上品にはくえねえよ」

「そうか」

「うまい、うまい…」

「また一週間後に仕事だ。」

よろしくたのむぞ、波音」

男はそういって、俺のほうを見た。

「わかってるって、鬼灯のおっさん」

俺は、そういった。

鬼灯のおっさんとよぶのが俺だけにゆるされた特権だと思うと
なんだかうれしくなるね。

詩乃という子供がいるとは思えない顔だ。

四八だというのに三十前半にしか見えない。

おっさんが俺の協力者だ。

泥棒だっておっさんの頼みではじめた。

それに、俺は鬼灯のおっさんには逆らえない。

たくさんのお借りがあるためだ。

「波音、血が嫌いなお前が殺人をおかしたのか？」

この人の情報網はすごい。

警察ですらベルカ遺跡に関する調査は控えるというのに。

それを聞いたとたん俺の頭に血がのぼり怒りがこみ上げてきた。
そして、いらいらと貧乏ゆすりをはじめた。
やってもいない罪にとわれるほどむかつくものはない。

「俺はやってない、おっさんまでそんなことをいうのか？
まったく、世も末だな」

「そうカッカするな。ハッピーならそれでいいだろ？」

鬼灯財閥総長 ほおずき 鬼灯猛 たける は素晴らしいながら

机の中からいかにも高価そうな葉巻を出し、両端を切り落として火をつけた。

そして、一息に葉巻を吸い、咳き込んだ。

「おいおい、大丈夫かよおっさん」

もう、歳なのか・・・？

そんな予感が俺の頭を駆け抜けた。
四八だもんな、おっさん。

「ゴホッゴホッ…げほげほ…」

おいおい、大丈夫かよ。

咳がおさまってから俺は改めて鬼灯のおっさんにはなしかけた。
おっさんは、小さく咳き込んでいたがもう大丈夫なようで再び葉巻を吸い始めた。

「おっさんの情報網はすごいな。
だがやってもない罪にとわれるほどうざったらしいものはないんだが」

紫煙を吐き出しながら鬼灯のおっさんは言った。

「そりゃそうだな」

鬼灯のおっさんは納得したように首を振る。

「ついでにもうひとついいか？」

俺が願いを羅列するなんて珍しいと思ったのか鬼灯のおっさんは興味津々に俺の方を向いた。

「できることなら何でもいいが？」

そういつてくれた後、俺は覚悟を決めて言うことにした。

「俺の拾った居候も学校に行かしてもいいか？」

「起きろ、波音」

「んにゃ…後五分…だけ…Z Z Z…」

「駄目だ。学校に遅れるぞ」

「かまわない、それならそれで…Z Z Z」

少女……まだ名前はない少女はため息をついて右腕を見つめた。
小さい音がして少女の右腕が大口徑砲に変わる。
黒光りする大口徑砲はまさにグロテスクだった。

「起きろっていつてんだろう？」

俺の額に砲口をつけながら少女は言う。

「おはようございます、いや〜いい朝だな。

おっと、学校だな、いかなきゃいけないなあ♪

楽しみ楽しみ、らんらん♪」

俺は元気に朝のラジオ体操まで始めた。

ってか、何で朝からこんな起こし方されなきゃいけないんだよ…
俺はそう突っ込んだが大口徑砲から普通の腕に戻った少女に
言う勇氣はなかった。

俺、へたれ……

「あ、今日からお前も学校くるんだぞ？」

「は？というと？」

驚いた、少女の顔が予想外にかわいらしくて

俺は、そこから見たらにやにやしてるであろう顔で

「ん〜、だからね、学校きて学べ、社会の仕組みを。」

こう言った。

「必要ない、僕にはベルカ帝国の知識があるから」

「いいから、用意しろ」

いつもは、少女に勝てない俺だったが

一応主従関係なので少女は逆らえない。

ふふっ、と一生懸命に用意を始めた少女を見ながら

俺は思わず微笑んだ。

だれだ、いまキモイとかいったやつ。

十五分後

「か、かわいいじゃねえか…」

「う、動きにくい…」

非常に動きにくいぞ」

顔をほのかに赤くしながら少女は学生服を着終わり

俺はそれを見て思わず驚嘆した。

可愛いです、はい。

心におもったことが思わずさっき口に出してしまった。

今まで少女はずっと眼帯をしていたり服を変えなかったりで

殺されていたかわいさが制服になることで一気に爆発したみたいだった。

いや、別に俺が制服フェチなわけじゃないんだぞ？

「お、おおお…?」

自分でも何をしゃべっているのかわからない言葉が口から漏れた。それほど輝いていた。

言い過ぎかもしれないが、事実なのだからしかたない。

「では、いくつか学校とやらに……波音？」

急に話しかけられ戸惑った俺。
変な声をまた出してしまった。

「お、おおっうっ？」

「なに口をぱくぱくあけてるんだ？
みっともない。

閉じたほうがぞ」

ぱくぱく…

そのときの俺はそこから見ても
空気不足の魚のように口をぱくぱくさせていたに違いない。

てくてくと家を出て学校に向かう。

「おっはようはの…ん…？
んんっ？」

仁が走りながら来てすすつと離れていった。

「おいおいおい！！
なんで離れるねん！！！」

突っ込みをいれながら俺は仁をひっぱった。
こっちに来た仁はさっきの俺ごとく
口をぱくぱくさせながら少女を見ていた。

なるほどね、さっきの俺はこんな感じだったのか。

「おはよ…？ ……え？」

綾の反応だ。

「おはよう、はの……えっ？」

詩乃の反応。

「おはよう、は……なんだろう幻覚が」

梶の反応。

「なんだ、幻覚か。
びっくりしたあ」

彗人の反応。

「お、俺の嫁がいるっ！ ……！！！！
結婚しませう！ ……！！」

古文の用法を使いながら近寄ってきた遼の反応。

ここからが思いやられるなあ…

俺は誰にもわからないようにため息をついた。

案の条、クラスの男子全員が少女に釘付けである。

そんな視線に耐えられないのか少女は顔を赤くしながら
口を閉じてうつむいていた。

「なんで、みんな僕ばかり見るのんだよ…恥ずかしい…」

萌えた。

そんな感じの言葉が周りの男子の一部から発せられる。すると、教室のドアが開き、桐梨先生が入ってきた。

「きりくつ、れい、ちやくせきっ」

学級委員長である遼が裏返った声で号令をかけた。

そうして、俺と少女の共同高校生活第一日目がスタートした。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

なにこの展開（後書き）

テスト明日です。
やだあ

最強の武器は新聞ブレイド

「はう…はずかしい…」

その言葉が確実に男子達の理性を飛ばしていることに少女は気がつかなかった。

「ねえ、君の名前は？」

そんな質問が少女に振りかけられる。

「え、え〜と…僕の名前は…あの…」

といったところで歓声上がる。

少女はどうして上がったのかわからない歓声にただおびえるばかりだ。

先に言っておくが、俺は僕っ娘萌えだったりするんだな。でもなあ…

「はあ〜」

そんな少女を見ながら約五メートル離れたところからお茶をラッパ飲みして、俺はため息をついた。

理由は簡単だ。

少女が来たことによってただでさえ鬼灯や村川などつながりがあることで目立っているのにさらにヤツがきたことによって目立ちに拍車がかかったのだ。

「どうしたんだ？お前らしくないな」

詩乃がそういつて机に腰掛ける。

それは、俺の机なんだが。

筆箱を落とすな。

後で拾っておけよ。

「いや：なんだかなあ。」

水筒をふりカラカラと氷の音をならしながら俺はつまらなそうに、水筒のふたを閉めた。

「あの子がお前がこの前言いに来た女の子？」

「そーなんだよ」

「かわいいじゃん」

そーなんだけどさー。

というとおもった俺はまた上がった歓声に口を閉じた。

正直、ここまでするとうるさいね。

騒音の域にたっしてるよ。

「ねえ、名前は？」

「え、えっと：僕の名前は…」

少女は戸惑いちらちらと主人である俺を盗み見る。

見られているのを知っていながら俺は再び詩乃に顔を向けた。

たまには、こうやって困っている最終兵器の姿を見るのも悪くはないかもしれない。

朝の理不尽な起こし方もあるしな。

「どーおもうよ？」

「だから、かわいいじゃん。
波音の約二百倍ぐらい：」

俺の二百倍は余計だ。

「アバウティだな」

「それがポリシーですから」

どんな、ポリシーだよ。

キーンコーン、とチャイムが鳴った。

先生がバーン！！とドアを開けて入ってくる。

先生、ドアが壊れますよ、そんなに雑にあげてたら。
いつか、こうがちゃんって。

「おーす、座れ」

教卓に丸めたテキストを叩きつけながら言う。

だが、それでも座らない男一名。

だれだろ、と疑問を持った俺はそっちへ首をねじった。
少女の机の前に今だ座ろうとしない男：
遼だった。

「おい、おい、遼！！」

俺が一生懸命に呼ぶが聞いちゃいない。

一生懸命に少女に向かってナンパだ。
勉強に精をだせよ。
もうすこしぐらい…

「おい？流木？」

先生（生徒指導部所属）が遼へ向かって前進する。

手には丸めたテキスト……

あ、あれは…伝説のテキストブレイドだと！？

伝説のテキストブレイドを持って遼に向かってにじり寄る。

それを知らない遼。

先生がテキストブレイドを振り上げて

成敗しようと力いっぱい振り下ろし…

「あんだよ、先生？」

そう振り返った遼の頭にテキストブレイドがクリーンヒットする。

だが、音をたてて曲がったのはテキストブレイドのほうだった。

スーパーアーマー状態になったのか、遼？

いや、違う。

あれは遼の皮をかぶった悪魔だ！！

先生は、先生は…

悪魔を呼び覚ましてしまったのだ！！！！

遼の目が…

目が本気だ。

黒メガネのレンズがわれてしまうんじゃないかとおもうほど

遼は、鋭い目つきをして先生をにらみつけた。

さすがの生徒指導部の先生も腰が砕けたのか震えた声で

遼に話しかけた。

「な、流木…じ、授業が…は、はじまるから席についてく…」

しかし最後の言葉は遼の言葉によりかき消された。

「ああ？今を逃したらこんなにかわいい子をいつゲットするんだよ？」

こ、怖い…

暴言の前に、こいつ怖い。

俺は、じつとりと汗がにじみだしてくるのを感じた。

それに、その娘は俺のものなんだが…

そういう突っ込みはいつもは気軽にするのだが

今したら殺される！！

一瞬にして殺されるに決まってる！！

今の遼は本気なのだ。

一瞬のうちに俺の体を三枚卸にできる力を秘めている…

そうまさに、改心状態なのだ。

「でも、まあ授業だってんならしかたねえな。
すわってやんよ」

そういつて遼は自分の席にもどっていった。

生徒指導部の先生も一息つけたのか汗をぬぐっている。

この教室は、さっきまで遼ワールドと化していたのだった。

俺だけでは、ないはずだ。

汗が出てきたのは。

そこから放課後までは特に目立ったことはなく

まあ、毎時間おなじような事が行われるのを除けばだが。
少女の波乱万丈な一日はようやく終わりをつけた。
もちろん、安堵したのは少女だけでなく俺もだが。

「どうして、助けてくれなかった？」

夕日も落ちて暗い夜の道。

少女は星を見ながら俺にむかってそういった。
目にきらきらと星が輝いている。

こうしてみると、本当に最終兵器には見えない。

「…だってさ…」

そういった後、俺も空を見上げた。

飛行機だろうか。

きらきら光る物が視界を横切る。

「ふっ…あわててるお前が面白かったただけだ」

まあ、可愛かったの間違いだろうが。

あえて、言わないのが俺だ。

「…それだけか？」

「それだけだ」

ってか、お前学校での言葉遣いと俺に対する言葉遣いの差が
激しいな、おい」

そういいながら俺は道端の石を蹴った。

その石は美しく弧を描いて・・・

美しい弧を描いて・・・

禿親父の頭に当たった。

「あ、やべっ…」

俺はしまったと思い

少女は バカ！とあきれた顔をしてため息をつく。

「んんっだコラてめええええ！！！！」

と、禿が振り向いてこぶしを振り上げたとき。

俺と少女は塀によじ登り別の道へと脱出した後だった。

「ふふ…」

急に肩を揺らして少女はくすくすと笑いはじめた。

いや、笑い方もなんか板についた笑い方をするんだな。

「なにをそんなにわらってんだよ」

俺はがしがしと、片手で頭を掻きながらうなるように言う。

誰でも夜道に急に笑われたりしたら意味がわからないし
気味が悪いだろう。

なんといっただって隣の少女は――

超古代文明の最終兵器なのだから…

「だって…くくく…」

やがてこらえきれないと言わんばかりにおなかに手をあて
大声で笑い始めた。

「あっはっはっは…」

その声は夜空に心地よく響き…
星を叩き落とすぞ！ という感じに本当に心地よく響くのであった。
流れ星がキラリと光った。

部屋に着いた。

電気がつけられる。

散らばっているはずの俺の部屋は綺麗に片付いていた。

「今日、ニーズが来たんだな…」

俺の部屋はランダムに鬼灯財閥から掃除屋？のような人がきて
綺麗にしてくれたり冷蔵庫に新鮮な食材を入れておいてくれたりする。
る。

まあ、俺は大体は綾の家や詩乃の家でご馳走になるのだが…
ので…

冷蔵庫はすでに元気なゴキブリはいはいと化していたりする。
冷蔵庫で安全なのはアイスクリームの冷凍庫ぐらいだ。

詩乃の家に飯を食いに行こうとおもい出かけようとした瞬間
ドアが叩かれ、人が入ってくる。

すこしは、遠慮するかな、と思ったが無駄だったようで。

「どうするつもりなんですか？」

黒い服に身をつつんだ男が言う。

ひげがチャームिंगな人だ。

サングラスも何気に似合う。

この人は俺の家によく来てくれる。

武器や逃走手段なども容易してくれる。

いわば俺の付添い人のようなものだ。

俺はニーズと呼んでいる。

名前の詳しい由来は、社会の教科書に書いてあった

アジアニーズからとったものだ。

鬼灯のボスからの命令で、俺に従っているらしい。

ありがたいかぎりである。

ちなみに出番はそんなにない。

「なにがよ？」

アイスクリームを引っ張り出し袋をあけかぶりつく。

あまりの冷たさに俺は顔をしかめた。

「今晚の献立です」

それを聞いて俺は

どうでもいい。という顔をした。

できれば野菜炒めがうれしい。

「そうだな…」

しばらく沈黙が続く。

「なあ、なんの話だ？」

献立の話だよ。

少女が俺に問いかけるが無視する。

しばらくしたあと俺はゆっくりと口をひらき唇をなめて湿らせた。

「……野菜炒め……」

なんでこんなに慎重にいう意味があったのだろうか。

いや、ない。

反語を使いたかっただけだ。

最近習ったばかりだからな。

T h i s s t o r y c o n t

i n u e s .

最強の武器は新聞ブレイド（後書き）

35話まで二日に一度のペースで

35話過ぎたら書置きがなくなるので

大体4～7日に1話更新と思っていただければ
幸いです。

読んでくださってありがとうございます。

騎士団の栄光

「大切なものが消えるとき

三つの死は姿をあらわす。

死は力を使い地上を無に戻す。

死は鬼神となり

恐怖の中で消えていく。

大切なものを失った悲しみと共に。」

「どう？」

どうっていわれてもなあ……

詩乃の顔を見ながら俺は考えた。

お昼十二時丁度お昼休みの時間で俺達七人は飯を食っていた。

これぐらいなら誰でも知っている。

昔から伝わるおとぎ話の第一節だ。

このおとぎ話はさっきの言葉からはじまる。

「昔これをばあさんから聞かされたとき俺はかわいそうでかわいそうだな」

ジュースをズゴゴゴ…と吸いながら冬蟬が言った。

たしかに、小さい頃にこんなきつい吹き込まれたら

泣いてしまうかもしれないからな。

げんに、俺がそうだった。

はずかしながらだが。

「まだ続きがあるんだけど、なんかそこから先は消滅しているらしいんだ」

仁が自作P Cをカタカタしながら言った。

続きか……

俺も当然この話なら知っている。

子供の童話には必ず載っている作品だ。

題名は『騎士団の栄光』となっている。

話の内容はこうだ。

国をまもる戦士達がいた。

だが戦士達は死に飢えて暴走しはじめた。

大切なものを守るため敵に死を撒き散らし

鬼神とおそれられた頃、大部分の戦士達が消えていった。

大切なものは敵にあったという間に壊され、なくなっていた。

大切なものは必ず帰ってくる。

そう思った残りの戦士達は長い間まっていたが

結局大切なものは戻ってはこなかった。

「憂鬱な物語だな」

弁当箱を空にして

爪楊枝でシーハーしながら冬蟬がいった。

まったくだと思っうね。

「国を復活させようとしたのに結局は裏切られたってはないだろ？」

「そうだな」

遼がそういって、から揚げを頬張った。
最終兵器少女は窓の外の雲を見つめどこかさびしそうに見えた。

「しかし、またなんでこんな憂鬱な話なのに『栄光』なんて文字が
題名にはいってんのかねえ」

詩乃がそういって精一杯背伸びをした。
腕が俺の頭に当たってるぞ。

「ん、波音、悪い悪い」

まあ、いいんだが。
別に痛くないし。

「童話なんてそんなものだと思うよ。
ってか、何でこんな話になったの？」

綾の疑問はもつともで、全員がこの話をしはじめた詩乃の顔をみた。

「んー？」

特に深い意味はないんだけどね。

昨日お父さんの本棚を整理してたら出てきたから
話にあげただけで」

全然関係ないんだな。

なさすぎにもほどがあるだろ。

俺もこの本もってたよなあ、そういえば。

日本では桃太郎などに並ぶほど有名な童話だからな。

いや、世界中…かもしれないが。

世界中でこの伝説を知らない人のほうが少ないんじゃないか

というぐらい有名などうわである。

さくさく弁当を食べ終わりおしゃべりタイムに入ろうと思う前に
昼休み終了のチャイムがなった。

次は数学だ。

だるすぎるぜ、先生：

その学校からの帰り道。

「なあ、波音？」

少女が話しかけてきた。

「なんだよ？」

「僕、あの伝説の続き知ってる」

俺は、それを聴いた瞬間啞然とした。

そして三秒ほどの沈黙の後：

大声で笑いはじめた。

「はぁ？ 続きいい？ あっはっはっはっは！！！！

ひー！！ ひー！！ 苦しい！！！！

とうとうぼけたのか！？ あひっはっは！！！！」

少女はそれを聞いていてバカみたいに爆笑している俺を
眺めていたが、やがて顔を赤くしておこりはじめた。

「な？ なに？ 僕面白いこと言ったか！？

おい、こら笑ってんじゃねーよ！！！！」

そういつて右手を俺の顔に突き出し
音をたてて銃に変えた。

誰もいないことを確認してのことだと思ふのだが、誰かに見られた
らやばいぞ、おい。

大声で笑つてた俺は笑いを押し殺し

「くくっ…す、すいませんでした。ぷぷぷ…」

と雑音を混ぜながら謝った。

しばらくして俺の笑いがおさまった頃に少女はさっきの大爆笑の
理由を聞こうと思ひ口をひらいた。

「なあ、さっき何であんなにわらったんだ？」

「あれ？知らないのか？」

そこから先は絵本には絶対に書いてあるはずがないからだぞ？」

「はあ？波音とうとうバカになっちまったのか？」

「いや、バカはお前だ。

家に帰ったら見せてやるよ。

ってか仁も学校で言っていた気がするんだがなあ…

あるにはあるけど消えてるって言ってただろうが」

※言っていました。

俺が、家の部屋のドアを開ける。

部屋の中は暗闇に覆われている。

はずだった。

いつもなら。

だが、今日は違った。
先客がいたのだ。

「くくく…波音…」

今日は俺と寝てもらうぜ、F・Dちゃん？」

そう、何を隠そう遼だった。

だれがどう見ても絶世の美少女を自分のものにしようと
遼が俺の部屋の中で待ち伏せしていたのだ!!!

っ！か、なんでこいつはこいつでこんなにしっこいんだ？

「くっ…は、遼なのか？」

「そうだ。」

俺はお前からこのF・Dちゃんを助けにはるばると参上した白馬
の王子なので…」

何回も頭の中で復習してきたであろうセリフは
室内にいるほかの男子の大声でかきけされてしまった。

「Fちゃん!!!」

などの、言葉だ。

ワンワンと頭に響く。

殴っていいか？

こいつら。

あゝ…

こういうの苦手なんだがな…

「ってか、お前、名前教えたのか!？」

俺が男子勢の騒音（FちゃんとかFたん愛してるとか）に負けないように大声で少女に聞いた。

「え？だ、駄目だったのかな？」

クラスの人がいると急に猫をかぶり始める少女F。

俺は毎度ながらの豹変ぶりにただあきれるばかりである。完璧な二重人格だな。こりゃ。

「ってか、部屋は入れねー！ーっ！ー！！」

もう部屋は大体十人ほどいる（遼含む）男子で満タンである。

もともとそんなに広い部屋じゃないのである。親父が作ったと聞いたこの家は一戸建てで家族四人がちょうど大きさになっている。

「お前ら、帰れ！！」

そう俺が言う十倍の大ききで返事が返ってきた。

「何いってんだ！われらのF様をひとりじめするんじゃないか！ー！！」

「美人はみんなの財産やぞ、コラ！ー！！」

「そうだそうだ！！」

だれだ、いまF様とかいったやつ…

あゝもー！！

いらいらする俺。

だが、こいつらは真性のバカなのである。

手のつけようのないバカなのである。

可愛い娘は全部、俺の嫁とか思ってるクソバカな奴らなのである。

もう、バカにつける薬はないということで俺は暴力に訴えることにしました。

(やさしく説明中)

「全員、死ぬがよい」

もともと怪盗として体を鍛えていた俺にかなうはずのない男どもだった。

「うわっっ！」

とか

「ぎゃひっっ！！」

などいいながら、パンチを食らう男子を次々とぶん殴っていく俺。

ボキ…

今、誰かの鼻折っちまったかも…

そんなわけで、俺はすべての『普通』の男子を倒した。

ただ一人、『普通』ではない遼を抜いて。

「くくく…やるな、波音」

殴られた時に出た血を遼はぬぐい、手に持った新聞ブレイドを

俺にむかって振り下ろした。

その新聞ブレイドを真正面で受けた俺は、ガードしていながらも床にひざをつくことになってしまった。

「くっ…遼、貴様…ガク」

一発で力尽きた俺を横目で見て遼は少女に向かって両手を突き出した。

さあ、おいでハニー とこんな感じで。

き、きもいを通り越してるぞ、遼。

「は、遼!!」

少女は遼に向かってもうダッシュで突っ込んでいった。

もうちょっとで念願の少女を抱ける遼の顔はゆるんだぶだぶと垂れ下がっている。

遼のニタニタ顔が視界を覆う前に

少女の左目が、赤くなり『最終兵器』としての力で遼をぶつとばした。

鼻から血を吹き飛ばしながら遼は倒れた。

幸せそうな顔―そう、念願の女と結婚できた若者のような顔で…

少女は九十八経験値をゲットした。

少女はLv十五に上がった。

「だ、大丈夫か? 波音?」

倒れている俺を助けに入る少女。

し、主人を気遣ってくれるのか…

「こ、これが俺からの最後の願いだ…

き、聞いてくれるか…？」

息を荒く吐きながら俺は言う。

「なんだ？言ってみろ・・・」

少女はそういつて涙ぐんだ（嘘だが）

「可能な限りかなえるから！！」

俺はそういつてくれる少女の方を向いてこういつた。

「一度でいいから…恋がしたかった……ガク」

「波音んっ！！！！」

俺も青春を駆ける一人の男の子だった。

高校一年生ですから。

五分後…

ようやく部屋に散らばる男子どもをドアの外にほうりだした俺は
本棚の中から絵本をだしてきた。

赤い表紙に書いてあるのは槍が一本で銃が一つ、剣が一本だ。

これが、学校で話に上がった『騎士団の栄光』の表紙だ。

「この武器が三つの死なんじゃね〜かと学者がいつてる。」

「学者？」

「この本は原作者がいらないんだ。

よってこの本が何をいいたいのかも定かじゃない。

ただひとついえるのはその三つの死は恐るべきものだということだ。ちまたでは、ベルカの遺産なんじゃねえかとうわさにもなってる」

学者が多いことはかなり前からニュースなので有名になっている。

ベルカに通じるとかいいうことで連合郡が、研究を禁じたらしい。

もし、研究したら有無をいわずに死刑。

話をして警察とかに聞かれるだけで無期懲役。

今日は教室に先生とかがいないからあんな大声で話せたのである。ラッキータイムってやつだな。

「ベルカ…か」

そう呟いた少女の顔は悲しみと喜びが混ざった複雑な表情を描いていた。

t i n u e s

T h i s s t o r y c o n

騎士団の栄光（後書き）

ここまでのお付き合い

ありがとうございました。

まだまだ続きます

初陣

「三つの死…か…」

そう、少女は呟いた。

遼やたくさんの男子によってめっちゃめっちゃにされた部屋で俺は、少女に本をみせてやっている。
なに、難しい本ではない。

誰もが知っているような、童話だ。

『騎士団の栄光』

憂鬱をさそうような童話だ。

それを、こいつ、最終兵器少女は

本に穴があくんじゃねーか、という勢いでガン見している。

正直、こいつならあけかねない。

本に、穴を。

目からビームとか出して。

「目からビームでるのか？」

「僕は、目からビームなんて出ない」

いや、でも…ねえ…。

「いくら、僕が大量殺戮破壊最終兵器生命体だからといってだな…」

舌かんでる暇はない。

それに

「なんで、お前そんなにがん見してんだよ。
本が恥ずかしいっていつてるだろ」

「いつてない」

比喩表現だってことをしらないのか、こいつは。
そう思いながら、自分の携帯を引き寄せた。

ぶるるるっ!!

な、なんてベストなタイミングなんだ。
鬼灯のおっさんから電話がかかってきた。

《波音か?》

「俺以外にだれがいるんでしょうか?」

《そうだな》

携帯のむこうで鬼灯のおっさんがわらっているのがわかる。
のどをならすように「クッククク…」と笑うさまはなぜかおちつく
のである。

両親が死んで、小さいころから育ててもらったというのもプラスの
要因だ。

詩乃にはあんまり手をかけないのにな。

《では、手短に言うぞ》

「あいあい」

《今度は、アメリカ共和国にて新たなベルカ遺跡が発見された
その中に潜入して過去の遺産として有名な超光学記憶媒体を盗ん
で来い》

「ああ？超光学記憶媒体だあ！？」

思わず、俺は大きな声をあげてしまった。
ベルカ遺跡はまあ、いいとして…

超光学記憶媒体ねえ…

『大きい、声を出すな。』

聞こえたら面倒だろう』

「すいませんね」

さりげなく、謝る俺。

《今夜、早速行くぞ。

仁も連れて行くことだな》

「はいはい」

《後、一人…そうだな。

お前が拾ったという女の子を連れて行け》

「ええっ！？」

再び、大きな声を出してしまった俺。

こいつを…ねえ…

まあ、いいか。

役に立たなかったら、ついでにおいていくまでだ。
アメリカに。

俺は鬼灯のおっさんに了解とだけ言って電話を切った。
そうして、まだ本をガン見している少女に話しかけた。

「お前も、行くらしい」

「……どこに？」

はじめの沈黙が怪しかったが…
戸惑ったのかもしれないな。

「アメリカ共和国のベルカ遺跡に…だ…」

高度一万メートル。
降下準備OK。
スタンバイ。

「無事を祈る」

「あんがとよ、鬼灯のおっさん」

そういつて、俺達三人はステルスの小型ジェットから飛び降りた。飛び降りながら作戦内容を確認。作戦はこうだ。

？アメリカ共和国の対空レーダーを避けるため
ステルス性小型ジェットで遺跡上部まで、送り届ける。

？遺跡、二百五十m前で降下。
パラシュートは着地ぎりぎりに開くこと。

？ベルカ遺跡の最深部にある、超光学記憶媒体を盗め。
傷一つつけずに、鬼灯猛（鬼灯のおっさん）の元にまでとどける
こと。

？なお、アメリカ共和国、ベルカ遺跡は連合郡と帝国郡の最前線と
なっており

今も、戦争中である。
注意せよ。

？今回の遺跡は帝国郡側による爆撃によってみつかったものである。
よって、連合郡の隠れ場所などになっている可能性がある。

じゃまなら、排除し前進せよ。

ここは、戦場だ。

銃声などめずらしいものではない。

ふっ、楽勝だね。

俺は思い出して微笑んだ。

体が風を切っている。

まるで鳥になった気分だ。

羽ばたいたら、飛べるんじゃないかと思うぐらいに。

下を見ると、あちこちから火の手があがっている。

鉄が焼けたにおいが空に充満しており、

土煙がたっているところをふと気になり見てみると沢山の戦車が走っていた。

まさに、戦場。

醜い、人同士の争い……

そういや、少女は便利な眼帯を持っていた気がするのだが。

「あ、忘れた」

おいおい……

まあ、ないほうがかわいいぞ。

そのとき、俺の耳に高い嫌な音が聞こえてきた。

ゲームなどでは親しまれている音なのだが――

実際にその目標になるのは嫌なものである。

？ステルスから降下中は対空レーダーにひっかかる可能性あり。

注意せよ。

「戦闘機っ……！」

戦闘機が俺達三人にむかって飛んできていた。

腹にはごっそりとミサイル及び爆弾が積んである。

その中の一つが、火を噴き俺達に向かって飛んできた。

「こちら、スパロウワン、目標を殲滅。」

《こちら、管制塔。よくやったスパロウ》

「引き続き、地上の爆撃に移る」

《了解、スパロウツー、任務を…》

「な、バカな…」

《どうした、スパロウワン？》

「う、撃て撃ちまくれっ！！」

《どうした、応答しろ！！マテンロウ！！おい！！！！》

死ぬかと思った。

俺は、そう思って額の汗をぬぐった。

爆発、炎上しながら落ちていく二機の戦闘機。

少女の左目が、赤紫から完璧な赤になり

飛んできたミサイルを『片手』で跳ね返した。

いつの間に変えたのか左手から、赤い閃光――

レーザーを出して、一機を殲滅。

もう一機の戦闘機が来る前に、パラシュートを外した。

「おいっ！バカかお前っ！！」

「大丈夫だ」

そういった後、少女の背中から金属の翼が痛々しく生えた。

皮膚が直接変わったようで、血とかの類は一切出ていない。

羽ばたいてもいないのに、空中に静止し：

すれちがい、後ろをむいた戦闘機に左手でレーザーをぶち込み破壊した。

「そろそろ、パラシュートだ、仁」

俺は、仁に話しかけたんだが応答がない。

そりゃそうか。

最終兵器の力をみちまったんだからな。

俺も、絶句したよ。

これは、強烈だった。

地面に着地するぎりぎりに仁を解凍して、パラシュートを開き着地。着地したところは、木がしげり苔が生え長年人間を拒んできたところ

ろのようだ。

今となっては、死体がごろごろところがる戦場となってしまうたが…

「ふうう…死ぬかと思っただぜ」

仁が着地したときについた泥をはらいながら言う。

その最終兵器はというと―

「疲れた…うわっ！」

苔に足をとられて着地と同時に転んでいた。

意外とドジなんだな、お前。

「ここから、南へ五十mか。

いい場所に着地できたものだ」

俺はひとりでそう呟き、鬼灯のおっさんにもらった地図を確かめながら

遺跡にむかって歩き始めた。

あちこちで爆発音がなっているが誰も、森にむかって撃ってはこない。

戦略的価値がないのか、どうかかわらないがとにかくこの森は平和をまもっていた。

五十mといえど、森中である。

当然直進はできるわけもなく迂回しながら進むこととなった。

そして、目標についたのは日がのぼり始めた午前5時ごろだった。

朝日に浮かぶ、遺跡。

まあ、悪くはない。

遺跡に、変な兵士達が大勢入っていくのを見るまでは。

「まじか…」

「まじだろうな」

仕方ない。

眠らせつつ盗むか。

「はあ…はあ…な、なあ、波音…」

ど、どうした、F・D。

顔があかいし、息が荒いぞ？

「だ、大丈夫か？」

「ス、スイッチが…入っち…まっ…た」

え？

まで、落ち着け。

スイッチ？

「ミ、ミスった。

き…急につかうもん…じゃない…な…」

力を…か？

ふと横をみると、前かがみになった仁の姿がある。
こいつはこいつで何を考えているんだ。

「仁、顔が赤い。

なにを考えている」

「え、いや別になにも。」

あは、あははは……」

「なあ、F・Dそれは殺人快感じゃないだろうな？」

まさか、最終兵器にそんなものがあるとは思えないが。
あったら、もう俺どうしようか。

「破壊衝動と考えてくれれば……」

なるほど納得。

こいつはくさっても最終兵器だ。

「いつも、そんなことになるのか？」

「いや、五千年ぶりに力を使ったもんだから……」

ながいこと生きてるなお前。

そう俺がつっこもうとした時、仁が言った。

「へいへい、時間になっちまうぞ。」

どうするんだよ？」

どうするここから。

自問自答する。

「とりあえず、進入するしかないな」

外に兵士を残しておいてたほうが……

それぐらい、相手は外に入り口を守る兵士を残していかなかった。
2人か：

「俺がやるぞ」

そういつて俺は麻酔銃を取り出し、一気に二回引き金を引いた。

注射器に似た形の弾が発射され兵士の頭に刺さる。

弾から薬が射出され相手の意識を失わすものだ。

ちなみに麻酔銃の訓練は鬼灯のおっさんから叩き込まれたものだ。

同時に倒れた二人の兵士を倒し入り口に立つ俺達三人。

だが、ここにもあるものはいっているとは

俺及び神すらわからなかっただろう。

それぐらい、俺はびっくりしたね。

t i n u e s .

T h i s s t o r y c o n

初陣（後書き）

基本的に二日に一度の更新スタイルですが
今がんばってます（笑）

恐怖神

「さあて、行きますか」

俺達三人は、遺跡の入り口へと歩き出した。

まるで、蛇にくわれたみたいだな。

俺はそう思いながら遺跡の天井を見上げた。

「落ち着く場所だ」

少女が言う。

まあ、お前からしたら家みたいな感じなんだろうな。

ベルカ遺跡がお前の家だったしな、げんに。

やっぱり、似たような雰囲気があるのか？

あったとしたらどんな雰囲気なんだろうな。

俺にも、ちょっとだけでいいから感じさせてほしいね。

そうすれば、少女を俺から切り離す何かがあるかもしれないからな。

「ここも、何かの兵器庫みたいだな」

仁が、壁を触りながら言う。

俺達三人はおしゃべりのためいったん立ち止まることにした。

「ああ、しかもデカイ。

しかも僕がいた遺跡と似たようなつくりになっている。」

「どうやってわかったよ？」

俺はびっくりする。

そりゃそうだろう、はじめてきたのに遺跡の形が内部から分かるなんてな。

こいつは超能力者なのか？

―最終兵器だな。

「精神パンスロジ―レーダー。

パンスロジ―電磁波を僕の体内から…」

難しい説明はいらん。

簡潔に説明したまえ。

「簡単に言えば、僕の探知能力。

生命反応から、熱反応、X線感知。

そのすべてを僕は半径五百キロぐらいなら知ることができる。

パンスロジ―電磁波は人間なら誰もが微弱ながらもってる。

波音、お前ももってるよ。

僕のはそれを大幅に強化しただけなんだ」

そりゃおそろしいレーダーなこと。

山奥とかに行つて滝にうたれながら修行すれば身につく能力なのか？
それなら、俺もほしいね。

「まあ、それを感知して映像化するのが僕の眼帯なわけなんだが…」

そういつて、少女は下を向いた。

―忘れたもんな、あれ。

黒くてゴツイやつ。

そんなに便利なものなら俺にも使わせてほしいものだ。
修行してから。

「まあ、もつとも今は疲れるからつかってないよ」

そういつて、少女は顔を上げ再び歩き出した。

俺と仁も再び歩き始めた。

遺跡の中は湿気でむせ返りそんな悪環境だが

壁は金属なのかなにかわからないもので出来ていてほんのり明るい。
暗視装置を持ってきたが無駄だったようだ。

隅っこを見ても、黴一つ生えてやしねえ。

あの、環境適応能力を持つ生物でも生きていけないような場所なん
だろうな。

生き物を寄せ付けない何かがあるのかもしれない。

俺達が仁の言葉を最後に会話を中断していると、

ドン！！ドン！！

ガガガッガ！！

さっきの兵士が持っていたであろう機銃の咆哮が聞こえてきた。

「…波音……」

ああ、わかってる。

俺達はそこに向かって急いだ。

一言で言う。

グロイ。

さっき入っていった兵士であろう。

約五人が倒れていた。

あるものは、頭から血をだして。

あるものは、首をかききられたのか噴水のように血を噴き出している。

遺跡の中でそこだけ、真っ赤に染まり

まるで異空間のような気味の悪さをかもし出していた。

「F・D…」

俺が、少女に聞く。

「ダメ。」

生命反応、及び熱反応なし。

みんな死んでる」

そうか…

「この傷跡は、7・62×39mm弾のものだな。」

こういうときは、仁の銃の知識などがとても役にたつ。

傷跡から、弾がわかるなんて、さすがだぜ。

「ッてことは…」

俺達三人は顔を見合わせた。

青ざめた表情の仁。

普通に動揺すらしてません顔の少女。

そして、俺はきつと動揺しまくっている顔をしているんだろうな。

俺と仁は同じ結論に達したにちがいない。

―この遺跡には俺達以外のなにかがいる。

もっとも、顔色一つ変えなかった少女はいると思っていたのかもしれない。

だとしたら教えてほしいものだ。

こうやって、寿命を減らすのもなんだか損した気分になるからな。

「おい、どうした!？」

急にそんな声が聞こえて俺達は心臓がとびでるんじゃないかって思うぐらい

びっくりした。

兵士達の仲間であろう。

約十人前後が走ってきた。

あの銃声を聞きつけたのは俺達ではなかったようだ。

俺達は、本当に丁度開いていた天井の隙間へともぐりこんだ。

駆けつけてきた十人の隊長らしき男が、倒れた仲間を見つけ走りよってくる。

そして、倒れた仲間を一人ずつ見て本部に報告しようとしたのか無線を手にした。

「あー、こちら第十二番…」

そこから、後は続かなかった。

バスッ、バスッとサイレンサーで殺した銃声が響き次々と、兵士が倒れていく。

血が壁を汚し、鈍い、肉が地面とぶつかる音が響く。
やがて、十人はみんな、倒れ動かなくなった。

「ひ、ひどいことするな…」

仁が声を潜めながら俺に呟いた。
まったくだ。

しかし、この兵士達を殺したのはいいたい…

「こちら、連合郡第二十五番特殊中隊。

目標の大隊を殲滅。

完璧に抹消しました」

金髪のお兄さんが、AKを持って歩いてきた。

身のこなし、まとう雰囲気がまさに殺しのプロ感を出していた。

そのお兄さんについてくる約十人ほどの特殊部隊達。

天井の隙間から俺達は見てはいけないものを見てしまった感がぬぐえない。

きっと、どこかの組織の特殊部隊だろう。

『連合郡』とか言ったか？

あの大組織の名前。

俺は、少女と仁に動くなという合図をだした。

でないと、こいつらは動きまくるだろうからな。

それに、俺や仁ではとても勝てない相手だ。

それに俺は一応コソ泥。

気配をけすのぐらいちちよいのちよいだ。

たまうにばれるけど。

はい、そこ。

駄目じゃんとか言わない。

だが、体重を消すのは無理だったようで。

ミリ…ミリミリ…

「ちっ」

「え、まて、マジで？」

「……」

バキヤー！！

どうやら俺達もぐりこんだ隙間は遺跡の天井が老化して出来た隙間だったらしく

いままで、俺達三人の体重を支えていたのが逆に奇跡だったんだろうな。

そんなわけで、俺達三人は特殊部隊のど真ん中におちたとさ。

「!?!」

まあ、これが特殊部隊の反応だ。

そりゃ当然だろうな。

急に遺跡の中から人が落ちてきたら誰でもそうなる。

「構えろ」

冷徹な声が響く。

さっきのお兄さんが銃を構えていた。

それにつられて特殊部隊の兵士達も銃を構える。

「邪魔者は排除。

それがわれわれの使命なのだ。

邪魔はしないでもらおう」

戦闘か：

いくら俺でも特殊部隊には絶対に負ける。

そうおもいながらも、麻酔銃に手をかけたときだった。

「くくく…あっはっは！！！！」

少女が笑いはじめた。

それにギクリとしたのか、特殊部隊の兵士達が後ずさりをはじめる。

「撃て！！」

兵士の士気がまだあるうちと思ったのか大きな声で号令がくだされた。

号令とともに、銃声が響き渡る。

俺は、目をつぶった。

ワンワンとなる銃声とともに

ああ、短い人生だった。

できれば、死にたくないなあ。

くそ、鬼灯のおっさん恨んでやるからな。

そう思った。

だがそれももう思えなくなるのだろう。

みんな、さようならだな：

銃声がやんだ。

そこで、俺は地獄を見た。

最終兵器は右手を大きく広げ前にかざしていた。

赤紫の右目と血のように赤い左目（最終兵器は力を使うときに左目が赤くなるらしい。）

の二つの目で前の敵をまるで蟻をみる虎のような目で見た。

「ひ、ひいっ！」

と、いう声とともに銃声が響く。

おびえた兵士が銃の引き金を引いたのだろう。

銃から吐き出された弾はまっすぐに少女に向かって飛んでくる。と、弾の軌道が曲がり少女をそれた。

ヒュウイ、と風をきる音とともに弾は後ろの遺跡にささる。

遺跡から、赤い血のようなものが出て床を浸す。

「波音、仁、隠れて」

少女は、俺達に顔を向けずに言った。

「お、おう…」

俺は、恐怖でゆがんだ仁をひっぱって壁の向こうへと連れていった。

「た、たかが一人、我々になうわけがない」

そういった、冷徹な隊長は少女に向かって銃口をむけた。

それに、つられて次々と銃口が上がる。

「撃て！！」

遺跡の内部が銃声で満たされる。

だが、なった銃声は機銃のような軽い音ではなく
光化学兵器――レーザーの空気を切る甲高い音だった。

一瞬にして、隊長以外の兵士が倒れる。

「え…は…？」

隊長は何が起こったのかまったく理解できないという顔で周りを見
渡し

そして、少女をみて腰を抜かした。

銀色系の髪と整った顔立ち華奢な体とは似合わないグロテスクなも
のが

少女の左手に発生していた。

左手にたくさんの線が入り、手の先が銃口へと変わっている。

線はどうやら配線みたいで青く光っている。

光学模様が何気に綺麗とおもった俺は意外とこの場面を楽しんでい
るのかもしれない。

配線により、集められた光が銃口で圧縮され射出されるのだろう。

戦闘機を撃墜したときには緊張で見えなかったがきつとこういう感
じになっていたのだろう。

少女は、無表情のまま右足を踏み出し、歩き出す。

そしてあつという間に隊長の目先にまで達した。

腰を抜かした隊長はそれだけでびびり、自分達が殺した兵士に躓き
倒れた。

それでもなお、目の前に広がる死から逃れようと四つんばいで逃げ
だした。

それを無表情のまま、だがすこし楽しそうに追いかける最終兵器。

そして、隊長はやっと立ち上がったはいいものすぐにつまずき壁の
隅においつめられてしまった。

足が空をきり、顔を目の前の死に向ける。
その顔の口が

「た、たすけて…」

という、言葉を発した。

「……」

少女は殺気をたつぷりと含んだ目を隊長に向ける。
そして、スツと銃口が隊長に向けられた。

「あ…ひっ…」

隊長の目から涙がこぼれ、汗が滴り落ちる。
隊長のズボンが濡れ、アンモニア臭が鼻を刺激する。

「た、頼む…助けて…
俺には、妻と子供が…」

なお、哀願する隊長に最終兵器は哀れみの表情一切見せず
吊いの言葉を一言も発さず、空気を切る音とともにレーザーを発射
した。

それを見ていた俺は震えが止まらなかった。
恐怖、死。

その塊だ、アレは。
仁は愛用のパソコンをしっかりと抱きかかえ迫りくる恐怖と戦って
いるようだ。

そう、少女はベルカの宗教に出てくる少女にそっくりだ。

シエラ

『恐怖神』

その名に間違いなく、少女―シエラは恐怖を見せてくれた。

「ふう、疲れた」

肩と腕を回しながら少女は俺達が潜む壁の隅に帰ってきた。

どこか、楽しそうに見える少女は完璧にハイになっているに違いない。

その少女に、俺は今即効で考えたことを言ってみることにした。

「あのさ、F・D。

話があるんだ」

「ん？なんだ？」

すんなりと返事を返してくれた。

「お前を、F・Dと呼ぶのには疲れし

お前も名前がそろそろほしいだろうと思ったんだ」

「名前：波音みたいなこういうものの事か？」

「そう。」

俺はお前に名前をやるしこれからもこうやって呼ぶ」

「で、名前は？」

「シエラ…」

「……シエラ…」

そういった後、少女は顔を背けた。

そして…

「仕方ないな、使ってやるよその名前…」

とびっきりの笑顔で…

そしてほんのりてれくさそうに紅い顔をして俺にむかって笑いかけた。

inues.

This story continues.

恐怖神（後書き）

どうもありがとうございます。
読んでいただいて光栄です。

S・D

「しかし、本当にこれであってんのかねえ？」

そんな疑問を俺はぶつけられた。

しらねえよ。

そう俺は言うしかない。

鬼灯のおっさんと連絡が取ればいいのだが

あいにく、ここは地下で戦場だ。

携帯の電波が届くわけがない。

「シエラ：シエラ：」

シエラと名をつけられた最終兵器は

自分の名前をなんども読んでうれしそうにニコリと笑うし、

重そうなパソコンをずっと脇に抱えながら歩いてくる仁も疲労が眼に見えてきた。

それに、俺もそろそろ疲れてきた。

任務開始が午前五時。

そして、今が午後一時だからかれこれ八時間はこの辛気臭い遺跡で
うろちよろしている計算になる。

いくら、超古代文明の遺跡だといえ疲労をとる効果はないようだ。

あったらあったで皆さんのスポットになるんじゃないだろうか。

「……」

俺はもう何もう気力すら起きないね。

人の死を目のあたりにしたというのもあるが、

終わりが見えない遺跡の旅っていうのも一枚噛んでいる。
いや、一枚どころじゃなくて四枚ぐらい噛んでるね。
そんなことを思いながらトボトボと歩く。

「お、おい、波音!!」

地面に写る自分の顔を見ながらため息をついていると
パソコンをいじりまわしながら俺の前を歩いている仁に呼ばれた。

「なんだよ？」

疲労も手伝ってちよつといらだった声になってしまった。
世に言う八つ当たりだ。

「この扉：みたことないか？」

なるほど見覚えがある。

「これは、僕の家扉と酷似してるな」

そして「元だけどね」と付け加えるシエラ。

その声を聞いて、鬱病一步手前になっていた俺もようやく顔を上げる。

そして、すこし驚いた。

いつの日か、シエラが俺を殺しに出てきた扉とそっくりのものが目の前にひろがっていた。

嫌な予感が頭を駆け抜ける。

そんなことを気にしないようにまるで獲物を狙う猫のような顔をして

「ここか…」

シエラは目をとじて呟いた。

今まで歩いてきた通路に分岐点はなく、その通路をさえぎるように直立している扉は

ここが最深部であることを示している。

「仁、また頼む」

「まかせとけ」

短い会話が終わったあと仁は扉を開けるためコードを差し込む場所を探し始めた。
が…

「必要ない」

そういったシエラに押しとどめられた。

自分の仕事をとられたという顔をした仁は不服そうな顔をしていたが目の前で大口徑砲に変わっていくシエラの右腕を見て納得したようだ。

「壁が邪魔ならこわせばいい」

はい、コレ名言ですよ。

戦闘機を破壊したときにつかったあの兵器だ。

対人用と対兵器用でこいつはレーザーを使い分けているようだ。

最終兵器は、可変式鋼鉄細胞という細胞で出来ているらしい。

思ったとおりに回路が組まれ、その結果思ったとおりの兵器が体から生える。

だが、それ以外は普通の人間と変わらないのだという。

つまり、転べば血が出る。

風邪もひく：らしい。

兵器も風邪ひくものなんだな。

兵器なだけに平気かと思っていたんだが。

だれかくだらなすぎってつつこんでくれー。

とかいっている間にレーザーエネルギー補給完了。

シエラの右腕は赤い光に包まれている。

「発射！」

レーザーが直視できないほどの強烈な光を放ち

爆発する、と思って地面に伏せた俺と仁は爆発によって降ってきた鉄破片に

思いつきり背中を叩かれることになった。

「「いてーっ！」」

俺と、仁はナイスタイミングではもった。

「あのなあ、シエラ。

お前もうちょっと、加減ってものをだな…」

「違う」

「は？」

「僕じゃない…」

目を細めながら見ると、シエラの右腕はまだ赤く光ったままである。つまり、まだ発射していない。

じゃあ、誰がーと言いかけた俺の前で火花が散った。

シエラが俺の前に立ちふさがり、左手のナイフで扉の中から出てきた『何か』の攻撃を防いでくれたのだ。

「面倒なヤツが出てきた」

シエラは、簡潔にそう俺に言ってまた壁に張り付いとけという目配せをした。

それに素直にしたがう、俺&仁。

戦いのプロのそばにアマチュアがいたって邪魔になるだけだ。

シュツと、空気を切る音と共に扉の向こうから赤いレーザーが飛んでくる。

それを、ナイフから普通の手に戻した左手で軽く受け止めて横へ流す。

壁に光が吸い込まれシエラの横の壁が爆発する。

「出て来いよ」

シエラがそういって、扉の向こうへレーザーを発射する。

赤い閃光が走り、扉の中へと向かう。

扉の中のレーザーにあたった壁が爆散して、その破片をよけるために扉の中から

『何か』が出てきた。

「シ…エラ？」

俺は、思わずそうつぶやかずにはいられなかった。

そう、そこにはシエラがいた。

ただ、一つ違ったところがあり長髪のシエラと比べ短髪で運動系の女子って感じた。

その短髪がしゃべった。

なにかで聞いていたのだろうか。

完璧な日本語で、だ。

何なんだよ、こいつらの語学能力の高さ。

俺も見習いたいぐらいだ。

「やっぱりFね。

久しぶりじゃない？」

シエラと変わらないトーン。

ただ、男っぽい口調ではなかった。

「久しぶりだな、S」

そういつて、またシエラはレーザーを放った。

それを、右手で受け止め、Sと呼ばれた女は笑った。

「あはははっ、久しぶりの戦いの臭いだわ！」

「上では、人間たちが戦争ちゅうだ、ぜっ！」

再び、赤いレーザーがひらめき、Sを狙う。

それを軽くよけ、Sは左手をナイフからレーザー砲へと変換させた。

「プロトタイプのくせにでしゃばんじゃねえよ！」

「あんたは、自分の力を制御できないじゃない！」

だから、いっつもTに迷惑ばかりかけて：

私達三体の中で一番の出来損ない！！

動かしちゃいけない『削除』のくせに！」

まで。

いま、Tっていったら。

まだいるのか…

最終兵器が…

それに、シエラが出来損ないか。

——かもしれないな。

「殺すぞ」

ごめんなさい。

シエラ様。

最終兵器を舐めてました。

閃光がきらめき、爆発音がわんわんと鳴り響く。

最終兵器どうしの戦いか…

見ているものを圧倒するね。

また俺は、Sとかいう最終兵器にベルカが滅びたということを伝えなきやいけんのか？

とか思っていると俺の右手ギリギリのところを青いレーザーが通過する。

もう勝手にしてくれ…

俺は投げやりの気分で戦闘範囲を見た。

「ちっ…」

少々、Sが押されているようだ。
やっぱりシエラは強い。

というか、最終兵器同士が戦ってもまわりが壊れるだけで
最終兵器自体が全然壊れない気がするんだが…

シエラが今まで見たことのないような大砲に右腕を変えているの
を見た。

そしてバシユルルル！と大きな音になり、オレンジの閃光がSの足
を貫く。

「うっ！」

小さく声をあげ、Sは足を押さえた。

大量の血が流れ出て、力が抜けたのかSは地面に落ちた。

シエラもSも、背中から金属の翼を生やし扉の中の広い空間で戦っ
ていた。

その決着が今ついた。

Sはオレンジの閃光に足をつらぬかれ、大量の血を出している。

筋肉はもちろん、骨まで貫通した閃光は壁に当たってもなお壁を貫
き、見えなくなった。

どれだけ、強いレーザーなんだ。

「光波共震砲…か…」

「そうだ。」

我が祖国が完成させた最高傑作兵器だ」

シエラが、地面に降り立ちSにむかって歩き出す。

両手の武装を解除し、背中の翼をしまう。

「超空要塞戦艦の主砲の仕組みをマスターしたのね…」

そういつてSはひざをついた。
着地したときにも痛みが走ったのだろう。
痛さで汗が出てきている。

「大変だったよ。

まずは、力光学からはじめなきゃいけなかった」

俺と仁はもう何がなんだかわからないわ〜という顔で聞いている。
なに、超食う要塞？なんじゃそりゃ。
デブとかなにかか。

「詳しくは後で話す。

いまは、少し黙っててくれ。

感動の再開なんだ」

そう俺に言ってシエラはSのそばにしゃがみこんだ。
主人に黙れ…か…。
感動の再開…ね…。
そうですか。

「ふう…」

まったく、逆に飼いならされている気がしてきたよ。
Sの傷はこげて、墨みたいになっている。
最終兵器でも痛みは感じるのだろう。
シエラが治療しようと傷をさわると美しい顔立ちが痛みにゆがんだ。
治療されながらSがシエラに話しかける。

「しかし、最後の最終兵器としてつくられたあなたがどうしてここ

にいるのかしら？

ちゃんと、兵器庫をまもってなさいよ！」

その疑問は俺がお答えしましょうか？

はじめから尾ひれをつけてかたってあげますよ。

動きまで加えてあげますが。

どうでしょうか？

「姉さんこそ守ってれば？」

姉さんねえ：

ふーん：もう驚かんぞ。

俺はもうこういうのには慣れっこだぞ。

仁はしっかりとびっくりしているようだがな。

「私は休みたいの」

任務を無視するのもどうかと思うが…。

「S：いや姉さん。

単刀直入にいう。

ベルカは滅びた。

完璧にね。ロルワール家の予想は大きくはずれた」

シエラがそういうとSは目を大きく見開き小さい声をあげて

……泣き始めた。

「私の任務は：私の生きてる意味は…？」

デジャヴを感じるぞ。

猛烈なデジャヴを。

シエラもそう思ったのか、さりげなく微笑している。

しばらくして、泣き止んだSは俺達二人の方を見た。
姉妹だなど思えるぐらい似ている。

気になることが多すぎてすこし話を聞くことにした。

「えーと、Sでいいのか？

あんた、シエラ：ああ、Fのなんなんだ？」

読者の皆様も気になりますよね？ね？

「私か。

私は、こいつの双子の姉だ」

どうも本当にありがとうございます。

どうりで似ているわけだ。

違うのは口調と髪形ぐらいのものだ。

体格、身長すべてがそっくりだ。

厳密に言えばSの方が背が少し高いか。

そんな風に、じっくり見るとSはなにやらシエラに耳打ちされた。
結構長い間しゃべっている。

またなにか知らないことをしゃべってんじゃないだろうな。

そして、俺の方をみてニコリと笑った。

「私も、あなたを守る任務につかせてもらうわ。
よろしく」

生き方をお前もそこに見出したか。

やべえ俺世界相手にしても負ける気がしない。

だが俺ははっきりいって一人あずかるだけで精一杯なのだ。
だから思いっきり反対することにする。

男としては嬉しいんだけどね。

おっと本音が。

「え、いやいやいや！！あんたなにいつてんだ！」

男として嬉しくても正直迷惑である。

一人でもタダでさえ迷惑なのにもう一匹増えるだど！？
たえられない！！

詩乃や綾になんていえばいいんだよ！

「俺の家くるか？」

仁、お前の場合下心丸出しだろうが。

ほら、S怖がってるぞ。

よく見るんだ。

ふるえてるじゃないか。

「にしても、お前ら二人仲直り早すぎ！」

そう俺が言うと二人は顔を見合わせまた俺の方を向いた。
息もぴったりだ。

「あれは、準備運動のようなものだ」

「そうよ、準備運動のようなものよ」

あんた、足つらぬかれてたじゃないか。

今もまだいたんだろうな。

と、おもってSの足をみたら傷は綺麗に消えていた。
服に穴だけがあいている。

治癒能力も完璧だな。

なんなんだろう、この二人。

人間なのか？

そんな無駄なことを俺は一生懸命考えることにした。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

S・D（後書き）

どうもありがとうございます。

本当に読んでくださっている皆様には
感謝の言葉を申し上げます。

おいおい、なんだよこいつ

「そうか…起動したか…」

「はい、我が連合郡の偵察衛星がしっかりとノイズをとらえております」

「ベルカ帝国の最終兵器…なにがなんでも我が手にいれるんだ」

そういつて、男は椅子にフカブカと腰掛けた。

波音たちが奮闘している場所から遠い場所。

日本帝国にある連合郡総司令部。

そこにこの男達は所属している。

「我が、連合郡を勝利に導く神だ。

なにが何でも奪い取れ」

男はそばにいる眼鏡をかけた秘書にそう告げた。

「仰せのままに」

そういつと、秘書はにやりと笑い男の部屋からでていった。

「最終兵器…か…ふふふ…

ノイズを観測しただけでまだどんなものなのか知らない…
見て見たいものだ…」

男はそう呟いたあと、葉巻に火をつけた。

紫煙が部屋を舞い、そこに吐き出された煙が混じり

混濁をしめすような幾何学的な模様を描いた。

「さて、超光学記憶媒体ってのはどこにあるんだ？」

俺はSに聞いた。

すると、Sは顎に指を当て首をかしげ

「超光学記憶媒体？」

と繰り返した。

「姉さん、メモリーチップのことだ」

そう、シエラがいうとSは

「ああ、あれね。あれは…えーと…」

そういって、後ろを向いて扉の中に入っていった。

そして、しばらくごそごそと音がした後

Sが片手に息でふつとやったら飛ぶんじゃないかとおもうぐらい
小さな四角い、透明で透き通ったものを持ってきた。

「超光学記憶媒体はこれしかないよ？」

そういって、シエラに渡す。

シエラはチップを手にとって

「入れ物は？」

と聞いた。

「ああ、入れ物ね。
ちよいまち」

なんというか、抜けてる最終兵器だな。
本当に超古代文明がつくったのだろうか。

「僕達はもともと人間だった」

なるほど。

意味深な発言感謝するぜ。

「え、人間だった？」

「そうだ」

「つまり、あれか？
改造？」

「そうだ」

なるほどな…

だから、風邪も引くし血も出るのか。

了解した。

話によると、可変式鋼鉄細胞が繁殖するのに最適な体をしてるのが
このSとシエラと、あと一人、Tらしい。

後は、どんだけ探してもいなかったそうさ。

可変式鋼鉄細胞は普通の細胞を破壊し、あいたスペースに繁殖。つまり、こいつらは知らない間に可変式鋼鉄細胞を打ち込まれ寝ている間に人間から最終兵器へと変わってしまったのだろう。俺だったら絶対に拒否したい。

「あったぞ、ほらよ」

Sはそう言って、ケースごとチップを投げた。

綺麗な流線型を描き、俺の手の中にスポツとおさまる。計算されつくしているな。

そこで、ふと思いついたあの企画再発。

「Sって呼びづらいからお前にも名前付けるわ」

そういつて、俺はSをみた。

Sはというと

「え、いいよ!!うれしいけど…さ…」

両手を胸の前でぶんぶん回してかたくなに拒否。

「うるせえ、お前の主人はこの俺だ」

そういうと、Sはうっ…といって苦虫を噛み潰したような顔をした。しかし、姉妹そろって綺麗だな…可愛いし…

俺、もしかして世界で一番の幸せ者じゃないか？

「なあ、波音。

そろそろ出ないか？」

仁がPCをもって壁から立ち上がる。
そうだな。

そろそろ出ようか。

チップも手にいれたことだし。

長居は無用だ。

長居すればするほど状況は悪くなるものだ。

そして、俺達は出口へと歩き出した。

「恐怖神がシエラだから：

戦闘神　メイナでいいだろ？」

そう、さりげなく俺は言った。

だが、S―メイナはしっかりと聞いていたようで

「あ、ありがと…」

ちゃっかりと照れていた。

そんなに、名前をつけられるっていうのは
うれしいもんかね。

俺は、波音みたいな女っぽい名前嫌なんだが…

「俺はうらやましいぜ、その名前」

仁…

なんで、そんなにうらやましそうな目で見るんだよ。

「仁…ってなにか知ってるか？」

「いや…」

知らないものは知らないので素直に答える。

「ピーナッツの食える部分を仁っていうんだよ！」

「え、まじ？」

「この前理科の授業でやってただろ！？
ちゃんと授業聞けよ！」

頭から煙を噴いて仁が激怒する。

「すまん……」

これは素直に謝るしかない。
の、前になんで俺こんなに切れられているんだ？
八つ当たりとかいうやつか。
正直、やめて欲しい。

「出口だぞ」

シエラが短く口を開く。
そんな、重要なことをさらっといわなくても……
だが、これでやっとここから出れるのである。
正直、腹も減ったし疲労感がやばい。
ここまで疲れたのは稀だ。

「外だっ！」

メイナがはしゃぐ。

何年ぶりなんだろうな。

「五千十六年ぶりっ!!」

えっ!?

それは、また:

——結構歳食ってんだな、二人とも:

そんなこといったら殺されそうだけどな(笑)

「(笑) ってなんだ、(笑) って」

あゝ、うるさいぞ、シエラ。

黙ってお前も外を満喫しろ。

レーザー砲を俺に向けるな。

殺す気か、お前は。

「死ね!

なーんて:ね::」

冗談だって事は、わかりきってるが最終兵器に死ねとかいわれたら現実のものになるような気がしてならないね。

ふっと、視界が明るくなる。

外に出た瞬間俺と仁は目を両手で覆った。

暗い所に長い間いたので、目の調節が済むまで時間がかかる。

メイナが周りではしゃいでいるのが気配で伝わる。

ようやく、目がなれた俺はゆっくりと目を開いた。

太陽は真上まで昇り、戦場だというのに鳥が鳴いていた。

周りには兵士、猫一匹いやしない。

「波音、持ってきたか?」

木の陰から、鬼灯のおっさんが現れた。
さすがにびっくりした。

俺達が出てくるまでずっとそこでまっていたのだろうか。

「お、おう…」

そういった後、俺はチップを鬼灯のおっさんに渡した。
チップを眺めたあと、メイナにおっさんの視線が行く。
スッ、と目が細められその後、少し微笑んだ。

「新しい最終兵器のようだな…
まったく、つくづくお前は女運がある」

俺的にはいやなんだが…
なんとかならないものかね。
ってか、女なんだろうかこいつらは。

「鬼灯のおっさん、P Cのバッテリー充電させてくれ」
仁がP Cの電源を切っていった。

「まあ、とにかく帰ろうか。
こんなところ…」

と俺が言った瞬間だった。
ドーン、という爆発音と共に体が吹き飛ばされた。
そして、地面に叩きつけられた。
体中に激痛が走る。

「う…」

みんなの姿を確かめようと一生懸命に立とうとするが
体にちからが入らない。

く…そ…

そばに、仁のPCバッテリーが転がっていた。

それをせめて、仲間のぬくもりを取ろうと手を伸ばす。

そのとき、神経を逆なでするような声が入ってきた。

「おいおい、ダメだよ。」

レルバルは僕のものだから」

誰だ！という力強いいつもの俺の声とは別に

「あ…だ…」

我ながら情けない声が出てしまった。

「生きてるよね？」

よかった、よかった」

首が回せないで誰の声かわからない。

だが、男の声なのは確かだ。

その声の主が俺の前に回って俺の顔を覗き込んできた。

「クスッ、思ったとおりだよ。」

細いけど華奢っていうほど細くなくどこかがっちりしている体つき、そしてさりげなく反抗する目。

髪型から顔つきまで僕の理想そのものだよ」

そういった、男は：

むさいヒゲとかをはやしているわけなく：

同姓だが、ほれそうなぐらいハンサムな男子だった。

すらっと細い足、整った体つき。

完璧の二文字が似合う少年だった。

俺よりも二つぐらい年上か。

十八歳ぐらいだろう。

「仲間が放ったレーザーが効いたみたいだね。

クスッ、ごめんよ。

でも、君をどうしても、僕の物…いや、僕達の物にしてくてね…」

お前の仲間が、放った…？

「お、お前も最終兵器なのか…？」

そうやって聞くのが妥当だろう。

あいつの仲間が、レーザーを放ったんだからな。

「僕は違うよ。

V型と呼ばれる最終兵器モドキなのさ。

君が連れているF・DやS・Dの何倍も弱いよ♪

なんたって、パンソロジーリーダー及びイージスすらろくに使えないんだから。

それに、F・DやS・Dの威力よりも何倍も低いし…」

パンソロジーリーダーっていうのはわかる。

シエラやメイナが使っているパンソロジー電磁波をうんぬんのやつだ。

だが、イージスっていうのは…？

「あれ？」

F・Dが使っていたと思うんだけどな」

そういわれて、俺はハッとした。

遺跡の中で特殊部隊Velaを名乗る連中と戦ったときに
シエラが弾丸の軌道を曲げて俺達を守ってくれた…あれがイージス？

「そうさ。」

パンソロジー電磁波を密集させることにより出来たいわばバリア
だよ」

説明くどいやつだな。

もう、いい加減いいだろうが。

俺は早く家に帰りたい。

ってか、帰らせろ。

「あははっ♪

でも、それは無理だよ。

僕達は、君を殺すという任務でここにいるんだから」

そういつてハンサム少年はカラカラと笑った。

この、ホモ野郎。

助ける気がないならとっとと消えればいいんだ。

「君は僕が食べちゃいたいよ♪

もちろん、ベットで…ね…

ぎりぎり、殺さずに持って帰ってボスに許可とろうかな。

そして、一生僕の犬として…」

「てめ…え…
ふ、ふざけるんじゃない」

いつまで、俺は地べたにくたばっているんだ？
体がいうことを聞いてくれさえすれば…

また、俺は人に頼るのか？
シエラに…頼るのか？

まあ、普通の小説とかならここで秘めていた力が復活とかするんだ
ろうな。

でも、俺はあいにく普通の人間だ。
残念だったな。

「はい、そこまでよ。
終わりよ、あなた」

この声は、正義の最終兵器シエラか？
いや、違う。

この口調はメイナだ。

「はあい、波音待った？
わるかったわね。

こいつらにちっと手こずっちゃってね」

そういつて、メイナは手に引きずっていた四人ぐらいを
ハンサム少年の隣に放り投げた。

「ありゃ、やられちゃったか。
仕方ない」

四人を少年はじっと眺め完璧に死んでいるのを確認すると

俺の耳にフツと息をかけて

「じゃあね、僕の永久波音…

また会うときは、僕のものだよ…

あははっ♪

残念、君の血を舐めれるかと思ったのに…」

そういつて、背中から金属の羽を生やしたかと思うと…
すごい勢いで飛び去っていった。

「逃げた…」

いや、逃げた…じゃなくて
追えよ！

たのむから、あいつを追って殺してくれ！
たのむから…

BLをされるほうの立場ってものをはじめて味わった。
これは、屈辱以外の何でもないな。

「いや、あいつは悪いやつには見えなかったもんだから…
ごめんね！」

追え！！

頼むから追ってくれ！！

「シ、シエラや仁は…？」

怒りが収まった俺が聞くと

「もう、飛行機の中で君を待ってるわ。

行きましょ」

おっと、バッテリー。

これは仁の大切なやつだからな。

バッテリーを俺に渡したあとメイナは俺をお姫様抱っこした。

俺を軽々と抱えたメイナは鬼灯財閥のマークがかかれた飛行機に俺を押し込んだ後自分も乗り込みドアを閉めた。

そして、飛行機はエンジン音を響かして離陸した。

「シエラ、ごめんね。

私のウォーミングアップに最適だったもんだから…」

ウォーミングアップで人を殺すなつての。

「ん、かまわない。

僕は仁やこのおっさんを守るのに精一杯だったものだからな」

姉妹なのにこんなに物騒な話をしていいものか。

「はあ…」

大きなため息が出た。

そして、俺は自分に言い聞かせるように

「これから、大変なことになりそうだ…」

と呟いた。

俺は今あったばかりの美少年の顔を思い出して再び、大きなため息を吐いた。

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

おいおい、なんだよこいつ（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございました。
また次もよろしく願います。

超古代文明の島

「しかし、お前は女運だけでなく男運もあるんだな」

鬼灯のおっさんがくつくく…とのを鳴らして笑った。

正直言わせてもらう。

俺にそんな特殊な趣味はもちろんない。

だから、当然あんなハンサムガチホモ野郎に

「愛してる」

とかいわれてもくらっとこない。

くるわけない。

むしろ、うざい。

もう、なんなんだろうか。

何が「僕の永久波音」だ。

もう、俺の目の前に現れるな。

いつそ—この世から消えてくれ。

「はあ…」

仁は、疲れからなのかからしらないがガーガーといびきをかいて寝ているし

シエラやメイナは陽子学や光化学の本を見て勉強(?)している。

一冊、手に取って見たが十やら一やらスペクトルやら、なにがなんだかわからない。

そんなわけで、今とっても暇な俺がこの飛行機の中での時間を使いシエラやメイナの最終兵器としての説明をしようかな。

「何さつきからぶつぶつ言ってるんだ？」

シエラがパタムと本を閉じうるさい蠅を見るような目で俺をみる。ちらっと、本の表紙が見えた。そこにはこう書いてあった。

『光化学レーザーの力及び、効果』

健康に役立つことをはじめるならまだしも：これ以上強くなるのかと冷や汗が出た。

なんでも最終兵器としてこいつらは『育つ』のだという。兵器の断面図などを見て、おぼろげながらもその通りに腕などの可変式鋼鉄細胞をそのように変える。すると、兵器を圧縮して腕につけたみたいになるので自分の意思でレーザーなどがうてるというわけだ。ちなみに、弾など消費する武器は使わないのではなく使えないらしい。

深く理由を考えると納得できるだろう。

弾を使う＝自分の組織を飛ばす。

さすがに敵もこんなくらいたくないだろうし自分も痛いだろう。使うたびに減っていく自分の体重。

げにおそろしや、最終兵器。

「私、波音に拾われてよかったかも」

ポツリとメイナがいったことにより
俺の遺跡でシエラが教えてくれた『最終兵器のしくみ』の回想は途切れた。

へー、最終兵器も感謝の心があるんだなあ、とか思いつつ照れてる俺がいた。

「大変だよ？」

朝から」

シエラがさらっと、いう。

あいからわず、このさらっと言うタイミングのウマさ。
もしかして狙ってるんじゃない？

ってか、一応主従関係というのがあるんだから守れ。

「へっ、何いってやがる。

そういうお前こそ朝っぱらから俺にレーザー向けてきやがって。

お前の主人は俺だぞ。

ほら、文句あるなら可愛く

『ご、ご主人様あ』とか言ってみやがれ！！」

「ご、ご主人…様…」

素直に可愛いと思う。

が、それは置いといて。

ーその左手の大口徑レーザー砲は何だ？

俺を殺す気なのか？

やめようぜ、そういう冗談は。

笑えないだろうが、はっはっは…

「死ね」

シエラが恥ずかしさ八割と屈辱二割で顔を赤くしながら俺に言い放つ。

だから、最終兵器にそういうこと言われたら現実のものになる気がしてならないだろうがっ！

「シエラ、もうやめなつて。

あんたも幸せないいご主人様（笑）に拾われてよかったじゃん」

だから、（笑）ってなんだよ。

メイナが、片目を閉じて「ね！」とウインクする。

俺に振られても…とか思いつつシエラが照れているのか怒っているのか

顔を真っ赤にしてメイナに掴みかかるのを笑いながら見ることにした。

まったく、シエラという最終兵器はよくわからないものだ。

照れたり、怒ったり…大変だな…

ベルカ帝国はどうして、兵器なんか心に残したんだろうな。

と、久しぶりに難しいことを考えていた俺の脳は緩やかに睡眠物質を分泌しはじめ

俺をゆっくりと眠りに導いてくれた。

夕日の赤く鋭い光が俺を刺激する。

「ん…」

ゆっくりと目を開くと同時に、軽い振動が飛行機に伝わり無事に着地したのを俺に伝えてくれた。

横を見ると、シエラとメイナは最終兵器とは思えないほど無防備に座席に横になって寝ていた。

仁はよだれをたらしている。

俺も人のこと言えないかもしれんが。

おととと、ぬぐわないとな。

「ここから、先は部下に送らせる」

急に鬼灯のおっさんが話しかけてきた。

「おい、起きろ」

俺は三人を起こして、飛行機から出る。

飛行機の横には黒い車がエンジンをふかして止まっていた。

「んゝっ！よく寝たっ！」

仁があくびをして目に涙をためながらPCを片手に飛行機から降りてきた。

シエラとメイナもその後続く。

お前らも眠るんだなあ…とか思いつつ

どうして、俺はこの二人の寝顔を携帯で撮っておかなかったのかと少し後悔した。

朝が来た。

「起きろ！波音！！」

ああ、うるさい。

「起きなさい、波音」

ああ、お姉さまって感じの声だな。

俺はこの二つの声から一日がはじまることとなった。
時計を見ると、七時。

俺が家が出るのは八時だから：

「よし、後五分寝れるな。

おやすみ」

再び、まぶたをパタリと、閉じ夢の中に帰ろうとしたが
冷たい鉄の感触を二つ頭にかんじた。

「つたく：

すぐに、むきになる…」

ぶつぶついながら俺はよっこらせとベットから起き上がった。

すると、昨日帰るすんぜんに鬼灯のおっさんから渡された大塔高校
の制服を着た

メイナが目飛び込んできた。

「動きにくいね…」

シエラと双子の姉妹なので当然よく似合う。

馬子にも衣装：

いや、このことわざは違うか…
眠い頭をふりながら今のメイナにぴったりなことわざを探すが
あいにくみつからない。

「わー、姉さん。

これじゃ、まるで『馬子にも衣装』みたいだな！」

シエラが俺がいま考えていたことわざをひろうする。
きつと、昨晚勉強しているときに偶然みつけたんだろうな。
だが、残念だけどそのことわざは違うって…

「ん？」

それ、どういう意味なの？」

メイナは日本語をまだしゃべれる程度にしか知らないので
シエラに聞き返した。

「ん？ 知りたいか？」

メイナは頭をカクカク、と縦に振り肯定の意を示した。
シエラは腰に手を当ててどこから持ち出したのか眼鏡をかけ
どこかのえらい博士に変装したつもりなのか、えらくきどった声で
説明をはじめた。

「うおっほん。

S：じゃなくて、メイナ君。
よく聞きたまえ。

『馬子にも衣装』とはな……」

ああ、なんか最終兵器どうしの争いがまた勃発しそうだ。
巻き込まれたら命はないよな：

神様たすけてくれますか？

俺は天国にいけるのでしょうか？

――無理か：

すると、シエラが肝心の意味を言う前に

チン！とトーストが焼けあがった音がした。

「え、何？

今の音？」

メイナは興味深々にトタトタ：とトーストへ駆けていった。
シエラが俺の家に来たときもそうだった。
冷蔵庫を指差して

「テレポーションシステムだな」

といたり、車を見て

「なんで、浮いてないんだ？」

と言い出したと思ったらTVを指差して

「触れないのか？」

といたりしていた。

進みすぎた文明を最終兵器になる前にしっかりと見ていたんだろう。

以外にこういうのは記憶に残るものだからな：

たとえば、文明の差があったとしてもな：

俺は外はカリッと中はもちっとやけたグレートな出来栄えのトーストを頬張りながら

もう、古いブラウン管のテレビのスイッチをいれた。

狭い食卓にテレビの声が流れる。

『昨日、午前五時頃フランス公国に帝国郡が攻撃を仕掛け一時期パ
リを占領しました。

ですが、現地についた連合郡にすぐに奪回。

つづいて、アメリカ共和国に展開していた帝国郡も撤退しました。

この、暴動による交通及び金融関係の損傷はないということだ…』

世界は今不安定だ。

約百六十の国からなる帝国郡と約二十の国からなる連合郡。

兵数は圧倒的だが兵器の格が違いすぎる。

戦場現地で取材をしていたニュースキャスターが

『棒切れと戦車』

という例えをしたぐらいだ。

そこまで兵器の差があるということなのだろう。

現に帝国郡からしたら戦争だとおもっている規模の大隊の駒をすすめても

連合郡からは暴動程度にしか考えられなかったのがいい例だ。

帝国郡は発展途上国、もしくはは貧しい先進国からなっている軍隊だ。
拠点としてはアフリカやオーストラリアなどの南半球に偏っている。
その一方、連合軍は豊かな先進国ばかりで成り立っている。

拠点としては昨日いったアメリカ共和国や今住んでいる日本帝国、
フランス公国などだ。

教科書には連合郡が集結しつつあった帝国郡の拠点にミサイルを撃ちこんだのが

戦争の始まりだとされている。

早めに、厄介な種は摘み取るという作戦だったのだろうが、現実には戦争にまで発展してしまった。

この世界大戦は第二期一九九八年から始まっているからかれこれ十四年間戦争が続いていることになる。

噂では、連合郡はベルカ帝国遺跡から発掘した発掘兵器ばかりを前線に投入しているとか…

貧しいあげく、発掘兵器を直す技術力もない帝国郡が勝つのは不可能というものだ。

それに、連合郡には…

「へっつ、戦争か」

メイナがジャムをぬったパンをくわえながらボソボソとつぶやく。最終兵器としての血がさわぐのだろうか。

「ところで、波音。

今地図を見てたんだが…」

とシエラが学生服姿で俺に社会の授業でつかう地図帳を突きつけてきた。

多分、勉強中にたまたまみかけたのだろう。

「いつ、着替えた？」

「さっき。

と、それはいいからこれ教えてよ」

ったく、俺は飯の最中だったのに：

とか思いながら好奇心で目を輝かせているシエラが指をさす場所をみる。

一発でわかった。

「ああ、ここか」

この地図だけでなく世界中の地図に必ずのっている島がある。

マリアナ海溝の真上に位置してあってはならない場所にある島だ。

今、残っているベルカの超古代文明の遺産としてもっとも有名だ。

連合郡が必死に研究者を減らそうとしている中この島があるせいであまり効果がない。

学者からしたら非常に興味深い島である。

この島のおかげで超古代文明があるということが証明されたようなものだ。

いつか、仁がいていたPCなどの機器もベルカの技術がつかわれているという

話も納得できそうぐらい神々しい。

それは、約五二〇〇年も前から『浮いている』

そして、島は海にあるとは限らない。

なんせこの島は：

「超空都市ハイライトだ」

そうって、俺はPCでハイライトについて裏サイトで検索してやろうと

パンを飲み込み食卓からたったときだ。

「…っ！」

八時をつげる時計の音がけたたましく俺の部屋で鳴り響いた。
俺は、テーブルの上の皿を流し台の中にすべりこませかばんを持って
まだ、パンを食べている最終兵器姉妹の肩を押しながら
学校へと出発した。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

超古代文明の島（後書き）

よんでくださりありがとうございます。
次回もまたよろしくお願い申し上げます。

大塔高校今日も愉快

「おっす、波音」

パンをまふまふとかじっている最終兵器姉妹の肩を押しながら歩いていると

仁が、元気に家から出て俺に話しかけてきた。

「ほあ…」

また綺麗なの連れて…」

「好きでこうなったんじゃないよ」

他人から見ればまさに両手に花の状態なんだろうな。

もし、遼が見たら俺に泣きながら

「変わってくれえええ」

とか、いいそうだな。

まあ、あそこに遼が歩いているがプライドの高い遼が俺なんかに泣きながらそんなこと言うわけ…

「おはよう、波の…」

変わってくれえええ!!」

言っただけ!!」

遼がメガネをくいっとあげながら俺に声かけてきたとおもったらプライド捨てて「変わってくれえええ!!」って言った!!」
：なんでこんな朝っぱらから突っ込まなきゃいけないんだよ？
しかも、かなりベタな展開だ。

先を読めた方も多いのではないかと思う。

まったく、恥ずかしいったらありやしない。

「波音っ!!」

おは…ええええっ!？」

おはよう、詩乃。

朝からハイテンションだな。

酒でも飲んでるのか？

「増えてるじゃない!」

最終兵器二人の頭に向きの赤い矢印が効果音と共に現れる
そんな、感じの指の指し方だった。

「この二人をまるで細胞分裂で増えました、みたいなこと言うな」

「う…うん…」

そ、そうよね…うん…」

必死に自分に納得させているのか
いつもの活発な詩乃とは違いギャップが可愛いと思った。

「お、みんないるな」。

おっはようございま…

ええっ!？」

冬蟬、おはよう。

お前も朝からハイテンションだな。

このパターンは詩乃と酷似している。

きつと、冬蟬も

「なんで、増えてるんだああ!?!」

見たいな事を言うんだろぅな。

うん。

さあ、言え!!

俺が突っ込んでやる!

「ま、いいか」

軽っ!

軽いなおい!!

俺はつつこむのにいきりたっていたのに
すかしをくらってしまった。

「おはよう、みんな!」

ああ、この声は隼人兄さん!

今日もさわやかで!

「今日は体の調子がいいんだ」

それはよかったです。

俺からしたら唯一頼れるお方なので…

はい。

ただ、そのすぐよく働く頭が厄介なだけで…
はい。

「あれ…?」

綾は?」

隼人兄さんについての思いが終わると

俺はいつもここで詩乃と一緒に登場するはずの綾がいないことに気がついた。

「あゝ、綾今日は眠いから休むってさ」

いわゆるずる休みってやつだな。

がやがやいいながら俺達は教室にはいる。

先生が来て、委員長遼が号令をかけてまた一日がはじまった。

朝の会が終わったあと、当然先生は流れとして

転校生の紹介にはいる。

シエラと似ているんだから余計に見分けをつけようとするのだろう。

「今日からみんなと…」

ここから後は聞く価値もない。

仲良くしろ、とかそういう系しか言わないって決まってるからな。

よって俺の頭からこの言葉は省略させてもらう。

「メ、メイナです…」

そこのF…あ、シエラとは…その…

双子で…あの…」

こんな大勢の前で話したのは初めてなのだろう。

しかも自分のこと。

メイナは顔を真っ赤にして頭から煙を吹いている。

あ、オーバーヒート寸前だな。

まったく、心ある兵器ってどうなんだろうな。

「そ、それで：

あの：

お、おねがいしますっ！！」

最後は声のトーンが上がり、一気に頭を下げた。

机にもうちよつとで頭をぶつけるぐらいの勢いでだ。

朝の会終了のチャイムが鳴り：

ここから後は言わなくてもわかるだろう。

そう、シエラの時とまったく同じである。

男子はメイナに質問ばかりいうし

遼はメイナに求愛して先生の伝説のテキストブレイドを食らっても
なお

逆らおうと先生をにらみつけるし：

女子の生徒も生徒でメイナに質問雨あられだ。

質問とかを食らって顔を赤くしているメイナを見て

「かわいいじゃん」

と詩乃。

「そうなんだがなあ…」

と、俺。

また、あのシエラの時とおんなじだ。

これが、デジャヴとかいうやつか。

なるほどな。

一時間目が始まると即俺は気を失った。

目を覚ますと、チャイムがなった後でほったに跡がついていると冬蟬にいわれるまで俺は寝ていたことに気がつかなかった。

二時間目も同じようなものだ。

物理とかだるくてやってられん。

なにが、力の大きさだ。

別に知らなくてもいきていけるだろう、それぐらい。

そして、三時間目は見事に俺の睡眠をじゃましてくれた。

そう、P・E：つまり体育である。

男女別々に体操服に着替えると同じ体育館で別々に分かれて競技をする。

中学生までは同じことをやっていた気がするのだが高校になってから別々になった。

多分、体のつくりの違いとかが理由なんだろうな。

仁や隼人兄さん遼、冬蟬の四人とつるんで体育館までがやがやしなが行くと

すでに、女子はバスケの準備を始めていた。

ウォーミングアップしているのかボールをもってぴよんぴよんはねている。

「むへへ、あの娘なかなか…」

「いやいや、こっちのほうが…」

仁と遼の会話だ。

バカ一直線だな。

まったく、なぜそんな話をするのか。

女子のみが持つ双丘の話でもしているのだろう。

はねているから余計に揺れているのかもな。

「いや、僕的には…」

彗人兄さんー！！

なんであなたさままで…

くそ、あとで俺も入れてくれよ。

そう思いながら後ろ髪を引かれる思いでサッカーのボールをとってくる。

「でもやつぱり…」

まだ言っているのか。

真性のバカなのかお前らは。

あ、別に彗人兄さんのことをいってるわけじゃないんだぞ。

「シエラちゃんと、メイナちゃんが…」

ぐへへ…」

いつの間にか準備をしていた男子も女子を傍観している。

遼の流れに流されたか。

遼&男子みなさん。

そいつらは最終兵器ですよ。

まあ、あの二人は銀髪だからなあ…

黒髪の中でも目立つシルバーに光る髪をしてるしグラマーって言うのか？

なんていうか、豊かだし。

あ、いや別に詩乃を含む女子が貧しいとかそういうことを言ってるんじゃないぞ？

「へっ」

はっ、今の聞かれたかと、後ろに振り返る。

「へっ」

唯一、遼の流れに流されなかった奴が俺の後ろにたっていた。
ふ、冬蟬…

「そんなこと思ってたのか
今の聞いちゃったぞ」

「なんのことだ？
俺は別になにも…」

詩乃は気にしてるらしい。
いや、なにがとかはいえないが。

「へっ、波音意外とむっつりだったんだね」

「お、落ち着け。
俺がなにをいったんだ」

「皆は波音だけは純粋と信じていたのにな。
悲しいかな、期待は裏切られてしまった」

やばい、こいつに嘘は通じないのだ。
こいつ―冬蟬には警視庁のお偉さんの息子なだけあって
なにか、天性の血みたいなのが流れている。
そう、嘘を見破るのが大の得意なのだ。
いわゆる、天然の嘘発見器みたいな。

「本当にわからないのか？」

「ああ、まじまじ。

まじでわかんねえ」

冬蟬はめっちゃ笑いながら俺と話している。

他人の視点だったらタダの談笑に見えるだろうな。

だが、ここは今まで築いてきた俺のキャラが壊れるか壊れないかの
瀬戸際なのである。

つまり、エマーゲンシー。

非常事態なのだ。

「嘘…だよな？」

ドキ。

「ま、言わないから気にするな。

俺はお前のキャラを壊したりはせんよ」

「お、おう」

まじ、ありがとうと言いかけた俺は
自分から嘘ついてましたっていうのをばらしかけると思って

なんとか、踏みとどまった。

俺と冬蟬の付き合いは長くかれこれ中学校二年生から一緒だ。つまり、えーと…二年か。

それぐらいずっと友達でいる。

仁は小学校四年生ぐらいから一緒だ。

だから、六年か。

長いな、おい。

まあ、とにかく冬蟬が詩乃に言わなくてよかった。

俺が殺されるところだった。ふう。

四時間目、五時間目とそれからスムーズに進み

ようやく帰りの会を向かえ俺達は蜘蛛の子を散らすように校門から出て行った。

夕日をバックに両手に花。

いや違うか。

夕日をバックに両手に凶器。

こういうことか。

「学校っておもしろいね!」

メイナが、笑いながら言う。

「私、あんなにたくさんの人と話すのはじめて」

だろうな。

五〇一六年も遺跡で眠っていたんだからな。

そりゃそうだろうな。

「あゝ、疲れた」

シエラがそういつて腕を回す。

俺の方がもっとつかれたわい。

空は真っ赤になった雲が浮いている。

いいよな、雲。

お前は気長で。

能天気とはまさにお前のことだよ。

空にばやいても仕方ないが空を見るのが好きなのだから仕方ない。

「あ、家ついたね」

「まあ、すぐに詩乃の家に飯くいに行くけどな」

できれば夕食はハンバーグがいいなあ、とか思ったが

スパゲティ大好きな詩乃はそうはさせてはくれないだろうな、うん。

さてと：

非常ベルが鳴る線を切り赤外線シャット装置をつける。

博物館なんて所詮こんなもんさ。

ちよろいちよろい。

仁もつれてくるべきかとも思ったが、これぐらいは一人でやるべきだろう。

仁、気持ちよさそうに寝てたしな。

白い手袋をつけた手で、赤いダイヤモンドを掴む。

レッドバロンだかなんだか知らんがこれは俺がもらっていくぜ。

まず、俺は予告状をだして警備を強化させるなんてアホなことはいない。

面倒なことは出来る限り避けたいからな。

初めての仕事の時、鬼灯のおっさんのがいつてくれた言葉

『レルバル』とPCで打った紙を落として帰ってきたのは失敗だった。

まあ、おかげさまでコソ泥から怪盗にまでランクアップされたんだがな。

好きで、俺は怪盗の称号をつけられたのではないということを皆さんに知っておいてもらいたい。

さて、ぶつは手に入れたしずらかりますか。

防弾制服のエリを直し俺は博物館の出口へと歩きはじめた。

俺はマント見たいな動きづらい服よりもいつも着ている服…

制服で、仕事をしている。

思いのほか警備は薄くこっそりと警備員の後ろに忍び寄ってスタンガンを押し付ける。

「うっ…」

小さい声も漏らさないように手で口を押さえる。

この声を他の警備員が聞きつけるかもしれないからだ。

「ふぁ〜…」

あくびをしながら外にでると、

七月の半ばになった空気が俺の体をつつんだ。

熱くほてった体に心地よい。

さて、帰りますか。

「あ、おっさん、頼むぜ」

ヘッドマイクのマイクの部分にそう、吹き込む。
すると、鬼灯のおっさんの声で

『上だ、今降ろす』

と、応答があった。

鬼灯のおっさんが降ろしてきた梯子につかまり
消音ヘリは静かに日本帝国立鉱物博物館から飛び去った。

「楽勝、楽勝！」

俺は、ヘリの中で鬼灯のおっさんにレッドバロンを渡すと
シートに横になった。

「こんばんわ、波音さん」

「お疲れ、ニーズ」

ニーズがヘリを操縦していた。
俺のためにご苦労様です。

「波音さんを補佐するのが私の役目ですから」

にっこりと微笑しながらそういうニーズがすごいと思う。
尊敬する人のナンバー十のうちにいる。

ピッ。

携帯が夜中の三時を知らせてくれる。

鬼灯財閥の財政を支えるには宝石を売るのが一番らしい。
なにをしているのかは知らないが、今一大プロジェクトを鬼灯財閥
はしているようだ。

その途中で莫大な金が必要らしい。

宝石は闇ルートでまわすため、足はつかないという。

鬼灯のおっさんには世話になっている。

これぐらいはして当然だ。

世間からしたらこれはヤンデレとか言うのかもしれないが
あいにくこれだけは譲れない。

鬼灯のおっさんに「死ね」といわれたら俺は死ぬ。

鬼灯のおっさんに逆らうぐらいなら死んだほうがマシだ。

そう思いながら俺は満月をじつくりと眺めることにした。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

大塔高校今日も愉快(後書き)

ポイント(?) 入れてくれた方ありがとうございます。
お気に入りに入れてくれた方もっ・・・

感動の涙の嵐です!

とまりませんっ!

大炎上

「さて、風呂入って寝るか」

俺が、一人家に帰ってきて呟きながら寝室のドアを開けると

「…おそい…」

シエラの怒りを含んだ声が返ってきた。

「な、なんで、お前…」

まだ起きて…」

俺はまさか起きているとは思わなかったためかなり動揺した声にな
ってしまった。

いや、本当にびっくりした。

つなみに、言っておくと現時刻は三時半だ。

どこかのオタクやゲーマーがようやく寝ようかという気分になる時
刻だ。

なのにこいつーシエラはまだ起きていて

花柄のかわいらしいパジャマを着てふくれっつらで部屋のドアの前
に立っている。

腰に手を当てているので胸が強調されているのを思いっきり見てし
まった俺は

なんか、やばいものを見てしまった気がしてあわてて目をそらした。

「?」

暗闇の中で本当によかった。

顔が赤くなっていたのを自分でも感じていたからな。
大きく深呼吸をして

「まったく…」

なにやってんだ、早く寝ろ」

ようやく、まともに話することが出来た。

睡眠物質を分泌している頭をガリガリかきながら

なぜか怒っているシエラの隣を通して自分の部屋に入る。

まあ、シエラやメイナが来てからは自分の部屋じゃなくなったんだけどな。

俺のベットを挟んで最終兵器姉妹のふとんが下に引いてある。

上から見たら川の字だ。

なんで、シエラ怒ってんだよ、まず。

そんな俺の気持ちを知らずにメイナはふとんに包まって心地よい寝息をたてていた。

部屋のタンスを開け下着などを持って風呂へ行こうと

シエラの横を通ろうとした時だ。

シエラが俺の制服のすそを思いつき掴んだ。

しわがよるだろうが。

どうせなら、ガラス細工品を掴むような手で掴んでほしかったんだが…

まあ、いい。

どっちにしろそんなことをされるのに慣れていない俺は非常にびっくりした。

心臓が飛び出るかとおもったね。

なんでそんな上目づかいなんだ。

お前、いつそんなことを覚えたんだ。

「あのさ…波音…」

な、なんでそんな意味深に…
もしかして、夜の怪しいテンションとかじゃないよな。
落ち着けよ、いいから落ち着け俺。

「ど、ど、どうしたよ？」

あー。

動揺してるのが自分でもわかるよこれじゃ。
なんだろう。

なんか、とっても深刻な告白（？）があるような気がしてならない。
まさか、「好き」とかそういうのじゃないだろうな。
だめだ、頭のねじがマッハで発射されそうだ。
なんか、次の言葉が怖いぞ。

（少しの間）

さあ、来い。

覚悟は出来た！

「おなか減った！」

…。

「…冷蔵庫にあるもん食っとけ」

「アイスしかない」

……。

「ってか、なに？」

それが言いたかっただけなのか？」

それだけのために？

そんなに俺をドキドキさせたのか？

「…う、うん。」

それだけ…だ」

初めの間が気になるが…

ま、どうせどうでもいいことでも考えていたんだろう。

「じゃ、俺風呂入ってくるから」

そういうとシエラはすつと、制服から手を離れた。

その動作にどこかさびしげな感じが漂っていたような気がするが
あいにく俺はそんなことに興味はない。

こういうことは風呂に入って綺麗さっぱり忘れるに限る。

うん。

そうしよう。

風呂でゆったりとくつろぎながら

そういえば、このお湯はシエラとメイナが使った後のお湯だなあ…

とか思っって顔が真っ赤になってしまったのを感じた。

今夜は、どうしてこんなに表情を出す羽目になったんだろうな。

まあ、明日は土曜日ということでは休日だから深くは考えないぜ。

今週も、二日間ぐらいしか学校行けなかったな…

その後、急いで浴槽から出て頭や体を洗って服を着てベットに戻ると
俺の上布団をシエラが使っていて

「はあ…」

ため息をつきながら俺はシエラの上布団を使うことになった。

今日は、土曜日。

休日ぐらいは自分で望んだ時間に起きたいものだ。

だが、最終兵器時計は毎朝七時に絶対に起こす。

絶対に今日と明日は自分の起きたい時間に起きてやる。

恐怖で起こされるなんて、たまったもんじゃなくそれだけは絶対に阻止しなければならない。

「起きろ、波音」

来たな、時計。

俺は疲れているんだ。

だから、俺の眠気を払えたらおきてやろう。

「起きろって言ってんだろう？」

ほら、来たぞ。

頭に、鉄の感触。

これは脅しだけであってレーザーはここから出ないことぐらいわかっている。

いざ、勝負だ時計！

布団を頭からかぶり、さらに防御力をアップさせ要塞と化した俺はさらなる守りを得るため体を丸めることにした。

ふふっ完璧だぜ。

……？

む、なんだ。

なんか、焦げ臭いな…

「うわあっ！

あわわ、やばい！

やばいよ、シエラ！」

「ちょっと、姉さん！

僕一人のせいじゃ…」

なんだろう？

と思って布団をがばっとあげた俺は目の前にまだ小さいが火柱が上がっているのを目撃してしまった。

その中核は…

「俺の教科書がああああああっ！！」

燃えていた。

「シエラが放ったレーザーが教科書に…」

放ったのかよ！！

マジかよ！

撃つなよ家の中で！！

「って、早く消せ、ポケども！」

でないと…

と言いかけた俺はジリジリ…と続く警報の音に閉口してスプリンクラーから噴き出してきた水を頭から思いつきかぶるこ

ととなった。

「まったく、なんでこんな…」

メイナが愚痴をこぼす。
その頭を

「にゃ!？」

思いつきりティッシュの箱で叩く。

「ふふっ……」

いや、まさかこんなことになるとは…」

パカン!!

「ごめんなさい」

シエラが、涙目で謝る。

しっかりと反省してますとかいってるが、反省は遑でも出来る。

「まったく、しっかりと乾かせボケ二人」

シエラとメイナの二人にはドライヤーを持たせ（その電気屋で買ってきた）

扇風機と一緒に本などの紙類に風を送るよう命令した。

家自体はどうしようもなく窓やドアを全部取り外して（壊して）ベットのシーツなどは全部ベランダにて風にゆれている。

まだ朝だから、夜までには乾くと思われるがべちゃべちゃになった電子機器類は

どうしろというのか。

PCとか、携帯とか：

まったくんだ休日だ。

じっとりと額にしたってきた汗をぬぐい

「あちー！」

シエラやメイナと同じように風送り機として首を振っている扇風機の首を

ガギギ：とねじって俺のほうに向けた。

「ずるいぞ！」

波音ばかり！！」

「僕も暑い：

服脱ごうか：

それはやめとけ。

「私も暑いー。

服脱ごうかしら」

ふん。

わるいが、俺はそういうのに興味は：

ってか、それ以前に外で服をぬぐなボケども。

「ばかか、お前ら二人は。

グダグダいわずにさっさと乾かせバカ野郎」

文句をたれる二人を完璧に無視して俺は家の中の日陰に移動することにした。

なぜなら、まだ七月のはじめなのに太陽が乾かすのを手伝うかのように

ぎらぎらと照り始めたように思えて、頭がクラクラしてきたからな。わるいが、君たち愚か者二人はそこでドライヤーを操作しておいてくれたまえ。

「あははははっ！

それは災難だったね！」

まったくだ。

詩乃の乾いた笑い声が食堂に響き渡る。

アレから、一生懸命に乾かしたものは全部カラツカラに乾燥し無事に今夜は野宿することなく家の個室で眠れそうだ。

これも太陽のおかげ。

感謝しないとな。

「だから、ごめんってあやまっただろ？」

「私は許してもらえたよ」

「は？ え？

な、なんで姉さんだけ？」

シエラは頭の上に？を浮かべている。
仕方ない、理由を説明してやろう。

理由？

お前の謝り方には誠意というものを感じなかった。

理由？

お前は素直じゃない。

理由？

なんか、はらたった。

「この三つだ」

「ひ、ひどい…」

詩乃がおもわず小さい声でぼやく。

シエラはちよつとショックだったようで。

ふん、勝手に落ち込んだけ。

そう思って俺は詩乃のシェフが運んできた大盛のナポリタンを見て

また、ナポリタンかよ。

と全身全霊でげんなりした。

「またかよ」という目つきで詩乃を見ると

「文句あるならくうな」と、案の定にらまれた。

にしてもあいからわずひろい食堂だな。

俺の家は椅子四つと正方形のテーブル一つでいっぱいになるっていうのに。

天井はなんかキラキラしたもので覆われてるし壁は純白の大理石に金の模様が入っている。

どこかのお城かと思うぐらい綺麗な食堂だ。

「波音…」

どうした、シエラ。

ショックから立ち直ったか。

「この食べ方がわからない」

こまったように指差す先にあるのはナポリタン。

「ちゅるちゅる吸っとけ」

「こら、波音。」

間違ったことを教えない」

すいませんね。

詩乃がシエラのところにいつてスプーンとフォークを持って
手取り足取り教えているのを微妙に笑いながら俺は見る。

そして、うっかりナポリタンをテーブルシートにつけてしまい
赤くなりながら詩乃に謝っているのを見て

俺は目の前にあるナポリタンをちゃんと礼儀正しく食べ始めた。

inues.

This story cont

大炎上（後書き）

読んでくださっている方々ありがとうございます。

こっちくん、きもいから

「ごちそうさま」

俺は詩乃にお礼を言った後、家に帰るしたくをはじめた。

まあ、正直いってここにごはんを食いにくるだけのためにくるなんて面倒だ。

それに詩乃に悪い気もするしな。

だから、俺は詩乃にいつて食材を家に届けてもらいシエラとメイナに作らせるという

手段をとることにした。

なぜか、知らんが最終兵器の二人は手料理がかなりうまいらしい。

まだ人間だった時に二人とも母親から叩き込まれたという。

うまいこといけば、古代文明の味を味わうことができる。

ということで、次からは詩乃に俺の家に来てもらいいっしょに食べるという

方法をとることとなった。

いや、さすがに一人であの広い場所でもしやもしや食べるって言うのも…

かわいそうだろうか？

うん。

無理やり詩乃を説得して、ようやく俺は帰宅の途へついた。

シエラとメイナは詩乃ともうちよつと遊ぶということなので

俺は一人で帰ろうとお城ともいえる詩乃の家を後にした。

今、七時半だ。

帰宅ラッシュかなにかなのかは知らないがたくさんの車が通る道があり

人通りが多い&クラクションがうるさい。

まさに、公害レベルに達しているので登下校につかっている大通りは使わないことにしている。

うるさいのは俺、嫌いなんだ。

よって自然と人通りが少なくて、街灯すらろくにない裏道を通って帰ることにした。

それにこの道は、星がよく見えてなにかを思い出させる気がしてならないからな。

だが、どうやら今日はそれが裏目に出てしまったようだ。まったく、なんなんだお前は。

「見つけたよ、僕の波音♪」

キモイ。

例えるなら、そうだな。

ゴキブリが水溜りの中で腐ってる感じた。

うん、意味わからんな。

「二度と俺の目の前に出てくるなっていっただろうが。近づいてくるんじゃないやねえ、このホモ野郎」

この言葉で傷ついて引いてくれればいいのだが…

そういうわけにはいかないんだろうな。

なんでこうなったのか。

そう、大体三分ぐらい前のことだ。

「すみません。

ここから、警察署へは…」

と、道を聞いてきた男の人がいた。

俺は機嫌がなかなかグッドだったし、この道に人がいるということがとっても珍しいことなので

正直に答えてやることにした。

警察署：もとい冬蟬の親父の職場は完璧に熟知している。

だって、つかまりたくないじゃん。

警察署の場所を教えてやろうと、後ろを向いて説明をはじめようと思ったら

急に両手をつかまれてしまい

「な、なにするんだ!？」

キリ〇ト教の十字架のあの形になってしまった。

必死に動かそうと思ってもなにかの道具で

一瞬にして俺の手首を止めてしまったようで

凱旋門のあの形をした大きな釘のようなものと考えてくれればいいかもしれない。

凱旋門わかるか？

凹↑こんなやつだぞ？

このくぼみに俺の手首ははさまれているのだ。

ま、おいといて。

そしたら、男が急に笑い出し自分の顔をギュッと掴んで引っ張り始めた。

すると、ベリッという音がして下から新たな顔が現れて

「やあ、こんばんわ」

ホモ野朗登場。

とまあ、こういうことである。

なんかね…うん。

そしてもう一つさっきから言いたいことがある。

「なんで、そんなに近いんだよ！」

息が、かかるぐらいの近さにいるのである。
俺よりもこぶし一つ分ぐらい大きいし。

それに、かなりのハンサム野郎だし。
ちくしょう、うらやましいぞ。

「ふふっ。

ようやく僕が望んでいた展開になったよ」

あわわ：

もしかして、これって俺の人生最大の危機じゃないのか？

とまあ、こうやって今の状況を実況でお送りしているわけだが

内心かなりドキドキしている。

心臓やばいです。

殺されるんじゃないか、俺。

「波音。

伝えておきたいことがあるんだ」

俺の瞳をじっと見据えてくる。

なんか、腹立つな。

こいつから、真剣な話ね。

どうぞ。

「君はすぐに選択しなければならぬ時が来る。

そのときは、迷わずベルカのほうにつくんだ。

いいね？」

どうやら、俺はここからさきは絶対にベルカにつかなければならないように。

「え…？」

急に、凱旋門釘を引き抜いたホモ野朗は俺の手首をしっかりと握りなおして

「この言葉忘れないでね」

真剣な顔で俺にいう。

いつもの微笑はどこへやら。

まだ二回目だがな…

すると、ホモ野朗は手首からも手を離してうれしそうな顔で俺をじろじろと見る。

「な、なんだよ…」

「いや、やっぱり可愛いな♪」

これでも一応身長172cmはあるんだが。

こいつは身長が大体180cmぐらいか。

デカイな。

「ば、バカかお前！

男にそんなこと言われても全然うれしくないわい！」

すると、ホモ野朗はクスクス笑い

「僕の君に対する愛は本物だよ」

…
…

こいつ、実はかなりバカなんじゃないか？
俺という男に必死に愛をささやいてどうするんだ。

「ホモ野朗。

お前は、俺を殺しに来たんじゃないのか？」

前にあったときは殺しに来たっていったよな。
それがなんで、凱旋門釘を取って手首を離す？
さっきの両腕が使えない状態の俺は格好の獲物だったはずだ。
なのに、なぜ殺さない？

「その必要がなくなったからさ。

それに僕の名前は『ホモ野朗』じゃない。

セズクっていういい名前があるんだ」

そういった後、ホモ：じゃなかった。

セズクは、ハッと空を見上げ

「来たか…」

と一言は言ったかと思うと痛そうな顔をして
背中から金属の羽を生やした。
そして

「じゃあね、波音。

次あったときは、その体と心をいただくよ♪」

とにっこりと微笑みながら一言。

その後、すごい速さで俺に近づいてきた。

そして、不意に耳にふっと息をかけた後すごい風圧を残して飛び去っていった。

「…な、なんだったんだろあいつは」

なんで、耳に息をかけるんだよ、毎回。

空をみると、セズクの残した軌跡の後をいくつもの同じような軌跡が伸びていくのが見えた。

星空の中でもうっすら光っており、ぱっと見ると流れ星にしか見えない。

俺は、セズクにふっとされた耳をもみしだき、手首をさすった。

すると、べったりとしたなにかが俺の手に付着した。

「…?」

大通りの街灯まで急いで走っていく。

そして、改めてじっくりと観察した。

俺の手にべったりとついていたもの。

それは…

「血…:…なのか…?」

セズクの血だった。

あいつは、俺を殺そうとしている組織でなにか起こしてしまい今必死に逃げているのではないか。

わざわざ、変装してまで俺に会いに来てくれた。

そして、命を延ばす貴重な時間を俺のために使ってくれたのではな

いか。

「なんなんだよ、いったい」

俺はセズクが消えたほうの空を見上げ一人つぶやいた。

さらに深くなった夜の闇。

シエラとメイナと仁と俺とで来るようにと、鬼灯のおっさんが電話をしてきた。

まだ、九時ぐらいだったので

俺は、『帝国立博物館のダイヤモンド消失!？』とトップに書かれた新聞をゴミ箱にいれて

さっさと家の前にとまっている車にのりこんだ。

その車はたくさんの人がのれるのかどうかは知らないがイメージとしては：

ほら、あれだ、あれ。

いかん、ど忘れした。

なんていったかな。

あのながくくしい車だ。

あの車の中に大きな液晶ディスプレイとPCがつんである。

いわば、動く会議室みたいな感じだ。

その車のなかでおっさんは、アイスを頬張りながらまっていた。ガキかあんたは。

「集まったな。」

次の獲物の説明をはじめろぞ」

どういっておっさんが指をパチンとならすと
ディスプレイが青く光りだし、オペレーターの声が聞えはじめた。
今回はえらく、手の込んだブリーフィングだな。

「では、はじめます。」

超空都市ハイライトにて新しい倉庫が発見された模様。

その中には我々が行っているプロジェクトに必要なマイクロチップ……

超光学記憶媒体のことです。

波音、仁、シエラ、メイナの四人は直ちに超空都市ハイライトに
潜入。

なお、この島は大部分が連合郡が最終兵器として武装をすすめています。

レーダーが取り付けられたりしていた場合やっかいな事となるので
民間機で潜入します。

もし、ばれてしまったら発砲してでも黙らせててください。

そして、異例ですが殺しを許可します。

以上の点を、要注意してください。

出発は明日の十時二十三分発のJATL、10213便です。

準備は念入りにおこなってください」

ハイライトの一部分の断面図があらわれて赤く光る。

そこが、倉庫だということだろう。

意外と深いところかなうって思ったら

浅いところにあってほっとしています、はい。

その後、おっさんがまた指を鳴らすとディスプレイはビューン……と
消えた。

「へっ、今回は結構簡単そうだな」

仁がハイライトのデータを自分のPCに移しながら言った。

俺も、今回は簡単そうだと予想するね。

たまにはこういうのも悪くない気がするし。

「いざとなったらシエラとメイナがいるしな」

と、おっさん。

「血をみるのは嫌だが仕方ない」

俺はおっさんに、この二人は最終兵器だと言うことを言った記憶がないのだが…

あれれ？

言ったか？

言っただけでもベルカ遺跡に行けば自然と増えるもんだから

きっと、最終とはいかなくも何かの兵器にはおもわれているんだろうな。

「じゃ、武運を祈るぜ」

明日の十時二十三分か…

いがいとはやいんだな。

「もう一回言っておくが明日の十時二十三分だからな」

はいはい、了解ですよ。

「十時には波音の家に集合だからな」

十時ですか。

うう。

了解しました。

ちら、と横をみるとハイライトへいけるのがよっぽどうれしいのか
シエラとメイナは喜んでいるようだ。

さて、明日も学校をやすまないとな…

冬蟬や彗人兄さん。

その他いろいろ、が悲しまないかな？

悲しんでいる冬蟬とか想像もつかねえけどな。

あ！

でも俺結構やすんでるから大丈夫かもしれないな。

うん。

T h i s s t o r y c o n t

i n u e s .

こっちくん、きもいから（後書き）

読んでいただいております。
またよろしく願い申し上げます。

大艦隊VS恐怖神 前夜祭

「ハイライト行きの十時二十三分発JATL一〇二二三便発進します」

透き通った声のアナウンスが静かに俺の鼓膜を刺激した。

「こっから、ハイライトまでは大体六時間〜七時間か。
つくのは夕方ぐらいになるな」

仁が、PCの電源を落とし寝る体勢に入った。
俺も朝早くからバタバタしていたので少し眠ろうと目をつぶった。
それと同時に、飛行機がゆっくりと加速するGが体にかかり
ちよっと息がしづらいかな〜とか思ったら、浮遊感が俺の体を包み
込んだ。
ちよっと、うぷ…ってきてしまい、酔い止めの薬を飲んでおけばよ
かったと後悔した。

中央太平洋上。

超空都市ハイライト周辺。

近年稀にみるほどの大艦隊が集結していた。

戦艦八、空母六、巡洋艦三十二、駆逐艦六十五。

全自動照準ミサイルをはじめ、イージスシステムなどの近代科学の
最先端の艦隊だ。

連合郡第十二艦隊。

シエラ

通常「恐怖神」。

これだけの大規模な艦隊だが、負けるかもしれないという敗北感が艦隊全体を満たしていた。

いくら、最終兵器と戦うといっても連合郡艦隊の約5%を占めるほどの

規模のものを動員する意味があるのかという疑問の声もあった。

事実上、この艦隊は先ほど同規模の帝国郡艦隊と戦い

巡洋艦を三隻、駆逐艦を五隻という小規模の損害で打ち勝ったということもあり

全体の士気は敗北感をしのぐほど高かった。

ハイライト真下にある港で弾薬と損害の修理を済ました後

ターゲットと戦うためこうして同海域に戻ってきたのだった。

空を覆うほどの帝国郡側の爆撃機や戦闘機を相手にしてこっちは一機の迎撃機を出さずに

帝国郡の飛行機部隊の攻撃を乗り越えたという事実から対空防御にもかなりの自信があった。

そして、この大艦隊は来る敵に備えてこうして待機しているのであった。

『出来る限り、生きて捕らえよ。

それが出来ねば破壊せよ』

連合郡第十二艦隊に与えられた指令だ。

『最終兵器の捕獲もしくは破壊』

わかりやすく要約するということだ。

これだけの艦隊だ。負けるはずがない。

じつとりと手に染み出した汗をふき取り、第十二艦隊旗艦である戦艦テンバリーナの

C I C（戦闘指揮所）で艦長のルドルフ・アルベルトスは敵が来るはずの東の空に

四十五歳とは思えぬ眼光をむけた。

ルドルフの手元にあるV型とかいった最終兵器モドキが命と引き換えに撮って来た

最終兵器といわれている少女の写真をじっくりと見た後

「ふん…」

ビリビリと破り捨てた。

「勝つのは俺達だ、この悪魔どもめ」

そういつて、ルドルフはレーダーに映る栄えある自艦隊を眺め満足そうに目を細めた。

「Fish or meet？」

「Meet please」

肉の方がうまいし。

機内食なんて、あんまり食べないからどんなのが来るのか楽しみだ。今までずっと鬼灯財閥のステルス機にしか乗ったことないし。

俺、英語話せたぜ、よっしゃ。

「お待たせしました（英語は読みにくいのでここからは日本語で表す）」

「ありがとう」

みると、かなりの量だな。
へえ、いい仕事してますね。

「波音、僕の分は？」

「今来るからまってる」

まったく。
おなかがへってるのかお前は。
あ、そうか。
朝食べてきてないもんな。

「おまたせしました」

「きたぞ、ほら。
食え」

「言われなくても、食う。
いただきます」

食い気やべえな、おい。
ふと、周りを見渡すと乗客はパラパラとぐらいしかいない。
その中で、高校一年生で学生服なんてもっと珍しいよな。

私服が学生服なんだからしかたないだろう？
俺、センスないし。

前カラオケ行こうとか言われたので私服でいったら

「うわっ、ダサッ！」

という、詩乃や冬蟬の反応がしっかりと心に残っているので
二度と、私服なんか着るかと心に誓っている。

ふと、時計を見ると十二時半。
なるほど、お昼どきだ。

シエラとメイナは飯を食いながらわざわざ窓がわまで移動して外を
見ている。

そんなに珍しいもんか？

「私達の時代はあちこちに人工島とかがあつたから空が青いなんて
知らなかったの」

そ、そうか。

仁は仁で、目の前にほかほかのご飯が置いてあるというのに寝息を
立てている。

おこそうかとも思うが、寝ていたほうが静かでいい。

俺は、フォークやスプーンよりも箸の方がたべやすいといって
スチュワーデスさんにわざわざ箸を持ってきたももらった。

すいませんね、お姉さん。

ほかほか機内食をぱくりと一口。

うん、うまい。

シエラとメイナはフォークとかスプーンを

ガスガスと恨みがあるのかよっ！とつつこみたくなる勢いで突いて
いる。

おちつけ、ひとまず。

お前ら、俺が思いっきり叩き込んだ箸の使い方を忘れたというのか……泣けてくるな。

「ふぁ……」

暇だ。

正直、寝る以外にすることがない。

あふ……眠い。

ひとまずアイスを四時位にもらおうかな。

それまで寝よう……

あ、ごはんど馳走様でした。

午後三時五十五分。

そろそろ目標が見えてくるはずだと思い、ルドルフはレーダーをにらみつけた。

心配していた低気圧が来る様子はなく、波は穏やかで絶好の天候といっても過言ではなかった。

暗い上に、光と言えばコンピューターや制御装置の赤や緑のC I Cの中は

クーラーが聞いている涼しいとは言っても頼まれでもしない限り好きにはなれないと

ルドルフは思っている。

やっぱり、海が見えるブリッジ（艦橋）が一番だと思い

「外の空気を吸ってくる」

と一言、部下に残しC I Cからブリッジへと上る階段へのドアをあけた。

少し歩くとすぐにブリッジだ。

「ん…」

大きく伸びをして、深呼吸をする。

太陽は夕日となり、海を赤く染めている。

「これからおこる戦いでの、最終兵器の血だ。

俺達が流す血ではない」

潮風がルドルフの鼻をくすぐり改めて自分の使命の大きさを思い出しこれから怒る戦いに胸をおどさせる。

「艦長が死ぬときは我々が負けるとき」

これは、部下が冗談でいったことだ。

ルドルフは今まで数々の帝国郡と戦ってきたが一度も負けたことがなかった。

そのことが、余計に部下の信頼をあつめよりたくさんの部下が来る。それほど、ルドルフがすぐれた指揮官だった。

「…?」

夕日にきらりと何かが反射し、猛ダッシュでC I Cへ駆け下りたルドルフは

あぜんとしているオペレーターのマイクを奪い取り

「来たぞ!!」

第一種戦闘配備!!」

と吹き込んだ。

「ふふふ、アイスだ」

俺は、さっき運ばれてきたアイスを手にとり眺めた。
なにを隠そう、アイスが大好きだ。

さて、いただきま…
というところで

「「波音!! 仁!! 伏せろ!!」」

と、最終兵器二人組みに押さえつけられた。

「なにする…」

と、顔を上にあげ俺は二人に怒鳴ろうとしたが血相を変えてまで
俺達二人を押さえつけたのには意味があるのだろう。

と、俺の目の間に封すら開けていないアイスが飛び込んできた。

「アイス!!!」

「あきらめろ、バカ!」

とシエラに怒鳴りつけられたと思うと同時に
飛行機にすごい衝撃が走り、俺達は壁へと叩きつけられた。

「目標に命中！」

オペレータの声が艦隊に響き渡ると、あちこちから歓声が聞えてきた。

「心配するほどのもんじゃなかったな」

ルドルフは副艦長にそういつてブリッジへと階段を登った。

CICにずっといるつもりはさらさらなく、人の死というものは機械などで確認するものではないと思っていたからだ。

ミサイル巡洋艦、コンハッタンから放たれた艦対空ミサイルは見事に民間機に命中した。

ミサイルは民間機の右翼根元にあたり、そこが燃料タンクになっていたのか大爆発した。

右翼の根元からぽっきりと折れた民間機はきりもみ回転しながら次第に高度を下げていき

海面に落ちる前にメインタンクに引火したのかさつきよりも大きな爆発を起こし

一瞬太陽をものぐ光を発した後、あとかたもなく消え去った。

そこに飛行機があったと思われる跡は、海面の大きな波紋と

ポツポツと浮かんでいる多数の荷物、そして海面に直立したまま沈んでいく右翼だけだった。

「…戦ってみたかったのだが…」

一瞬にして終わったか…そう続けようとしたルドルフにオペレータ

ーの金切り声が飛び込んできた。

「じ、上空に大きなノイズ反応！！
な、なにかいます！！！」

その言葉はルドルフの萎えかけていた気持ちを高揚させるのに十分だった。

「くくく…そうこなきやな」

そういつて、ルドルフは足元においてあった双眼鏡をてにとりノイズが観測されたほうへと向けた。

「アイスー！！！」

「しつこいぞ、バカ！」

ううう…俺のアイス…

爆発する寸前にシエラが壁を破壊し、俺と仁を抱えたメイナが飛び出した。

一泊遅れてシエラも飛行機から飛び出し、そのご大爆発をおこした飛行機の陰に隠れて
プカプカ浮いている飛行機の破片のうえに降り立った。

「姉さん、今度は僕が行っても？」

シエラがメイナに問う。

「ええ、いいわよ。」

行つてらっしゃい」

メイナは着地の際にぬれた靴を片手でぶらぶら揺らしシエラに微笑んだ。

まるで、おもちゃで遊んでいる子供をみる母親のような目で。

「じゃ、行ってくるな。」

波音、暴れるなよ」

あばれねえよ、バカ野郎。

静かにここからお前の奮闘振りをみさせてもらうさ。

バサツという表現がふさわしいぐらい勢いよく鉄の羽がシエラから突き出す。

そして、最終兵器の力を使うという印：

シエラの左目が赤紫から完璧な赤になりうつすら光はじめる。

これは、研究員から見ても今は最終兵器の力をだしているのかそうではないかの

判断の基準となったと二人は語ってくれた。

ただ、俺からしたらそれが不気味で仕方ない。

眼帯をつけていて欲しかったのだが：

「ほら、シエラ。」

眼帯、わすれてたわよ」

メイナがかばんからポイツと、シエラに眼帯を投げる。

「ありがとう、姉さん」

それを左目につけた後、シエラは俺達を見回した後

「ん…」

小さく唸ったかとおもうと、すごい風圧が俺達を襲い
巻き上げられた海水が俺の頬をうった。

風がおさまった後、目を開けると流れ星ともまちがう光が
大艦隊へと飛び掛っていくのが見えた。

「ノイズさらに強力になりました！

す、すごい速さで来ます！！

マ、マッハ五は…あるかと！」

ルドルフはオペレーターの声を聞きながらレーダーをひたすらにら
みつける。

もう、駆逐艦の何隻かは交戦しているようで鉄の咆哮が腹に響く。

「ノイズが取れました！！

こ、これ…いやこの娘が最終兵器…？」

ルドルフがレーダーからオペレーターに目を移し

攻撃するように呼びかけようとマイクを引き寄せたとたん

「駆逐艦セニョール沈没！！」

別のオペレーターから味方艦の沈没知らせがルドルフを凍らせた。それと同時に、物が爆発することを知らせる、エネルギー衝撃波がCICを揺らした。

突然の敵の襲来に咄然となっていた歓待もすぐに気を取り直しシエラをめがけて対空機銃やミサイル：ありとあらゆる兵器が火を噴きはじめた。

シエラはパンソロジーレーダーを全開にした。すると、かぞえきれないほどの艦が頭に写る。その一つを選択すると、眼帯にその艦の映像が映し出された。

「なんて数だ…」

それらと戦うのかとおもうとぞくぞとした快感が背筋を走った。

艦隊上空で対空砲火をくぐりぬけながら最強のレーザー兵器「光波共震砲」を

作りあげるために集中しはじめた。

だが、レーダーの隅にうつっていた大きな艦から小さいたくさんの物―戦闘機が

つぎつぎと発進しているのをみてしまった。

「ちっ…」

地上と空中からの同時攻撃を防ぐのは安易ではないと最終兵器としての本能が語る。

すこしでも後の負担をへらそうとつぶすのが比較的簡単である艦…

最終兵器を殺そうとしている士気の高い艦さえつぶせば士気の低い艦は問題にはならない。

そう判断したシエラは艦対空ミサイルや機銃を放ちはじめた艦に襲いかかった。

inues.

This story cont

大艦隊VS恐怖神 前夜祭（後書き）

どうかこれからもよろしくおねがいします。

視点が変わる仕様はそのうち直したいと思います。

何しろ二年前に書いたもので……。

ごめんなさい。

大艦隊VS恐怖神 昼中祭

《来たぞ!!》

《撃ち落せ!!》

シエラは目の前にある艦を躊躇することなく光波共震砲で破壊した。

光波共震砲は、熱光電子という電子の一種をお互いにこすりあわせることによって

強力な熱を放つレーザーである。

超空要塞戦艦の主砲にもなったベルカ帝国が最後に発明した最強のレーザー兵器だ。

このレーザー自体は爆発とかの力はなく、船体などを溶かしながら突き進み

やがて貫通するという貫通性が優れたレーザーになっている。

可変式鋼鉄細胞、つまりシエラやメイナを殺すことができる唯一の武器で最終兵器が

暴走した時など、緊急用につくられた兵器でもある。

オレンジ色の閃光のまわりを小さな周辺光がまわりつくように囲み共震しあって、約十〜十五万度もの高熱を発することが出来る。

撃ち出したときは、常温とおなじぐらいなので砲身が溶けるおそれもなく

しばらく飛んでいったら、やがて熱をうしなうという性質から安全装置のついた兵器ともいわれた。

それを、左手につけたシエラはそらを覆うほどの対空機銃や高角砲の隙間をみつけては

とびまわり、一瞬の隙を狙ってレーザーを撃ち込む。

ミサイル駆逐艦や巡洋艦から放たれたミサイルなどは

右手のレーザーでさつと一掃して、次のミサイルの発射準備にはいつている艦に

左手のレーザーを何発も、何発も叩き込んだ。

遠くから見ても圧巻である。

爆発音がなりひびき、戦艦や巡洋艦から弾が放たれた音が聞える。

時たま、オレンジや赤の閃光が空から地上へと走り、空中での爆発もしくは、海面上で爆発が見える。

シエラ

「恐怖神…」

俺は思わずそう口に出してしまった。

それほど、今俺は啞然とさせられている。

「ふーん、結構がんばるなあ」

メイナが頭に手をあて日差しをさえぎりながら言う。

それって苦戦してるってことなのか？

「ん？」

いや、ただ楽しそうだなあ…と思って」

楽しそう…か。

俺は人に死をあたえるなんてたいそうなことは出来ないね。

ま、鬼灯のおっさんがどうしてもっていうなら殺しもするけどさ。

「お、また一つ沈めたね」

そういうと黒い煙がもうもうとあがっていくのが見え
エネルギー衝撃波がビリビリと伝わってくる。

ってか、メイナも今、パンソロジーレーダーを使ってるのか。
便利なもんだな、それ。

「疲れるけどね」

そうなんだ。

ま、見えない俺はシエラの勝利を祈るだけだ。

―勝てるよな？頼むぜ、最終兵器。

《右舷大破！》

《浸水状態、赤に移行！！》

《弾薬庫浸水！》

ルドルフは無線から次々と飛び込んでくる艦隊の損害状況を理解出来ずにいた。

「この艦隊に勝てるものか！」と何度も横で爪を噛みながらつぶやいている

第十二艦隊司令の存在はかなり薄く、ルドルフはいままで無視していた。

部下からの報告によれば、

沈没が、駆逐艦三十五、巡洋艦二十、戦艦二で

大破が、駆逐艦十、巡洋艦五、戦艦三、空母二となっている。

小破や中破などですんでいるのは士気が低くあまり最終兵器に攻撃しない艦達だ。

最終兵器は確実にダメージを与えられるところ：

例えば、弾薬庫や燃料室、機関室にオレンジのレーザーを正確に撃ちこみ

誘爆させて、中から壊し、大破もしくは爆沈にまで追い込んでいる。

「くそ…」

CICの壁を叩き、ルドルフは床に崩れ落ちた。

ミサイルが敵に命中したかと思うと、ミサイルを吹き飛ばし飛んできたレーザーで

ミサイルを撃った艦が爆発しているという現象も珍しくはなかった。すれちがいざまに、何発も何発も打ち込まれた艦が中から爆発で吹き飛び、二つに折れて海中へと没していき

運良く機関室など致命傷になる場所にあたらなかった艦も

指揮系統が切れたり、排水ポンプがこわれたり、多大な浸水があったりと

艦の運営に大きな支障をきたし、沈没したのときほど変わらない『大破』となった。

敗北感で埋められたルドルフの頭に

「敵が来ます！！」

オペレーターのコイン切リ声が飛び込んできた。

「敵…か

恐怖神はわれわれのことではなくあいつのことだったようだな、

副長？」

ルドルフは、故郷の妻と娘の顔を思い浮かべ

「すまない、おみやげは無しだ」

と、呼びかけた。

「ええ、どうやらそのようですね」

どこかしらまだ幼い副長はルドルフに今回も異論を唱えることなく同調した。

ルドルフは一心に「死にたくない、副長を、この艦のクルー達も」
と思い一心不乱に打開策を探す。

だが恐怖神は待つてはくれなかった。

再びどこかで爆発が起こり艦が沈んでいく悲鳴が海に響く。

そして次は己の身と覚悟して目を瞑ったそのときだ。

「来ました！

味方戦闘機部隊です！！

敵が進路をかえ、戦闘機部隊に向かっています！！」

助かった…のか…？

ルドルフは、目を開け、レーダーを見た。

敵…シエラを現す緑の光点が自艦から急速に離れていき

その先にある、蜂のような数の味方をあらわす青い光点の大群につ
つこんでいくのが見えた。

「今のうちに体勢を立て直すんだ！！

急げ！！」

ルドルフの頭は急速に冷え、土気の低い艦にゲキを飛ばしながら再集結の命令を伝えた。

横で、司令がおたおたしているがしったこっちゃない。

むしろ邪魔だ。

冷静になったルドルフの頭は、シエラへの確実な反撃の方法を考えはじめていた。

ヒューン……とたくさんの鳥の大群が襲ってきたみたいだ。

鋼鉄の翼にたっぷりのミサイルを取り付けた戦闘機部隊は目標――。シエラに一齐に襲い掛かった。

「ちっ……」

飛んできたミサイルを一瞬で通常に戻した右手で掴み横をすり抜けた戦闘機へと投げつける。

グアァー！とミサイルが爆発し、火達磨となった一機の戦闘機は海面へと火の尾を引きながら

落ちていき、水柱を作った。

「にしても……」

数が多すぎる。

左手を、戦闘機などを破壊するときに使うレーザーに変えて目の前の鉄の鳥の大群に襲い掛かる。

だが……

「くっ…」

激しく動いてもすぐにロックオンされどこからかミサイルが一斉に飛んできて

味方への被弾を気にせず機銃を乱射してくる。

正直言ってキリがない。

パンソロジーレーダーで見える限り軽く四百を超えているであろう鉄の鳥たちは

少しでも隙をみせたらはげしく襲い掛かってくるに違いない。

「うっ…」

また来たミサイルを弾き飛ばし爆風から逃れるべく横に高速で移動する。

いい加減イライラが蓄積してきたシエラはいつきに鉄の鳥を吹き飛ばすため鉄の羽に力を蓄えはじめた。

「お、来るわよ！」

メイナが目を細めて見たところはさっき戦闘機が飛んでいた方向だった。

「なにが来るって言うんだよ？」

防水仕様もあるPCをまたカタカタやりはじめながらいった仁にメ

イナは

「バカね

さっき言った衝撃波散弾レーザーに決まってるでしょ？」

言っただけ？

いってないよな、お前。

「ま、いいのよ、それは」

そうですか。

「なんでくるってわかった？」

俺の素直な疑問である。

いや、だってね…

しりたいでしょ、普通は。

ってか絶対言ってるだろ。

「簡単よ。

シエラの背中の鉄の羽が青く光りはじめたら力を集中させている
ということ。

大体二分ぐらいしたら、ブワッってすごいのが見えるんだから！」

なんで興奮してるんだよ。

俺は、人が死んで楽しむなんてことは絶対にできない。

ここが、人と最終兵器との観点の違いだろうな。

ニコニコとしながら「見逃すなよ！」といわんばかりに空を指差し
たメイナは

眠いのかあくびを一つ、二つ。

なあ、教えてくれ。

俺はいつまでここにこうやっていればいいんだ？

「再集結完了しました！」

「ん、ごくろう」

ルドルフはのこった艦を集めて一箇所にとめることにより
将棋で言う、アナグマ戦法をとることにした。

攻撃を控え、防御をだけを大幅にアップさせる戦法だ。

「くっ…」

敵の攻撃パターンが少なすぎて、予想ができない。

せめて、敵がどのような技を使ってくるのかどうかぐらいは知れた
らいいのだが…

と、考えたルドルフの頭を嫌な予想が横切る。

「まさか…な…」

まさか、そのためにここまでの大艦隊を使うとは思えない。
口に出して確認するまでもない。

「敵の攻撃パターンを知るために、我が艦隊を使うわけ…」

一人でさっきからブツブツの呟いているのを見かねたのか副長が

「は？」と、疑問の目を向ける。

副長に気にするな、と言おうと肩を叩いた瞬間

「味方戦闘機部隊が敵を我が艦隊上空まで誘導を完了しました！」

その声を聞き、戦況が自分の思い通りになっていると思ったルドルフは

敵へ向けての一斉攻撃を加えるためマイクに手をのばした。
が…

ズドウウウ…

と、大きな爆発音を上空で聞きパニックになったルドルフは
状況を確認するため、C I Cから飛び出しブリッジへと走り出して
いた。

ブリッジのドアを思いっきり開けガラスを通してそらを見る。

「っ!？」

あれほどあった戦闘機が一つも見えなくなっていた。
太陽がルドルフの寝不足気味の目を刺激する。

《どうした、なにがあった!？》

《こちら空母ナルリアーナ戦闘機部隊、何があった!？

応答しろ、おい!》

《こちらミサイル艦ピググラトだ!

太陽が…青い太陽が戦闘機を飲み込んだようにみえたぞ!》

味方の無線が消えた戦闘機部隊に呼びかけられる。
何が起こったのかルドルフ自身も判断できなかった。

「軽く四百を超える戦闘機が…消えた…?」

と、ブリッジの天井に何か硬いものが何度も何度もぶつかる激しい音がする。

思わず不安げに天井を見たルドルフの目の前でガラスをぶち破って黒い鉄板が降ってきた。

ブリッジ内のパイプ類や機器を曲げたり壊したりしながら止まった鉄板には

連合郡第十二艦隊航空部隊所属を現す『A I R S I E E R 1 6
5』という文字が白くペイントされていた。

「ふう…」

一気にシエラの周りを飛び回っていた戦闘機部隊は
衝撃波散弾レーザーの広い散布界でほとんどを撃墜した。

後は、残りの艦隊をつぶして終わりだな…

戦ったときにはまだしっかりと照っていた太陽は明日へ向けての準備のためか

光を次第に弱くしていき、海は血の赤から紫へと変わりつつあった。
残りの艦を片付けようと汗がにじんできた髪の毛をかき上げふと下を見ると

さっきまでばらばらだった艦隊が再集結していた。

「ちっ…」

ミサイルの爆風で服がぼろぼろだ…

上着を脱ぎ捨て、靴や靴下も脱ぎ捨てる。

そして、シエラは残りの艦隊を壊滅させるためにスピードを上げた。さっきよりもすさまじい対空砲火をくぐりぬける。

だが、チクツと左腕に痛みが走り、弾が左腕をかすったのをシエラに教えた。

「なあ、助けなくていいのか？」

俺は青い光が空を覆い、今までうるさかった飛行機の音がやんだ時をはかってメイナにたずねる。

空は沈没や大破した艦からわきおこった煙で黒いはしらが何本も立っているようだ。

メイナがいうにはまだ海面にはたくさんの人が浮き沈みしているという。

甲板からこぼれおちたり、中から爆風で外に押し出された人ばかりだろう。

中には手足がちぎれてもなお、生きようと必死にもがいている人もいるという。

ここは、戦場で情けは無用などと言うが目の前で人が生きようともがいているのに

助けがないなんて逆に耐えられない。

ましてや、戦艦などから流れ出たオイルに火がつき、

その火の中で人が焼かれながらも生きようともがいているなんて…

生々しい現実。

あの鋼鉄かの棺桶の中には沢山の人間がいてそれぞれに家族がいる。それを一瞬で消し去っていく最終兵器。

俺は今地獄をみているのだろうか。

コレが本当の地獄なのだろうか。

空に向かって吐き出される弾丸。

それをイージスで曲げながらシエラはイージスを強化した壁のようなものを作り上げる。

《う、うわああ！！

な、なんなんだよ！！

ちくしょう！！》

パンソロジーレーダーが拾う、敵の悲鳴が心地よい。

思いつきの速度でシエラは真下にある巡洋艦にイージスの壁を作りながら突っ込んだ。

艦橋や、甲板、CICなどをつきやぶり、船の背骨ともいえる竜骨をくだけ船底を突き破って外に出る。

けっこう、体に負担がかかるがこの方法は確実に敵艦を沈めることができる。

《こ、こちら、ミサイル巡洋艦パスカディーム！！

敵の体当たりを食らった！！

操縦不能！！

くそっ、あいつすれ違いざまに弾薬庫に火をつけていきやがった

!!

爆発するぞ!!

総員退艦!! 総員退か…》

今、つつこんだ巡洋艦から旗艦への通信が途切れ新しい黒煙の柱が追加される。

すこし深く潜った後、再び勢いをつけて、別の艦の船底へと弾丸のように突っ込む。

艦をつきぬけ、艦橋をへし折り空中に出たシエラに戦艦の四十二センチ六十口径砲が火を吹いた。

「痛っ!」

人の身長＋αの大きさの砲弾がシエラに空気を切り裂きながら突っ込む。

シエラは本能的に右手を突き出し、砲弾を受け止めようとする…が砲弾は思いのほかやわらかく右手につきささると同時に爆発した。

あまりの事に思わずイージスを緩めていたシエラの体を破片が容赦なく切り裂き

爆風が皮膚を焦がす。

血が、パタパタツとながれ結構痛いな…とシエラは顔をしかめた。

今、弾を撃った戦艦の第一砲塔のほかに二つある砲塔も効果ありと見たのか

旋回をはじめ、シエラへと砲門を向ける。

今の戦法に活路を見出したほかの艦も戦艦に続けといわんばかりにそれぞれの主砲を向け

シエラへと照準をあわせる。

《撃て!!》

と、パンソロジーレーダーが敵の無線を拾ったが思ったより傷が深いシエラは

とっさに反応することができなかった。

数え切れないほどの砲弾が獲物へと襲い掛かる鷹のようにシエラへと襲い掛かる。

左手が破片で機能停止しかかっており

さすがにちよつとやばいな…という危機感がシエラを駆り立てた。

高速で飛び砲弾をかわすが次から次へと襲い掛かってくる砲弾。

「ルドルフ大佐、もういい加減に…」

「司令、黙っていてください。

これは我々の戦いなのです」

「もういい、もういいんだ、ルドルフ大佐！！

データは十分に取れた！！」

そういった司令はしまったとばかりに口を押さえるがルドルフは今の言葉を聞き逃さなかった。

やっぱりそうか…とルドルフは心の中で嘲笑し、レーダーに映る最終兵器を見ながら

また、味方の光点が一つ消えるのを見てしまった。

CICがゆれ、司令が転びそうになって机の上の海図を破りそうになったりコーヒーがこぼれたりしたが

もう誰も気にせず、レーダーもしくは自動照準機を見つめる。

「なあ、みんな。

このまま撤退したいか？」

思わず、全艦隊に聞えるマイクのスイッチをいれルドルフはこう吹き込んでいた。

「撤退したいやつは撤退するがいい。

だが、俺と戦うっていうやつは俺と一緒に勝とう。

ここからは諸君の自由だ。

好きにしてくれ。

撤退するとしても上空のあいつが無事に帰してくれるとは思えないがな」

しばらく間があったあと、無線機がガガガ…と鳴り始めた。そして

「こちら、巡洋艦ミケトール。

ここまで味方をやられその挙句撤退なんて…

世界の第十二艦隊の名が泣くってモンです！

我々はあなたについていきますよ！

我々の命、あなたに預けます、ルドルフ艦ちよ…」

ブツツ！と、無線が切れると同時に

「巡洋艦ミケトール、撃沈！」

とオペレーターの声が響く。

ミケトールの船体が鉄の悲鳴を上げ海水を押しつけ沈んでいく。生存者はなし。

ルドルフは思わず敬礼してごくろうだったと心で巡洋艦ミケトールの英霊達に呼びかけた。

「こちら、空母モントリアル。

我々は大切な乗組員で仲間だった航空機部隊をあいつに落とされた。

ゆるすわけにはいかない。

艦長、勝ちましょう！」

その放送のあいだも、どこかで大きな爆発音が響きまた一隻味方が沈んだことを知らせた。

ポン、と肩に手が置かれ振り返ると副長がにっこりと笑い

「目に、ものを見せてやりましょう、艦長。

我々こそが、本当の『恐怖神』だと……」

「……そうだな……」

ルドルフは帽子を深くかぶり、CIC内を見回した。

そして、最後となる突撃の命令を下すためマイクを手にとった。

「いくぞ……！」

我々は絶対に負けない……！」

そう吹き込むと艦隊全体から歓声が沸き起こり、艦隊が一つの生き物として動き出したようだった。

シエラめがけて、さっきよりも正確に弾が飛んできて、ミサイルが次々と命中する。

まだ、戦う意志があるのか……とシエラは内心おどろきならその士気をへし折るまでと次々と艦を沈めていった。

ある艦は二つに折れ、またある艦は大爆発で膨張して外板を吹き飛ばし

炎上しながら沈んでいった。

だが、どの艦も沈みきるまで殺意を失うことはなくそれがかえってシエラの殺戮欲を刺激した。

太陽が沈みきった同海域は火が燃え盛っておりとても明るく

月すら、出るのを遠慮しているような明るさだ。

あちこちで兵器が爆発し、艦の上では機銃の火がちらちらと照る。

飛んできた弾をイージスで防ぎながらも疲れにより次第に防げない弾が出てきてそれがシエラの体を

次々と傷つけていった。

シエラの力が弱ってきているのは見てわかった。

左腕が機能停止一步手前なので、左側にイージスがはれないのだ。

だが、最終兵器という名前はだてではなく次々と艦は沈んでいった。やがて、残るは旗艦であろう戦艦一隻だけになりその横ではさつきまで

シエラの攻撃を何発も何発もその巨体に受けながらもたくみにバランスを調節しながら

隙がない対空気銃の嵐を築いていた戦艦の艦首がいくつにも碎けた船体にひきずられ

海中に没していくところだった。

ここまで、自分を相手に戦ってきた艦隊の旗艦の艦長を見たくなりふとした思い付きでシエラは旗艦の対空気銃の嵐を潜り抜けながら甲板に着地した。

「敵が第一甲板に着陸しました!!
いま、戦闘員との戦闘を繰り返しています!!」

オペレーターがルドルフの方を向いて言った。
その報告にそうか…と答えルドルフは頬についた司令の血をふき取った。

拳銃についた血もふき取り、撤退の言葉を連呼した司令は胸に艦長じきじきに鉛弾をプレゼントされ、血溜まりの中に沈んでいる。上甲板でサブマシンガンがぐもりながらも唸っている。

悲鳴、甲板にばらばらになった肉が四散する音。

それらすべてが静かなC I Cの中にいる艦長の耳に入ってくる。
この艦はもはやルドルフの体そのものといっても過言ではなかった。
そしてサブマシンガンや悲鳴さえ聞えなくなってきたとき

「今まで…ごくろうだった…」

ルドルフはぼつりとC I Cのみんなにそういつて全艦放送に切り替えた。

沈んでいる戦友たちにも聞えるように…

「今まで本当にご苦労だった。

現時刻をもって、諸君らの任務を解く。

生き残るも死ぬも諸君の好きなようにしてくれ。

最後に、諸君らは本当に…海の漠だ」

マイクのスイッチを切り、C I C全員と握手したルドルフは椅子に

どっかりと腰掛けた。

天井からパラパラと破片が落ちてきて、機器にあたり乾いた音をたてる。

最終兵器と戦うため銃を取り出したオペレーター達は戦場に赴こうと席を立った瞬間に

上から静かに落ちてきた天井につぶされて絶命した。

CICの天井は砲撃などにも耐えられるよう頑丈に分厚く作られておりそれが災いとなった。

天井につぶされた、機器から火花が飛び散り、配線からショートの煙が昇る。

二酸化炭素消化装置も壊れてしまったのか作動せずさっきまで艦中に満ち溢れていた

部下達の生気はもう感じられなくなっていた。

あまりに突然のことで、ルドルフは啞然としたが煙にひそんでいる気配をしっかりと感じていた。

「俺一人が残ったというわけか…」

こいよ、小娘…」

煙の中に話しかけると天井の穴からさっと、写真で見たとおりの娘が降りてきた。

「お前ごときに我が艦隊が…全滅…か…」

ルドルフはそう言って、クックックと自分に嘲笑した。

悲しくもなくうれしくもなかった。

「一つ聞く」

ルドルフの鼓膜を思いのほか優しい声が刺激する。

あまりのやさしさにルドルフが驚いたくらいだ。

「なんだ？」

ポケットから銃を取り出し、ルドルフは最終兵器の頭へと銃口をむけた。

「なにが知りたいんだ、恐怖神？」

「なぜ…なぜ逃げなかった？」

シエラ目の前で銃を突きつけられてもピクリとも反応せずに眼帯で隠れている左目と右目でルドルフの目だけを見つめた。

「なぜ、逃げなかった…か…」

撃鉄を起こし、さらにシエラへと狙いを定める。

「俺は戦いには負けた。

いや、我が艦隊…か。

だが、連合郡自体は勝った。

ただ、それだけのことさ…」

ルドルフは、そういつて引き金を絞った。

故郷の自然が見え、妻と娘の姿がぼんやりと脳裏にうつった。

ドン！！

たった一隻だけのこった第十二艦隊旗艦、戦艦テンバリーナに銃声がとどろいた。

それは、終局の鐘でもあり火の海に響き渡っていった。

i
n
u
e
s.

T
h
i
s
s
t
o
r
y
c
o
n
t

大艦隊VS恐怖神 昼中祭（後書き）

ありがとうございます。

まだまだ続きます。

読んでくださりありがとうございました。

大艦隊VS恐怖神 終夜祭

「データが届きました、長官。
再生機にかけますか？」

日本帝国連合郡本部七時二十三分。
第十二艦隊からの最後の通信とともにデータが送られてきた。

「長官？」

秘書が心配そうにやってくるのを見ながら男は大きく息を吐き出した。

「もしかして、第十二艦隊を使ったことを悔やまれているのですか？」

男は頭を掻きながら窓から外を見渡した。
夜となった空はたくさん星がキラキラとまたたいていて
いつもの倍以上に星が綺麗に見えていた。

「ふん…」

窓から目をそむけ秘書の方へと向き直る。

「発射された使い捨てのミサイルの心配をするやつがどこにいる？」

男は、あくびをしながら「後でみるからおいておいてくれ」と秘書に伝え下がらせた。

「ルドルフ君、お疲れ様だった。
これで、君は用済みだ」

秘書がおいていったUSBメモリを手に取りにやりと笑った男は新しいタバコを取り出して火をつけ、PCにUSBメモリを差し込んだ。

V型最終兵器もどきの
セズク・KT・ナスカルクの逃走のせいで
ちよつと憂鬱な気分だったがこれで挽回することが出来そうだ。
そう、男は思い再生機の再生スイッチを押した。

「くっ…」

床に血が流れ落ちる。

ルドルフは、腹に三発ものレーザーを食らい床に倒れた。

新しい血溜まりが床に広がり、自分の血でルドルフの頬がぬれる。

放たれた銃弾はシエラが右手で弾き一瞬の隙についてルドルフへとレーザーが三発突き刺さった。

全身から力が抜け、筋肉が弛緩する。

「これで…最後…か…」

ルドルフはシエラの方へ向きよろよろと右腕を伸ばした。
握手をしようということなのだろう。

「あ、ありがと…う…」

シエラはやさしく、ごつごつした漢の手をにぎった。

ルドルフは何年も前にあった帝国郡の爆撃により家族と故郷を失った。

そこから、今までずっと復讐のために一生をささげてきたが：

最後に、人生の大半をともにすごしてきた戦艦の心臓部ともいえる場所です息を引き取った。

シエラが握っていた右手がずるつ、と床に落ちる。

満足そうな顔で死んだルドルフを見た後、艦長の帽子を拾い上げ頭にかぶせてやる。

静かに翼を広げたシエラは、C I Cの天井を突き破り艦橋をへし折って上空へと飛び出した。

そして、左腕のレーザーを何発も機関室へと叩き込む。

アレほどしつこかった機銃は一つも唸ることなくただただ一人としていなくなってしまった

戦艦テンバリーナにしがみついているだけだった。

初めはゆらゆら揺れていた戦艦は小爆発をおこし、煙突から煙を噴出したかと思うと

甲板をつきやぶり、爆発で一瞬、艦が浮き上がるほどの大爆発を起こして

艦長とその部下達とともに海へと没していった。

多くの戦友達がそれを包み込みやわらかくそして雄大に最後の第二艦隊で

旗艦である戦艦テンバリーナは姿を消した。

シエラはそれを見届けた後、波音の元へと帰るためスピードを上げた。

一言言わせてもらえるか？

寒いんだが。

いくら、赤道直下だからってぬれた服と夜の風は体に悪すぎる。ふっ、と明かりが照り大きな爆発音とともにきのこ雲が上がる。

「決着、ついたっばいね」

メイナがそういつてあくびをした。

シエラ、勝ったのか：

あの艦の旗をみるかぎり、連合郡の所属だったことは間違いないだろう。

そして、最終兵器を捕獲もしくは破壊するためにここまでの大艦隊を導入したに違いない。

俺は、また因果な戦いにまきこまれたってわけか。

「なあ、じ…」

仁に話しかけようと思った矢先に俺をすごい風圧が襲った。

風圧にまきあげられた海水が再び俺達を直撃する。

すまん、もう一言言わせて欲しい。

寒いし、冷たい。

せっかく乾きかけた服がまたぬれてしまった。

「ただいま」

おう、お帰り。

頼むから次はもう少しおだやかに降りてきてくれ。

「楽しかった」

その間ずっとここで待たされていた俺たちはどうしろと？
ずっと波にプカプカ漂ってたんだぞ。

冷たいし、寒いし。

まあ、文句ばかりいつてるが危険を払いのけてくれてありがとう
な、シエラ。

このありがとうはシエラの方を向いて言うべきだろうな。
そうおもって振り向いた俺は

「うおうっ!？」

ありがとうを言えずに変な奇声を発してしまった。

いや、だって…

うん。

「何だよ？」

シエラ：

お前は少し勉強したほうがいいんじゃないのか？

俺がシエラを見たときシエラの服はボロボロだった。

いや、服なんてどうでもいいんだ、実際は。

問題は…

非常に言葉では説明しにくいんだが。

「と、とりあえずこれはおっとけ」

俺は急いでシエラから目をそらして制服を渡す。

「？」

変な波音だな」

お前には羞恥心というものがないのだろうか。

その…なんだ…もう!!

こういうときに自分のスペックの低さを恨むね、正直。
しかたない、率直に言おう。

「そ、その胸を隠せて言ってるだよ、バカ野郎!!」

「なんでだ？」

別にいいだろう？」

もう…こいつは…

ああ、駄目だ鼻血でそう。

「お、シエラ。

また大きくなった？」

メイナが言う。

「え、そうか？」

僕的には邪魔なだけだよ、これは」

女子の会話だな、うん。

聞かないぞ、聞かない!!

気をそらそうと仁に話しかけるべくしゃがむ。

すると仁のPC画面が真っ赤なことに気がついた。

…あれ、全部血なのか？

「仁、大丈夫か？」

出血多量で死ぬんじゃないのか、それ。

ハンプない血の量だぞ。

すると仁が俺の方を向いて鼻を押さえながらメガネをくいっとあげて一言。

「Cの十だな」

「……………」

おいっ!!

測定済みかよっ!!

ってか、見るだけで判断できるって言うのもすごいな。
俺には絶対無理だしそんな能力いらん。

「なんか、困ってるっぽいしシエラそれ着たら?」

「姉さんがそういうなら…」

うしろでござござして、ボロボロの服が荷物の上に落ちる音がする。
そして、俺の制服を…って、こんなときまで実況させるなっつうの
!!!

変な想像しちまうだろうが!

「波音、着たぞ」

やっとか。

ようやく、シエラの方を向くことが出来た。

いや、また制服も似合うなお前。

以外に、うん。

「じゃ、俺たちをハイライトへと連れて行ってくれ。
いや、連れて行け」

もちろん命令形。

だって、主人だし。

「え？

僕また飛ぶのか？」

「飛ぶの。

飛べ」

シエラは、俺がそういうとはいはい見たいな顔をして翼を出した。
ビリッと俺の制服が破ける音が…
それ、まだあたらしいんだけど。

「じゃ、私も飛ぼうかな。

暇だったし」

暇だったんですか、お姉さま。

じゃ、シエラ手伝えばよかったんじゃ…

「眠かったし」

そうなんですか…

「じゃ、僕が波音と飛ぶから姉さんは仁お願い」

「ん、了解」

そういうと、シエラは俺へ両手を出した。
つかまれと。

はい。

背中のにせてくれたりとかそういうのじゃないんだね。

まあ、さすがに無理か…

「じゃ、頼むぜ」

携帯のGPSで現在地を確認して、ハイライトへと向かう。

ここから、西へ五十八キロか。

あ、もしかしてあの黒い点がそうなのか？

意外と見えるもんだな…とか思ったとたん周りの海水が波立ちはじめた。

シエラの両手にしっかりとつかまった俺には風圧がまったく来ず

快適かも…と思うと全身を浮遊感がつつみこんだ。

風が耳元でうなり目を下におとすと雲海がずっと広がっていた。

文字で説明するならば、俺達はアルファベットの『T』みたいになっている。

上の棒がシエラで、下の棒が俺だ。

俺とシエラをつないでいるのはお互いの両腕だけ…

つまり、シエラもしくは俺が手を離したら俺は海へとまっさかさま。
こういうことだよな。

「マッハ出すと衝撃波で波音死んじゃうからゆっくり行くぞ」

体が切れるとか何とか。
こわいな、衝撃波って。
雲の切れ目から下をのぞいた。
船が米粒よりも小さい。
どんだけ、高いんだよここ。

「あれ？」

多分だが。

「みえてきたぞ、波音」

仁が俺に話しかけてくる。

だが、今の俺はそんな余裕はないんだって。

「ほら、波音ががんばって。

あと少しだから！」

メイナが応援してくる。

片手でぶら下がってます。

頼むから早く行ってくれ。

「ぬ…ふおおおっ！！」

なんとかもう一つの手を握りなおすがすぐに滑って落ちる。
やばい、これ。

「うおっ、綺麗だっ!!」

仁があまりにも繰り返すのでいやいやながらそっちを見る。

そんな余裕はないんだとわかっていながらも気になるじゃないかやっぱり。

正直、かなり綺麗だと思った。

白い城の周りに街が出来ている。

島は今でもよくわかっていない鉄で出来ているらしく、ダイナマイトでもかすり傷一つつかないとか。

島の周りには八個の塔のようなものが少し崩れながらもたっておりお互いに連結しあって

島とくつつきながら回っている。

さっきの成分不明の鉄で塔も出来ているらしく、その塔に紫色の：多分配線だろうか。

それが、幾何学な模様をえがきながら鈍く紫色に光っている。

それは、レーザーを発射するときのシエラやメイナの両腕にも似ていて

ベルカ帝国独自の技術か何かなのだろう。

そして、その光が集まったやつなのだろうか。

何本もの光が円錐のようになっていいる塔の底から海面へと噴射されている

この光のおかげでハイライトは浮いているように見えなくもない。

連合郡が総力をあげてここ最近の間にベルカ帝国があったという痕跡は完璧に抹消してしまった。

まるで、自分達にとって都合のわるいなにかを隠すように。

ネットなどでは、ハイライトはベルカ帝国の遺産だという噂があった為

前回俺もそうシエラに説明したが

教科書などでは、ハイライトは地球の磁場で浮いている自然島だと説明されている。

ハイライト自体が大きな強力な磁石になっていると。

また、そのバランスをくずさないように塔などを建造したと。

でも、そんなことをならべても、シエラやメイナを知ってしまった今では

ハイライトもベルカの遺産だといわざるをえないね。

まったく、もみ消しもいいところだ。

しかも世間のほぼ百分の人がそれを信じているというのがまた面白い。

真実を知っているものは少ないということか：

まあ、世界の歴史からベルカ帝国が消えたほうが連合郡にとって都合がいいのだろう。

技術を盗めるだけ盗んで後はポイか：

「あ！」

「え？」

ずるっと、手が滑りましたとき。

「もう、あぶなかったんだからな！」

地面ギリギリで俺はシエラにつかんでもらえた。

ハイライトの上空だったとはいえあの高さから落ちたら死ぬ。

確実に死ぬ。

森の中だったということもあり、なんとか隠密を守りながら俺たちはハイライトへと潜入に成功した。

微妙に宙に浮いていた俺たちはふわり、というふさわしい着地をした。

俺たちの周りには枯葉が舞い散り、木々が風でメキメキ言っている。すごい風圧だな…

まるで、台風を見ている気分だった。

翼は動いているようには見えないのだがどうやってあの風圧を発しているんだか。

青い配線の模様が鈍く光っているがアレか、もしかして。

ハイライトとおんなじ原理なのか？

しかも、レーザーも出たよなあ翼。

「さて、ミッション開始と行きますか」

地面に降り立った俺はくると振り向き言った。

シエラは俺が貸してやった制服の背中の穴に指を入れて

「？」

不思議そうにしている。

「シエラ、お前の翼の穴だろ、それ」

仁が親切そうに教えてやっているのが逆にほほえましい。

そうさ、それはお前の翼が空けた穴だよ。

「なあ、波音」

シエラに説明し終わったのか仁がPCをかばんからとりだして俺の

ところまで歩いてきた。

そして、声を潜めて俺の耳元でささやく。

「？」

どうした、仁？」

仁が控えめに俺にいつてくるのは珍しいことで、自然と俺も微妙に真剣になってしまう。

仁は、さらに声を潜めて

「メイナが言ってたんだが、今俺たち周りを少なくとも百二十人には囲まれているらしい」

隠密に行きたかったんだが：

もうばれてしまったのか？

おかしいな、なぜ攻撃してこない？

あの大艦隊の仲間：つまり連合郡ならば即攻撃してきてもおかしくないはず：

「……はあ…」

一難さってまた一難か：

なら二つ目の難には先制攻撃でもしてみるか。

「隠れないで出てこいよ。

もうわかってんだよ」

これどうだ。

悪いが今の俺は腹が減ってるし、アイス食い損ねてイライラしてるしさつき落ちかけた恐怖でイライラが倍増しているところなんだ。

「ま、待て!!」

撃たないでくれ!!」

がさがさしながら奴らは出てきた。

俺は手で、シエラとメイナを制す。

でないと殺してしまうだろうから。

無抵抗をしめすサイン…両手を上にちゃんと上げてるし。

「俺たちは、帝国郡のものだ。

鬼灯財閥との約束でお前達を迎えに来た」

そうですか…

鬼灯のおっさん…

言ってよ、そういうこと。

「長旅ごくろうさまだった。

ハイライトの地図をみながら計画を練るぞ。

俺たちの隠れ家へ案内するからついてきてくれ」

信頼できないが…

鬼灯のおっさんとの約束っていつてたし…

など、考えているとがさがさと隊長らしき男はずんずん先へ歩いていった。

それを、急いで追いかけるべく俺たちも後を追って走り始めた。

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

大艦隊VS恐怖神 終夜祭（後書き）

読んでくれて本当にありがとうございます。
感謝してもしきれません。

言にくい名前のオトコ

「ちゃんと、ついて来てるか？」

さつき、ジョン・H・マルチローラと発言しにくい名前を名乗った男が

俺たちを振り向いて笑いながら言った。

「ついてきてます、心配しなくても」

俺は目の前にしげる草を書き分けながら進んでいる。

夜ということも蟻、森の中はかなり暗くどこかではーほーと鳴き声が聞える。

夏だというのに鈴虫がないしており、木々の隙間から見える空は月と、大量の星でうっすらと輝いていた。

「うにっ!？」

上を見ながら歩いていたせいかジョンが止まったのをぜんぜん見て無かった俺は

ジョンの横にある木に思いっきり頭をぶつけてしまった。

「しっ！

静かに!！」

シエラや仁が笑いそうになっていたのをジョンが緊迫した声で押しおどめる。

パツと光が走り、静かな森を照らす。

な、なんだよ、もう。

そういう疑問はヒューンとちいさく聞こえてきた…なんなんだろう、あれ。
しいていうなら、茶筒が下から小さく火を吹きながら空を飛んでいる。

それにかき消された。
どうやら、無人のようだがどこかにカメラでもついているのだろうか。

「ちっ、連合郡め…」

ジョンはぼそつとつぶやき、傍の茂みに隠れるように俺達に命令した。

「なんなんすか、あれ」

仁が森の茂みに隠れたのを確認しながら俺はそう発言した。

「ああ、俺も気になったんだがあれはベルカ帝国の何かじゃないのだろうか」

「…仁、ジョンが答えてくれると思うんだが」

「…あれは、フォーゲル。」

連合郡が開発したAIを搭載していて25mm機銃を装備している空飛ぶ偵察マシンだ。

君たちを探しているのだろう。

あんな、派手な飛び方したらそうなるわな。

ステルス機でも使ったのか？

しかもお前達は島に無断侵入の挙句、自然保護立ち入り禁止区に入っているんだからな」

ですよ。

やっぱり隠密ではありませんでしたか。
しかし、フォーゲルねえ…
可愛くない名前だな。

「ねえ、シエラ、あれじゃないの？」

「姉さん、あれって何？」

主語を言ってくれないと…」

「ほら、遊園地でよく…」

「……………ああ！！」

言われてみれば…」

正直ついていけん。

そんな現代人の俺達にいわれてもなあ…
わかるわけないだろ。

まず、超古代文明の世界を教えて欲しいものだ。

「お二人さん、遊園地って…？」

ジョンが不思議そうに首を傾げる。

そりゃそうですよね。

「ああ、まだ何も言ってますでしたね。

こいつらは、F・DとS・Dで僕がシエラ、メイナという名前をつけた。

こう見えてベルカ帝国の最終兵器でございま…すう！？」

急にジョンが俺の肩をつかみゆさぶる。

「まじ?」

「まじです、まじ!! まじですよ!!」

一秒で三往復ぐらいの激しい揺さぶりで正直吐きそうです。
うぁー吐く、吐く!!

「あのー…、その辺にしておいたほうが…」

メイナがジョンにようやく言ってくれたことにより俺の首振り運動は終わりを告げた。

ああ、まだ頭がくらくらするぜ。

ヒューン…

忘れてた。

あたりにはまだフォーゲルとかいうマシンが…

「うっ!?!」

光が俺を照らす。

「しまった! 見つけた!!」

いや、しまったってあんた…
思わず白い目で見てしまう。

フォーゲルについているカメラか何かで察知したのだろうか。

緑色に輝いていたランプが赤色に変わり、左右にっていた機銃が動き出した。

「走るぞ!!」

ジョンが棒立ち状態の俺達をひっぱりその勢いで俺達は走り出した。たちまち、フォーゲルの機銃が火を吹き俺達の周りの地面がえぐれる。

「こ、ここは自然保護立ち入り禁止区じゃないのかよお!!」

「…おもいつきり自然壊してるよな…」

ま、またシエラ…

こいつはさらっと言いやがって。

俺の仁に対するセリフを盗るなよ。

「ジ、ジョンさんなんとかならないんでし…」

ジョンに話しかけた俺の周りをフォーゲルが銃口をこっちに向けて並列して飛びはじめた。

なんだ？

挑発してんのか!?

「くそっ!」

鬼灯のおっさんから渡された銃を取り出す。

射撃経験は麻醉銃程度しかないがこの距離ならなんとかなるだろう。

「はっはあ!!」

「砕け散れ!!」

いや、俺、何言ってるの？

「!」

波音、まで、やめ…」

ジョンが金切り声で俺の銃を掴んだがすでにその銃の銃口からは煙が立ち昇っていた。

銃弾はフォーゲルの外板をつきやぶり、偶然にもA Iにつきささった。

いままでうるさかったフォーゲルのエンジン音が止み金属が地面にぶつかる音が響く。

「はぁ…はぁ…」

俺は完璧に息があがってしまった。
ふう。

近年まれに見るドッキリだったぜ。

「ぜえぜえ、これで…なんとか…」

仁も完璧にばてている。

俺もだ。

最終兵器二人はなんともない顔してるけどな。

「ば、馬鹿野郎!!」

はやく…ここから離れるぞ!!」

ジョンがそういつて再び走り出そうとする。

ジョン：それはひどいんじゃない？

「え、別にいいだろうが。
振り切ったんだし…」

仁はそばの木にもたれかかった。
俺も休みたい少し。

と、思った矢先に聞きなれた沢山のエンジン音が重複して聞えてきた。

「言うのを忘れたが：一台こわれるとその一台が最後に強力な電波をだすんだ。」

その電波を他のフォーゲルが察知して…」

ヒューン：

「もし、一台みつけたら周りには三十台はあるってことか…」

まるでGOKIBURIだな。

はっと、仁が唾然となりながら空を見上げる。

それに釣られて俺も空をみると茶筒で空が覆われていた。

「ちっ、もう来たか！」

ジョンが背中にかけていた銃を取り出し空へと向ける。

「食らえ、蠅ども！」

いや、ジョンさんも何言ってるの？

「なにも言わないで撃たないよりもマシだろうがっ！」

ジョンはそういつて何発もそれへと鉛弾を打ち上げた。
だが

「ちっ、強襲用フォーゲルか！」

どうやらさっき俺が撃沈したフォーゲルとはまた違う種類らしい。
銃弾はことごとく弾き飛ばされてしまった。

「あのフォーゲルは戦闘に特化したマシンだ。

RPGでもない限りあの外板をつきやぶることが出来ない！」

次第にフォーゲルの音がだんだんと近づいてくる。

なんであんな遠くから機銃を撃てばいいのに撃たないんだろうな。

「なんであそこから機銃をうたないんでしょうね？」

俺はジョンに尋ねる。

「死を自覚させ、絶望に追い込むためだ」

そういつたジョンは確かに絶望感にあふれていた。

そうなんですか。

やらしい、マシンだな。

空を見ているうちにあれやあれやとどんどんフォーゲルが近づいてくる。

さすがに、俺も怖くなりはじめた。

ふと隣を見る。

すると、びっくりなことが起こっていた。

最終兵器二人はじゃんけんをしていてメイナがグーでシエラがチョキとなり勝敗がついてしまった。
なにやってんだ、お前ら。

？でいっばいになった俺にメイナが笑顔で振り向いて

「へい、波音！

私が今回火の粉を払うよ♪」

ああ、どうぞどうぞ。

好きになさってください。

っていうか、そのじゃんけんだったのですね。

「僕は負けたからパスだな。

姉さんよろしく」

俺はorz状態のジョンさんに話しかける。

「ジョンさん、今からこいつらが最終兵器だってこと見せますよ」

ジョンさんは涙でぐしょぐしょの顔で俺を見てうなづく。

ガキかあんたは。

メイナはちよつといたそうな顔を見るとシュルツ…ビリツ…ああ、
また服が…

背中から鉄の翼を出した。

シエラと同じような形で青く光る配線が幾何学な模様を描き出す。

「じゃ、行ってくる！

三十秒ぐらいで終わると思うけどね♪」

その突如すごい風圧が俺たちを襲い思わず地面に転がる。

シエラよりも強いじゃないか、この風。

「姉さんはりきってるなー」

シエラが長い髪を風に遊ばせながら俺に話しかけた。

ジョンは腰でもぬかしたのか、口をあんぐりとあけて空を見ていた。

フォーゲルの機銃が火を吹き、弾がいくつも発射される。

だが、イービスにはまったく通用せず軌道がそれた弾は仲間同士にあたり火花を散らしている。

パンソロジーレーダーで見る限り、A Iは何重にも鉄の壁で囲われている。

さっきの波音の銃弾は本当にたまたまだったようだ。

「よいしょっと」

銃口から弾をばらまきながら近くを通り過ぎたフォーゲルに思いつきり右手を突き刺す。

外板がめくれ、メイナの手がA Iへと伸びて引きちぎる。

引きちぎられる一瞬前にA Iは体内のDDHF爆弾へと電力を伝達した。

上空で大爆発が起こり、一瞬ハイライトは昼へと時間をさかのぼった。

周りのフォーゲルは爆発の一瞬前に爆発の効果を上げようとしたのだろうか。

何台も同じようにメイナのそばに近づき自爆した。

「メイナ!!」

仁が、空を見て叫ぶ。

だが、わかっているだろう？

最終兵器があんな爆発でしぬなんてことがあるわけない。

光がおさまり、煙がはれる。

右手から煙を出しながらメイナは傷一つついていなかった。

「こ、これが最終兵器なのか…？」

ジョンのびっくりする声が今の俺には心地よかった。

「ちっ、さすがにうざいなあ…」

つぶしても、つぶしても次から次へとフォーゲルは沸いてくる。

その発生源を見つけたメイナは右腕を大口徑砲へと変え青いレーザーを放った。

カッ！と空を突き上げるような光が走り、大爆発が起きる。

衝撃波が木々をなぎ倒し、熱が建物を溶かす。

赤く光るきのこ雲はハイライト自身を揺らしたのではないかと思うほど大きかった。

もしかして、メイナの方がシエラよりも強いのかも…

俺はそう思わざるをえなかった。

とにかく、これでようやくフォーゲルの発生をとめることはできた。上空の爆発から退避していたフォーゲルたちも再びメイナに攻撃をはじめ。

発生しなくなっても大体二十〜五十台はあるだろうか。

「ばいばい♪」

メイナはそれらを一覽した後翼にためていた力を解放した。

『衝撃波散弾レーザー』

第十二艦隊の航空機部隊をなぎ払うときにシエラが使った兵器だ。それが来る！と、直感で感じた俺は来るときの衝撃波に備え地面に伏せた。

ポケ：と立っているジョンを地面に引きずりおろし伏せさせる。

と、目を閉じていてもわかるほどの強烈な光が目を刺し殺気にも似た衝撃波が体を振動させる。

木の葉が舞い上がり、木々がざわめく。

どうやら、最終兵器としての力の使い方はシエラよりもメイナの方がうまいようだ。

シエラに比べて技が磨かれている。

「終わったよ♪」

明るく笑いながらメイナは地面に降りてきた。

風圧でようやく立ち上がった俺は再び地面にころがる。

立たせてくれないか、頼むから。

まあ、なにはともあれお疲れ様でした。

立ち上がってパンパンと土を払ったジョンが俺のほうへススッと近づいてきて話しかけてくる。

「なあ、波音。

大切なものが消えるとき

三つの死は姿をあらわす

死は力を使い地上を無に返す

死は鬼神となり

恐怖の中で消えていく
大切なものを失った悲しみとともに

この伝説知ってるか？」

知ってるも何もないよな。

世界中で知らない人がいるのか、まず。

そして、いつかの話題にもなったよなこれ。

「知ってるが？」

「な、なあ、もう一回あの二人の本名おしえてくれないか？」

本名っていうか、イニシャルみたいなじゃないのか？

「F・DとS・Dだが？」

それがどうかしたのか？」

俺がそういうとジョンはやっぱりと言わんばかりにうなずいた。
いや、なんなんですか。

ジョンはぶつぶつ言いながら考えていたが急に顔を上げた。

「F・DとS・Dが何かの略と考えたことは？」

あるわけない。

ってか、これ略なのか？

イニシャルとかそういうのじゃなくて？

「やっぱり知らないか？」

馬鹿だなくお前」

むっと来た。

なんだよ、もうこのおっさんは。

「どうやら、俺は歴史が変わった瞬間の時代に生まれてきちゃったらしい」

ジョンはスキップをしながら、踊りだした。

ハイテンションですね、おっさん。

もう、なんだこいつ：

「おい、おっさん俺にも教えてくれよ！」

仁がジョンを追いかけはじめ、それを見ながら俺は

いつの間にか木の幹にもたれていたシエラに話しかけた。

「シエラ、F・Dって何の略なんだ？」

「：ジョンから聞いてくれ。

僕はあまりその名前が好きじゃない」

すこしむっとした顔をして

「それに、僕はもうシエラだ」

そう付け足した。

意外と気に入ってくれてるんだな。

なんだ、かわいいところあるじゃねえか。

踊っているジョンを捕まえ

「で、いったい何の略なんだ？」

と、尋ねる。

「ふっふっふ…」

これで、帝国郡は勝てる！！」

聞こうぜ、俺の話。

どんだけ有頂天なんだよ。

「波音、私ベルカ遺跡の時に言わなかった？

シエラは動かしちゃいけない『削除』だって」

メイナがシエラの横に座りながら言う。

予想外のところから答えが来たな。

ベルカ遺跡…か。

言われてみれば…

「もしかして、あの戦っている時か？」

「そうよ。」

あの時私は確かにいったはず。」

言ってました、確かに言っていました。

『削除』…ねえ…

『削除』は確かベルカ語で…えーと…

にわかベルカ語仕込みでそんなのいちいち覚えてねーよ。

「英語とベルカ語は非常によく似ている」

ジョンがいつの間にか俺の横に来て話しはじめた。
前置きはいいいからさっさとええ。

「俺が答えてやろう。」

『削除』：それはベルカ語でも英語でも『Delete』だ。
前のFやSは製造番号。

つまり

Fは『Final』

Sは『Start』

つまりF・Dは『Final Delete』S・Dは『Start Delete』

そういうわけだ」

なるほどな…

F・D：最後の削除

S・D：はじまりの削除

ようするに、夢も希望もなくすってことか。

始まりと後がなくなったら元も子もないもんな。

「待てよ…

まだ、後一人いなかったか？」

俺はシエラとメイナの方を見て尋ねるが返事はなかった。

仁は今の解説を聞いてなるほどとしきりにうなずいている。

今の解説されたほうの二人は

過去の汚点をさらけ出されたような顔をしてじっとしていた。

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

言にくい名前のオトコ（後書き）

読んでいただきありがとうございます

悪夢再び

「後一人…Tは死んだかもしれないんだ。

僕達は別々に行動していたから、お互いの存在を知らされるだけで顔はもちろん

男なのか女なのかそれすら分らないのだ」

それからシエラはメイナを見て

「僕達は姉妹だったからお互いの事を知っていたのだが…」と付け足した。

つまりすべては謎ってわけか。

出てくるなら出来るだけ早く出てきて欲しいものだ。

「ちなみに『Delete』はベルカ語では死も表すんだ。

これからは豆知識なんだが、『最後の削除（死）』っていうのはこれで壊すもの…つまり戦争が終わりますように…っていう意味も込められていたらしい」

ジョンはようやく目障りなダンスをやめて、シエラの説明に＋αした。

「波音…僕の一人称がどうして『僕』なのか…って考えたことあるか？」

シエラが真剣な顔をして俺に迫ってきた。

「ないな」

だって俺、僕っ娘萌えだし。

…なんだよ、趣味は人それぞれだろうが。

「『T・D』のレーダーを傍受したときにあいつの一人称が僕だったんだ。

だって、知りたかった…男か女なのかぐらいは。

どっちなのか分からないぐらいジャミングがひどかったが

一人称が僕だったっていうのは間違いないんだ」

「だからか…」

どうりでだ。

僕っ娘なんてめったにいるもんじゃないし、いたとしても…

って感じだったからな。

そういうわけがあったのか。

シエラが僕を一人称として使うのはTへの憧れでもあるのだろう。

「と・に・か・く！

後どれぐらいでアジトに着くんだよ？」

仁がシビレを切らして変なトーンでジョンに話しかけた。

もう、最終兵器とかどうでもいいんだな、仁…

まあ、俺も正直つかれた。

はやく帝国郡アジトで飯食って風呂入って寝たい。

「そこだよ」

ジョンが新しいタバコに火をつけながら地面を指差す。

「は？」

「だから、そこだ」

そこっついわれてもなあ…

草と石がものさびしそうにあるだけなんですけど。

「そこに飛び込んでみ」

いや、足くじくでしょ！

何言ってるの、ジョン。

冗談はやめろよ、という顔をしたつもりなのだが鉄仮面を崩さないジョン。

あきらめた俺は覚悟を決めて目をつぶって思いっきり飛びこんだ。

なんかぬるっとした膜のようなものを突き破りあまりの触感に全身の毛が逆立つ。

くさったみかんにさわっているようなあの感触が体中を包み込み思わずはきそうになる。

そして、足が何か硬いものにあたったかと思うと俺は鉄の床に無様に倒れていた。

「ようこそ」

ようこそじゃねーよ。

目を開けた瞬間、目の前の兵士が敬礼をして俺を迎えてくれる。

寝転がったままは流石に失礼だと思い立ち上がって俺も敬礼しようとした瞬間

「うを！？」

俺の脚にジョンがぶつかってきて、再び俺は床に転がった。

「お、おいジョン何するん…あうがっ!!」

なんか、読める展開だがシエラが俺を踏みつけて落ちてきてメイナがさりげなく俺を蹴り上げ、仁がボディプレスで俺は完璧にKOしました。

だが、これで全員のターンは終了。

「お、おまえらなあ!!」

次は俺のターンだぜ!

「食らうがいい、我がちか…らっ!?!」

壊れたフォーゲルが上から落ちてきて俺にとどめのボディプレス。まさか、こんなところで俺が負けるとは…
不覚だった…がふ。

痛いところをさすり、ぶつぶつと愚痴りながら俺はジョンの後についていった。

帝国郡ハイルイト司令部とかいう所に報告しに行くんだとか。

連合郡はいまだにここの事を気がついていないらしい。

もしくは、発覚してはいるがあえて無視しているのかのどっちかだろうな。

蟻などいつでも踏み潰せる。

こういうことなのだろう。

「ついたぞ」

ジョンが俺たちを振り返って言った。

「上着は脱いではいるようにっ!？」

そーういや忘れてた。

シエラのやつ今裸同然だ。

ジョンは鼻を押さえながら床に倒れた。

指の間から血が噴出してゐる。

こいつは、仁並の噴出規模だな。

どくどくと血溜まりが広がっていき流石に危ないと思った俺はシエラに制服を着るように指示した。

いや、だってジョン死んじゃうだろ、これは。

また一人、幸せそうに大量出血する人がでてしまったか。

俺もしっかりと気を保たないとして、いかんいかん。

邪心が。

「だ、大丈夫ですか？ジョンさん？」

「む。

いやはや、久しぶりに女神を見た、そんな気分だよ」

もう、このおっさんは…

ド変態だな、本当に男ってヤツは。

お、俺は違うぞ？

そこは勘違いしないように。

「シエラ…

後で俺の部屋に来てく…」

「言わせません!!」

俺のストレートパンチはジョンの頬に見事にクリーンヒットした。その勢いで司令部の扉が開く。

十人ほどの男女の目が倒れた（血まみれで）ジョンにうつり、そして俺、シエラへと舐めるように動く。

「は、ははは…」

笑うしかない。

ここで勘違いされて俺死ぬかも。

司令部の一人の男が敵襲を告げるスイッチを押そうと指をのばしたが、その腕をがっちり掴みながらふらふらとジョンが笑いながら立ち上がって

「いや、いいんだ。

俺は死んでないから」

そういつてくれたことにより、俺たちは何とか誤解されずにすんだようだ。

「しかし、司令…」

「ん、この血は鼻血だ。

心配には及ばない。

それにこの子たちは、鬼灯のやつから頼まれていた子たちなんだ。俺達のお客様だ、殺すなんてことしたら…恐ろしいよ、おうおう」

いや、普通ならそんだけ血を出したら死にますって。
それに最後の方向言ってるんですか？
日本語で頼みますよ。

「つてか、司令？」

「え、ジョン司令だったのか？」

仁は感心したような目でジョンを見た。
うん、俺もいまかなりびっくりしたね。

「いかにも。」

俺は第十五帝国郡ハイライト基地司令、ジョン・H・マルチロー
ラだ！」

親指をぐっとのばし、自分へと向け白い歯を光らせるジョン。
アニメとかなら、キラーン！ と盛大な演出が期待できる場面なの
だろうが現実はそう甘くはない。

「し、司令…」

オペレーターらしき女の人があ…とため息をついた。
俺もおんなじ感想ですよ、お姉さん。

室内の温度が一気に十度ぐらいかくんと落ちた気がしたのは俺だけ
じゃないはず。

「……かつこ…悪い…」

仁、とどめをさしてやるな。

「：毎回それやってますけど、あいからわずダサイですね：」

男のオペレーターの人がジョンに話しかける。

ジョンは、ポーズをやめがっくりと方を落とした。

いま、頬に光ったのは涙なのだろうか：。

意外と家に帰って泣くタイプなのか、ジョンよ。

「ーさて、諸君紹介しよう。

こちらが鬼灯との約束の子供達だ」

切り替えるの早いな、だんな。

「右から、永久波音、シエラ・F・D　：」

シエラの名前が奇妙なことになっているが、このさい気にしない。
なんか紹介始まってるし。

シエラ、照れて顔真っ赤だし。

とりあえず、名前を呼ばれたので頭を下げる。

人との付き合いはまずはあいさつから：って鬼灯のおっさんになら
ったからな。

「はい、これ」

紹介が終わりふう、と息をついたところでなんか軍服を渡された。

「なんですか、これ」

「シエラちゃんにも渡してやってくれ。

あのまんまじゃあまりにもかわいそうだからな。

軍服のことだけど、あいにく今は女用は切らしているんだ。

すまない。

一応、お前らにもあるんだが…いるか？」

ずっと制服っていうのもつらいし…

海水などでべたべたするし。

記念にもなるかもしれない！

もらっておくか。

「仁、いるか？」

「俺か？」

俺はもらっておくよ」

「メイナは？」

「私？」

できれば欲しいな」

「じゃ、全員もらいます」

シエラがむっと頬を膨らませて「なんで僕には聞かないんだ」的な顔をするが気にしない。

そもそも、お前のためだろうが。

人の制服の背中破りおって。

ジョンはひょいとすみの方に消えたかとおもうとすぐに俺達の服を持って出てきた。

「あれ、着るのよね？」

想像していたのと違うのかメイナが口をとがらせるが

制服をいつまでも着るよりもましだと思ったらしい。
素直に受け取っている。

「ほい、シエラ」

仁がシエラに服を渡す。

「あ、ありがと…」

考え事でもしていたのか、はっとしたような顔をして服を受け取るシエラ。

ぱさっとひろげると、俺達の高校の制服が軍服になったようなものが出てきた。

「…え？」

「あ、あんまり今と変わらないね…」

「大塔高校の制服は我々帝国郡をモデルに作られたんだ。
多少似ていても仕方あるまい」

ジョンが腕をくんでうなずきながら言った。

「もし、欲しいなら帽子もあるぞ？」

「い、いえ！」

「お、お構いなく!!」

メイナが両手をぶんぶんふって、拒否の意志を示す。
俺も同感。

ただ、シエラは欲しいようで

「ください」

ジョンのすそをくいと引っ張って言った。

お、お前は欲しいのか…

「まあ、俺の部下が戻ってくるまでその服でも着ていてくれ。
今、日本へと服を買いに行っている」

「な、なんかすいません…」

思わずあやまってしまう。

ここまでしてくれるとは…

「ここではその服を着ておいてくれよ。

でないと、部下が間違って撃ってしまうかもしれん」

からからとわりながら、ジョンは司令とかかれたマンガだらけの机に腰掛けた。

「作戦開始まで後三日ある。

そのうちに、ここーハイライトになれておけ。

街に行くときには服がつくまで待て。

その後なら、ショッピングにでも連れて行ってやるよ」

緊張をほぐしてくれる、いい人だと、いまさらながら気がついた。

司令の器にふさわしい、寛大な心の持ち主である。

現金だな、俺も。

海水などでぐちゃぐちゃになった制服を脱いで早速軍服に着替える。

付け足すが、ちゃんと、シエラやメイナとは別々の部屋で着替えたからな。

そこ、忘れないように。

再び、司令部に集まった俺たちに地図が配られる。

この基地への隠し扉などがくつきりとかかれた地図だ。

「では、行ってきます！」

元気よく外に飛び出そうとした俺をジョンが掴む。

他の三人はうれしそうに外へと出て行った。

お、おい！

待てよ！

「な、なんですか、司令殿？」

なーんか、嫌な予感がしながらゆっくりと後ろを振り向く。

「そういえば、思い出したんだが……」

俺のをがっちりと掴んでいる腕を放してジョンが言う。

タバコを取り出して、火をつけながらジョンは

「鬼灯のヤツからお前に銃の稽古をつけろという約束があつてな。

この三日間の間に拳銃ぐらいはマスターしてもらうつもりだ。

ここは危険だな。

自分の身は自分で守らないとな」

え、まじですか？

などと、俺は言わない。

正直、最終兵器ばっかりに頼っている自分が情けなくなってきた所

だ。

今の不安定な戦争時代を生きるためには自分が強くなるしかない。

「わ、分かりました」

だから、素直に俺はうなずき決心を固めた。

「よし、いい面構えだ。

昨日本部からついたばかりのヤツに指導してもらおう。

かなり若いのにここの兵士を素手で二十人ほどのしたやつだ。
頼りになるいい人材だ」

と、ジョンが言ったときに後ろのドアが開く音がした。
かなり気になる、誰だろう？

「お、グッドタイミングだ。
入ってきてくれ」

「司令、この子を？」

ん、なんか聞いたことあるよ？

この、声。

聞いたことあるよ？

思わず後ろを振り向いた俺にさわやか青年の微笑が見えた。

すぐに前を向きなおし目をそらす。

さっき固めたばかりの決心はすでに崩壊しかけている。

こいつにだけは、会いたくなかった。

できれば、あの一本道の後死んで欲しかった。

そう、俺の指導者はさわやかホモ野郎―セズクだった。

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

悪夢再び（後書き）

どうもありがとうございました。

はやぶさ、お帰り！

射撃場にて

「どうしたんだ、波音。

射撃場はこっちだぞ？」

ジョンがそう言って指差したのを無視して、俺は走り出した。

冗談じゃない。

なんで、あんな奴に教えてもらわなくてはならないのだ。

「止まれ！」

それ以上は行くなと、司令からの命令だ！」

ジョンから通達があったとかはどうでもいいが兵士達が俺の前を防ぐ。

「ちっ…」

天井に小さなでっぱりを見つけた俺はスピードを上げた。

兵士達の前で思いつきりジャンプしながら天井のでっぱりを掴む。

でっぱりで宙に浮きながら慣性の法則で体をおしだし、兵士達を飛び越えた。

「な、なんだ…あいつは…」

啞然としながら風になった俺を見る兵士達の視線がなぜかここちよかった。

「止まれ！」

と、思ったらすぐにこれだ。

新しい兵士達のバリケードである。

ポケットから輪ゴムをとりだして思いっきり伸ばし兵士達の目の前に持っていく。

「ひっ！」

思わず目をつぶってしまった兵士の間を縫って再び俺はバリケードを通り抜けた。

輪ゴムって最強のぶきだと思っただよね。

「うおおおおっ！」

急に掴みかかってきた兵士の背中を使って馬とびをしたりと、さまざまなよけ方をして

「はっはっは!!」

さらばだ、諸君！」

そんなかつこ yok もないセリフを残した俺は外への扉をこじ開けた。ひんやりとした空気が身を包む。

開放感あふれる自然の中をさらに走って逃げようと思った俺にぞくつとするあの声が聞えた。

「つかまえた♪」

その声とともに鳩尾にするどい痛みが走った。

「………!?!」

まったく反応できず、バランスを崩してひざをつく。
胃の中の物をすべて吐きそうになり、息がつまる。
咳も出来ない苦しみだ。

「くすっ…

だめだよ、波音。

本当にこの僕から逃げ切れるとでも思ったのかい？」

何を隠そう、そう思ったからこそ逃げたのである。

逃げ切れないと思っていたら初めから逃げはしない。

痛みで動けない俺をひょいとセズクは抱えると

「え…やだ…やめろっ！」

いままで俺が快進撃を繰り返してきた道を逆走し始めた。

「さっさと。

まずは拳銃の扱い方からマスターしてもらおうよ♪」

最悪だ。

「ささ、この銃だよ。

じゃあ、はじめるよ」

まさに最悪だ。

「ん？」

どうかしたのかい、ハニー？」

ハニーって…

やめてくれ、もう。

なんなんだ、いったい。

なんでこんな広いところで二人きり（男二人）で銃の練習などせにやなんのだ。

誰か一人いてくれてもいいものを…

外に、『はいつてくるべからず』的な標識が立っているわけでもないだろう。

「くすくす…

いじけているのかい？」

セズクは手に持っていた拳銃をコトリと机の上におくとクスクスと笑う。

一方俺は壁の隅のほうで床を見てじっと動かずにいる。

「まったく…かわいいなあ♪

食べてもいいかな？」

この言葉もじつと無視だ、無視。

精神的に動揺したらそこにつけこまれる。

「まったく…この僕が教えてあげているというのに…

無視はひどいんじゃないかな…？」

ずいっと、俺の視界に入ってきたセズクはにこりと笑った。

「べ、別にそんなんじゃ…ねーよ」

ぷいっと横を向いてセズクから視線をそらす。

「じゃ、どんなのなんだい？」

「う、うるさいな！」

お前に習うぐらいなら死んだほうが…」

セズクの目がキュッと細まり、顔の微笑が消えた。

今のふとした一言で俺はセズクを怒らせてしまったらしい。

「習うぐらいなら…なんだい？」

「なんでも…ないです…」

流石に年上&身長が大きい人ににらまされると怖いな。

俺なんて、身長が百七十二センチしかないというのに。

「死にたい…死んだほうがまし…」

そんな言葉は実戦を経験してから言うものだよ…」

セズクは遠くを見るような目をしてから、再び俺に視点をあわせた。
いったいこいつは何者なのだろう。

最終兵器のように腕などを変えることができる謎の生命体なのだろうか。

それならば、シエラやメイナは何者なのだろうか。

「なあ…ひとつ聞いてもいいかな？」

俺がそう問うと、セズクはおもちゃを買ってもらった子供のようになっこり笑い

「なんだい？」

前髪を少し触りながらOKしてくれた。

「あの一步道の時：お前はいつたいなにがあったんだ？」

不意に銃声が響き、射撃場的に穴があく。

硝煙のにおいがつーんと鼻を刺激して、銃口から立ち上る煙をフツと吹き消したセズクは

「そのとき、僕は連合郡から逃げていたんだ。

この機会に僕のことをすこし話しておこうかな」

ゆっくりと、目をつぶってぼつぼつと話しはじめた。

「あの時、僕は連合郡に追われていたんだ：」

「僕は、アメリカ共和国のニューオレンジ州に生まれたんだ。

自然が綺麗なところだね：

でもある日、帝国郡が攻め込んできたんだ。

自然たちは血や死体でそまり、水は汚れていった。

まだ、そこまではよかったんだ。

本当の悪夢はここからだったのさ。

帝国郡がなんと、村に攻撃をはじめたんだ。

連合郡の兵士をかくまうとかなんとかで…ね。

そのとき、僕は両親や恋人…あ、女だよ？を殺されてしまったのさ

その日をきっかけに、僕は連合郡へと入隊した。

復讐というものは時に恐ろしいものだね。

僕はどどん、力をつけていって十七という若さで陸軍少佐にまでのぼりつめたんだ。

前線になんどもなんども投入されたがそのたびに帝国郡の奴らの首を取って帰ってきた。

そして、ニューオレンジ州から帝国郡の奴らを追い出すことに成功した…。

その成果をたたえて連合郡本部からの呼び出しがあったんだ。

うれしかったよ…ただ復讐にのみ生きてきた僕をたたえようというのだから。

連合郡最高司令は僕の肩をだいて、こういつてきたんだ。

『この連合郡は君のような奴が必要なんだ。病気なんかで死なれたら困るからね。』

今のうちに、あらゆる病気に対する耐性をつけておこうか』

その流れからして、僕は注射をうたれたんだ」

一度話を切り、注射で打たれたのであろう右の腕をさするセズク。

そして、再び口を開いた。

「注射をうってから、約一週間はなんともなかったんだ。

だが、八日目の夜…そう十二月四日だよ、忘れもしない。

急に体中が熱くなってね…

そう、まるで体中に火がついたみたいだったよ。

一番熱い右腕を水の中に入れたことを覚えている。

水の中で皮膚がべろん…と向けて筋肉だけの腕になったこともね。

そのまま僕は熱さのために気絶してしまったのさ。
気がついたら、連合郡の施設の中で白い天井を見上げていた。
隣に、博士みたいな男が立っていた。

その博士は僕を見て『最高司令官がお待ちだ』と僕を司令官室へと連れて行ったのさ。

そこでいわれたんだ。

『君たちは連合郡所属V型最終兵器として、今ここに転生した』と。

この時に、僕を含め十人ほどが最終兵器に改造されていた。
初めはなんのことか分からなかったが、司令官が話を進めていくうちにだんだん分かってきたのさ」

そこで、セズクは右腕を銃やドリルに変えた。

シエラやメイナを見ている俺にはどうってことはないが
常人がこれを見たら腰をぬかすと思うね。

その右腕を元に戻してしげしげと眺めた後再びセズクは口を開いた。

「一週間ほど、この最終兵器として与えられた能力を僕は次から次へと試した。

グレネードランチャーの弾を腕に装着して発射したりと本当に万能兵器となってしまうた

わが身をうれしく思った。

これで、帝国郡を滅ぼせる…そう何度も思っ喜びに体が震えた。
そして、実験という名の実戦に僕は投入された。

どのように役にたつのかという評価のためだろうね。

僕は必死に戦った。

あるときは戦車砲に体自体を変えたこともあった。

そして、もらった判定は

『まあ、まあ役に立つ』

このようにあいまいなものだったんだ。

……悔しかったね」

セズクは天井を見上げ指を組んだ。
椅子に座り、すらりと長い足を組むと再びセズクは話し始めた。

「それからしばらくして僕達はS・D：そうあのときだよ。

S・Dという最終兵器の観測のために僕達は連合郡本部からアメリカ共和国へと飛んだんだ。

そこで、戦いを挑んだのが間違いだったんだろうね：

僕以外のやつらみんな死んでしまった」

すこし悲しそうな顔をして

「そこで好みのものを見つけたから別にかまわなかったんだけどね」

と、付け足した。

さて、好みのものって俺のことだろう。

お前昔彼女いたんだろう？

「まあ、僕の性癖は最終兵器になってから変わったものだからさ。

昔はまともだったんだよ。

それはさておき、隠しカメラでS・DのみならずF・Dの撮影に成功したものの

ここで死んだら意味がないと感じた僕は迷わずににげた。

戦闘神——メイナという名前はぴったりだと思うよ。

そのS・Dの慈悲のおかげで僕は何とか逃げ切ったが本部の入り口に着くと倒れてしまったんだ。

ふと目がさめたときに司令官と博士がぼそぼそと話しているのが聞えたんだ。

悲しいかなこういう声っていうのは聞きたくなるのが人のさがだ

よね。

やっぱり聞くんじゃないかったよ。

ありきたりとか思うかも知れないが僕の両親を殺したのは連合郡兵士だったのさ。

若い人材を求めている連合郡の卑劣な計画に乗った僕が馬鹿だったと気がついた瞬間だった。

治療中という身を見捨てて帝国郡の味方になるため、僕はすぐに飛んだ。

だが、連合郡も馬鹿じゃないようだね。

すぐに、新しいV型最終兵器の連中に僕を追わせ始めた。

みんな僕よりも若くてね：十五や十六の奴らばかりだったんだ。昔の自分を見ている気分になって：とてもとても殺す気になんてなれなかった。

まあ、ここから先は言わなくてもわかるだろう？

見事に帝国郡本部にへと逃げ切ってそこでジョンに拾われたってわけだ」

……………。

な、長い。

「で、なんでお前はここまで俺に付きまとうんだ？」

長い話はいいんだ。

いや、本当に。

身の上話がなくても大丈夫だろ：と思った瞬間にこれだ。

俺が気になるのはどうして、ここまで俺につきまとうのかということ

ころだ。

しばらく、セズクはきょとした後ふっ…と幼い弟を見るような目で俺を見た。

「理由はタダ一つ。

君を殺せばF・DやS・Dは絶望し連合郡のものになるという作戦が起動したからだよ。

それに、かわいいし、僕のタイプだからにきまっているじゃないか♪」

「え…ええ!？」

俺が連合郡から命を狙われる意味がわからない。

俺が…なにをしたというんだ？

「まだ連合郡の奴らに顔も性別もばれていないから安心して。

いままでのパターンから考えたら僕がばらさない限りは安全だから」

「俺は…死ぬのか…？」

「そうならないように今こうして訓練してるんでしょ？」

それに僕の目が黒いうちは波音に指一本触れさせないさ」

なるほど…

守ってくれるというのはうれしいんだが…

なんか、分からなくなってきた。

ってか、お前がばらさなかったら大丈夫なんだろう？

「なやむ波音もかわいいな♪」

本当に食べてしまいたいよ、くすくす…」

いやいや、獲物を狙う猛獣の顔をされても…

「俺、男だぞ？」

正論だと思うんだ。

これが俺の考え方だ。

「いいか、落ち着け。」

俺は可愛いところなんてないし、強調するけど俺は男なの！

男は男と恋しちゃだめだよ！」

ふう…

言っちゃった。

これで付きまとうのをやめてくれればいいのだが…

「くくっ…なら仕方ないね」

おっ。

あきらめてくれたようだ。

「ならば力ずくで分からせてあげるしかないようだね!!」

セズクはにやにやと笑いながらずんずんと俺に近づいてきた。

防衛本能が働きこの部屋から出ようと床を思いつき蹴って走り出す。

だが、チーターのごとく俊敏な動きをしたセズクに気がついたら抑えられていた。

「や、やめろ！
頼むやめてくれ！」

バタバタと暴れる俺を軽々と抑えるとセズクは急接近してきた。
抵抗など無のように俺を難なく仰向けにする。

「いいじゃない♪
初めてなんだろう？
やさしくしてあげるからさ♪」

息が…
息が首筋にかかる。
かなり、怖い。
それに、屈辱感がハンパないです。

「では、いただきます♪」

「い、いやだあ！！
助けて…」

リアルに涙が出てそれを見てうれしそうに身もだえするホモ野郎。
セズクの唇が俺の唇と触れる一歩前に女神は訪れた。

「波音…ただいま♪」

がちやりと、扉が開いてシエラやメイナが入ってきた。
た、助かった。

「ナイス、お前ら！！」

ああ、神様ありがとうございます。

こうして、助かったことを恩にきります。

流れ出たなみだを袖で拭いて、親指をメイナたちにつきだす。

ここまで最終兵器達のKYさに感謝したのは初めてだ。

「あのー、教官？」

「いったい何をしていたんですか？」

俺とセズクの体勢を見て仁が問う。

仰向けになってお互いの顔同士が近かったらそういう疑問も持つわな。

普通なら。

「見て分かるだろう？」

波音が逃げようとしていたからこうして捕まえたんだ」

「う、嘘っ…むぐっ！」

俺の声はセズクの右手に防がれてしまう。

そんな怪しい行為を見ても疑問をいだかない三人。

お前ら、疑えよ。

「まあ、波音ばかりかわいそうだし…ってことで次からは僕たちも入るからな。

セズク教官お願いします」

ぺこりと頭を下げるシエラ。

そういえば、最近のシエラの話し方はやわらかくなってきたと思うんだ。

まるで自分が兵器だということを忘れてるように。

昔は軍人みたいな口調だったのにな。

「ちっ…」

セズクは舌打ちをして俺からどくと射撃場的に向かって銃を乱射した。

セズクには悪いが、これでいいと思うんだ。

危なかったけどな、今回は。

「お、そういえば飯がそろそろ出来上がるらしいぜ。

波音、行こうぜ！」

仁が俺の腕をひっぱる。

ふと、仁も俺と同様狙われているのかな…と思ったが今はこのひと時の平和を楽しむとしよう。

八時を刺していた時計の針は気がついたら九時を刺そうとしていた。陽気にはしゃぐ最終兵器二人の相槌を適当に打ちながら俺たちは食堂へと足を運んだ。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

射撃場にて（後書き）

どうもありがとうございます。

本当に本当に読んでいただき感謝しています。

射撃場にて2

「それでは、いただきます」

俺は目の前のごちそうへ手を伸ばした。

主に精のつく食べ物ばかりだった。

味はまずくもなく、かといっておしくもなく…というところ。

つまり、普通の味だった。

感想終わり。

「波音、風呂があるらしいぞ。

入らない？」

仁がテーブルから取って来たつまようじで歯をシーハーしながら言ってきた。

風呂ね…入るか。

海水に濡れたせいで頭はべたべたするし…

「ん、OK。

入ろうぜ、仁」

その後ご馳走様をして部屋から着替えを持ってきて風呂へ直行する。飛行機とともに落ちたはずのトランクはいつのまにかジョンがフォーゲルを直して

海面からすくい上げてきてくれた。

トランクの鍵が開いているとかはきにしない。

「うわあ〜〜」

そう歓声を上げるぐらい目の前には見事な浴槽が広がっていた。日本式で、大きい湯船があってお湯がたぷたぷと溜まっている。

「ふあゝ…」

リラックス、リラックス。

やっぱり故郷の文化はいい。

ただ、一つ心配なことそれは…

「だから、ジョン大佐それはですね…」

セズクの登場だった。

だがうれしいことにセズクはジョンと一緒に入ってきたので流石に俺にこの場でおそいかかるわけにもいかないだろう。前をタオルで隠してさっさと頭や体を洗い風呂から上がる。途中、飢えた狼に狙われた山羊のような気分にも何度も襲われた。大浴場のドアを開けて外に出る。

「Le boゝ♪De sle se mini nie tゝ♪」

ジョンが機嫌よく歌いだしたのが聞える。

あの独特の発音はベルカ語だろう。

そう考えたところでどうでもいい疑問が頭に浮かぶ。

なんでハイライトに共同大浴場という日本の文化があるんだろう。場所の節約なのだろうか。

部屋には風呂はなかった、ということは場所の節約&男の裸の付き合いかというやつだろう。

女は知らないが、今日見る限りでは女兵士も男と同じぐらいいるようだ。

服を着て脱衣所を出発、仁と俺の二人部屋に戻る。

「やっぱり、こうなってたか…」

「ですね、ははは…」

ぐちゃぐちゃに散らばった部屋の荷物。

全部俺と仁のものである。

トランクのふたが開いているのを忘れて放り投げたりしたのが原因のよう。

「やつほ、波音。

遊びに来たよ…よ？」

なんで二回言ったんだ。

何はともあれいいところに来た。

「メイナ、ちよつとシエラ呼んで来て」

「？」

私が来ちゃいけなかったのかなあ…」

小さい声でぼやきなが向かいの部屋に飛び込んでいったメイナは

「モゴモゴ…ぷえっ！

ち、ちよつと姉さん!？」

右手にシエラをキャッチしてパタパタと戻ってきた。

シエラは歯磨き中だったようで歯磨き粉を吐き出す音の後水を流して歯ブラシを左手に持ったまま俺のところへ運ばれてきた。

「うむ、ごくろう」

俺は運ばれてきたシエラをみていつか買ってやった苳パジャマを着ているのに微笑した。

うん、かわいいな。

女物なんてわからないものだけだな。

「口の周り、泡…」

「あふっ！」

あふっ？

なんか、よく分からない奇声を上げた後シエラは顔を赤くしながらあわててハンカチをポケットからとりだして口の周りをごしごしこする。

「もう取れたぞ、バカ」

「バ、バカじゃない！」

俺はごしごししていたシエラにそう言い放ち小さな喧嘩が起きる前に

「まあ、とにかくお前らを呼んだのは他でもない。

黙ってこの部屋を見てくれたまえ」

ぐちゃ…

「俺はお前達の主人である。

よって暇そうなお前ら二人にこの部屋の片づけを命ずる」

「へ：？」

えらそうにベットにふんぞり返っている俺と
ちよっとおどおどしている仁とを交互に見る二人。

まるで俺か仁が嘘と言うのを待っているかのような目で。
長い沈黙を破ったのはシエラだった。

「いやだ！

意味が分からない！」

でしょうね。

やっぱり自分達でやらなきゃダメのようだ。

楽しようとした俺たちがバカだった。

言うことを聞いてくれるかと思っていたんだがどうやら無理のよう
だ。

「ちっ：仕方ない。

うん、二人とももう帰っていいぞ。

自分達でやるから、ほら帰れ。

邪魔になる、そこに座られると」

あえて冷たい言い方をして慈悲を刺激する。

いかん、今日の俺はDSのようだ。

理不尽なことばかりいっている気がしてならない。

「じゃ、二人ともお休み」

仁が二人に言い放つ。

ちよっと、がっかりしたように。

すると二人は顔を見合わせてしばらくこそそ相談した後

「なんかかわいそうだからな…少しぐらいなら…」

「手伝ってあげても…いいよ?」

「マジ?」

「マジ、マジ」

やったぜ。

俺と仁は顔を見合わせて作戦成功のうれしさをかみしめた。

ふっ、すべてはシナリオ通り。

この男二人という異様な空間に女というオアシスが必要だったんだ。それから約一時間ほどかけて部屋の片付け終了。

結局少しかいいながら最後まで手伝ってくれた二人に感謝の礼を述べた後

俺は歯を磨きベットに滑り込んだ。

なんか、布団の中がもそもそ動く。

なんだろうと思った俺は布団をがばっとめくった。

「やあ♪」

「ひっ…!」

思わずおびえた声を出してしまう。

ホモ：野朗：

「静かに。」

こんなところを仁君に知られてもいいのかい？」

俺はホモじゃないんだが。

別に仁に知られても困るものではない。

だって、ホモじゃないもの。

だが、誤解というものは解きにくいものだし俺は極端な面倒くさがりやなのだ。

「くっ：お前：」

俺は静かにセズクに悪態をつくが、セズクは全然気にしない様子だ。逆ににっこりと笑い

「ひどいなあ、波音。」

女として、好きな男にこういうことしてしまうのは当然だろう？」

「：は？」

女：なのかお前。

ふと、セズクの体を見るとふっくらした胸が確かに：ってダメだ。さっさと目をそらす。

目に毒だし、それに：

「だから、僕を認めて欲しいんだ。

さみしいんだよ：」

セズクの目から涙がこぼれ、シーツに滴り落ちる。
そして、その顔がどんどん俺に近づいてきた。

「や、やめろ…」

そして…

と、いう夢を見た。

「ぶっは！」

ギリギリの危ないところで俺は何とか目を覚ました。
全身汗びっしょりだ。

「夢…か。」

…よかった、本当に」

あんなに、可愛くてセクシーなセズクがいてたまるか。
しかも、女だったし。

「んー…」

波音、うるさいぞ…むにゃ…」

寝言なのか本当に俺にいつているのか疑問がのこる言葉である。
仁は気持ちよさそうにスースー寝息をたてている。
鼻をつまんでたたき起こしてやりたいぐらい安らかな寝顔だ。

「ふへへへへ、姉ちゃんええ尻しとるやないかい…」

俺と、ええ尻の姉ちゃんをつながりが分からない。

第一、どんな夢みてんだ、お前は。

って、寝相悪すぎだろ。

ベットのギリギリのところで寝ていて、なんて器用な寝方をしているんだと感心させられる。

「しかし、本当に嫌な夢を見たなあ…」

俺は上着をばたばたして汗を乾かした後、冷蔵庫からお茶を取り出した。

ひんやりとしたペットボトルが体を冷やしてくれる。

「ふう…」

ようやく、頭が落ち着いたところで再び俺はベットにもぐりこみ眠りに落ちた。

「あの…大尉。

なにをやっているんですか？」

部下からの白い視線を無視してまで

「くっ、鍵がかかってやがる！」

波音達の部屋の外ではセズクが一生懸命に鍵を開けようとしていたのは

ここだけの裏話である。

「おい、波音。
起きろよ」

「…ん…」

低血圧にはきつい朝が来た。
ゆさゆさと体がゆさぶられて夢の世界から意識を引きずり出される。

「んゝ、後五分…ZZZ…」

俺はその意識をがんばって再び夢の世界へと引き戻す。
すまん、俺は眠いんだ。

「もう、昼の二時だぞ？」

それだけ毎日疲れが溜まっているんだ。
最終兵器というお荷物があるからな。
頼むから寝かせてくれ。

「起きろよ！
そろそろ、セズク教官の銃の稽古の時間だぞ！」

「ん…了解でふ…」

仕方なく目を開け、布団の上においてある対セズク用のお守りを引

き剥がす。

大きなあくびをしながら俺はまだ未練のある布団から這い出した。夜の時は気がつかなかったがこの部屋には窓がなく時間がわからない。

おなかはそのそこ減っているし携帯の電源を入れると午後二時の表示があったことにより

ようやく俺は寝すぎたことに気がついた。

てっきり、仁が嘘をついているのかと思った。

枕元においておいた軍服を身に着けて顔を洗おうと洗面所へと向かう。

冷たい水で顔を洗うことによりようやく体のエンジンがかかり始めた。

さっぱりした表情で先に射撃場へと行った仁の後を追う。

長くくねった廊下をただひたすら歩く。

どこか遠くで帝国郡兵士が演習もしくは訓練もしているのか元気のいい声が聞えてくる。

だが、その声も射撃場が近くなるにつれて銃声によってかき消されてしまった。

『射撃場』とかかれた部屋のドアを俺は蹴って開けた。

もし、ドアの近くにセズクがいるのならそれでぶつとぼすつもりだったのだが

「来たね、波音」

セズク教官は遠くにいる兵士を教えている最中で俺の攻撃はむなしく空を切る結果となった。

兵士を教え終わったのか片手に拳銃を持ちながらセズクが俺に近寄ってくる。

近いです、教官。

「来ましたよ、教官」

小さく憎まれ口を叩くがセズクには聞えなかったようだ。

聞えていたとしてもこの野郎が微笑をやめるとは到底思えない。

目を見ないようにして自分の射撃場へと急ぐ。

途中で八人ほどの兵士とすれちがい流石にこの大人数の中で

襲い掛かってくるほどセズクはバカじゃないだろうと俺は安堵の息をもらした。

もし二人きりだったら俺が自然界で言う食われる側になっていたのは間違いないだろう。

セズクが文句をつけられないぐらいにさっさと稽古を終わらせようと思いつく一発ぶっ放す。

「うっ!？」

銃弾は的よりもはるかに右上にそれて火花を散らした。

ってか、仁やシエラはどこにいるんだろうな。

俺はそれのみが楽しみでここに来たんだが：

「くすっ♪だめだなあ波音。

僕が手取り足取り教えてあげるね♪」

真後ろからそんな声が聞えてきて全身に悪寒が走る。

逃げようと前に一步踏み出したときにはもう遅かった。

セズクの手が俺の腕をにぎり体を密着させてくる。

うわ、もうなにこの状況。

「銃はこうやって…」

セブクの説明などまるで頭に入らずどうやってこの状況から抜け出そうという
その考えで俺の頭はいっぱいになった。

i
n
u
e
s

T
h
i
s
s
t
o
r
y
c
o
n
t

射撃場にて2（後書き）

ありがとうございました。

どうかまたよろしくお願い申し上げます。

ハイライトにて

それから毎日俺は、いろいろな技術を叩き込まれた。
小銃からRPGなどの重火器までさまざまだ。

「だから、ここはこうやってですね…」

「なるほどな…ふえっ!？」

「ふふっ、いい反応するねえ、波音は」

「う、うるさいなっ!

急に触るほうが悪いわ!」

このバカセクハラホモ野朗め…
人の尻をかってに触るな。

汚い、汚らわしい、苔はえる。

まあ、そんな毎日とは今日でお別れである。

そう、銃器の扱いを間違えるたびにセクハラをされる生活はもう終わりを告げるのだ。

心からさっさと終わらせてあばよと行きたい。

それに今日はようやく楽しみにしていたハイライトをうろつける日なのだ。

午前中にちゃっちゃと終わらせてシエラやメイナ、仁とともに外に行きたい。

そう考えているとまた尻に奴の手が伸びてきた。

まったく…その手に銃口を当てて引き金を引いた。

「あっ、ぶねえ!」

ちっ…

流石は最終兵器モドキってトコか。
練習用とはいえゴム弾をゼロ距離射撃は流石に痛いのか。

午後二時。

昼飯を食い終えた俺は四人でようやく、よ・う・や・くハイライトの街へと繰り出すことが出来た。

ハイライトは半径二十キロほどの本島の周りに半径四キロほどの附島が八つ等間隔でついている。

それぞれ八つの附島と本当はお互いにつながっておりそれぞれ第一島道、第二島道と名がついている。

その島道の間中点から別の島道へとまた道が伸びており島同士の間には電車が通っている。

簡単に図で説明するところなる。

>i17200—2340<

………。

すまないな、画力がなくて。

これが精一杯なんだよ。

本島に置かれているものは中央機関…つまり政府だ。

連合軍の本部もここにある。

附島にはそれぞれ独自の街が出来ておりなかなか面白い仕組みとなっている。

グルメやら、ショッピングやら…

空と飛ぶ国と考えていいだろう。
そう、パンフレットには書いてある。

「ここにある技術が今の人類の文明に取り入れられた瞬間我々人類は爆発的に進化を遂げたらしい。

たった五百年余りで狩猟の暮らしからここまで持ってこれたのはこの宝の島があつてこそだ」

仁が、シエラとメイナにつらつらと説明している。
もつともだと思うね。

昔に発見されたときもハイライトは今のままとまるっきり一緒に紫の光を放ち続けていたという。

一時は光の島と呼ばれ、神々がすむ島とまで言われ恐れられていた。そして、初めて人類が気球でこの島に降り立ったときによだれが出るような技術がごろごろ転がっていたという。

だが、宝の島といっても今の科学力ではこの島から発見された技術のうちのたった二％程度しか使いこなせていないという。

持ち出された技術の中にはバイオテクノロジー：つまりこいつら。

俺は隣できゃっきゃつと、騒いでいる最終兵器姉妹を見た。

こいつらの作り方などは発見されたものに入っているものの使いこなせていないと考えていいだろう。

だからこそホモ野郎などのモドキ：つまり出来損ないが出来ている。そもそもハイライトはベルカ帝国の倉庫と考えていいのだろう。

だが、ベルカ帝国の技術の中核となるものなどは残っていないという。

ハイライトが浮いているのと同じような機関はこの後世に残すべきではないと考えられた結果

焼き払うなどして消滅させた可能性が高い。

ジョンから聞いたところによるとせっかく機関を研究しても今の科学力ではベルカ帝国独特の

科学力である超光科学が実現不可らしい。

ナク：なんとかとかいう光エネルギーを作り出すことが難しいためだ。

つまり、せっかく開発書があっても意味分からん…と。

こういうことだ。

このハイライトも下へと紫の光を噴出して浮いているのに間違いはないのだろう。

昔のベルカ帝国は今の人類みたいに石油を燃料としていたのではなく光を燃料として技術を発展させたのだろう。

今となってはそんなこと知りようもないことだが。

「えーと、ショッピングでいいでしょ？」

「うおい！待て！」

勝手に決めるんじゃないええ！」

俺は一時思考を中断してメイナに突っ込んだ。

「ここは多数決だろう」

仁やシエラの意見も尊重しないとな。

それに俺はショッピングよりも普通に散策を楽しみたい。

「じゃ、手を上げて決めるぞ」

十分後。

「……………なんで？」

「ねえねえ、波音！」

「私アレ欲しい！」

「波音：僕はアレが欲しいのだが」

「波音、俺はPCの…」

ハイライトの附島の直感を感じたところで降りたがどうやら正解だったようだ。

多数決では見事に俺の負け。

もはやここまでくると策略としか言いようがない。

電車から降りて駅を出た瞬間見渡す限り店、店、店、店：

ずらずらずら〜と並んでいる。

これがハイライト五万人の生活を支える市場なのか。

人もたくさんいて、にぎやか極まりない。

それぞれに二万円ずつ渡して二時間後再び集合という約束を交わして俺達四人はあちこちへと散らばった。

別に何も買うものがない俺は市場の店の間を縫って附島の端から海でも眺めることにした。

ハイライトの八附島及び本島とを結ぶ銀色のボディに青いラインの電車は島道の上を走るものと

下をぶら下がりて走るロープウェイ型に分かれる。

二つとも三車線あるがなぜか真ん中は使わないという謎の車線もある。

それぞれ右回りと左回りがあり人口の移動を支えている。

大型な割には騒音が少ない電車が駅に滑り込んでいくのが見え、人々がその腹から吐き出される。

それを横目に俺は市場からどんどん離れて行ってやがて人っ子一人

来ないようなところまで歩いてきた。

立ち入り禁止と書いてある看板を乗り越え端へ向かって歩く。

「おっと！」

急に足場の石のようなものが沈降し、急いで近くにあった木でバランスを整える。

俺が踏んだところはもろくなっていたらしく四角い穴が開いてしまった。

「なん…だ？」

その穴から紫の光がこぼれ、空へと伸びる。

昼間だからばれないかもしれないが夜だったら間違いなく連合郡警備隊にみつかってアウトだろう。

ハイライト附島の光だろうがとても気になった俺はその穴へと体を滑り込ませた。

好奇心には勝てないものだ。

「よっと…」

予想以上に床は近くにあって滑り込んだ瞬間足が床に着いた。

手を伸ばしてジャンプすればまた上に出れることを確認してから周りを見渡す。

中はやはり動力源の部屋のように丸い大きな部屋の中に十〜二十ぐらいの不思議な形をした物から

紫色の光が湧き出し、それが壁や床を伝い下へと向かっていくのか分かった。

自分のくつの音が広さも分らない部屋にこだまして何人もの人がいるような感覚を覚える。

天井にはいろいろとこれもまた不思議なものがついているが今の俺の知識では見ても分からないものばかりだ。

うろうろと歩き回っているうちに階段を見つけ、下へと降りることにした。

下の階までがとても長くて階段の手すりをから下を見るとらせん状にずーっと続いているのが見える。

予想以上に中は紫の光で満ち溢れており、暗くて見えないということとはなかった。

大体十分ほどかけて階段を下りる。

「ふう…」

一息ついてまた歩き出そうと思ったら目の前に黒光りする何かがあるのが見えた。

その形は

「列車…砲…？」

今俺の目の前に広がっているものは黒光りする列車砲のようなものだった。

「そうさ、列車砲さ」

突如背後から響いてきた声の主に心臓をバクバクさせながら反射で銃を向ける。

これも、くやしいながらセズクの特訓のおかげである。

声の主は壁の穴から這い出てきていった。

「おいおい、そんな物騒なものを向けるなよ。」

俺だ、ジョンだよ」

紫の光の中、壁の穴のドアをパタムと閉めて俺の方を向いたのはジョンだった。

「こいつは、二十八型装甲光兵器列車砲。
ベルカのオーバーテクノロジーの兵器さ」

ジョンが列車砲の車体をポンと叩いて言った。
銃をしまい、俺はジョンにたずねる。

「なんで、こんなものが？」

「それは簡単なことさ。

このハイライトはベルカ帝国の要塞として作られたんだ。
上に電車とかが走っていただろう？

そのレールはこの列車砲を動かすためのレールだったんだ。

確か、三車線ほど使ったんだ、この巨大列車砲は。

この二つほど下に行けばぶら下がるタイプの列車砲もあるはずだ。
こんな便利な空飛ぶ島がいい拠点にならないわけがないだろう？
それにこの島の本当の名前を知らないお前たちは平和な島だと考
えていたんだろうな」

「本当の…名前？」

「そうさ。

超巨大超空移動要塞、ハイライト っていうえらそうな名前がこ
いつにはあるんだぜ」

「要塞なのか？この島は」

「そうさ、さっきも説明しただろうが。

要塞なのよ、この島は。

もう一回言うが、こんな便利な島がいい拠点にならないわけがないだろう？

まあ、連合郡に列車砲が見つかっていないだけマシか。」

「確かに……。

言われてみれば」

「だろ？」

俺はここで疑問を抱いてしまう。

なんで、ジョンはここまでハイライトのことを知っているんだ？
それをそのまま口に出す。

「なんで、あんたはここまでいろいろなことを知っているんだ？」

「何で…か。

はあ……。

教えてやるよ、俺も鬼灯のことも。

俺達は今は無きベルカ帝国からハイライトを任された一族の末裔なのさ。

俺の本当の名前は リョウクウ 龍空桜月 さげつ っていう名前なのさ。

ついでに鬼灯の野郎は ジェアー・シレルス いい名前だよな」

ジョンは顔を少しそむけて嫌そうな顔をした。

本名を名乗るのがよほど恥ずかしかったらしく、顔が少し赤い。

ま、まあ…桜月…ねえ。

そして、顔の赤みをごまかすように持参していた酒を飲み始めた。

「今から俺はお前にいろいろなことを教えなきゃいけないだろう。だが、黙って聞いてくれ。」

中には仮想の場所もあるが今の時代を一番正確に捕らえることの出来た説だとおもう。

今から五千年前、ベルカ帝国は約百八十ほどの自治区が集まって全世界を支配していた。

百八十の細胞が集まってベルカという人間を作っていたと考えてくれ。

お互いがお互いを助け合い本当に平和な国だったと聞く。

約二十ほどの世界の通貨や政治などを担当する中央自治区。

中央自治区の補助をする約百六十の補助自治区。

これらは助け合い約五千年もの長い間ベルカ帝国を繁栄させてきた。

ところが、王家の力が弱まった隙に中央自治区が補助自治区から搾取を始めた。

やがて中央自治区の陰謀により王家は破滅、最後にベルカ帝国の技術をすべてなくした後

ベルカ帝国最後の王は自殺した。

それのおかげで人類の科学力はどん底にまで叩き落された。服すら作れなくなり、都市は壊滅。

人類は鹿やいのししなどの獣を狩って何とか生き抜いた。

その生活から約百二十年程たってようやく石油をつかってエネルギーを作り出すことに成功した。

中央自治区は連合郡と名を改めさらに補助自治区からの搾取を強化した。

これにより補助自治区からの反発が大きくなりやがて補助自治区VS連合郡へと全世界は戦争へと傾いていく。

世界でベルカ帝国の研究が禁止されているのは、連合郡が自分の旗色が悪くなるのを気にしてのことだ。

いくつもの大きな機関が群れて作ったのが連合郡。

逆に、数が多いが技術力にも圧倒的な差がある帝国郡。

つまり、今のこの戦争は元の世界へと戻そうとする帝国郡の行動なんだ。

現にアフリカなどの地域は昔は栄えていたというのに今じゃあのだまだ。

我々ベルカ守護四族は：王を守ることすら出来ないことが露見した時代でもあった」

今、聞きなれない単語が耳を突いたので俺は思わず聞き返してしまった。

「ベルカ守護四族？」

「ああ、四族は我々空をまかされた龍空家にはじまり

ヨーロッパ、アジアを任されたシレルス家。

南北アメリカなどのタルワナルカ家。

アフリカやオーストラリアのネメルシエア家。

こんな感じでそれぞれの自治区のまとめ機関みたいな一家のことさ。

そして、優れた戦士を生み出し、王を守る役目をも持った一家のこと。

もつとも、俺はタルワナルカ家が一番許せないんだけどな。

守護という名を与えられながらも連合郡側についた一族め：

そういう時代からだったかな。

大切なものが消えるとき

三つの死は姿をあらわす。

死は力を使い地上を無に戻す。

死は鬼神となり

恐怖の中で消えていく。

大切なものを失った悲しみと共に

こんな伝説が本から掘り起こされたのは」

ジョンはキラキラと紫に光る天井を眺めながら言葉を吐き出した。それと同時に俺はこの戦争の理由とともにジョン達、帝国郡が負けても負けても戦い続ける理由が分かった。ふと携帯を取り出して側面ボタンを押す。

背面ディスプレイに映し出された時間は集合十五分前だった。

「それでは、ジョンさんそろそろ集合時間なので…」

「ん、分かった。」

ここは俺達の秘密の場所だぞ。

どこから入ってきたのかは知らんがもし天井の抜け穴から入ってきたのなら閉じておくように」

ジョンは右手を上げて俺にふった。

俺も手を振り替えてあの長い階段を上るのかと思い心底うんざりした。

たっぷり十分かけて階段を上った後天井の穴をふさぐ。

穴から這い出した瞬間目の前に青い海が広がった。

落ちたときは穴に気を取られて気がつかなかったがすぐそばに海はあった。

船がゴマぐらい小さく見えて、改めてこの島の高さを感じた。潮風に背中を押されながら俺は集合場所へと足を運んだ。

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

ハイライトにて（後書き）

画像見えますでしょうか？

貼りが分からなくて・・・

迷惑かけてすいません。

修学旅行にて四日間更新を休ませていただきます。

どうかよろしくお願い申し上げます。

後、お気に入りに登録してくれた方ありがとうございます。
とってもうれしいですっ><

波音の厄介日（ちょっと外伝）

誰でも思い出したくない日…

そんな日はないだろうか。

十二月二十九日。

今日は俺にとってそんな日である。

「ふぁ～ねみい」

俺は目を覚ました。

気がつけばもう朝の十一時。

りっぱな昼である。

今日は十二月二十九日。

俺にとっては思い出したくない日である。

「ん～、腰痛いな…」

腰に手を当てぐいぐいひねる。

「おっはよ～、波音～！」

ど～ん！

グギッ！

「メ、メイナ…貴様…」

今、いや～な音が腰から響いた気がするんだが。

たとうとすると案の定腰から鋭い痛みが伝わってきた。
もしかして、これって…

「ギ、ギツクリ腰!？」

「えーと、波音…
大丈夫なのかな？」

「見てわかれ!
これが大丈夫にみえるんかい!?!?
腰痛いんじゃワレ、ゴラァ！」

メイナはほっぺたを掻きながらそんなこといわれても…とかほざいていやる。
痛む腰を抑えながら立とうとしても立てない。
ふっ、どうやら完璧にギツクリ腰なんだぜ☆

「いてえ…」

「おはようございまーす、僕の波音…って!?!?
布団の上で僕を待っていたんだね!
いつの間にそんなに積極的になったんだい?
今から僕がおいしくいただいてさしあげ…」

「だめえー!」

ナ、ナイスメイナ。
そこでとめてなかったら確実に今俺は食われたと思う。
うん、間違いなく。
ってなんで、ホモ野郎がこんなところにいるんだ…

「私呼んだ」

呼ぶなよ。

そういったところでふと気がついた。

「シエラは？」

「まだ寝てるね」

「さようでございますか」

まったく、なんて図太い奴だ。

って聞くまでもなくシエラは俺の横で寝てるんだよな。

朝っぱらから不幸が続きすぎてまったく気がつかなかったぜ。

「おはよう、波音！

今日も元気に行こうか！」

ど〜ん！

グギギッ！！

「じ、…仁…」

俺は力尽きた。

「で、どうすればいいんだよ」

俺は寝転んで腰を抑えながら三人に話しかける。

「この腰どうすればいいよろし？」

セズクが真つ先に手を上げる。

「ここは、僕一人にまかせてくれないか？」

What!

何!?

「OK、任せた」

「了解、終わったら呼んで」

「待って。」

お願い、一人にしないで！

「何言ってるんだ、波音。」

二人いるじゃないか」

違
う
！

そういう意味じゃないんだ！

「さうで、波音、僕の力を見せてあげようかな」

[Noooooooooooo!!!]

セズクは、俺の上にのしかかり思いつきり腰を曲げた。

レディ！

ファイト！

コングが鳴る。

ぎりぎりぎり…

「痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛いって言ってんだろ
うが！！」

足を上に上げけり落とそうとするが、届かない。
くっ…ちくしょう。

「あれ、直らないな」

ぐったりした俺をみてセズクがぼやく。

もう、だめ…

いつそのこと殺して。

腰は痛いわ、空気はまずいわ、やらしい雰囲気漂っているわで
どうしましょ、本当に。

そして、びっくりすることに

「ZZZ…」

シエラはあの騒ぎの中ずっと寝ているのである。
すごいな。

「ふふっ、汗がしたたっていかつぐったりしている波音。

これは僕に食べろという隠喩なんですね、神よ！」

神様はそんなこといわないと思うよ。

「ふふっ、さあ、波音。

いままで感じたこともないような快感を君に感じさせて…」

「ふっふっふっ…」

「だ、誰だっ！」

俺の目の前にホモ野朗の唇が近づきそうになったときに戸棚から唐突に笑い声が響く。

「私達だ！」

戸棚から姿をあらわしたのは、そう紛れもない…

「鬼灯のおっさん!!」

なにやってんだ、と同時に助かったという安堵を感じる。
そして、なんでそこから出てくるんだ。

「まて、今『私達』って言わなかったか？
誰だよ、後」

「俺だ」

「ジョン!？」

あんたらふたり、なあにやってんですか。
いい年こいてかくれんぼですか。

「こんなことを想定して三週間ぐらいこもっていたんだがいっこうにその気配がないもんでな」

「ようやく、今でれたというこっちゃ」

メタ○ギアのス○ークですか、あなた方は。

しかも三週間もよく戸棚の中で生きてられましたね。

「体重が十五キロ落ちた」

「帰ってください」

「そういうなよ、波音」

「おっさんがそんな風にいつてもうざいだけです。帰ってください」

「まったく、今我々が帰ったらセズク君が君を襲うぞ？」

「ハッ！」

「さて、帰るか鬼灯よ」

「そうだな」

二人はくるりと方向転換してドアへ向かって歩き始めた。

「すみません、嘘です行かないで！」

わめき散らしてとめようするがそんな俺をあざ笑うかのように

ドアは鼻っ先で閉じられた。
おわった…

「さて、行きますか波音」

いよいよ終わりか…
初めては女の子としたかったのに…
セズクの手があそこへ伸びてさあ、これからって時に横で寝ぼけた
声がした。

「うにゅ…あふ…」

シエラが可愛いあくびをして目を覚ましたのだ。
目をこしこしこすっていちごパジャマを脱いで着替えだす。
そう、俺の目の前で。

「ちょ、あふ、シエラ、おまつ！」

「ん…？」

あ、波音だ…。

おはよ…」

マテ。

後ろ向くからマテ。
そんな願いが聞き入れられるはずもなくシエラの服は一枚、また一枚とはがれていき
ついに下着だけと…落ち着け俺。
って下着をぬいじゃだめだろお!!

くブラックアウトく

「さて、今日も元気に行きましょう！」

あふ、いいもの見たかも…

あれ、そういえばホモ野郎は？

「……………」

あれ、固まってる？

もしかして、ホモだからこそ女の裸体が弱点だとか？

なんにせよ早く逃げ出さないと…

痛む腰を引きずってホフクで布団から抜け出す。

セズクはあの形のまま動かない。

「くっ…ハア、ハア…いてて…くそっ、ビッチ！」

戸をあけようとしたときにずん、と上から衝撃が落ちてきて腰を直撃する。

痛みに体が硬直し、その隙に俺の体は宙に浮いた。
な！な！？

セズクがにこりと笑いながら俺をお姫様抱っこでベッドまで連れ戻す。

そう、お姫様抱っこで。

俺の五十四キロという体重はセズクにとって無に等しいらしく

さすが、最終兵器モドキといわざるを得ない。

それよりもお姫様抱っこが恥ずかしくて顔が赤くなるのを感じる。

それをどう捕らえたのかは知らないがセズクの息が少し荒くなる。

今度こそ本当にダメかも知れない、体がゆっくりとベッドに下ろされ可愛がるかのようにセズクが俺の頭を撫でる。

そして、クスッと笑い本当に大切な宝物を見る子供のような目をす

る。

頭をなでなでした後ほったを触り我慢できなくなったのか俺へのしかかってきた。

だが、俺はそのままやられるわけにはいかない。

セズクが俺の上にのしかかってきて少しでも抵抗しようと体をひねった瞬間だった。

クキ

腰で小さい音がするとともに痛みが引く。

もしかして、治ったのか？

セズクの体を掴み体全体を使って窓へと放り投げる。

柔道ならっというてよかった。

「波音！僕はいつかお前を絶対に絶対にいいいい！！！」

「へっ、おとといきやがれてんだ！」

窓を突き破ってセズクは落ちていった。

まあ、あんなんじゃないだろ。

さて、次は…

「メイナに仁…

血祭りにあげてやるぜ、ふふふ…」

俺はドアを思いっきり開け隣の部屋へと怒鳴り込んだ。

「てめえらああああ！！！」

と…

「お前ら：何をやっているんだ？」

詩乃や、綾、冬蟬など懐かしい面々が微妙に広い今で一生懸命飾り付けをしていた。

いつの間にこんなに集まったんだろう。

セズクに頭を撫でられたりしていたときなのか？

「セズクの奴：失敗したようだな」

ジョンがやれやれとため息をつく。

失敗…？

「仕方ないわ、波音。

今日は十二月二十九日、何の日か知ってる？」

いや…知らないな。

あいにくだが。

飾り付けをきよろきよろと見回したときケーキを見つけた。

気がつかなかったが机の上にはたくさんの料理が並んでいた。

その料理のメインである、ケーキ。

その飾られたチョコに書いてある文字：

『誕生日おめでとう』

「…そうか…」

そう…今日は俺の誕生日…

すっかり忘れていた…

親と姉さんが交通事故で死んだあのときから俺は自分の誕生日など祝わなくなった。

十二月二十九日土曜日、夕方。

俺の家族は俺を祝うために遊園地から料理店に向かっている途中だった。

遊園地でテンションが上がっている俺を見て微笑んでいる家族。

あのときの俺は最高に幸せだった。

だが、その次の瞬間だった。

目の前にトラックが真正面から突っ込んできたのだ。

母や父、姉はトラックの車体などで潰され血や脳漿が俺の顔や体に付着する。

母と姉が条件反射で俺を座席の下へと押し込んでくれなかったら…俺は、今この世にいなかったに違いない。

「今日は…俺の…誕生日…」

「そうだぜ、波音」

いつの間に後ろにセズクが立っていた。
無傷で。

「みんなお前を驚かそうとしていたんだよ。

まさか、ぎっくり腰になるとは思わなかったんだけどな。

「いただきます！」

みんなの笑い声を聞いているうちに

「十二月二十九日も悪くないな…」

いつの間にかそう口に出していた。

家族が死んでからというもの幸せと思わなくなっていたが
俺は今最高に幸せだ。

ありがとうよ、みんな。

あと、セズク投げてごめん。

F i n

「だから、それは俺の肉だろうが！」

「違うモンね、僕の肉だもんね！」

「仁もシエラも喧嘩するな！」

「肉をめっちゃ頬張っているてめえが言うな！」

……

がまんがまん、これも幸せなんだ。

「あ、肉が!!」

俺の頭に肉がべったりとつく。

……

がまんがまん、これも……

ベチャ。

「……」

てめえらああ!!!!」

波音の厄介日（ちよっこつと外伝）（後書き）

ありがとうございます。

本当に読んでくださり、感謝です。

リモコン

集合場所にはすでにみんなブーブー口をとがらせながらも俺の到着を待ってくれていた。

「いやゝ、悪い悪い。」

「つつい遅れちまった」

「おそい…」

シエラがむすつとしながら俺をにらみつけるのをメイナが「まあまあ」となだめる。

「まあ、五分ぐらいいいじゃないか、な？」

仁がそういうことによりシエラは

「そうだな……」

と怒りを静めてくれた。

すまないな、少しだけど遅れてきたことは反省するよ。

「で、次はどこに行くんだ？」

シエラがパンフレットをかばんから取り出しガサガサと広げる。お前ら、これが作られた時代の人間だろうが、まがりなりにも。

「僕達が生まれたときにはまだ建造中だったよな、この島」

「そうね。」

まさか要塞になっているとは思ひもしなかったけど」

「あれ、お前ら二人知ってたのか？」

二人は、知ってるも何も……と顔を見合わせて

「なんていうか、勘って奴か？」

直感でここは要塞ってわかったし、パンソロジーレーダーで調べ
てみても

実際に要塞だったし……」

なるほど。

やっぱり兵器なんだな、お前らは。

繰り返すかも知れないが、やっぱりシエラは最初の頃と比べて話し
方が

やわらかくなってきた気がするんだ。

兵器の心から人間の心へと移り変わってきたのかもしれない。

そんなシエラが急に目の色を変えて立ち止まった。

「なんか、僕達を狙っている奴がいるな」

「ん…いるねえ。」

——五人ってトコかな」

メイナは買ったばかりの可愛い手袋（クマが刺繍してあった）を右
手から外してポケットにしまった。

そして、右の指先を超小型レーザー砲に変える。

どこにいるのかまったく分からない俺と仁は飛んできた麻醉銃の銃
弾をシエラの

イージスが軌道をゆがめるまでなにが起こったのかわからなかった。完璧に俺たちが狙われている。こんな人が多いところでいい度胸である。

「あそこか」

メイナが目を細めて右手の超小型レーザー砲を向け見えないぐらいに細い赤いレーザーを五発あちこちに向けて放った。と、突如あちこちの店が大爆発を起こしたちまちま人々はパニックに陥る。

「テロか!？」

そう呟いて、俺たちの隣をかけていく警察官は人々の沈静に当たり騒ぎは一時的に沈静する。

あちこちで、キャーワァーはまだ続いてはいるものの。

「こいつらは……」

年配の警察官が、黒焦げになって死んでいる男の服や手の小銃をみて隣にいる若手の警察官に話しかけている。

「ええ、間違いありません。

このところ、健康そうな少年や少女に麻酔を撃ち込み
病院へ連れて行く医者のもぶりをしてさうという手口で……」

とにかく、連合郡兵士ではないことですこし胸をなでおろした。
人が死んだのに変わりはないのだが。

「わ、わての店が……」

店の主人だろうか。

ヒゲをはやしたおじさんの声にすまないと思いつつ俺達はこの場を後にした。

「ふー、しかし怖かったよな」

「まったくだ。」

あんなのに狙われたら普通の人間はひとたまりもないだろうな」

「俺達も普通の人間なんだけどね…。」

一応言っておくけど」

「まあ、何はともあれ俺達はまたあの二人に助けられたわけだ」

「しかし、いい湯だな」

その日の夜の風呂。

緑色の薬湯にゆったりと使った俺達の周りをアヒルのおもちやがガアガアと泳いでいる。

「だけど、つかまったら綺麗なお姉さんとかとできるのかなあ」

それを聞いて少し俺は自重しろと思った。

まあ、年頃の男だからしかたないのかもな、こういう話も。

ましてや、風呂の中には男しかないわけだし…。

「さあ。」

まあ、おばさん達の相手が関の山ってところだろうな」

とりあえず、そう答えておいた。

風呂から上がるとジョンに明日の仕事の話を持ち出された。

明日はとうとうハイライトの連合郡少佐に化けて超光学記憶媒体をいただくのだ。

すでに連合郡の間ではジョンからの情報操作で連合郡ハイライト部隊内のみで

連合郡少佐達一向が来るというデマを流してくれていた。

出発する前に鬼灯のおっさんに見せられた地図をもう一回見せられ位置を頭に叩き込まれる。

ハイライトは、内部が要塞のように……いや、要塞か。

かなり複雑なつくりになっている。

位置を覚えておかないとたちまち迷子になってしまうに違いない。

いくら仁が今日新しくウェアラブルコンピュータとやらを買ってさっそく改造。

超高性能の持ち歩けるコンピュータを作ってしまった。

腕に装着するタイプのコンピュータらしくコンパクトにまとめられている。

いざって時はこれを見ればいいのだ。

「—というわけだ。

了解か？」

セズクが一生懸命に説明して、さりげなく俺にウインクしてくる。
やめろ。

「ちなみに、帝国郡側としては手助けしたいところなんだがあいにく人手も兵器も足りないんだ。

よって、支援はほとんど期待できないと思ってくれ」

つまり、自分達でどうにかしろと。

そういうことだろう。

「以上だ、

作戦開始は明日午前十時からだ。

波音、仁、シエラ、メイナ。

お前らの健闘を祈る」

ジョンはそういった後、ポケットから煙草を取り出し火をつけた。煙がゆらゆらと昇り消えていく。

それを見た後、俺達はドアを開けておのおのの部屋へと帰った。

朝ごはんを食べても、食べても食べた気がしなかった。

昨日の俺は夢をまったく見なかった気がする。

正直、俺は今かなり緊張している。

ゆっくりと洗濯してあった服にのろのろと着替え、

セズクや仁が待っている本部の通路へとのろのろと足を運ぶ。

途中、帝国郡の兵士達が「がんばれよ」などの励ましの言葉をかけてくれたが

そんな声も今の俺の体の中を素通りしているようだ。

「おい波音、遅いぞ！」

仁がむすつとした顔で俺を待っていた。

心なしか、仁もいつもよりもそわそわしているようだ。

なんと言っても今までたくさんの仕事の中で一番今回が危険な仕事になるのだからな。

「じゃ、行くか」

左手に持っている麻醉銃の重みと、シエラ達の息遣いがなぜか無性に俺を安心させてくれた。

「がんばれよ、波音」

セズクが俺に手を振る。

俺も力なく右手を振り上げ、兵士達が開けた倉庫へとつながる道へと俺達四人は足を踏み入れた。

中が暗かったらと思いい懐中電灯の類を持ってきたのだが不必要だったみたいだ。

通路はあの紫色の光で満たされており輝いていた。

足元の石の細かいところまではつきりと見えるぐらいに。

いくら潜入用の服の連合郡の軍服を着ているからと言って不安感はない。ぬぐいきれない。

ちなみに階級は少佐だそうだ。

普通の兵士に出会っても顔さえ見せなかったら何とかなるだろう。

連合郡と帝国郡の軍服はよく似ている

袖のラインやボタンの位置などはまったく同じで少し色が濃くなる程度だ。

腕章など細かいところをあげればキリがないが、説明としてはこんなかんじでどうでしょうか。

「シエラはリーダーで前方を、メイナは後方を頼む」

「ん、了解」

足音を立てずにさささつと駆け抜ける。

壁などにはでこぼこは一切なく隠れる場所なんてものは存在しないに等しかった。

頼むから来ないでくれよ…と神に祈りつつ俺達は足を進める。

歩き始めて二十分ほどが過ぎたときだ。

「前方から敵兵接近。

距離五二〇メートル」

シエラがボそりと俺に呟く。

いくら帝国郡の軍服を着ているとはいえ、心の覚悟ぐらいはしたい所だからな。

とか言っている間に前から二人ほどの人影がちらちらと見え始めた。そして、談笑しているのであろう二人が俺達を見つけたのか急に緊張した面持ちになる。

「おい、その四人！

何をしているのか？」

右の男が俺達に話しかけてきた。

のどをつまんで、んっんっ、と咳払いをする。

鬼灯のおっさんの直伝の技だ。

これで声を少し低くして二十五ぐらいの若者少佐を演出する。

何でそうなるのかとかは知らないが、天性のモノマネと違ってこれてかまわない。

「我々は本部より送り込まれた兵器開発部のものだ。

倉庫への道のりを探しているのだが迷ってしまったのだ。
案内してくれると非常に助かる」

兵器開発部といっておけば怪しまれないであろうし案内までしてくれるという

かなり楽な仕事になっている。

『今日ここに兵器開発部の者が来る』

というデマ情報は連合郡ハイレイト部隊内では知れ渡っているよう
だ。

思った以上に緊張しなくてすんだな。

さっきまでの緊張はまったくの無駄だったようだ。

「はっ、こちらです」

急に態度を改めた二人に適当に返答しておいて案内させる。

仁のパソコンがなくても迷うであろうぐらいに複雑な道のりをこの
兵士達は

一度も迷うことなく先に先にと進んでいく。

いつの間に叩き込まれたのだろう。

かなりすごい暗記能力だと思う。

「あ、すいません間違えました。

こちらです」

前言撤回、間違えやがった。

そんな感じで長いこと上ったり下ったり

右折したり左折したりを繰り返す。

途中で徘徊中の兵士達とまた会ったりととにかく長い道のりだった。

「こちらです、少佐殿」

「うむ。」

「すまないな、ご苦労」

「では……」

兵士達が消えたのを見て俺達はさっそく倉庫の扉に近寄った。

「でかいな……」

身長の五倍ぐらいでかい黒光りする不思議な金属で出来ていた。シエラやメイナのところもそんな感じの金属だったような気がする。もう詳しくは覚えてないが。

歳をとったのか物忘れが激しいなあ。

まあ、そんなことはおいといて。

扉にはベルカ帝国の国旗が扉には刻まれていて、いかにも大事な場所です、な雰囲気漂っている。

今回は電子ロックなどは作動している気配はなく、ポケットからピッキング用の

金具を取り出して、連合郡が突発工事でつけたのであろう鍵穴に差し込んだ。

予想通りのカチリといういい音とともに鍵が開く。

三人に目配せをして、扉を開けようとしたそのときだった。

「おっと。」

「そこまでだよ、レルバル君」

パット振り返った瞬間天井などにつけてあったのであろう明るいライトで

俺達は紫の光の中に浮き彫りになってしまった。
余りのまぶしさに目を細め腕で顔を覆う。

「世間をさわがせ、警察の手をのろのろと逃れているコソ泥の正体が
こんなガキだったとはねえ」

目がようやく光に慣れてきて指の隙間から周りを見渡す。
ぱっと見て二十〜二十五人ってところか。
手を下ろして男の姿を凝視する。

「おっと、変なマネはしないことだ」

男が手を上げるとガチャガチャと兵士達が俺達に向かって銃を向ける。

男は男で一発俺の足元にお見舞いして小さな火花を散らしてくれた。

「さて、その少女達を我々に渡してもらうか」

ばれてる…

この二人が最終兵器だということはすでに連合郡側には筒抜けって事か。

まあ、あんなに派手な戦闘などを繰り返されたら写真の一枚や二枚ぐらい

気がついたら撮られて本部まで送信なんて簡単だったに違いない。

俺が沈黙していると

「出さないつもりか。」

「ならこいつがどうなってもいいのか？」

男がパチンと指を鳴らすとあっという間に兵士達が仁を取り押さえ

て頭に銃口を突きつけた。

「くっ！放せ！！」

仁は抵抗するが男四人に押さえつけられてろくな抵抗が出来るわけがない。

「少しでいい…」

時間をくれないか？」

俺は最後の別れがしたいと男に言った。

承諾されるとは思っていなかったが案外あっさり男は承諾した。今一瞬で思いついた作戦を最終兵器の二人に伝えたかった。この状態から抜け出す起死回生の作戦だ。

「一分の間だけだ。」

その間にゆっくりと別れを済ますことだな。

ただし変なまねをしたらお前はここで死んでもらう。

あと、こいつは預かっておく」

俺はシエラの隣まで歩み寄り耳元で小さく呟いた。

はたから見るとまるで抱き合っているように見せかける。

「空から一気にあいつらを叩けるか？」

「でもそれじゃ仁が…」

「俺とメイナで仁を抑えている奴ら四人を片付ける。」

俺が麻醉銃を構えた瞬間にお前はレーザーで一気に吹き飛ばしてくれ」

これと同じようにしてメイナにも作戦を伝える。
二人が力強く分かったというのを見届けて俺は二人から離れた。

「時間だ。」

さてどうする気だ？」

俺は二人を見た後小さく頷く。

「こうするんだよ!!」

俺はセズクに仕込まれた早撃ちの要領で麻醉銃を両手に持ち引き金を引いた。

たちまち仁を抑えている二人が麻醉薬を打ち込まれ昏睡状態に陥る。
残りの二人はメイナが倒す……はずだった……が……

「メイナ!？」

何やってんだ……え？」

メイナとシエラは地面に膝をついていた。
息が荒い。

「はぁ……はぁ……まさ……か……てめえら……」

シエラが食いしばった歯の隙間から言葉を搾り出す。

「まったく、末恐ろしいガキだ。」

こいつがないと死ぬところだったよ。

我々だってバカじゃない。

タルワナルカ家とかいう元ベルカ守護四族の末裔からこういうも

のをいただいてきたのさ」

そういつて男は状況が理解できない俺に
角の取れた直方体の黒光りする『何か』を見せ付けた。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

リモコン（後書き）

ありがとうございます。

また次もどうかよろしくお願いします。

い、痛い・・・

「シエラ！？メイナ！？」

最終兵器のはずの二人は地面にひざをついて苦しんでいた。

「な、なんなんだよいったい！？」

俺は今自分が置かれている状況をまったく理解できずにいる。
最終兵器だぞ？

超古代文明の最終兵器がどうして―？

地面に膝をついて苦しんでいる二人は顔が真っ赤で歯を食いしばっている。

見ているだけでもあの元気な二人とは大違いだ。

「ふふふ…予想以上に効くもんだな……

これだよ、レルバル君。

この手に持っているリモコンが原因さ」

男は手に持っている『何か』を俺の目の前に持ってくる。

角が取れた四角い黒光りする薄い板のようなものと言いやうがないものだ。

しいてむりやりいうならば……i○honeに似ている。

ボタンはいつさいついていないが人体を簡略化したような模様は見て取れた。

「我々はタルワナルカ家の末裔の協力を得てこのリモコンをてに入れた。

そしてこのリモコンの真の恐ろしさは……」

男はリモコンの模様の上に指を乗せた。

「今見せてやる」

そしてゆっくりと指スライドさせた。

「それでなにが出来るっていう……え？」

俺は皮肉を言おうと口を開いたがすぐに口を閉じた。

急にシエラの背中の皮や服を突き破って鋼鉄の翼が姿をあらわした。

「うっ！？な、何…なんだ？」

シエラの背中から赤いしぶきが飛び散り地面に模様をつける。

前回翼を出したときにはあんなにはならなかったはずだ。

つまり、あのリモコンに操作された翼が無理やり出てきているということなのか？

「ううっ…ああっ！！」

背中から血に染まった四つの翼が露出する。

そのうち右の補助翼がギリギリと悲鳴をあげはじめる。

体を引き裂かれても叫び続ける獣のような悲鳴を出しながら。

「な…お、おい！やめろ！！」

俺は困惑してリモコンを奪い取ろうと男に立ち向かった。

だがすぐに兵士達によって抑えられてしまう。

「やめろ!!」

洞窟内は獣の悲鳴と俺の声で満たされている。
そして

「い…いや…」

シエラの顔に最終兵器が感じてはならないはずの恐怖の色が浮かび
あがり

痛みの元の右の補助翼の根が見えはじめる。

そして二枚で構成されているシエラの右翼の補助翼はゴトン……と
鈍い音をたてて背中から剥がれ落ちた。

「うあああああっ!!!!!!!!!!」

激痛だろう。

シエラの補助翼は地面で薄く青く光りながらピクピクと痙攣して
いる。

「うう……」

シエラ目からは涙が溢れ出し、艦隊を叩き潰したあのときの強さ
は微塵のかけらとなって散っていった。

男はそれを見て何を納得しなかったのか再び俺が止めるまもなく指
をスライドさせた。

「うっ!!!」

「いやだああ!!!!!!」

残った右の主翼もギリギリと悲鳴を上げはじめ涙を流しながらそれ

をとめようと意識を集中している
シエラの努力を振り切ってゴトリと落下した。

「うぐう……」

シエラの激痛に耐える声と床に落ちてもなお生きているかのように
ピクピクと痙攣している翼。

左翼だけ残った哀れな鳥は突っ伏し波となって襲い掛かる痛みと戦
いを繰り返しているその横では
メイナがぶるぶると震えながら次はわが身と覚悟して目をつぶって
いた。

血の池の中にあわれな鳥は沈み目からは塩水が流れ出ていた。

「これで分かってくれたかね？ レルバル君。

最終兵器二人と今君が狙っている獲物を我々に『プレゼント』し
てくれないか？

もっとも最終兵器は今ここで使用不可能にしてもかまわないんだ
がね」

さっきのをまともに見て冷静でいられるわけがない。
万事休す、ここでこいつらの圧力に屈したほうがいいのかもしれない
い。

「この中にあるんだろう？

なら自分達で探したらいいじゃないか！」

そんな空気に合わない声が俺の後ろから響く。

仁だ。

仁は二人の男に抵抗していたが一人に鳩尾をなぐられ黙りこんでし
まった。

「我々は見たことがないからどんな形なのか知らないのだよ。それに…」

男は二人の最終兵器をチラッと見て

「今の君はこの条件を断れるはずがないと思うのだが？」

男はクッククク…と静かに笑い

「しかし愉快だ。

愉快だよ、レルバル君。

世界から追われている身の君が今は無きベルカ帝国の最終兵器とともにいるとはな。

ルドルフや最終兵器モドキの野朗から聞いたときは嘘だと思っていたのだが。

そして、今お前達の命は私が握っているも当然だ」

嫌味にしか聞えない言葉を吐き出した。

当然といったら当然のことなのだが。

この男は俺や最終兵器姉妹のせいで辛酸を舐めてきたのだろう。そしてその借りが返せてうれしい、そういうことか。

「これも全部お前のおかげだな」

男は後ろを振り返り両手を大きく広げた。

「我が忠実なる部下——セズク・KT・ナスカルクよ？」

カッと頭に血が昇り熱くなる。

セズク：やはりあのホモ野朗はスパイだったのか。

「……………」

男の傍らにはすらりと背が高いおなじみの姿をしたセズクが黙って立っていた。

帝国郡の軍服を着て帽子をかぶっている。

「てめえ…やっぱり…」

俺は怒りで体中が沸騰していた。

いまやかに水をいれ頭に置いたら沸騰するに違いない。それぐらい怒りでいっぱいだった。

——信じていたのに——

あの十日間は地獄のようだったがどこか面白かった。

銃の扱いを教えてくださいセクハラしたりといろいろあったがいろんな意味であいつは

俺の師とよんでもさしつかえなく絶対に裏切らないものと思っていた。

だが。やはりあいつは初めから連合郡のスパイだったのだ。

腐ってもスパイ…か。

そんなことを心にぼやきながらも敵意がこもった目を俺を掴んでいる男に向ける。

よほど鋭い目をしていたのか男の力が少し緩んだ隙に麻醉銃を投げ捨て

「死ね！」

実弾が入っている銃を取り出して引き金を引いた。

閃光と音が走り焼けた葉莢が排出され地面に落ちる。

弾はセズクが指の間で掴んでいた。

セズクが弾を地面に落とした瞬間俺の銃はもち手から上が綺麗になくなっていった。

いや、切れていた。

「こんな危なっかしいもの僕に向けないで欲しいな、波音？」

急に俺の目の前に現れたセズクが右手を開くと

ばらばらになり金属の塊と化した俺の銃だったものが地面に散らばった。

にっこりと笑いながら一瞬のうちにそれをやりとげた男が目の前にいる…。

啞然としてセズクの全体を眺め、そして思い出す。

こいつは最終兵器モドキ。

左腕が鉄さえもを切り裂く刃となっても不思議ではない。

「まさか、波音忘れてたわけじゃないよね？」

僕が最終兵器としてつくられた出来損ないだってこと」

セズクがにこっと俺に極上の笑顔で微笑む。

まさかここまですごいとは思わなかった。

まさか、ここまで――

「ククク：さて、レルバル君。

最終兵器二人を渡してもらうか？」

男が笑いながら俺に話しかけてきた。

「その前に教えて欲しい。

あのリモコンのようなものはいったい？」

それだけは聞きたかった。

あれはなんなのか。

なぜシエラを苦しめることが出来たのか。

男はポケットに手を入れるとあの角が取れた直方体のようなものを取り出した。

裏表をじっくりと俺に見せ付けて

「これを献上してくれたタルワナルカ家によると

最終兵器が万が一、帝国を裏切ったり、暴走したりした時用の緊急停止装置だったようだ。

この画面にそいつら：最終兵器の簡略化された絵がかいてあるだろう？

この絵にタッチしてスライドするだけであら不思議。

このリモコンから出る特別な電波によって最終兵器を構成している細胞：

可変式鋼鉄細胞の結合を外すことが出来るようになる。

つまり、破壊することができるというわけだ」

なるほどな。

あの装置のせいで二人はおかしくなってしまったのか。
特にシエラなんて：

あんな目も当てられないような状態になってしまった。

万が一あの恐怖に屈した最終兵器が連合郡にわたってしまったら：
本腰を入れて連合郡は帝国郡を滅ぼしにかかるに違いない。

今は装備などの差がありながらも物量の差で帝国郡が勝っているから連合郡は攻めないが

最終兵器が二体もあれば物量など関係ない。

一瞬で戦車が二十台蒸発なんてこともありえる。

だから俺はここで屈するわけにはいかない。

変な正義感だな…
思わずニヤリとしてしまう。

「セズク、レルバルを始末しろ」

男の冷徹な声が俺の背筋をなぞる。
ここで俺は死ぬわけにはいかない。

「それは…できません」

セズクは俺をちらりと見て目を伏せた。

「もう一度言う。」

セズク、レルバルを始末しろ」

「残念ですが少佐。」

僕はその命令には従うわけには参りません」

その言葉がイラッとしたのだろうか。

急に男は逆上して俺を蹴飛ばした。

俺は一気に浮遊感が増した体を勢いよく地面に叩きつけられる。
鈍痛が背中を伝いうまく受身を取れたことに安堵する。

「情でも移ったのか、セズクよ。」

お前がやらないなら…」

男は自動小銃を取り出して俺に向けた。
ぴったりと俺の脳漿をふきとばせる距離だ。
どうあがいてもよけられはしない。

「私がやる」

男の指が引き金を引こうと少し曲がる。
だがそれからの動作が出来なかった。
刃から恐ろしいほどの殺気を放ったセズクは一直線に男の首を切断した。

それは一瞬だった。

男は首から上が無くなり首は俺を殺そうとしたあのままの顔でセズクの左手の上に乗っていた。
盛大な赤い噴水が噴出してセズクを赤く染め上げる。

「ふん」

頬についた赤い血液を指にすくって舐めとる。
そしてセズクは兵士達のほうへと向きなおした。

「ひっ!?!」

男の首を兵士達の方へと放り投げ男の手に握りっぱなしになっているリモコンを拾い上げる。

スイッチのようなものを押して電源を切った後セズクはそれに弾を何発も撃ち込んだ。

小さな部品があちこちに散らばり紫の光の中にとける。

「あ、ありがとう…なのか?」

セズクは黙ったまま綺麗な右手を差し伸べ俺を助け起こしてくれた。
まるで赤ちゃんを抱く親のような優しさで、だ。

「なんで裏切ったんだ?」

「今はその話をしているときじゃないよね、波音？
兵士達が怒ってるんだ」

セズクはふふっと俺に笑いかけると二十人ほどの兵士達へと襲い掛かった。
あちこちから血の噴水が上がり、地獄の血の池地獄がこの世に再生される。

飛んできた弾を見事に避け、兵士達のライフルを切り裂き体を切り裂く。
首を切られ絶命する者、心臓を切り裂かれ絶命する者。

「うっ？」

それを見ている俺に一瞬だがデジャヴが走る。

なんか、この光景見たことがある…

だが思い出そうとするが思い出せない。

夢で見たのだろうと勝手に納得して最後の一人を殺したセズクに歩み寄る。

「改めて聞くぞ？」

「なんで裏切ったんだ？」

セズクは顔についている血液を指で綺麗にそぎ落とし左手の血を払った。

「裏切ったって言うのは、僕が波音達を裏切ったほうかな？
それともこの連合郡を裏切ったほうかな？」

「後者のほうだ。」

あのまま行けばお前は自分の存在価値というのを見出せたのかも
しらないんだぞ？

それをなんでわざわざ棒に振ったんだ？」

セズクはちよつと声を赤くして

「あいつは…波音を…蹴りやがった。
ただそれだけのことだよ」

ぷいと顔を背けて、今度は最終兵器二人のところへ行って「大丈夫
か？」と声を掛けている。

俺が男に蹴られたからセズクは男を裏切ってまで助けてくれたーか。

……………。

意味分からん。

なんでそこまで俺に尽くしてくれるのかが分からん。
愛してるからとかいいそうだけどな、あいつは。

「いてて…」

シエラが顔をしかめながら立ち上がる。

そういえば右翼がとれてしまったが大丈夫なのだろうか。

「翼、大丈夫なのか？」

「これぐらいならすぐ…じゃないけど治るから。
心配はいらないよ、ね、シエラ」

メイナがセズクに支えられながら立ち上がる。

「まあな。

それよりも――」

シエラは瞬間的にセズクとの距離をつめセズクの喉に対人レーザーを突きつけた。

「僕達はこのつをみかたとして認識してもいいのか？」

あの物腰柔らかな話し方は吹き飛び、ぞっとするぐらい恐ろしい声がシエラから発せられ
空気の温度が一気に下がる感じが俺を襲う。

「殺したほうがいいなら、今僕はこいつを殺す」

にやりと笑いレーザーの銃口を喉元につきつけいつでも発射できる体勢に入る。

そのシエラの耳元にセズクは何かをボソボソと呟く。

と……パツと顔を赤くしたシエラはあわててセズクから離れた。

「何？」

どうしたの、シエラ？」

メイナが不思議そうにシエラに問いかける。
確かに不思議だ。

「い、い、今……こいつ……ぼ、僕のこと……」

シエラをここまでうるたえさせる言葉―知りたい。
ぜひ教えて欲しい、教えてくれセズク。

「別に、怪しいことは言ってますよ。
ただ、犯しますよお嬢さん☆
って言っただけです」

いやいやいやいや。

そりゃ驚くわな。

遺跡から出て来たときは本当に機械のようだったシエラにそんなジ
ョークがもう通じるのか。
ってことは、これからは

下ネタ解禁!?

いやまて、落ち着け。

いいか、波音。

下ネタは厳禁だぞ?

なんでだ、俺だって男だ。

下ネタのひとつや二つぐらい。

―なんで自問自答してるんだ、俺。

「さて、僕はもう許してもらえたようですし。
そろそろ本命のものにご対面しては?」

セズクは涼しい顔で俺達にそういった。

今回は大変だったが、何とかこれで終わりだな。

まだ問題がある。

扉が重すぎて開かん。

「これは重いな、波音」

仁がだめだこりゃという顔で俺に言った。

「シエラ、頼むぜ」

「あう…あんなこと言われるなんて…」

「…メイナ」

「あいあい、了解です」

メイナは両手を大きく変形させてバズーカ砲みたいにして扉を吹っ飛ばすため力を蓄え始めた。

inues.

This story cont

い、痛い・・・(後書き)

ありがとうございます。

感謝です。

本当にありがとうございました。

Run Battle

がらがらと大きな音をたてて扉が崩れ落ちる。

「波音、終わったよ！」

メイナの元気な声に「はいはいお疲れ様」と返事を返し、俺は扉の中へと足を踏み入れる。

思った以上に中はがらんとしていた。

もっとう、宝物がごちゃごちゃしている様な予想に反して台座の上に小さい薄い直方体のようなものが細い指のようなものに挟まれていた。

多分例の記憶媒体だろう。

倉庫の中はなんかほんわりと懐かしい空気であふれていた。

「うぷっ…これが五千年前の空気か」

仁が鼻をつまんで手を振る。

そこまでひどいかな、俺的には結構好きなほうなんだが。

連合郡によってあけられているからここの空気は最近のものだぞ、いっておくけど。

「これですかね？」

セズクが台座の指を引きちぎって記憶媒体を指につまむ。

「ん、それであってるだろ。」

他にめばしいものはないかな」

俺は鼻歌交じりでさっきの惨劇を振り払い周りを見渡した。
するとまだテレテレしているシエラが目に入る。

「シエラ、いつまで照れてるんだ。

邪魔だからあっち行け」

「うあ…あいつ僕の事…」

うぜえ……

だめだあいつ、はやく何とかしないと。

だがこんな最終兵器も悪くはないと思う。

ほら、一応こいつは女の子なわけだろう？

なら兵器みたいに無表情なマシンではなく今のように人間のよう
なところを見せてくれたほうが

どれだけ俺のストレスが軽くなることか。

それでも出会ったときは俺が殺されかけたんだがな。

「見るたびにふと思うんだが、このチップの中にはなんの情報が入
っているんだろうな」

「さあな、俺が知る必要はないしお前もないだろ？」

「あいからわず、鬼灯のおっさん大好きだな波音は」

「やかましい。

小さい頃から大事に育ててもらってたんだ。

当然といっちゃ当然だろうが」

仁がやれやれと首を振るのを横目に再び倉庫の中を見渡す。

銃のようなものがぽつぽつと置いてあるだけで役に立つものや金になるものは連合郡に

ほとんど持ち去られてしまったとかんがえていいだろう。

宝石の一つぐらい残しておいてくれないと思うんだけどなあ。

俺だってお小遣いが欲しい年頃なのだ。

「さて、用も済んだし帰るか——っ!？」

突如熱い塊が俺の頬を掠める。

「もう応援が来たのか！」

相手も軍隊だ。

きびきび動かないと敵にやられてしまう命をかけた職業だからな。

ひとまず倉庫から出ないと隠れる場所がない倉庫ではすぐに蜂の巣にされるのがオチだ。

目の前で火花がはぜ、顔を奥へと引っ込める。

最終兵器の二人ともどきでなんとかなるだろう。

「シエラ、何人ぐらいいるんだ？」

「えーと…五十人ぐらいだな」

テレがとれたシエラは即答した。

五十人か。

俺達五人相手によくやるよ。

「シエラ、レーザー撃てるか？
それも極太の」

「撃てるが…」

「じゃあそれで道を開いてくれ。」

兵士達があけてくれた道を俺達は一気に駆け抜けるぞ」

「危なすぎるが、それしかないだろう。」

さっさとかえって風呂にはいりてえよ、俺は」

「弾は私がおさえるよ」

意見は一致して、シエラは極太のレーザーの発射体勢に入った。

飛んでくる弾をガードするため一時的にメイナがシエラの前に立ち右手を突き出す。

これにより飛んでくる弾の軌道は大きく曲がり一応バリアのような役目にはなるはずだ。

「発射するぞ、どいてくれ！」

シエラの両腕のバズーカが放つ光がまぶしく感じるぐらいになると一気に光が爆発した。

メイナが鮮やかによけた閃光は集まって銃を撃っている兵士達の塊に突き刺さった。

レーザーに体を焼かれ勢いでなぎ倒される兵士達。

その兵士達の怒号と悲鳴の間をくぐりぬける。

指示を出す隊長をついでに巻き込んでしまったのか指揮系統が混乱した兵士達は自分達の勝手に銃を撃ち始めた。

思った以上の成果だ。

混乱している間にシエラの第二波が兵士達を襲う。

恐怖におののき、本能に従って退避した結果、俺達の道がそこできあがった。

体を銃弾がかすり髪の毛が逆立つような感覚に襲われる。
そして、何とか駆け抜けた先に一人の背が高い男が立っていた。
細い筒のようなものを抱えている。

「バズーカか!？」

セズクが目を細めて呟く。

「波音、そいつらは俺達が引き受けるぜ」

バズーカを持っている男が俺の名前を呼ぶ。
その声は忘れるはずもない。

「ジョン！」

ジョンは俺ににやりと笑いかけ、バズーカの先を混乱から脱出した
連合郡兵士達に向け引き金を引いた。

カッ、と爆発のがジョンを浮き立たせ連合郡兵士達を再び混乱の渦
に引きずり込む。

鬼神も真っ青な戦士がそこにはいた。

体に銃弾を巻きつけて片手にバズーカ、片手にマシンガンを持って
いる。

けっこう派手好きなんですネ、ジョンさん。

ジョンは銃口から立ち上る硝煙の煙を息で吹き払うとなにやら無線
のようなものを取り出し命令を吹き込んだ。

「俺だあ!ジョンだ！」

野郎ども、合戦だ! さっさとなぎ払っちゃいな!」

それを見た俺達は妙に安心して角を曲がりさっさと帝国郡秘密基地

へもどる道を走る。

あの方なら一人でも大丈夫なんじゃないでしょうか。

「ちょ、ジョン言葉使い（笑）」

「だから、（笑）って使うなよ！」

「個人的には（w）の方が使いやすいんだが」

「そういう問題じゃない！」

「二人とも、くだらないことで喧嘩してる場合じゃないと思うんだが」

セズクが冷静に突っ込む。

と、一気に銃声が多くなり帝国郡の応援が到着したのを教えてくれる。

応援は出せないといっていたから本当に帝国郡からの応援はないと思っていた。

だが実際、帝国郡は俺達のためだけに動いてくれた。

―ありがとうなジョン。

「聞えるか、波音！」

先に行つてろ、こいつらはここで足止めしておく！

さっさと逃げろ、巻き込まれても知らんぞ！」

ジョンのダンディーな声に後押しされ俺達は出口へとひたすら走った。

多分巻き込むって文字通り爆発に巻き込むって事だろうと勝手に解釈しながら。

「またやられただど？」

連合郡司令部に長官の声が響く、

長官に怒鳴られてしまった大尉は狼狽して自分は悪くないのに謝っている。

これでレルバルとかやらにまた辛酸を舐めさせられた計算になるわけだ。

一度はアメリカ共和国での遺跡の時。

そして二度目は今回のハイライトでの時。

レルバルは二回ともベルカの遺跡から記憶媒体を奪った。

奪う、ということはその二つの価値を理解しているからなのだろう。宝石などの金を好む奴らにとってまったく興味のないものだといっている。

今日連合郡が送り込んだやつらは新兵器のリモコンを持っていたにもかかわらず

レルバルの隣にいたと思われる最終兵器の力をなめていたのか全滅した。

セズクとやらからの通信は途絶えているということはやはり全滅の方向で間違いないだろう。

いつまでたってもゴミはゴミということか。

レルバルも普通の人間であり、五十人もの兵士を一気に倒せるわけがない。

『普通』ならば。

応援要請に素直に従い戦闘ヘリや戦車部隊を車で逃走中のレルバルへと差し向ける指示を出す。

性別も年齢も何もわからないこちらから見たレルバルはもう脅威として見ても差し支えない所まで来てしまった。

宝石などを盗んでいたときは十分可愛かったのだが連合郡の邪魔をはじめたレルバルは一種の病気だ。

さあ、はじめよう。

連合郡を蝕む新しい病気を治す手術をな。

ぞくりと背筋を冷たいものが走る感覚に思わず身震いする。

「波音、武者震いしてる暇じゃないぞ？」

車の中で仁がゲキを飛ばす。

「悪い、なんかぞくつとしたんだ」

「くっ、それにしても、しつこいな！」

俺達は遺跡から少し離れた街から一台の車を盗み帝国郡の基地へ帰るべく街を走っている。

だが、気がつけば何台もの車が追いかけてきて銃を乱射し空からはヘリがミサイルを放つ戦場へと飛び入り参加していた。

ちなみに、運転手はセズクだ。

散々もめた結果、年齢が一番高く十八歳という免許を持ってもいい年齢だと言うこともありセズクになった。

ちなみにだが、シエラが五千十六歳だと言った瞬間に体が灰になることは間違いないので誰も指摘しなかった。

実質五千年は眠っていた期間だから活動している期間は十六年だし十六歳でいいと思うんだ。

「シエラ、早く撃てよ！」

「ちょっと：待ってって：言ってるだろっ！」

パウツと光が走り戦闘へりに突き刺さる。

一泊おいて爆発したへりは車の一台を巻き込んで地面に墜落した。炎上している仲間の屍を跳ね飛ばして何台ものジープが追ってくる。俺は窓から身を乗り出して追ってくる車のタイヤを狙って引き金を引いた。

パンと大きな音がして車がスリップして他の車に突っ込む。

「前、前、前！」

仁の悲鳴でメイナが前にレーザーを放った。

砲口をこちらに向けて爆走してきた戦車が爆発炎上して燃料に引火してさらに爆発する。

「危ねっ！」

爆発で跳ね上がった戦車が俺達が乗っている車の一部を削り取り後続の車へ突っ込んだ。

何台かのジープが巻き込まれ脇の家へと突っ込む。

市街地でドンパチやりすぎだろ、これは。

流石に罪悪感があるぞ。

飛んできたミサイルが車の横の道路に着弾し、爆風で飛んでくるコンクリートの塊が車の車体をへこまし
ガラスというガラスを叩き割る。

「波音、ヘリのミサイルを狙え！
誘爆が誘爆を起こして、大爆発するぞ！」

セズクが楽しそうに俺にアドバイスする。
そう、楽しそうに。

「くそっ」

すでに二人の最終兵器はばてて席でぐったりしている。
やはり、リモコンの影響か。
あのダメージから立ち直れていないのだろう。

「死なないでくれよなっ…」

―無茶な願いか―。

「イヤッハー、命中だ波音！
しかしミサイルじゃなくてヘリのローターを狙って操縦性を奪う
とはな！

とことん人殺しをしない気か？」

セズクのテンションが高いようだ。

普段言わないイヤッハーとか言ってる。

人殺しをしないーか。

操縦性を失ったさっきのヘリは市街地に突っ込み炎上した。
アレで死人が出ないほうがおかしいと思うのだが…
突っ込まれたほうもいい迷惑だろう。

「さすが、僕の授業を受けただけあるぜ！

命中率百パーセントじゃねえか！」

俺の気持ちを知っているのかどうか分からないが、セズクが妙に皮肉っている気がしてならない。

「セズクもここまで運転がうまいとはおもわなかったよ！」

ちなみにほめてるのではなく皮肉だ。

撃ち落されたヘリの仇をとろうと別のヘリの機銃が火を吹き車に次々と穴が開く。

だが、それは仁によってすでにミサイルに穴が開いているのに気がつかなかった

哀れなヘリの最後の攻撃だった。

ミサイルの爆発がさらに爆発を呼び結果的にヘリが爆発する。

ロシアにあったな、人形の中に人形が入っていてその人形の中にさらに人形が入っている奴。

たしか、マトリョーシカ見たいな名前だった気がする。

誘爆とはまったく関係ないけどな。

「セズク、前方に戦車多数、警戒せよ」

メイナが攻撃しない代わりにレーダー代わりとなってセズクへと状況を報告する。

「あいよ」と答えたセズクはさらに強くアクセルを踏んだようだ。

エンジンが唸りを上げ、流れるように市街地の家々が現れては消えていく。

いったい何キロ出ているんだ。

「波音、ハンドル頼むよ♪」

セズクが唐突にハンドルを放し、俺にウインクする。

「だーっ、無茶言うな！」

セズクは割れたフロントガラスからいつの間にか右腕をレーザー砲に変え発射していた。

レーザーを前方の戦車へとぶち込みそのまま右手をスライドさせる。つまり、レーザーによって戦車を切断してしまったわけだ。

「はい、ハンドル変わって」

「もうすこし僕にやらせてくれたっていいじゃないか、波音」

「じゃなくて俺は運転できないの！」

「……はい、破壊を確認。

変わろうか、波音」

セズクは軽やかに右手のレーザー砲を普通の手に戻してハンドルを握りなおした。

助手席に戻るついでにメーターをみて啞然とする。

この車普通の道路で百二十キロ出してやがる。

「最後に、これでも食らえ！」

仁がジョンからもらった手榴弾を追いかけてくる車へと投げつけた。一気に二台が吹き飛び追っては事実上これでゼロになった。

「最後の爆発派手だったな！」

なんで：

「手榴弾も結構使えるもんだな」

なんで：

「波音もそう思うだろ？」

なんでそんなにお前は『人殺し』するのがうれしそうなんだ、仁。
俺には理解できない、その心が。

「後はこのまま帝国郡基地に帰るだけだな」

窓がなくてボロボロの車は家がちらほらとだんだん少なくなってきた街をいつの間にか抜け

時速百二十キロものスピードで暴走して森の中へと入っていく。

木がびゅんびゅん唸り道がないところを車は走っていく。

と、突如目の前の地面がせりあがり車を飲み込んだ。

「ここが帝国郡の戦車部隊など専用の入り口だよ。

覚えておいてくれよ」

覚えておけって言われても、早すぎてどこがどこかさっぱりだ。

それに常に戦車に乗って移動しているわけではないのだから覚えていても無駄な気がする。

セズクは俺のほうを見てにこっとスマイル。

「前見ろ、前！」

カーブなどがなくてよかった。

一直線の道を潜り抜けた後大きな広間で車はドリフトして止まった。
見覚えのある帝国郡の大広間だった。

「今回はスリルありすぎた。」

もう二度とこんな仕事はごめんだ」

仁が額の汗をぬぐい、ほう…とため息をつく。

同じ意見だ、今回は本当にやばかった。

「さつさと、風呂入って飯食って寝ようぜ、仁」

疲れて痛む体を引きずって車の座席から降りる。

メイナとシエラも何とかしないとな。

「セズクもありがとうな、今回は本当に世話になった」

「お礼なんていいよ、波音自身をくれるなら」

「シエラ、メイナ大丈夫なのか？」

華麗にセズクを無視して車と同じくボロボロの二人に話しかける。

「あれ、僕の言葉無視？」

「う、うん…大丈夫…」

あれだけひどい目にあっただもんな。

右翼が取れてしまうなんて、翼がない俺には分からない痛みだが
恐怖におびえたシエラの顔はこれからも忘れられないだろう。

ジョン達が帰ってきたら成功の食事会みたいなのをしたいなあど頭

の隅に思いながら
さっさと、連合郡の軍服を脱いで風呂に入って飯食ってあったかい
布団に入りたい。

今の俺達四人の頭の中にはそれしかなかった。

i
n
u
e
s

T
h
i
s
s
t
o
r
y
c
o
n
t

Run Battle (後書き)

テストが近づいてまいりました。

ちよつとこのままではやばいので勉強します。

一週間更新を停止させていただきます。

読んでくださっている方には申し訳ありませんが
なにとぞご理解の程を申し上げます。

しばしの平和

だらだらと痛む体を引きずりながら入ったお風呂は
じんわりとやさしく俺の体を包んでくれる。

ざばっとお湯を顔にかけると銃弾がかすった時に出来た傷がちくり
と痛む。

仁やセズクと離れて一人で風呂に入るのも悪くない。

水面に反射した光が天井に変な模様を描き、湯気が視界をうつすら
とさえぎる。

ほっと小さく息を吐き水の浮力に身をまかせ体の力を抜く。

今回もギリギリだったなあと思い

ジョン達は無事なのだろうかと小さな不安が胸に差し込む。

もし死んでしまっていたら……という不吉な考えは頭を振って払う。
まずありえない。

フォーゲルに襲われた時のジョンとは明らかに雰囲気違っていた。
あの恐怖におびえた女々しいジョンを思い出し、苦笑する。

浴槽から上がりシャワーを出して頭、体と石鹸をつけて念入りに洗
う。

体中にいつの間にか出来上がっていた小さな傷がちくちくするが、
耐えられないほどのものではない。

最後に浴槽にゆっくりとつかり十分温まったと思ったぐらいに栓を
抜いて浴槽から上がり扉を開けた。

「こんばんわ♪」

「……………」

バタム。

なんかいた。

ちよつと聞いてくれないか。

今俺は風呂から上がろうとしたんだよ。

そしたら目の前にホモ野郎がいて挨拶してきたんだ。

うん、俺も自分の目が信じられない。

の、前に俺の裸見られたぞ、おい。

仁とかは友達だからかまわないってことはないが許される。

だが、あいつはホモ——つまり同性で興奮する奴。

やばいじゃすまねえと思うんだ。

ガチャ：

「ハロー、マイハニー！」

「散るがよい」

バタム。

——どうやって出よう。

バスタオル及び服は外にある。

そしてさりげなく頼りになる仁は近くにはいない。

となれば自力で何とかするしかないだろう。

きよろきよろと天井を見渡し、ダクトなどがないか探すがさすがベ
ルカの遺跡。

そんなものはまったくなかった。

五分ほど悩むがいいアイディアは浮かばない。

だんだん体も冷えてきたしさっさと結論を出さないと。

「波音く出ておいで〜♪」

うぜえ……

「十秒だけまつよ！」

十：九：八：「」

仕方ない前を隠してもうダッシュ。

マッハで下着と服をはいて脱出！

これ以外に方法はないだろう。

「ゼロ！タイムアップ！」

扉のガラス越しに赤い光が見えたらばらに砕け散る。

その瞬間に俺は一気にセズクの顔面を蹴り、もう片足でセズクの足を蹴ってバランスを崩させる。

セズクは空中で半回転したあと頭を思いっきり床にぶつけ

ものすごい、ゴン！という音をたててぐったりした。

「あー…」

やりすぎたかなあ…」

床に伸びているセズクの顔を見てベットの上的下着と服をマッハで装着する。

そしてセズクを起こさないようにゆっくりそろりそろりと部屋から飛び出した。

部屋から出しても正直俺はやることがない。

シエラやメイナは帰ってきたとたんベットでおやすみなさいだし、

仁はPCいじってるし

俺も何か趣味を見つめるか、とあくびをかみ殺しながら考え歩いていると

どやどやと騒がしい声が聞えてきた。

「ジョン達か？」

一人で呟き声の元へと歩き出す。
だんだん声は大きくなっていきやがてジョンの心地よい声が聞えてきた。

「ジョン！」

俺は大声で叫び、扉をあけるとすすだらけのジョンへ飛びついた。

「うわっ！？おっ！？波音か！」

お迎えご苦労さんって所か。

俺達の完璧な勝利だったぜ！

一人残らずすりつぶしてやったよ！」

ジョンは汗臭い大きな手で俺の頭をなでて笑いかける。
血で染まった手だが、俺達のために染めてくれた手だ。
拒否する必要などなかった。

ジョンの他に二十五人ほどの兵士がお互いに笑いあい冗談を飛ばしあっている。

これが嵐の前の静けさと考えるべきか、勝ち取った静寂と考えるべきか…。

「波音もゆっくりと休めよ。」

二日後、日本行きの飛行機にのるんだからな、お前達は。

日本についたら八月…真夏だな。

俺も海に入ったりとかするためにいくからな、それまでしばしのお別れだ。

まあ、残された二日間ハイライトを楽しんでいってくれ」

ジョンは俺にそう言って、総員風呂へ突撃！と謎の号令をかけて風

呂場へ驀進していった。

……また暇になっちゃった。

仁でもつれて買い物にでも行くか。

ため息をついて仁のところへいこうとUターンする途中でシエラの翼が乗った車を見つけた。

翼は多分あのリモコン兵器でちぎりとられた奴だろう。

車には連合郡のペイントがされていて所々に銃跡が残っている。

無理やり奪ったんだな、と思いながらまだかすかに光っていて心なしかまだピクピクと

動いているような荷台に載せてある翼に近づいた。

好奇心を刺激され、車の荷台によじ登る。

「ん、結構重いかと思ったら軽いんだな……」

両手で補助翼と主翼を持ち上げて大体の重さを測る。

約三キロってところか。

この青い無数の線からレーザーが発射されるんだな。

線を撫で翼を荷台に置きなおす。

「僕にもあるよ。」

そこまですごくないけど」

出た。

「なんでお前は俺の行く先行く先にいるんだ。

いい加減しつこいぞ」

「愛は誰にも止めませんよ。

特に僕の場合など何人たりとも止めることは出来ません。

そして占いの結果、僕と波音との愛称はばっちりなんですよ?。」

ああ、うざいです先生。

誰かこいつを俺からとりはらってください。

「まあ、そんなことはおいとして。

波音♪」

すごいスピードで向かってきたセズクに無言でグーのこぶしをむける。

人は急には止まらない、この標語どおりに俺のこぶしはセズクの腹へとめり込んだ。

「おおう…」

セズクは腹を抱えてうめく。

そんなセズクに満面の笑みでじゃ！とさよならの挨拶を投げかけた後俺は仁の部屋へと向かった。

「どんな様子だ、仁」

「え！？」

う……あはは……はは…」

「どうしたんだ？」

「あのさ、波音」

「何よ？」

「クラスのある女子にお前のメアド教えて欲しいって言われてさ…」

だまって仁を見つめる。

「――続けて」

仁が噴き出した汗をぬぐいしどろもどろで俺に話す。

「ごめん！

波音が女子を苦手って言うのは知ってる！

でも、それじゃ余りにも不憫だと思ったから…」

「もういいよ、別に。」

問題は、誰になんの目的のために教えたということだ」

俺はやれやれと首を振ってソファーに倒れこんだ。

「えーと、あの人だ。」

ほら、金髪ポニーの」

「ああ、あのロシア系カナダ人留学生…って
ええっ!？」

おれはガバッと跳ね起きて目をぱちくりした。
まじか。

あの金髪ポニーか。

家がなんでかこの街にある美少女留学生(？)か。

「まじだよ、波音。」

俺らと同じ十六歳。

波音、これは恋の予感なんじゃないか？」

「女なら間に合ってるよ。」

銀髪、巨乳の素直じゃない最終兵器二人がな」

だが興味がないと言えは嘘になる。

「つてか、俺の記憶には金髪ポニーとしかインプットされていないんだが。」

詳しい説明頼んでいいか？」

「波音が寝てばかりいるからだろ、知らないのは。」

同じクラスだぞ？

いい加減にクラスの子女子ぐらい覚えろよ…」

「俺の記憶に女子の名前を覚えれる要領はない」

仁はふうーまったく波音は女子苦手なんだから…と呟いて目頭を押さえた。

よくうつすらと目に映っていた金髪が同じクラスだったとは…まったく知らなかった、今年最大のびっくりだ。

と、携帯が鳴る。

さっそく来たか。

携帯を開けて受信ボックスにNew!と書かれた文字が入っているのを確認してから開く。

「どうもはじめまして

園田君に教えていただきました

永久君ですよね

私は アリル・ラミエガロイド・ナスカイア といいます
できればして頂けるとうれしいです。」

……女子のメールってカラーだよな。

男子とのメールと違って一行で終わらないところとかがすごい。

俺の携帯にも沢山顔文字が入っているが使いどころがわからないから
まったくといっていいほど使っていない。

アリルっていうのか、あいつ。

数あるカラーな顔文字を眺めて携帯を閉じる。

—またなんか厄介なことになりそうだ。

心にそう呟いた後、俺は携帯を開けて返信をうちはじめた。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

しばしの平和（後書き）

更新再開しました。

読んでくださっている方ありがとうございます。

感想も受け付ける設定にしました。

よろしければ・・・（笑）

回想摩天楼

「永久だ。」

一応返信はしたぞ、なんかようがあるなら電話で頼む。
メール打つのメンドイ」

俺はさくさく入力してメールの送信ボタンを押した。

仁が横から画面の文章を覗き込みあわててメールを打ち始める。

「何打ってんだよ？」

「バカ野郎か、お前は！」

初めての人にあんなメール送るのかよ、普通！？」

どうやら俺のさっきのメールに対するフォローメールを打っている
ようだ。

まったくいらぬことを。

っと、そういえば電話をかけてこいといったのはいいが

俺電話番号教えてないよな。

まあ、いいか。

勝手に考えてソファアをぼむぼむ叩き、ストレスを発散させる。

すると携帯が鳴り始めた。

バイブの間隔が短い。

電話がかかってきたということだ。

「本当にかけてきたよ」という驚きと「面倒くさい」という気持ち
がぶつかり合い

携帯を取らないでいようかと迷ったが心を固めて
いやいや電話の通話ボタンを押して耳に当てる。

「もしもし、永久ですよ、電話番号間違っていないませんか？」

仁がおい！と怒鳴る声が聞えるが気にしない。
出来ればさくさくと終わらして欲しい。

《え、えっと…永久君ですよね？

あ、あ、あの私…ア ril です》

予想外に綺麗な声が携帯から流れてきた。

「えーと先ほどは失礼。

気が立っていたもので、ア ril というと…あの金髪さんですよね？」

《あ、は、はい。

あの…それで…その…》

「どうなさいましたか？」

イライラを隠して敬語で話しかける。

自分から電話しておいて何もじもじしているんだ。

「さくさく言ってくださいな。

俺そろそろ眠いんだけども」

嘘八百だけでもさっさと電話を切りたいのは事実。
女とかかわると大体ろくなことがない。

例えば最終兵器とか最終兵器とか最終兵器とか。

《あ、あの……

え!?

ちよつと、詩乃さん!??》

は?

詩乃?

待ってください。

あの、鬼灯詩乃ですか?

答えを言うように受話器からすごい殺気を含んだ紛れもない

完全天然物の現代版リアル最終兵器、鬼灯詩乃の怒鳴り声が俺の耳に突き刺さった。

《波音!!! てめえ、女からの電話になんて口きいてんだ? ああ?

重大な発表があるから今電話してんのがワカンネエほど頭がおめでてえのか?

眠いだあ?

なに胸糞悪くなる発言してんだ、てめえは?》

「いや、ちよ……!」

笑い声が聞えたので後ろを振り返ると仁が笑いを一生懸命こらえている。

笑い事じゃねえよ!

《ア ril がせっかく勇気振り絞って電話してんだ!

ちゃんと聞けってんだよ!

どうなんだよ!?

返事は!?

きこえねえなあ、反省してんのか!?

返事しろ!!》

「はい！」

あの……なんかいろいろと……すいませんでした。
はい、本当にア Ril さんからの電話舐めてました。
俺——じゃなくて、僕が間違っていました。
はい、本当にすいませんでした」

《あやまるんなら、俺じゃなくてア Ril にいいな。

ったくどいつもこいつも……

ほら、ア Ril……》

詩乃様の一人称が『俺』になってるよ…

かなり怒ってるよ…

少々間が開いた後、ア Ril のおずおずとした声が携帯から聞えてきた。

《あ、あの……》

「さつきはすいませんでした。

しっかりと用件聞かせていただきます。

なんででしょうか？」

丁寧に話しかける俺。

いつ詩乃が聞いているのかもわからないからな。

《す、好きです！！》

おお。

おとなしく聞いているいたら夢みたいなこと言われたんですが。
これあれでしょうか？

最近流行のドッキリ！的なやつでは？
看板を探してきよろきよろするがあいにく見当たらない。

《その：永久君に似合う彼女になります！
付き合ってください！》

「お、おおお。

おお、おおおお」

返事になるものもならない。

多分このときの俺は外から見てもかなり赤いはずだ。

顔が熱いからな。

ソファーに顔をうずめる。

仁にもこの顔は見られたくない。

《やったあ！！

ありがとうございます！！

じゃ、ちょっとおかしくなりそうなので一度切りますね！！

それと次からは波音君と呼ばせていただいてもいいですか！？》

「おお、おおお！」

《ありがとうございますーっ！！

では、失礼しました！》

最後の方はアリの後ろから上がった歓声に打ち消されていたが確実に聞き取ることができた。

さて、クラスの中の何人がこの事に一枚噛んでいるのやら。

プープーとノイズしか発さなくなった電話をしばらく放心状態で眺めPCをいじっている仁に話しかける。

「なあ、仁…」

「ん、どうしたんだよ波音。
顔が赤いぞ？」

「俺さ…」

「？」

「俺さ…告白されたんだ」

仁は一瞬ぼかんとしていたが

「そうか。」

ア ril るめ…うまいことやったな…」

最後の方はボソボソと小さい声だったがしつかりと聞き取った。
仁、お前まさか―

「こんな女嫌いをもらっていったいなんになるというんだか」

仁がさらに俺に聞えるような声で呟く。

皮肉のつもりだろう。

「ま、まさか俺告白されるなんてお、思ってたなくてッ！

こ、心の準備とかがッ！！

どうしよう…もうOKって言っちゃったし…」

いまさらあせり始めた俺に仁はため息を一つ、二つ。

「ん、今だから言うけど
ア ril は学校が始まってからずっとお前のことが好きだった見た
いだぜ？」

仁は頭を抱えて狼狽している俺に満面の笑みで話しかけてくる。
チラ見したから分かる。

あいつは、今満面の笑みだ。

「五人ぐらいから告白されていても全部断っていたらしいしな。
ア ril はとつてもおとなしいやつでな、告白するタイミングを逃
しまくるんだよ。

びっくりするぐらいに。

そうしているうちにシエラやメイナがお前と一緒に住むようにな
ったりすることによって

残された時間が残りわずかということに気がついたんだな」

まで、最後のほうがおかしいだろ。

俺がシエラやメイナに惚れるとでも？

「そして、泣きながら——ここ重要だぞ。

泣きながら詩乃に相談して、その結果俺達みんなが協力すること
になったんだ。

でもお前は持ち前の天然というかなんていうか力？で罫を次々に
回避していきやがって。

ハイライトにきちまったからには残された手段として電話で告白
しか残っていなかったわけだ。

ただでさえ俺達はバイトで学校に長いこといないからな」

仁に改めて言われて見ればそんなこともあった。

明らかにフラグをたてるためとしか思えないことがいろいろあった。

〈回想壺〉

放課後の教室で俺は仁を待っているが来ないからいい加減に帰ろう
と思い鞆を肩にかけた。
そのときにアシルが教室に入ってきて俺に話しかけたんだっけ。
忘れものを取りに来たという雰囲気だった。

「あの…」

「えっと、すみません。
どちらさまで？」

「えーと、屋上の桜の…」

「ああ！
あの方でしたか！」

結局その後少ししゃべってからさようならと挨拶をして教室から俺
は出た。
顔がえらく赤い人だなと思っていたがあれは…
夕日のせいではなくて…

〈回想壺 終了〉

「あー、言われて見れば」

「だろ？」

俺達はそれからいろいろと苦労してんだぜ？」

仁はにこにこ笑みを絶やさずに俺を直視する。

ほかにもあったかなあ、と再び俺は思考に没頭した。

（回想式）

体育のときだった。

男女二人ずつのペアを作るときだ。

なんの恋愛漫画だよ、と内心つつこみつっシエラと組もうとしたら
すごいスピードで仁が奪い取っていきやがった。

そして遼の野朗がメイナと、綾と冬蟬。

詩乃が彗人兄さんと組んだからパチられた感全開で固まっていると
声をかけられた。

「あの…よかったら私と組みませんか？」

「ん？」

ああ、別にいいですけど？」

金髪ポニーと可愛かったのでまあ儲けたかなあと内心ニヤニヤしながら組もうとすると

やたら顎の長いシルクハットの奴が出てきて鼻息荒くア rilルを搔っ
攫っていった。

正直少し殺気が芽生えたかな。

「永久君！ちょ、やだ！！」

「仕方ない、そこら辺の奴と適当に組むか…」

「永久くうーん！！」

アリの悲痛な叫びはかすかに耳に残っている。

正直、助けようとは思わなかった。

あの後誰と組んだのかは想像にお任せする。

～回想式 終了～

今思えば俺、ひどいことしてるかも。

それもありひどい。

他にもいろいろあるがよく覚えているのは後一つ。

しかもこれは少々自分にもトラウマが残る記憶なのだ。

変なことを言っていた気がするからな。

これは詩乃達が絡んでいないときのアリの行動だろう。

～回想参～

あの時俺はパンと牛乳片手に屋上で昼食にしようと柵にもたれて空を見上げていた。

いいか春風が吹いていて木から吹き上げられた桜の花びらが風に舞

っていたとき

ア ril がやってきたんだっけ。

「あの、隣いいですか？」

「ん？」

ああ、どうぞ」

この頃は入学してからまだ一週間ほどしかたっていなかったからか
屋上で一人で飯を食うのが好きだった。

基本的には知らない人には敬語で話す俺はこのときも例外なく敬語
で答えた。

「ここ、お気に入りなんですか？」

俺の隣でア ril は唐突に俺に質問を振りかけてきたんだ。

「いや今日は風が――」

風が綺麗ですの…」

「風が…綺麗？」

ア ril は風を見ようとしていたのだろうか。
目を細めていた。

「花びらが舞っている事で風に色がついているでしょう？
コバルトブルーの空と交えてとっても綺麗だって…
そう思うんですよ、僕は」

> i 1 7 2 0 1 — 2 3 4 0 <

少し臭いかな？」と思ったが言ってしまったことは取り消せない。

「い、いわれてみれば…綺麗ですね…」

ア ril はその綺麗さに気がついてたのか急に笑顔になった。

「秋になると風が赤くなり、冬になると風が白くなります。

夏はどこからか潮の香りが漂って躁るんじゃないかと期待させられます。

まあ、街中なのでこないでしょうがね」

「これが日本の心…なのでしょうか？

をかし、わびさび——すばらしいですね…

今まで風を見るなんて考えたことなかった…」

俺は少し笑顔を見せることにした。

ア ril に少し笑いかけ

「日本の心なのかは分かりませんが…

この気持ちが分かってくれたのはあなたが初めてですよ。

日本人でもこれが分からない人が多いですからね…」

この時俺は、仁や遼を思い浮かべていたはずだ。
間違いない。

「永久君…」

「なんで、俺の名前…」

「知っていますよ、なんていったって私のはじめて…」

とア ril が俺に微笑み何か言おうとした時に先輩達が登場したんだ
つけ。

なぜか目をつけられていたんだ。

もちろん速攻でボコボコにしたけど。

その後は先生達が来てもう大騒ぎ。

よく考えたらこれがア ril とのはじめての会話だった気がする。

く回想参 終了く

あー、なんか死にたくなってきた。

なにえらそうに日本の心語ってたんだ、俺。

この出会い方が一番幻想的だと思ったんだがどうよ？

「どう？

いろいろと思ひ出した？」

「ああ、お前らいつから絡んでたんだ？」

「放課後の教室からかな」

俺は桜の花びらが風に舞っている携帯の待ちうけを眺め

「余計なことを…」

と、つけたした。

携帯をソファアの上において伸びをした瞬間ドアがものすごい勢い

でなりだした。

仁がビクツと、ドアを振りかえる。

俺もはじめビビったが一瞬で誰か分かった。

「あゝ、多分セズクだわ」

俺がそういった次の瞬間だった。

やっぱりドアが木っ端微塵に吹き飛んだ。

誰か、彼にドアの開け方を教えてあげて欲しい。

「はのおおおくん」

いつものゴキちゃん（黒くてしゃしゃか素早く動きスリッパや新聞で叩き殺されるアレ）のように

しぶとい生命力と回復力を誇るセズクが弱々しく入ってきた。

文字通り滝のような涙を流している。

うん、なんかごめん。

今日は謝ってばかりである。

陣のP C部屋にはしばらくセズクの嗚咽が響きそれをよしよしと慰める仁。

でも、セズクを泣かせる原因を作ったのはお前だぞ仁。

ようやく泣きやみ、涙で目を真っ赤に腫らしたセズクは痛々しくて見ていられない。

かなり、無様だ。

よろよろと肩を落として、時々ハンカチを目に当てながらP C部屋から去っていく。

自分のすべてをささげた結晶を粉碎された芸術家のように惨めで哀れな後姿を目に焼き付ける。

その前に、何しに来たんだお前。

泣きに來ただけか。

そのためいちいち吹き飛ばされるドアが気の毒である。
この約二週間の間にいろいろなことが起こり去っていった。
後二日でこのハイライトから出て行き夏課外授業が始まったばかりの
今まさに夏真っ盛りの大塔高校にまた通うこととなる。
仁の部屋のソファで唐突に眠気に襲われ窓から差し込んでくる光
を眺めながら
俺は仁のキーボードの心地よい音を聞きながら目を閉じた。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

回想摩天楼（後書き）

あわわ、抜けてました！
すいません！

執着心

あちこちで燃えている建物。

巨大な都市のあちこちで火の手が上がり闇を赤く染めていた。

俺は空中からそれを客観的に見ていた。

大きな艦が都市を焼いていくのを……だ。

急に体が重くなりはっと目を覚ます。

そこは寝る前と何一つ変わらない仁のPC部屋だった。

かなり暗い部屋に壊れた入り口から差し込む光とスクリーンから出る青白い光が唯一の光源として部屋を照らしていた。

ひんやりとしたシャツをさわると、ぐっしりとぬれている。

大量の汗をかいていたらしい。

「なんだよ、あの夢……」

昔見たPCゲームのようだった。

『戦争傍観記』といって国と国が戦争しているのを客観的にカメラをいじり

ただただ見つめるだけのくだらないゲームだ。

実際にこれを鬼灯のおっさんからR18と書かれたパッケージを渡されてPCに入れて

起動したところまでいい。

そこからが余りにも悲惨すぎて見る気もなかった。

戦争の実際の様子を世界の平和ボケの国などに叩きつけるためのゲームらしいが

平和ボケの国には余り効果はないだろうな……と勝手に思っていた記憶がある。

シャツを脱いで上着一枚だけになり時計を見ると午前三時を長針が

さしていた。

ア ril からの予想外すぎる告白につかれきった俺が眠ったのは午後七時ぐらいだから

かれこれ八時間眠っていた計算になる。

最近寝てばかりだなあと思いつつ机上のビスケットを口に入れる。甘ったるい味が口の中に充満して飲み物を探してきよろきよろするが見つかからない。

甘すぎるだろ、このビスケット。

仁がすやすやとベットで眠っているのを見ながら立ち上がろうとすると

後ろから誰かが水入りのコップを渡してくれた。

それを手に取り一気に飲み干すと同時に口を開く。

「セズクか？」

「さようでございます」

「…またお前か…」

とりあえず放せ触るな、つまむな！

やめろ！！」

いつの間にか後ろから抱きかかえられていた俺はセズクをにらみつける。

セズクの右手を振りほどこうと抵抗する。

「くっくくく…波音意外と敏感なん…ぐあっ！」

蹴ってやった。

思いつきりセズクの股間に蹴りを入れてやった。

あがらない痛みを与えられたセズクの両手が緩んだ隙に逃げよう

とソファーから飛び降りた。

「なっ!？」

ところが右腕が引っ張られあえなく地べたに転がる。

とっさに右腕を見るとキラリと光るもので壁のパイプとつながれていた。

手錠だ、どこから手に入れやがったんだこいつは。

「さっき買ってきたんだ、どうだい動けないだろう?」

「……いや?」

手錠を手首をひねって抜け出す。

関節を外すのかなり痛いがまあこの場合は仕方ないだろう。

だって外さないと俺、いろんな意味で死んでしまうし。

皆さんはそろそろお忘れではなかっただろうか。

一応俺はコソ泥です。

ビスケットを掴みセズクの口に突っ込みながら左手で携帯を掴み部屋から走り去る。

もともと壊れていたドアは俺の行く手をさえぎることなく廊下への道を開いていてくれた。

「に、逃がさないよ!」

ビスケットをもぐもぐしながらセズクはわざわざ壁を突き破って出てきた。

いや、普通にドアから出るよ!って…

「はええええええ!!!!」

本当に早かった。

二十メートルほどの差は一瞬にして縮まり俺の横に並ぶ。

「僕のものになれっ！波音！」

「だ、誰になるかボケ！死ね！！」

いや、死んだらあかんけど。

セズクはにやりと不気味に笑った後何かをポケットから取り出した。先端のケースを外すとそこには立派な注射器が！その立派な注射器が俺のほうへ向かってきた。

「あつぶねえ！」

「ちっ、外したか」

「な、何が入ってんだよそれえ！」

「媚薬とシビレ薬！」

絶対に刺されるわけにはいかない。

硬く心に誓うと同時に全開にした目で注射器を追う。

再び銀の閃光がきらめいて注射器が向かってくるが針を指の間に挟み本体を握る。

そのままセズクごと投げ飛ばそうと力を入れるとセズクが空中で一回転した。

「頭うって気絶しやがれ！」

「ふふっ」

わ、笑いやがった…

「ところがそうはいかないよ？

現実には常に悲惨なものなのさ」

セズクは空中で一回転した後再び地面に綺麗に着地した。

アクロバットをしたただけだというセズクの顔を眺め啞然とする。

運動神経いいとかそういう問題じゃなくて人としてどうなんだ、それ。

「そんなのありなのかよお！」

もう俺半泣きである。

「おとなしく刺され！」

絶対に嫌だ。

セズクは再び注射器を俺に向かって突き刺そうとしてくる。

目とかには入らないように頭から下を狙っているとしても下手なところ刺されば死ぬだろう。

それを考えて振り回しているのだろうが不安は不安だ。

飛んできた注射器を針ごとつかみ一気に奪い取り地面に叩きつける。

ガラスが砕け散り、セズクの血の気がさっと引く。

「ははっ、ざまあみろ！」

「……………」

セズクはにこりと笑ったまま肩にかけていたものを俺につきつけた。ちょっと、待て。

ぱっと見ショットガンなんですが。

「注射器の百分の一の大きさの散弾注射器が入っているんだ。

波音、よけるかな？」

わざわざ説明ありがとう。

なんでそんなもの作っている暇があるんだと問い詰めたい所だが散弾なんてこんな狭い廊下で撃たれたらたまったもんじゃない。

「頭などには刺さらないように調節済みだから安心して刺さっているよ」

意味がわからねえ。

くるりとショットガンを回転させるセズク。

そして銃口が煙を吐き出し空気を切り裂いた音がしたかと思うと小型注射器が俺の目の前で軌道を大きく曲げた。

「——っ!？」

「危なかったね、波音」

つぶっていた目を開けるとショットヘアの最終兵器が見えた。メイナだ。

右手を突き出してイージスをはって来ていたようだ。

「体…大丈夫なのか？」

「大丈夫だ」

俺の後ろから声がそう発せられる。
ロングヘアーで眼帯の最終兵器、シエラだ。
シエラは腕を組んでセズクをじっと見ていた。

「丸一日寝ていたからな。

もう僕達は大丈夫だ。

心配かけたな」

予想外の二人の登場にセズクは驚いたようだ。

「おやおや、とんだ邪魔が入ってきましたね。

それもとて僕ではかなわないのが二人も：

今回ばかりは負けを認めたほうがよさそうですね」

今回も何もないと思うんだがなあ。

セズクは残念そうに、本当に残念そうにそうだな。

餌を食べ損ねた腹ペコのライオンのようにしょんぼりして廊下の角を曲がって消えた。

「あ、言い忘れましたが

波音、絶対に僕の者にしてみせるぜ♪」

戻ってきた、そしてセリフを言ってまた消えた。

床に落ちている微々なる注射器を拾って眺める。

一つ一ミリぐらいだ。

それを息を吹きかけて吹き飛ばす。

「まったく……。

波音も男か女か分からないような中性的な顔してるから悪いんじゃないの？」

とメイナ。

「僕もそう思う。

その顔やめたほうがいいんじゃないか？」

とシエラ。

「うるせえよ。

第一、好きでこの顔になったんじゃないからねーからな」

もちろん反論させてもらう。

好きでこんな顔に生まれたわけではないからな。

腹が立つが顔は整形でもしない限り無理だろ、変えるの。

昔からそのせいでよく女に間違われたりして…

トラウマである。

ため息をつきかけたとき大音量でスピーカーが鳴り始めた。

《FA-5エリアにフォーゲルが侵入。

総員第一種戦闘配備！

繰り返し、FA-5エリアに——》

「FA-5エリアって言ったら…」

自分でもさつと血の気が引くのが分かった。

「仁っ！」

急いで仁の部屋へと戻る。

仁の名前を呼びながらP C部屋に入ると崩れた天井からフォーゲルが仁を

運び出していくところだった。

仁は気絶しているのかピクリともしない。

「しまった！」

「波音、どいて！」

レーザーがフォーゲルを突き刺す。

仁が床に落ちるのをキャッチするよりも早く別のフォーゲルが仁を掴み

運び去っていく。

そのフォーゲルを叩き落そうとするとまた別のフォーゲルが俺達に煙を吹きかけた。

目に激痛が走る。

「催涙煙か！」

涙で歪む視界に仁が天高く上っていくのがかすかに写る。

「仁っ！！！」

仁を掴んだフォーゲルを守るかのようにいくつものフォーゲルが壁のように固まる。

「シエラ！メイナー！」

二人に助けを求めるが催涙煙が効いているのか二人は目をこすって

いる。

それにまだ翼のダメージは回復していないのかもしれない。

パンソロジャーラーダーも今は相当弱っているのかもしれない。

そう考えなければこの二人が催涙煙なんて効くはずないだろうに……。
ってことはシエラの大丈夫は張子の虎だったようだ。

なにも無理しなくても……と思いつながら何か使えるものを探す。

するとビケットなどと一緒においてあった銃を見つけ壁になった
フォーゲルに向かって撃つが

装甲が硬いのと距離がありすぎるせいでかすかに火花を散らす程度
におさまった。

そうこうしているうちに星空に仁を抱えたフォーゲルは溶け込み完
全に分からなくなってしまい

壁のフォーゲルもばらばらになって次々消えていった。

銃を落とし放心状態になった俺の耳に廊下からどたばたと走る音が
聞こえ

「波音! どうした!」

という声が俺にかけられた。

その声にはじかれたようにジョンに泣きつく。

「仁が!!」

仁がっ!!

ジョン、助けてくれよ!!」

ジョンに一気にまくしたてる。

冷静さがかけていくのを自分でも感じていた。

「落ち着け!

何があっただんだ!」

回復したシエラとメイナが取り乱している俺の変わりにジョンに説明してくれたようだ。
ジョンは説明を聞き終わったとに

「Shit…
なんてこった…」

そう呟き仁をさらっていったフォーゲルが消えた先の空をキッと睨みつけた。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

執着心（後書き）

どうも、よんでくだりありがとうございました。

どうかこれからもよろしくお願いします。

感想の設定を変えて一般の方からも受け付けるようになりました。
よろしければ・・・（笑）

ジープバトル

「ジョン、俺達が行く！」

あのフォーゲルの行き先を教えてください！」

俺はそういつてジョンを揺さぶった。

ジョンは俺を落ち着かせて

「分かった。

シエラとメイナがいればなんとかなるだろう！」

波音、お前は基本的に何でも操縦できるんだろ？」

なにを不思議そうな顔をしてるんだ、鬼灯から全部聞いたぞ。

あの特殊車両を一台貸す、それにのって仁を助けに向かえ！」

後で俺達も行く！」

一気にそう吐き出した。

指をさした先にある特殊車両は一見普通のジープだ。

別に仕掛けがあるようには見えないんだがな。

「そのジープには電子錯乱ミサイルなどが詰め込んである。

いざって時に使え！」

なるほど、特殊だ。

ボンネットを見るといろいろ出てきそうな形になっている。

ふとウザイがいい戦力になる男の存在を思い出し兵士達に指示を出しているジョンに聞く。

「セズクはいないのか？」

「なんか知らんが、落ち込んでいて使い物にならん！
とにかくさっさと行け！

間に合う内に！」

ああ、落ち込んでるのか。
俺のせいなのか、それは。

「シエラ、メイナ！
乗れ、いくぞ！」

ジープに飛び乗り刺さったままのエンジンキーを回す。
エンジンが排気ガスを噴出し鈍い振動が伝わる。

「場所はカーナビに登録しておいたから指示に従っていけば大丈夫
だ！

行ってこい、波音！」

シエラとメイナが乗っているのを確認した後ギアをDに入れてサイドブレーキを落とす。
ブレーキから足を離し思いっきりアクセルを踏むと同時にハンドルをきる。

軍用の車だけあって無茶な操作をしても全然大丈夫なんだな。
甲高いタイヤの音が鼓膜を刺激すると同時にGが体全体にかかる。
気がつくとジープはすごいスピードで車庫のカーブを超え帝国郡基地から飛び出していた。

「シートベルト締めろよ！
今回の俺はハードに行くぞ！」

そうシエラとメイナに怒鳴ってサイドブレーキをかけるとともに思いつきハンドルを左へきる。

物凄い勢いで景色が右へと流れまたタイヤが軋む。

やばい、テンション上がってきた。

住宅街に車は少なくまだ午前三時ちよつとという時間を痛感させられる。

眠っている街を乗り越え、トレーラーとぶつかりそうになるもシエラのレーザーが荷台に穴を穿つ。

トレーラーのおっちゃんごめんよ。

トレーラーの荷台が溶けて裂けて出来た隙間にジープを押し込みなんとか通り抜ける。

ベキンとサイドミラーがへし折れ持っていかれたが運転自体に支障は無い。

なにか文句言ってるトレーラーのおっちゃんの声を背後に聞きながらさらにハンドルをきって道を曲がる。

そうしているうちに明かりがついた住宅がまばらになり痛々しく破壊された住宅街が姿をあらわす。

連合郡と帝国郡が争っている最前線の街……。

ハイライトの真東に位置するところに存在している街だ。

戦争の生々しい爪跡が残っている住宅街に突入した。

ここの通り抜ければナビゲーションのとおりのところ——連合郡の研究室までは間もない。

「波音、見て！」

「ちっ！」

メイナが指差したほうを見ると俺達が近づいてきたのを察知したのか戦車が出てくるところだった。

ポロボロの家々を崩しながら戦車の砲台が作動して砲口がこちらを

ぴたりと見据える。

砲口の奥で何か赤い光が収束しているのが見えると同時にカッと赤い閃光が俺達のジープをかすめ、後ろにあった建物が吹き飛ぶ。

建物だった瓦礫が車体を打ち鉄がへこむ独特の音がする。

「レーザーだよ、波音！」

メイナがわざわざ俺に報告する。

うっさい、言われんでもわかつとるわい。

「そこどけえええ!!!」

ハンドルについている赤いスイッチを押すとボンネットが開いてキラリと光る電子錯乱ミサイルが出現する。

フロントガラスに距離などをあらわす数値が出てきて電子機器の計算する音が響く。

チチチチ…と緑のマークが移動してゆっくりと戦車に重なる。

《Target lock on!》

その数値がマークの上に赤く表示されマークも赤くなると同時に俺は発射スイッチを押した。

ボンネットが煙が覆われ、ミサイルが拘束具からはずれ戦車へとスピードを上げる。

ミサイルなどはすでに連合軍では旧世代のしろものになりつつあるらしい。

それよりも確実に相手に命中させることが出来るレーザーが主流になるつつあるようだ。

歩兵の銃からなにか何までレーザーとはいかないが発掘した部品

を修理して戦車などに搭載しているらしい。

それは今戦車がレーザーを撃ってきたことにより紛れも無い事実となった。

連合郡の科学技術は帝国郡よりも二十年ほど先を行っているらしい。ベルカの超光化学をわずかだが手に入れたからだ。

そんな超兵器に対抗するべく帝国郡もがんばってはいるが現時点では月とすっぽん。

連合郡の技術をむしりとるのが帝国郡が勝てる一手となっている。

ジープから発射されたミサイル――

帝国郡が連合郡の高性能な兵器を無傷で手に入れたがために開発した特殊ミサイルだ。

電子錯乱ミサイルと正式名称があり「オクトパス」というコードネームを持つ代物で

特殊な電波を出して電子機器を狂わせつつミサイル本体は目標に突き刺さり相手の電力を吸い取る。

ジョン曰く、このミサイルが五本もあれば駆逐艦程度なら完全に無力化できるらしい。

ジープのボンネットから発射されたその小型バージョンのミニオクトパスは

空中で特殊な電波の照準を戦車へと向けた。

そして戦車内の軍人が狂いだした電子機器に焦り、何が起きたのかを悟らせる暇もなく

ミニオクトパス本体のスピードが一気にマッハへと達した頃戦車へと深々と突き刺さった。

へこんだ弾頭がはずれ中から出てきた吸盤が戦車の電力をむさぼる。その結果、戦車は自力では動くことが出来ない鉄の塊と化した。

その戦車の横をさっそうとジープが駆け抜けていく。

それを戦車は追うことすら許されずただ黙って見逃すほかなかった。

「フォーゲルがつれてきたやつを培養槽に放り込め。

すぐにESSPX細胞を注入する準備にとりかかるぞ」

男はそばにいる研究員にそう指示をだした。

まじめそうな研究員はにやりと笑い「了解しました」と軽く男に会釈する。

そのまま片手にバインダーをもったまま研究員は部屋から出て行った。

新しい人体が手に入った研究室は本当に嬉しそうに活気にあふれている。

ハイライトの倉庫から見つけた新しいESSPX細胞に関するサンプル。

ESSPX細胞——可変式鋼鉄細胞のことだ。

セズク・KT・ナスカルークに注入したのを最後に行き詰っていた研究は

本物のサンプルを手に入れた事により研究は大きく前進した。

そう、F・Dの主翼の破片だ。

だが研究者たちは口をそろえて『超光化学』の力がないとどうにもならないと言う。

男も研究員の一人であるから本物のサンプルを手に入れたとしても本物に少し近づいただけの

モドキが作れるだけだと思っている。

それでも実験し、データをとるのが研究員の仕事であり男の誇りでもある。

研究を連合郡から任されてはや五十年。

入った頃にはつるつるしていた利き手も血管が浮き出てボロボロのありさまだ。

「わざわざ本物を作る必要はない。
モドキでも十分な戦力となるからだ」

男はそう思っているため研究が進まなくてもあまりイライラはして
いなかった。

もう研究は進歩しないかと感じていた矢先、本物のサンプルが手に
入った。

思いがけない幸運に恵まれたものだと思いつつそれを解明しさら
に強力なESSPX細胞を作り出した。

だがまた新たな問題が発生した。

そう、実験体がないのだ。

捕虜はすべて実験で殺してしまった現在は活きのいい新しい人体が
必要となる。

そう感じた男はフォーゲルに命じ仁をさらってこさせたというわけ
だ。

煙草を吸おうと箱を取り出すが中には何も入っておらず苦笑して握
りつぶす。

買いに行くか、と思い立ち席を立った男は聞きなれない音に眉をひ
そめた。

そう鉄の棒がすごい圧力によって砕け散ったような音――。

「もう来たのか…

早いな…予想をかなり上回る早さだ」

男は舌打ちをして窓から外の星を眺めた。

ここは捨てなければならぬのか。

危機感を感じた男はマイクのスイッチをいれ研究を急がせる放送を
すると同時に

手元の荷物を持って研究室へと向かった。

「うおおお!!」

「じい　い　いん!!!」

俺のジープは連合郡の入り口の作を突き破って基地内へと侵入した。当然、銃弾はあちこちから飛んでくるのだがジープは完璧に防弾加工されており

銃弾をはじき返す気持ちのいい音が車内に響く。

あの後戦車三台を無力化してきた。

ミサイルは残っていないし車体のダメージもそれなりに蓄積している。

別に走ればかまわないと思いきらにかっ飛ばしていたが突如パァン!と音がしてハンドルが取られた。

「うわっ!?!」

パンクしたジープは急には止まることなどできるわけなく思いつきり壁に突っ込んだ。

俺はシートベルトしてましたよ、ちゃんと。

フロントガラス砕け散ってボンネットから白い煙あがってるけどな。つつこむと同時に銃声がぴたりとやむ。

死んだと思っているのか…?

「シエラ、メイナ、行け!」

「了解だ」

「了解、さあショータイムだね！」

二人はスピンしているジープのドアを蹴破り兵士達の真ん中に降り立つ。

俺？

俺は二人任せです、はい。

「な……………っ!？」

一人の兵士がいきなり現れた見知らぬ少女に咄然とする。

その一瞬の隙が命取りとなった。

シエラの右手が煌き兵士の首が宙へ舞う。

ひるまずに襲い掛かってきた兵士がメイナに襲い掛かるがメイナのナイフに心臓を貫かれ絶命する。

「馬鹿め！隙だらけだ！」

そう勢い込んで引き金をひく兵士達。

二人に向かってきた銃弾はイーリスによりあえなく軌道を曲げられ驚き、隙を作ってしまった哀れな兵士は容赦なく対人レーザーによって肉を抉り取られ死を宣告される。

あの分だと自分が死んだという意識すらないだろう。

死の瞬間を感じさせるまもなく次々と兵士達が血に沈んでいく。

あっという間に二十人ほどいたはずの兵士は倒れ死にきれない兵士のうめき声のみが響く場となった。

「た、頼む…

助けてくれ…………死にたくない…ごほっ、ごほっ…

はぁ、はぁ…………」

「もうおじさん死ぬじゃん。
楽にしてあげるね」

メイナはにっこり笑いながら壁にもたれていたおじさん兵士の頭を蹴りで吹き飛ばした。
首は地面に転がり、血の噴水が壁に刻印される。

「うっぷ…」

こんなの見て正気でいれるやつらの気が知れない。
俺は今吐き気を催して盛大にぶちまけそうになったところだ。
なれなんてものがあるわけないだろう。
人が死ぬのを見るのになれたらそれは人として最後だと思う。

「はくのんっ♪
終わったよ！」

メイナが頬についた血を指でこすり落としながら俺に呼びかけてきた。

シエラは右手についた血を振り落とし新たな血の模様をつくっている真っ最中だ。

そのシエラの脳天を赤い点——レーザーポインタが狙っているのが見えた俺は

ほとんど条件反射でシエラを突き飛ばしていた。

大気中に鳴り響く凶太い銃声。

俺の左腕に何かが当たったような感覚のあとグシュと自分の肉の結合が崩れる音が耳元で聞える。

正体不明の何かに体は突き飛ばされ俺の目には宙を舞う紛れもなく自分の左腕だったものがちらりと見えた。

これもまた自分のであろう鮮血が吹き上がるのを見て突如視界が暗くなる。

今意識を手放すわけにはいかない…俺は必死に意識を手繰り寄せた。

なにか温かいものにつつまれているようだった。

どこか懐かしい感覚、そう母さんに抱っこされているあの感覚だ。

「…の……ん、は……」

途切れ途切れの声にようやく目をかすかに開けることが出来た。

目の前になにやら山が…うん、山が見える。

その山の間からメイナの顔が出てきた。

初日の出…？

初日の出ならぬ初メイナ？

「目を覚ました！目を覚ましたよ、シエラ！」

「よかった、波音無事か？」

改めて状況を確認するとどうやら俺はメイナに膝枕されつつシエラに左腕を治療してもらっているようだ。

山、といったアレも状況が確認できた今なら正体がはっきりした。いやあえて言わないけど。

緑の光が俺の左腕に当てられていて千切れた部分どうしが今までそこが千切れていたとはにわかには信じられないほど綺麗にくっついていた。

「……できた」

シエラが額の汗をぬぐって俺に笑いかける。

「グーパーできる？」

メイナの問いに左腕に今までどおりに信号を送る。
素直に俺の左腕はグーパーと動いた。

「……治してくれたんだよね……？」

シエラ、ありがとうな」

最終兵器に治癒能力があるとはまったく知らなかった。

「僕の方こそありがとうだ、波音。

正直アレあたっても別に大丈夫だったけど、感謝はする」

……おい。

つまりそれは俺の当たり損っていることなのか。

ひどい、ひどすぎる。

メイナに膝枕ありがとうとお礼をいよろけながらも立ち上がる。
屋上から煙が上がっているのが確認できた。

「あそこの機銃から波音は撃たれたんだ。
すぐに破壊したかな」

シエラが俺の目線を追い説明してくれた。

服についた土を払いボンネットから煙を上げているジープから銃を
取り出す。

念のため安全装置もはずしておく。

建物の中に飛び込み仁を探し始める。

「おーい！仁！」

これで答えてくるなんてことはありえないがやらないよりもましかと。

捕らえられているのに返事なんて出来るわけないのだが。仁が答えを返してくれると信じて建物の中を歩き回る。

さっきの兵士で全兵力だったのか建物の中はもぬけの殻と化していた。

小さな建物だからそれに値する量の兵力しか分担されていないと見て間違いないだろう。

「シエラ、パンソロジー使えないか？」

「ごめん、やっぱりまだ……。」

でも、イージスを使える程度には回復してきてるからもう少し時間があれば……」

「そうか……」

そんなやり取りを交わしているうちに地下へと向かう道を発見し入る。

研究室か何かの施設なのだろうか、ここは。

やがて一番奥に着いたであろうところでむっと血のにおいが漂ってきた。

おもわず鼻を袖で覆う。

メイナは眉をひそめ、何かの気配を感じようと集中しているように見えた。

俺も銃を思わず強く握り締めてしまっていた。

角を曲がるとガラスケースの中に変な液体と共に入っている仁を発見した。

近寄ろうと我を忘れた俺の足に何かが当たる。

それは血みどろで倒れている研究員達だった。

全部で十人ほどの研究員が体から血を出して死んでいる。

吐き気を催しながらも仁を助けようと必死の俺はガラスケースに銃床を叩き付けた。

「触るな、クソガキが」

急に後ろから声が聞え振り返る。

めがねをかけたひよろつとした七十後半に見えるおじいさんが俺を鋭く光る眼孔で睨みつけていた。

「なんだよ、ジジイ。」

俺は親友を取り返しに來ただけだろうが」

「私の研究はそいつにESSPX細胞を注入するだけで終わるんだ。邪魔はしないでもらおうか……」

「邪魔もなにもねえだろうが！

俺は親友——相棒を取り返しに來ただけだ！」

勢いよく怒鳴ったのはいいが次の瞬間俺の体はぶっ飛んで棚に思いっきり激突していた。

口の中が血の味で埋め尽くされる。

頬のひりひりした痛みによって今俺はこのジジイに殴られたのだと認識するまで数秒を要した。

打ち付けられたところもひりひりと痛む。

「ならお前を私は捻りつぶそう。」

そこにいる研究員達と同じようにな」

ジジイはとても老人には見えないスピードで俺に向かって飛び掛ってきた。

やばい、殺される。

ジジイのパンチが鉄製の床を軽々と抉る。

鉄製って鉄で出来た床だぞ？

それをこのジジイは軽々とパンチで抉って見せたのだ。

どうやら研究員達を銃で殺し迫り来る敵を倒すために自分にESS PX細胞を注入したようだ。

え、なにこいつ、変形するのかじゃあ。

再び繰り出されるパンチはこれまた鉄製の壁に軽々と穴を開ける。

それをよけて瞬間的に引き金を引こうとしたがジジイの蹴りをくらった俺の体は壁に叩きつけられた。

体内で数本の骨が折れるような音がして激痛がこみ上げてくる。

「あっはっは、どうしたクソガキ！

相棒を取り戻しにきたんじゃない……うっ！」

笑っているジジイの体が崩れ落ちた。

その後ろではシエラが無言で倒れたジジイを見据える。

どうやら一気にシエラが近づいてジジイの首に手刀を叩き込んだようだ。

ジジイの首の骨は無残に砕け散り涎が流出すると共にアンモニア臭などが部屋を満たす。

あっけなさすぎる超人の死だった。

「臭い……ね。

波音、大丈夫？」

今度はメイナが俺の体を治療してくれた。

緑の光に当たった場所から痛みが取れていくのが分かる。

骨折の激痛が収まった後、仁が眠っているガラスケースに思いつき
り銃床を叩きつける。
だがヒビはおろか、傷すら入らない。

「かつてえな、これ。」

仁、大丈夫なのかなあ…」

何度も何度も銃床を叩きつけるがやはりガラスケースはびくともし
なかった。

「波音、どいて。」

私がやってみるから」

メイナはそういつて拳を思いっきりガラスケースに叩き込んだ。

頑丈だと思っていたガラスケースが嘘のように砕け散り変な液体が
流れ出すと共に仁が咳き込んだ。

「仁！」

「ごほっ、ごほっ！」

はぁ……はぁ……は、波音……！」

咳き込みながら俺をみて笑う。

元気そうだ。

まったく俺達の苦勞を知らないで……脳天気な奴だ。

ほんの少ししか離れていなくとも親友であり相棒がいないとやっぱ
り寂しいものだ。

よかった、仁………。

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

ジープバトル(後書き)

ありがとうございました。

よろしければまたよんでやってください。

再来した平和

「何もされてないよな、仁？」

「ああ、大丈夫だ。」

心配かけてソーリーだぜ、波音」

四人で素早く外へと急ぐ。

地下からの階段から出たときにをふと見ると信じられないぐらいの数の

フォーゲルが空を覆っていた。

「うっわ……引くわ……」

「もう、フォーゲルはこりごりだぜ、俺は。」

二度と触りたくもねーわ」

仁はため息をつきながら床に落ちていた銃を拾い上げる。

まだフォーゲルはこっちに気がついていないらしく上空をふよふよしているだけだ。

ってか機械なんだからレーダーとかつけとけよと突っ込んだら負けなのか、ここは。

「いいか、あのジープだ。」

見えるか、仁？

あのジープは防弾だし、速いからあれしきのフォーゲルなら撒けるだろう。

ただ、パンクしてるがな」

「了解だ」

「それにしても本当に何もされなかったんだろうな？」

これ以上俺の周りに人間だけど人間じゃないやつが増えるのはいやだぞ？」

「それって私達のことなのかな？」

仁と話をしているとメイナが割り込んできて文句を垂れる。
どう考えてもお前らしいないだろ。

「ちよつと、黙れ。」

「ばれたらどうする」

シエラが喧嘩になりそうなのを止めに入ってきた。
一応お前も人間じゃないんだからな。

自分は対象外と思っているのかどうかは知らんが。
と、窓ガラスが割れ銃弾がなだれ込んできた。

「ばれたじゃねえか！」

「あんな大声で喧嘩してればそりゃばれらーな…」

仁がやれやれと動作をする。

なんでお前は被害者面なんだよ。

お前も加害者側だろうが。

「もういい！」

行くぞ！！」

窓ガラスが次々と割れる音を背後に聞きながら壁に突っ込んだジープへと向かう。

ちなみにシエラとメイナはイージスで俺達を守り俺が運転して一気に逃げるという戦法だ。

計画通りジープに乗り込めたまではよかったのだが

「エンジンがかからねえ！」

ボンネットから白い煙が上がっているジープ。

やっぱりあんな派手に戦車にぶつかったり柵を蹴散らしたりするんじゃないかったといまさら後悔する。

後悔先立たずとはまさにこのことか。

「そりゃこんなに煙でてたらなあ……」

助手席に座っている仁もあきれた顔で俺を見る。

「波音！早く出して！」

メイナが俺に命令するがエンジンが言うことを聞かないのだ。

「かかれかかれかかれ！！」

銃弾が周りの地面をえぐっているのだろうか。

土がやたらガラスに付着する。

何度も何度もキーを回すがエンジンはうんともすんとも言わない。あせりがあせりを呼び汗でキーがすべる。

完璧につんだな……と思った矢先上空にレーザーが四本ほど走りフォージェルが炎を吹き上げた。

銃弾がぶつかる音が止みフォージェルがレーザー源へと飛び去ってい

く。

窓から外を見ると二連装の対空砲車両がこちらに二つ進んでくるところだった。

帝国郡のマークがくつきりと描かれている。

あいからわずいい所ばかり持ってやがる。

ジョンだ。

無線機がガーガーなっていたのに今気がつき受信ボタンを押すとジョンの声が車内にあふれる。

《待たせたな。

助けに来たぞ、波音》

「ジョン！

流石だな、助かったよ」

《はのゝん、僕もいるよ》

「お前は死ね」

次々と対空砲火がまだ暗い夜空に引っかき傷を残しフォーゲルがどんどん落ちていく。

ぼんやりと夜空が明るくなる頃には空を覆っていたフォーゲルは一つ残らず叩き落されていた。

五時半といったところだろうか。

次第に明るくなってくる夜空を眺め今の時間を考える。

さらわれて二時間ちよつとでここまでハードにいけるとは自分でも意外だった。

砲身から蜃気楼が出ている対空砲車両がジープの横まで来て止まる。

「また派手にやったなあ」

連合郡から奪い取ったのであろう対空砲車両から降りてきたジョンはジープを見て苦笑する。

ジープのボンネットを触り熱かったのか手を引っ込める。

「ごめんなさい」

素直に謝る俺。

それほど仁を助けたかったのだ。

「いや、かまわんさ。

いずれこれも占領するつもりだったんだからな。

それにあいつらの研究の成果も奪い取ることが出来て一石二鳥とはまさにこのこと。

ラッキーだ、ありがとうな」

一石二鳥って……俺らは石なのかよ、ジョン。

「司令！

ちょっとこれ見て下さい！」

兵士の一人が報告しに来る。

右手を上げて今行くという意志を兵士に伝えた後俺にウインクして歩いていった。

「はくのん！」

お前は立ち直りが早すぎてうざいし、キモイ。

「うっせ、俺に近づくな」

「そんなこといわずに〜ね？
ほら、ね？」

何がね？なのかさっぱり分からないから無視して仁やシエラの所へと逃げる。

ジョンへと目を向けると顔を赤くしてホクホクしている。

何を見つけたのかは知らないがとりあえずいいものだったのだろう。

「波音、ありがとうな。」

もしかしたら俺助けに来てくれないんじゃないかと…」

「馬鹿野郎」

俺は笑いながら仁に呟いた。

「ぜんぜんかまわないって言ってんだろう？」

「ああ、ありがとうな」

「もういいっての。」

ありがとう連発しすぎだぞ？」

「ありがとう」

「こいつは……」

こんな他愛も無い会話が今はずっともうれしかった。

「じゃあな、ジョン」

「ああ、お前らも元気だな」

「じゃあ、また」

ジョンとセズクに手を振りゲートへと歩き出した時ジョンが俺の耳元でささやく。

「シエラとメイナだがいざって時に帝国郡の応援に貸してくれねえか？」

いや、嫌ならかまわないんだが——いいか？」

この内容はシエラとメイナに聞いたのか分からないが、二人が俺とジョンの方を向いたのは確かだ。

「ん、いいけど別に。」

ジョンの言葉を借りるなら帝国郡のため…でしょ？」

「すまねえな。」

この二人がいるだけで一国の軍事力はまかなえるぜ」

「じゃ、これで。」

あ、セズクも」

「波音、いざって時には僕を呼んでくれてもかまわないからね。かまわないからね!!」

なんで二回言ったんだよ。

「お前だけは絶対によばねえ。
絶対に、だ」

俺も念をおすために二回言った。
少し涙目になったセズクにもバイバイと手を振って俺達四人は飛行機に乗り込んだ。

「来るときは散々だったからな。
帰るときぐらいはのんびり行きたいぜ」

仁は来るときの大惨事を思い出して嫌そうな顔をする。
俺も同意見で、あんなの二度とごめんだ。

「僕は別にかまわないけどな」

シエラが椅子に座って窓から外を眺めながらポツリと呟く。

「私は疲れるから嫌だけどね」

メイナは椅子のシートベルトをみよんみよん引っ張りながら答弁する。

シートベルトで遊ぶんじゃない。
アナウンスが入りちよつとGが体にかかったかと思うとふわりとした感覚がこみあげてきた。

さらば、ハイライトってか。

今度は観光という目的でこれたらうれしいものだ…。

紫の光を放出しながら宙に浮く島か……。

ベルカ帝国——正式名称としてはベルカ世界連邦帝国か。
今朝ジョンから聞いたベルカ帝国に関する情報がまだ頭の中で回っている。

ベルカ世界連邦帝国って一体なんなんだろうな……。
光を資源として発展した文明の産物の一つであるハイライトは
宙に浮きながら幻想的な景色をただ俺に見せつけるだけで何も答え
てはくれなかった。

「おかえり、波音」

「おっすおっさん。」

はいな、これ例の超光学記憶媒体な」

鬼灯のおっさんは俺からチップを受け取るとさっそくPCに差し込
んだ。

パーセンテージが画面に表示され『読み込み中』と表示される。

「これどれぐらいの容量があるんだ、おっさん」

おっさんはPC画面を見つめたまま

「さあな。」

ただ一つ言えるのは軽く百テラバイトはあるってことぐらいか」

PCに疎い俺に誰か教えてくれ。

百テラバイトってどれぐらいなんだ？

考える俺の耳にドタドタと誰かが走ってくる音がしてバーンと扉が開かれる。

振り返る俺の目にうつる男勝りな女。

「お父さん！帰ってきたなら帰ってきたって……波音？

波音じゃないの！久しぶり！！」

詩乃だ。

鬼灯のおっさんはめったに家に帰らずたまーにしか娘と話さないかな。

無理も無いか。

「あんた、アリルに会ってきたの？」

あー…………。

そうか、そういわれてみれば…。

「今すぐ行って来い！！」

半袖短パン状態でオレンジジュースの瓶を片手に何も言わないのを見かねてか

詩乃が俺に命令する。

「落ち着け落ち着け。

今から行けばいいんだろ、行けば。

だからひとまずこれぐらい飲ませろ」

「あんたって男はっ！

女の子をなんだと思っ——！」

「詩乃、その辺にしておきなさい。

波音も色々あったんだから、大目に見てあげなさい」

詩乃は不満そうな顔をしてふくれる。

「むー…分かったわ。

でも波音、ア ril は私と違っておしとやかな乙女だからね。

泣かしたりしたら私があんたを泣かすから」

詩乃はどうせ場所が分からないでしょ？と言わんばかりの勢いでそばにあった地図を俺に投げつけた。

うまいことキャッチするがちよつとイラツとする。

「はあ……ったくぎゃーぎゃーうるせえなあ。

お前は俺の母ちゃんかって」

思わず声を荒げてしまう。

めったに怒らない俺に不意打ちされた詩乃は啞然とした顔で俺を見る。

だがまたすぐに

「あんた見てると不安で不安でしようがないの！

そもそもあんたが……」

詩乃の言葉をさえぎるように思いっきりドアを閉める。

ドアを通して何かいろいろ聞えてくるが無視して長い廊下を歩く。
もらった地図を広げると

『詩乃様のア ril 家への道マップ ver?』と書かれたけっこう

でかい地図だった。

蛍光ペンで道筋をわざわざなぞってくれている。

今流行のツンデレか、あいつは。

草多いながら太陽光が射す道をつきすすむ。

クーラーの効いた部屋から出た瞬間にもう全身からじんわりと汗が出てきたようだ。

ジージー蝉は鳴いているしまだ強い午後の太陽光で焼かれている魚の気分だ。

しかもア Ril の家はけっこう遠い。

「あちいー……」

歩いて十分もすればすでに汗だくです、はい。

ハイライトは空にあったからあれだけ涼しかったのだろうか。

やはり日本の夏は暑い。

ちびっ子たちがアイスを片手にスーパ―から出てくるのを目撃して泣かしてえとか思うが暑さでその気も起きない。

そのうち街を抜け大きな山にたどり着いた。

地図によればここを一直線に登る！らしい。

もう、死ぬ、死んでしまいます。

首の汗をぬぐい坂道を登る。

木々が両側に生えている坂道をただひたすら登る。

歩けど歩けど頂上は見えてこないってオチんだだろう、どうせ……
と思っていたが

案外すぐについた。

「なんで、俺の女友達にはこんな大金持ちがおおいんだよ……」

立派なお屋敷がたっていた。

西洋風の豪華なお屋敷だ。

「インターホンないか、インターホン。
ピンポンってやつ」

誰も聞いてないのに独り言を呟く。

あれ、これもしかして末期なんじゃなろうか。

そんなことを考えながらインターホンらしきものを見つけ押す。

すると門のレンガが開いて間からカメラらしきものが出てきて俺をじっと見つめる。

「ちょ、なんだよこれ。

びっくりした」

汗も一瞬で吹き飛んだ。

カメラが俺を見つめているのを無視しながら嚴重すぎる警戒態勢の彼女の家に正直狼狽した。

inues.

This story continues.

再来した平和（後書き）

ありがとうございます。

本当に感謝感激です。

リア充な俺

「あ、お嬢様!？」

どこへ行かれるのですか!？」

門の奥にある扉から女の人の声が聞えると同時に
ア ril が俺に向かってダッシュしてきた。

ア ril は金髪とすらつと長い足に華奢な体つきをしており
膨らんでいる場所はきちんと膨らんでいる成長正しき女子のようだ。
ア ril の後ろには四〇代半ばに見えるおばさんが立っている。
すごいな俺本物のメイドなんてはじめて見たぞ。

詩乃の家は全自動式だし、綾の家はメイドじゃなくて召使だし。

「ご、ごめんなさい！」

ま、まさか今日こられるとは……」

「いやっ、別にいいんだ! 別に!」

メイドは空気を察したのかそそくさとその場を退散する。
蝉の声と猛暑の中に取り残された俺達。

「あの……」

「何?」

「汗……凄いです。」

な、中に入りません……か?」

一語一句慎重に選んでいるのかしどろもどろで話すア ril。
普通に可愛い。

「え、じゃあ遠慮なく。

しっかしでかい家だなあ……」

俺が承諾した瞬間ア rilの顔が気のせいか輝き胸をなでおろすとい
う言葉そのものの動作をする。

「よかったです」

「？何が？」

「波音君……なぜか怖かったんです。

実は迷惑がっているんじゃないか……とか考えてしまつて……
でも会ったら私の思ったとおりの永久——波音君で……
それで安心しました」

ア rilは一気に吐き出した後うつむいてしまった。
しばらく蟬の合唱が俺達をじくじくとつつく。

「……別に……」

「はい？」

「……別に面倒くさくはないぞ？

なんというか——俺も可愛い彼女出来てうれしいし……」

「か、可愛い……ですか……」

なんだろうなこの気持ち。

言いたいことが言えなくてもどかしいしなぜか体の奥からあふれてくる暖かさ。

女は苦手といって告白を断ったこともあったが、なぜ今回に限って了解しちまったんだろう。

ああ、空が高いな。

雲ふわふわしてておいしそうだし。

「と、とにかく中に入りましょう！

ここじゃ暑いですし……」

蝉うるせえなあ、ああ俺このまま彼女持ちの……
遼とかうつせえだろうなあ。

隼人兄さんは大人だから大丈夫かもしれんけどさ……

「波音君……？」

「えっ？ ああすまん。何だ？」

「考え事でもしてたんですか……？
何か上の空でしたから……」

「ん、いや別にたいした事じゃないんだ。
気にしないでくれ、しかし暑いな」

「あ、暑いですよね、本当に！
中に入りましょうよ！ ね、そうしませんか！？」

「悪いだろ？
迷惑じゃなきゃいいんだが……」

「ぜ、全然大丈夫です。

えっと……中へどうぞ……です」

ア ril はそういつて俺に手招きする。

屋敷の中に入るとき自動的に扉が開き、閉まるのには正直びっくりした。

自動ドアの扉バージョンと言ったところか。

やっと冷房が効いた部屋に入れると思って安心すると共に

今俺は禁断の女子の部屋に入るんだって思ってドキドキもする。

うまくいえないけどとりあえず俺は案内されるがままついていった。

「私の部屋ですけど……あの……いいですか？」

「え？」

うん、別に、うん、構わないよ、うん！」

句読点連発だな、俺。

ア ril はドアに『ア ril の部屋』とシンプルに書かれた部屋にどうぞと俺を入れてくれた。

一言で言うならあっさりとした部屋だ。

いや、かわいいくてあっさりした部屋というべきか。

もつと女子の部屋にはぬいぐるみがあるような気がしていたんだがな。

あとこんなこと言うのもなんだろうがいいにおいがする。

なんだろうな、このにおい。

いかんいかん、俺のキャラとしての立ち居地が。

冷静につっこむというこの俺の立ち居位置が崩れてしまう。

部屋はかなり広くて机やベッド、本棚などが置いてある。

「えっと、失礼します」

一応挨拶してからア ril がぽんぽんと叩いたところに座らせてもらう。

まあその場所はア ril の隣なんだけどな。

夕日が部屋内を照らしていて机の上のわんこが紅くなっている。

本棚には少女漫画かと思わしきものが並んでおり他には参考書などがぎっしりと詰まっていた。

「あの、私の用事をすましてもいいでしょうか…？」

用事なんですがその…電話でしか『好きです』って言ってないから…

私の口から…あの…聞いてほしくて…」

一気に顔が爆発した。

ア ril じゃない、俺だ、俺。

ア ril の場合は赤い顔がさらに赤くなった。

言ったかもしれないがもう一度言っておく。

俺はまったくといっていいほど女に耐性がないのだ。

「ご、ごめん！ちょっと待って、心の準備させて！」

バクバクとうるさい心臓を押さえつけ息を整える。

ああ心臓うるせえ、ちょっと黙れ、死ぬのは嫌だけど。

自分の心の音さえもうるさいと感 じるほどの静寂。

「よしこいー」

その言葉を待っていたかのようにア ril が目をつぶって

「好きです、大好きです。
付き合って欲しいとです!」

言葉を俺にぶつけた。

俺は俺で迫る言葉のせいで大変だ。

ア ril だってシエラ達と並ぶぐらい可愛いのだ。

そんな娘に告白されてなにも動じないのはホモかホモかホモであってそれはセズク量産型の認定がつくお方だけだ。

いや別にホモを否定しているわけではないがセズクは死ね。

「えっと俺からもお願いします」

頭の中がパニックになっておりようやくその言葉だけを吐き出す。

俺もア ril も顔が真っ赤だろう。

心臓が胸を突き破って飛び出しそうなぐらいバクバク打ち、顔が炎に舐められたように熱い。

そして再び沈黙が場を支配する。

「あ、あのっ……」

「は、はひっ!？」

俺なさけなさすぎて笑えねえ。

声が裏返ってしまった。

「やっぱり、こんな時って……あの……キ、キスとかするんですか……?」

いやいやいやいやいや。

「えっと、ですね、えーと…ははは…さあ…」

暑さとは違う汗でもう背中がぐっしょりだ。

「やっぱり…私じゃ駄目ですか？」

「えっ！？い、いやそんなことは…」

ア ril は胸に手を当て深呼吸をしたようだ。

そしてしばらく目をつぶる。

顔の赤いのがおさまってきたな、と俺が思った瞬間ア ril の目が開き

「よし、もう大丈夫です。

緊張なんてしません」

俺、啞然。

覚悟を決めていたと？

そして事の成り行きについていけない。

案外ア ril もシエラとかと同じで強い女の子なのかも……。

「波音君は私でいいんですか？」

女の覚悟すげえ。

一回も噛んでないぞ。

「えっと、ちょっと待て。えーとだなあ…」

俺も覚悟を決めるべきか。

深呼吸して精神統一、精神統一。

よし。

「俺もアリルのこと前々から気になってはいた。

それで、今日告白されて嬉しい、うん。

とりあえず――ありがとう」

アリルの目を見て話す。

目は口ほどにものを言うというのは本当のことだからだ。
でもまた言ってる途中でグダグダ感がぬぐいされない。

もう一度どうぞ。

俺は女に耐性がまったく無いんだからな。

シエラやメイナは女として見てないから大丈夫。

「……それで？」

「え？」

「それでどうなんですか？」

私と付き合ってくれるんですよね？」

この質問二回目じゃね？

ってかこのセリフ少女マンガくさくね？

「あ…ああ！もちろんだ！

お前みたいな可愛い女と付き合える俺が幸せだ！」

決まった。

完璧なまでに決まった。

これでほれない女はいないだろう！
はっはっはっ。

「……もう……大好きです」

ああ甘いね。

これが青春か。

すこし怒ったように言ったアリル。

照れ隠しなのだろう、顔がまた赤くなってきた。

もういいだろうか。

俺はもう限界、もう無理、もう駄目なのだ。

HPも残り少ないしこのままなぶり殺しにされるのも……。

「と、とりあえず俺は帰るから……」

そう思い言葉をアリルへと突きつけた。

「えっ…。

あ、はい……」

アリルの顔が一気に曇る。

「いや、やっぱりもう少しいるよ」

ちくりと良心が痛み次の瞬間に俺は前言撤回していた。

あー、やっちゃまった、畜生。

「ほ、本当ですか？」

曇り空が一気に快晴へと傾く。

この天気の下に暮らす人はたまったもんじゃないな。

さっきの曇り空の時に守ってやりたい感に襲われた。

なんていうかこうやって庇護欲を刺激するのは……うん。

――反則だろ？

結局俺が解放されたのは夜の八時ぐらいだ。

俺とア ril をさえぎる壁はなくなり二人してどもることなくなり
もどかしい思いをしなくてもすむようになった。

そして話し疲れたのか俺がトイレから帰ってきて来たときはぐっす
りとア ril は寝ていた。

起こすのもかわいそうだからそのまま観察する。

……帰るか。

そつと部屋を抜ける前に携帯の写真で寝顔を取っておく。

主な理由としては後でア ril をからかうためだ。

ア ril の机の上の紙ににそつと

『今日は楽しかったぜ、ありがとうな！

b y S p e c i a l B o y T o w a H a n o n 』

ふむ、なかなかの出来だ。

そう書いて俺の女神様を起こさないように部屋から抜け出した。

女神ねえ、まあいいか。

自分で思ったことに突っ込む俺。

メイドさん達の視線を潜り抜け、外に出ようとしたとき綺麗な女の
人に捕まった。

うん、俺帰れなかった。

「貴方が…永久君ね？」

「あ、はい。

すいませんでした」

逃げようとした俺の肩をがっちりつつかむ。

「なんであやまるのかしら？」

俺がはあ、とぼやきながら振り向いたら大人のア ril がいた。

「娘の好きな人ってあなただったのね？」

まあなんてお似合いのカップルかしら」

娘…ってことはこのお方ア ril の母ちゃんか！？

え、ええっ、うそだろ？

いくつだよこのひと。

年齢を感じさせない姿勢や顔立ち。

同見ても二十代前半にしか見えない。

そんな俺の疑問を知らずに話を続けるア ril 母。

主婦の立ち話って長いって思うことがあるけど本当に長いんだな。

ア ril 母の言葉の要点をかいつまんで話すと

ア ril はこの家のたった一人の跡取り。

入学時から俺に思いを寄せていた。

今回告白にこたえてくれてうれしい、大事にしてやってくれ。

そういうことだ。

「ええ、当然大事にさせていただきます」

そう答えて俺は帰ろうと挨拶をしようとした。

だが……

「ちょっとお茶でも飲んでいきなさいな」

えーっ。

「あ、いえ、かまいません…」

「飲みなさいな」

ぴしゃりと異論を認めない声だ。

「はい…」

俺いつになったら帰れるんだろう。

ues.

This story continues.

リア充な俺（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ちよつと今回はアレですが・・・

と、とりあえず気にしないでください！↑

バルチャニムス

「まだまだ話したいことがありますのよ?」

ア Ril 母はげんなりしている俺を振り返ろうともせず
さくさく先に歩いていく。

すると急に角を曲がってほのぼのとした部屋に俺を招き入れた。

「そこに座りなさいな。

お砂糖は?」

「あ、いえ俺そろそろ帰りたいんですが……」

「……お砂糖は?」

「少しいれていただけますか」

カチャカチャと食器が触れ合う音がして五分ほど椅子の上で待たされる。

へえ、結構おしゃれな茶室だな。

なんというか安心できる何かが放出されているような感じた。

「いい部屋でしょ?」

クッキー片手にア Ril 母が台所から出てきた。

「どうぞ、お食べなさい」

「あの……お話とは？」

ア ril 母は紅茶の香りを楽しんでいるようで目を閉じている。
俺は無視されたのか？

「永久君、娘と今会ってたのよね？
で、どこまでいったのかしら？」

思った以上に間抜けな話を持ちかけられた。
へビーな話かと身構えしていただけにがくつと緊張が解けてしまう。

「え……？」

話ってそんな……」

はっとして口をつぐむ。

ア ril 母の眉間にしわがよるのを見てしまったからだ。

「そんなのって何よ？ 私にとって娘は唯一の宝によ？
さあ教えてくださいな。
キスはしたの？ まさかそこから先までは――」

「あ、申し上げますがキスまでは行ってませんしそこから先へも当然行つてません。」

ご安心を、マダム」

「マダムって……面白い子ね。」

そうなの……別にあなたになら娘を預けてもいいかもしれないわね」

「っ！？ マダム！」

「何よ、ウブね。」

あなたになら娘と将来一緒になってもらいたいわ。
早く孫の顔をおがませて頂戴ね」

あーなんかすごい話がとんとん進んでいくな。

俺ついていけねーんですけど。

そんなこんなでまた話は続く、続く。

ア Ril 母しゃべる、しゃべる。

つかねえのかなあと思ったとき唐突にア Ril 母が席を立てて分厚い本を持ってきた。

『かわいい我が娘の成長』と書かれた本——たぶんアルバムだろう。

「あなたが結婚してくれたら私はうれしいわあ」

とか言いながらア Ril の写真を見せ付ける。

まあ、かわいいな、うん。

「可愛いですね」

と口走ってしまった後に後悔した。

ア Ril 母がさらにアルバムを引っ張り出してきたからだ。
出るわ出るわ、ア Ril の写真。

もういいっちゃーねん！

なんだかんだでア Ril 家から出れたのは夜八時半。

とっぷりと暗闇があたりを包んだ後である。

昼の熱がまだ残っておりむしむしと暑い。

ピロリロリと携帯がなりメールを開く。

ア Ril からのメールだ。

《はわわ！寝てしまいました！

ごめんなさい!」

(本来は絵文字が満載ですがなくして見やすいようにしてあります)
それに対し俺はさっき撮った写真をメールに貼り付けア rilルへと送信する。

五分ほどたって

《な、なんで撮ってあるんですか!?

寝顔なんて撮らないでくださいよう!」!》

からかうのもしれえ。

俺の中の小悪魔が目覚めた瞬間である。
歩きながら内容を吟味する。

《可愛かったからキスしちゃった☆》

はい、送信。

さてどんな返事が返ってくるのかが楽しみである。
鼻歌を歌いながら気がついていたら家についている。
行きはあんなに長かった道も楽しみがあるととても短く感じるもの
なのだ。

「ただいま!」

「んー、お帰り波音。

ご飯出来てるよって何かいいことでもあったの?」

ん、ちょっとな。

「おせえぞ! 待ちくたびれたわ!」

仁もいる。

今夜は楽しい晩飯になりそうだ。
手を洗いうがいの後席につく。

「しかし、どこに行ってたんだよ。
待ちくたびれたんだぞ？」

シエラがテーブルの上のから揚げをつまみながら聞いてくる。

「ん、普通に……。
うん、普通に……」

俺はちよつと笑って茶を濁す。
どうせすぐに詩乃がばらすだろうからこの行動は無意味だろうと頭の隅では考えていた。

「しかし、うまいなコレ」

なにやらケチャップと色々なものが組み合わせあった野菜を頬張る。
口内炎できたときに食べたらめっちゃ痛そうだな。
口の中で食べたこともないような味がじんわりと噛むごとに染み出す。

どこか懐かしい味だ。

「バルチャニムス。
ベルカではお袋の味として普及していたやつだ。
分かりやすいように言えば日本で言うお味噌汁的存在だな」

シエラが今教えてくれたバルニ：なんちゃらを箸の先でつまんで

教えてくれる。

「作り方はいたって簡単で……」

うんぬんかんぬんと説明がしばらく続くが俺は一切聞いていないし聞く気もない。

作りたいって思った方ごめんね！

「……で！最後にいためればOK！
簡単でしょ？」

「へー」

ごめん一切聞いてないわ。

五分ぐらい続いたシエラの説明を全部聞き流す俺、流石。
なるほどコレを作ったのはシエラなのか、ふむ。

「で、メイナは何を作ったの？」

仁がメイナに質問を飛ばす。

メイナは「え！？ ドキッ」

そんな反応をした。

「シエラが料理したんだろ？」

オメーは何をつくったんだぎゃー？」

語尾が変わっているが俺の言葉だ。

メイナは箸を机に置きプルプルと顔を赤くしている。
ははーん、ニヤリ。

再び俺の中の悪魔が目を覚ます。

「ま・さ・か？

無敵の最終兵器で常にさりげなく上から目線のあ・な・た様が……
お料理がまったくまったくできないなんてことないですよねぇー
？」

大きく動揺した顔をするメイナ。
やっぱりか。

「わ、私にだってできるわよ！
失礼なこと言わないでよねっ！」

バーンと机を叩きながら必死に弁解する姿を見ながら日々の仕返し
してやったりとほくそ笑む。

「はい、妹のシエラさんに聞いてみたいです」

手にマイクを握っているように右手を握りシエラの前に突き出す。

「ちょっ！ちょっと!!！」

「メイナさんは料理を作れるんですか？」

「やめてええええええ!!!!！」

「おい、仁。

こいつを抑えておけ」

「了解!!！」

もう飯なんてそっちのけで大乱闘の幕が切って落とされた。
必死で言わせまいと抵抗するメイナを仁ががちりと固定する。

「シエラア！言ったらぶっ殺すわよ！！！」

「で、どうなんで？」

二ヨニヨ笑う俺の目の端っこに仁がメイナともみ合っているのが見える。

仁、グッドジョブ！

「姉さんはいっつも僕任せで一切家事をやらうとしませんでした。
そう五千年前も変わらずずっとそうでした。

また最終兵器になってからもずっとそうでした」

一度もかまわずに言い切ったシエラ。
ちよつとすごいと思った。

しばらく静寂があたりを支配する。

「ああー！ちつくしょー！」

メイナ再燃。

さっきまで不完全燃焼だったのが原因のようだ。

「おちつけ、まったく大人気ない」

「主にあんたが原因でしょうがシエラ！」

「うお波音、俺抑えるの限界に近い！」

「がんばれ。」

「超がんばれ」

「私だってね！努力してるのよ！！」

でも野菜炒めすら作れないのよ、うわぁぁん！！」

メイナの乱れっぷりに氣をとられているとシエラがくいつと俺のすそを引っ張った。

なにか言いたいことがあるらしい。

「？」

何だ、シエラ？」

「僕達が帝国小学校五年生ぐらいの調理実習の時にな……」

「だめえええ！！」

「姉さんは爆弾を作ったの」

「ああああ！！！！」

駄目！それ以上は言わないでえ！！！！」

詳しく聞いたところによると、シエラ達のクラスはそれで避難するはめになったとか。

ついでに火災報知器がなって全校生徒が避難する事態に陥ったとか。爆発でなべからなにか何まで吹き飛んだとか。

さらに小学生なのに二週間の停学処分をくらったとか。

食材で爆弾作るってすごいよ、うん。

徹底的に食材から嫌われてるんだなこいつ。

いや根っからの最終兵器としての素質なのかもしれない。

「しくしく……」

過去のトラウマを思いっきり暴露されたメイナ、可哀想である。

「料理なんて出来なくても家事ができればいいもん！
シエラのバカ！」

メイナが涙目でシエラを睨みつける。

「姉さんが母さんからの手伝いを断って僕に回してたから……だろ？」

しれっとした態度でシエラはメイナを突き放した。
その態度にプチッと来たのか

「面白いじゃない。

久しぶりに喧嘩といこうじゃないの、シエラ……」

シエラに喧嘩を売るメイナ。

「望むところだ、姉さん。

本当の最終兵器は僕ってことを思い知らせてやるよ」

バチバチと火花を散らす二人。

このまま放置しておくとか火がついた爆弾になりかねない。

「はいセット！終了！危ないから！死ぬから！！」

二人を割ってはいいる俺。

危ないからな、この二人が喧嘩したら。
本当にしゃれにならない。

とりあえず、食卓に座りなおして冷えた飯をかきこむ。
こんなに楽しい飯は久しぶりだった。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

バルチャニムス（後書き）

料理できなくても大丈夫。
人は中身だから！

という持論↑

よんでくださりありがとうございました。

人間とは何か。

「ほら、食器ぐらいいは洗えるだろうが」

食べ終わった食器を俺はメイナに手渡した。

まかせなさい！といわんばかりの勢いで食器をひったくったメイナは流しに食器をぶち込む。

割れるから注意しろといったのだが汚名挽回のチャンスと受け取ったのだろう。

洗剤をつけてごしごしと一生懸命にこすっている。

ピロリン♪

お、メールが来たぞ。

ア ril からの返信のようだ。

受信 box を開く。

《ふえええ！？ 本当ですか！！？》

ふにゃあ… 恥ずかしいです…！！

でも嬉しいです！》

ふっと鼻で笑い《嘘だ》とだけ打って送信する。

「おーおー熱いこって。

今夜は熱帯夜かねえー」

仁がメールを見ていたようで面白くもないギャグを飛ばす。

「え？ 波音風邪なのか？

熱いんだろ？ 大丈夫か？」

ギャグと分からずに真剣に受け止めるシエラ。
そこはギャグと分かれよ、一応さ。

「バカだなあ、違うよシエラ。
波音には彼女が出来てなあ。

これまた可愛いんだが今その彼女から……」

「もういい」

ひやりと氷のように詰めたい声だった。
思わず身震いするぐらいの殺氣が俺と仁をビリビリと威圧する。

「ど、どうしたんだよ、シエラ」

「うるさい」

なんなんだよいったい。

シエラは「波音なんて死ねばいい」とひどいセリフをはいて俺をにらみつけた後

ぶんぶん怒りながらメイナのところへと行ってしまった。

いまさらながらだが食堂は一階にあり食後は二階でくつろぐのが俺の習慣となっている。

テレビをつけお笑いコントを仁と見ていると階段がミシリとなりメイナが手を拭きながら上がってきた。

「ねえ、シエラどうしたの？」

「ん？」

しらねえよ、分かるわけ……ぶぶっ！はっはっは……」

仁の沸点低いなあ、今の人どう考えても面白くねえだろ。
そう心に毒づいているとテレビが火花を吹き上げ画面にドデカイ穴
が口を開けた。
ガラスが粉々に碎け煙がゆっくりと立ち昇る。

「ねえ、シエラどうしたの……？」

どうやら俺は最終兵器二人を怒らせてしまったらしい。
穴が開いたテレビを仁がポカーンと眺めているのをよそに俺はメイ
ナにたっぷり絞られている。

「だから！」

何でかわかんねえんだよ！」

「そんなわけないでしょ？
殺すよ？」

「はい、すいませんでした。
言葉が過ぎたとおもいます。
ですが本当に何か分からないんです、はい」

ライトを当てられ脅されている姿はまるで刑事ドラマの一シーンの
ようだ。

もちろん俺は犯人役である。

「もういいわ：今日はここまでにしてあげる。
でも、そのうち絶対に吐かせるからそのつもりで」

違う、違うんだ、お前らすごく間違っている。

俺が一体シエラに何をしたと？

「とりあえず、俺は帰るとするわ。

じゃあな、波音」

「お、おう」

「あ、風呂たまったみたいだから入れよ」

仁がちらっと風呂のランプを見て教えてくれる。

その後手を上げ仁は階段を下りて家へと帰っていった。

残された俺とメイナ。気まずい。

「お、俺風呂入ってくるから……」

そういつてその場からそそくさと逃げ出すしかなかった。

「一体なんだったんだよ……」

あのときの殺気と憎悪に満ちた冷たい目。

とても冷たい目で俺に恐怖を与えていった。

防水加工の携帯がバイブと共に鳴り響き風呂場に反響する。
びっくりして水の中に落としてしまった。

「あちゃーやっちゃった。

でもそんなときのための防水加工だからな」

一人で言っててむなしい独り言だ。
余り気にしないで欲しい。

とりあえず背面ディスプレイを見て、ア ril からのメールということを確認する。

《う、嘘なんですか……がつくり……

でも波音君さえよければ私はいつでもいいですので……》

あれ、ア ril って結構積極的じゃね？

女の気持ちがかかるのは女だけ――か。

ん？ ってことはこのことをア ril に聞いてみるか。

シエラがおかしくなった件をア ril に聞いてみることにした。

《ちょっといいかな。

今さ仁がお主からのメールを見ておーおー熱いねと冷かしたんだ。

それを心配したシエラに仁が俺にお主という彼女が出来たんだっ

て言った瞬間

なんか殺気みたいなを出してな。

すごく困ってるんだけど何か分からない？ 》

なるべく詳しく状況を書いたつもりだ。

まともな返事が返ってくることを期待して送信する。

どうでもいいことだが俺は「お前」とはメールでは使わないことにしている。

なんか距離とかありそうだからな。

だから大体は「お主」と使うようにしている。

まあ俺の趣味の問題だから余り気にしないで欲しい。

湯船から出て頭をごしごとと洗う。

体や顔を綺麗に洗い産毛を剃る。

そして再び湯船に使ったときア Ril から返信が来た。
と思つたら二通目がすかさず来た。

頭の上に？を浮かべながら受信 b o x 覗くと一つは詩乃からでもう一つは待っていたア Ril からの返信だった。

後からいい思いをしたほうがいいので先に怖い人からのメールを開く。

《シエラがすねているらしいじゃねえか。

てめえ何したんだボケ。

とりあえず今お前の家に着いたからな。

さっさと風呂から上がってこいカス》

こええっす。

ハンパなくこええですはい。

震えながらア Ril からの返信を開く。

《多分『嫉妬』じゃありませんか？

私はその時にいないから分からないんですが……》

なるほど、そうかもしれない。

そう考えたらすべて納得できるかも。

とりあえず詩乃が来ているということで風呂から上がりバスタオルで体を拭く。

髪を乾かしパジャマを着てゆつくりと足音を立てないように三人がいる部屋へ向かう。

そしてゆつくりと三人がいるであろう部屋ドアの隣にある壁の蓋を開け中からイヤホンを取り出しはめる。

これは鬼灯のおっさんが部屋の中の状況確認のためにと作ってくれたものだ。

「だからさ、大丈夫だから」

「…そうだよな……」

うんばつちり聞える、ふふふのふ。

今の俺は調子に乗っています。

「私だって昔そんな風に思っていたんだから。

あいつはハンパなく鈍いやつでどんなに私がアピールしても全然わかってくれない。

本当にあいつのせいで何度枕を濡らしたことか……」

絶句した。ああ絶句した。

「でも僕はアリルなんか消えてしまえばいいって思ってしまったって……
波音にも冷たく当たってしまったって…

こんなもどかしい感情を受けたのははじめてで……制御できなくて……」

「シエラ、それは『嫉妬』というらしいよ」

メイナの声が説明を始める。

どうやら国語辞典を持っているようだ。

「えーつとねえ……嫉妬だよね？」

読むよ？

自分よりすぐれている人をうらやみねたむこと。
と

自分の愛する者の愛情が、他の人に向けられるのを恨み憎むこと。

やきもち。悵氣。^{りんき}

『大辞泉』より

だってさ、ふーん……」

再び言うが絶句した。いや本当に。

俺はこわごわイヤホンを外し冷蔵庫の中の牛乳を腹に流し込む。

腹の中からゆっくりと体が冷えていき茹で上がった俺の脳は再び処理を開始した。

胸を見られても恥じることが無かった最終兵器が『嫉妬』だと？

つまりコレは感情をなくしたはずの……いや感情を持ってはいけないものが

感情を持ってしまった……とそういうことか？

『怒り』や『悲しみ』などの単純な感情があるのは知っていた。

だが何かと何かが混ざり合うことによって出来た複雑な感情『嫉妬』をシエラは感じている。

それがあらわすのは最終兵器二人が普通の人間と同じ感情を再び持つことが出来る……

つまり人間へと戻ることが出来るということだ。

気まずい、そう考えると。

あの二人は可愛いが絶対に恋仲になるわけがないと思って一つ屋根の下で暮らしてきた。

だが今日新たな感情を取り戻した最終兵器は非常に使い道が狭まったことになる。

人を殺すためだけに生まれてきた平気が人間らしさをゲットする……一言で言えば簡単だ。

だがそれは説得によって二人が敵側へ寝返ったり自己判断で勝手に作戦を中止したりするという

可能性が出てきたことをも示唆している。

こういうことが無いように感情を一切消し去ったのであろうベルカ帝国。

感情を取り戻すことが出来るということは人間がなせる当然のことなのか、ベルカの計算違いだったのか。

とりあえずあの兵器は『感情の一つである嫉妬』を取り戻してしまったのだ。

まあ俺的には人間らしさがある最終兵器のほうが嬉しいんだけどな。イヤホンから流れてくる声はやがて笑い声に変わっていた。

もうあの話には戻らないだろうと考えドアを蹴って踊り入る。

「鬼灯詩乃いらっしゃーい！」

リズムをつけて詩乃に言う。

「おっす、邪魔してる。

でシエラがすねてるんだが？」

あれ……計算ミスったかな……？

いかん、まずいことになった。

「もういいんだ。

詩乃ありがとうな」

シエラが詩乃の言葉を止めにつこりとわらいかける。

「シエラがいいって言うなら別にかまわないけど……むー…」

よかった、どうやら俺は罪にとらわれなくてすむようだ。

そこから先は他愛もない話で盛り上がり時間だけが過ぎていった。夜の九時ごろになり「もう帰るわ」と詩乃が立ち上がり俺も「おう

じゃあな」と言って玄関まで見送る。

「ア ril とデートした？」

「まーたはじまった」

あふれ出るため息。

「あんたバカなほど鈍感なんだからね。

明日にでもデート言ってきたさい。

あ、後海にも行くわよ！みんなで！

異論も反論も認めないから！」

反論しようと思った俺の気配を打ち消すように一気に畳み掛けられた。

海か、たぶん詩乃の別荘についてきたプライベートビーチだろうよ。

「さっさとデートしないと女の子はさめちゃうんだからね？」

あー海の話になってまたア ril の話に戻ってきたのか。

話題をころころ変えんなよな。

「わった、わったよ。本当に母ちゃんみたいに言いやがって……ったく……」

明日にでもデート行ってくらあな！」

「うむ、よろしい」

はじける笑顔で笑いじゃと手を振って詩乃は闇に溶け込んで見えなくなった。

……やっぱり女って面倒だな……そう思いながら玄関のドアを閉め階段をのんびりと登った。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

人間とは何か。 (後書き)

ありがとうございました。

かなりリア充になってきましたがご安心を！ (何

ザ・ピクニック

二階ではシエラとメイナがまだ話し込んでいた。仲が良いのはいいことだと思う。

俺はなにやら理不尽な怒りをうけたんだけどな。

とりあえずア ril にデートする場所はどこがいいのか聞く。

なんか最近充実しているような気がしないでもない。

これが最近噂のリア充とやらか。

携帯を開きメールするべく画面を見るとジョンからメールが来ていた。

《二人を貸して欲しい》

なるほど、あのときの約束か。

「シエラ、メイナ！

ちよつと来い！！」

「何だ？」

「ジョンから応援の要求だ。

行って好きなだけ暴れて来い」

「え、何？戦争？いいの？」

二人の顔に笑みが広がる。

肉を得た獣のような目だ。

嬉しそう過ぎて直視できない、そんなに喜ぶことなのだろうか。

「ええと場所はハイライト中央部第二区だとさ。
行ってらっしゃい」

ハイライト内での場所を教えてあげる。

それ以前にこの二人ハイライトにたどり着けるのか？

「行ってきますっ！」

二人は嬉しそうに玄関まで走り出る。

そして消えた。

その直後に開いたままのドアからすごい風が吹き込んできて俺にアタックをかましてくれた。

「うおおっ!？」

そして俺はこけた。

尻餅で衝撃を和らげたがしつかりと痛かった。

自分の部屋に戻りラブラブモード開始。

ア ril にメールをする。

自分で言っておいてなんだが、ラブラブモードってなんだよ。

《デート行くとしたらどこがいい?》

送信。

《私は静かな所が好きなので……そうですね……
なかなかの難問ですね》

《山とか？》

《ピクニックですか、私がお弁当作りますね！
いいですね、ピクニック♪》

ア ril っ て 天 然 な の か ？

山 Ⅱ ピ ク ニ ッ ク か。

あまりよく分からない思考回路だなあ。

こうして案外あっさり決まってしまった。

明日、比較的近くの山でピクニックとのこと。

地図で選んだ場所は『南越中山』らしい。

マジか…。

あそこは嫌なんだがア ril の嬉しそうなメールを見ていると反対する気もうせた。

俺は迎えに来い、明日が楽しみになってきました。とのこと。

最後に《おやすみ》と送った後携帯のデジタル時計を見るともう夜の十二時になっていた。

もう寝るか…明日は大変そうだし。

布団に入ったとたんに疲れていたのかたちまち眠りに引きずり込まれていった。

急にいやな物に覆われている気がして目が覚めた。

なんか寒い、クーラー弱めるか。
そう思って目を覚ますと枕元にセズクがいた。

「うわあああああああ！！！！」

「やあ♪」

「死ね！！マジで死ね！！考えられねえ！！なんているんだよカス
！！！！」

布団を跳ね飛ばし思いっきり壁まで後退する。
なんているんだよ！

「セズクー、波音にまたちよつかいかけてるでしょ？
駄目だよ、ダメッ！」

メイナがセズクの名を呼んでいる。
それにここは俺の家なんだよな？

「なあにやってんだあ！」

声がドアの方から響いた次の瞬間セズクの体が俺の目の前から消え
壁に突き刺さる。

文字通り、突き刺さる。

壁に、そうだ、壁にだ。

身長一八五センチ、体重七〇キロの巨体が――だ。

「まったく、油断も隙もねえな」

シエラが腰に手を当てて壁に突き刺さっているセズクにため息を一

つ二つ。

壁から出ようとものがくセズク。

なんで生きてるのがが不思議なぐらいだ。

あ、こら、パラパラと瓦礫を落とすな、後で掃除しておけよ、セズク。

「どうでもいいけど俺明日デートなんだ。

静かにしてくれねえかな？」

「…………デート？」

ピクツと目ざとく反応したセズクは壁にめり込んだままぐもった声で聞き返してくる。

「そう、デート。

邪魔はしないでくれ、シエラとメイナは早く寝ろ。

じゃ、お休み、うるさくしたら怒る。

めっちゃくちゃ怒る」

再び布団をかぶり目をつぶるが目がさえてしまつて眠れない。

この最終兵器二人＋最終兵器モドキの馬鹿野郎。

時計を見ると真夜中も真夜中。

時計の針は三時四十分を指していた。

明日着ていく服などを考えちよつと心が躍る。

女が嫌いとか行っているもコレはもう本能。

そう、本能なんだ、だから仕方ないんだッ！

そう自分に納得させて必死に眠ろうとする。

「抜けたーっ！」

うるせえーっ……。

「んっ……ふああ……」

目覚ましのベルが八時に鳴り、グーで時計をぶん殴る。

リーンと最後の断末魔を鳴らし時計が電池を撒き散らす。

そして湧き上がるあくびをかみ殺す。

シエラとメイナはまだぐっすりと眠っており台所へ髪をくしゃくしゃしながら出ると

セズクがコーヒークップ片手に新聞を読んでいた。

いつもの軍服からさわやかなタンクトップとGパンに着替えたセズクは

正直かなりかつこいい。

「おはよう、波音。」

ご飯は僕が作っておいたから食べてくれ」

セズクが指した先を見ると焼き鮭と味噌汁、ご飯、モズク…セズク？ 似てるな。

—つまんねえ。

それらが湯気を立てておいてあった。

「何も入ってないだろうな？」

「ん？」

大丈夫さ、今日は波音の大事な日って聞いたから何もいれてない

さ」

にっこりと笑う顔と対照にセズクが手に持っているカップが砕け散った。

コーヒーがセズクの手にたっぷりとかかったがセズクは動かず熱がすることも無かった。

服が汚れてもお構いなしでただにっこりと笑っている。ただただ、笑っている。

「い、いただきます」

おびえながら席に座って食べる俺。
うまい。

日本食はやっぱりおいしい。

「ふああゝ、おはようゝにゆゝゝ」

最後のうにゆゝが意味不明。
メイナが起きてきて大あくびをする。

「シエラは？」

「まだ寝てるよ、とりあえず私にもごはんっ！
ごはんっ！！」

「まってる、メイナ」

セズクがコーヒークップ（新しいやつ）を机に置きフライパンなどを取り出す。
セズク料理できるんだ。

「波音、服とかはそこにおいてあるからね。

かっこいいのをハイライトで買ってきておいたぞ。

似合うのばっかり僕の独断で買っておいたからね？」

「お、おう。

ありがとう」

「どういたしまして……っほら、完成。

メイナ、ほらスクランブルエッグ」

「なんか私だけ波音と扱い違うよね？」

「当然だ」

そんな会話を聞きながらセズクが用意しておいてくれた服を着込む。

なるほど、いいセンスしてるぜ、セズク。

ただこのTシャツは……だめだろ。

『I love Battleship YAMATO』

なんでコレが似合うと思ったんだし。

反論していいのか、コレ。

なんだよ、これ。

日本語訳すると

『私は戦艦大和が好きです』

になるだろ。

外人から見ても日本人から見ても意味不明の英文だな、おい。

もう仕方ないからこのままポーチを持って

「行ってきます！」

大声で元気よく家から飛び出した。

からっと晴れていて日本海側としては珍しくとてもいい天気である。気持ちがいい快晴だ。

と思ったのは初めの五分だけ。

あとは朝っぱらからぎらぎらする太陽にひたすら毒づく俺の姿があった。

これえでア Ril の家の山を登るとなると死んでしまう。

別に死にはしないが。

そして現実には常には厳しい現状を俺に押し付けるのかと思いつつ今回ばかりは

少しだけやさしかったようだ。

「あ！波音君おはようございます」

麦藁帽子にワンピース。

手には昼ごはんが入っているであろうバスケット、そして水筒。A ril が家の玄関から降りて下で待ってくれていた。

「あら、永久君おはようじゃないの」

「あ、マダム。

おはようございます」

「娘をよろしく頼んだわよ？」

怪我の一つ二つぐらいは別にかまわないわ。

でも絶対に娘は返してね？」

「はい、もちろんです。」

では、行ってきますマダム」

「それでは、お母様、行ってきます！」

「いいわねえ、青春。」

私も旦那とピクニックにでも行こうかしら。

行ってらっしゃい、二人とも。

気をつけるのよ」

テクテク二人で歩く。

「山歩くんだけど、その格好で大丈夫なのか？」

いくら舗装いるとしても虫とかにさされるんじゃない？」

「あ、大丈夫です。」

虫除けスプレーつけてきましたから」

準備が完璧すぎる。

俺虫除けスプレーしてねえ。

「本当は遊園地とかに連れて行ってあげたかったんだが…ごめん」

「あ…いえ、私は…波音がいてくれたら…」

耳まで真っ赤になるアリル。

俺は太陽とはまた別の熱を感じた。

しばらく無言で歩く。

「な、なあ……」

あー言いにくいなあ……」

「？何ですか？」

「手……つないでも……その……」

俺は何を言っているんだろう。

よくアニメとかマンガで手を軽々しくつなぐが
現実でやってみるととてもじゃないけど心臓がヤバイ。
嘘じゃないぜ、本当だぜ。

「そういう時は何も言わずにさらっと掴むのがコツですよ？」

あれ、動揺してたの俺だけ？

パツと左手がアリルに掴まれる。

一瞬のためらいもなく奪い取られた左手。

そこだけ炎に手を突っ込んだかのように熱い。

ぎらぎら太陽は今俺が出す熱に負けていた。

のぼせそう、そしてむずがゆい。

でももう少しこのままでいたい気がする。

蝉の声も何も聞えない。

思考回路も停止状態だ。

「思ったより早くつきましたね」

その声にハッと我に戻る。

あっというまに目的の場所についていた。

目の前に木製の階段が続いている。

町並みはいつの間にか消え去りあたりはすっかり田舎だ。

「お、おう、ついたな。
とりあえず登るとするか」

「上についてしばらく散策したらお弁当食べましょうよ。
私がんばったんですよ？」

「OK，いただきます」

ポーチから水筒を取り出し水を飲む。
水分が体中を駆け巡る。

「けっこう涼しいから大丈夫だろ。
さて行くか」

この山は途中まで緩やかな道が続き大体五十メートルぐらいで
芝生が広がる山上公園となっている。

それに桜が綺麗で森も豊かなので結構この辺の住民からは好かれて
いる。

そしてここは俺が小さい頃姉ちゃんと一緒に見つけた絶景スポット
があるのだ。

姉ちゃんの名前は『海音^{かのん}』で俺よりも三つ上だった。

ここに来ると姉ちゃんのことを家族のことを思い出すから来たくは
なかった。

「あんた、男でしょ？」

ほら泣くな、波音、泣くな。

泣き止んだら姉ちゃんが何か買ってあげるから」

よくそう言われたっけ、結局何も買ってはもらえなかったんだけど

な。

でもその話に何度も何度も引っかかって一生懸命泣き止むべく努力したのを覚えている。

そしてアイルとここに來たことで家族に…姉ちゃんに

俺は成長したということを見てもらいたい。

「ふう…結構疲れますね」

「ああ…」

「どうかしたんですか？」

「いや、懐かしくてな。

もう少しするとだな…」

ほら懐かしい芝生の公園においてあるキノコの形のおもちゃが見えてきた。

変わらない臭い。

変わらない記憶。

風景。

inues.

This story cont

ザ・ピクニック（後書き）

今日から8月9日までオープンキャンパスに行くため更新することができません。

なにとぞご了承くださいるとうれしいです

茜空

「とりあえず、お昼にはまだ早いだろ。」

しばらくのんびりと森林浴でもしようぜ」

俺は携帯の背面ディスプレイで時間を確認しながら言った。

「森林浴……ですか。」

なるほど、いいですね!」

ア ril も俺の意見にばっちり賛成してくれ、森…とはいっても小さな小山だがそこに入ることにした。

とどめの絶景スポットは夕方になるまで待つしかない。

「きゃっ!？」

蜘蛛いるじゃないですかあ!」

森に入ったとたんア ril は小さな蜘蛛にビビる。

俺も蜘蛛が嫌いだがこれだけ小さな蜘蛛は可愛い部類に入るんじゃないかな。

アップで見ると気持ち悪いだろうけど。

ついでに思うんだが凶鑑などに載っているもので蜘蛛などの顔面をアップで写している奴があるが

あれは気持ち悪いを通り越しているからやめたほうがいいと思う。

「えーと…まあ森だから蜘蛛ぐらいいるさ!」

こう蜘蛛、蜘蛛連発していると気分が悪くなってくる。

ところでよく腹に赤い斑点を持っている蜘蛛をよく見ないか?

あれめちやくちや気持ち悪いよな！

蜘蛛は益虫とか言うけどなんであんなにきもいんだろうな！！

こんなことを心の隅に思いつつ俺はどうすればいいのか考えている。ビビっているア ril も可愛いが……手でもつなぐか。腰でも抜けたのかいっこうに立つ気配もないからな。

「た、立てないならさ 俺の手でも掴めよ？」

日本語としてどうよ、これ。

「えっ……あ、は、はい！」

一瞬ほわんと放心状態になったかと思うとすぐに嬉しそうに顔を赤くして俺の手を取るア ril 。

冷たくて小さく、か弱い手は少しでも力らを入れればすぐに折れてしまいそうだ。

「波音君、顔赤いですよ？」

「ばっ、馬鹿言え。」

俺は動揺しないことで有名だ」

そんなことを言っておきながらも体温はぐんぐん上昇中というのは自分で分かっていることだ。

動揺しないことで有名ってなんだよ、おい。

「空気おいしいですね……」

「空気なんてどこも同じ味だろ。」

無色透明、無味無色」

「無色って二回いいましたよ？」

「うっ」

「それにおいしいというのは例えですっ。
比喩ですっ」

ぶうと怒ったようになる。

いやそんなこといわれてもなあ。

「結構木が多いから空気が澄んでいるのかもな。
でも俺は都会の空気の方が好きかもしれん」

「そんなことないですよ。」

波音君はこっちのほうがお似合いですよ？」

どういう意味だ、それは。

野生に返ろうみたいな意味だったらちよつと立ち直れない。

「それは俺が…あれか。
野性的ってことか？」

「はい♪」

がーん。

「そうなのかー。」

俺ってはたから見たらそんな顔してたのか……ぐすん」

「中性的なのにどこかしら野生的に見えますよ」

それにしても迷うことなく返事しやがって。
ちよつとぐらいためらつてくれても罰は当たらんだろうに。

「あ、これ可愛いです……」

「？」

なにか見つけたのか？」

不思議に思つてアリの目線の先を追う。

「本当だ、可愛いじゃないか」

なるほどうつすら黄色の花が咲いていた。
周りは高い草ばかりだというのによく見つけられたものだ。
と、妙な所に感心する。

「なんて花なんだ？」

あいにく俺は図鑑とか一切持ってきてないぞ？」

「私もよく分かりませんが……可愛い……」

じーっと見つめ続ける。

俺は一人ポツンと放置されている。

これが放置プレイとか言う奴か、結構心にくるじゃねえか。
それから十五分ほどしてようやく満足したのか

「待たせちゃってすいません。

私、花が大好きなので……」

「いやかまわないさ。

むしろ女子らしくいい趣味だと思ってるさ」

「あ、ありがとうございます！」

きつとアレなんだ。

アリルは天然なのだろう。

そう考えたいしそう思いたい。

これ以上俺の周りに変な奴はいらない。

三時間ほど歩き回っただろうか。

小さな発見を繰り返しこれまでにない森林浴を楽しみ、ふと時間を見るときもう二時になっていた。

もともと小さな山なのでぐるっと一周して元の公園へと戻ってきていた。

「疲れましたね。

あつついです」

アリルはうっすらと汗をかいていて麦わらを取った。

長い金髪の髪が頬に張り付いている。

ポニーテールじゃなくても結構いけるではないか。

汗にぬれた髪をかきあげると風が髪を金の波へと変え青空とよく映える。

「特に俺が一番疲れたわ！

何でがけを登ってまで花をとってこにやなんのだ、ちくしょー！」

俺はせっかくの戦艦Tシャツにべったりと泥がつき指先の皮はべろ

んべろんに向けていて
膝はうっすら血がにじみポーチの中は花だらけという状況である。
消毒液なんていい年こいて持ってるわけないし、本当に踏んだり蹴
ったりな格好である。

「ありがとうございますっ♪
おかげで欲しい花が全部採れましたっ」

俺の携帯とかポーチに入っていたものは全滅いたしました。
携帯しか入ってなかったけどな。

あーあ、土まみれ。

とめるまもなくポーチの中に土入れやがって…………。
携帯は何とか生きていた。
全滅だけはなんとか逃れていてくれたようだ。

「別にいいさ、痛いけど。

気にしてなんかいないぞ、痛いけど。

花が採れたんだから文句はないだろ、痛いけど」

「大丈夫ですか？

ありがとうございます、本当に。

それはおいておいて……」

おいとくなよ！

ちゃんと俺の苦労した部分は拾っておいてくれよ！
ぐっと我慢する。

コレは天然なんだ。

そうなんだ。

「お弁当にしませんか？」

ごそごそとバスケットの中からサンドイッチを取り出した。

「いただきます」

マッハで返答してア ril に笑いかけおずおずと出されたサンドイッチを受け取る。

さっきの嫌味はどこへやら。

自信が無いのかどうかは分からないが別におずおずと出さなくてもいいのにと思ってしまう。

結構見た目も綺麗なんだけどな。

味はどうかは分からないけど。

ラップを剥ぎ取りかぶりつく。

「……………」

あえて無言。

そわそわしだすア ril 。

「あ、あの、味は……」

しばらくの沈黙後ア ril が静寂に耐えれなくなったのか俺に話しかける。

「おいしい」

どうだ、放置プレイの味は。

なかなかのもんだろう、はっはっは。

「おいしいぞ、なかなか」

さすが育ちがいいなあ、お主は」

「本当ですか!？」

よかった………」

ほっと胸をなでおろすアリル。

安心の笑みを顔に浮かべ自らもサンドイッチをちよびちよびかじりだす。

それと反して俺はがつつりサンドイッチを口に次々と放り込んでいく。

思った以上に沢山入っているのだから驚きだ。

「はい、お水です」

「ん…あんきゅー」

口いっぱい頬張っているせいか「サンキュー」が「あんきゅー」になっってしまう。

おいしいものはおいしいから仕方ない。

すきっ腹には何でもうまいとは言うがコレはすきっ腹じゃなくてもおいしい。

あつという間に沢山あったサンドイッチはなくなってしまった。

また差し出された水を一気飲みして一息つく。

「ぷはーっ！

うまかったあ………」

「波音君早い……私まだ一枚目の途中なのに……」

「男だからな」

「くすっ……」

「そうなんですか」

あ、笑った。

「——ようやく笑顔になったな」

「そ、そうですか？」

アリルはサンドイッチを食べる手を止めて困惑の表情を浮かべる。俺も俺で何を言っているんだと後悔している、反省はしていない。朝からいろんなハプニングがあったとはいえ綺麗な笑顔にはなってくれなかったからな。

「いまから臭いセリフ言うからな。」

聞きたくなかったら耳、ふさいでおいてくれよな。

正直俺は笑っている顔が一番好きだぜ。

えーと、そのだな…可愛いからずっと笑顔でいてくれよ。

そうするとなんていうか……気が楽になるんだ。

もういいぞ、臭いセリフ終わったぞ」

アリルが手で耳をふさいでいたかというとまったくふさいでいなかった。

臭いセリフを真正面から凛と受け止めてくれた。

俺は何を言っているんだろうと思うつつ心に思ったことを考えもせず口から出したのは

本当に久しぶりのことだった。

なぜかアリルの前では素直になれる俺がいた。

「かわいい……ですか。

わかりました。

私、実はずっと緊張しててですね……えへへ……」

蝉の声が急に大きく聞こえ始めた。

ワンと一気に響いてくる声。

例えるならピンと張られた絃がきれたような感覚。

そして俺は笑っていた。

大声を上げてじゃなくにつこりと。

それにつられたのかア ril も笑ってくれた。

俺にむかってにつこりと。

そしてすぐに時間は過ぎて行き太陽がようやく落ちてきてくれた午後五時頃。

太陽光が白から赤へと換わり行く隙間の時間。

その時間を狙って俺の絶景スポットへとア ril を連れて行った。

少し切り立ったようになってい る山肌の上に座りほら、と指差した。

隣でハッと息を呑むア ril 。

俺もはじめてみたときは息を呑むほど綺麗だと思ったのを覚えてい る。

紅い夕日が無機質な街を紅く染めている。

ビルなどは紅い光を反射して鈍く光り、紅い海の中に白い島を作っていた。

車のヘッドライトが光りの線のようにうねり鉄橋などがまがまがしく光に身を任せている。

暗いところはもうすっかり夜になっていて昼と夜の狭間に迷い込んだ俺達。

夜の部分では白い四角の光りがくつきりと浮かび上がり

昼の部分では紅い光が街をすっぽりと覆っていた。

「きれい……」

「俺のお勧めスポットだからな。
姉ちゃんと一緒に見つけた思い出の場所でもあるんだ。
今だから言うけどな……」

俺は街から目をそらし、アリの目を見た。
紅く光っている俺が映っている。

「正直ここに来るのは嫌だったんだ」

アリは「えっ？」と表情を変えた。
申し訳なさそうな表情へと。
あわててその理由を伝える。

「姉ちゃんと思い出とか……家族のことを思い出すから。
俺の家族——みんな死んでしまったからさ……」

「波音君……」

「俺には親戚も誰一人としていないんだ。
おばあちゃんとかの記憶すら一切ない。
でも今の俺はコレでいいんだ。」

鬼灯のおっさんに拾われてからずっとこれでいいんだ……って
そう思ってきた。

だけどそれは間違っていた。
今ようやく俺はコレでいいんだって環境にいるんだ。
だって……

この話を話せる彼女が出来たから。
ごめんな、こんな暗い話して。
仁にもまだこの話はしていないんだ。

おっさんにもな。

だから実質ア ril が一番初めに聞いた人なんだ」

「……………」

「俺の隣にはア ril という彼女も出来たことだし。
これからよろしくな」

「……………波音君……………」

「ちょっと臭いセリフ連発してるな。

ごめんよ」

笑いながら目を細めて太陽を見つめる。

光りが弱まった太陽はもう半分以上体を山に隠し夜が勢力を拡大し始めていた。

携帯の時報が鳴り六時という時間を教えてくれる。

夏にしては早く沈むんだな、今日は。

「波音君……………」

目をつぶるア ril 。

えーっと、これはどういう状況なんだ？

誰か解読班をよこしてくれないか。

なるほど解読班さすがだな、理解した。

キスしろと、ようするに。

ああ、ドキドキしてきた。

背中に変な汗かいてるよ。

太陽まぶしい、さっきと全然ちがうじゃねえか。

俺も男だ覚悟を決めた。

ゆっくりア ril に顔を近づけていく。

白いきめの細かい肌を前方に目視で確認。

コレはもうするしかない空気です、大佐。

突撃します！

うおおおおおお！！！！

……………。

……………。

……………。

そして……………

キスよりも早く邪魔が入った。

ガサツと草むらからおっさんが転がり出てきやがった。

「うわっ！しまった！！」

鬼灯のおっさんあんた何やってんですか。

「ちよっ、親父！」

詩乃……………空気読めよ、そこ。

「いやーすまないなあ波音。

私も学生時代に戻りたくてなあ」

おっさん自重しろ。

「まったく、ばれちまったじゃねえかよ」

仁も出てきた。

この三人は本当に…もうね。

「てへへ…：ばれちゃったね」

「ああ、どうやらそのようだ」

綾に遼お前らもか。

特に、綾お前は信じていたんだがなあ。

「あー腰が痛い」

「波音、今日はいいい天気だな！」

冬蟬と彗人兄さんお前らなあー。

確かにいい天気だけでもっと他に言うことがあるだろうに。

俺とア ril は一歩手前の状態で硬直している。

おっさんに指摘されてあわてて離れ同時に顔を赤くしてしまった。

くそっ、あと少しでファーストだったのに…。

空気読めよ、まじでこの迷惑集団どもめ。

「はあ……」

心の中で毒づきながら俺は大きなため息をついた。

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

茜空（後書き）

再開しました。

すいません、やすんでばかりで。

それでも読んでくださっている方に感謝&ジャンピング土下座感謝です！

本当にうれしいです。

ありがとうございます。

最後の晚餐

なんなんだよ、本当に…。

大勢としかいえないギャラリーを俺は睨みつける。

「いや…あっはっは！

すまん、すまん」

笑いながら後ずさりするおっさん。

死んでまえ！

というかお前ら全員死んでまえ！

俺の記念すべきファーストキスのチャンスをこの野朗共はっ…！

「うっさい。

帰れよ、もう」

冷たい言葉を全員に投げかける。

「は、波音君…」

ア ril が心配そうに俺に話しかけるが俺の怒りのメーターはとつくのとうに限界をぶっちぎり

大空へと飛翔している所だ。

「ごめんってば」

詩乃が謝ると他の野朗共も頭を下げる。

その行動にすっかり戦意を喪失した俺は振り上げた拳のはけ口を見つければ

隣にあった木をぶんなぐった。

パラパラと木の実と葉が落ちてくる。

毛虫とかもう気にしない。

服についてうにようによしているけども気にしない。

太陽はすっかり山に隠れ少し目を放した隙にあたりはすっかり夜になっていた。

「ただいまー、あーマジで死ねーただいま」

家に帰ると俺はさっさと服を脱いで風呂へダイブした。

澄んだお湯を見ながら今日あった出来事を思い出しにやりと笑う。

はたから見ると俺、きめえ。

あの後狼狽しながら謝るおっさんが用意した車にみんなで乗り込み家に帰った。

最後に俺とア ril だけが残りア ril の家の前ではマダムが出迎え

「今日一日、娘をありがとうね」

と頭まで下げられた。

「いえいえ、僕も十分に楽しめました」

と俺もマダムに頭を下げてお礼をした。

「じゃあ、波音君今日はありがとう。
またね」

とア ril に言われ俺も「おう」と返事を返したところでア ril に抱きつかれた。
耳元で

「次はうまくやろうね」

と呟かれ顔中真っ赤になったのを覚えている。
うつすらとだけだけどな。

恥ずかしすぎて声にならない声を出したのも覚えている。
あー俺何をやってるんだろ、と思ったのも覚えている。

というよりなによりも、胸が……姉ちゃん、胸が……。

頭から湯気を出しながら今帰宅、とまあこういうわけだ。

ゆったりと風呂に入っていると携帯の着信音が鳴り響きメールが着たコトを俺に知らせる。

「？」

と頭の上に？を浮かべながらメッセージを開くとおっさんからだった。

《今夜また頼む》

あー、OK。

なるほど、あんなことしておいてもまだ頼むか俺に。

図々しいのか鈍感なのかそれとも自分に罪の意識が無いのかどれなんだろうな。

しかしおっさんの頼みを断るわけにもいかないため

《了解》

とだけ打って送信した。

毎回毎回風呂に入っているタイミングを狙ってメールしてくるのだから、はやめてほしいなあ。

風呂から上がると晩御飯を最終兵器二人&セズクでせっせと作っていた。

ん、最終兵器二人――シエラとメイナ。

メイナ!?

「あー! 違う!

そこは違う! 何度言わせるんだ!」

シエラに怒鳴られつつメイナが汗だくになって料理をしている。

妹に怒られセズクにやさしく教えられてはいるが

メイナの頭の上に大量に浮かんでいる? は所狭しとお互いにぶつかり合っているほど密度がヤバイ。

風呂での俺は? が一つだったがメイナの? はパツと見、百を軽く超えている。

もうがんばれとしかいえない。

椅子に座りながらテレビをつけニュースをぼんやりと眺める。

「昨夜ハイライト中央部で戦闘があり連合郡部隊が壊滅しました。

関係者の話では燃料に引火し……」

地図が表示され、ハイライト中央部が拡大される。

俺は、連合郡の情報操作が入らないことに内心驚いていた。

まだまだこの程度では余裕という暗示なのだろう。

もう連合郡が帝国郡に勝てるわけねえわなと最終兵器二人を見てリモコンでチャンネルを変えようとした時背後でボン! と爆発が起きた。

びっくりして振り返った俺の頬を少し削ってフライパンの柄の部分
がテレビに突き刺さる。

メイナが壊したテレビをとっぱらいせっかくおっさんがくれたテレ
ビにである。

ほっぺたいてえ、テレビの液晶割れ方がこええ。

アナウンサーの頭から血が出てるみたいになっている。

こえええ、真夜中に見たら失禁するレベル。

「けほっ、げほっ…」

シエラとセズクが咳き込みながら台所から出てきた。

「おー、また爆発したのか」

「姉さん……り、料理……へたくそにも……ほどが……
げっほげほ……ある……ありえない……げほげほ……」

何と何を混ぜたら爆発するんだよ、不思議。

もう人間料理爆弾として名をはせたほうがいいんでねーか？
最終兵器なんてやめちまえ。

——それから三十分後ようやく料理は出来上がった。

実を言うとさっきのプラス二回ほど爆発してるんだ。

タマゴが列を成して俺に向かってきたときはマジで死ぬかと思った。

「で、できたあー」

メイナが絶叫しながら椅子に崩れ落ちる。

頬には血が滲んで、服もボロボロだ。

何をどうしたらそうなるのかとあえて聞かない俺。

なんか地球上の法則を壊してしまいそうで怖い。

メイナはぐったりと動かない。

力を使い果たしたのだろう、料理で。

「まずい」

シエラが味見のために少しかじったが口に入れた瞬間吐き出した。

「うう……ひどい…

私コレでもがんばったのに……」

半泣きのメイナ。

がんばったのは認めるけど今までの努力の差だろ。

「いゝただきまあゝす」

手を合わせてみんなでご飯を食べ始める。

ただ誰一人としてメイナが作ったご飯には手をつけなかった。

「たべてよお！」

「絶対に嫌だ。

断固拒否する。

お、ほら、蠅さんが食べてくれるみたいだぞ？」

どこからか入ってきたのか蠅がメイナの作った料理に止まる。
ものによもにと手をすり合わせ——そして動かなくなった。

「蠅さん……」

「蠅さんは我々にメイナの料理の危険性を身をもって教えてくれたのだ。

それに我々は感謝しなければならない」

「蠅に黙祷をささげようか」

「黙祷——はい、目を開けてください」

「なんなのよ、あんたら！

そんなあんたらに私メイナは憤慨の意を示す！

極めて憤慨だ！」

目を開けたとたん騒ぎ出すメイナ。

お前も黙祷ささげてたじゃんよ。

「勝手に示してろ。

どっかの島国の弱腰政府かよ」

料理は別にできなくてもいいと思うがなあ。

あ、でも料理できるほうがポイントが高いのは確か。

「あ、シエラに、メイナ。

後で話がある」

あらかた飯を食い終わりおっさんからのメールのことを話そうと思
い、シエラ達に話しかける。

「僕にはなんで話が無いんだい？
いとしの波音ちゃん？」

「お前はなんかやだ」

「オーマイガー！」

「わかった、わかったよ、聞けばいいさ。

だからメイナの料理をかつ込むのだけはやめろ！
死ぬぞ！」

「うっ……がはっ！」

「セズク！おい！！セズク！！」

まあいいや。

放っておいても死なんだろう、こいつ。

シエラ達に話しかけたままだったなあと思いながらふとシエラをみると

「えいっ！このっ！」

一生懸命にウインナーに箸を突き刺そうと必死に格闘中だった。

「シエラ、後で話があるんだが」

大事なことから二回言った。

「え？

わかったよ」

プルンっとウインナーが皿から転がり落ちた。

「おー、来たか波音。

それにシエラとメイナ。

ご苦労様にセズク・KT・ナスカルクまで」

「いや、こちらこそお世話になっております」

「そう硬くならんといてくれ。

とりあえず聞いてくれ。

今夜、連合郡特別軍研究所に忍び込んでもらう。

地下四階に光学研究所があり、中にメモリーチップがあるはずだ。それをぶんどってきてもらいたい。

ただし今回は今までのようにメモリーチップのみを盗んでくるんじゃないくて

研究所そのものを破壊してもらう」

「おっさん、俺は人殺しだけは……」

と言いかけた俺を右手で制止しておっさんは話を続ける。

「分かっている。

そのためにシエラとメイナに来てもらったわけだ。この二人さえいれば勝てない戦いは無いだろう？」

「まあ……」

しぶしぶ承諾して地図を受け取る。

そういう問題じゃないような気がしないでもない。

「あと、なにかあったら大変だと思ってセズクもつけておいたからな」

「げ……」

「よろしくね、波音♪」

お前は……もういいよ……。

何で俺が行く先、行く先に現れるんだよ。

「仁は体調不良でこれないそうだ。

そのため、彼に急遽代理人を頼んだわけだ。

まあ、気にすることではないだろ」

いや、めっちゃするんですけど。

「武運を祈る」

あー、なんていうかまた鬱な展開になってきやがったよ。

アニメとかだったらこの研究所に三人目の最終兵器がいるんだろうな。

でもコレはアニメじゃないからな、はっはっは。

「ほら、波音準備しないと」

セズクが俺のリュックを持ってきてくれた。

ありがたくいただく。

渡すついでに俺の手をさわわしてきたのでおもいきり手をひっ

ばたいてやった。

そのままおっさんの車に乗り二十分ほど走るとすぐについてしまった。

独特の八角形で五階建ての建物が目の前をさえぎる。

白い壁に窓から漏れてくる明かり。

正直言って一般人なら誰も近寄りたくないほど不気味である。

死刑囚などがここに運び込まれたのを見たなど、暗い噂もたえない。

『日本帝国連合郡立特別光化学研究所』

この長ったらしい名前がこの研究所の名前である。

「さつてと、いきますか」

シエラとメイナが走り出し右手を前に突き出すだけで三十センチはあろう分厚い鉄の扉がはじけ飛び建物の壁に突き刺さる。

やかましいほどかん高いサイレンが鳴り中から数え切れないほど沢山の兵士が

銃を携え、装甲車が、重火器が最終兵器に向かっていった。

もちろんセズクも突撃していったさ、うれしそうに。

俺は人間だから、まともな。

もし被弾したらタダじゃすまないし足でまといになるだろう。

だから隠れてます、はい。

i
n
u
e
s.

最後の晩餐（後書き）

ありがとうございました。

本当にこんなものを読んでもうござってありがとうございます。

うれしいです。

まだまだ続きますが（えっ　って言わないでくださいw）よろしく
お願いします。

ギザなセリフ

正直これは強盗じゃないのか？

コソ泥ってレベルじゃない気がするんだが。

その直後銃弾が柱をえぐり俺は柱から出していた頭を引っ込めた。

「おやすみ♪」

セズクが銃弾をばら撒いている一人を文字通り粉碎する。

四肢がばらばらになり、首が恐怖の表情のまま宙を舞う。

舞い上がった血飛沫でセズクが染まる。

《まだだ！

攻撃を加えろ、ここを通すわけにはいかない！》

無線を傍受し、敵の声を聞きながら俺は三人の戦いっぷりを眺めている。

装甲車がシエラをひき潰そうと迫ってくる。

右手を静かに装甲車へと突き出すがそのまま装甲車はシエラへと速度を上げた。

装甲車に右手が食い込み、ふっと笑いを浮かべたシエラは次の瞬間装甲車を爆発させた。

突き刺さった右手からレーザーでも発射して燃料タンクに引火でもしたのだろう。

右手の服が破けるがしまったこっちゃないんだ、あいつ。

もう少し服は大事にしてくれよ、頼むから。

メイナはメイナで戦闘神という名に恥じない戦いっぷりだ。

戦車砲の弾丸すらイージスで捻じ曲げ、隙を突いて何発ものレーザーを突き刺す。

《こ、これが……ハイライト支部でも噂になっていた恐怖神と戦闘神……》

勝てるのか、こんなやつらに！》

《おびえるな！！》

おびえれば感覚が狂い、負けるぞ！》

無線の内容がほとんど励ましあい、慰めあいの場と化す。

隊長たちもそれを留める気にならないほど戦いに集中しているのか
兵士達の慰めを止める上官の声は無線で拾うことは出来なかった。

《迫撃砲なら、どうだ！》

喰らえ、この厄病神ども！》

腹の奥に響くほどの重音が響き、シエラが立っていたところが消し
飛ぶ。

地面から硝煙が立ち上り、硝煙の中から赤のレーザーが迫撃砲へ向
かった。

たちまち爆発し、足場ごと崩れた迫撃砲が下に展開していた装甲車
部隊を直撃する。

《迫撃砲がやられた！》

レーザー戦車は！？》

《もうとつくのとうにやられちまってるよ、馬鹿野郎！》

《助けてくれ、早く応援を！早く応援を！！》

ありえないほど広い前庭は死体や壊れた戦車、装甲車で埋まってい

た。

煙が所々から立ち昇り空が黒煙で曇っている。

「我々は降伏する！」

殺さないでくれ！！」

シエラに向かって言う兵士が一人。

だがそれをあざ笑うかのようにシエラはその兵士の頭を砕いた。

「ひっ！？」

飛んだ血をもろに顔面で受け止めてしまった別の兵士は情けない声をだして地面にうずくまる。

それをセズクが銃弾で恐怖から開放してあげていた。

やさしいのか、やさしくないのか分からない行為だな。

「の、残ったのは俺一人だけなのか！？

た、隊長！！ジャック！！みんな！？

嫌だ、嫌だ！！死にたくない！！死にたくない！！」

戦闘開始からわずか二十分ほどで千人はいたであろう守備隊はほぼ壊滅していた。

ただ一人残った男がシエラの前で必死に逃げようとしている。

恐怖で足腰が立たないのか、「ひっ！」と何度も何度も情けない声を出して銃を杖に立とうとしている。

シエラはそれを蟻を見るような目で見下げ、右腕をレーザー砲に変換する。

それを見てまた恐怖が募ったのであろう兵士は涙と鼻水で顔がぐしゃぐしゃだ。

再び銃を杖に立とうとした兵士の指が引き金に引っかかり空へ一発

弾が発射される。

「ひいっ!!」

それにすらびびった兵士はあわてて銃を放し腰につけていた拳銃をシエラに突きつける。

「近づくな!

こっちにくるな、俺はまだ……俺はまだ……」

「G o a d b y i e a n d H e v a e a i n a i c e y d a y e i !」

シエラがベルカ語でそう言った後、右手のレーザー砲が光を発し兵士の生命を拭い去った。

さっきの言葉を日本語に直すと

「さようなら、いい日を!」

とこうなるはずだ。

死ぬ直前にいい日を!と言われてもどうかと思うのだが。

「波音、終わったよ!」

メイナが俺を呼びに走ってくる。

と、ズドド!と銃声がして建物から何発もの銃声がまた響いてきた。

「うわあっ!?!」

俺の驚いた声である。

「ちっ…！」

メイナがイージスを張ってくれなかったら確実に今俺は死んでいた。
銃弾一発一発が驚くほど大きい。

後ろのコンクリートの壁が銃弾の直撃を受けて崩れ去る。

「そこですか」

セズクが両腕を混ぜ合わせ、壮大な銃口を持つレーザー砲を作り出し発射した。

ピンクゴールドのような色のレーザーは建物に突き刺さり壁に巨大なクレーターを作り出す。

飛んでくる瓦礫すら危ない。

もう少し生身の人間がいるってコトを自覚したほうがいいと思うんだ。

「やりすぎだろ」

シエラがそれを見てポツリと一言。

お前が言うな。

「まあどうせ壊すからいいじゃん」

赤い土を歩いて建物の入り口にまでたどり着く。

抵抗らしい抵抗は何もなく研究者達が荷物を持ったまま逃げて行く。

「急ぐぞ。」

逃げられる前にな」

セズクが研究者達をなぎ倒し、メモリーチップがある部屋の扉を開ける。

階段から落ちた研究者が哀れで仕方がない。

頭打たなかっただろうか。

ちよつと心配だ。

「うわぁ！」

丁度逃げようと荷物をまとめていた研究員達が俺達を見て驚きの声をあげた。

恐怖で顔が引きつっている。

さっきの戦闘を窓から眺めてでもいたのだろうか。

「メモリーチップはどこだ？」

それに関する資料もだ、今すぐ出せ」

シエラが凄みのある声で研究員達を威嚇する。

そのシエラをみてひそひそと話をする研究員達。

「おい、アレ見ろよ……」

「ああ、お前の言うとおりベルカの最終兵器だ。

捕まえて調べてみてえな」

「はやくしなさい！」

イラッとしたのか、メイナが壁をぶん殴り穴をぶちあける。

俺もぞくつとするほどこわい、やべえ。

「早く出してくれないかな？」

僕は手荒なことはあまりしたくないんだ」

血で真っ赤に染まっている服をしたセズクがほほえみ研究員達をゆっくりと見渡す。

その迫力に怖気ついたのか一人の研究員がおずおずとトランクを差し出した。

俺が受け取りトランクの中を確認する。

メモリーチップと膨大な数の紙が入っていた。
多分資料なのだろう。

「サンキュー」

そう言ってさっさと出て行こうとしたせつな、シエラに肩を掴まれる。

「何さ。」

もらったんだから帰ればいいだろ」

「それ偽者だと思う。」

僕のリーダーが反応しないし」

シエラの言葉で研究員達が動揺したようだ。

ざわざわと波紋が広がる。

偽物いつの間に作ったんだよお前ら。

「本物は多分あそこ」

シエラが目をつぶり右手を開くと覆われている機械類を突き破ってメモリーチップが飛び出してきた。

それを右手で捕まえ俺に渡すシエラ。

「ああ！なんて事を！！」

お前達は光化学を何だと思ってるんだ！」

メモリーチップが飛び出してきた機械がショートし、火花を煙を噴き上げる。

もうもうと煙が部屋に充満し思わず咳き込む俺。

「けほっ、けほっ！

馬鹿っ、考えろっ！」

涙が出てきた。

「どうやら今回は本物のようだね。

それに君たちがさっさとメモリーチップを出さないからこうなるんでしょ？

自業自得だよねえ」

メイナがそういつて偽のメモリーチップを踏み潰す。

メイナさんちよっと怒り気味です。

さて目的のものを手に入れたし後はここを完璧にぶち壊すだけだ。

「波音、つかまってくれ。

ここから飛んで脱出するから」

セズクが俺に手を差し出し、素直にそれに従う。

「飛ぶよ？

シエラとメイナもついてきてね？」

「はいはい、了解。

さっさと飛べよ、セズク」

おっと、無駄な犠牲を減らすため言うべきセリフはちゃんとかわないとな。

かっこよく決めてみた。

「あ、おじさん達死にたくないなら逃げたほうがいいですよ？
すぐにここは吹っ飛びますので。

それではこの辺で」

>i17202—2340<

ちよつとキザなセリフを言ってみた。

どうでしょう、似合うでしょうか？

——似合いませんか、そうですか。

互いに顔を見合わせ少しの沈黙後あわただしく逃げ始めた研究員達を見届けた後

俺達はいくつもの天井を突き破り、空へと飛び出した。

どんよりとして曇っている空を眺めた後研究所を眺めるとふと変な物が目についた。

なんだあれ？

建物の真ん中に穴が開いていてそこからタワーのようなものが突き出ていた。

不気味な色をしていてうつすらと光を放っている。

光が血のように脈打っているのが分かった。

「じゃ、壊すよ！」

シエラがそんな不気味な物を歯牙にかけず嬉しそうに言う。

最終兵器二人が掌と掌を合わせたかと思うとともに結合しあい
大口径のレーザー砲が二人の間に出来上がった。
見たこともないほど大きい。

ぱっと見三十センチほどの砲口だ。

「出力は百分の一以下に抑えて。
疲れるの嫌だからね」

メイナがそういつて、シエラがうなづく。

レーザー砲の銃口がだんだんと光りを強め赤い光の弾が

『日本帝国連合郡立特別光化学研究所』へ達した瞬間物凄い風圧が
俺の鼻と口を塞いだ。

爆風で息が出来ない。

そんな俺の状態を汲み取ってくれたのかセズクが俺の耳元で何かを
囁いたと思うと俺の前に壁を作ってくれた。

「つぶはっ！はぁ、はぁ……」

息がつまったせいで心臓はバクバクして肩で大きく息をする。

目を開けると周りは黒煙で見えなくなっていた。

不気味な音がしたから響いてくる。

「な、何が起こったんだ？」

「爆心地の上空にいるからね、今。

ここから少しでも遠ざかったらどうなっているか分かんと思うよ、
波音。

とりあえず帰るよ？」

セズクの声が再び耳元で響き俺がこくんとうなずくとセズクの背中

から生えた翼が

紫色に光り、黒煙を吹き飛ばしたかと思うとあっという間に景色が流れ視界がクリアになった。

あ、当然ながらT字になっているぞ。

上がセズクでその下にぶら下がっているのが俺だ。

腕の疲労がやばいことになってきているがそれは気にしたら負け。

「こんな感じかな。

波音、見える？」

セズクが空中でブレーキをかけると百八十度反転して俺の顔を後ろに向けてくれた。

思わずハッと息を呑むような光景が広がっていた。

紅い閃光を放ちながら大きなきのか雲が大地から起立していた。

天へと突き刺さるがごと巨大なきのか雲が街に出現する。

あの下では何もかもが跡形もなく吹き飛び莫大な熱で蒸発したのだろう。

研究員達も傷ついた兵士達も逃げるまもなく体中を炎で焼かれ命を手放したのだ。

だがコレが任務だ。

鬼灯のおっさんの言うことは絶対だ、絶対にこなさなければならぬい。

こんなことは間違っていると言うことが出来ずあやふやな気分のまま俺はきののこをしばらく眺めていた。

確かにここを残せば連合郡はなんとしてでも残った資料で、設備で光化学を編み出そうとするだろう。

それは帝国郡にとって都合が悪いことなのだ。

最終兵器の二人が帝国郡についた今、連合郡はベルカの超光化学で対抗するしか出来ない。

それを考えると今回の任務は連合郡にかなり大きな打撃を与えたこ

とは間違いないだろう。

だがそれで戦争が、人が死ぬの減るのかと。

それは多分ない。

戦争を短くすることは出来るがそれは長い目で見たとしても一瞬のこと。

最終的に戦争はどちらかの勝利ということで集結するだろう。

だが平和への道としてはちょっと血に汚れすぎではなからうか。

まあ、俺みたいな高校生がそんなこと考えたところで世界が変わるわけでもないがな。

「案外早かったんだな」

「まあね、結構すぐに見つかったし」

おっさんにトランクごとメモリーチップを渡す。

「おっとっと」といいながら見事にキャッチして中を確かめるおっさん。

あ、言い忘れてたがシェラ達は先に家に帰らせたからな。

「どうよ？」

「ふむ完璧すぎてぐうの音もでない。

ばっちりメモリーチップだ。

流石だな、波音」

心の中でひそかにガッツポーズをする。

立っているのも疲れるので丁度後ろにあったふかふかの椅子に腰掛け
テーブルの上に毎回毎回常備してあるビスケットを頬張る。
普通に、うめえ。

「ところで、それにはいったいなんのデータが入っているんだ？
気になって気になって仕方ないんだが」

おっさんはんーと言ってメモリーチップをこねくり回している。

俺の質問に答える気はまっさらさら無いようだ。

聞けよ、せめてんー以外の返事をしてくれよ。

なんかむなしいじゃねえか、こう心の奥に穴が出来るぐらい寂しいぞ。

「んー」はないだろ、俺ががんばったのにさ。（大体は最終兵器とモ
ドキ）

「とりあえず今は秘密ということでもいいだろう？
そのうち分かるときが来るさ」

「むー………ケチ！」

「はいはい、ケチで結構こけこっこー」

おっさんはそういつてメモリーチップを壁の穴へと放り込んだ。
ネタが小学生なんだが。

壁の穴は鬼灯財閥研究所へ直行ルートだろう。

ふっと眠気を感じ時計を見るともうかなり遅い時間になっていた。
おっさんに帰る意志を伝え手を振り俺は家への帰路についた。

今回はなんか疲れたなあ。

俺ももう歳なのか……。

しみじみと心の奥底からそんな感情がわきあがってくる。

ああ、腰が痛い。
やっぱり歳なのかもしれん。

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

ギザなセリフ（後書き）

ありがとうございました。

なんか画像を貼り付けれる気がしたのですが・・・

そんな機能あった気がするんですが・・・

ありませんでしたか？

1月23日追記

ありました！

見れますか？

青い光

家への道を急ぐとき懐かしい跡を発見した。
セズクが血だらけで俺を捕まえに來た場所。
壁の崩れた場所とかもそのままだった。

そう、ここであいつに警告されてからさらに俺の人生は狂い始めたんだ。

多分、メイビー。

例えるなら今までは零度と人並みだったが
シエラと出会うことにより九十度直角に曲がる。

さらにこのホモ野朗に出会ったことによって百八十度回ったようだ。
まとめると俺と仁とで楽しく高校生活をしていたがああ二人が現れ
あと一人がなんか付録でついてきた。

こんな感じかな。

「♪」

壁を無表情で眺めていると口笛を吹きながら小汚い男が歩いてきた。
気にせずにやり過ごそうと少し壁のほうによる。

だが男はそんな俺を目にも止まらぬ速さでがっちりと掴んできやがった。

「!？」

な、何？

何ですかっ!？」

「…………死ねよ、クソ餓鬼」

意味分らない。
いきなり出会い頭にそれかよ。

「ちょっと待ってください、僕が何かしたんですか？」

冷静に問い詰める。
いざとなったら返り討ちにしてやる。

「その顔が気に入わねえ。
めめっちい顔しやがって。
俺はいまむしゃくしゃしてんだ、ボケ！」

知らんがなー！
世に言う通り魔というやつか、なるほど。
冷静に解析する。
って顔のことを言うなよ、自分でも気にしてるんだよ！

「落ち着いてください。
僕はまだ若いんです。
未来が詰まってるんです。
それをあなたで終わらされたくない。
分かりますか？
分かりませんよね、来て行きなり赤の他人の命を奪い取ろうとする
あなたみたいな人にはわかりませんよね？」

べらべら並べる。
この勢いに圧倒され戦意喪失してくれたらいいんだが……

「あんだとゴラァー！！」

作戦失敗。

火に油注いじまった。

「この餓鬼は、言わせておけばごだごだ並べやがって……。

いいか言っておくけどな、俺はお前で八人目だ。

今世の中で有名になっている連続殺人の犯人は俺なんだよお！

血の湧き出る感覚、肌を切り裂く感触！

すべてが大好きなんだ！」

きちがい刃物とはよく言ったものだ。

確かにこいつあぶねえ。

火山の火口に飛び込むぐらいあぶねえ。

しかも連続殺人の犯人お前かよ、さらっと大事なことを言うなよ。

最後の方かなり危ない人発言だしな。

ぴとっと首に冷たい感触が伝わる。

どうやら刃物が俺の首に当てられたみたいだ。

「いつきにかっさばくからよおっひっひっひっ！！！」

口臭い。

歯磨いてるのか、この人。

「恐怖におびえろ、餓鬼いっ！！！」

あー降りかかる火の粉は自分で払ってことだな。

男が笑い転げてるうちに腹を思いつき殴り飛ばす。

げえっと胃液をはき、前かがみになったところを脚で顎を蹴り飛ばす。

手の刃物はずっとのとうに俺の手の中だ。

男の口から何本かの歯が飛び出し月光の中舞い踊る。

男は目をひん剥いたまま倒れて動かなくなった。
やりすぎたなあと思うと共に今更ながら気がついた。
俺、結構強いじゃないか。

包丁を下に向けて男の首元すれすれに落としてやる。

「うわっ!!」

なんだよ、気絶してないのかよ。
タフな奴だな。

「怖いよな？」

どうだ、怖いよな？

餓鬼だと思って油断したのが間違いだったな。

警察よんでやるよ、少し待ってろ」

逃げようとする男の脚をおもいっきり蹴り飛ばし携帯を開く。

警察を呼ぼうと番号を打ち込んだそのときだった。

空が光ったかと思うと真上から青い光が差し込んできた。

「うわあっ!？」

何だよ次から次へと!!」

レーザーはまばゆい光りを出しながら倒れている男を包み込んだ。
レーザー光に触れた所から発火し始める男。

「うわああああ!!」

熱い熱い熱い熱い熱い!!」

ゴロゴロと転がり火を消そうとしているがレーザーがその男をしつかりと追尾して

消えるどころかどんどん燃え広がる男。

肉がこげる臭いがつんと漂い燃えながら男は俺を見上げていた。

「た……す………」

顔面の皮膚がぼろッと崩れ、目が、鼻がない顔に口だけが大きな穴となっていた。

その穴が助けを求め、動く。

いつもこれ以上にグロイ物を見ているからなんとも思わないが普通の人が見たらトラウマ物だぞ、これ。

近くに水があるわけでも無く火を消すことも出来ずに俺はただ男を見ていることしかできなかった。

男はとうとう動かなくなり時々びくつと手足が動くのみだ。

それを見届けたかのようにレーザー光は光りを弱めやがて完全に消えた。

明るかった空も元の暗さを取り戻し辺りは静寂に包まれた。

煙がぷすぷすと立ち上り、灰になった男の骨が月明かりにぬらりと光る。

パトカーのサイレン音が聞えハッと我に返った俺はさっさと家への道を急いだ。

こういう厄介な物にはかかわらないほうがいい。

本能というか今までの経験というかそれが俺を突き動かした。

家に帰ってくつろごうと思ったがやっぱ現実はそうはいかないようだ。

あいからわずの二人は今日も平常運転か。

「姉さん返して！」

それは僕のだって前々からいってたじゃんか！」

「知らないわよ、これはたった今から私がもらったの。」

異論をみとめるつもりはまったくないわ」

「おやおや、二人とも落ち着いて」

いや、三人か。

三人だったなそういえば。

人が疲れてるってのに何でそんなに騒げるのか。

体力有り余りすぎだろ、もう。

俺お疲れ様すぎるな。

「そういえば明日から学校だね。」

私ちょっと楽しみなんだ♪

久しぶりに詩乃とかに会えるし……」

「そういえばそうだったなあ。

学校かあ、懐かしい。

そう考えると今日で夏休み終了ってコトだよな？

宿題まったくやってねえんだよな。

まあいいか!!」

よくないかもしれないが、まあいいか。

いいよな、宿題ぐらい。

「今日で夏休みは終わり……なんだよね？」

メイナが首をかしげて俺に問う。

今自分でいったじゃないか。

休みは終わり。

「僕は今から文化祭が楽しみなんだ。」

なにやらかわくわくする雰囲気なんでしょ？

大塔高校のパンフレットにも載ってるし……。

ここらでは一番の文化祭だって……」

シエラはよほど楽しみなのか顔が輝いている。

文化祭ねえ。

高校のそれは中学の時と比にならないと聞いたが本当なのだろうか。

次の日は朝早く起こされた。

起床七時半だと！？ありえん！！

「波音！学校だよ！！」

おきて！！死ぬよ！！」

死ぬのかよ。

メイナの声が耳元で聞えるがしったこっちゃない。

眠気に勝る欲求は無いと思っている俺にとって睡眠はとてとても大事な物なのだ。

わしゃあねむいんじやきに。

「姉さん放っておいたら？

遅刻すればいい、波音なんて」

「でも波音が遅刻したら私たち学校への道がわからないじゃない。そう考えると起こしたほうがいいでしょ？」

遅れてもいいから放っておいてくれ。
遅刻します、今日は。

「しかたありませんね。

では僕が起こして差し上げようかな」

む……………。

む……………？

む……………！？

「おはよう、マイハニー。

さあ起きて、ふう〜」

ふう〜の所は俺の耳にこの馬鹿が息を吹きかけてきた音だ。

背筋が凍るし、鳥肌がブツブツブツと現れる。

ぞっとするという表現がこれほどふさわしいものはないだろう。

「うわあっ!？」

びっくりして飛び起きると同時に再び布団に閉じこもる。

なぜかって？

俺の頭がものすごいスピードでセズクの頭とごつつんこしたからだ
よ。

ごい〜んって寺の鐘顔負けの音がしたな。

頭を抑えて布団の上で涙をこらえる。

ぶつかった箇所が少し膨らんでいる気がする。

思いつきりたんこぶが出来たかもしれないねえ。

「いたいなあ、もう……」

半泣きの俺。

「大丈夫？」

シエラが心配そうに俺の顔を覗き込む。

大丈夫じゃねえ、死ぬ一步前だこの野郎。

「我、今復活せり。

さあマイハニー、ご飯の時間ですよー？」

マイハニーなだけにパンに蜂蜜の朝ごはんですかってやかましいわ！

「おやおや目に一杯涙をためて……

いったいどうしたというんだい？

よければお兄さんに話してみたらどうかかな？

きっと気が楽になるよ？」

こいつには自覚がないのか、記憶の容量がキロバイトレベルなのかどっちなんだろうな。

仮に記憶の容量がキロバイトだったとしても頭と頭がごつつんこしたコトぐらい覚えておけよ。

ノーダメージって可能性もあるかもしれないが俺はとりあえず百ほどHPが減ったのは確かだ。

とかしているうちにもう時計は八時に指しかかっていた。

「遅刻する、やばいぞ」

俺は音速を超えるスピード（自称）で布団から飛び出し制服をタンスから引きずり出す。

「遅刻する、やばい。
やばい、やばいぞ」

「え、飛べばいいじゃん」

なるほどいいアイディアだってまずいだろそれは。
いろいろと問題になるぞ。

「ととにかくめし！めしをくれ！
ギブミー！」

セズクが食パンを左手で持ち右手で蜂蜜をきれいに塗る。
そしてそれを俺に投げる。

俺がそれを空中で口でキャッチしてもぐもぐ開始。

「ひっへひまーふ！」

「行って来ます！」

「行ってくるねえ」

俺達三人は同時にセズクにいきますをつけ道へと飛び出した。
残されたセズクは一人でぽつり。

「僕も後二年若ければなあ……。
まあ仕方ありませんね。

後片付けやら掃除やらやっておきますか」

学校への道をひたすら走る。
久しぶりに普通の高校生に戻れたみたいでうれしかった。

おい、シエラ飛ぶなよ？

issues.

This story continues

青い光（後書き）

えっと少し遅れてしまいました。
今日学校で・・・

本当に申し訳ありませんでした。

ゲート・バトル

学校へとひたすら走る。

空はからっと晴れていて青く遠くまで見渡せるほど澄んでいた。

気持ちのよい朝である、誰が見ても。

——時間がやばくなければな。

「うああー！！」

思いつき遅刻してるよ！！」

「出るの遅かったんだもん。

仕方ないっちゃ仕方ないよね」

俺の右に並んで走っているメイナがそう言う。

「そもそも波音がのんびり寝ていたからだろう？

自業自得とはまさにこのことだな」

俺の左に並んで走っているシエラがさらに追い討ちをかける。

「わかってる、わかってるよ。

でもなあ、睡眠ってのはとっても大事な物なんだよ。

人間……そう世界にそして俺にとってもだ！」

ここでぴょんと寝そべっている猫を飛び越える。

おはよう猫ちゃん。

さらに坂道に差し掛かりスピードが急激に上がる。

もう誰にも止められないぜ。

気分はもう暴走族。

「じゃ、僕たちは先に行ってる。
のんびりと波音は追いかけてきてくれ」

シエラとメイナは二人そろって俺にじゃ！と軽く挨拶をするとうつ
と脚に力を入れたようだ。

今までのんびり走っていたというのか……？
ヒュッと空気を切る音と共に二人はあっという間に見えなくなる。

「あ！おい、こら、ちょー！！」

俺！！俺も引っ張れよ！おい！！」

俺のはるか前を二人の希黒銀髪が駆けて行く。

おっさんの新聞を吹き飛ばし、花の花卉が風に引きちぎられてく
ると舞う。

「どんだけ速いんだよ、ちくしょう」

もしかしてあの二人、一瞬だけ最終兵器としての力使ったんじゃないか。
るまいか。

そして五分たった通学路の上には暑さのおかげでぐだぐだにやられ
た俺がいた。

「はあ……はあ……」

ちくしょー、あちいー」

太陽め、もう少し休んでもいいだろうが……。

もうどうせ走っても間に合わないのであきらめようと遠くに見える
校門に目を向けた。

そのとき見てしまった。

まだオープン状態の校門を。

そして閉めようと桐梨の野朗が門に手をかけている。

ココから校門まで約四百メートル。

校門が閉じるまで後一分弱。

……行けるか？

いや、やるしかない。

頭の中でぱっと思いついた計算式で行くしかないという答えをはじき出す。

位置について……よい、ドン！

《歩行者信号が赤になりました。

歩行者は渡るのを止め……》

無視。

一気に歩道を渡りきる。

「すみません、ちょっとどいてください！」

声を出しながら目の前をさえぎる人に声をかけ、道を開けてもらおう。さっき新聞をとばされたおっさんの新聞を再び吹き飛ばし花を散らす。

おっさんすみません、ご迷惑かけます。

校門まで後五十メートル。

心なしか桐梨が俺のほうを見てにやりと笑ったようだ。いや心なしじゃない。

確実に俺を見て笑いやがった。

それを証拠に見ろ、校門が閉まっていく。

あの野朗、俺を遅刻扱いにする気か！

「はい、永久遅刻……っ!?!?
な、なんだと……?」

「ぎ、残念……でした。

はぁ、はぁ、ま、まだ校門は完全に閉まってませ……んよ?」

俺の右足が鉄の門と石柱との隙間に挟まっていた。

正直かなり痛い。

だが今はそんなことを言っている暇ではない。

かろうじて開いている隙間に両手をねじ込み力を入れてこじ開けようとする。

だが桐梨もアホではなかった。

俺を入れまいと力を入れて校門を閉めようとする。

この野郎はそこまでして俺を遅刻扱いにしたいというのか?

「く……この……」

「は、はは……せ、先生。

そ、それは少しやらしくないですか……?」

人間として……」

「ち、遅刻は……

遅刻だろう……がっ!?!」

「くっ……でも、足と手は……

こうして入っているわけですし……」

「だめ……だっ!

ほら、いい加減にあきらめ……ろよ!」

「い、いやで……すよ!」

俺と桐梨との間で朝っぱらから熱いバトルが展開される。
負けるわけにはいかない。

もし負けると親を呼ばれフレンドリーペーパーというなんとも嫌な物をゲットしてしまうからだ。

フレンドリーペーパーとは説明するのもおぞましいが一応説明しておこう。

この紙をもらうと生徒指導部や清掃部などから呼び込まれお手伝いをする事によりはんこを押してもらう。

全部で三十個たまると遅刻が一つ取り消しになるという紙だ。

遅刻が取り消しになるとはいえ割に合わない仕事ばかりさせられるらしい。

絶対にいない。

この紙だけは絶対にゲットしてはならない。

「う……おらあっ!」

「く……せ、先生……っ!」

いいかげんにッ……!

あきらめたら……くっ!!

どうなんですか!?

くっそ、なんて力だ桐梨の野朗。

新学期早々遅刻してフレンドリーペーパーもらってたまるかってえの!

「あっ! シャツ出し!!」

「なんだってっ!？」

俺が先生の後ろを指差すと桐梨は生徒指導部の性のせいか悲しいかな後ろを注意するために振り向いてしまった。
だがそこには誰もいない。
いるわけがない。

なぜなら俺の単純極まりない嘘だったからだ。
後ろを振り向いたことにより桐梨の校門を抑える力が緩む。

「今だあ！」

「ぬおっ！」

し、しまったあー！」

俺は桐梨がふっと力を緩めた瞬間に両腕に出せる限りの力を込めて校門をこじ開け
中にゆるりと侵入に成功した。

「では、桐梨先生これにて！」

そういうと俺はショートホームの時間が始まる前に教室に入るべく再び走る。

下駄箱で靴を脱いでスリッパを取りだす。

自分の靴を下駄箱に投げ込んだ後一年D組の教室まで駆け上る。

こけないように、慎重にさくさく階段を登る。

そして教室のドアを思いっきり開くと同時に

「セーーフ！！！」

大声で言い放ちセーフのポーズ。

教室中があんぐりと口をあけ俺を見る。

しばらくして俺が空気を読んでいない（世に言うKYってやつだな）なことをしたんだなあと心の隅で理解し、反省する。

「えっと、すいません」

副担任の視線が痛い。

突き刺してなお絡んでくる視線にすくみながら久しぶりに自分の席に座る。

机の中にはたっぷりのプリントと本が入っていて長期の俺の欠席を伝えていた。

鬼灯のおっさんの頼みで結構あけていたからなあ。

ショートホームが終わり休み時間。

俺の周りに友達が集まって来た。

「ひさしぶりだな！」

「おっす！」

挨拶の違いはあるとはいえほとんど教室中のみんなが俺に話しかけてきてくれる。

そしてア ril もだ。

「おはようございます、波音君！」

元気一杯だな。

「おはよう、元気にしてたか？
まあ聞かなくても元気だよな」

「え……聞いてくださいよ。
とりあえず元気ですよ!」

それはよかった。
健康に勝るものは無いからな。

教室はどこも変わっておらず席替えすら行われていないようだ。
壁の掲示物ぐらいなら変わってはいたけれどもな。

「つてか俺、授業ついていけねえ」

長いインターバルのせいかたまっていた数学のプリントをちらちら
とめくる。

見るからに難しい問題がずらりと並んでいた。

無理だ、俺は解けない。

「なんなら……」

私の家で勉強会でもしますか？」

ア ril が俺のことを心配して勉強を教えてくれるという。
ありがたい。

「迷惑じゃないなら……頼んでもいいか？
もう全然分らないからさ……」

ぜひ基礎中の基礎から頼みたいものだ。

「全然迷惑じゃありませんよ？
むしろ嬉しいですよ。」

では、放課後に私の家でよろしいですよね？」

本当にありがたい。

またあのマダムに挨拶などをしないといけないのがアレだが。

勉強のことが流石に不安になり始めたところだったから丁度良い。

無機質なチャイムが鳴り休み時間が終わる。

入ってきた先生は数学の先生だ。

まじかよ、おいおい。

いきなりちんぷんかんぷんじゃねえかよ。

こんな感じで俺の二学期はスタートした。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

ゲート・バトル（後書き）

うああっ！

もうため置きが無くなりそうです・・・

でもがんばります！

ひとりでも読んでくださる方がいる限り。

ので

見捨てないでください。・・・（ノド、）・・・

顔をたわしでござい

「……であるから柿納言は……」

桐梨の社会の授業はつまらない。

「皇太子レベルの人がどんどんつぶされていくわけだ。
一方で高村家の一族の力はどんどん……」

平常時代の幕開けね。

そんな昔のことを勉強して何になるのかという疑問が無いわけでもないが

やらねばならない教科なのでいやいや受ける。

慣れてくると桐梨の流れるように流暢（皮肉）なしゃべり方はなかなか良い子守唄になるのだ。

十時四十五分という中途半端な時間とはいえクーラーが効いた部屋で子守唄なんかを効いていたらどんな奴でも眠くなるのがオチだろう。窓の外を見ながらあくびを一つ二つ。

机から頬を引っぺがし教室を見渡すと既に五、六人が轟沈していた。最終兵器姉妹はなにやら嬉しそうに桐梨の授業に食い入るように聞いている。

「何でそんなに真剣なんだよ。

超つまらねえじゃねえかよ」

とてつもなく暇なのでひそひそ声で桐梨にばれないようにシエラに話しかける。

「僕たちが眠っているうちに起こっていたことを知るといいうのは面

白い。

波音の生まれた国はこんな歴史をたどったんだなって」

興味の嵐というわけか、要するに。

出来るなら俺の分も一緒に受けてくれないか。

「そして平常時代になり、坂之上棚山田武蔵谷が……」

名前長い、そしてやってられねえほどつまらねえ。

この子守唄何とかならないのか本当に。

パラパラと資料集を眺め続けて二十五分。

平常時代のが次から次へと語られていく。

貴族の反乱だのどうのこうの。

俺も魚雷をくらって轟沈しそうになった時ようやく休み時間になり
苦痛から開放された。

「波音、おはよー」

詩乃だ。

俺は寝てない。

軽く手を上げて挨拶を交す。

「久しぶりー！」

背中を叩かれ振り返ると遼や隼人兄さんがにこやかに笑って立っていた。

お久しぶりですみなさん。

出来れば朝そういうのはお願いします。

遅れて来たのは悪かったと思うけど。

「あいからわず家の仕事とはいえよく休むよな。
たまにはこないと留年しちまうぞ？」

冬蟬が俺の鼻をぷにぷに押しながら言う。
やめい。

鬼灯のおっさんは俺が長い間学校を留守にする理由もちゃんと言っ
てくれているようだ。

そうでないと冗談にならないほど休んでいるからな。
テスト？

そんなの知りませんよ、はっはっは。

大学に行く気はさらさらないし、まず行けないだろう。

私立鬼灯学院大学におっさんが入れてくれるとは言っているが
日本の五本の指に入る賢い私立大学に俺みたいな馬鹿が行ったところ
で何にもならないだろう。

逆に怪しまれたりするんじゃないか、大学の教授に。

コネ使ったとかそんな感じで。

とにかく俺は鬼灯のおっさんのために働ければそれでいい。

「次なんだっけ？」

「数学」

「げえ、嵩場かよ」

数学は俺の中では最悪の教科としてギネスに登録されている。

嵩場は何を言っているのか分からないし。

ってかまず数学の存在意義が知りたい。

日常で三角関数なんか使う機会来るのかよ。

はい、チャイム。

俺の苦しむ五十分がまたはじまった。

終わったら飯の時間だ……。

がんばれ俺。

負けるな俺。

そして十分ほどたつと俺の意識は遠い彼方へと飛んでいってしまった。

目が覚めると既に昼休みだった。

苦痛の数学が終わっていたため気分は一気にハイ状態。

体を動かすと長時間同じ姿勢を維持していた関節がギシギシ痛む。

「起きたんですか？」

にゅっと俺の視界に入ってきたアリルは

「もう少し眠っていてもよかったのに……」

と残念そうに付け加えた。

「ん……いや、もういい。

寝すぎた感がさいやめないからな。

それはそうと飯？飯の時間？」

俺の問いに何か必死になりながらうなずいて教えてくれるアリル。

何だ、何必死になってるんだ。

まさか俺の後ろで仁が「鬼ー」とか言っ指を立てているんじゃないかな？

「ちよえー」

やる気なしという気配を全面に押し出して後ろに腕を振るが俺の豪腕はむなしく宙を切り再び元の場所へと戻ってきた。

誰もいない……だと？

「いえ、気になさらないでください」

気になるような言い方でア ril は俺の前からそそくさと逃げ出した。頭の上に？を浮かべながら便所で手を洗い飯を楽しみながら教室に帰るときにある鏡を見る。

そしてすべてを理解した。

なんてありきたりないたずらをしゃがるんだ。

やるほうはいいがやられるほうの気持ちにもなってみると言いたい
いたずらだ。

顔に落書きしやがってあいづらめ……。

教室に全身にゆらりと怒りをためて入るとすでにあいつらの姿はな
かった。

逃げ足だけは速いらしい。

逃げるということはつまりやましいことをしたという自覚があると
いうことだ。

心で笑いながら手洗い場で顔をひたすらこする。

ごしごしごし……。

——とれねえ。

まさかあいつら油性つかったんじゃないだろうな。

ティッシュにアルコールをしみこませもう一度顔を拭く。

おお、と、取れる！！取れるぞ！！

妙に変なテンションをさっきから維持しながら復讐の算段を練る。

許さない絶対だ。

アルコール付きティッシュをゴミ箱にすて顔に嘘の笑いを貼り付け
ながら教室に戻る。

そこには奴らが戻ってきていた。

「おいおせーぞ、波音。」

さっさと飯食おうぜ！」

仁がちゃらちゃらした態度で俺に絡んでくる。おいこらてめえ。偽笑顔で右手には弁当を、左手には気づかれないようにマジックを握り締め
弁当を持ち立っている容疑者達に近づく。

「マジック取れた？」

そう聞いてくれる心優しい人以外をターゲットに納める。

みんなが弁当を食べようと席に座る直前に俺は復讐を開始した。

左手のマジックのキャップを親指で弾き飛ばし

啞然としている仁の額に定番の『肉』と。

詩乃の頬には『きよぬー』と。

隼人兄さんを華麗によけ冬蟬の顔に『猫背』と。

そして遼の顔に『PC男』と。

おびえるア ril はけっこう可愛かったので除外、右にの机の隙間へ跳ぶ。

そしてさっきの場所から二メートルほど離れた場所に俺は綺麗に着地した。

一瞬の間に自分の顔に文字を書かれ静まり返る一同。

何が起こったのか理解できなかったんだろうな。

「い、今どうやってやったんだ!？」

見えなかったぞ、そして俺にも教えてくれ！」

いち早く自分を取り戻した遼が顔の文字を気にせず俺に詰め寄る。

その目は好奇心というより下心であふれていて――。

絶対お前に教えたら女子の胸をもんだりするだろうから絶対教えない。

「まあ水性だからな。

水で洗えば取れるさ。

ここの誰かさんとちがって油性じゃないから安心することだ」

床に落ちていたキャップをマジックにかぶせ筆箱へ放り投げる。

右手の弁当を俺の席に放り投げるが机の上ですべり無残に落下。

ミスった、百パーセントぐちゃぐちゃになったな。

俺の席はクーラーの風がジャストで当たる良い場所になっていて

昼休みや休み時間はいつも誰かに占領されるという悲しい歴史を持っている。

俺がトイレに行っている間に取られるからさらに性質が悪い。

今日は机の上に『座るな、危険、禿げるしはじき飛ぶ』と書いた紙を貼っておいたせいか

誰も座っていなかったので久しぶりの自分の席での弁当になるわけだ。

「さって、食べようぜ」

弁当の蓋を開ける。

ハートマークがピンクの何かで形作られており、その下に俺の顔を模したのであろうおにぎりが入っていた。

急いで蓋を閉める。

コレを作ってくれたの誰だと思う？

アリルだとほほえましい。

だが答えはセズクなんだぜ？

一人称が違うだけでココまでまがまがしくなるものなのか。

手紙が袋の中に入っていた。

いとしのマイハニーへ。
お弁当を作ってみたけどどうだい？
おいしそうだろう？
満足してもらえそうなポリウムをつめておいたんだ。
このハートは僕の愛を

「ふんっ！」

手紙を途中で破り捨てて再び蓋を開ける。
まあうまくいかなかったけども良いんだけどな。
綺麗、可愛い！というよりきもい。
そして色がおかしい怖い。
ピンクのごはんってなんですか？
ものすごい着色料が使っているような気がするのだ。
体に悪そうとかそんな問題じゃない。

「かわいい！」

後ろから大きな声が鼓膜を突き破る。
顔を洗ってさっぱりした顔をしている詩乃だった。
俺の弁当を掻っ攫ったかと思うとどこかへ持っていく。
いや、取るなよ、返せよ。
別にいらないんだけど昼飯なんだけど……。
女子の所を巡り歩いた結果、弁当の中には何も残っていなかった。
一人一品とかそんな感じで減っていったのだろう。
お、俺の弁当……。

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

顔をたわしでございし（後書き）

ありがとうございました。

こんな不定期な更新なのに読んでくださる方本当にありがとうございます。

理想としては4日に一度なのですが学生という身分上、どうしても不定期になってしまいます。

真に申し訳ないです。

ポイント入れてくれた方、お気に入りに入れてくれた方、ありがとうございます。

感動で飛び上がって舞いました！

嬉しかったです、やつほっ！

楽Ⅱ近道リフト

えっ？

五、六、七時間目？

そんなのあったっけな。

目が覚めると既に帰りのホームルームの時間だった。

毎度のこと寝すぎでくらくらする頭を抑え大丈夫？と目配せしてくるシエラに頭をぶんぶん振って答える。

長い間同じ姿勢を保っていた関節が痛い。

このまま関節痛持ちとかになったらどうしよう。

寝すぎで関節痛とか冗談にもならない。

桐梨ののんびりとしたホームルームはたった今始まったらしくのんびんだらだらずーだらずーだらと後二十分は最低でも続くだろう。

ちなみに、俺のこの読みは外れたことがない。

首を捻るとパキパキと関節間の潤滑油に出来た泡がはじける音が脳内に響く。

これ体に悪いって分かっててもついやってしまうんだよな。

桐梨の話聞き流しながら鞆の中に教科書類を詰め込む作業に入る。国語の教科書を鞆の中に放り込みノートをぐしゃぐしゃに詰める。

もともと持ってきている荷物が少なくすぐにこんな作業は終わってしまい

再び暇になった俺は鞆に頭を預けじわじわ迫ってくる眠気に耐えながらじっと手を見る。

最後の部分は石川啄木の俳句（？）から頂戴しました。

おう爪が伸びてきたな、そろそろ切るか……。

窓の外の鳥を見たり教室のしみを見たり時間をつぶす。

やばい、なんだこの暇な空間。

シエラは頭がかくんかくんになっているしメイナはメイナで鞆に頭を突っ込んで爆睡している。

なんで頭をつっこんでいるのか、どういう経路でそうなったのか詳細は不明。

ただしコレだけはいえるだろう。

寝るときに鞆を頭に突っ込むとかなりアホっぽく見える。

「……ということだ。

以上、解散！

委員長、挨拶！」

あー、長かった。

「さって帰るとしよう。

おい、起きろアホ二人」

「……あと五分……」

典型的な朝寝坊のボケお疲れ様。

もういいや、こいつらは放っていこう。

みんながわいわい騒いでいる中俺は荷物を持って廊下に出た。

クーラーが効いている教室とは違いむわっとした熱気の溜まり場となっていた廊下は

再び教室へ戻りたいという欲をわき起こさせる。

それを我慢して階段をくだり下駄箱を開け、中の靴を取り出したところ誰かが俺の名前をよんだ。

走っているのか息を切らしているようだ。

何を必死になっているのかは知らんけどさ。

靴を持ったままの姿勢で固まっていると

「は、波音君、はあはあ…置いて行く…くな…んて…ひどいじゃないです…かつ！」

……いつ、今から…私の家で…べ、勉強する…ってはあはあ…約束したの……に！」

ア ril がものすごい勢いで階段から駆け下りてきた。

あーそういうえば約束したような気がしてきた。

思いなおすと確かにそんな話しました。

綺麗に忘れていました、大変失礼しました。

少し膨れっ面のア ril を見ながら熱でゆるゆるになった頭で考える。

道Ⅱ暑い ×

家Ⅱ涼しい ○

ア ril の家Ⅱ豪邸Ⅱケーキ&涼しい部屋 ◎

決めた。

「よし行く。

絶対に行くから。

言い訳するけど綺麗にわすれてましたすいませんでした」

「言い訳するんですか……。

それで波音君は私の家に来るんですよね？」

「行きます。

ぜひ行かせてください。

本当にお願ひします、自分精一杯なんです」

「何が精一杯なのか分かりませんが……。

よかったあ、来てくれるんですね！」

じゃあ早速来てください!」

シエラとメイナはなんかしばらく出番なさそうだな。

って今さっきの思考回路を見直すとケーキと冷房目当てじゃないか、俺。

うわあ、ア ril に悪いな。

そしてなんて最低なんだろう俺。

ア ril 家への道のりは省略だ。

とにかく熱かった。

暑いじゃなくて熱い。

九月だというのにいつまでがんばってんだ太陽。

隣にいるア ril も汗べったり。

風もさっぱり吹く様子が無い。

蝉は短い一生を駆使してまだがんばっているわ太陽もがんばっているわでもうやだ残暑の帰り道。

体力もどんどん吸い取られていくしな。

とまあとにかくア ril の家に到着。

「今からずらっと長い階段を登るのかと思うと憂鬱だな。

そう思わない?

ア ril も登校時と下校時に毎回この階段登ってるんだろう?

大変だな、おい」

な、ア ril ? と同意を求めようとア ril を見るとなにやら足踏みしていた。

暑さで頭がおかしくなったのか、と思いつつ苦笑い。

額の汗をぬぐいふう……とため息をついて階段を見上げた。

すると階段の横のスロープになっているところから足場だけのリフトが滑り降りてきた。

自分の目を疑ったさ。

え、そんな裏技チートがあるのかと。

まあ足場だけといってもちゃんと手すりはあるけどな。

「私は右のに乗るので波音君は左のに乗ってくださいね？」

あ、落ちないようにだけ注意してくださいよ。

時速三十キロぐらいなら軽く出るので」

まあシエラの腕を掴んでハイライトまで行った俺の敵ではないな。

左の指示されたところで足踏みするとすーっと上からリフトが降りてきた。

用水路にしてはやけに幅が広いと思っていたのだがこういうことだったんだろうな。

リフトに乗り、手すりを掴みさあ発進！と勢い込んで足元にキノコのように生えているボタンを踏む。

……………なぜ発進しない。

「えーっと、そのボタン押したままで良いんでそのまま手すりについているボタン押してください。

先に説明するべきでしたね……ごめんなさい」

いや、いいけどさ。

勢い込んだ勢いが無駄になったただだからさ。

ただもうちょっとはやく言ってほしかったなあって。

アリの指示通りに手すりのボタンを押すとゆっくりとリフトが動き始めた。

かなり早い。

景色がざっざっと流れていき木の葉が顔にペシペシ当たって痛い。ア ril が乗っているほうはきちんと木々が手入れされているのに対しなんで俺の方は痛え！

木の葉が顔に当たってうわっぷ。

木の枝とか張り出してるじゃねえかあぶねえ、毛虫いるし！

蜘蛛の巣とかマジでしゃれにならない蜘蛛嫌いなんだ蜘蛛そこだけ！！

頼むからどけ顔に蜘蛛の巣うわっぷあ！

顔についた蜘蛛の巣を剥ぎ取りチョップで木の枝などの障害物を押しのける。

絶対に生きて頂上についてみせる……っ！

時速三十キロというスピードは伊達ではなく登るのに前回十分ほどかかった階段を

一分足らずで登ってしまった。

はじめから教えておいてくれよこの設備。

俺はこの地獄の階段を真夏のこのクソ暑い中を登ったってのに……。かなり……というか猛烈に楽できるこの設備。

何ですか普通に登るのとリフトで登るこの違い。

うーん、分かりにくいかな。

夏だし分かりやすいたとえを出そう。

手動カキ氷機と電動カキ氷機ぐらい違う。

服についているゴミ類をすべて叩き落とし風を頬に感じている間にカメラが出てくる門にたどり着いた。

ア ril はジャンプしてリフトから飛び降りると門のカメラににっこりと微笑む。

門のロックがガチャと外れ電動で動いているのだろう鋼鉄の柵の門がゆっくりと開く。

さくさくと中に入って行くア ril に対し、俺は慎重に周りを見渡しながら入ることにした。

だってマダム……だってマダム……。

途中で何人かのメイドさんに出会ったがみんながア ril にお辞儀をして俺にお辞儀をする。

ある人は俺の服についているゴミを取ってくれたりしてくれた。

ありがたいが、こんなのに慣れていない俺は

「あ、いえ別にそこまでしなくても……」

と遠慮してしまうが

「お客様ですので」

としれつと返されてもう逆に恐れ入ります状態だ。

恐縮しながらア ril の部屋まで置いていられないように着いていく。

部屋に入るとア ril は鞆をどさっと自分の机の上に置いて

「ふー、暑かったですね。

廊下にクーラー効いてるかとおもったのですが効いていませんでしたね。

……っさて勉強しますよ、はい教科書開いてください」

さくさくとノートなどを取り出し始めた。

えー。

「そんな顔しても無駄です。

さあ波音君の苦手な数学から行きますよ！」

ええー。

「はい、二十五の問題！」

$x + y$ が指数として……」

くっ……。

こ、こんな勉強熱心なおなごだったとは……。

ケーキが……俺の夢が……。

「いいですか？

コレを四の指数にして……

……それを $8x + 9xy + 5z + 8$ を K とおいて……

最後に x と y の解を求めるんです。

分かりましたか？ 分かりましたよね？ では次行きます」

「うん、何言ってるのかさっぱりわからない。

とりあえず日本語しゃべってくれと嬉しいんだが。

考えておいてくれないか？」

「えーっと基礎からやり直したほうがいいんでしょうか……。

このステップAの問題分かります？」

困った表情をして俺を見つめるアリル。

「わかんない」

その眼差しに答えるべくきりっとして答えた。

「分かりました、基礎中の基礎からやりましょう。

教科書の五ページ開いてください」

アリルは困った表情から強い意志を宿した顔つきになり髪の毛のゴムをほどいた。

金髪のさらさらした長い髪が窓から差し込む夕日を反射してまぶしい。

やっぱりポニーテールよりストレートの方が俺は好きだな。そして今気がついたのだがものすごい前の方まで戻られた。

「今日はここから二十ページまで一気にいきますよ。

今授業は三二一ページまで進んでいるんですからね。

びっちりみっちり＋α 鍛えてあげますよ♪」

＋αって何。

ねえ、＋αって何、何なの？

しかもびっちりみっちりって……。

おいおい勘弁してくれよ。

心の中では半泣きになりながらアリの説明を聞く。

四時からじまった勉強会は七時になっても止まる気配が無い。

クーラーがきんきに冷えた部屋でひたすら勉強、ケーキは出なかった。

ケーキは出なかった。

ケーキは出なかった。

いい加減うんざりしてきた時ドアをあけてマダムが入ってきた。

「あらあら。

永久君いらっしやあい」

おそらくアリルを呼びに来たのだろう。

俺を見てによいと微笑むマダム。

あいからわずパツと見て二十代前半にしか見えないほど童顔だな。

白人は劣化が早いと聞いたんだが都市伝説だったのだろうか。

とりあえず挨拶はしておかないと……。

「あ、マダム……。」

お邪魔しています。

というか助けていただけませんか」

「はいはい、いらっしゃい。

うちのわんぱく娘がお世話になってるわね」

助けてくださいますせんか。

「お母様!？」

「ところでもう七時なのだけれども……。」

波音ちゃんごはんうちで食べていく？

せえっかくココまで来てくれたんだし……。」

「永久君」から「波音ちゃん」に敬称が変わったぞマダム。

なんでちゃんに変えたんだ。

深い意味はないんだろけどちょっと不気味なんだが。

「いや、俺はコレで帰ろうかと……。」

そそくさと荷物をまとめる俺の右手をアリの左手ががちりと掴む。

あったかい。

って鼻の下を伸ばしている場合じゃない。

「波音君食べていきます？

食べていきますよね？」

——え？

「いや、俺は家に帰りたいたんだが……」

アリの左手に入った力が気のせいが増した気がする。

「食べて……いきますよね……？」

……ね？」

「はい」

ああなんでこの親子こんなに笑顔が怖いのか。

前回もマダムのお茶にこんな感じで付き合わされたような気がするんだよ。

「じゃあ決まりのようねえ」。

波音ちゃん、うちでご飯食べて行きなさいね？」

ああ……ちくしょう。

俺ってなんて流されやすいんだろう……。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

楽Ⅱ近道リフト（後書き）

あわわ、もう書置きがない・・・っ
ヤバイです・・・

が、がんばります！

白身の晩餐会

「君が永久君だね？」

娘が世話になっっているようだな」

ごきげんのア ril に背中をぐいぐい押されながら仕方なしに食堂につくと

筋肉隆々の上品そうなおじさんが座っていた。

「お父様！？」

いっお帰りになられたんですか！？」

おじさんは飛びつくア ril を抱っこして頭をくりくりと撫で回している。

かなりすげえおじさんだ。

そして行動の一つ一つに上品さが漂っている。

「たった今だよ、ア ril 。

それより私は永久君と少し話がしたいんだ。

ちよつと離れてくれないか？」

急に俺を指名したおじさん。

よく分からない不安が胸の奥から沸き起こりどす黒い泉となる。

泉からあふれ出た冷や汗が背中からじんわりと染み出し

張り詰めたような緊張が足を震わせる。

「会っていきなりこんなことを言うのはどうかと思うのだが……」

おじさんは腕を組んでさらに俺に接近してきた。

身長はセズクよりも高く威圧感がすごい。

ア ril を抱っこするときはかがんでいたからなのか今みてみるとおじさんの身長は二メートルを超えてもおかしくないほど高かった。俺は百七十二センチだからアバウト三十センチも真上から見下ろされていることになる。

「うちの娘はとても高貴な身分なんだ。

元タルワナルカ家……ベルカ守護四族の一つだ。

南北アメリカを任されていた種族で……」

ベルカと口に出せるだけで間違いなく連合郡の組織の一員なのだろう。

そうでなければたちまち警察が飛んでくる。

でもその気配がないってことはかなり高い身分だ。

「あなた、それ以上言うとか波音ちゃんの命が……」

「私が後でもみ消しておく。

だからそこは安心しろ」

タルワナルカ家……どこかで……。

記憶の糸を一生懸命にまさぐる。

おじさんとマダムがお互い穏やかにしゃべっているのを眺めながら

『ベルカ守護四族』と『タルワナルカ家』というキーワードで検索をかける。

どこかで聞いたことがあるんだ。

どこかで……

「連合郡に波音ちゃんが殺されてしまうんじゃないの？」

「いいか、私は元ベルカ守護四族のタルワナルカ家の領主だぞ？
連合郡は私が持っているベルカの超光化学の記憶媒体を欲しがっているんだ。

そして中将という地位も手に入れている。

ここで仮にも娘の彼氏を殺してみろ。

連合郡は間違いなく世界中から非難を浴びることになるぞ。

それが嫌な連合郡は見逃すに決まってる、間違いない。

そして良い知らせなんだ。

発見されていた記憶媒体を研究していた研究所が何者かによってつぶされたらしい。

シエラとかどうのこうの言われていたが間違いなく龍空家かシレルス家の仕業だろう。

どっちにせよこれで私が持っている記憶媒体の価値がさらに上がったんだ。

つまり我々——連合郡が帝国郡をつぶし世界を統治したとき私たちは貴族という身分になれる！！

喜んでくれ、そしてもう一つ……」

俺の前でそんな大事な事漏らしまくってもいいのだろうか？

『龍空家』……『シレルス家』……。

それらを聞いたときすべてを悟った。

——そうか、この人たちはハイライトでジョンが俺に話してくれた裏切り者だったのだ。

一番ジョンが憎んでいるという一族。

それがア Ril の家計——タルワナルカ家。

「あなた、波音ちゃんがいる前でそんなに沢山話したら……」

「大丈夫だ何をしているのか一パーセントも理解できないだろうから。」

つとそれよりも……

永久君すまないね、少し待たせてしまった」

「あつ、はっ、なんででしょうか？」

考え事で反応が少し遅れてしまった。

どうやらマダムとおじさんの話は終わったようでおじさんは俺の方
に向き直っていた。

ア ril がタルワナルカ家だったとしても別に俺には関係ないので正
直どうでもいいことだ。

ジョンとかに報告ぐらいは入れておくか。

「すまないな、続きを話そう。

要点だけかいつまんで話すと

あまり私の娘になれなれしく近づかないで欲しいのだよ」

「お父様！」

「あなた！」

ア ril とマダムの非難の声を片手で遮ったア ril 父は俺の目をぴっ
たりと見据えた。

体中から汗が噴出す。

俺が一体何をしたっていうんだよ、おい。

あの太い腕で殴られたら顎の骨折れるんじゃないだろうか。

「……………」

俺は覚悟を決めて逸らしていた眼をア ril 父に注いだ。

ア ril 父の目に俺が日ごろから嫌っている自分の中性的な顔が映る。

男か女かどっちははっきりしろよ顔の馬鹿。

「ふむ、良い目をしている。

とにかく私にとって娘はとても大事な物なんだ。
分かるね？」

「は、はい。

分かります……」

ア Ril 父の目から俺の目を離さない。

離れた瞬間に横から殴られそうで怖い。

しばらく無言のにらみ合いが続く。

緊張して汗が冷えて寒い。

「ところで……」

ア Ril 父は目を離さずに俺に話しかけてきた。

上からの威圧感はいからわすすごい。

俺は威圧感のせいか一、二歩ほど後ずさりして少し逃げてしまった。

腕の服をまくって腕を上を開けるア Ril 父。

程よく焼けていてがっちりっていいな。

「この筋肉をどう思う？」

「……へっ？」

ア Ril 父は唐突にそういうと身構えている俺にさらに筋肉を見せ付けてきた。

電灯の明かりを受けてテラテラと光を放つ筋肉。

二回繰り返し返すが隆々と盛り上がっている筋肉。

ぱつと見てとても力強く安心感を与える筋肉。

「えっと……。」

とても安心感を感じることが出来る筋肉だなあって思いました……。

力強さよりも安心感を与えることが出来て平和な筋肉だなあって……。」

ア ril 父の動きが止まった。

目を大きく開け顔がこわばっている。

しゃくにさわることも言ったか……？

ア ril 父からの鉄拳が飛んでくるのを待つ。

五秒が一分に感じられるほど長い時間がたったように感じ

なんと俺もびっくりしたんだが、次の瞬間俺はア ril 父に抱きしめられていた。

自分でもビックリするほど体がしなる！

いてえ！背骨、背骨、背骨！！

「よく分かってくれたッ！！」

私は今とても嬉しいぞ永久君！！！！」

あ、あざっす。

とりあえず俺の背骨が折れる、離して下さい。

「気に入った、気に入ったぞ！！」

今から永久君は私の息子だっ！！！！」

へ？息子？

ってかそれよりますます力はいってます、ア ril 父！！

肋骨、肋骨、肋骨！！

「あのーあなた？」

いい加減に離してあげたほうが……」

「お、おう、そうだな！」

これからよろしくな、我が息子！」

「もう……あなただったら……。」

私が女の子しか産まなかったことをココで穿り返すのね……？」

「波音君！大丈夫ですかっ！？」

む、無理……。

体中が痛いんだ、パトラッシュ。

「さって、飯にしようか！」

私はまだまだ筋肉をつけなければならん……！」

いやもうそれで十分かと思われます。

ア ril 父が手をパンパンと叩くと次々とメイドが料理を運んできた。さまざまなおいしそうな食べ物が机上に並ぶ。

だが一角だけが異様な雰囲気を放っていた。

そう、ア ril 父の食事である。

ア ril 父の食べ物はざっと見て、卵の白身、肉……など。

飲み物はプロテインオンリー。

もうちょっとバランス考えろ、ア ril 父。

「あ、その君。」

我が息子にも私と同じメニューを出してあげてくれ」

メイドは俺を見て「息子……？」と疑問に思ったようだ。
そりゃそうですね。

「かしこまりました」

ちょっと待て。

卵の白身ばかり食えと、この俺に？

で、でも俺の分は流石にあの三十センチはあろうかと思うアリル父
の山盛りの白身よりは
少しぐらいは減らしてくれるんだよ……な……？

「おまたせしました」

ギャー！！

あのおっさんとおんなじ量食えるかー！！

「さあ遠慮しないで食べてくれたまえ、我が息子よ！
いただきますだー！！」

ちょっと待って塩！せめて塩！！
それが駄目ならせめてマヨネーズだけでもいいから！！

「お飲み物をお持ちしました」

「あっ、すいませ……」

プーローティーン！。

「あ、あの出来れば水を……」

「プロテインオンリーコースでございます」

オンリーとかきつすぎるだろ。

それよりこのまま行くと物凄くたんぱく質だけを摂取してしまう計算になるんですが。

成人男性の必要たんぱく質摂取量の約二十倍（当社比）ぐらいあるんじゃないか？

「さて、みんなで一緒に……」

「「「いただきます」」」

えっとどうやってくれば良いんだ、コレ。

食べ方が分からず狼狽するしかない俺を見たアリル父は

「食べないのか、我が息子？」

そうたずねてきた。

いえ食べますけれど……。

アリル父は箸で白身を次々と串刺しにして口に放り込む。ちゃんとした箸の使い方してください。

白身を口いっぱい頬張ると次は肉を放り込んでいた。

まるで白身が主食みたいだ。

と、とりあえず俺も食うのでしょうか……。

「い、いただきます！」

「おう！！！」

うおおー！

口いっぱい白身を、肉を詰め込む。

「やっぱり男の子は良いもんだ。

なよなよしい食い方をするより我が息子のようにこうガツガツとした動きがいい！」

「お父様、それは私に対する愚痴ですか？」

「そんなことはないぞ、娘よ。

私はお前がいてくれたからこそ今こうして頑張れているのだからな」

白身食った、食ったぞ！

まだ沢山あるけど八分九厘ぐらいは食えたぞ！

「波音ちゃん、そういえばお母さんとかは？」

「ぶっ！」

今飲み込んだばかりの白身が胃から逆流しそうになった。
吐き気で涙目になりながら答える。

「えっと家族——ですか？」

——家族は皆死んじやいました……。

交通事故です、交通事故」

マダムははっとした顔つきになり手で口を押さえた。

「ごめんね、そんなことになってるとは知らなくて……

波音ちゃん、ごめんね？」

「いえ……いいんです。」

大丈夫です、別にもう悲しくなんてありませんし……」

親戚も誰一人としていないし。

昔から一人には慣れていた。

「姉ちゃんとか……母さんとか……父さんとか……。」

物心ついたときにはもういなかったの……。

ですので、こうやってアリの家でご飯と一緒に食べたりすると楽しいんです。

本当にうれしいんです、温かいんです」

海音姉ちゃんか……何で死んじゃったんだろうな。

「私が波音を守るの！」

こんなにかわいい弟なんだもの！」

「姉ちゃん、苦しい、離してよ!!！」

「嫌よ、私のたった一人の弟だもの」

「苦しい、お母さんー！お母さんー!!！」

フラッシュバックのように記憶がよみがえってきた。

こんな会話してた、してた。

俺を守ってくれる姉ちゃんの背中大きかったな。

三歳も差があったら当然かも知れないが俺はとにかく姉ちゃんのおもちゃだった。

記憶をさぐってみても俺は間違いなく姉ちゃんに遊ばれていた。

あの時の家にはこうした家族の温かみがあふれていたな、今と違って。

家にいるのは最終兵器二人とモドキ一人だからなあ。

人のぬくもりがどうも欠けている気がしてならん。

一人よりもマシなことに変わりは無いんだけどな。

「よくあるセリフを言ってるなあって思うかも知れません。

でも本当に温かいんです。

こんなユニークな家族と一緒にいられるなんて俺、幸せです」

「波音ちゃん……」

「波音君……」

白身の山を眺めながら話を続けた。

黄身が抜けた卵は家族という黄身無くした白身だらけの俺のようにも見える。

塩というのは卵につくもので彼女など配偶者のことかもしれない。

そうしたらどうあがいても俺はこのア ril 一家の塩にしかねれず黄身には絶対になれない。

そう——思った。

「波音君、大丈夫ですよ」

急に後ろから抱きしめられた。

椅子に座っている状態からア ril に抱きしめられた。

やばい、胸当たってるぜ、お姉さん、へへへ。

「うう、いい話だなあ……」

「あなた泣きすぎよ？」

「うおお、おおええん、分かってる、分かってる、ないてねえよおん！」

いつまで抱きついてるんだ、アリル。

いい加減に離れてくれないと俺の精神的な面でやばいじゃねえか。

「波音君はもう私たちの家族です。

だからこれからずっと一緒にいましょう？」

「……ありがとうな」

「波音ちゃん、あなたはもう家族同然。

よかったら養子に來ない？ってぐらい家族同然よ？」

「うおおん、ばおおおん」

ちよつとほろつて來た。

アリル父何が言いたいのかわからない。

俺は卵の黄身、もしくは白身として受け入れられたのだ。

嬉しくて嬉しくて言葉にすることができなかった。

ようやく搾り出した一つの言葉。

「ありがとう」

その言葉の後しばらく沈黙が続きその沈黙はアリル父がティッシュで鼻をかむ音で幕を閉じた。

沈黙を破るアリル父の声

「さあ、しみったれたお話は終わりだ！

息子よ、もっと食べる！！

そして筋肉をもっともっとなつけるんだ！！

将来的に我が娘をその豪腕で守るためにもだ！！」

そうやって空気をぶち壊し楽しい食事が戻ってきた。

娘を守ること前提で話を進められていることに少しビックリした。

遠まわしに結婚OKと言われているのだろうか。

塩無しで白身をただただ口に詰め込む。

たっぷり二十分ほどかけて全部食った。

感謝の気持ちを込めて、そしてありがたいという気持ちも込めて。

そんな俺をみたアシル父。

何を思ったのか指をパチツと鳴らし「追加ー！」と一言。

ちよっと待ってマジでまた追加するの、入れないでおい、ちよっと！

「たっぷり食べて筋肉つけろよー？」

ニコニコと俺が食べるのを見て満足そうなアシル父。

苦しいおなかに白身の追加入ります。

結局俺は肉を一皿、白身を塩無し、マヨ無し、プロテイン二杯飲んで夕食を終えた。

もう一生分の白身を食べた気がする。

しばらく卵（特に白身）は見たくない、うっぷ。

そして食後の後はアシルの部屋で再び勉強。

ふらふらになりながらアシルの家の車に乗せられ自分の家に着いたのは

月が夜を照らす午後十時ちょい前。

送ってくれた運転手に丁寧にお礼を言って家の中に入る。

「お帰りマイハニー！

寂しかったんだよー?」

ウゼェから絡んでくるな。

『I am cooking now and very very love you.』

と書かれたエプロンをつけたセズクが俺を抱きしめようとするのを右手でガードして左手でビンタする。

「愛のビンタは痛くないんだよ!

でも波音のは痛い!!

ってことは……」

「はいはい、悪いけど俺はお前に対する愛は無いから」

まったく。

絡んでくるセズクの相手を適当にしながら自分の部屋に入る。

セズクのケツを叩いて部屋から出した後鞆を部屋の隅に置く。

そのとき急激な疲れに襲われビタンと床に倒れこんだ。

多分この疲労の原因は約二十倍（当社比）のたんぱく質を食べたからだろう。

あ、後白身の山。

それ以外に考えられる理由が見つからない。

——でも少し卵が好きになった。

inues.

This story continues.

白身の晩餐会（後書き）

ありがとうございます。

そしてポイント&お気に入りに入れてくれた方にお礼をもうしあげます。

次が書きあがるのはおそらく一週間後です。

それまでのんびりのらりくらりとおまちくださるとうれしいです。

すいません。

ねこにまたたび

ドシン！と腹をゆするような音がして頭に意識が戻ってきた。
床に倒れたまま俺は寝てしまっていたらしい。

目をこすりながら部屋から出ると案の定思っていたとおりの事が起こっていた。

——メイナだ。

「も、もう……いや……けほっ」

咳き込みながら台所の黒煙の中から姿をあらわす爆弾料理生産者。
どうやらまた爆発したようだ。

「なんでそんなに爆発するのさ！
どう考えても今のは野菜しかなかったよ！」

シエラがメイナに言葉で噛み付く。

「私に分かるわけないでしょ！？」

「じゃあ何でこうなるのさ！？」

ズビツと爆発済の野菜類を指すシエラ。

原因は本人にも不明なんだからそれ以上聞いてやるな。
それが優しさってもんだ。

そして夜の一時に何を作っているんだお前らは。

「おはよう」

料理という名の爆弾に熱中していてまったく俺に気がつかない二人。それにやきもきした俺は二人の氣を向けるために時間違いだけ一応の挨拶をした。

喧嘩以上戦闘未満の戦いを中断して

「波音、起きたの？」

おはよくよく寝てたね？」

にまっと笑うメイナと対称に少し怒っているシエラ。

同じ双子だと言うのにどうしてここまで差が出たのかは大いなる謎といえよう。

そしてこれからも解明されることはないだろう。

「ぼ、僕が作った料理が爆発したんじゃないから！

そこだけ覚えておいてほしいんだけど……」

ようやく俺に気がついたシエラが急に必死になって弁解を始めた。

「おう、分かってる。

間違はなくメイナだろ。ってかなんでそんなに必死なんだ。

誰がどう見てもメイナの以外に料理を爆発させる奴はいないだろ……」

「ならいいけど……」

ほっと嬉しそうな顔になる。

わけ分からん、なんだってんだよ。

まったく女って生き物をこれから俺が理解する方が無理だろうな。

「あれ、セズクは？
波音知らない？」

シエラが思い出したように俺に尋ねる。

「いや俺は知らんがな」

「あれ、波音の横でねるんだーっ♪とか言っていたのにな。
おかしいな、あの情熱野郎があきらめる……ああ！思い出した！
！」

自分一人で考え自分で答えを出す、世に言う自問自答をしている最終兵器。

まさにA h a ! 状態のシエラに聞いてみる。

「で、セズクはどこに行ったの？

俺はどうでも良いんだけど。

寝こみを襲われるのが嫌なだけだから」

「そういえば僕聞いてたよ。

今まで綺麗さっぱり忘れてたけど。

多分帝国郡艦隊の所に行ったんだと思う。

最近この辺りで連合郡のレーザー戦艦を拿捕してからというものの
帝国郡艦隊が

珍しく連合郡艦隊に対して連勝しているんだってさ。

それでセズクがこのレーザー戦艦を拿捕する作戦に加わっていた
ということだ

この艦隊の司令がセズクを招待したんだって。

あと鬼灯のおっさんの例の記憶媒体とかもついでに渡すんだとき。
ちよっと半泣きになって旅立って行ったよ。

『波音の隣で寝るんだーっ!』とか言うのを殴って黙らせてね。
あー思い出してすっきりした、すっきりした」

ばっちり聞いてますやんシエラ姉さん。

なんでそんな話を綺麗に忘れていたんですか。

近年稀に見るほどどうでもいいことだったんだな、お前にとって。

「ちなみにその艦隊どの辺にいるんだ?」

出来れば大西洋とか宇宙とかその辺の遠い所にいてくれると嬉しい。
特に俺が。

「聞いた話によると沖の鳥島を西に四百キロぐらい行った所らへん
だっさー。

まあ私にとってもかなりどうでも良いことなんだけどね。

じゃあなんで覚えてるんだろう、私」

今日は最終兵器にとって自問自答の日らしい。

それに沖の鳥島って……結構近くにまで来てるんだな帝国郡艦隊。
連合郡がそこまで弱っているとは思えないのだが……。

——畏じゃないのか?

嫌な予感が頭をよぎるが深く考えすぎだと頭を振って思考を中断す
る。

レーザー戦艦かぁ……。

どんな形なんだろうな、と思いをはせ男のロマンを思っていた矢先
壁にへばりついている電話が鳴り響く。

液晶に発信地が表示される鬼灯電器の最新機器だがその発信地はま
さしく

今メイナが俺に教えてくれた場所だった。

やれやれと頭を振って電話を取り「もしもし」とシエラがため息混

じりに応答した。

《波音かあい？

セズクだよ！そうセズク・KT・ナスカルクだよおん♪》

液晶一杯にセズクの顔がドーンと浮かび上がった。

「あーうん、僕シエラだけど」

《チッ……》

聞えてる、聞えてる。

電話スピーカーから聞えてるがな。

《まあいいや。

波音に代わってくれない？》

シエラが不憫すぎる。

舌打ちされてたぞさつき。

「はいはい、仁だけど？

波音は今寝てるよ」

喉を押さえて仁の声を出す。

曲芸はこんな使い道もあるんだな。

《仁じゃねえ、波音だ！

波音を出せ……ん？

でもこのぶっきらぼうな言い方……。

空気の振るわせ方からして……波音だね？》

「えっ……じ、仁だけど……」

《波音だね？

愛してる》

「……………」

なぜ分かったし。

《さて、電話の用件だけさくつと言うよ。

例の記憶媒体をゲットしたよ。

鬼灯のおっさんに届けたいけどちょっといまパーティーで手が離せないんだ。

シエラとメイナと一緒に来てくれない？》

つまり自分は忙しいからてめーが取りに来て届けろと。

液晶に映っているセズクの顔がにやにやしていてぶん殴りたい衝動に駆られる。

よく見ると顔が赤い。

絶対酔っ払ってるなこいつ。

《うにゃにゃひゃにゃ♪》

もう頭大丈夫なのかと。

なんなんだと、酔いの勢いで電話かけてきたのか？
四十代後半のおっさんかお前は。

《とりあえず聞いてよ、波音くん♪

さっきさあ変な物が飛んでたんだよー♪ういっく。

それをざあ僕がざあー》

支離滅裂だ。

そして日本語しゃべれ頼むから。

《ぞじだらじあゝ》

多分、そしたらさあゝだと思ふ。

《そのぶっだいざあーいっく。

ぎゅーにすぎがくざまじでざー》

(その物体急に姿くらましてさあ)

何で俺ちゃんと読み取れるんだろう。

心と心の通じ合い……とかだったら嫌だなあ……。

《うっくんだらじゃー》

フツとセズクが液晶から消てべちゃつと無様な音が響いた。

おそらくべろんべろんの状態で足を滑らせてこけたんだろうな。

無骨な艦橋内の鉄の塊がしばらく液晶に映る。

「はあー……切るぞ？」

受話器を壁の液晶にかけようと手を伸ばす。

《ん……？艦長アレはいったいなんでしょうか……？

リーダーには映っていないのですが……。

この海域に霧がかかるなんて……珍しいですね》

リーダー技師の緊迫した声がセズクが消えた液晶から漏れてきた。

《霧だと!?

馬鹿なこの時間帯に霧なんて……。

な……なん……だあれは……?

き、霧が動いているぞ……?》

霧——空気が冷やされてうんぬんかんぬん。

《セズク!おい!起きろ!!おい!!

総員第一種戦闘配備!

主砲及び艦載機発艦用意!!急げ!!」

何やらまずいことが起こってるぞ。

俺この電話切ったほうが良いかもしれない。

《我らが女神のシエラとメイナに連絡を!

早くしろ!!》

「波音……どうした?

何が起こって……」

ただならぬ気配と自分の名前が呼ばれたのが聞えたのかシエラが心配そうに俺を見上げる。

その間に答えることが出来ず俺はさっきまで平和だった艦橋内を液晶を通して見る続けることしかできなかった。

赤いランプがくると回り甲高い警報が流れている艦内に額から汗を流した乗組員が必死で駆けずりまわっている。

《うにゃー?

うっ、いつてえっ……！
何だ、何だ、なんだよ、おい！
ん……うわっ！？》

再び現れたセズクの金髪の後頭部が消え何か大きな音がした。
一番近い表現であらわすと……蒸発音とでも言えば良いのだろうか。
爆発音と水が蒸発するときのあのジュツという音を足して二で割るとそんな感じの音になるかもしれない。
音の後の画面はザーとただただ砂嵐。
一部の地方ではじゃみじゃみって言うのかな？

「何か……波音呼ばれてたね」

うんそうだね。

今から俺はあの激戦区に行くんだね。

「とりあえずさっさと行こう」

シエラ&メイナの最終兵器姉妹は勢いよく玄関から飛び出し俺はい
いや玄関から出る。

何かしら嬉しそうな二人は今から戦争に行くとは思えない笑顔に思
わず目を伏せる。

二人は俺の手を掴むと玄関の前で青い光の線が走る鋼鉄の翼を広げ
る。

右側をシエラに、左手をメイナに掴んでもらって三人体制で飛んで
もらうことにした。

衝撃波などはシエラ、メイナのイーギスで完全に消し去ってくれる
らしい。

衝撃波ということはマッハ以上のスピードで飛ぶということか。

「とりあえず僕がパンソロジーリーダー全開にしておくから。
ちゃんと眼帯も持ってきたし」

珍しく眼帯の出番アリだな。

「それじゃ行くよ?」

二人が顔を見合わせ徐々に強くなる風圧。
青い光が空気中へと放たれそこから風が発生しているように感じる。
とても不思議な感覚だ。

「三……二……一……G O!」

次の瞬間俺の家は遥か下でありのようになり小さい点になっていた。
親父ギャグだが同級生の遼と遥かはまったく関係ないぞ。
Gなどの強い圧力はまったく感じることなくあつという間に雲を突き抜ける。

地上から何百メートルというレベルではなく普通に飛行機などが飛んでいるような高度だ。

成層圏——だっけ?

そこらへんにいるような気がする。

大きな、地上では雲に隠れていた月。

物凄い数のこれまた雲に隠れていた星。

それらが目の前一杯に広がりああ幸せと本当に意味の分からない幸せを噛み締めた時

二人の最終兵器は上昇から直角に曲がり西へと進路をとった。

徐々にスピードが上がり足下のほんわりした雲が発生した衝撃波でぱっくりと口をあけうねり融ける。

二人の鋼鉄の翼から出ている光は青い線となり地上から見れば流れ星のように見えるはずだ。

二人の星が仲良く二つ寄り添って光るといふ奇妙な流れ星に見えると思う。

きっと綺麗に見えるはずだ。
まあ保障は出来ないけどな。

「とりあえずマツハ五ぐらいで飛んでるからね。
あぁっと手は出さないでね、スパッと行くよ？」

あわてて空をまさぐっていた指をひっこめる。

イージスを触ってみたかったんだよ。

ぐにっとしてるかもしれないしカチカチに硬いかもしれない。
いざ触ってみると何もなかったけどな。

弾の軌道を逸らすことは出来るし、衝撃波をなくすことはできるし。
何かを掴んだりぶつ飛ばしたりすることは出来るしものすごいバリ
アーだな、イージスは。

「ん……？」

リーダーに反応した。

アレだな」

シエラが遠い彼方を指差した。

いや見えねえから。

「……うん間違いないね。

あれだと思うよ」

いやだから俺は見えないんですけど。

こいつらと一緒にいると人間の不便さが分かるような気がするよ。

「ちょっとやばいな……。

スピードあげるね」

シエラとメイナはお互い同じものを見て同じ事を感じたのだろう。二人はぐんつと同時にスピードを上げた。

いつもは少しも表情を変えず喜怒哀楽を戦い以外では表さなかった二人の最終兵器が

俺にはじめてみせる焦りの表情だった。

海は真っ赤に燃えていた。

ボロ布みたいになった二、三隻の駆逐艦のみが煙を上げながらようやく浮いているという感じで

他に十、十二隻ほどいたのであろう空母や戦艦といった主戦力は艦首や艦尾といった元艦の巨大な切れ端を海にようやく浮かべているだけになっていた。

何とか生き残った駆逐艦は必死で救助活動を行っているようで狭い甲板上に怪我人が寝ているせいでさらに狭くなっていた。

「とりあえず降りるからね……」

ゆっくりと炎上している駆逐艦の甲板に降りる。

あちこちからうめき声が聞えて地獄絵図と化している甲板。

「おお、来てくれたか」

びくびくとおびえながらも銃を構えていたぱつと見二十代後半の兵

士が俺達に話しかけてきた。

「シエラだ。

何があった？」

兵士の暗かった表情に安心の色が浮かんた。

「シ、シエラ……よかった……。

もう俺達は安心だ。

おい、みんな！！シエラとメイナだ！！

恐怖神と戦闘神が来てくれたぞ！！

もう安心だ！

……シエラ、怪我人の治療を頼めるか？

状況は後に報告する。

すまないありがとう」

「私は何をすれば？」

「メイナは……そうだな……。

船内の怪我人の治療をよろしく頼みたい」

「分かった」

二人はそれぞれ別々の場所にとたとたとかけていった。

俺は一体何をすれば良いんだろう。

「えっとすいません。

俺は何をすれば……？」

「……とりあえず誰？」

ひどすぎるだろ。
誰とか言うなよ。

「永久波音です」

もしかして知っているかも知れないという小さな希望を抱きつつフルネームを言う。

「……誰？」

セズクの野朗っ！

「……レルバルです」

この名前あまり使いたくないけれども……ええい言ってしまう。
ということでは言ってみた。
駄目でもともとだ。

「ああ、話は聞いている。
よく来てくれた」

……えっ？

……えっ？

i
n
u
e
s.

ねこにまたたび（後書き）

お待たせしました！

すいません、一週間も待たせてしまって・・・

がんばって執筆しました。

遅筆ですいません。

本当に待たせてすいませんでした。

申し訳ないです。

読んでくださってありがとうございます。

引き続きどうか『怪盗な季節☆』をよろしくお願い申し上げます。

これからの更新状況について

ここまで読んでくださった方ありがとうございます。

とりあえずのこれからの更新状況を説明しておきたいと存じます。

この小説はもともとブログに載せているのを手直しして再びここに載せさせていただき

それを神様のような皆様に読んでもらっているのが現状です。

一週間で一話更新というロウペースだと思っています。

本当は僕も四日に一話のペースで出したいと考えております。

しかしながらブログでの更新ということなので

日記↓短編↓長編（怪盗な季節☆）

というペースになっています。

二日に一度の更新を崩していないので最低でも一話アップするまでに6日かかる計算になります。

もちろんこちらで独立して四日に一度の更新でもいいのですが・・・
いかんせん身体的負担&精神的負担&勉学的負担が・・・ははは・・・

・
高校二年という微妙な時期でもあり受験という大イベントも控えています。

そして学校は毎日テストがあるというマジで死ねばいい高校です。

この限られた環境の中精一杯更新していききたいと思っています。

でここまでうだうだ述べて何が言いたいのかというと

短編もうpしようかなーって事です。

長編を一週間もまーてーなーいー（キメエ　って事ならば水曜日にでも短編をうpして皆さんによんでもらおうかなあと。

そう思い立ったわけですよ、奥様！

どうでしょうか？

ご希望とあらばこの長編にそった短編ギャグコメディですがを開放しようかと考えております。

もしよろしければ・・・感想欄の所にも

てめえええうpしろやごらああああ

と書いていただければ喜んでうpさせていただきます。

これからがんばって更新していきたいと思っております。

ブログとこちらとの更新ペースを分離させ四日に一度の更新ペースにしろやゴラアと思ったら

てめええええ四日に一度にうpしろやごらあああ

ポケエええてめええええ

愛してる！

と感想欄にでも書いていただければ喜んで四日に一度の更新にさせていただきます。

（こう書いたけど感想欄に書いてくれる方いるのかな・・・不安）

それではこれからがんばって更新ちみちみががんばります。

毎日毎日この管理画面は開いているので感想バシバシ来て下さい！
それでは長くなりましたがこの辺で。

長いPNで絶対に覚えねえだろH A H A H A！な　ネシャルダオ
エル　でした。

あ、ちなみに英語だと　N e s h a l l d a o e l　になります。
豆知識です。明日使えません。

（訪問者が三分の一になってへこんでるとはいえない・・・orz

飽きられたのかな・・・。(ノД、)・・・
やっぱり更新速度は上げたほうがいいのかも・・・
忘れられたり飽きられたりしてたら正直泣く)

円盤型超空巡洋戦艦メガデス

「レルバルには突っ込まないぞ。
とりあえず何があった？」

「……………？突っ込む？

まあいい。

何があったかは今から説明する。

とりあえず俺について来い」

俺の名前———というか本名をまったく知らないとのたもった兵士は死臭が漂う艦内の狭い廊下をかつかつ進んでいく。

今までこの駆逐艦の甲板や艦橋の一部を舐めていた炎はとっくのとうにシエラ達が吹き消し

艦内は重傷者でむせ返るような臭いになっていた。

さっき言った死臭という言葉がまさしくぴったりな、鼻腔にこびりつく死の臭いだ。

その重傷者のあるものは腹に鉄板をくいこませまたあるものは爆風でひしゃげた鉄に
体のどこかを押しつぶされていたりとにかくグロテスク。

その苦しんでいる重傷者を緑色の目にもやさしい光がみるみるうちに傷を修復していく。

重傷は軽症に変わり軽症は無傷へと症状がどんどん緩和される。

あの光———あの光は俺がハイライトで左腕をもぎ取られた傷を治すために

破壊の象徴である最終兵器がちらりと垣間見せた和みの光だ。
破壊しか出来ないはずの兵器に少しだけ与えられた治癒の力。

「シエラ、メイナ！
状況を説明する、早く来てくれ！」

「はいはい」

「今行く」

最後の一人の重傷者の腹に食い込んだ破片をずるりと引き抜き治癒の光を出す。
ごぶごぶとあふれ出ていた血は止まり内部組織が回復され皮膚が再生する。

「あ、ありがとう……」

元重傷者がシエラにお礼を言う。
その元重傷者になつこりと笑いかけた後二人は俺へと歩いてきた。
そのまませまっ苦しいミーティングルームに入る。

「波音！

僕だよ、セズクだよ！」

ちっ生きていたのか。

死んでくれていたのかと思っていたんだが。

神様はやっぱりこいつが天国にくるのは嫌ですか。

閻魔大王もこいつが地獄にくるのは嫌ですか。

嫌ですよ、そうですね。

てっきり死んでいたと思っていたんだが生きていやがったぜ、ちっ。

心に毒づきながら照明下のセズクの顔を見てはっと思を呑んだ。

生々しい傷跡が頬にぱっくりと口を開いていたのだ。

よく分からない液体が滲み出していてライトの光でテラテラと光っ

ている。

「セズク……頬……」

「ん、大丈夫だよ、これぐらい。

愛があればなんとでもなる。

それよりこれを」

俺は愛を注がないけどな。

そう思いながらセズクが俺によつと突き出した物を受け取る。

結構大きい新しい形の円柱型のメモリーチップか。

なるほどなかなかいい発想だ。

あ、円柱の中に入ってるのかなんだよそれ。

どうでも良いけど昔の呼び名の『超光学記憶媒体』でも別に良いんだ。

でも正直メモリーチップの方が言いやすい。

ただそれだけの理由です、はい。

「約束のメモリーチップだよ。

帝国郡がこの大艦隊を使って連合郡の研究施設からようやく盗み出したものだ。

表面上の目的は連合郡艦隊の殲滅だが本来はこっちが狙いだ。

連合郡をだまし警備が手薄な港に上陸して盗み去った。

まあ僕がいたから案の定うまくいったんだけどね♪

ついでに言うところでレーザー戦艦もゲットしたんだ。

そして鬼灯財閥にとどけるためここまでわざわざ来たらしいんだけど……」

セズクは両腕を上げやれやれといった顔をした。

「どこから情報が漏れていたのか突如意味の分からない霧が現れてね……。」

三十分ほど前のことさ。

流石の僕でさえ武者震いするような危険な香りがする何か……」

「ココからは私が説明します」

「おいおい僕の出番をこれ以上さえぎらないでほし……」

「私が説明します」

「……………出番……」

さっき知ったんだがこの艦を案内してくれた若い兵士は艦長だった。だからあんなに上から目線だったんだな、勝手に納得できるぜ。

「……とは言ったものの……」

アレは私達にもまったく意味の分からないものでして……」

艦長は弱った弱ったという顔をして帽子をぱたぱたしながら目を伏せる。

「ならやっぱ僕が説明す……」

「我々の旗艦のレーザー戦艦——パナミスが放ったレーザーや速射砲弾、AGS砲弾、ミサイルまでもが軌道を逸らされ外れたという時点でこの兵器は

イージスの類を搭載していると考えられます。

形すら分からないものでして……探照灯をつけて空を照らしたのはいいものの……

次の瞬間には我々は今まで見たことがない攻撃を受けました。
レーザーのような青い光が空から降ってきたかと思うと……
当たったところから艦が溶けていって……。

それと同時に敵の空中兵装下についていた巨大な砲台らしきものから閃光がほとばしって……

気がついたらアレだけいた我の艦を含める三隻しか残っていませんでした。

この艦隊は 戦艦二、レーザー戦艦一、空母三、巡洋艦八、駆逐艦二三で

構成されていた大艦隊のはずだったのに……」

艦長は唇を噛み拳をぎゅっと握り締めていた。

二十代後半にも見えるほど若い艦長からしたら自分の所属している大艦隊が

一瞬のうちに壊滅してしまったのがくやしくてくやしくて仕方がないのだろう。

あの時おびえて何一つ出来なかった自分を責めているのかもしれない。

でも一つだけ言っておきたい。

俺の隣にいるお方はこの元艦隊よりも大艦隊を一人で潰してました

（「ダ、」；）↑今の俺の顔はこんな感じ。

「で俺はどうすればいいわけ？」

空気の流れをぶった切るように俺はセズクに尋ねた。

こんなしみったらしい負の空気になっていたら勝てるものも勝てないだろ。

まってました僕の出番と言うような顔をしたセズク。

「波音はコレを持ち帰って鬼灯のおっさんに渡して欲しい。」

これでまた大きく研究が進歩するだろうから。
さ、こんな危ないところからは一刻も早く逃げるんだ」

「ちょっと待ってくれ。

研究？

ベルカの研究を鬼灯のおっさんがしてるんだ……よな。

そうだよな、うん。

今まで沢山盗ってこさせたもんな……」

「研究内容はそのうち分かるときが来る。

さ、波音はやくココを離れるんだ。

あいつがいつ戻ってくるのか分からないだろう？」

ね？と俺の心配をしている場合ではないというのにこいつは……。そんなセズクの言葉をさえぎるように甲高いエンジン音が艦をふるわせた。

セズクのやさしい顔がきつと引き締まり殺意のこもった兵器の目になる。

艦長の顔はセズクとは逆に青ざめあわててブリッジへと駆け出していった。

ブザーが鳴り重体の駆逐艦に過酷な戦闘配備命令がかかる。

止まっていたガスタービンが息を噴出し駆逐艦が波を切ってうねる水上を滑り出す。

「奴だ……っ」

セズクがミーティングルームから飛び出し甲板に向かった。

当然俺達も続く。

扉を抜け、重症者を飛び越え甲板に飛び出た俺達の目に飛び込んできたのは

真っ黒なペイントで機体下部から赤い光を出している特異な物体だった。

うつすらと靄がかかり視界はかなり悪いが見えないわけではない。真っ黒なペイント&探照灯が何とか照らしているおかげでむしろつきり見える。

ぱっと見て大きさはこの駆逐艦の約二倍強ほどあり巨大な質量を持つていることは間違いないだろう。

うつすら夜明けの気配を見せ始めた空はその真っ黒な機体をさらにはつきりと浮かび上がらせている。

下部にはびっしりと剣山のように砲台が付いていて所々から赤い光が海面へと落ちていた。

完璧に三隻程度の駆逐艦では勝てないと直感ですら分かるほど威圧的だ。

巨体が鳥でも飛ぶかのように優雅に旋回する。

まるで俺達という虫けらを狙っている隼のように。

赤い光が何度も駆逐艦に当たっているがどうやら害はないようだ。物凄い風が赤い光から出ており海面が白く泡立っている。

必然的に高くなった波を俺は体中に被ることになるのだがそんなことはどうでもよかった。

目の前にある圧倒的な力を持つであろう兵器に目が釘付けだった。

一隻に十門——合計三十門の自動照準の機関砲の火柱が飛行物体を目標して飛翔する。

が、当たるところで九十度向きを変え空へとむなしく消えていく。

艦対空ミサイルが白煙を吹き上げセルから飛び出す。

炎が赤い線となり飛行物体へと飛び掛るがそれすら機銃と同じ末路をたどった。

「まさか……この兵器……」

メイナが気象すら操りかねないこの巨大な兵器を見て呟く。

「間違いない。

ベルカ帝国第四超空制圧艦隊旗艦……。

死角のない艦を目指して作られた『円盤型超空巡洋戦艦メガデデス』――！

なぜこの時代に……？」

「シエラ、知っているのか？」

俺は上から吹き降ろしてくる風で今にも吹き飛ばされそうなのを踏ん張りながら

風に長い黒希銀髪を遊ばせているシエラに話しかける。

シエラは赤紫の目でメガデデスを眼帯をしていないほうの目でらみつけていた。

「アレはベルカ帝国第四超空制圧艦隊の元旗艦。

ベルカ第一超空制圧艦隊旗艦『超空要塞戦艦ネメシエル』

第二超空制圧艦隊旗艦『超空砦戦艦ルフトハナムリエル』

第三超空制圧艦隊旗艦『超空突撃戦艦ヴォルニーエル』

そして第四超空制圧艦隊の旗艦『円盤型超空巡洋戦艦メガデデス』

まだまだ続くけどこれらは旧ベルカ軍最強の部隊だ。

第一から第二三まであった。

これらの艦隊は敵地の真っ只中に飛び込み被弾を気にせずに相手を攻撃。

沈黙させた後地上部隊や海上部隊などが雑魚の掃除。

簡単にまとめればこの艦隊は『被弾を気にせず敵のど真ん中に切り込み中から敵を潰す』

こうやって小国で技術力しかなかったベルカは世界を支配するまでにいたったんだ。

そして今の連合郡が反乱を起こしたときにすべてベルカの秘密地
下超兵器庫へと

自動装置によりそれぞればらに封印されたはず……。それが発見されたというのか……？」

再び赤い線になったミサイルがメガデスへと飛び掛るが見えない壁に阻まれ九十度の方向転換を余儀なくされ遠くで海へと役目を果たすことなく落ちる道をたどる。

後ろでなにやらラジカセのようなものをいじっていたセズクが唐突に叫ぶ。

「敵の無線の盗聴に成功したぞ！」

「よくやった、セズク！」

敵の無線を傍受すると次に敵がどんな攻撃を仕掛けてくるのかが分かるはずだ。

ラジカセにも似た傍受機のスピーカーから敵——メガデス内の無線が漂ってきた。

《おい、たった三隻の雑魚のために俺達はまたここへ来させられたんじゃないかねだろうな？》

《まあそういうな。

さくつと終わらせて今夜は艦長のおごりで一杯やろうや》

《こちら艦長、五分以内にこの戦いを終わらせる事が出来たら酒でも何でもおごってやる。

一人五万までの予算はあるからな。

さあ行くぞ、あ、そうそう。

アシユレール、また調子に乗って頭を打つなよ》

《打ちませんよ!》

……これが余裕という奴か。

俺達とメガデデスの艦内の空気は百八十度違うな。

《さあはじめるか。

弾道レーザーの砲門開け!

一撃で吹き飛ばして帰るぞ!》

上で旋回していた円盤は三隻のとても艦隊とはいえない貧弱な艦隊の前に

甲高いエンジン音をばら撒きながら移動してそこで静止した。

すかさず百五十二ミリ速射砲と二百八十八ミリAGSが咆哮するがそれらはメガデデスに当たることなく

むなしく水面に水柱を作っただけに終わる。

《レーザー砲塔一から四を起動しろ。

フルパワーで消し飛ばすぞ》

朝五時の薄暗闇の中、重低音を響かせたメガデデス。

そのメガデデスの上から四本のレーザー砲塔が真ん中の一番大きな砲塔を囲むようにして生えてきた。

そのそれぞれのレーザー砲塔に青い光がたまりはじめ次第に強さを増す。

「まさか、弾道レーザーを本気で放つっていうの!?!
危ない!よけて!!」

《五……四……第一砲塔に光学エネルギー移動を完了。
第一砲塔からブリッジへ、いつでも発射可能です》

真ん中からすつくと空へ伸びている一番大きな砲塔が周りの四本から受け取ったエネルギーで
直視できないほど明るく光りなおエネルギーをためる気なのか輝きが増す。

太陽のようなやさしい光ではなくあの光は殺気がこもった本気の光……。

《発射だ！

あの雑魚どもをけちらしてしまえ！》

ズガ！と大気を震わせ発射の爆風でかなり離れているはずなのに艦橋のマストがギシギシときしむ。

何人もの人が吹き飛ばされそうになり甲板にしゃがんだ。

風でワイヤーの一本が千切れ、甲板の鉄板が曲がる。

青い光が空へ消えたたん風は止みもとの静けさが海域に戻ってきた。

「……………？」

俺は立ち上がると辺りを見渡した。

弾道レーザーとか言っていたが案外たいしたことないのかもしれない。
いい。

雲とかによって綺麗にさえぎられたのかも。

あれだけ大きなモーションをしていながら無効だったりしたら笑える。

そして二十秒ほどたったときだろうか。

「来る!!」

みんな伏せて!!!!」

「は……?」

何を言っ……」

何もないというのに伏せるのが信じられないといったセズクはシエラに疑いの目を向けた。

そして何もないぜ?と主張するかのように両腕を広げた瞬間空が激しく光り

図太いレーザーが海を叩き割りながら移動しこの駆逐艦以外の二隻を一瞬でなぎ払った。

T h i s
s t o r y
c o n t

i n u e s .

円盤型超空巡洋戦艦メガデス（後書き）

お待ちしました！

出来立てほやほやりんです！（うぜえ

がんばりました。

読んでいただいておりますありがとうございました。

飽きられないようがんばりますので

どうかこれからもよろしくお願い申し上げます。

恐怖神、最終兵器、メガデス

レーザーに文字通り飲み込まれた駆逐艦は艦としての形をもう保っていなかった。

鋼鉄の泣き声を上げ船体に発生した亀裂は艦橋構造物などの重みに耐えきれずさらに亀裂の溝を広げる。

一隻の駆逐艦の船体は二つに折れ海に沈む以外に道は残っていないかった。

もう一隻の駆逐艦は艦橋が吹き飛んだことによりコントロールが乱れ自分の構造物へ向けて速射砲は弾を吐き出した。

あつという間に火達磨になった構造物の内部にあったミサイルは衝撃で誤作動を起こし弾頭の火薬に爆発の指示を促した。

二重に装甲を張っていたはずの甲板はあっけないほど簡単に炎の圧力に屈してひしゃげ

沸騰した海面へと破片を散らした。

次々にVLSに残っていたミサイルに引火していき火柱が容赦なく両舷の装甲を吹き飛ばし空へと立ち昇る。

四つにばらばらになった元駆逐艦も先ほどの駆逐艦と同じように鋼鉄の悲鳴を上げながら海面に飛び込み何とか生きていた船員を道連れにして沈んでいく。

二分にも待たずに二隻の駆逐艦はこうして海上から姿を消した。生存者は間違いなくゼロ。

「そ、そんな……」

へなへなと腰が砕けた艦長を尻目にシエラはキツとメガデスを睨みつけた。

いつもは冷静な目にかすかな怒りの色が見える。

《よし、撃沈ですよ艦長!》

《ん……? 愚か者め。

一隻外したようだな。

後三分でしとめられなければ酒の約束は取り消しだ》

《まあ見ていてくださいよ。

三分もあれば十分です。

もう一度あのレーザーでなぎ払ってやりますよ》

再びレーザー砲塔に光が静かにだが確実にたまりはじめる。
シエラはがたがたと体を震わせ怯え続けている艦長に

「大丈夫、僕が守る」

一言、声をかけた。

「シ、シエラ!?

無理だ!いくらお前でもあんな……」

泡を吹いて今にも卒倒しそうな顔色の艦長にメイナがつかつかと歩み寄る。

そして艦長を無理やり立たせて顔のまん前で呆れ顔で語った。

「艦長はお忘れなのですか?

私達はベルカ世界連邦帝国の『最終兵器』

あんな(ここでメイナはメガデスを指差した) 『通常超兵器』
ごときに

『最終兵器』が負けると……?」

メイナが怖い。

大ききなんてお前達の何百倍もあるんだぞ？
それに立ち向かうなんて……。

——無謀以外の何でもない気がするんだが。

そんなことないかもしれないけどさ。

「波音なら信じてくれるよな……？
僕達が負けるわけないってこと」

俺をじっと見つめたシエラの目に宿っているのは強い意志。

俺達を守ると言う『攻撃』しか出来ないはずの最終兵器が見せた『
守り』の意志。

そうか……。

俺は一体何を心配していたんだ。

《発射！！》

俺の目の前にいるのは最終兵器。

それも二体。

どう考えても負けるわけがないのだ。

もし負けてしまったりしたら最終兵器が廃るってもんだ。

そうだろう？

「行ってこい」

俺は笑顔でシエラの目を見返した。

「行ってきます」

シエラも俺が今まで見てきた中で最高の笑顔で答えてくれた。
サッ……とメガデデスから発射されたレーザーが空を青く染める。

「姉さん！」

「あいよっ！」

「まかせなっ！」

間違いなく直撃コースで真上から一気に来るレーザー。

そしてレーザーが弾着するよりも早く駆逐艦全体を可視できるほど濃いイージスが覆った。

キィィと甲高い空気を切り裂く音を響かせながら接近してきたレーザーは

駆逐艦のマストの先で数え切れないほどの青い線に別れ海へ無残に降り注いだ。

艦の周りの海が沸騰して煮えくり爆発的に発生した水蒸気は海面を押し上げ

四十メートル以上もの雨の壁を駆逐艦の回りに発生させる。

甲板がびしょぬれになるほどすさまじい雨の壁はすぐに消え傷一つない無事な船体をメガデデスへ見せ付けた。

てめえらの攻撃なんか効かねえなあ。

そう主張するかのように。

《何だと！？》

《あの駆逐艦……このレーザーを防ぐほど濃いイージスを……》

「艦長、メガデデスのクソツたれの真下にもぐりこむぞ！」

弾道レーザーを無力化した二人が乗っているということ。

このことをようやく確認できて安心した艦長。

駆逐艦は三八ノットでメガデデスの斜め下へと急速前進をかけた。斜め下ならばあのレーザーが当たらないという暗黙の了解が出来ていた。

メガデデスはあのレーザーを撃つとしばらく動けないのだろうか。

《三十センチ砲用意……発射!》

空気を振るわせる音とともにメガデデスの三連装三十センチ砲の砲門から黒い噴煙が流れる。

一直線に駆逐艦へと向かってきたがあっけないほど簡単に軌道を湾曲され駆逐艦の

右舷八メートル地点に落下した。

一五センチ砲弾などが駆逐艦の前をさえぎるかのように鉄の雨を降らせるがすべてかすることすら出来ずに

深い水の壁へと突き刺さった。

《おい!下に回りこまれたぞ!》

《下部垂直砲台で応戦しろ!!》

あっちがイージスを持っているからなんだってんだ!

イージスなら俺達も持つてるんだ!!》

「今から奴のイージスに穴をぶち開けるからミサイル叩き込んでいい?」

雨霰の中伝えたいことを明確に短く伝えシエラは甲板を強く蹴り上げ鋼鉄の嵐を切り裂いて空へと舞い上がった。

メイナは甲板上に残って流れ弾の処理という比較的楽な仕事を選んだらしい。

あいからわずの面倒くさがり屋だ。

青い流れ星が駆逐艦から飛んできたのを見た兵士が無線にがりたてているのか

大量の無線がスピーカーから漏れ出す。

《な、何だアレは――？》

《ん……なんだ？

――――ッ！？ シエラだ！！

決して奴をこの艦に近寄らせるな！！

対空兵装各員へ！！何をしても構わんから絶対に奴を叩き落せ！！

劣化ウラン弾を使用しても構わん！！》

のんきそうな声をした副長らしき人物の声が豹変した。

全艦放送であせりあせり指示を出す。

メガデスは真下の駆逐艦など後回しにしてひたすらシエラへと何百、何千という銃口を向けた。

そして竜巻の前の霰のように激しく弾がシエラへと突っ込む。

それらはシエラの前でむなしく軌道を曲げ一発もシエラに損傷を与えないことは出来ない。

「あいつら流石に光波系の武器は修復できなかったんだね。

弾が金属なんだもん。

ベルカには金属の弾を撃ち出す技術がなかったからね。

ってことは上下についている三十センチ砲も弾は金属製か。

さっきの弾も完璧に

あいつらが手に入れることが出来たのはナクナニア光空機関だけのようね」

メイナが俺にみんなによく分からない説明を詳しく説明してくれた。もしかしたら俺がバカで理解できないだけかも知れないけど。

おーけー、メイナのこの後ずらーっと続く説明を俺が簡単にまとめよう。

何度も説明されているかもしれないが念のためもう一度説明させてくれ。

ベルカには砲弾を作る技術がないらしい。

理由は至って簡単に砲弾よりも先にレーザーが出来てしまったためだ。

もともと国土全体に資源が少なく、特に鉄などは貴重品中の貴重品。そんな物を武器として扱うなんてとても信じられなかったのだろう。そこで旧ベルカ人は常に身の回りにあふれているものに目をつけた。それがベルカの超光化学技術の生まれた理由だ。

光りにエネルギーを詰め込みそれを燃料などに使う。

そう考え周辺国などが石油などにエネルギーの主役が切り替わっていく中ベルカだけは光にこだわった。

二十年、三十年程の研究の後莫大なエネルギーを持った光を作り出すことに成功する。

その光はハイライトから出ていた紫色の光――ナクナニア超光。

ナクナニア超光を生み出したことにより超光化学が抱えていた何万もの問題……。

例えば温度の調整、エネルギーを含ませることが出来るか否か。

漏れてしまったとしても人体に有害なのか、無害なのか。

放射能をエネルギーとして作られようとしていた試作品の放射能光が持っていた問題。

それらがすべて解決に向かった。

どのようにして生み出したのかはよく分からないらしいがとにかく大革命だ。

菌一つも通さない完璧な警備の結果技術漏洩など一切問題にならず

実用化まで持っていく事に成功した。

自国だけで完成させようやく得た『力』。

ナクナニア超光により今まで腐るほどあった成分から
鋼鉄をものぐほどこしなやかなで強固な新しい金属を生み出すこと
にも成功した。

ナクナニア超光は万能光とも呼ばれるほど何にでも応用できた。

まさにチートのような神の光だった。

ここから先は言わなくても分かるだろう。

ベルカは世界帝国を築き世界中に蔓延していた戦争や飢餓などを根
絶。

人種差別などは力を持って廃止し貧富の差すら無くした。

徹底的に管理された社会主義。

とにかくその時代だけは犯罪発生件数ゼロを記録するほど平和な時
代だった——らしい。

旧ベルカ人のメイナが言うにはな。

《さっさと撃ち落せ！

何をしているんだ！！》

《し、しかし伍長！

早すぎて狙いが定まらなくて……！

うわっ！？》

小さな爆発が起こりパラパラと鉄屑が降り注ぐがメイナのイーゼス
によって弾かれ海面に小さな波紋を広げる。

先ほどよりも圧倒的に少なくなった対空気銃が発する光が目に入っ
てきた。

あれほどたくさんあった機銃のほとんどはシエラのレーザーの直撃
を受け炎上していた。

《イージスを一瞬だけ破ってぶち込んできやがる！
なんて奴だ、クソっ！！》

《うわあああっ！！！！こっちに来るなああっ！！！！》

また一つ小さな爆発の炎が駆逐艦を照らす。

統制の取れていたメガデデスの対空機銃の嵐はばらばらにほぐれや
がて沈黙へと向かっていた。

行動に支障が出なくなったのを確認したシエラはぴったりとメガデ
デスの下部に張り付いた。

そしてシエラは自分のイージスを見ることが出来るほど濃度を高め
た。

メガデデスのイージスとシエラのイージスがぶつかり合い虹色の光
が海域を照らす。

強烈な光がメガデデスを包んでいく。

——シエラは痛くないのだろうか？

そう思った俺は馬鹿だったようだ。

シエラはうつすらと笑みを浮かべていた。

殺気を身にまとい恐怖を振りまく。

余裕の表情でメガデデスのイージスの中に手を差し込んでいた。

《イージスが破られるぞ！

出力を上げろ、何をしているんだ！！》

《コレが限界ですよ！！！！》

《こちら第三艦橋！！！！

も、もう駄目です、イージスが破られます！！！！》

目を直接刺しているような強い光が発生したかと思うと一瞬で光は

消えた。

メガデデスとシェラのぶつかり合っていた部分のイージスはぽっかりと穴のが開いていて消滅していた。

「今よ！」

ミサイルを撃ち込んで！！」

メイナが艦長に大声で叫び艦長はほとんど反射のような速度で発射スイッチを押した。

VLSの口が開き艦対艦ミサイルが噴煙を吐き出し生き物のように鼓動する。

大量に発生した白煙を突き破り一つの火の槍がメガデデスへと上昇を開始した。

後部艦橋のそばにあるVLSから発射された艦対艦ミサイルは自分の持ちうる最高のスピードで目標へと向かう。

《総員、対ショック姿勢！！！

でかいのが来るぞ！！！！》

真上にあるメガデデスにのイージスの穴を飛び越え本体に火の槍の弾頭が突き刺さるまでそう時間はかからなかった。

信管を起動させ高性能の火薬がメガデデスの腹をえぐり白く染め上げる。

――はずだった。

しかしミサイルはガン！と火花をあげメガデデスのどてっ腹に突き刺さっただけだった。

爆発もせずただただ沈黙するのみ。

なんで……なんで爆発しないんだ……？

「しまった……」

艦長の顔色がさっと目に見えて分かるほど青くなった。
艦長あんな何を思い出したんだ。

なぜ爆発しないのかシエラも不思議に思っただろう。
それは敵も同じようだ。

《敵ミサイル本艦のV地区に命中……。
し、しかし被害はゼロです!!》

《な、何はともあれ敵我々にチャンスをくれたようだ。
今だ! 奴を吹き飛ばせ!》

メガデデスの三十センチ砲弾は油断していたシエラの右腕を軽くえぐった。
ぎりぎりでイージスを張って防御に成功したのは良いものの右腕は既に機能停止寸前にまで追い込まれたようだ。

「……ちっ」

シエラが舌打ちしながらパンソロジーレーダーを全開にした。
右腕の鈍痛に耐えながらシエラが見た眼帯に投写された弾頭の中身……。

それは電子錯乱ミサイル——通称オクトパスだった。

「弾頭を取り替えるの……忘れてた……」

「艦長……」

i
n
u
e
s.
.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

恐怖神、最終兵器、メガデス（後書き）

また一週間もお待たせしてしまいすいません！
がんばって更新しました。

出来立てほやほやです。

暖かいです！

おいしいです！

またここまで読んでいただきありがとうございます！

GJ艦長

「いたたたた……」

駆逐艦の甲板に降りてきたシエラの右腕からはたたと血が飛び散った。

「大丈夫か？」

「大丈夫すぐ治る。」

そんなことよりほら。

何でミサイル爆発しなかったの？

艦長に少しでも仇をとらそうとした僕がバカみたいじゃん。

まあ……」

シエラはメガデデスの腹に先端をめり込ませているミサイルを見上げた。

「大体予想はつくけどね」

あーうん。

弾頭がオクトパスでした。

ずどんと敵の三十センチ砲弾が駆逐艦へと向かってきたようだがメイナのイージスで軽くあしらわれる。

「高性能RP25爆薬かとおもったら弾頭がオクトパスだったのさ。まったく予想外だね。」

不謹慎ながら僕少し笑っちゃったよ」

もう頬にぱっくり開いていた傷が治りかけていたセズクがシエラに手を振りながら近づく。

艦長の肩が心なしか震えた気がした。

「つとそんなことより上の邪魔者を何とかしないと……。

攻撃まだまだする気バシバシだよ？

僕が何とかしたいけど……イージスが張れないからさ」

最後の言葉をつけたし苦笑いをするセズク。

モドキだもんな。

メガデスの下部が光りドボンと左舷前方に小さな光が差し込む。

どうせ流れ弾の一種だろ。

そう思った俺が甘かったようだ。

次の瞬間落下地点から水柱が大きく膨れ上がり艦が右へと吹き飛ばされた。

大きく右に傾きそばにあったひしゃげた手すりを掴んで何とかこらえる。

甲板についていたいくつかの固定の弱いものは大きく弧を描き海へと落ちていった。

「なんって爆発だよ！」

「爆撃光だ。」

あたったらこんな艦ひとつたまりもない」

シエラの冷静な声はあいからわずだ。

海面はうねりにうねって艦の傾斜がますますひどくなる。

大きく右に傾いた艦は慣性の法則により今度は左へと傾く。

再びしっかり手すりとは掴んでこらえる俺。

もう毎回巻き込まれる戦いは常識が通じない相手ばかりだと。

最近そう思いはじめた。

水蒸気だった海水は雨になり艦橋やAGSを叩く。

《せつかくのチャンスだったというのに何をしている！

バカ者が！！》

《すいません！すいません！！

次は命中させれるようにします！！》

《次はないかもしれないだろうが！！

今のが大きく勝負を分けたかもしれないというのに！！》

ミサイルの不発によりすこし敵は恐怖が消えたようだ。

一喜一憂する激しい軍人さんだな。

「とりあえずもうミサイルはあてにしない。

僕が一人でこいつを叩き落とす。

ちよつと遊びすぎた」

遊びすぎたって……おいおい。

俺のツツコミが入る前にシエラはすごい風圧で艦長を吹き飛ばして空にいた。

ちやつかりうらみ晴らしてやる。

《ひゃあっ！？

また来ましたあああ、も、もう嫌です！！》

《恐怖神め……。

どちらにしろ我々はあの駆逐艦を沈めなければ帰還できないというのに……。

忌々しい……。》

メガデデスのイージスにシエラのイージスがぶつかる。

強烈な光とともにいとも簡単にメガデデスのイージスは破れた。

さっきは駆逐艦に仲間の仇を取らせようとミサイルを命中させる穴を開けたシエラ。

一撃でも艦長に報いさせるために攻撃を控えていたのだろう。

だがそのやさしさはもう……ない。

一度失敗したこの艦にはもう二度と攻撃のチャンスを与えないだろう。

二度とな。

《イージス破損！！

A10地区に融解反応発生！！

ブリッジ！！応答してくれ！！

イージス破損！！

シエラが……恐怖神が……》

今シエラがメガデデスのイージス内に入り込んだ所から爆発が発生した。

「すごい……」

海に降り注ぐ大きな破片——この駆逐艦の半分ほどある二連装砲が溶けながら海へと落下する。

そのままの形でまるで果物を包丁で切り取ったかのように。

メガデデスのイージスの内側にもぐりこんだシエラはメガデデスの数え切れないほど残っているの武装——たとえばミサイル発射口や小型砲塔を破壊しはじめた。

メガデデス巨体のあちこちから火の手が上がり黒煙がたなびく。

《G20に被弾！
装甲融解！》

《くそっ……ブリッジにも煙が流れ込んできやがったっ！！
排煙装置は作動していないのか！？》

《F47の爆発の振動でショートしました！
今応急処理班を向かわせています！！》

《駄目ですココは閉鎖します！！
総員B18地区から退避しろ！！急げ！！》

メガデデス内はもう地獄のようになっているに違いない。
迫り来る火の手と煙。

逃げようにも上空千二百メートルの鋼鉄の棺桶の中。

火が止まらなければ体中を焼かれて死ぬのを待つだけとなる。

煙が出て行かなければ肺を詰まらせ窒息死。

考え付くだけでもこの二つの死がああ棺桶の中で展開しているに違いない。

メガデデスはシエラを引き剥がすことに必死で下にいる駆逐艦にはもう目もくれない。

《被害は？》

《表面武装の被害は甚大です。

上部下部砲台は何とか使用可能ですが……。

右舷左舷ともに砲塔は全滅です》

《表面装甲解除。

対空ミサイル、対艦ミサイル、ナパーム。
何でも良い、なんとしてでもあいつを潰せ」

メガデデスの表面がざっくりと剥がれ数え切れない数のVLSが露出した。

その穴一つ一つから一メートル強のミサイルが流れ出しシエラへと進路を調節する。

砲台に気を取られていたシエラはそれに気がつくのに当然少し時間がかかる。

鼓膜に刺さる小さなロケットエンジンの音に振り向いたシエラは視界を覆う大量のミサイルを見ることにより

必然的に一瞬の隙が出来、そこに二十本はあろうかという鉄の矢が群がった。

空中に丸い爆炎を作り上げる。

「シエラ！」

俺は手すりをぎゅっと握り締め不安に胸を奪われる。

冷や汗が背中を伝い足が少し震える。

爆炎で出来た太陽の一部がもりあがり殻を突き破った

太いオレンジのレーザーがメガデデスを『貫通』した。

付きまとう炎を左手で吹き飛ばし額から流れ出る血をぬぐうシエラ。その目は今までのほんのり暖かい目から完全に物を見る冷たい目になっていった。

光波共震砲というさっきシエラが説明していた『超空要塞戦艦』の武器。

それでメガデデスを攻撃するということはシエラが本気になったという事。

V S大艦隊の時以来見ていなかったオレンジ色の光が目に残る。

《光波共震砲!?

くっ、ダメーじコントロール!!

被害知らせ!!》

《ナクナニアリアクターに損傷!

予備の起動を開始します!!》

無線で聞いていると確かに攻撃は効いているはずだ。

それも表面上でしかないのなら流石に凹むだろうなあいつ。

炎上しながらもすごい威圧感を放っているメガデスの下部砲台四つが旋回しはじめた。

「……?」

メイナも無線に気を取られイージスを忘れている。

まずいと思った瞬間にはもう遅かった。

《吹き飛ばせ!》

ぴたりとこちらをみすえた十二門の砲口から火が噴出した。

黒い煙が風に沿って流れ音速以上のスピードで撃ち出された砲弾が衝撃波を伴いながらこちらへ疾走する。

それにメイナが気がついたときはもう遅くイージスが展開するよりも早く砲弾が駆逐艦へと達していた。

ケーキのスポンジのように艦首を抉り取りマストをへし折る。

約二十度ほどの角度で撃ち出された鉄塊は228ミリAGS砲台を吹き飛ばしレーダー板を掻っ攫う。

艦尾の申し訳ないように乗っていたへりは爆発、火達磨になり海へ落ちた破片が音をたてる。

「艦首に被弾！」

浸水、艦首及び後部ヘリ甲板上で火災発生！！」

副長が震えている艦長に報告するとともに砲弾によって生じた衝撃波が甲板上の人を

木の葉が風に飛ばされるぐらい簡単に吹き飛ばした。

俺はがんばって持ちこたえた。

そうとてつもなくがんばったのだ。

実はメイナのイージスで守られていました。

「救護班、落ちた連中を引き上げろ！」

応急修理班は艦首の修理急げ！」

「メイナ、何をしている！？」

「ご、ごめん……。」

無線に氣を取られてて……」

しゅんとしたメイナ。

やはり隙を作るということは人間の心を取り戻してきたという証なのか？

命中した所を見て来いと艦長に命令をもらった俺は他の乗組員と同様汗まみれ海水まみれになって走る。

艦首はきれいさっぱり無くなり俺のすぐ隣にあったAGS砲台は根こそぎ持っていかれていた。

浸水がはじまっているようでゴポポ……と海水が渦になって艦首から入り込んでいる。

心なしか少し傾斜がはじまった。

《敵艦に命中！

しかし致命弾は……うわっ!?!?」

青い閃光が走りメガデデスの下部砲台の基盤が溶ける。その上に載っていた三十センチ三連装砲は巨大な破片となり海面を掻き回した。

波が痛んだ艦首を打ち傾いてきた駆逐艦の右舷を洗う。

《くっ……恐怖神めっ……!》

シエラは無理でもせめてあの一隻は……

あの一隻だけは沈めてやるっ——!

対イージス貫通弾道レーザー用意!~!》

なんとか無事だった下部砲台四つがすべて剥がれ落ちその巨体から火を吹き続けても

上空にとどまり攻撃を仕掛けてくる『円盤型超空巡洋戦艦メガデデス』。

第四超空制圧艦隊の元旗艦というだけあって防御力と継続力は半端じゃないようだ。

火の塊となっているのになおその火の海となったメガデデスの上甲板を突き破って

レーザー砲塔の隠されていた部分が稼動する。

「浸水停止、排水装置起動を確認。

応急処理班よくやった。

引き続き火災の鎮火に移ってくれ」

「艦長、メイナ、聞えていたか!?!?

またあのレーザーが来るぞ!~!~!」

「ああ聞えていた。

全速前進の命令をかけてはいるが……。
ここはメイナに頼るしか……」

「聞えてたよ！」

私一人のイージスじゃ無理かも……。

シエラを呼び戻さないと……。

あいつら対イージス貫通弾道レーザーって言ってたし……。
ど、どうしよう……。

エネルギーによつてはいけるかもしれないけど……」

水平線から太陽が顔をだし赤い光がメガデデスの影を濃く海面に落とす。

《これで最後だ!》

「メイナ!!」

俺は必死で叫んでいた。

あわあわしている最終兵器なんて見ていられない。

「無理！」

あのエネルギーだと私のイージスじゃ駄目!

シエラが砲塔を破壊してくれるのを祈るしか……」

光が充填されていく音。

そして中央のレーザー砲塔に光が集まり顔を出した太陽を圧倒する光が発されている。

メイナからのパンソロジーメッセージを受け取ったシエラが発射を阻止しようと砲塔に張り付くが

全エネルギーをレーザーとイージスに傾けているようで薄い白とい

う目に見えるほど
強烈な密度をしたイージスが砲塔を包んでおり手を出せない状況が
続く。

「駄目だ！間に合わない！
総員対シヨック姿勢！！
何かにつかまれ！！」

《我々とともに死ね！》

「メイナっ！！」

「無理だってば！」

俺ここで死ぬのかな。

艦内に入ったところでどうせ助からないだろう。
なら赤く染まった海を見ながら死ぬほうがいい。
もうちょい生きたかったな。

アリル——仁——あと沢山。

省略するなというつつこみ待ちのボケだ。

親父、母ちゃん、姉ちゃん。

今俺そっちへ行くかもしれない。

ふっと今まで聞えていたメガデデスの甲高いエンジン音が次第にゆるくなり……消えた。

まぶたを閉じていても突き抜けてくるほど強烈な光も何かにかき消されたように弱くなる。

唐突に海域に静けさが戻った。

「な……なんだ？」

「何が起こったんだ？」

俺の声が海面をすべり波が船体を舐める水音が響く。

《な、何があった？

レーザーは発射されたのか……？

状況を知らせろ！》

何が起ったのか分からないのは敵も同じようだ。

俺とメイナは分けが分からないといった様子で顔を見合わせた。

《か、艦長……ミサイルが！

あのミサイルが……電力をすべてカットして……》

「……あ」

——オクトパスだ。

ってことは……予想以上に艦長GJなんじゃ……。

後で謝らないといけないかもしれないな。

啞然としていたシエラも気を取り直しメガデスのレーザー砲塔を破壊する作業に戻ったようだ。

鉄同士がこすれる嫌な音を響かせながら天に向かってそびえていたレーザー砲塔が傾いていく。

イージスもカットしたのかオクトパス。

蛸というコードネームがとてつもなく似合うミサイルだな。

《バカな！？

この艦のエネルギーは光のはずだぞ！？》

《そ、それがあのミサイル……。

今の技術で補ったところを正確に電線を延ばして電力を……。

まるで蛇のように絡み付いて……》

《だ、だがエンジンはついたままだぞ？》

《エンジンは別系統ですからですよ！

今絡まっているのは武器系統へと電力を移すための電線です！》

《し、修復を急げ！！

はやくしないと……うわっ！？》

折れた砲塔がメガデスの上甲板に突き刺さる。

《連合郡本部へと連絡を入れろ！

本艦は予定通り敵と接触破壊を試みる。

しかしコードCに遭遇。

被害甚大により戦域を離脱すると！》

《に、逃げるのですか艦長！？》

《今は命が大事だ。

撤退するんだ！》

《し、しかし……》

セズクが電源を切ったのだろう。

ガーガーとうるさかった敵無線は聞えなくなった。

メガデスはふらふらとわずかな力でしかもう浮いていないように思われた。

そこにシエラが止めを刺すかのように何度もレーザーを叩き込んでいる。

「対艦ミサイル用意!!」

亡くなった戦友のためにも一矢報いるぞ!」

煙突後部のVLSから白煙を吹き上げ放たれたミサイルはメガデデスが出している

紫色の光源——エンジンへと正確に突っ込んだ。

爆発、炎上。

絶対に勝てないと思われていたベルカ第四超空制圧艦隊旗艦『円盤型超空巡洋戦艦メガデス』。

弾道レーザーを駆使して帝国郡の多くの艦艇を葬ってきたであろう死神。

その死神は体中から炎を吹き上げ今にも膝を屈しようとしていた。

「発射!!」

四機の鉄の矢がメガデデスへと飛翔し、爆薬の力で装甲を吹き飛ばしエンジン軸を捻じ曲げる。

レーザー砲塔を根元からへし折った爆発もありメガデデスの死期をさらに近づける。

攻撃は確実に効いている。

だが

「駄目だ、このままじゃ致命傷にはならない。

内部から破壊するしか……」

流星は元旗艦なだけあり防御力は半端じゃないようだ。

「残弾は？」

「艦長、残念ながらゼロです」

唇を噛み締める艦長。

なぜあんなにミサイル、レーザーを食らって生きていられる？
俺達はいとも簡単に沈むというのになぜお前は沈まない？
アレだけ殺しておいてなぜ死なない。

俺には艦長の冷たい目がそういつているように見えた。
憎しみのあまりに自分を失っているようにも見える。

「艦長……」

落ち着いてと言おうと思って手を伸ばした。

最後の足掻きのようにふらふらと宙を漂うメガデス。

シエラが強烈な一撃を食らわせようと光を溜め始めたその時
青くて太いレーザーが瀕死の死神の心臓を抉り取っていた。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

GJ艦長（後書き）

お待たせしました。

できたてほやほやをお届けいたします。

読んでくださりありがとうございました。
神様みたいです。

にっぷり

巨体に大穴を空けたメガデデスは膝を屈した死神だった。体のあちこちから火を放ち、墜落。ばらばらに分解。

空中で火の玉となり霧散した。

朝日だけが油の浮いた海を赤く浮かび上がらせ
一晩で大量の命を飲み込んだ海は大量の破片などと静かに揺れている。

メガデデスを散らしたあのレーザーが再び来るかと警戒したが二度と空が青色に光ることはなかった。
ずっと上を見ていたせいかな首が痛い。

「あのレーザーが……また来たってことは……。
もう一隻存在するってことだよな……？
しかもメガデデスを狙ったってことは……」

味方？

「分からないけど……」

艦長は肩をすくめてうつむいた。

「レルバル、シエラは？」

思い出したかのように俺に聞いた艦長の言葉ではっとした。

「シエラは……？」

まさか一緒に……」

悲鳴を上げる筋肉を無視してあわてて空を見上げる。

そこには空に浮いているシエラがの姿が……と続けたい所だが姿は見えない。

いない、いないのだ。

「嘘だろ？」

おい、シエラ！」

また不安が胸の奥から湧き上がってきた。

泣きそうになったその時、足元から声が聞えてきた。

「うゝ、冷たい……」

「「あ、いた」」（不本意ながらセズクと被った）

——ただ単に海に落ちていただけのようだ。

長い髪がびちゃびちゃになって頬に張り付いている。

額と右腕から流れ出ていた血は止まっており傷は綺麗に無くなっていた。

「眼帯壊れてないか……？」

「防水だから大丈夫」

「そ、そうか」

乗組員と短い会話を交わした後俺のところへとことこと歩いてきた。

「まったく、今夜は最低の日だったねえ。

メガデデスみたいなヘヴィな物と戦うことになるなんてさ」

メイナがふうとため息をつき

「ちょっと待って。

あいつと戦ったのは僕じゃん？」

その発言にシエラが少し噛み付いた。

二人のむーとした雰囲気の中にセズクは

「まあまあ、とりあえず難は去ったんです。

家に帰ってゆっくり休みましょう。

ッてことでマイハニー、一緒にかえブハッ！！——ゲフン！

！」

メイナのすかさず放たれた回し蹴りで俺に抱きつこうとしたセズクの体が艦橋にめり込む。

あの鋼鉄の塊の中にめり込むセズクすげえ。

いやメイナの蹴りか？蹴りなのか？

それよか蹴りで一回ブハッって言った後めり込んでゲフンって言ったな。

二段階構造の悲鳴だな。

「艦長は今からどうするんだ？」

俺はえぐれた艦首を見て、ぽっかりなくなったAGS砲台を見て撃ち尽くしたVLSを見て無くなったマストとレーダー板とを見渡した。

どう少なく見積もっても中破、普通に見積もったら大破だ。

「この艦で一番近い硫黄島の帝国郡の隠しドッグに行こうと思う。そこで応急修理でも受けて帝国郡本部まで帰るとするよ」

若い艦長は自分の艦の痛々しい姿をみて苦笑いするとめり込んでいるセズクに目を向けた。

めり込んだ艦橋を少し爆破して出てきたセズクに黙ってパンチを一発。

「な、何をするっ！」

「黙れ、これ以上艦を壊すな、アホ」

とまあ、こないざござ(?)はあったが俺達四人はメモリーチップを持って家に帰ることにした。

あんなことがあったけど両手両足、五体満足で帰れるとは神も寛大になったものだ。

「ありがとう、シエラ、メイナ。」

お前達二人のおかげでメガデスを撃破して戦友の仇を取ることが出来た。

本当にありがとう」

艦長が二人にお礼をいって頭を下げる。

「おっとこっちのほうが軍人として敬意を表せるかな？」

下げた頭を上げ帽子をしっかりとぶって敬礼する。

シエラ、メイナの二人も艦長に敬礼を返し俺の両腕を掴んだ。

「出来ればまた遊びに来てくれ、この艦に。
シエラ、メイナ、セズクと……えーと？」

「……波音だよ、ちくしょう」

「そう、波音！」

海軍さんカレーぐらいなら出せるから。

この艦——リーシャルも喜ぶだろう。

命の恩人だからな」

いい加減に覚えてくれよ、と一人ため息をつく俺。

波音のたった二文字だぜ？

くよくよするなって波音いいことあるさ。

そうだよな、そうだよな！

ありがとう俺の心の中の俺！

……一人芝居ってむなしいものだな。

「じゃ！」

四人で船員と艦長に別れを告げると同時に足が甲板を離れた。

あっという間に小指の先ほどの大きさになるリーシャル。

白いを青に刻みつけ先へ先へと進んでいく。

青と青との間に挟まれた鋼鉄の城。

また会えるといいな。

「大切なものが消えるとき

三つの死は姿をあらわす。

死は力を使い地上を無に戻す。

死は鬼神となり

恐怖の中で消えていく。

大切なものを失った悲しみと共に。

——この伝説を思い出しちまったよ。

この続きはもしかしたらあの最終兵器のことが書かれているのかもな」

俺達が青空の向こうに見えなくなってもなお、敬礼を続けていた艦長はそう副長に呟いたらしい。

「飯食って学校行くよ！」

「嫌だ、絶対に何としてでも休む！」

「マイハニー、頼むよ。」

学校は行かなきゃ駄目なものなんだよ？」

「うっせ、疲れてるんだ。」

放っておいてくれよ頼むから」

とはいってもVSメガデスの時は見上げていただけなんだけどな。でも寝てないことは確かだ。

今は朝五時ちよい。

このまま学校に行ったところで即撃沈するのは目に見えている。それにこの暑さ。

まだ九月だというのになんて暑さだよ。

「波音ー？」

いるかー？

いたら返事しろー、おーい」

クソ暑い&眠いつてのに朝早くから訪問者ありけり。

この声は鬼灯のおっさんの声だ。

「セズク、これよろしく。

メモリーチップ渡しといて」

そういつて超光学記憶媒体を渡す。

そして布団にもぐりこもうと膝を曲げたところでおっさんが

「お、いるじゃないかー！

なんで返事してくれなかったんだよ、H A H A H A」

ドアを蹴り開けて入ってきやがった。

布団にもぐりこむ姿勢のまま固まる俺。

なんなんだよ、どいつもこいつも俺が寝るのを妨げやがって。

ため息が出るのをなんとかこらえて膝を伸ばして立ち上がる。

そしておっさんにむかって笑顔を作った。

それに少し安心したのかおっさん口がマシンガンのように言葉を放ち始めた。

俺被弾。

「まさかメガデデスに襲われるなんてなあ、はっはっは……。
大丈夫か？

まあ大丈夫だったからここにいるんだな、はっはっは！
そういえば帝国郡から電報が入ってるぞ。

『最新鋭試作ミサイル艦リーシャルを無事に守りきり

メガデデス破壊という快挙、などとともにハイライトとの帝国郡の支援。

それらの功績により永久波音を少佐に。

シエラ、メイナ両は少佐から大佐に二階級特進。

セズクは後で顔出せ、コラ』

だそうだ。

いきなり少佐とかって階級はすごいな、波音。

なんでお前が少佐なんだろうな」

俺は別に階級なんてどうでもいいんだけどな。

シエラとかメイナは名誉の戦死と同じぐらいすごい昇進したな。

そしてセズクの扱いがGJすぎる件について。

「『セズクは後で顔出せ、コラ』ですか。

なんで僕だけそんな扱いなんだろうね」

俺を——そうだな。

まるで小さな子猫が餌をねだるような特有のあの目だ。

それで俺に眼差しを注ぐ。

助け舟とかは一切出すつもりはない。

悪いな助け港はいま台風に襲われているんだ。

「とにかくお前ら三人はしっかり休め。

今日は学校休んでいいからな。

じゃあセズク、行こうか」

もうぐったりと疲れきっている俺達とは真逆に

水を得た魚のようにホクホクしている鬼灯のおっさん。

メモリーチップ——もとい超光学記憶媒体を手に入れることが出来たのがそんなに嬉しいのか。

「え、僕も休みた……え？」

駄目……？え？ちよっ……え？」

そして鬼灯のおっさんにずるずると引きずられていく哀れな犠牲者。うるさかった家の中が嘘のように静かになりほっと息をついた。

海水でベタベタしていた服を脱いで風呂にダイブ。

たっぷり三十分は入った後、おそらくニーズ（俺の召使的な例の男の人）が

洗濯しておいてくれたのであろうパジャマを着て布団に滑り込む。ふんわりした二つの布がこの時はほんのり暖かく、気持ちがよかった。

「うーん」と目を覚ましたのが午後二時。

台所で肉……だろうか？

それを焼いているこうばしい香りがする。

「おはよ……」

間違いなく寝癖が付きまくっている頭の端を押さえ台所のドアを開ける。

「おはよう、マイハニー。

もうおそよう

ご飯作っておいたよ、ステーキだよ、食べなさい、早く」

せかすなって。

「うん……。」

というかセズクお帰り。

色々言われたんでしょ？」

「まあ普通に昇進のお知らせだけだったよ？」

しかし寝ぼけまなこの波音もかわいいなあ。

食べてしまいたいよ、もちろんそういう意味で」

パンチ。

セズク、後ろに体をそらしてかわす。

なん……だど？

「甘い、甘い波音。

僕は愛の拳がいつ飛んでくるかなんてちよちよいのちよいで分かるのさ」

そうですか。

あくびをした後席につくと『I want to eat you』

と書かれたピンクのエプロンを

肩からかけたセズクがステーキと白いご飯を持ってきてくれた。

エプロンの言葉が見るたびに変わっている気がするんだが突っ込んだら負けだと思ってる。

そして箸を持ってまだ出ようとするあくびをかみ殺しステーキに文字通り食ってかかる。

口に入れようとステーキ片を箸でつまむ。

「食え食え食え食え食え食え」

「……………」

えいつ。

『ぷすっ』

「→※★!?!?」

声にならない声を上げて目を押さえて転げまわるセズク。

「うるせえ」

俺はセズクの両目にぷすっと刺した箸を流しに投げ込み新しい箸を取り出す。

どうでもいいけどたれがついたまま刺した。

ステーキを食べる前に気を取り直すため水を飲むために手を伸ばす。既に復活済みでそれに気がついたセズクがコップを取ってくれた。

「飲め飲め飲め飲め飲め」

「……………」

えいつ。

『にっぷ』

「→※★!?!?」

声にならない声を上げて目を押さえて転げまわるセズク。

「うるせえ」

俺はセズクの両目につぷと刺した箸を流しに投げ込み新しい箸を取り出す。

ふとステーキに胡椒がかかっていないことに気がついた俺は胡椒を取るために手を伸ばす。

それに気がついた右目を抑えているセズクが胡椒入れを持ってきてくれた。

「かけろかけろかけろかけろかけろ」

「……………はぁ……………」

えいつ。

『しゃくにっ』

「→※★!?!?」

声にならない声を上げて目を押さえて転げまわるセズク。

「うるせえ」

俺はセズクの両目にしゃくにっとな刺した箸を流しに投げ込み新しい箸を取り出す。

ちなみにステーキの中に怪しい葉等は一切入っていなかった。普通においしかった。

「た、ただ……熱々を早く食べて欲しかった……だけなのに……」

目を押さえながら涙ながらに俺に訴えてくる。
うん、ありがとうその気持ちは大変嬉しい。
でも変なプレッシャーをかけるのはやめてほしいな。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

にっぷり（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

できたてほくほくをお届けいたします。

この小説は120%の愛と勇気とやさしきで出来ています。
ご提供は私、ネシャルダオエルでした。

とふざけすぎましたかねw

ここまで読んでいただき本当にありがとうございます。
とってもとっても嬉しいですv

追憶

珍しくすることがないためしばらくぼーっとゲームをする。
この平和はどうせ長くは続かないだろうなと思いつつ。

俺は一体どこへ向かっているのだろうか。

最終兵器二人とともに鬼灯のおっさんに頼まれるがままに動いているだけだ。

自分での目標は何なのか。

この先何が起るのか。

何が変わって何が変わらないのか。

自分でもワケが分からないこの世界。

ベルカの超光化学、帝国郡、連合郡。

第二期一九九八年ミサイル一発で始まった決着のつかない戦争。

自分達の利益のために動く連合郡。

世界を取り戻したい帝国郡。

ベルカが滅んで約五千年。

帝国が滅んでからずっと狩猟生活だった人類が

ハイライトから見つけ出した『力』によりココまで発展できたこと。

もしこれらすべてが運命みたいな不確定要素的な物ではないだろうか――。

「あっ！」

……………ゲームオーバーになっちゃったよ。

あの超巨大戦艦強すぎるんだよな。

「んーおはよう」

「おはよう、シエラ」

ずっと前に買ってやった苺模様のパジャマで目をごしごししながら最終兵器は起きてきた。

こいつも出会ったときと比べてずいぶんと人間らしくなったものだ。

「メイナは？」

「まだ寝てる。」

さつきから　ぐへへ　とか　あつ、そこだけはっ……！　とかわけの分からない事ばかり……」

「そ、そうか！

そりゃ困ったな！」

いやなんというか……。

最終兵器もそんな夢見るんだな……。

もしかしたらそんな夢じゃないかもしれないけどさ。
ね？

俺も男だからさ。

「俺の超音速魚雷くらいやがれこのやろあーっ！！

もう！また波動砲かよガッデム！！」

またゲームオーバーか。

テレビの上に置かれた時計によるとそろそろカレーの臭いが漂ってきてもおかしくない午後五時。

たっぷり三時間ゲーム三昧だったわけだ。

どーりで目が痛い。

いや気がつけよ俺って話なんだけどさ。

ピンボーン！

中が錆びてるのかどうかは知らないが少しこもった音を出すチャイム。

「はいはい」

台所で料理をしていたのであろうセズクがタオルで手を拭きながら玄関へと階段を降りていく。

ちなみにエプロンは『Milk』という文字と赤ちゃんが書かれた可愛い柄だった。

ピンクの中に浮かぶ肌色の赤ちゃんの白いMilk。

良い趣味してるぜあんちゃん。

そういえばこいつとはじめて出会ったときは殺されかけたんだっけな。

特殊部隊Velcaとかわけの分からない連中をシエラが皆殺しにして……。

外に出た瞬間モドキ達とバトルスタートだったよな。

まさかこんなことになるとは思ってもいなかった。

Velcaって発音も発音でアレだしな……。

今考えてみれば少し納得できるかもしれない。

連合郡の組織の中の一角だったのだろうと思う。

ここから始まった俺の中での生死日記はさまざまな危機を記している。

大艦隊のことやハイライト。

つい最近のことだとメガデスかな。

心の中の日記は思い出したくないことまでしっかりと綴っているものだ。

つまりこれからの事は無駄なことを考えてもはじまらない。

今から起こる出来事に身を任せようと思う。
それでいいだろ？

「波音、お友達が来て……」

「彼女です！」

「お友達が……！」

「か・の・じ・よ　です……！」

「お・と・も・だ・ち・が……！」

「か！の！じ！よ……！で……！す……！！！」

身を任せれねえー。

「誰だ？」

まあ聞くまでもないが」

ゲーム機の電源を切って正座する。

クーラーのリモコンで設定温度を少し下げ、
相対性理論の本を取り出した。

これで回避できるはずだ。

「通してください！」

「は、波音は僕がっ守るっ！」

「邪魔ですっ……！」

「痛い、痛い！」

顔だけは、顔だけはっ！」

騒がしいったらありやしない。

セズクもセズクで何で妨害してるんだか。

「どうして今日休んだんですか！」

どさっと地面に倒れたセズクを歯牙にもかけずに

外の暑さとセズクとの大乱闘に勝利を収めたアシルが頬を火照らせ
むっとした顔で入ってきた。

「いや……だってほら。

光の速度はすごいっていうじゃん？

相対性理論だよ。

地球を一秒間で七周半するやつ」

「何言ってるんですか」

「結論から言えば今日はさ。

ほら。

空が綺麗だしさ」

「曇りですよ、曇り！」

……なんだと？

いつの間にやら空は曇りになっていた、この裏切り者め！
なんでだよ、朝見たときは晴れだったじゃんよー。

「……とにかくですよ。

今日のプリントです……はい。

それと教材、ノート、テスト!」

次から次へとアリの薄い鞆から出てくる数々の物。
その中で学生が最も聞きたくないものも入っていた。

「……テスト?」

テストとか……嫌すぎるなあ。

「別にやらなくてもいいよな?」

「駄目です」

はいしません。

力強く押し切られてしまいました。

「えっと……飲み物とかは……」

いつの間に復活を遂げたのかピンクのエプロンに包まれながらドアの所にセズクが突っ立っていた。

まだいたのか、セズク。

別にいても良いけど何かあったら俺を助けてくれ。

「いらっしゃーい!」

シエラは母に対して葡萄の柄のパジャマを着たメイナが口に歯ブラシを押し込んで顔を出した。
しっかりと寝癖が記録されている。

「あ、メイナちゃん。
お邪魔してるよー」

にっこり笑顔でメイナと談笑するアリル。
ちよっとすいません、何で俺にしゃべるときだけ丁寧語なんですか。
メイナが消え、セズクが再び料理に戻った瞬間

「はい、五教科のノートです。
波音君の分も全部私が取ってきました。
こんなもんですかね……」

俺の前にアリルの細い腕に支えられた大量の教材がどさっと積み
た。

一山築いた教材から崩さないように慎重に数学のノートを引っ張り
出し適当にパラパラとめくる。

一言で評価するとキレイにビシッとまとまったノートだった。
黒板を写しただけでなく解き方やポイントまでがびっしりと書き込
まれている。

「大変だったんですからね！
ちゃんとコレを見て明日はぼっちりの状態で学校に来てください。
でないと私の努力が無駄になってしまいます。
お願いしますね」

えっ……うん、いや……あの……えっ？
えっ？

「いやこれ渡されても俺わかるわけ……」

「全然分らない！」

そうお困りのあなたにこの現役女子高生が付きっ切りでお教えします。

今ならたったの0円！、0円でお買い得です！」

いやただほど安いものはうんぬんかんぬん。

急に何を言い出したんだかア Ril さん。

大丈夫なのか？

手を叩いて必死に叩き売りの何かのまねをする。

大丈夫なのか？二回言っただけ。

「い……知らないんですか？」

あーなるほど。

俺に付きっ切りで勉強を教えたいわけだ。
なるほどなるほど。

でも俺勉強したくない件。

「とりあえず一つください」

「五千二百円です」

ほらただより高いものはうんぬんかんぬん。
結局金取るのな。

しかも高い。

ゲーム一つが新品で買える。

「じゃあいいりません」

妥当だろ。

ちなみにこの会話俺はずっと正座で教材の山に囲まれている中
しているわけだが……。

今にもぐらぐらと崩れそうで怖い。

「今なら百%OFFです」

どこの押し売り業者だお前は。

何か損をした感じがさいやめないじゃねえか。

まあもらって損はないわけだからもらっておくことにする。

「じゃあもらいます」

「お買い上げありがとうございます。」

じゃあ勉強はじめましょうか」

うう……嫌だなあ勉強。

「よかったです……。」

「いりませんとか言われたら……」

ぼそっと小さい声で何かを言ったように思えたが
数学のノートに気を裂いていたおかげで聞えなかった。

「え？」

「何か言った？」

「えっ!？」

「い、いや……さ、勉強はじめますよ!」

なんか真っ赤になってしまった。

多分さっきの押し売り業者の奴が恥ずかしくなってきたんだろうな。いじわるして「いりません」とか言ってみればよかった。惜しいことした。

少し後悔している俺を取り残し教科書などを開け始める金髪少女。

「さあ、さくさく進みますよ！
教科書を開いてください」

なんとかしてここでやめさせなければ……。
ああなんでそんなに目がキラキラしてるんだ。
そこまで俺に勉強を教えることに使命感を持たなくとも……。

「えーと先生。
教科書はあるんですけど家に忘れました」

「ここ波音君の家じゃないですか」

「で、でも教科書……」 「取って来い」 「ええっー！」
もうやだ怖いこの娘。

「はあ……ドンだけ勉強したくないんですか……。
仕方ないですね……」

おっ効果あったか？

「私の教科書を貸しますよ。
四冊持ってますからね。
結構これだけあると忘れることなんて出来ないですよ」

「なんでそんなに」という俺の小さなツツコミはアリの教科書を
開く音に一蹴され
目の前に詰められ大量の崩れかかっている山をしげしげと眺める。
これを靴の中に入れていたアリルって……。
すごい筋肉なのかそれとも……。

「さ、はじめますよ」

ああ……誰か助けてくれよ……。
割とまじめに俺死ぬかもしれない。
メガデスなんて目じゃないよ……。

T h i s s t o r y c o n t

i n u e s .

追憶（後書き）

すいませんお待たせしました。

短編なぞで我慢させてしまいましてすいません（何

とりあえず焼きあがりほかほかなので

どうぞ入れたてを・・・

読んでいただきありがとうございます。

壁蒸発

「次は古典ですよ！」

さあ文法の教科書を開いてくださいっ！」

も……う……やだ……。

涙腺緩みそう。

「二時間ぶっ続けじゃないか！」

少し休憩くださいよ。

頼むこの通り！

眠たいしさ……」

キラーンと顎に指を当ててアリルの目を見る。

……。

「どの通りですか……」

アリルはやれやれと呆れたように息を吐き出した後

「む………」

じつと何かを考えるかのようにしばらく俺の顔と教科書との間を目線を往復させた。

ついでに言う俺は今半端じゃないぐらいに眠いのだ。

二〇一二が今ココで起ころうと眠るぐらいの自信はある。

「……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………分かりました。

仕方ないですね……………」

ほっと頬の筋肉が緩み自然と笑顔になるのが自分でも分かった。
勉強中の冷たい全身の毛穴から入ってくる空気が一気にほわんと和やかな空気に変わるのを感じる。
春は良いものである。
のそつと立ち上がり静かにベットにダイブする。

「また二十分ほどたったたら始めますからね。
分かりましたか？」

「んー」

生返事を返してちらっとアリルを見ると机の上においてある目覚まし時計をいじりはじめた。
天井の模様をぼーっと眺めどうやっても勝てない眠気に身を任せることにする。
そしてふとんはすばらしい。
とにかくこのバカ強い眠気からおさらばしたくてたまらない。

—————そう思って寝たのが十五分前。
目を覚ましてからなんだこれは。

「おはよう、波音君」

ああおはよう、なんですかこれ。

こう……初めてシエラと会話を交わしたのと同じ状況なわけだが、分かりますか？

この寝ている俺の上にア ril さんがいる状況なんですよ、ええ。しかも顔が近い。

「何？」

何が始まるんです？」

思わず敬語になってしまふ俺を前に少し頬を赤らめている彼女は答えた。

「何って……」

普通にいちやつき……的な？」

だが少し待って欲しい。

俺にも心の準備って物があるのだ。

仮にも男である俺が女のア ril 相手にココまでしてやられるとは思ってもいなかった。

普通は逆だろ、展開的に。

「あまりにも波音君の寝顔が……可愛かったので……。

つい……てへ☆」

てへ☆じゃない。

「女顔とかそういう俺の顔の悪口はそこまでだ。それ以上言うと怒るぞ。」

結構気にしてるんだからなこの顔」

「悪口じゃないです。

褒めているんですよ？

じゃなければ波音君のこと好きになりませんし……」

頬に息がかかるほど近い距離にいながらふふっと微笑む。

こんなに近くにいられては寝起きの頭でも動悸が高まるに決まっている。

心拍数がだんだんと上昇していく。

それと同時に頭に血が登っていくのがわかった。

「何赤くなってるんですか？」

「い、いや……」

思わず目を逸らす。

近いからだっての。

完璧に主導権を握られているなあ。

こうやって実況してるってことは心の奥では結構冷静だというのに。

「波音君……」

急に顔が近くなる。

ただでさえ少ない距離がさらに近くなる。

うああやばい。

冷静が保てない。

頭が熱で爆発しそうだ。

そしてお約束通りドアが開くのだった。

GJというべきか死ねというべきか。

「波音……ごはん……!？」

はっとした。

びしびしと伝わってくる殺気。

――まずい。

「シ、シエラ!？」

ドアを開けたのはシエラで、今彼女は半泣きだった。
目に液体が少しずつだがたまっている。
白い頬に赤みが差して

「波音のバカ!」

と俺のすぐ隣の壁が蒸発する。
頬を熱い塊がかすめる。

「ッ!？」

トロリと血が服に流れ赤いしみを転々と広げていく。

「はぁ……はぁ……」

シエラの右腕が砲から普通の手に変わる。
それでもなお右手からは蒸気が立ち昇っている。

「波音君!？」

シエラちゃん……あなた一体……」

パニックになったアリルをよそ目に俺を射る冷たい殺気。

「アリルちゃん。

僕前々から言いたいことがあったんだ。

ずっと我慢してたんだけど今言うね？」

目の涙をぬぐい赤紫の瞳が俺を逸れアリルを貫いた。

「お前、大ッ嫌い」

再び空気が凍った。

アレか。

これが修羅場ってやつか。

今にも目から零れ落ちそうなぐらいに涙をこらえた最終兵器は今度
は左腕を銃に変えていく。

待て。

殺す気なのか？

「そんなこと言われても……。

現に私は波音君の彼女です。

嫌いとか言われたところでその気持ちが変わることはありません」

昼ドラ的展開に一番ついていけないのは多分俺。

「詩乃からは『嫉妬』とかいいう感情だと教えられた。

僕は波音の横にいることが出来て。

それでいて……。

それが嫉ましくて仕方がない」

一粒の涙が霧散した。

「何？」

「何があっ……？」

騒ぎを聞きつけてメイナとセズクがドアを壊して入ってきた。
家を大事にしろお前ら。

そして最終兵器をみて唾然とする。
だって泣いているんですもの。

「シエラちゃん……。」

「ゴメン……そして……」

アリルはシエラの近くに歩いて行って

「ふえ！？」

みんなの前で思いっきりシエラを抱きしめた。

「な——！？」

ココでまさかの展開に声が出ない俺達。

レズみたいなのを期待していた俺は死んだほうが良いかもしれない。

「嫉妬してるシエラちゃんかわいいね〜！」

「えっ……あの……。」

「アリルちゃん？」

ちなみにアリルはかなり身長がある。

シエラは一五二センチと小柄なのだがアリルは一六二センチぐらいあるのだ。

アリルの胸に必然的にダイブした形になるシエラ。

現実には胸からシエラにダイブしたわけなのだがちょっと自分でも何言ってるのかわからなくなってきた。

「あのー……放してくれないかな？」

「可愛いねー、いつも学校ではおとなしくしてるし家ではぶっきらぼうで嫉妬してる姿なんて見てなかったからわかんなかったけど！」

シエラちゃん結構可愛いところあるじゃない？」

さばさばしてるな。

昼ドラはもっとうしろドロドロしてるワケだが

俺はこんな感じでさばさばしてもらったほうが嬉しい。

さばさば、ドロドロ。

小学生の理科で習ったマグマみたいな言い方だな。

「アリルちゃん？」

あの……もうそろそろ放してくれないかな……？」

モゴモゴと口ごもりながら離れようとするシエラにアリルはやさしくそっと話しかける。

「ごめんね、シエラちゃん。

私あなたの気持ちなんて全然知らなくて……。

本当にごめんね」

駄目だ、俺。

現実についていけない。

気持ちも何もシエラは感情を普段出さないからな。

そりゃ分からないでしょうな。

とにかくおさまったようでよかった。

シエラが泣くところなんて激レアものだったしこんな平和に終わるなんて願ったり叶ったりだ。

「シエラちゃんが家にいるときは波音君にベタベタしたらいいじゃない？」

その代わり学校とかでは私がベタベタするね？」

俺リア充だなあ。

二股とか最低だな。

そして本当にみなさんすいません。

俺最低のリア充二股男です。

幸せの絶頂期のようです。

「？」

別にいい、大丈夫。

泣いて何かすっきりしたから」

二股終了のお知らせ。

残念の極み。

男の夢はこうして一瞬で散りゆく運命だ。

「えっ？」

ほ、本当ですか？」

「うん。」

何かすっきりした。

すつきりした」

強調するな。

「私殺されるかと思っちゃった。

よかったー……私今生きてる。

それにシエラちゃん可愛かった」

「う、うるさい！

それ以上言うなっ！」

びっくりするぐらい二人が仲良くなった。

ア ril にからかわれてむっとしながらもまんざら悪い気はしないの
だろう。

平和な証拠なのかもしれない。

「波音……ごめん。

痛かったよな？」

ボーっとベットに座って壁の穴をのぞいている俺の顔をシエラの片
手が撫でる。

頬の傷をゆっくりと舐めるように指先の緑の光で消していく。

正直痛かった。

その光景を見ていたア ril ははっとしたように壁の穴とシエラを見
比べる。

「えーと……？」

「……あ……ちょっと用事を………」

気の抜けたような声を発してシエラが部屋の外に逃げようとしたのを
アリルががちりと捕まえた。

「波音君、ちょっと教えてください。」

シエラちゃんは一体何者なんですか？」

俺達全員に大きな動揺が走った。

ぐらっと足元が崩れたような感覚に陥り目をつぶる。

背中から汗が噴出す。

何でその可能性を示唆しなかったのか。

普通はそうやって疑問を持つに決まっているのに――！

「人間じゃ……ないですよね？」

だってこんな風に壁を……」

文字通り蒸発した壁をゆっくりと指差す。

「壊せるなんて人間じゃないじゃないですか？」

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

壁蒸発（後書き）

出来立てほかほかをお届けいたします。
今日もここまで読んでいただき
ありがとうございました。

感謝の雨です。

死鳥

「ねえ？

波音君？」

「ア、ア ril、OK、分かった。

教える、教えるからその拳降ろしてくれ！」

俺の血がついたままのベッドからよっこらせと飛び降りる。

ジャンプ、足を挫いた。

畜生なんて今日は厄日だ。

がちり掴まれているシエラと固まったままのメイナ、セズクの二名も座らせポツリと話し始める。

挫いた足はじわじわ痛むが気にするほどのものでもないので無視一色だ。

「……………」

話づらいなあ。

空気が硬いというか。

「どうぞ、話して下さい」

ちょっと困った顔のア rilに促される。

話さないという選択肢はないのだろうか。

一分ほどのだんまりの後意を決して口を開いた。

「シエラは……いや、F・Dは………」

ごくつと唾を飲んだ。

いずれは話さなければならぬとは思っていたが、まさかこんな形で教えることになるとは……な。

よし、言うぞ。

「最終へ……」

床が揺れた。

「じ、地震……?」

いや……違う。

エネルギー衝撃波。

何か大きな爆発が起こったのか……?

再び床が揺れたかと思うと窓が割れガラスが飛び散る。

さっとセズクが俺にかぶさって盾になってくれた。

ありがとう、でもお礼は言わないぞ。

まあおかげで無事だったが一体何が……?

「な、何!？」

くじいた足の機嫌を損ねないように立ち上がり

ガラスが綺麗に無くなった窓から外を注視すると大量の爆撃機が空を覆っていた。

夜の薄闇の中にかすかに、五センチほどの大きさにしか見えないがその指先ほどの大きさの飛行機から

大量のさらに小さなものがばら撒かれているのはかすかに見て取れた。

今俺達がいる街は——空襲されているのだ。

それも『連合郡本部』がある国にもかかわらず……だ。

「帝国郡……？」

俺のすぐ隣でその光景を見ていたシエラが歯と歯の間から搾り出した声が爆発音にかき消される。
強烈な閃光が夜の街を浮かび上がらせ街が燃えていく。

「波音君……怖いです……」

ぎゅっと手を掴まれた。

いつもなら胸がドッキーンとする所だがあいにく今はそんな暇ではない。

「何でこの街が爆撃されているんだ？
民間人しかいないはずだろ……？」

のどがからからに渴いたようにうなりながらセズクが爆発に目を細める。

一体どうということなんだ？

「それにもう帝国郡には爆撃することが出来る大型機は残っていないはずだ。」

この二人のおかげで連勝中とは言えここまで帝国郡の機体が入り込むなんて不可能に近い」

「とにかく逃げないと！」

「ちょっと帝国郡に連絡を取ってみる！
シエラ、メイナ！

波音とあー、お友達をよろしく頼む！」

セズクはそう叫ぶと天井を突き破って外へと飛び出していった。
もうちょつと普通の出方は出来ないのか？

「彼女ですっ！！」

お前も反応せんでいいっ！

また爆発の火が上がる。

夜の闇の中ゆっくり、だが確実に街を蝕む赤。
その赤に浮かぶ黒の死鳥。

「アリル……大丈夫か？」

俺の手を掴んだしなやかで弱々しい手が震えていることに今更ながら気がついた俺は
自分の鈍さに内心舌打ちした。
なんて鈍いんだ俺は。

「怖い……です」

俺も十分に怖いわ！

——とか言えるわけもなく黙り込んでしまう。
逃げるべきなんだよな……。

この家上空に来るまでスピードから見たら——大体五分といったところか。

「波音！いる？」

考え事を中断して窓の外の中から大声に耳をすます。
この声は……

「綾か!？」

窓から身を乗り出して姿を確認する。

「久しぶりすぎる出番とか言う文句は後にしておく!
早く逃げて!

この辺にももう少しであの爆撃機——『B68』が来る!」

『B68』はエンジンを十二発装備している超大型爆撃機の事だ。
全長八十メートル、全幅百二十メートル、全高二十五メートルとい
う化け物爆撃機だ。
それがこんなド田舎に……?」

「分かった! ありがとう!」

とりあえず綾は無事だったか。

仁、詩乃は大丈夫だろうか。

綾の乗ったヘリが消えた空から遠くへ視点をスライドさせる。

無事な鬼灯財閥のタワーを見つけ少し安堵のため息を漏らしてしま
った。

あそこまではまだ火の手は伸びていないようだ。

それにあのビル……かなりの鋼鉄が使われているからひよっとした
ら安全かもしれない。

鬼灯のおっさんの別荘の城に避難するのも考えたがいかなせん遠す
ぎる。

……よし。

「アリル、こっちだ!」

「えっ!？」

あ、はいっ!！」

ぎゅっと強く離さないように手を握って外へと転がり出る。
日ごろからセズクが綺麗にしてくれていた廊下に障害物は無く
十秒足らずで外に出ることが出来た。
だが……

「シエラ!メイナ!！」

あの二人どこに行きやがったんだ。
周りを見渡した瞬間風圧が空気を揺らした。

「メイナ、どこに行ってたんだ!」

「ごめん、いま見て来たんだけど……」

見てきた?

「何を?」

「あの大型機を!」

風が土ぼこりを撒き散らし地面に食い込むようにしなやかな四肢が
着陸する。

背中の翼がすうっと消え風が徐々におさまる。

「シエラとセズクは?」

「帝国郡本部に今頃は着いてるか。」

私はあの大型機の写真を撮ってきてたの」

「今、メイナちゃん空から……」

ああ忘れてた。

説明してないよなそういえば。

「ア ril ちゃんそれも後で説明するから！
ひとまず私に？まって二人とも！」

ふと疑問に思ったんだがこれだけ空襲を受けているのにサイレン一つならないのはいったい……。

ここが空襲を受ける事態なんて予期していないからサイレン事態を取り付けていないのか？

「どこに行くんだ？」

「ア ril ちゃんは家に返すわ。
地下にシェルターがあるらしいし」

まじすか。
すげええ。

「あるの？」

「あります」

「波音は帝国郡本部に連れて行く。
さ、つかまって！」

メイナの出した手におずおずとつかまったアリルは怯えのかかった瞳で俺を見た。

「大丈夫だから」

声を出さずに目で返事する。

爆撃機の鼓膜を突き破るようなエンジン音が皮膚を突き破って体を振動させた。

ヒューと落ちる音そのものが焦りを刺激する。

黒い一抱えほどの円柱が家の隣の駐車場に食い込んだかと思うと火柱が空へと吹き上がった。

秒速二百メートルの爆風が車をいとも簡単に吹き飛ばし電柱を捻じ曲げる。

人一人ぐらいの大きさのコンクリート片が俺の家を突き破り車が鉄を撒き散らしながら横転する。

「い、家が……」

「じゃ、行くよ！」

俺達三人を透明な膜が包み直後俺達は雲の上にいた。

今まで俺達がいたところにトラックが突っ込むのがちらっと見えた。俺達のさらに上を飛行する十二発ものエンジンをつけた爆撃機『B68』が死を振りまいている。

さらに上昇したメイナは『B68』をもろともせずにつっこみさらに上へ上へと上昇する。

メイナの風に煽られ編隊を崩した爆撃機同士がぶつかり黒煙を吐いて地へと堕ちていく。

「すごい……」

詠嘆なのか感動なのかアリルが小さく呟く。

その間にもメイナは空気を切り裂きあつという間にア ril 宅にたどり着いた。

周りの森にいくつか爆弾が着弾したようだが豪邸は無傷だ。

第一波がすぎた直後のようでマダムがおろおろしながら玄関で指をくわえていた。

あたふたしている。

ア ril のことが心配で心配で仕方がないようだ。

助けに行くにも車は混乱に巻き込まれるし、歩いていったら逆に……と考えているのだろう。

「マダム！」

俺が呼びかけるときよろきよろと辺りを見渡した。

「波音ちゃん！？

どこにいるの！？」

「上です、上！」

「波音ちゃん！

ああア ril まで、よかったわあ〜」

風を伴いながら現れた俺達に驚くことなくダッシュでかけてきてア ril に抱きつき次に俺に抱きつく。

ちよっと恥ずかしい。

でもそんなこと感じている場合ではない。

「マダム、ア ril をお願いします。

シェルターがあるとか……。

俺は……少しやるべきことがあるので……」

また重低音が地平線彼方から響き死鳥が列をなしてやってくるのが炎の中見えた。

爆撃の第二波だ。

死鳥の通り過ぎた後は炎が蔓延する死の空間となっているようだ。

「駄目よお！

今戻ったら絶対に殺されるわ！？

一緒にシエルターにいるべきよ！」

必死に俺の腕を掴んで離そうとしないマダム。

マダムの手に俺の手を重ねて

「大丈夫です、マダム。

この音を聞いてください。

敵の第二波です。

早く隠れてください、俺のことは心配要りません。

大丈夫ですから」

死の息吹がこだまし不安に押しつぶれそうになった脳がかろうじて出した言葉だった。

俺も一緒にシエルターにいたい。

このまま静かに誰にも話しかけることなく静かにしていきたい。

どうしてこんな目の前で街が碎けていくのを見なきゃならないんだ。

でも……今俺が出来ること。

帝国郡本部に行って何が起きるのかは分からないが呼ばれている。

——行くしかない。

マダムの腕を振り払いダッシュでメイナの元へと戻る。

「波音君！」

アリの静止の声を無視してメイナの手につかまる。
にこっと笑顔を返した後一気に空へと飛び立った。

「とりあえずおっさんの安否だけ確かめないと。
メイナ、ビルに寄れるか？」

小指の指先よりも小さくなった二つの人影を視界から消し去り夜の
闇の赤い火を見つめる。

「全然かまわないけど……。
すぐ帰ってきてよね？」

こんなところで死ぬるわけがない。
俺はまだ何もしてないからな。

「あのビルだ。
分かるだろ？」

「あれで良いんだね？
今降りるよ」

ビルのヘリポートに勢いよく着地した後走り出してくだりの階段の
ドアをこじ開ける。

仁もいてくれると良いんだが……。

ues.

This
story
contin

死鳥（後書き）

更新完了！

コレより帰還するっ。

イミフですね、すいません。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

物語もコレで半分ぐらい。

やっそこさです。

どうか

なげえよ、カス、死ね

などと思わずに最後までお付き合いくださると・・・
嬉しいです。

ソレ

「おい、おっさん！

いるのか！

おいっ！！」

電気の消えた暗い廊下を大声を上げて突き進む。

非常用のハッチを開き中に入っていた自動拳銃の冷たいグリップを握る。

さっきまで駆けていた足を緩めゆっくりとした気配を消す歩き方に変える。

静かにスライドを引き、引き金を引くだけで弾が発射される状態にもっていった後

安全装置をかけ、両腕でしっかり拳銃を支え前を見渡す。

なんだ、この空気は。

某ゾンビゲームのような緊張感が充滿している。

夏だというのに冷たい空気が身を凍えさせ嫌な空気がどよんど漂ってくる。

頭の中にこのビル地図を思い浮かべ五十二階から五十一階へ降りる階段にすら

一段一段警戒態勢を維持してして降りる。

たしか鬼灯のおっさんのオフィスが四十七階にあったはずだ。

そこを確認してから他の階を見てみることにしよう。

五十……四十九……四十八……そして四十七階の踊り場を踏んだ。

そこだけは明らかに他の階と空気が違っている。

このビルのいびつな空気の原因は明らかにこの階からだということ
が分かるぐらいの濃度。

床に残っている謎の穴。

壁にべったりと付着しているのは……血？
何か重いものを引きずったような傷跡がゆっくりと奥へと続いている。

鼻をつんと突く硝煙と肉が焦げる臭い……。

蛍光灯が割れて青白い火花が散っていた。

ひび割れた窓の外から火の光が不気味に廊下を照らしている。

ひしゃげた鉄の壁を眺め安全装置を解除した拳銃のグリップを握る手に自然と力がこもる。

壁などに集中していたせいか浪漫になっていた床への注意の隙を指摘するように足が何かにぶつかった。

「っ!？」

人が倒れている。

「大丈夫か!？」

うつぶせになっている男のしっかりとした身体を仰向けにする。そしてびっくりして仰け反った。

砕けた頭蓋からは脳がはみ出て腹からはピンクとも紫とも似つかわしくない色の臓器がこぼれていた。

冷静になるんだ俺。

心臓がキリキリと痛むぐらいに拍動している。

顔は……おっさんじゃないな。

この白衣は研究部のものだろう。

『鬼灯生命科学研究所第二課』

たしか遺伝子や細胞の組み換えをやっている部門だったはずだ。研究室なども確かこの四十七階にある。

成仏してくださいよーと手を合わせ拝み倒した後さくさくとそこを立ち去ることにした。

メイナもつれてくればよかった、うえーん。

――怖すぎる。

脇の下や額やいろんなところに冷や汗をかきながらようやくおっさんのオフィスにたどり着いた。

ヒビの入った液晶のPCだけが起動音を響かせ青白い光を部屋全体に広げている。

窓ガラスは割れて戸棚は散らばり椅子の木は散らばり台風でも来たのかという散らかりようだ。

電気をつけるため壁のスイッチに手を伸ばしONにする。

しかし電気の光は部屋を照らさず散らばっているガラスから推測するに蛍光灯は割れているようだ。

舌打ちして部屋を出ようとしたが青白い光を放っているPCに気を取られてしまった。

画面に『本日のだいあり☆』と可愛く書いてあるからだ。

リボンマークがついている場所だけを掻い摘んで読んで見ることにする。

別にばれないよな？

『第二期 一九九六年五月三一日』

今日娘が生まれた。

名は昔から決めていた詩乃にする。

ナリサ（おっさんの奥さん。詩乃を守るために犠牲となり死んでいる）は

穂波がいいというがそれほど良い名前じゃないと思った』

いや普通に良い名前だろおっさん。

『第二期 一九九七年四月二十日』

立った！娘が立った！

おまけに「パパ」と呼んでくれた！

なんだ、めっちゃ嬉しいではないか！』

親バカ日記か。

ホイールを回しずーっと記事一覧を見ていく。

第二期二〇一〇年十二月二十九日。

なぜかこの記事だけ赤文字で日付が記入されていた。
俺の十四歳の誕生日だ。

クリックで表示する。

『第二期 二〇一〇年十二月二十九日』

とうとう私の発掘研究班がとんでもない物を発見した。

地下二〇〇〇メートルの巨大遺跡群だ。

コレまでに類をみない大きさ、形をしている！

興奮で眠れそうにない。

さっそく探索を開始する』

『第二期 二〇一〇年十二月二十九日 Vol.2』

やった！

とうとう発見したぞ！

思ったとおりだ！！

とりあえず落ち着くためにコーヒーを一杯飲む。

童話『騎士団の栄光』に書かれた二つ目の死だと思われる。
あーもうだめ神様』

テンション高いな、おっさん。

次の記事は二日空いて正月の記事になっていた。
毎日つけていたのにここでちょっとサボってしまったようだ。

『第二期 二〇一〇年一月一日』

先日遺跡で発掘した二つ目の死を帝国郡本部へ送りつけた。

バーフォードのやつ喜ぶだろうな。

起動さえしてくれれば我が帝国郡の武器として常に勝利に導いてくれるに違いない』

二つ目の死についての記事二枚目か。

おそらく二つ目の死というのはT・Dのことだろう。

要約するとおっさんがT・Dを発見して帝国郡本部へと送ったということだ。

もっとワイルドに要約すると

「おおっとT・Dじゃねえか、ふへへへ。

バーフォード坊やに送りつけてやるぜ喜べ、このう〇こ野郎」
といった所か。

俺もテンション高いな。

『第二期 二〇一〇年一月二日』

二つ目の死が起動しない。

なぜだ、なぜだ、なぜだ』

二行でこの記事は終了していた。

そこから一ヶ月はずっと愚痴らしい愚痴。

会社の経営がうまくいかないとか、嫁がうるせーとか。

なかばどうでもいい気持ちで一つ戻り記事一覧上でホイールで下へ

下へと向かう。
再び赤文字の記事を発見。

『第二期二〇一〇年 十一月十四日』

——気になる。

クリックして開こうとマウスのカーソルを動かしたその時画面に赤い液体が付着した。

手を伸ばし、指で掬い取る。

「……血？」

指についたそれに？を浮かべながら成分を分析していると今度はボタボタと

音が出るほどに大量の赤い液体がPC液晶上に水溜りを作った。

指から視線を次第に天井に向ける。

右手は拳銃にすべり銃口と視線をリンクさせつつ一気に天井を威嚇した。

銀色に光る意味の分からない物体がそこに鎮座していた。

銀のボディに強弱がある青い光が脈をうつように駆け巡っている。

そしてわずかな隙間から覗いているのは明らかに人のものと思える肉片……。

食ってる……？

「なっ……！？」

思考回路がめちゃくちゃに暴走し混乱の頭で引き金をしばった。

焼けた葉莢が排出されると同時に硝煙と鉛の塊が銃口から弾き飛ばされる。

空気に渦を作りながら銀色のソレに飛翔した弾は不可抗力によって

その軌道を捻じ曲げられた。

——イージス。

ソレの隣で火花をあげて霧散した銃弾を見た本能が告げている。
逃げろ。

そりゃそうだ敵うわけがない。

シエラ、メイナ、セズク、ハイライト、メガデースと

さまざまな困難をくぐってきた俺の本能にわざわざ言われなくても
逃げらーな。

ソレが天井から剥がれ机の上に落下した瞬間を見計らって足のバネ
を総動員して飛ぶ。

何とかドアを握り締めることに成功しそのまま部屋の外にでて鍵を
かけた。

部屋は鉄で覆われているためしばらく出てくることは出来ないだろ
う。

今のうちにメイナを呼びに戻ろう。

でなければ死ぬ、マジで。

アドレナリンが体中を巡っているのが分かる。

心臓の動悸を何とか押さえつけ走り出そうとした俺より二メートル
ほど離れた壁に赤いレーザーが突き刺さった。

壁が赤く溶けていて穴が開いている。

「んなアホなっ！」

ドアを吹き飛ばし俺に襲い掛かってくるソレ。

酸素不足にあえぐ肺に気を使う間も無くソレから離れようと必死こ
きながら銃を乱射する。

ぐしゅぐしゅとワケの分からない銀色の物体は銃弾をイージスでか
わした後変形しはじめた。

右足……左足……下半身。

上半身……右腕……左腕。

全部銀のまま体が次々と形作られていく。

中性的な顔に髪。

銀色に塗りこめられた顔に赤く光る目と口。

そこに立っていたのは俺そのものだった。

形態模写……？

意味の分からないことになってきた、なんで俺だけこんな目にあわなければならないんだよ！

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

ソレ（後書き）

どうもありがとうございます。

ちなみにですが今日は僕の誕生日です。

さあポイントを入れ r (#。Д。) 〓 ●●●● () () Д .
げふん

i l — l i | — ' — ● i l — l i
すいません、調子にのりました。

微笑

「Φ e i v θ e n s e」

ベルカ語の流暢な発音が鼓膜を叩く。

「消えろ」という意味。

何も考えずに本能が導き出した答えどおりに横に飛んで逃げた。

俺が今まで立ちすくんでいたところの床に大きな穴が開き、煙を纏う。

すかさず放った銃弾もソレ（以下ニセ）に届くことなく

すぐに弾道を曲げられ弾切れのカチツとしたむなしい音を響かせるのみの母機を残すのみとなった。

それをニセに投げつけ逃げる。

俺が投げた銃をキャッチしたニセはそれをしばらく弄くり回した後右手をまったく同じ銃に変えた。

銀色ということ意外は同じ。

もしかして俺いまあいつに武器の元を与えちゃった系？

パパパパパ……。

ニセから次々と銃弾が飛んできて滑り込んだ壁の角を次々と抉る。

こいつを武器庫なんかに放り込んだら……と思うとぞっとするぜ。

世にも恐ろしい文字通り人間兵器の出来上がりってわけだ。

笑い事じゃすまないことになるだろう。

いくら兵器と言えど弾切れとか起こさないのか？

昔、シエラは

「銃弾とかは撃てない……というか撃たないんだ。

だって自分の細胞を飛ばしてることになるんだから（うろ覚え）」

とか言ってたよな。

考えている間も鳴り続ける着弾の音にびびる。

これだけ大量の銃弾を撃ってるってことはそろそろ弾切れを起こしても……。

そう考え銃声が止んだ一瞬を見計らいちらっと顔を出してニセを偵察する。

ニセの足元にぐしゅぐしゅと水銀みたいなのが溜まっているのだろうじて見えた。

なるほどリサイクルというわけか。

ニセから撃ち出された銃弾がまたご主人様の元に帰っていつているわけだ。

再開した銃弾の雨が壁を削り取る嫌な気分を満喫しながらふと思う。それは反則だろ。

とにかくこのままじゃラチがあかない。

何かないかときよろきよろ見渡し、目に付いたモップを握り締める。よし、あれは人じゃない。

兵器だ。

銃声がまた止んだ。

冷や汗と浅い呼吸が止まらない体をニセの前に持って行き勢いよく振りかぶったモップを振り下ろした。

「Th H e s ẽ e s t ?」（バカか、お前）

振り下ろしたモップはニセのイージスによって空中で見えない手によって押し止められていた。

必然的に隙が出来る。

——殺される。

さっと冷えた頭にニセのニヤリと笑う顔（と言っても俺の顔）が浮かび上がる。

片腕をがちり掴まれた俺は投げられ舞い、六メートルほど先の壁

に叩きつけられていた。

鳩尾に鈍い衝撃が伝わり吐き気を催す。

痛みに喘ぐ俺を満足そうに見たニセ俺は再び右手の銃口を向けた。
苦しむ体に鞭打ち跳ね起きの勢いを借りて思いつき蹴りを入れた。
油断していたのかニセはイージスを張ることなくその身で蹴りを受け止める。

仰向けに倒れたニセはドアをぶっ飛ばし『第九一研究室』の闇に消えた。

「ShΩps」

なめんなよ、と一言呟いた俺は名誉の撤退。

逃げたんじゃない、撤退だ。

……ああ逃げるさ、何が悪い。

いきなり目の前に現れた兵器に勝てるか？

いや、勝てない。

限らない自問自答だがこの恐怖に打ち勝つための――っ！？

右腕がすごい力に引っ張られバランスを崩し倒れた。

まるで右腕が火で真っ赤になった鉄棒でめちゃくちゃに突付かれて
いるように熱い。

一体何が……と撃たれたのか。

ぬるっとした液体が泉のように溢れ床にどんどん広がっていく。

左腕を駆使してバランスを保って起立し、振り返る。

暗闇の中に浮かぶ二つの赤い光。

ニセの殺意を持った目。

「SⅢth.

(すまない、

Nbionne」

舐めたつもりはないんだが)

静かに流れ出るベルカ語が頬を撫でた。

壁を粉碎して出てきたってのか？

銀色のぐしゃぐしゃを足が取り込みながらニセがゆっくりと歩いてくる。

その左腕はロケット弾ポッドに変貌を遂げていた。

あの研究室ってロケット弾の開発場だったのか。

またしても自ら武器を与えたことになっちまった。

「EΓenΨd？」（終わりか？）

ダッシュで逃げ再び角に滑り込む。

壁という盾にまたしてもお世話になることになった俺の非力さをあざ笑うかのように廊下に響く声。

カッターシャツの袖を破り応急処置で右腕の銃創をしっかりと縛った。

「あう……」

弾は貫通せず、骨付近で止まっているようだ。

既にその皮膚がどす黒い。

激痛で少し声が漏れる。

血液も次々と漏れ命の元がこぼれる。

涙も少し漏れた。

体液を搾り取られている俺のすぐ横を四〇センチほどの棒がかすめ目の前の壁に突き刺さった。

ロケット弾……！？

頭にはじけた答えと答え合わせするようにロケット弾の爆風が出口を求め廊下を駆け巡った。

とっさの判断で研究室に逃げ込んだのは良いが極限まで精神と体は追い詰められていた。

床にへたりこんだ俺の前をさっきのロケット弾を構成していた細胞

がニセへと這って行く。

「W h e c y?」(どこに消えた)

ニセが呟き右腕から石らしきものを吐き出した。

おそらく爆発のときに銀のぐしゅぐしゅと一緒に取り込まれニセの体内に入ったのが放出されたのだろう。

銃弾も今のぐしゅぐしゅになりニセに戻っていくからニセは小さくならないのであって

そうでなければどんどん小さくなっていくはず。

おそらく質量保存の法則だ。

多分、多分だ。

視界にぼやけが入りはじめた。

とにかくこのまま鬼ごっこを続けるなら間違いなく俺が負ける。

今は何とかしてニセをぶち殺さないで。

でもどうやって……。

白い爆発が立て続けに起こり一つ隣の部屋が消失する。

「D o k i e n e t a?」(どこに行ったんだ)

スリガラスの向こうで影となったニセが右腕から大量の石をこぼしながらゆっくり歩いているのが見える。

この部屋に入られたら最後後ろは地上への扉、前はニセ。

前門の虎、後門の狼とはよく言ったものだ。

今までに二回ぐらい死の覚悟はしたものの今回ほど絶望したことはない。

この部屋は手榴弾の研究室で実物もいくつか置いてある。

あいつに殺されるぐらいなら自分で死ぬ。

そういう意味では最高の場所だ。

生きるための努力はした。

まるで神が自殺するために与えてくれたようなうってつけの場所である。

そろそろ死ぬことを許してくれても……。

「あっ……………」

そうか。

机の上の手榴弾を掴む。

そしてわざと大きな音をたて壁にもたれこんだ。

この音をあいつは間違いないと聞きつけココに来る。

良いことを思いついたのだ。

「ScЮga!」(そこか!)

目の前のドアが吹き飛んで壁に背を預けている俺を見つけたのだらう。

ニセ俺はけらけらと嬉しそうだ。

「Dotikλ?

(どうした?

Onegafenined?

もう鬼ごっこは終わりか?)

てめえがえらそうな口を叩けるのも今のうちだ。

「Xifenηeles.

(どうせ殺すんだろ。

YiesiBlinse」

ならそれでけえ方で俺を殺してく

れや)

ぎゅっと左の掌中のぬるくなった手榴弾を握る。

ニセは大胆に死の覚悟を決めたことに驚いたのか俺の目をじっと覗き込んできた。

にやっと笑い返し左腕を向ける。
俺は来るべき時の一瞬のために力を温存する。

「Z i a n i e n」（じゃあな）

ニセが笑いながら放った左腕のロケット弾が尾部から噴煙を上げ俺に向かってくる。

この一瞬を待っていた俺は足にすべての力をこめ瞬時に立ち上がりジャンプした。

爆風に体を弾かれ床に叩きつけられる。

想像を絶する痛みが体の節々を襲ったが俺の頬の筋肉は緩みっぱなしだった。

すべてはうまくいった。

ぼろ布のように動かなくなった俺を見て死んだと思ったのかニセが背を向けドアから出て行く。

さっきのロケット弾の細胞がその後を追いつニセの中に取り込まれた。

「E a n e」（終わりだ）

ソレを見た俺は静かに言い放った。

ぴたっと足を止めドアから出ようとしたニセがまだ生きている俺を見て嬉しそうに。

本当に嬉しそうに右腕の銃を向ける。

お前の命を奪えるのが楽しくて楽しくて仕方がないと言うように。

ニセの目を見据えたまま壁に背を預けた俺は見せ付けるように左手の中にあるピンを床に落とした。

これの先に着いていた爆発部は銀のぐしゅぐしゅに取り込まれニセの中。

「Z i a n i e n」

俺の体を映した二セの赤い目が見えない恐怖に閉ざされた直後、爆
発。
銀のかけらを散らした。

i
n
u
e
s.

T
h
i
s
s
t
o
r
y
c
o
n
t

微笑（後書き）

ありがとうございました。

波音ががんばりました。

とってもがんばりました。

拍手！

どうもヘタレという印象を与えがちでしたが
やるときはやる子でしたw

梨

銀のかけらとなったニセは次第に小さくなり――消えた。

それを見届けた後ずっと思考回路が途切れる。

体が安息を求めているようだった。

少しぐらい別に良いよな……。

心の中の小さなささやきに負けそうになったとき背後の壁、一つ向こうでまた爆発が起きたようだった。

まだまだ続くであろう爆撃の音。

このビルに何発かは爆弾が当たっているだろうがすべて装甲が跳ね返しているのか損傷は受けていないようだ。

防音効果などもかねているこのビルの中にと爆発音が子守唄のように聞えてくる。

次第に闇に沈む視界。

「波音！」

幻聴も聞えてきやがったか。

「しっかりして！ねえっ！！」

ほとんど感覚が残っていない頬をぺしぺしとはたかれた。

ぼやけた視界にうつすら見える赤紫の瞳。

メイナか。

今頃助けにきやがって……。

にやりと笑い返すつもりの筋肉がこわばった。

キラキラと輝く銀のアレは……。

メイナの後ろで散ったはずのニセが集まって――？

俺に気を取られて気がつかないのか、メイナは。

「あ……えっ……」

喉に力が入らない。

っていうか、駄目だ、眠い。

まぶたにトン単位の錘をつけられたようだ。

「メ……うし……」

くそっ！ 声が出ねェ！

ニセがにたーと嫌な笑いを含みながら右手の銃口をメイナに向けた。乾いた発砲音とともに巣穴から飛び出した龍はメイナの体細胞を切り裂く殺戮生物となりメイナを襲う。

ゼロ距離と言っても良い距離を駆けた龍は一瞬で勢いを失い白い硝烟を噴き上げる鉛に変わった。

その鉛をメイナの右人差し指と中指がはさんでいた。

龍から鉛になった哀れな物体を床に捨てざっと立ち上がる最終兵器は

「Z i Φ ψ p l e」（邪魔）

逃げようとしたニセの首筋を右手で掴んでいた。

そのまま右手の先に光を集中させる。

「S i e n p n i m i n」（久しぶりにつかうけどねえ）

メイナが微笑し次第に光がニセの体を浸食しはじめる。

「X m……！（ッ……！）

n i k e n ! ?」（そんなっ……！？）

ニセの齒の隙間からかすかに漏れた空気と言葉を最後に光がニセを包み込む。

雷のように光が消えたときニセはひとかけらも残さず分解されていた。

俺がこれだけ負傷して苦勞した相手を瞬殺。

初めからそうして欲しかった。

脳内に浮かぶメイナの姿が蜃気楼のように揺らぎ、崩れる。

暗い部屋の中網膜に残る光を最後に俺は意識を手放した。

「大丈夫……で……………?」

「分か……………!」

まだ……………は……………!」

「は……………ん!!」

目……………っ!!」

何だこの声。

俺は……………永久波音だ。

一六才大塔高校一年D組。

身長一七二センチ、体重五四……………だっけ? 忘れた。

突然だが体が重い。

トンからキロ単位になったまぶたをこじ開け太陽の刺すような光にまた目をつぶる。

窓から溢れる太陽光を伝に薄目で辺りの様子を伺った。

「あ、起きた？」

そんな言葉と一緒にぬっと目の前一杯を占めたのはセズクだった。

「……あ………」

憎まれ口をたたこうとしたものの肺から搾り出された空気は声帯を震わせることなく口から漏れた。

自分の衰退ぶりに逆にびっくりする。

「とりあえず二日間ぶっ続けで寝てたね。

おはよう、夕方だけど。

ここは帝国郡本部……つまりアフリカ」

アフリカ？

アフリカ大陸ってことか。

クーラーが効いているからか、南半球だから冬だからなのかは知らないが小奇麗にまとまった部屋は少し肌寒い。

「み……ず……水……くれ」

やっと出たかすれ声を聞き取ったセズクが水差しの水をコップに入れて持ってきてくれた。

右手で受け取ろうとしたがピクリとも動かない。

感覚からして包帯でぐるぐるに巻かれているようだ。

やっぱり重たい左手を差し出してコップを受け取り一気に水を体に流し込んだ。
っ!?

「げほっ……げほっ!!」

気管に入った。
むせた。

「急ぐからだよ……。
大丈夫かい？」

涙目になりながらコップに残った水を飲む。

「ふー……」

体中にみずみずしい……水だから当然だが水が行き渡る。
落ちていて状況を把握する。

上下ともパジャマ一枚……。

パンツもシャツも着てないじゃないか俺、やばいじゃん。

純白の布団の上で薄いピンクのパジャマを俺は着ているのだ。
それは良いとして窓の外に広がる大基地の方に目を奪われた。

ずらっと並ぶ戦闘機達。

広大な滑走路。

港に浮いている城のような戦艦、空母。

空を忙しそうに舞っているヘリコプター。

砂埃を上げながら進んでいる戦車。

「本当にここがアフリカ……なのか？
いったい何が？」

てか俺は何でココに？」

次々と飛び出す質問を笑顔で受け取り水差しに追加の水を入れ赤く熟したりんごを手に取り剥きながらセズクが答えた。

「覚えていないかい？」

E S S P X細胞の塊のヤツのこと」

ニセのことか。

「覚えてる、忘れるわけないだろ。

ってか知りたいことが多すぎる。

まずなんだったんだ、あいつは」

戦闘機のエンジンから発せられる轟音が病室内を揺るがした。

サイレンが鳴りスピーカーからベルカ語が流れている。

六時になったから総員飯だ！

そんな感じのことを言っているみたいだ。

「落ち着け。

答えはそう簡単に出るもんじゃない」

りんごを置いて俺の鼻をふにと押すセズクはにっこりと笑いながら手を拭いた。

りんごくれないの？

剥いたのに……くれないの？

「さっき言った通りさ。

E S S P X細胞——可変式鋼鉄細胞。

それが連合郡の奴らの爆撃の振動で……」

「ちょっと待った。」

やっぱりアレは連合郡の仕業なのか？」

セズクの説明をさえぎる形で質問を差し込んだ。

それに嫌な顔一つせず、いわなかったかな？と小さく呟いたセズクの口がりんごをかじった。

結局俺にはくれないのかりんご。

「そうだよ。」

あ、りんごおいしい。

……連合郡が自分の都市を爆撃した目的ははっきりしないがおそらく金だろう。

年々減らされる軍事費アップの要求のために国民の目を欺き予算を増やす算段のはずだ」

黒い小さな種粒を皿の上に吐き出し芯以外を失ったりりんごがゴミ箱に落ちていった。

なんという速さでりんごを食べるんだこいつは。

セズクは、再びナイフを手に取り今度は梨を手にとるとナイフの刃を器用に使いながら皮をめくっていく。

ある程度皮を剥いてしまうとそのまま梨に意識を集中させたまま口を開いた。

「帝国郡は爆撃機を持っていないんだよ。」

まあ持っていないとか持てない……とでも言うべきか。

あまりにも技術が足りないもんでね……。

っと話がそれたね。

それで爆撃の衝撃で戦闘意志が眠っていたESSPX細胞の破片を目覚めさせたんだ。

戦うためだけに生まれた細胞だからね。
そして――」

「そのESSPX細胞が俺を襲ったと。
なるほど理解した。

で、なんであいつが俺と同じ姿に形を変えたんだ？」

一番言いたかったところを言われたのか、少しげんなりしたセズクは梨を剥く手を止めた。
ナイフを静かに机の上に置き布巾で手についた汁を拭う。

「おそらく一番近くにいた有機生命体――つまり波音の姿を真似ただけだと思われるんだ。

仮に波音じゃなく、僕がいたら多分僕の姿になっていただろうね。
ちなみにあのESSPX細胞はシエラのなんだよ？
知ってた？」

りんごか梨食ってなくてよかった。
でなけりや盛大に布団の上にぶちまけている所だった。
窓の外ががやがやと外が騒がしくなり米粒よりも小さな軍服を着用した軍人が群れを成して歩いていた。
おそらく食堂で今日も忙しかったな――と語るんだろう。

「あれ？気がつかなかったのかい？」

よく思い出してみる。
シエラの鋼鉄の翼を。
青い線がどくんどくと……たしかにニセにもあったな、そんな青い線が。

「あー……」

「納得したかな？」

あのESSPX細胞はハイライトでシエラがリモコンで引きちぎられた部分を培養液に入れて保存していたものなんだ。本物のESSPX細胞が連合郡に渡ったりしたら最高にフェスティバルなことになるからね。

ジョンが鬼灯のおっさんに預けたんだ」

ジョン……。

多分俺はお前を少し嫌いになった。心の奥で。

「ソレが今回のあいつ……か」

目をつぶると思いつくニセの顔。

怖かったというよりも命を拭い去るという目的のためだけに動く殺戮兵器。

ばらばらになったとしても再び結合し戦う。キリのない永遠の戦いの火種。

「そう。」

まあとりあえず右腕の銃創。

肋骨二本にヒビ。

全身打撲。

しばらくゆっくりしておくんだね」

梨の音がしゃりつと病室に響いた。

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

梨（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

今回は語りが多かった気がします。

遅れましたが11月14日にポイント入れてくれた方ありがとうございました。
ございました。感謝の雨霰です。

やっぱり誕生日に贈り物をもらうと・・・う、嬉しいです。グスッ

はじけるドア、飛ぶPC

「で……」

「ん？」

「お前はいつまでここに居るつもりなわけ？」

「やだなあ、何言ってるんだい？」

マイハニーがいる限りここに……いるよ♪」

久々なせいかそれを聴いた瞬間背筋がぞつとした。

まあ今の状況を考えてみれば俺は相当ヤバイかもしれない。

飢えた狼の前に銀の皿に乗ってる肉状態だもんな。

大声出しても誰にも聞えそうにない場所だし……。

「いや……別にいなくていいから」

「え？」

「どうしてだい？」

その満面の笑みを浮かべた顔を横から思いつきりぶん殴ってやりた
い。

それだけでこりるヤツとは思えないがそうでもない気が晴れそ
うにない。

ただでさえ最近曇り勝ちな心だというのに。

「波音！？起きたのか！？」

心の天気予報、明日は雨の確率が高いですねーとか頭の中で考えていたら油圧駆動のドアが開き
久しぶりに見る我が親友、仁が立っていた。
あんまり久しぶりじゃないんだが丸二日寝ていた身には久しぶりに
違いなかった。
久しぶりじゃないんだが久しぶりなんだ。
例えるなら……昼寝していたら真夜中の十二時になっちまった……。
うん、そんな感覚である。

「仁！」

声を出して親友の安全を確かめなければ気がすまなかった。
よかった、生きていた。
よかった。
生きていた。
とにかくそれが嬉しかった。

「心配したぜ。」

シエラが俺を助けに来てくれたんだ。
親父は外国に出かけてたから大丈夫し。
家も燃えなかったし」

仁は俺のベッドの横にある椅子に座り片手に持っているPCを机の
上に置いた。

「足ついてるよな？」

これでついてなくて幽霊とかだったら俺死んじゃうぜ」

恐る恐る仁の足を見る。

なかったら肝潰すわ。

百パーセント肝潰す自信ある。

「もちろんついてるさ！

死にかけて身に堪える疑問だな、お互い」

面白くもない冗談にすら笑ってしまうほど安心していたのだろう。
なぜかツボに入り声を出して笑ってしまった。

「おお、起きてたか！」

またドアが開いて入ってきたのはおっさんとジョン。

「おっさん……ジョン……」

心配だったおっさんも生きていた。

ニセが起動するよりも早く逃げていたのだろう、きっと。

逃げたなら俺に電話してくれるとか何かしてくれればよかったんだ。
そうしたら俺は鬼灯財閥のビルになんか寄らないで――。

過ぎた事はもういいや。

とにかく生きていた。

今はそれが分かっただけでいい。

「波音、すまないな。

俺達の不注意な実験のせいでこんな傷を……」

開口一番にジョンからその言葉が出て、申し訳なさそうに頭を下げた。

おっさんも「すまんかった」と俺を見てうつむく。

一気にキナ臭くなった空気の居心地の悪いこと。

「いや、もう別にいいよ。

本当に気にしてないから。

ジョン、頭上げてよ。

おっさんもなんだよ水臭い」

空気を明るくしようと努めて出した明るい声が余計にむなしく病室を埋めた。

明るい声は天井に反射し、部屋の角で丸くなり消えた。

「すまなかった……。

本当に……」

「もういいよ、ジョン。

俺は本当に気にしてないから、ね？」

おっさんとジョンの二人は本当にすまなそうな顔をしていた。もういいって言ってるのに。

「そういえば、波音はあいつ倒したんだろう？

例の……」

険悪な空気に耐え切れなくなったのか仁があわてて話題を切り出した。

この空気にその話題は駄目だろ。そう思ったのだが

「そうらしいな」

案外おっさん達の顔がほころんできた。

「まさか普通の人間がESSPX細胞相手に勝つとはな。驚きだったよ、それに……」

私のビルも散々破壊してくれたようだしな。そういっておっさん達はにんまりと笑った。

「メイナだけどね、蒸発させたのは」

「それでも手榴弾で追い込んだのは波音だろう？流石だよ」

「僕の教え方がうまかったからだよね、きっと」

「多分お前は一番関係ないと思う。なあ、ジョン」

「あー、そうだな。」

「まずお前手榴弾の使い方教えてないだろう？」

「そういえば教えてもらったっけ。」

「セズクに武器の扱い方。」

「何から何まで手取り足取り。」

「明るくなった雰囲気はやはり良いものだ。」

「話が必然的に弾む。」

「心から笑った冗談もあった。」

「そんな時間だけは早く過ぎていくもの。」

「っと、おいジョン、時間のようだ」

急におっさんの腕時計がピーピー鳴き「またくる」といって二人は病室を飛び出していった。

ちゃっかりお菓子の袋詰めなんかおいて行ってる。

やるじゃん、おっさん達。

のんびりと時間が過ぎセズクも仁もお互いしゃべらず

本を読んだりPCをいじったりと自分の世界にこもり始めた。

何のためにいるんだか……と内心罵りながらも俺も袋詰めに空けるのに余念なし。

急に広くなったように見える病室が余計に虚しさを加速させた。

「仁……」

「どうした？」

沈黙に耐え切れなくなり俺から仁に話しかける。

ぼーっとしてセズクが梨を剥くのを見つめる。

「シエラとメイナは？」

「あの二人は今戦闘中だよ。

インド洋の連合郡機動隊と。

十二時間ほど前に行行ったから……そろそろ帰ってくるんじゃないか？

多分だけど」

「分かった」

欠伸をして起こしていた体をベッドに預ける。

窓際で鼻歌を歌いながら梨を剥いているセズク。

なにやらよく分からないハーモニーが頭蓋の中を震わせうとうと

眠気を誘う。

「そういえばセズクさんにお礼は言ったのか？」

眠気が吹っ飛んだ。

混乱が頭で革命を起こした。

一気に占領された。

「は？」

俺が？

何で？」

思わず怒りを孕んだ口調になってしまった。

そんなことは歯牙にもかけないという雰囲気 of セズクは

「仁、別にいいんだよ僕は。

とっても幸せな時間を過ごすことが出来たんだからさ♪」

戦闘機が空を飛ぶような爽快感溢れる言葉を発しやがった。

その戦闘機に撃墜された気分になった俺。

嫌な予感がする。

「セズクさんすげえんだぜ？」

お前の服を着替えさせたりタオルで体を拭いてあげてたり……」

期待を裏切らない答えが返ってきた。

目の前が真っ暗になった。

「他にもトイレとか……」

「あ~~~~~~~~!!!!!!
もういい!!!!分かった!!!!!!やめろ!!!!!!」

頭を抱えながら絶叫してしまった。

確かに自分の体から嫌な臭いはしない。

頭も痒くない。

服も上と下にパジャマが一枚きりってことは誰かに看病してもらっていたということ。

今考えてみれば当たり前のことだった。

ただ認めたくなかったって言うのもあることにはある。

つまり、うん。

そういうことだ。

俺は汚されちまったわけだ。

ごめんよ、アリル。

情けなくて涙が出そうになった。

「別に変なことはしていないから安心してね？」

無反応なのにそういうことしたって面白くないし。

僕は声を聞きたいからさ？」

声聞きたいとかそんなことはどうでもいい。

ってか濡れタオルで拭かれているのなら気がつくべきだろう。

無反応なのに——ってことは反応があったらやってたってことなのか？

なんなんだろう、この人。

見られたけどまだ穢れてはいなかったようだ。

よかった、こちらとてそれが心配で……。

今日はやたら安心する出来事が多い。

「ま、結論から言えば病人は休んどけってことだな」

「まともにすらなっぺねーよ。
しかも怪我だから病人じゃないし」

屁理屈だっぺ分かってるけどなんか反論してみた。

「いや、だっぺどな……」

「マイハニー、梨が剥けたよー」

お、その梨は俺にくれるために剥いていたのか。
反論の口を開く仁をさえぎる形で梨が登場した。
いやはやありがたい。

「いただきます」

渡されたひんやりしたフォークを梨の切り身に刺して口に運んだ。
口の中ではじける甘み、水分。
あ、普通においしいです。

「仁も食べれば？」

「じゃ、もらうとするか……」

うん……うまい」

「よな？」

「うまい、うまい」

おいおい次々と手を伸ばすなよー。

はははこいつめー……。
なんで二つ一気に頬張ってんだよ。
俺の分だったの、それは！

「僕が剥いたからおいしいんだよきつと」

「うるさい黙れ」

二日間何も食べていない胃が突然入ってきた食べ物にビックリしたのかキリキリ痛んだ。

思いのほか痛む胃から気を逸らそうと外の滑走路を眺めた。

とっぷりと日が暮れた中、青や赤の光が点々と宿っている滑走路は無骨な基地の唯一のオアシスのように見える。

そのオアシスに二つの彗星が目に残像を刻んだ。

青っぽい光――。

おそろくシエラとメイナだろう。

おかえりなさいってか。

案の定五分ほどしたらわいわいがやがやと外が騒がしくなった。

「と、とりあえず食事を……」

全部の梨を食べ終わり満足げにPCを眺めている仁の横顔をぼーっと眺める俺の耳に困惑した女の人の声が聞えてきた。

「かまわんと言っているだろう？」

「私もいい」

「しかし……」

なにやら言い争ってるな。

話し声が少しずつ、少しずつ大きくなっていく。

そしてぴたっと俺の病室の前まで来ると止まった。

「貴官たちは持ち場に戻れ。」

「ココから先の護衛はいらない」

口調からしてシエラだろう。

命令されたどやどやと大勢いたであろう人間の気配が少しずつ薄れる。

「シ、シエラから先に行ったら？」

「姉さん、ほら遠慮しないで。」

「どうぞ、ビッテ」

「そう？」

「じゃ遠慮なく……はっ！」

とっさの判断で身構えた。

そしてその判断は正解だったようだ。

プシュッと開くはずのドアがはじけ飛んで火花を上げながら病室内を暴れまわったからだ。

その被害を一番初めに受けたセズクはもろに顔面に直撃を食らった。次の被害者は仁のPCだ。

セズクから反射してきたドアはそれだけで軽量化されてはいるものの五キロほどある。

その突進をまともに受けたPCはくだけ散り仁の涙も一緒に散った。砕けた仁のPCは部品を撒き散らしながら部屋の隅へとドアと一緒に飛んで行く。

運動エネルギーをそこですべて使い切ったドアは大きくへこんだ体を壁に預けると動かなくなった。
大惨事だ。

「波音っ！」

よかった……。

あの時死んじゃったのかと……ばかり……」

飛び込んできたメイナに思いっきり抱きつかれた。
胸当たってる、おい、胸。

それはともかく仁に謝れ、お前は。

ドアの開け方を知らないのかお前ら三人は。

「お、俺の……PC……。

あ……あ……俺の……ははは……」

仁の涙が頬を伝っていた。

そりゃそうかショックだよな。

その姿を見たメイナは俺の耳元で

「仁、何で泣いてるの？」

小さくたずねた。

百人の人がいたら間違いなくみんな「お前のせいだ」と突っ込んだに違いない。

当の俺は呆れて声が出なかったわけだが。

それでも普通は気がつくよな。

鈍いのかアホなのかバカなのか一体どれなんだろうか。

「姉さんったら任務中もずっと。

ずうーつと『波音大丈夫かな?』と、そればかり。
疲れちゃってさ」

「もううんざり」と言いながらシエラがドアの無くなった扉枠に手をつき微笑んでいた。

「シエラ……」

これもまた久しぶりに声にしたせいかな変なざらつきが舌の上に残った。

あのESSPX細胞の主……。

「僕の細胞が迷惑かけたっぽいね。

ごめん」

「おいおい、お前もかよ……」

まったく……。

過ぎた事などどうでも良いというのに。

生きているだけで俺はありがたいってのに……。

This story continues.

はじけるドア、飛ぶPC（後書き）

ありがとうございました。

仁……。

そんな感じの話になってしまいましたね（（（ノ≧≡▽≧≡）ノ
まあそんな感じでまだ続きます↑

<http://ncode.syosetu.com/n2021p/>

この物語の中で波音の学校生活（？）という視点で新しく
ギャグ小説を書き始めました。

前にも一度upしたことがあると思いますが……。

そうです、しゃくでば！です。

本編中でできなかったあんなことやこんなこと。

シエラがまさかあんなことを……。

などと色々おかしいですがよろしかったらどうぞw

目は口ほどに物を言う

「レルバル少佐はこちらか？」

白い紙を持ちたつぷりとヒゲを蓄えたおっさん兵士が壊れたドアから静かに入ってきた。

見るからにの頑固親父だよ、この人。

超怖い顔をしているとだけ言っておこう。

「元帥がお呼びだ。

至急！」

俺の怪我など知らんとたかを括ったかのように言うおっさん兵士。

この状態でどうやって行けと。

頭いかれてんじゃないだろうか。

口には出さないけど心の中ではそう思っている。

「でもこの状態ですし……。

俺このまま行けって言われてもちょっと……。」

パジャマの裾を持ち上げて主張する。

「大丈夫だろう。

シエラ、メイナ、治してあげれないのか？」

推測で物事を進めないでください。

大丈夫だろうって……。

確かに治してもらえたら嬉しいんだが。

「んー私達の力を借りずに自分の力で治して欲しいんだけどね…」

「でもこのままじゃ動けんし…」

おっさん兵士が俺を盗み見た。

目は「怪我なんかしやがってこの糞ガキ」と。
目は口ほどに物を言う。

その諺どおり今俺はおっさん兵士の妬みを一身に受けている状態だ。
セズクが読んでいた本を閉じて目を閉じて考え……？
寝てないか？

「車で運べば？」

皆がうなって考える中でシエラが手を上げた。

「病室に入るか？」

そして廊下を走れるか？

却下だ」

あえなく仁に却下され、少しうなだれる。

だがそれごときで凹むシエラではない。

さすが最終兵器だ。

「バイクは？」

「乗れないだろ。

安定感ないし。

却下だ」

「ヘリとか」

「だから、病室に入らないだろ？」

それに波音一人のためにヘリをわざわざチャーターできると？」

顎に指を当てて次々と提案するシエラだがことごとく論破されていく。

終いには

「セズクのお姫様だっことか」

こんなことを言い出しやがった。

「あ、僕は賛成だよ♪」

シエラが言い終えたと同時に賛成の意思を表明するためにセズクが手を上げる。

寝てたんじゃないのかよ、起きてたのか？
それとも俺の名前に敏感に反応したのか？

「バカかお前は。」

俺の精神的状態がヤバイことになるから却下だ！」

当然却下させていただきました。

そして俺が懷で温めていた意見を今こそ開放する時。

「お前ら二人がイージスでも張って……」

仁に言われた。

「疲れるからヤダ」

メイナは前髪を指に巻きつけた。
シエラは完璧に膨れっ面になっている。
怒ったふぐみたい。

「じゃあどうしろと!？」

落ち着くんだ仁、怒るな。

「普通にベットのコロ使えば？」

おっさん兵士が白い目で「バカばかり」と。

そんなオーラが染み出していた。

ここでも見事に諺である目は口ほどに（略）が発揮されている。

「その発想はなかったね。

よし、そうしようか!」

「ちょ、待て。

横幅的に考えろよ？

どうやってもドアに引っかかるだろ？」

さっそくベッドのコロのロックを外し始めたセズクに思いとどまる
ように声をかける。

「その時は波音がボーンって」

「出来るかっ!」

「大丈夫だよ、僕がやるから」

違うんだよ、そういう意味じゃない。

俺が言いたいのはもっとうとう……スマートにさ……。

車椅子とかそんな選択肢はお前らにはないのかとああ、動き出した。

「司令室はどっちだっけ？」

ドアの枠がどんどん目の前に迫る。

「えっと……奥の方に……あり……」

せっかくおっさん兵士が説明してくれてるのを遮りシエラのレーザ
ーが唸った。

吹っ飛ぶドア枠。

呆れ顔のおっさん兵士。

「さて、行こうか？」

司令室行き特急だよ？」

「安全運転で頼みます。

事故ったらしゃれにならないんで」

砕けたドア枠を見ないようにして俺はベッドに身を預けた。

意外と安全運転なんだな。

窓の外の滑走路が点々と青や赤の色とりどりの光をともしている。時折炎が見えるのは戦闘機の離陸のものだろう。

あんなに近いなら衝撃波で窓が割れてもおかしくないと思うのだがきつと何か特別な仕掛けでもしているのだろう。

次の角を右に曲がり、食堂で今まさに食事をしている兵士達のにぎやかな声を聞きながらのんびりと……

というわけにはいかなかった。

見事なまでにトラブルを引き寄せる俺の体質がここでも発揮されたのである。

「迷った」

そう、この一言がすべてをあらわしていると思う。

道に迷ったのだ。

さっきまでずっと呆れ顔を維持していたおっさん兵士はどこかに消えたし

ベッドの上の俺を含め、仁、シエラ、メイナ、セズクは正直どうしようかと途方にくれている。

あちこちをねり歩いているうちにどんどん目標から遠ざかっているような気がしてならない。

「見つからないな」

ぽつりとシエラがこぼした一言が深く頭にこびりつく。

「ですね」

腕につけたコンピューターの液晶を見ながら仁は

「パンソロジーレーターで見つけないのか？」

俺のベッドに腰掛けた。

きしんだバネの音がまったく人気のない廊下に響く。

「見えるんだけど……どれが元帥の部屋なのか分からないから却下」

この小一時間で一生分の「却下」を聞いたような気がする。

下手に動き回ると余計に迷うし。

まったくこいつらにも困ったものだ。

俺に責任はないとは言わないが……。

そもそも俺が北は右だろーとか言っていたのも原因の一つと考えられるし。

五人でさてどうするかと話し合っているとこつこつと足音を立てて近づいてくる人が角から現れた。

「何をやっていたんですか？」

私と呼んでいるというのに……」

澄んだ声が澄んだ空気に響き淀んだ雰囲気も浄化したようだった。

ベッドの柱の陰になってよく見えない。

「遅刻です。」

許せないミスです」

はぁ、何か怒られてしまいました。

しかも誰だよ、この眼鏡かけてて……ん？

女の人が移動してくれたおかげで俺からもぼっちり見える。

結構綺麗な人だな、金髪で。

ぴっちりと身を包んだ地味なシャツが似合っている。

豊かな胸が……男としてこれは仕方ないだろう。
見てしまったんだもん。

「す、すいません元帥」

「え？」

出た。

どうもてもそれらしくないのにその肩書きの人。
ジョンといい、メガデデス戦の艦長といい……。

「私が帝国郡元帥及びベルカ世界連邦帝国アフリカ、オーストラリア地方守護族惣領

シンファクシ・ネメルシエアです」

眼鏡くいつ。

ここまで完璧に眼鏡が似合う人を俺は見たことがない。
歳も聞きたいところだが危ない橋を渡るほど俺は愚かじゃない。
ごめんな！

それに守護族ってことはジョンも言っていたあれか。
王を守るためのうんぬんーってやつ。

そうは見えないんだけどな———と思いつながらシンファクシがセズク
に説教をかましているのを

シエラたちと遠巻きで眺めていると天井に火花が散った。
一拍遅れてなる銃声。

シンファクシの右人差し指から硝煙がたなびいていた。

義手……しかも仕込みが半端じゃないであろう物。

うめき声が響くと天井から一人の男が落下してきた。

格好からみてスパイ……おそらく連合郡の。

「おい、片付けておけ」

右手人差し指の硝煙を吹き消し、銃声を聞きつけてやってきた兵士達にときばきと指示を下す。
なるほど、コレは指揮官の器としてふさわしいかもしれない。

「さて、行きましようかレルバル少佐」

いや、俺は永久波音という名前が……。

シンファクシの部屋は深い地下にあった。

地下四百二十メートルの洞窟を改造して作ったものらしい。
それにしても俺はいつまでベッドの上に横たわっていなければなら
ないのか。

せめて話をするときぐらいは椅子に座らせて欲しいものである。
体と相談してみるとベッドの方が楽だとき。
ならベッドでいいや。

暇になるとこの自問自答も虚しいものだ。

「さて……」

シンファクシは自分の席に座ると俺以外の四人に着席を促した。
全員に何を飲むのかと尋ね、手下にその注文どおりのものを持って
こさせる。

ちなみに俺はミルクティーを注文した。

「先日、連合郡の地方都市爆撃ですが私達はやっていません。

信じてください」

俺達に聞く準備が出来たと判断したのか口を開くと同時に重い話をしだしたシンファクシの目は真剣だった。
全く嘘をついていない目だ。

「その件の詳しい説明は僕からさせて頂きましたよ。
早速本題に入っていただけませんか？」

コーヒーに砂糖をどばどば入れながらセズクがシンファクシに提案する。

それを聞いて頷いたシンファクシは

「ではセズクの言うとおり早速本題に入らせていただきます。
今回はこちらをかつぱらってきて欲しいのです」

まあ人として出来る仕事ならやりますが。

シンファクシが机の中から出してきたフォルダの中に写真が入っていた。

変な形をした……車か？

それが写っている。

「これが何か？」

「これは連合郡カナダ自治区にある倉庫の地下二十四階に保管されている

ナクナニア超光発生装置の一部です。

我々帝国郡全員の願いです。

これを連合郡から取り返してきて欲しいのです。

力で取ろうにも自爆システムがついていて無理なんです。

地下には大量のウランが貯蓄されていてもし砲撃の一発でも受けたら起爆システムが作動。すぐに核分裂が促され……」

シンファクシは机の上にあるせんべいをぐしゃつと潰して見せた。

「こうなります。」

この装置はベルカの……我が祖国の技術の遺品のひとつとされています。

超光化学合金セラグスコン製というナクナニア超光をセラスミコンという土に当て溶かし鉄などと混ぜ合わせた超光合金で出来ている代物です。

この金属一センチで鋼鉄二十センチという強度を持ち非常に強固、かつしなやかな性質を持っています。

電気は通しません光をよく通すという性質もあります。

その金属を作り出すのにこの装置が必要なのです」

そいつは夢のような金属だな。

超古代文明ってのは超がつくだけあって本当にすごい力を持っていたんだ。

「ただこの装置は一部にすぎません。

他にも三つほどあると予想されていますがこちらは心配ありません。

私たちが既に二つほど入手しています。

問題は……」

「この倉庫の中のこいつってことか」

「そういうことです」

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

目は口ほどに物を言う（後書き）

どうもありがとうございました。

ココまで呼んでいただき感謝の雨です。

最近寒くなってきましたが

体調を崩さないようにしてください。

それではまた来週です。

シンファクシとカプセル

シンファクシは「出来ることならなんでもする」と完全な協力を約束した。

俺は出来る限りのことはやってみますと応じて部屋を退出した。

「で、どうする？」

こいつはかなりの曲者だと思うんだ」

今度は迷うことなく壊れた病室へとスムーズに戻ることが出来た。その病室内で綿密に計画を練る。

「波音の曲芸でもだまされないだろうしなあ……」

曲芸言うな。

正直自由に声色変えられるこの能力要らないと本気で思っていた所なんだよ。

「ハイライトの方法でいいんじゃないの？」

どこから持ち出したのか不明なアイスクリームを舐めながら仁がもごもごしゃべる。

「もが……でも……んまっ！

絶対X線……んがっ……じゅるっ！」

汚いからしゃべりながら食べるな。
ほら垂れてるじゃんよ、アイス。

「施設の中に兵士はいないんだよねえ？」

見取り図を広げ例の装置までの道のりを指で確認しながらメイナが

「制圧は簡単なんじゃない？」

にやっとした。

「でも銃火器の持ち込みは間違いなく不可能だろうな。

入り口で間違いなく取り上げられる。

といって強硬手段に出れば核爆発。

シンファクシの話じゃ武装の気配も見せてるって噂だ」

俺の思いつく限りの問題を提示する。

この問題をすべて潰さなければ安心なんか出来るわけがない。

「一発でも砲弾や銃弾が当たったらアウト。

どうやってもって帰れば良いのか検討もつかない。

兵士などの邪魔する相手は排除できるとしてとても車なんかは入れないよな………ん？」

指で資料の文字をなぞっていると興味深い内容を発見した。

そういえばこの施設は倉庫。

しかもつい最近出来たばかりだ。

急ピッチで仕上げたということは所々でまだ工事が行われていると見て間違いない。

それに食料なども積み込みがはじまるだろう。

チェックは必ずされるだろうがそれさえパスしてしまえば……。

「おし、思いついた。
たぶん完璧だ。
聞くがいい、ははは」

四人にその作戦……と入っても某ゲームのアイデアを少し拝借することとなるが。
説明事態は五分で終了した。

「よし、決まった。
それで行こう」

その作戦を話し、無事に四人の賛同を得ることが出来た。
無事承認されたことに少しほっとする。

「それじゃ、シンファクシさんに報告に言ってくるよ♪」

さて、パーティの始まり……と言いたいところだ。
だが問題がある。
それは

「俺の体……」

そう、今俺は自分では満足に動けないほどの重症なのだ。

「あー……」

仁のそうだったと言わんばかりの顔。
そうだよ、俺は重症なのだよ。
自分でも忘れていた。

「なんか……ごめん」

四人のあーという顔がとても俺には物悲しい。
でもシエラが

「ま、仕方ないか。

僕は波音の方が大事だから波音を取る。

波音が治るまで待つ。

それからまた作戦を練ればいいと思う」

こう言ってくれた事により少し悲しみが和らいだ。

「私も待つことにするよ。

なんてったって、波音は軸だからねえ。

ま、私やりたいゲームあるし丁度良いや」

「俺はPCを作りたいし……」

「僕は波音のそばに居れる」

お前ら……。

最後を除いて感動した。

最後がとてもいらなかった。

最後のヤツなんなんだ？

「でも本当にしばらく治らないの？

波音の作戦だと大体一週間ぐらいなら猶予があると思うんだけど

……」

工事が終了して入り口が閉じられる。

出入りはヘリなど以外では完全に不可能になり
生産、消費などがその建物内で行われるようになる。

つまりこの施設がアーコロジー化するまで約一週間ぐらいかかる
ということだ。

コレも偵察衛星から判明したことで完全ではない。

よって一週間が四日に変わるかもしれない。

四日が二日に変わるかもしれない。

そんな中自分の体のせいでこの四人……。

そして帝国郡全体に迷惑をかけるとは到底ニセと戦うときは予測出
来なかった。

「医者の話だと全治一ヶ月ちよいらしい。

睡眠再生カプセルに入ると一週間ちよいまで縮めることが出来る
らしいけど」

仁がメイナにのんびりとした声で説明するのを聞き流す。

なぜなら仁が言った『睡眠再生カプセル』というのが気になってい
るのだ。

「なあ、仁」

「一ヶ月もかかるんだとさ。

ん、どうした？」

「その睡眠再生カプセルっていうのさ。

俺でも使えるのか？」

それを使えば少しは作戦の決行を早めることが出来るはず。
そう考える。

「俺は詳しいことは分からないけど……。
まあ波音ならシンファクシも許してくれるんじゃない？」

おそらく色々問題はあろうが……。

少しでも楽して作戦を実行したいという気持ちの方が今は強い。

それに……この四人に、帝国郡に迷惑をかけるわけにはいかない。

「セズク、シンファクシに伝えてきてくれないか？」

この熱い決心が鈍らないうちにな」

「別に良いけど……ハニー？」

傷とかは機械の力を借りず自分の力で直したほうがいいんだよ？
分かってると思うけど……」

俺の体を心配してくれてるのか、セズクさんや。

「僕が思うに大丈夫。

再生を促進するだけだから」

「ほら、シエラもこう言っていることだしさ」

「でも、マニハニー……」

波音と呼ぶのかマイハニーと呼ぶのかはっきりして欲しい所ではあるが今はいい。

その問題は隣においておく。
よいしょ。

「大丈夫だって、一回や二回ぐらいで
死ぬわけでもないんだろ？」

「まあそうだけどね……」

あ、仁私にアイス頂戴」

「やだよ、自分で取れよ。

波音、入るなら早く決めとけよ？

セズクだって……」

仁が指差した先にセズクはいなかった。

入るということをシンファクシに伝えに行ってもらったのだ。
ちゃちゃが入る前に実行したほうが良いだろ？

「ぬおお、いねえし！」

仁、うるさい。

とにかくセズクが帰ってくるまで暇だ。

ここからあの部屋まで三十分……」

あの時は俺のベットがあったから普通の歩きで約二十分。

合計四十分程度の暇が出来るわけだ。

のんびりとテレビでも見るとするか。

枕の隣においてあるリモコンを持ってテレビの電源ボタンを押した。

「さあ、波音行こうか♪」

『衝撃の真実はこの後すぐ!!』

「えっ？」

どんだけ速いんだよ。

時計を見ても三十秒ちょっとしかたっていないんだぜ？

「カプセル用意してくれるとき。
ほら、行くよ！」

妙にハイテンションなセズクの背中にまあいわゆる『おんぶ』されて病室から出る。
ベッドに乗っていけば良いと思ったが片付けが面倒だと結局押し切られてしまった。

「一週間後な。」

シエラもメイナも仁も元気で。
死ぬなよー！」

「はいはい、大丈夫だから安心していつて来い」

「私はゲームして待ってるから」

「僕は……何してようか？
姉さん横で見てていい？」

「さ、マイハニー行くよ？」

病室から出しうる最高速度でつっぱしるセズク。

今回も安全運転でありたいものなんだが……。

こけたりしたら間違いなく俺はそこら辺に頭ぶつけて死ぬ。
もしくはかすり傷が出来る。

今は静かになり、皿を洗う音のみが響く食堂を抜け射撃場と書かれた部屋のそばを通り抜ける。

途中何人かの兵士と出会ったが皆わきによって敬礼してくれる。
きっちり答礼しながらもセズクは風になって廊下を駆け抜けた。

階段をくだり右に曲がると急に消毒液臭くなる医療塔と呼ばれる十二階建ての建物がある。

まさに風のスピードで医療塔に入ってセズクはブレーキをかけた。

「睡眠カプセル室……ここだね」

出し抜けに止まったセズクの背中の上で慣性の法則で頭がスライドした。

つまりセズクの金髪に思いっきり顔をぶつける事となったのだ。

シャンプーの臭いが……うっ……

自動ドアが開き中の様子が見える。

今から説明しようと思う。

卵の形をした白い容器がざっと二十個程度並んでいる。

顔の部分だけガラス張りになっていて中で黄色の液体に浸かった人が顔にマスクをつけ眠っていた。

卵の隣に一台のPCが置いてありそれがすべてを管理しているようだった。

五人ほどの白衣を着けた看護師が所々に散らばり本を読んだり画面を暇そうに眺めている。

「永久波音だな？」

早く入れ」

後ろから男っぽい女の人に促され恐る恐るセズクに手伝ってもらいながら容器の中に入ろうとする。

赤いランプが点灯して卵の蓋が開いた。

「おい、服を脱げ、服を」

少し待ってくれその指示。

服脱ぐわけ？

「ここで？

服別に着てても……」

「効果が薄れるだろ。

それに生理再生水もにがりやすくなる。

だから脱げ」

眼鏡を光らせて神経質そうな女の人のため息混じりに答えた。

「どうしてもここで脱がなきゃ駄目ですか？」

「ここでだ」

問答無用という風にぴしゃりと突き放された俺は仕方なしに服を脱ぐ。

らんらんと目を輝かせたセズクを張り倒したかったがこいつがいなければ

何も出来ない今の俺は黙ってこの屈辱に耐えるしかないようだった。ボタンをぷちぷちと外す。

黙って下も脱ぐ。

文句あるか？

「恥ずかしいな……」

せめて前だけでも隠せるもの……と探した瞬間容器に放り込まれマスクを顔に押し付けられた。

容器の中でぶつけた頭がじんじんする。

涙目になる暇も無く

「おやすみ♪」

足元から黄色い液体が滲み出してきてあっという間に踝が飲み込まれた。

少し恐怖を感じたが目の前でぶんぶん手を振っているセズクに苦笑を返す。

液体が胸らへんに到達した瞬間睡眠ガスか何かでまぶたが一気に重くなった。

セズクの手を振る様子が残像となりさーと消えた。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

シンファクシとカプセル（後書き）

よんでいただきありがとうございました。
感謝です。

ポイント&お気に入りに入れてくれた方、ありがとうございます。
うれしいです！
がんばろうって思いました。

では！

（最近波音寝すぎじゃね？）

悪夢蜃気楼

夢の中は闇と赤一色だった。

赤く燃えた大地が唯一の光となって闇を裂いている。

巨大な艦がその上で旋回しながらレーザーの雨を降らせているのを見て

またこの夢か……と脱力した。

夢と分かっていてもこんなのを見続けるのは嫌な気分だ。

宙に浮いたまま何も出来ないし。

ただ巨大な艦が都市を焼いていくのをぼーっと見続けるのは苦痛でしかない。

どうせ一週間もあるんだ。

この夢の中を探検してやるさ。

それぐらいの心意気がないと正気を保ってられそうになかった。

おもむろに景色が歪み今度は海の上だろうか？

青い海と白い雲とが支配する空間になった。

青の上に新品の消しゴムほどの鋼鉄の箱が浮いていた。

その上にごてごてと飾り立てるように艦橋構造物や砲塔がくつついている。

それが十ほどあつまりその砲口を空へと向けていた。

本来なら鼓膜が破けるほどの爆音がして衝撃波で切り裂かれるほどの近いところを

大量の鳥——攻撃機が群れを成して消しゴムへと向かっていった。

消しゴムから大量の火矢が飛び出し鳥が次々と火に染められていく。主翼が？げきりもみしながら海面に落下して盛大な水柱を空に起立

させて行く。

それが五分ほど続いただろうか。

鳥が負けを認め百八十度反転して白の彼方へ消えていく。

ゆっくりと今度は消しゴムが青い海面に白い軌跡を残して遠ざかっていった。

再び景色がぐにやりと歪みしばらく不思議な模様が支配する。万華鏡に無理やり目を当てられ他人に回されているような気分だ。いい加減酔ってきてうんざりする。

エチケット袋欲しい……。

辺りを見渡すが当然のようにあるわけがない。

もう少しで臨界点を突破する直前に車の中の光景が像を結んだ。

黒いシーツに低い天井。

見たことがある。

確かに俺はここにいた。

右腕の同じ血を持った生命体の温かさ、笑い声。

遊園地のマスコットの人形、光る腕輪、ポップコーン。

夕日、シートベルト、母さん、父さん、姉ちゃん。

俺は……。

自分の体を見下ろした。

まだ小さい時の体……。

まさか……！

「海音、晩御飯は何が食べたい？」

この会話。

母さんが姉ちゃんに尋ねた……『あの時』の……会話。

「父さん的にはハンバーグがうれしいなあ。」

はっはっは！

忘れていたはずの父さんのドラ声が車内を揺らした。やめろ。

「波音は何が食べたいの？」

姉ちゃんの……忘れもしない目の輝きが俺をまっすぐに射た。
俺はここで「パパと同じハンバーグがいいなっ！」と答えたはずだ。
やめてくれ。

「そうか、ハンバーグがいいんだね？」
やっぱり父さんとおんなじだね！」

意地悪そうに笑う姉ちゃんの顔が凍りつく。
確かこの後は……やめろ、やめてくれ。
赤信号で止まっている車に真正面からトラックが……。

「皆逃げてっ!!」

こう言いたかった。
だがこの時も過去と同じく声にならない声が恐怖に捻じ曲げられ出
なかった。
頭を母さんと姉ちゃんに抑えられ、抵抗する間も無く座席の下に押
し込まれる。

「うわあああっ!!」

父さんの悲鳴が鉄と鉄とがぶつかりひしやげる音に混ざり消える。
粉々になったガラスが車内を飛び交いトラックから剥がれ落ちた鉄
板が

父さんを……母さんを……姉ちゃんを……砕いた。
飛び散ってきた脳が……血が……手に……顔に……。
遊園地でも買ったジャムポップコーンが違う赤に染まる。
ジャムのように澄んだ綺麗な赤ではなうくどろっと……赤黒い……。

人形が……赤く泣いている。
……………。

ぐにゃっとまた視界が歪んだ。

夢の中だというのに心臓がバクバク胸板を打ち目を覚まそうともがく体が

再び泥沼のような夢の中に突っ込まれ体を脱力させる何かがまとわりついた。

頬に液体が流れていた。

涙だった。

まぶたを開けることすらためられるほどの何かは徐々に体から抜けていった。

だが俺は目を開けなかった。

また嫌な物を見てしまいそうな気がして開けるに開けられなかった。

「永久……君？」

「……園田か。」

何かようなわけ？」

目をつぶっていても声は聞えてくるらしい。

当然といえば当然のことだ。

今よりも格段に幼い声をしている俺の親友の声が耳に入ってきた。

「……俺と親友になってくれない？」

小学校一年生の昼休みだったと思う。

いつも通り外でぼーっとしていようと席を立とうとした。

そうしたら園田仁が話しかけてきたのだ。

仁はたくさんの友達がいてクラスの中心的立ち居地にいた。

それが無口でマイペースな俺に話しかけてきたのだから皆びっくり

しただろう。

でも仁の一言があったから俺は一人から逃れることが出来た。

悲劇の主人公気取ってるみたいだなー。

別に同情を誘おうとかしてるわけじゃない。

俺は悲劇の主人公でもなんでもないからな。

事故で両親と姉ちゃんを失い、俺は鬼灯の家に取り取られた。

何でも親達は中学時代からの親友同士だったらしく俺はスムーズに鬼灯家の一家に加えられた。

一人で住むのは寂しいだろうと。

両親の残した遺産をゴッソリ持って行き音信不通の親戚とは違い俺を引き取ってくれた鬼灯家の人たちは俺に愛情を惜しみも無く注いでくれた。

俺は詩乃と小学校まで一緒に過ごし、中学校に入る頃に自分の唯一残された家に帰りそこで暮らすことに決めたのだ。

その時代ぐらいからだろうか。

事故で頭を打ったのかそれとも同情はいらないと変に体を鍛えた結果総合体育全国大会で準優勝という輝かしい成績を取ってしまったのは。

その次の日に、おっさんから今の『仕事』を頼まれるようになったのは。

初めはドキドキだったものの慣れれば大胆になっていった。

意味を調べようと書いておいた単語の紙切れを落としたのも大胆になりたての時だった。

そのおかげで意味の分からない名前を世間から与えられたりしたものだ。

そう、『レルバル』という名前だ。

今なら分かる。

『レルバル』はベルカ世界連邦帝国の首都の名前であり『永遠』という意味。

まあそれはとりあえずおいておく。

横のゴミ箱にな。

正直いってこの名前は黒歴史なんだ。

あまり触りたくない。

何度か捕まりそうになったことも多々あったが何とか危機一髪で逃げ出せていた。

それは仁がメンバーに加わってからと同じだった。

そして何の縁やらシエラの眠る遺跡を開けちまったんだ。

後はもう言わなくても大丈夫だろう。

口ではいいいや言っているものの、内心では同じことの繰り返し毎日が

終わる音を敏感に感じ喜びすら沸いていた。

もう過去は見たくない。

まっぴらだ。

シエラと関るようになってからよく聞き、見るようになった物がある。

それは

「伝説……か」

心の中でその伝説を唱えてみる。

大切なものが消えるとき

三つの死は姿をあらわす

死は力を使い地上を無に返す

死は鬼神となり

恐怖の中で消えていく

大切なものを失った悲しみとともに

母さんにもよく読んでもらったものだ。

『騎士団の栄光』。

誰もが知っている童話。

今聞いたはずなのに母の声はどんなのだったのか。

思い出せない。

思い出そうとすると頭に映るのは事故の映像。

赤いポップコーン。

砕けた肉親の……。

またブルーな気持ちがかみ上げてきた。

悪い癖だ。

「大丈夫だよ」

頭を抱えていると今一番聞きたくない声が赤いポップコーンを消し去った。

夢の中にまで付きまとってくるというのか、お前は。

いい加減にしろ。

「ね、マイハニー」

うるせえ、飛行機に轢かれておっちね。

「ひどいなあ波音は♪

まあ飛行機に轢かれたぐらいじゃ死なないけどね♪」

モドキだもんな。

からからと笑うセズクの隣で

「波音、一人じゃないんだぞ？

何にも一人で抱えるんじゃないかって相談してくれよな」

中学校時代の制服に身を包んだ仁がにかと笑って俺に親指を立てた。

なんていうか………ありがとうな。

まったくこのカプセルってのは悪夢とかを見せる何かか？
出来るなら良い夢を見せてくれたっていいじゃないかよ。
贅沢か？

最後の方はいい夢だったと思うけどよ。

ジリリリ……。

小さくなっていたそれは徐々に大きくなっていく。
目覚まし時計のようにしつこく、かつ長く。

ジリリリリ……。

わかった、わかったよ、目を覚ますよ。

……さて、行きますか。

右手で目元をごしごしとこすり涙の跡を消した。
仁やシエラたちに笑われないようにしないとな。
俺が泣くなんてみっともないだろ。

重たかったはずのまぶたが開いた。

黄色い液体がカプセル内に充満しているのが分かる。

おそらく生理再生水とかいうのだと予想する。

釜の底が抜けたような間抜けな音がして徐々に水面が下がってきた。
足元にある排水口から小さな渦巻きが出来て生理再生水が搾り出さ
れていく。

思ったよりも静かに蓋が開き外気がひんやりと体を包んだ。

「おはよう、レルバル。
お目覚めは最高か？」

白衣に身を包むシンファクシが俺にタオルを差し出していた。
タオルを受け取り頭を拭き、すごい速さで前に巻いた。
これでも十六の思春期真っ盛りの少年なんだぞ。
恥ずかしいものは恥ずかしいんだよ。

「脳波や体に異常は無し。
神経不接合の心配も無し。
最高のお目覚めだな」

ボールペンを持った左腕で右手に持ったボードに書いていく。
そういえばこの一週間でシンファクシはイメチェンしたのだろうか。
眼鏡かけてないし少し背が伸びただろうか。

「シンファクシ元帥、背伸びしました？」

女の人にこんなことを聞くのはどうかと思うが……。
疑い始めるとキリが無く心なしか口調まで違ってる気がしてきた。
だってほら、シンファクシって

「～です。」

「～ます」

口調だったじゃん？

「私か？」

ボールペンの頂点を押して芯を引っ込める音が聞えた。
ボードを机の上に置き、腰に手を当て鼻から息を吐く彼女。

「私はシンファクシじゃないぞ？」

わーお、お手上げ。

「私はシンファクシの妹、ラフファクシ。

あ、別に覚えなくて良いから」

シンファクシにラフファクシですか。

舌を噛みそうな名前だことで。

ラフファクシは胸ポケットに入れたライトを右手に持ちくると回した。

スイッチを入れ俺のまぶたにをこじ開け光を当ててくる。

瞳孔の動きでも見ているのだろうか。

普通にまぶしい。

「反射神経異常なし……と。

もうすぐセズクが迎えにくるはずだ。

それまでのんびりしててくれ。

あーどこかおかしいところはないか？」

inues.

This story cont

悪夢蜃気楼（後書き）

ありがとうございました。

悲劇の主人公？

違います。

ただのバカです。

ここまで読んでいただき本当にありがとうございました。

いいぜ、このG!

「強いて言うなら嫌な夢を見たことぐらいですかね」

俺は力なくラフファクシに笑いかけた。

「悪い夢……?」

ん、おかしいな。

たしか良い夢を見るように設定しておいたんだが」

俺はカプセルから這い出して渡された服を着た。

のりが効いてて服がするりと肌になじむ。

「まあ、別にいいか。

どうだ、体の方の調子は」

ためしにジャンプしてみる。

軽い、体が軽い。

中身が入っていると思って持ち上げたけど実は中身が入っていないかったやかんぐらいの持ち上がり方だ。

つまり尋常じゃない。

動かなかった右腕も銃創がきれいに消え痺れもなかった。

「最高です」

「そうか、そりゃよかった。

じゃあ治療は終わりだ、出て行け。

セズクも来たことだしな」

手をひらひらさせて「あっち行け」という顔をする。

愛想がない人だなあと脳で呟き一礼して部屋を出た。

「やあ、おはようハニー♪」

ああこいつが女だったらいんだがなあ。

男だもんなあ……。

別に異性だから何ってわけじゃないんだが。

「なあ、セズクさん」

でも前々から気になっていた事がある。
それは

「最終兵器モドキも最終兵器も体を変えることが出来るだろう？
性転換も出来るのか？」

気になるだろ？

確かにどうなんだろうってならないか？
セズクさんは俺をふと怪訝な目で見て

「……で、出来るけど波音。

僕は女にはならないよ、不便だし」

出来るのかやっほーい。
ん、失礼した。

「別に良い。
聞きたかっただけ」

セズクが女だったら付きまとわれるのは悪い気分じゃないんだがな…

∴。

「でも、僕が女になって波音と一緒にいても良いんだよ？
ぶっちゃけそうしようか？」

女になられても男のセズクしかイメージがないから駄目だな。
それにこれ以上女に絡まれちゃかなわん。

「後ろ髪惹かれるけど、却下」

やはりこの一言で却下させていただいた。

「惹かれるんだ……。」

ま、まあ却下だよな。

さて、準備は出来ているんだ。

ちやっちゃんと終わらせようよ♪」

しゃかしゃかと飛行場へと歩いていくのをあわてて追いかける。
朝日が昇りつつある飛行場は、長く濃く戦闘機達の影が伸びていた。
その中でも格段に大きい輸送機の中の一つの隣に四人の影がある。

「波音ー久しぶりだなっ！」

だなっ！

なんだ、そのテンションの高さは。

シエラが大きな声で俺に呼びかけ手を振ってきた。

あーやれやれ、動くようになった右腕で手を振り返す。

「はいはい、シエラ久しぶりだな。
元気だったか？」

背、伸びたか？」

「元氣だった！」

背は伸びてない！」

なんとなくで頭を撫でてやった。

シエラは目をつぶって気持ちよさそうにそれを甘受する。

「おはよーだな、俺は眠いけどな」

仁は腕につけたウェアラブルコンピューターの画面をチラッと見て大あくび。

時計を見たのだろう。

今はおそらく午前六時ちよつと。

速すぎず遅すぎずの時間帯だと思うんだがな。

起こしてやるか……そう考えた俺は実行に移すことにした。

仁の寝癖の突いた頭を掴み——揺さぶる。

「うえ、おふ、バカ、やめ」

「起きた？」

「起きた起きた、おはよう」

ん、おはようさん。

「んー私も眠いけどねえ……。」

それはやらないで欲しいかな？」

今度はメイナの頭を揺さぶってやろうと思ったのだが釘を刺されて

しまった。
つまらん。

「おはようございます。
よく寝れたようですね」

飛行機の胴体にもたれ掛かりながらシンファクシ元帥が口を開いた。

「おかげさまで」

皮肉のように聞えるが決して皮肉ではない。
心からのお礼だ。

「さて朝礼でもしますか」

「りょーかいです」

俺達五人がシンファクシの方を向いたのをうなずきながら確認。
咳払いをして

「さて、これより特別作戦N－20を発動する。
レルバル、シエラ、メイナ、セズク、仁の五名は敵地へ侵入。
すみやかに敵設備を手に入れ持ち帰るように。
持ち帰りが不可能なら破壊を頼む」

元帥という階級にふさわしいと思える朝礼を始めた。
凜とした声がちらほら人影が見え始めた飛行場に響く。

「我々帝国郡は連合郡の……はあ。
……こんな堅苦しいのやってられません。」

ま、ほどほどに死なない程度にがんばってきてください」

敬礼された。

最後の方を適当に流したのをごまかすかの様に笑いながらの敬礼だ。

「では、行って参ります」

現役兵士にも恥じないような答礼を返す。

この答礼に仁のヤツがボケをかましてきた。

「うむ。」

お国のために花と散って来い」

どこの帝国だ。

でもそのボケに乗るのが俺の良いところだと思っっている。

「お母さん、嗚呼お母さん……。」

一度で良いから……」

どこからか桜の花びらが散ったような気がした。
レシプロ機のエンジン音も聞えてくる。

「波音、仁うるさい」

俺の頬をシエラの足が掠めた。

「あぶっねっえ！」

「ちっ、外したか」

シエラの厳しいツツコミを受けながらも答礼を返しきった俺は英雄だ。

でも横蹴りはどうかと思うぞ、シエラさんや。

よろよろと朝礼の終わった瞬間輸送機の座席めがけて歩いた。

一発食らった腰を抑えながら俺は壁のような輸送機をしかめた面の下から見上げる。

『C18―ーストラトシップ』

全長三十三メートル、全幅三十四メートル、全高十五メートルちょっと。

08式ジェットエンジン二発と結構小型に関らず、最大搭載量十二トンと大きい。

緩やかな曲線はステルス性を考慮したものだろう。

レーダーには虫よりも大きく、鳥よりも小さく写るらしい。

最大十二トンまでなら輸送可能な輸送機に連合郡のマークが書かれたトラック一台と

『野菜健康生活』と書かれた百個ほどのダンボールが詰め込まれていく。

ちなみにこのトラックは帝国郡の魔改造が施されている。

昔乗ったあのジープ以上にすごいらしい。

危なかったら使うけど、多分……

「私眠いわー。」

シエラ、少ししたら起こしてくれない？」

「僕も寝たいんだけど。」

姉さん僕も、眠いんだ」

「まあまあ……ZZZZ……」

「ちょ、姉さん！

寝るのはやいよ！！」

大丈夫だろう、うん。

このトラックで本物に成り代わり中に入るといふなんともシンプルな作戦である。

いざというときのためにダンボールもある。

この中に入ればすべてから隠れることが出来るといふなんとも最高なものだ。

どうやって装置を持ち出すのは……。

———がんばろう。

何とかしてトラックに載せることが出来たらこっちの勝ちだからな。

「はいこれ」

仁が俺にマジックを渡してきた。

「サンキュ、よし……。

ヒゲいるか？」

「いらん、いらん。

大丈夫だろ、それで」

ちなみにこのトラックを運転するのは俺、補助席に仁が座る。

仁に渡された鏡を見ながら顔に線を書き込んでいく。

渡された帽子を被り、連合郡の輸送部隊の服を着る。

顔にはしわを入れて三十代ぐらいの若いおっちゃんを演出することとした。

よし、いける。

自然と顔がにやけてしまった。

「変な顔」

「じゃかしいやあ！」

あいからわずさらっと言いやがって、シエラの野朗。

ちなみにC18はSTOL性（短距離で離陸できますよー能力）にもこだわった機体で

三百メートルもあれば離陸できるという。

帰るときは森林を切り開いたでこぼこの滑走路から飛び立つことになるらしい。

そこは俺達の仕事じゃないからよく分からないが……。

すべてが完璧だ。

想定された電子ロックは仁が外すし、敵の排除……といっても眠らせるだけだぞ？

それはシエラ達に頼む。

俺は出来る限りのことをする。

病み上がりの体だし。

嚴重な扉を開かせ仲間でこいつらを運ぶ。

出来れば車の中で待っていたいのだがまあまず無理な相談だろう。がんばるしかないということだ。

今回はほとんどを気合で乗り切ることとなるが……それもがんばればいいんだ！

「大事なものは結果じゃない。

それをしようと思った意志、力。

それによって得ることが出来たものなんだ！」

小さく声に出して自分に言い聞かせる。

それをシエラが聞いていたみたいで笑いながら反論してきた。

「でも、設備もって帰れなかったら失敗だよね」

「シエラ、そう考えるから駄目なんだぜ。

俺みたいにもっとポジティブにだな……?」

「……波音、寝起きでテンションが高いのは分かる。

でも今は静かにしておいたほうがいいんじゃないか?

離陸する直前って言ったら機長さんが一番気を使う瞬間だろ」

セズクにため息交じりで言われたことによりはっとした。

こいつに言われたくはなかったが……確かにそうだ。

不謹慎だった。

『こちら機長のマックス様だ！ハハッ！！』

盛大に吹いた。

スピーカーからまさかそんなアナウンスが流れてくるとは……。

やるな、マックス。

気を使うはずの機長がこんなヤツだったとは。

『シートベルトの使い方はいちいち言わんでも分かるだろう？

離陸するぜ、しっかり掴まってなあ!!』

機内の格納庫の端に設けられた硬い椅子の上に座りシートベルトをつける。

ゆっくりと格納庫扉がモーター音とともに閉まって行く。

だんだん暗くなっていく機内を窓からの朝日が照らしていた。

シートベルトを握り締め窓から外を覗く。

シンファクシが心配そうな顔をしてじっとこちらを見ていた。
エンジンから出る風圧に髪や服をはためかせながらもその姿勢が崩れることはない。

その顔に期待と不安が浮かんでいるように見えたのは気のせいだろうか。

ゆっくりと機体が動き始めるとシンファクシは窓枠に隠れ見えなくなってしまうた。

もう一度確かめようと窓に顔を押し付けたが既に人差し指ほどの大きさになっていて見る事が出来ない。

あの心配そうな顔はいったい誰に向けたものだったのだろうか。

『飛ばすぜえ!!』

文字通り飛びますがな。

ジェットエンジンの唸りが次第に高まっていく。

『Go!』

何で機長さんもそんなにテンション高いんですか。

やっぱり朝だからですか？

そう突っ込みたい。

でも強烈なGにより妨げられ、口から出たのは「うぐっ」といううめき声のみ。

朝食食べなくて本当によかった。

窓の外の景色の流れが次第に速くなっていく。

『ケツの穴閉めて踏ん張りなあ!!
行くぜ、おらっ!!』

ふわっ……ところ……。

うわっ……みたいな？

大事なところがこう……な？

そんな感じが……。

男の人なら分かると思う。

女の人のごめんなさい。

って何言ってるんだ、おちつくんだ！

セクハラかって。

それよりも……。

『このG！

このGだぁ！！

最高だぁ、ヒヤッハァー！！！！』

トラック積んでるのになんて無茶な動きをするんだろうか、この機

長さんは。

目標地点にまで落ちないかが心配です。

inues.

This story continues.

いいぜ、このG！（後書き）

あけましておめでとうございます。

波音さんの冒険に付き合っていたいただきありがとうございます。
まだ続きますがなにとぞよろしくお願いいたします。

昨年ありがとうございました。

今年もよろしくお願いいたします。

男の浪漫

「無計画っちゃ無計画だよなあ……」

仁は俺の作戦を改めて見直しながら口をとがらせた。

確かに成功に限りなく近い無計画だということは確かだ。

第一に装置をどうやって持ち出すのかすら決まっていけないのだ。

気合で何とかなるかも知れないのだが世の中それほど甘くはないと思う。

だが、あまりにも情報が少ないのも事実。

つまりあっちもこっちもあわあわ状態なわけ。

「あっ、でっかい船……」

そんな俺の気持ちを恒例通り知ることなくはしゃいでいる最終兵器二人には

毎度の事ため息が出るばかりである。

余談だが機長マックスのすごい操縦からやっとさっき開放された。

大体二十分ぐらい逆さまに飛んでいた気がしてならん。

からっと晴れた午前七時現在、青い空、青い海が窓の外に広がっていた。

シエラとメイナはあまり大きな窓から飽きもせず、ずっと外を見続けている。

セズクはうつらうつらと船をこいでいるし、仁は腕のPCに情報を詰め込むのに必死だ。

俺はぶっちゃけ何もない。

暇つぶしの道具も何もないのだ。

携帯も電波をキャッチされたら厄介だというので電源を切っている。

暇というものは本当にイライラするな。

シートベルトを外して立ち上がりトラックに歩み寄る。
中を覗く。

広々とした荷台の中に今はぎっしりとダンボールが詰め込んである。
このダンボールにしてもトラックにしても特殊改造が施されたもの
なのだ。

運転席に乗り込みアクセルとブレーキなどの癖を確認しておく。

助手席に無造作においてあるマニュアル……というか説明書を手に
取りざっと流し読みしてみる。

『使用上の注意……』

このトラックは運搬以外の目的に……』

自動車の使用上の注意なんて書かれてもなあ。
しかも全然面白くない。

「暇だ……」

ぼそつと一言呟く。

もちろん何も起きない。

『……以上のことを守り……』

搭載してある特殊機器についての説明……』

前言撤回、面白そうだな。

男の浪漫……大艦巨砲主義とかが組み込まれてあったらいいのだが
……まあ……車だし？

あまりそういう期待はしないほうがいいかと。

『?オクトパスミサイルについて P121

？百万ボルト放電について	P 135
？睡眠ガス放出について	P 148
？ロケットブースターについて	P 152
？ツインドリルについて	P 198
？チェーンソーについて	P 209
？ホイールニードルについて	P 218
？特殊防弾装甲について	P 224
？スクリューギアチェンジについて	P 234
？特殊テクニックについて	P 321

・ ・ ・

ま、まだ続くんだが省略させてもらうぜ！

多機能にも程があるだろ！

ロケットブースターって何だよ、何が出るんだよ。

まさかロケットエンジンが出るんじゃないだろうな。

このトラックそんな爆発しやすい燃料積んでるのか？

P 152 か……どれ。

『敵を撒きたいときや包囲網突破の時にオススメ！』

手書きの付箋がくつついていて、そう書いてあった。

技術部のチーフが入れてくれたのだろう、ありがたい。

ざっくりとした説明が時間の短縮にもなるし。

『ハンドルをロックした後、ギアをR 2に入れること。

車体後部からロケットエンジンが展開され、音速で三十秒間走行可能。

車体をかなり傷めるとともに、燃料の消費が激しいのでめったに使わないこと』

やっぱりロケットエンジンが出るのか……。

すばらしく素敵な機能なこと。

絶対に使ってやる。

このツインドリルってのは……大体分かるけど……どれ。

『敵を貫け！』

付箋をはがして丸めて捨てる。

ドリルなんだからそれぐらい言われんでも分かる。

どうでも良いがドリルも男の浪漫だと思うのだ。

『ギアをWDに入れる。

同時にチェーンソーを展開することも可能。

男の浪漫の武器である』

この人も俺と同じ考えか。

浪漫だよな。

そしてドリルトラックというわけか。

街中で使うとすぐに警察に質問されるだろうな。

動かさなければこれぐらいなら大丈夫だろう。

ちょっとやってみるか。

ギアを一度手前に引き一気にWDに入れた。

——あれ？動かないな。

おかしいな、なんでだ？

もう一度説明書を読み返す。

ああなるほど、エンジンがかかってないからか。

キーは……あったあった。

エンジンスタート！

一度ギアをNに戻し今度こそと気合を入れてWDに持っていった。
ガガッとトラック前部の鉄板が左右に開き、先端のどがった……て
らてらと鉄光りする二つの
双端がゆつくりとトラックの中から出てきたのである。
なんか地味に感動するな。

「波音、何してるんだ？」

運転席の窓からシエラの顔がひよいとのぞいた。

「ん？」

機能の確認だ、確認」

「このボタンは？」

シエラが窓から身を乗り出して押そうとしているボタン。

赤色。

大体この赤色ってのは自爆スイッチだったりするから押すな、おい
やめろ。

「ちょっとまで、押すな、おい。」

自爆とかだったらどうするんだ、待てって」

ボタン一覧どこだ、探せ。

説明書を迅速で読破する。

あった、これだ。

「――暖房のボタンか。」

別に何のことはない、ただのあったかい風が出るだけのボタンさ」

「つまんない」

むっつりとそっぽを向くシエラ。

「そう言うな。」

結構この車はすごいと思うぞ？

このコンパクトな車体にミサイルやらドリルやら入ってんだからな」

シエラに手を振ってどかせて、運転席から降りる。

トラックの前まで歩いて行ってじっくりと男の浪漫を眺めてみた。

二本のドリルが美しい。

掘削用みたいなドリルではなく貫通を重視したドリルだ。

それがまた美しいのだ。

「おっと、これ閉まっとかなきゃな」

さっき突っ込み忘れていたのだが今突っ込ませてもらう。

ツインドリルって名前なのにギアのところにはTDじゃなくてWD
って書いてあるのな。

ツインじゃなくてダブルになってるのな。

ギアを再びNに戻してエンジン切る。

ドリルが収納されたのを確認してキーは差し込んだままトラックから降りた。

痛む腰を抑え伸び。

……………。

また暇になったな。

落ち着きがないな、今日の俺は。

朝飯でも食うか、飛行も安定していることだし。

トラック荷台の隅にある小さなダンボールを引っ張り出してきた。
この中にはサンドイッチやおにぎりやらがたくさん入っているはず
なのだ。

封を切りわくわくしながら開ける。

あった、あった♪

思わず最後に♪がつくほどおいしそうなサンドイッチやおにぎりが
所狭しと並んでいる。

一人五個としてもこんなに入れる必要は？

まあ、文句を言うところでもないので遠慮なくいただくことにする。

……サンドイッチか。

ア ril 元気かな、電話もしてないけど。

今考えたら生きてるってメール or 電話をア ril にしてないよな。

もしかしてかなり心配してるんじゃないだろうか。

この作戦が終わったら電話でもしてやるとしよう。

そんで、どっか行こう。

うん、恥ずかしいが機嫌を取るためだ。

リア充な俺。

すいません、ホント。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

男の浪漫（後書き）

どうも、ありがとうございました。

ね、男の浪漫です。

分かっていただけましたでしょうか。

ここまで読んでいただきありがとうございました。
それでは。

始まりのはじまり

『いよー声の通りマックス様だ。』

もうちょつとで到着すんかなあ！

歯あ食いしばってケツに力入れときな！』

あのトラックいじりから約二時間。

暇を持て余し過ぎている俺にとってそれは朗報である。

「んー、やっとか！」

カチコチに固まりきった体の節々を回してほぐす。
首を捻った時のあのバキッという音がたまらない。

「シエラ、起きなよ。」

もう着くってさ」

メイナが窓辺でぐっすり眠り込んでいるシエラの頭を小突く。

「ん……分かった……」

「ほら、起きて」

「ん……………」

こういう所を見ていると何処にでもいる普通の姉妹にしか見えないのになあ。

あのしなやかな体自体が、文字通り『兵器』となるのだから昔の人は考えたものだ。

俺が昔の人だとしたら絶対にもっと兵器っぽい最終兵器を提案したに違いない。

これはりっぱな詐欺である。

「んー、腰痛い！」

姉さん、起きた、起きたからもう叩かないで！」

ペシペシと頭を叩かれながら目をこすり大きく伸びをする彼女。

メイナはシエラに眼帯——といってもパンソロジーレーダーを立体図にしてくれる眼帯を渡し

そのまま腰をとんとんした。

「私も腰に来たねえ、こりゃ。

んー……あいたたた……」

腰を抑えてよろけるメイナからセズクさんに目を移す。

問題はこのお方だ。

さっきこのお方はさっき（といっても一時間前）に

「んー波音っー♪」

と言いながら椅子からずり落ちた。

そのままの状態で床の上をゴロゴロゴロ。

激しい寝相とともにあいつの頭の中で俺は一体どうなっているのか。それが今のさりげない疑問であったりする。

一時間前に比べ動きは多少なり収まったものの——。

「波音っー♪

んーZZZZ……」

変わりに寝言が激しくなった。

寝言ということはつまりあいつの夢の中での俺を本人が実況しているということだ。

何度か起こしてその夢を壊してやろうと思ったのだが

それも、まあびっくりするほど幸せそうに寝ているので放棄。

俺にあいつを止めることは出来ないようだ。

夢の中でぐらい別にかまわんかな、嫌だけど。

起きたら起きたでやかましい男だからな。

仁は窓についている机の上に突っ伏して窓の外の景色を眺めている。

……と思ったら寝ている。

こいつはこいつで寝起きが悪いからなあ。

何度か起こしたことがあるんだが例外なく一時間ぐらいご機嫌斜めが続く。

朝にめっぼう弱い男だからな、もう九時だけど。

「おい、仁起しろ」

「……………」

「おい——ん？」

し、死んでる……」

「……死んでねーよ」

「おはよう、もう着くってさ。

シートベルトつけないとあぶねーべ？」

「……ん……分かったって」

ご機嫌斜め一歩手前って所か。

完全体ご機嫌斜めになる前にそそくさと仁のそばから離れた。

『おい、てめーらシートベルト締めとけよ。』

あと十分ちょいで着陸だぜ?』

「はぁ……最後の問題はさっきも言ったとおりいつか……」

床にでーんと寝っ転がっている。

先ほども説明したとおり現在セズクさんはとてつもなくひどい状態にある。

ぶんなぐって起きるか、蹴られて起きるか、水掛けられて起きるかどれがいいだろうか。

流石に上記三つの起こし方は極端か。

別のやさしい起こし方を考えることにする。

「えへへ……、は……むにゅ……」。

かわいいよお……ふへへへ……」

耳元と首本に同時に息を吹きかけられたような悪寒が全身を駆け巡った。

一気に俺の周りの気温が下がった気がする。

鳥肌が体中に隆起した。

よし、殴る。

決定事項だ。

絶対に殴って起こす。

「せーのっ……おらっ!」

声に出して気合を入れた。

そして一気にセズクの腹めがけて拳を振り下ろす。

命中率百パーセントの角度でうなる拳が……止められた。
そして視界が一回転したかと思うと背中から床に叩きつけられたのだ。

シエラやメイナじゃない、セズクに。

拳が当たる直前で目を覚ましたセズクは、俺の拳を止めると同時に大きく捻りやがった。

痛みで怯んだ瞬間にセズクが起き上がり一本背負い。

鈍い痛みが腰からゆっくりと這い上がってくる。

「ご、ごめんよ波音！

ついうっかりしちゃって……」

あわてて俺に手を差し伸べる。

「あと少し下手したら首の骨折る所だった。

危なかった……」

「俺もう少して死んだかもしれないかったってことかよ。

いてて……あいてー……。

それよりもう少して着陸だから席に座ってシートベルト締めろってさ」

セズクの力を借りて立ち上がりがり体についたほこりを払う。
そのままセズクに軽くチョップして自分の席に向かった。

『全員準備はOK？

よくなかったら席についてるボタン押しな！

………全員OKなんだな？

よし、行くぞ、着陸だぁ！』

眼下に広がるのは森の緑一色。

もしかしてあの草原っぽい場所なのか？

あそこか、あそこなのか？

ちよつと無理があるんじゃない？……うっ。

すごいGが体を直撃した。

機体が一気に前のめりになり、他から見たら墜落するように見えるであろう程の

急角度で高度が下がったと思う。

なにやらよく分からん勢いのまま森のあの小さな草原にC18の巨体が滑り込んだ。

木々をなぎ倒し沢山の鳥が家を失い鳴き狂っている。

環境破壊でいいのか、ジャンルは。

それよりも

『着陸成功、上出来だな俺様。

ここで待ってるからさっさと行って来な』

なんであんたは無事なんだ。

あんな無茶苦茶な操縦してどこもぶつかなかったのか？

「……………」

「……………いてえ……………」

俺含め皆どこかしらぶつけたようだ。

シエラは額を押さえて無言だし、メイナは鼻でも打ったのか涙目になっている。

ちなみに俺は腰にダメージを負った。

そのまま全員しばらく待機。

約五分が経過した。

「よ、よし行くぞ」

やっと痛みが去ったのを確認して気合を入れて作戦開始。

もう一度鏡で自分の顔が完璧に三十代のおっさんに見えることを確認する。

シエラ達三人を荷台に押し込み、俺と仁は運転席と助手席に乗り込んだ。

『マックス、開けてくれ』

無線で格納扉の開放を促す。

『了解、気をつけて行って来いよ』

『……意外とやさしい所あるんだな。』

むちゃくちゃな操縦ばかりするから殺す気なのかと思ったぜ』

「な？」

半ば呆れ顔の仁に笑う。

「違うない」

マニュアルをつまらなそうにめぐりながら仁が返してきた。

格納扉が徐々に開き格納庫が明るくなっていく。

『連合郡のレーダー網を抜けるためには仕方だねえことだったのさ。んなこたぁいいからはよ行け。』

俺は今から百八十度この期待を反転させなきゃならねえんだ。

おしゃべりしてる暇はねえ』

「ステルスは……？」

『んなもん、レーダー波が強すぎて意味ねエよ。
大河の中に投げ込まれた小石みたいなもんだ』

よく分からない例えに戸惑う。

「そ、そうか……」

とりあえずそう返しておいて気持ちを落ち着けるために息を吐き出した。

エンジンキーを回し、ギアをDに入れる。

アクセルを軽く踏んでゆっくりと格納庫から這い出した。

「さ、行くぜ」

エンジンの回転数が順調に上がって行きあつたまった所で強くアクセルを踏んだ。

土を巻き上げ木の間をすり抜け走る。

小道に入ったところでさらにスピードを上げた。

4WDのおかげで土道の森の中だというのにスムーズなドライブだ。さっきまでサンドイッチを食べたばかりだというのにまた腹減ってきた。

時速約五十キロで森を抜ける。

小さな村を通り抜け、街に入る。

街を抜けまた小さな村の中へ。

約二時間ほどかけて予定地点の到達した。

後三十分ほどでここを連合郡物質湯相對の車列が通るはず。

護衛は自国領と安心しているのか皆無。

「今回は楽そうだな」

さっきまで青い顔をして吐きそうになっていたというのに
けろっとしてサンドイッチを頬張る仁に小さくビンタしてから

「そうだと良いんだけどなあ」

サイドミラー越しにのんびりとした村をながめ俺はラジオのスイッチを入れた。

T h i s s t o r y c o n t

i n u e s .

始まりのはじまり（後書き）

どうもありがとうございました。

寒いですね。

体には気をつけてくださいね。

それではどうも読んでいただきありがとうございます。

量産

小鳥が鳴いている。

のんびりとした良い村だ。

待機して五分しかたっていないというのにもう眠い。

お見事。

仁に欠伸をしながらたずねる。

「穏やかな場所だよな……。

今から起こることを考えても……」

申し訳ない程度につけられたラジオからクラシックが流れ出した。

甲高い外国語の発音がさらに眠気を刺激する。

「ああ……確かに」

仁はPCを閉じ、息を吐いた。

「眠くね？」

「眠い。」

間違いない」

「この仕事終わったらここに遊びに来たいよな。

ちょーどお昼ね時なんだしょ」

「……そうだな。

また来たいことは確かだな」

大きな欠伸をして仁は目じりに涙をためた。
時計を見る。

後二十分間も何をしろというのか。

「あーっ……。」

んっ……あー……」

仕方ないから声合わせでも。

三十代のおっさんの声ってどんなもんなんだ？

「あ……あ……あ……」

「あ、それぐらいだな。

波音、ストップだ、それぐらいだって」

「あ……あ……はい了解」

声でばれるとみっともないしな。

顔に似合わず声が子供だったら……もうげんなりだよな。

人それぞれだけど俺は嫌だ。

顔がダンディなら声もダンディであるべきだ。

そう思う。

それにこの技——というか周りの奴らが言うとおり

曲芸はこういうことぐらいにしか使えないからな。

「なーなー、波音。

まだなのか？」

荷台から運転席へつながっている窓からシエラが顔を出した。

左目に黒い多機能性眼帯がついている。
久しぶりに見る、眼帯シエラ。
……ふむ、悪くない。

「まだまだだよ、後二十分もあるからな。
トランプでもするか？」

「トランプ……？」
ああ、詩乃から教えてもらった記憶がある。
もって来たの？」

シエラが暇を潰せるとでも思ったのか嬉しそうに手と手を合わせた。
そのシエラの前に親指を突き出して

「ない」

俺はキリッと締めた。

「ないのかよ!」

仁が非常にいいタイミングで突っ込む。
いいぞ、仁。

「……波音……」

笑う俺達の声に混ざってシエラの落ち込んだ声が響いた。

「ないなら何で言ったの……」

そっぽを向いて膨れっ面だ。

すねたな。

「悪い悪い。」

飴あげるから許してくれ、な？」

テンションが少し高いのはデフォだ。

膨れっ面のシエラに飴を渡す。

「別にいらないけど……。」

もらうに越したことはないな」

とか良いながら嬉しそうに受け取るシエラを横目に
大きな地図を拡げ眺める。

ここから約一時間の所にある連合郡倉庫。

その中にあるもの……か。

車列は情報によると五台で護衛はなし。

人数は多く見積もって十人程度。

あの三人に任せれば十分に対処できる人数だ。

やっぱり問題はどうかやって装置を運び出すか。

シンファクシ曰く大きさすら定かでないものをだ。

「おい、波音来たぞ！！」

仁の声に頭を叩かれ思考を中断した。

土埃を纏いながら車列がやってきている。

数は……一……二……五台。

計画通りの数だ。

目の前の道をトラックが次々と通り過ぎてゆく。

土埃でとても見えにくいのが、ひととき濃い影が通るのは何とか分かった。

一台……二台……三台……五台目！
今だ。

ギアをOMに入れハンドル横の発射ボタンを押した。
トラックの一部が開き、鉄のアームに捕われたミサイルが姿をあらわす。

ミサイルの後部に火が灯り、鉄のアームが捕らえるのを放棄すると
白い軌跡を残して
オクトパスミサイルが車列最後尾……五台目のトラックに突き刺さ
った。

土埃のひどさで懸念されていた他車両に気がつかれるという事態は
回避。

電気機器がショートして火花を吹き上げる五台目に荷台から出たシ
ェラ達はすかさず襲い掛かった。

あつという間に土埃にまぎれて運転手達をのしてしまう。

人間と兵器の違いはこういうところで現れるのだろうかと変に感心
してしまった。

「後で行く！」

メイナが手を振り成功を伝えると

「仁、始めるぞ。

シヨータムだ」

俺はギアをDにもって行きアクセルを踏んだ。

車輪がきしみ脱落した五台目のポジションに滑り込む。

そして四台目の後ろについた瞬間に視界が土埃で遮られた。

なんて濃い土埃だよ。

危ない運転になりそうだ……。

四台目がかすかにしか見えないほど濃い。

と、ここでふわっと後ろの荷台に三つの風が入ってきたのを感じた。

「処理終わったよ」

メイナが荷台の窓から俺の肩を叩く。

「ん、ごくろうさん」

処理といっても殺しはしてないぜ？

トラックをばらばらにしてもらったんだ。

これで追っては来れないし倉庫に連絡が行くこともないだろう。

一時間のドライブーががんばりますか。

ラジオのボリュームを捻り更に音を大きくする。

クラシックから激しいロックに曲は変わっていた。

蝉の声がこんなに涼しいというのに聞えてくる。

エアコンなんてしゃれたものがないから窓を開けているからかもしれないが。

クマゼミだろうか。

シャーシャーと空気を震わせている。

木々の隙間からこぼれた日光が道を点々と照らしている。

さっきまではひどかった土埃は森の奥へと進むにつれ道が湿ってきただのか収まりつつあった。

時速は約四十キロをずっとキープ。

森のトンネルが長く長く伸びている。

「このままずっと一本道か？

どこかで曲がったりしないのか？」

四台目のトラックのケツを追いかけるのにいい加減飽きてきた俺は仁に話しかけた。

「んー、地図を見ている限りではそんな洒落たイベントはどこにもないな。

このままずっと一本道だ。

洞窟の中通るからそれを取りあえずの楽しみにしておけばいいんじゃないね？」

洞窟……ねえ。

鍾乳石とか垂れ下がっていたらそりゃ最高だな。

黒々と道の前に口を開けるトンネル発見。

あれか、洞窟は。

車列はそのまま洞窟の中に入っていった。

自動でヘッドライトが点灯し、暗い道を照らす。

道なりにそって進むこと約十分。

いきなり大きな空洞が目の前に開けた。

人工の光が目まぶしい。

今までの自然物のような場所ではなく人工的な空間。

まるで地下遺跡のような……。

車を止めて確認したかったがここで怪しまれるわけにはいかない。

「っ!？」

そのときだ、俺の目が蛍光灯下に眠るものを見つけてしまったのは。

あの形……大きさ。

見たことがある。

巨大な円盤型の超兵器。

第四超空制圧艦隊の旗艦『円盤型超空巡洋戦艦メガデス』――!

おそらくメガデスがネームシップだからメガデス級戦艦とでも言えば良いのだろうか。

それが四つ。

空洞の中で所々五千年の風化の傷を治す修理の火花をあげながら眠っていた。

約三百メートルほどの巨大な機体に取り付けられた蛍光灯からの光をその巨体をもって跳ね返し鈍く鋼鉄色に光っている。
言葉を失い、固まった首を無理やり四台目のケツに戻した。

「何だ、あの戦艦は……」

仁はメガデス級戦艦の大きさに圧倒されているようだった。
声が震え、顔が恐怖の色に染まっている。

「――ベルカの超兵器だよ。」

あいつらこんな所でこんなものを……」

仁にカメラを渡し、写真を撮って衛星経由で帝国郡本部に送ってもらう。

今から行くところにももしかしたらこんなものが……。

期待とは正反対の理由で上がる心拍数。

メガデス級戦艦はやがて見えなくなり車列は洞窟から出て行った。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

量産（後書き）

ありがとうございました。

そうなんです、ええ。

メガデデスまだ出番あったんだと。

びっくりですよ、もう。

遅くなり申し訳ないです。

学校が長引きました。

模試があったので……。

それではここまで読んでいただきありがとうございました。

奇妙銃

洞窟から抜けると、すぐに連合郡倉庫入り口だった。

車の中から見るそれは思ったよりも大きくなく

こじんまりと申し訳なさそうに森の中に存在していた。

思ったより工事は最終段階に入っているらしく鋼鉄の柵の前に
たくさん工事道具が置かれていた。

鋼鉄の柵の前に設置された簡易小屋には四人の兵士が笑いながら銃
を片手に

トランプをしていたり、酒を飲んだりしている。

思っていたよりも軟らかい現場だ。

もっとびりびりしているかと思っていたんだがな。

肩に入っていた力を抜く。

「おっ、今日は違うおっちゃんか。

毎日ご苦労様」

門の入り口に立っている兵士にチェックを受けるときは流石に緊張
した。

だがせっかくX線などの対策をしたというのに荷台の中をちらっと
見て終了。

まさか泥棒が入るとは微塵も予想していない態度が見え見え。

「我々の後ろについてきてください」

二人の兵士が車列の前に小さなバギーで飛び出た。

車列は兵士に案内されたとおり

工事が完成したら撤去されるであろう扉の中に入っていく。

四台目に続いて中に入ると山のようにダンボールが積まれたホール

へとたどり着いた。

ここいらで良いだろう。

トラックの運ちゃん八人と案内兵士二人。

合計十人。

ちよっとお眠りいただきますか。

「仁、頼んだぞ」

「まかせなつて。

俺の演技のうまさに圧倒されるんじゃないべ？」

仁はズボンのポケットに小型ガスマスクをつっこむと助手席から降りた。

俺は車内の窓をすべて閉め、その時に備える。

一発でも銃弾が飛び交い……壁に当たったりしたらアウト。

その瞬間に核の炎で骨まで焼き尽くされることとなる。

極めて正確に。

極めて平和にことは運ばなくてはならない。

「あっー!!」

なんだこりゃあっー!!」

空気を切り裂く仁の声。

……わざとらしい。

もう少し何とかならなかったのか……。

あちゃーと右手で頬を叩く。

「どうした？」

それでも人間というのは不思議なもので好奇心には勝てないものだ。

好奇心は猫を殺すというがそれは人間でも変わらない。

罠と悟ることなく仁のいるところに次々に集まってくる。

初めは興味ないとそっぽを向いた兵士も次の言葉でノックアウトしたようだ。

「こんな所にエロ本が……」

「なんだって、オイ!!」

「熟女だけは勘弁な!」

そういいながら男たちは集まってくる。

十秒後には全員が仁からエロ本を奪い取ろうともみくちゃになった。

「勤務中だぞ、マジかよ」

俺はギアをG Gに入れ来るべき時をひたすら待つ。

「マジかよ、ですよね。」

でも幻じゃなくて本物なんですよ!」

仁がマスクをつけたのをミラーで確認すると俺はハンドルの横にっ
いているボタンを押した。

後ろタイヤのホイールが少し開き中からガスが勢いよく吹き出た。

「ん?

何の臭い……うっ」

乱闘中というのも幸いして肩で息をしていたせいか
思いつきり肺一杯にガスを吸い込み昏倒する十人。

「やれやれ、どうしてこうエロには弱いんだか」

仁はマスクをしっかりと握り締めたまま、エロ本の一冊を眠っている一人の手にそっと勿体なさそうに握らせた。

「人妻物か……ふむ。

波音、クリアだ。

このエロ本俺ももらっていいか？」

「別に良いから、はやくしろ」

ったく……。

まあ何はともあれ、第一段階クリアだ。

このガスが効いている内に兵士二人分の服を剥ぎ取る。

トラックのおっちゃんから連合郡兵士に早変わり。

エロ本をトラックの中に戻させ（仁はかなりごねた）

簡易小屋の兵士達を眠らせに行く。

スナイパーライフルのトランクをトラックの中から引っ張り出して組み立てる。

麻酔弾を込め、スコープをのぞきながら最終調整。

ホールから出て簡易倉庫を狙いやすい場所に移動する。

距離にして約三百二十メートル。

まずまずの距離だ。

息を吸い、とめる。

冷たい土の地面に寝転がり片目をつぶる。

「落ち着いて、波音。

僕が教えたんだから大丈夫だよ♪」

一発でケリをつけないと残りの兵士に抵抗され
ジリ貧になってしまうのは目に見えて明らかだった。
連射機能をオンにしてスコープを覗き込む……。

——待てよ？

ふと思った。

これ俺がやらなくていいんじゃない？

「Stand by……」

「セズク、ちょっと待て」

「Stand by……」

「待てって、おい。」

俺がやらなくても良いだろ、コレ。

一応非戦闘員なんですけど」

目の前に自分よりも腕が良いやつがいたとしよう。

当然そいつに任せるよな？

他力本願にも程があるが今回ばかりは銃弾の一発でも当たったら終了なんだ。

それなら少しでも成功率が高いほうが良いに決まってる。

「え……うん、まあ……。」

分かった、僕がやるよ」

セズクは「仕方ないなあ」とぼやきライフルから麻酔弾を取り出した。

ギギ……と、セズクの右腕が四つの銃口を持つ奇妙な銃に変形する。

「まさか、一気に……？
無理だろ、冷静に一人ずつ……」

俺の呟きを左手で制して

「無理だと思うから無理なのさ。
心から負けていたら一生の負け組みだよ」

セズクは四発の麻酔弾を右腕の異常な銃にこめると

次の瞬間に狙いを定め――弾を放った。

小さな注射器形の弾は寸分たがわず四人の額に突き刺さり内部の麻酔薬を直接脳に注射する。

絶対に無理だ、当たる訳がない。

簡易小屋の中に麻酔弾が吸い込まれていくのを見てそう思ったが窓から見える四つの人影――兵士達が一斉に倒れ、戦闘不能になったのを目撃した。

嘘だろ……？

化け物だ。

「ほらね？

気持ちで負けてちゃ駄目だよ。

くすくす……」

久しぶりにその笑い方聞いたな。

セズクは土の上に転がっているライフルをちらと眺めさっさとトラックへ戻ってしまった。

麻酔が効いているうちにあの倒れた四人から三人分の服を剥ぎ取らなきゃな。

なんで、今回は服を用意してくれなかったのだろうか。

金銭的な問題か？

奪った連合郡の深緑の軍服を両手一杯に抱えトラックによたよた戻りながら考えた。

「はい、三人ともコレ。

もって持ってきたからさっさとーっておい、シエラ！

そこで脱ぐんじゃないくてトラックの中で脱げ！」

三人分の服を剥ぎ取り、簡易小屋の四人を持参したロープで括りつけ服を奪ってきた俺はシエラたちに連合郡の軍服を渡した。

だがシエラのアホは最終兵器のせいかわからわすこういうことに
関して……疎い。

疎いというかバカだ。

「え、なんで……？」

別にここで良いじゃん」

メイナも同じくバカだ。

おじいさんだったら「ばか者！」としかりつけるぐらい。

「姉さんもそう思うよな？」

「うん」

「ほら、波音」

なんだよ、そのドヤ顔は。

どやーじゃねえよ。

「……家に帰ったら飯抜きにされたいのか？」

「やだ」

……。

最近言うこと聞かなくなってきたな。
反抗期か。

「まったく、分かった分かった。

仁、セズク、あっち行って……ってオイ！

仁、何やってんだ！

気持ちは大いに分かる！

分かるが隠し撮りは犯罪だぞ！」

今からお前らがすることも犯罪だろという突っ込みはなしで。
それとこれとは格が違う。

「ちっ、ばれたか」

とつてもとつても残念そうな仁を引っ張り、トラックの後ろへ連れて行く。

つともう。

セズクはセズクで「女に興味はない」といった顔ですましているのに余計に腹が立つ。

「さっさと着替えろよ」

二人に話しかけ、しばらく待つこと三分間。

カップラーメンが出来上がるぴったりの時間に連合郡の軍服を身に纏った二人が荷台から出てきた。

「きつついな……胸が」

おふ。

ぱつつんぱつつんじゃないですか。
じゃなくて。

「シエラ大きいもんね……」

「そんなことない。」

姉さんと同じぐらい」

「うん、分かった。」

分かったから黙ろうね二人とも」

「？」

何赤くなってるんだ、波音」

「っせーな。」

ほら、次行くぞ」

二人のお口にチャックをさせて深部に通じるドアをこじ開ける。

「さ、本番だ。」

さっさと終わらせてちゃっちゃと帰るぞ」

i
n
u
e
s.
.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

奇妙銃（後書き）

ブログから飛んできてくれた方、わざわざすみません。

こちらのほうが読みやすいかと思い

このような形を取らせていただきました。

そしてここまで読んでいただき本当にありがとうございます。
よろしければお気に入り登録していただけると嬉しいです。

（更に言うとポイントもry

ごほん、醜いたらありやしませんね。

感想はブログの方でもこちらでもどちらでもOKです。

好きなほうを選んでください（えー えーとか言わないでw

急にごめんなさい。

ここまで読んでいただき本当にありがとうございます。

二回言ったのは本当にありがたすぎて

皆さんに愛が伝わらないからだろうとの勝手な判断です。

はい、すみせんなんか。

それでは。

（ちょこつと外伝）仁と波音と過去話

あいつか？

ああ、今も親友さ。

小学生……たぶん一年生の時だったか。

考古学者の両親の子供として俺は生まれた。

時代としては選ばれた身分だっただろう。

連合郡の方針により約四十年ほど前から継続されている禁止事項。

超古代文明ベルカ帝国の技術をこの目で見ることを許されていたのだから。

まあこの時からの積み重ねであいつを後々に

面倒くさいことにまきこんだ可能性は否めない。

まあそんなことはどうでもいい。

人よりやんちゃな性格のせいかな俺は小学校に入学して短期間で
クラスの中心的立ち居地にいた。

みんなから園田君、とか仁とか呼ばれまくっていい気になっていた
のは事実。

……ただ一人を除いてな。

当然お分かりだろう。

そう、あいつこと永久波音。

このときの永久は無口でマイペース。

よく言えばそうなる。

悪く言えば暗くて、コミュニケーション不全。

一人でふらつと昼休みになると消え、授業開始前には戻ってくる。

家が近いというのにまったく遊ぶこともなかった。

中性的——場合によっては女子に間違われてもおかしくない顔のお
かげで

男子の大半からは女々しいと思われていたはずだ。

だが、詩乃から聞いた永久波音の過去を思えば仕方のないことだろうと思う。

「なあ、鬼灯さん。

永久君って昔……」

ある日の昼休みに俺は詩乃に話しかけた。

「んー？

波音のことかな？」

永久波音のことが知りたい。

なぜ人と触れ合わないのか。

単なる好奇心にせかされ俺は同居人の詩乃に永久波音のことを聞くことにしたのだ。

だが詩乃に聞いたあいつの過去は……。

小学生が聞いても心が痛むものだった。

永久波音の家族は交通事故で死んだ。

親戚に助けられることも無く財産だけ奪われ一人ぼっち。

永久波音の親父と親友だった鬼灯のおっさんが

いたたまれなくなつて永久波音を引き取ったのも仕方のないことだっただろうと思う。

小学生には通常ありえない黒いオーラも俺が波音に惹かれた一つの原因かもしれない。

まるで安っぽい小説やドラマのような過去を背負っている。

それが永久波音だった。

だが永久波音自身は悲劇の主人公という枠にはまりたくなかったんだろう。

クラスの中で静かに、のんびりと外を眺めたりしていた。

そんな大人しい性格が不幸を呼び込んだ。

クラスの中で五人ほどの男子が永久波音を校舎裏へと呼び出したのだ。

おそらくサンドバックにする腹だったのだろう。
いじめること自体に理由は必要ない。

『気に食わない』

『むかつくから』

その気持ちだけで人は虐める事が出来、また虐められる。

永久波音を呼び出したという知らせは園田も参加しないかと五人の主犯格——田中が俺に持ちかけた事で判明した。
今でも覚えている。

計画通り、俺達は放課後に校舎裏へと歩いた。

「バカなことはやめようぜ……」

まずい。

駄目だ。

そう思い何度もとめようとした。

「何だよ、園田。

怖いのか？

クラスのリーダーのお前が？

意外と臆病者なんだな」

からからと笑う田中は俺を弱者とあざわらった。

あんな女々しいヤツ別に虐めたところで問題ないって。

そういつて田中は他の四人に「なー」と問いかけた。

この日が不謹慎ながら俺と——波音のはじめての接触日だった。

校舎裏に律儀に波音はいた。

華奢な体に顔が中性的なおかげか

はたまた夕日との光のいたずらか

このときの波音は白いYシャツを風に遊ばせながら

おどおどしているように見える目で俺達六人を見ていた。

「永久、何で呼ばれたか分かるやろ？」

波音は大きく首を振った。

これからの自分の運命を悟っているのか必死である。

「分かんのか？」

俺達はお前がっ！」

肉が肉を打つ鈍い音がした。

思わず目を伏せた俺の鼓膜に波音が地面に倒れる音が聞える。

「気に食わんのや」

田中はそういつて起き上がった波音をまた殴った。

「……………」

恐怖がかかった波音の目を俺は直視できなかった。

田中が波音を殴る。

自分よりも大きい体を持つ相手に対する本能的な恐れからか
地面に張り倒されても波音は抵抗しなかった。

「園田もやれや！」

こいつほんまに抵抗せえへんで！」

楽しそうな一人の男子が俺をせかす。

地面にうつぶせになり白いYシャツが泥まみれになった波音。

「っ！」

一人の蹴りが波音の腹を蹴り上げた。

鳩尾にクリーンヒットしたのかその場に給食をぶちまける。

「うわっ、汚ねえ！」

こいつ吐きやがった！」

こうやってどんどんエスカレートしていくのだろう。

陰湿な出来事が起こっているというのに俺は……動けなかった。

ただ黙って未来の親友が蹴られるのを見ることができなかった。

今思えば波音のべらばーな所はこの時から存在していた。

地面の上にボロ布みたいになった波音は無心の目で俺達を見ていた。

まだ続けるのか？

その目はそう言っていた。

「こんのお……。」

嫌な目しやがって！

……うぎゃあああっ！」

一人の声が悲鳴に変わったのはそのときだった。

波音を殴っていた一人が頭から血を流していた。

波音はゆっくり立ち上がり手に持ったものを振り下ろした。

三〇センチほどの角材だ。

細い腕でそれを振り回している。

自分の体のおよそ三分の一を占める大きさのそれを簡単に。

「お、おい大丈夫か！」

と、永久！！

悪いんじゃ、悪いんじゃ！

先生にいいつけたる！」

田中が一步一步後ずさりする。

地面に倒れた一人の男の子は頭を手で抑えて泣き喚いている。

お母ちゃん、お母ちゃんと。

信じられないほどのスピードで足が動かない俺達の前に迫ってきた
波音は

また一人の頭を角材で殴りつけた。

頭に正確に振り下ろされた角材は確実にあいつをノックアウト。

それを見た田中は「化け物じゃ……」と呟く。

一人の男子はどこかへと逃げていった。

角材の先が赤に染まっている。

「……園田、そいつ捕まえといてくれ」

波音の声に殴られ俺は田中を反射的に掴んだ。

「ひっ」

怯える田中の顔が安堵に変わったのはそのときだった。

「お前らこれで終わりじゃ」

にやにた笑う田中の目の先にいたのは三年生の先輩達。
それも五人ほど。

勝ち誇った顔の田中。

さつき逃げたと思っていたヤツが呼びに行ったのだろう。

「永久、お前のこと忘れんからの！

このことは絶対に……」

「……………」

またやるの？」

田中の捨て台詞は波音の声でさえぎられた。

「またやるなら、俺は手加減せんけど」

そういつて角材を捨てた波音は信じられないスピードで田中の顔をぶん殴った。

田中の鼻から血が飛び散る。

波音の拳から放たれた運動エネルギーはすさまじいもので

田中の体をしっかりと抑えていたにも関らず放してしまった。

そのまま田中は三年生の輪の中に逃げ込む。

「お兄ちゃん見てたやろ！！！？？」

あいつらがいじめるんや！！！！」

三年生の輪の中に一人田中と似ている男子が立っていた。

間違いなく三年生の輪のリーダーだ。

丸坊主で身長は一三〇程度だっただろうか。

そのときの身長で一二〇あった俺からも田中兄はとてつもなく大きく見えた。

「お前ら俺の弟に何してくれてんや？
ああ？」

「……………」

波音は黙って田中兄へと突進していった。
当然勝てるわけがない。

他の四人の力も合わさりあつという間に地面に転がされてしまった。

「兄ちゃん、あいつも！」

園田もや！」

田中兄の眼が俺にターゲットを固定した。

まずいと思うよりも前に強烈なパンチが目の前にはじけた。
痛みと言うよりも驚き。

それと同時に視界がぶれた。

地面のひんやりとした感覚によって俺は倒れたことをはじめて意識した。

「園田、大丈夫か？」

細い腕にそのまま助け起こされる。

目の前に頬を腫らした波音の顔があった。

あいからわず女っぽいや顔してやがる。

「……いてえ……」

永久君、お前は大丈夫……だな」

「ん」

当然と言うようにうなづく。

「……勝てると思うか？」

ボロボロの俺達を見てあざ笑う三年生郡をみて波音は俺に尋ねた。

「無理だろ」

「……俺は戦うけどな」

思わず「は？」と声が出てしまった。

バカなのかこいつは。

いかれてれるんじゃないのか？

「バカだろ、お前……」

そう返すことしか出来なかった。

波音はにやっと笑い俺の後ろをそっと指差した。

そこにはさっき波音が角材を拾った場所。

使ってくださいと言わんばかりの丁度の長さの角材が散在していた。

「……少し手伝ってくれ」

「了解、永久君」

俺達は角材を握り締めると三年生へと立ち向かっていった。

……まあ当然負けたんだけどな。

勝てるわけではない。

格好良いこと言っておきながら結果がコレだよ。
まったく……。

その次の日の昼休みだったか。

あちこちに絆創膏を貼り付けた波音は学校に少し遅れてやってきた。
昼休みの時間に。

その日も、また次の日も波音は無口なままだった。

あの時みたいに俺に「手伝ってくれ」など言わなかった。
なんだったのだろうか、あれは。

いつか話しかけられることを俺は楽しみに毎日学校へ行った。
だが期待にそぐう結果は出てこなかった。

波音はいつも通りに静かに窓の外を眺めていた。
やがて一週間が経過した。

その間ずっと俺は考えていた。

波音のことを。

あいつとどうやって仲良くなるかということ。
また次の日の昼休みになった。

波音が学校に来たのを見計らって話しかける。

「永久……君？」

君を最後に付け足したのは俺を見た波音の目が

かすかに殺気を含んでいたからに違いない。

殺される。

汗が吹き出た。

「……園田か。」

何かようなわけ？」

殺気はすぐに引っ込んだものの波音は間違はなく俺を警戒していた。

いつこいつまでもが俺を殴りにかかってくるのか。

それが心配で心配で仕方がなかったのだろう。

もし自分の中に少しでも入ってくるそぶりを見せたら
すかさず噛み付く用意をしていたに違いない。

「い、いや……。」

あのさ……。」

「……………」

しどろもどろしているうちに波音は俺の横を通り過ぎ廊下に消えた。
少し悲しそうな目をしていた。

「園田君、大丈夫？」

すごい汗だけど……。」

同級生が俺の周りに集まってきた。

頬に手を当てるとぐっしりと湿った髪。

「永久はやバイよ。」

何で話しかけたのさ？」

流木遼がそつと耳打ちしてくる。

やバイ……？

確かに。

あいつはやバイ。

だけど悲しいやつだ。

あいつの殺気には寂しさとも感じる事が出来る何かがある。
そう確信した。

次の日も、また次の日も俺は何度も何度も波音に話しかけた。

そのたびに無視され何度もくじけそうになった。
あの時みたいに話したい。

自分でもわけの分からない衝動に駆られ何度も何度も波音に近づいていく。

話しかけて約一ヶ月が過ぎようとした頃だった。

「永久っ！」

「……………」

……………なんだよ園田」

いつもどおりの返事の波音に

言おうと思っていた台詞をぶつけることにしたのである。

この言葉はうまく言えば相手の心を溶かすが

下手をすれば激怒させるという諸刃の剣でもあった。

「…………俺と親友になってくれない？」

その時の波音の顔は今でも忘れられない。

驚愕でぐしゃぐしゃだった。

「…………何言ってるんだ？」

お前が…………俺なんかに？」

決して崩れぬ砦が崩れ始めた瞬間だった。

自分の返事に答えてくれた嬉しさもあいまって

「ああ。

俺と親友になってくれ」

「バカだな、お前は」

「知ってる」

その日俺は波音と一緒に帰った。

またその次の日も俺は波音と一緒に帰った。

家の近さも幸いしたのか、どんどん仲良くなっていく俺達。

波音をいじめようとしていた田中達は学校内で別の子に暴力を振るっているところを

先生達に見つかり小学生だと言うのに停学。

学校を皆そろって転校していった。

波音は思ったよりも面白いヤツだった。

というか悪知恵が半端なく働くやつだった。

いろんないたずらをあいつと一緒にしたつけ。

廊下に蠟を塗ったり。

わざとプレパレート落として割ったり。

人体模型にヒゲをつけたりもしたな。

二年生に上がる頃には波音の無口というラベルは綺麗に剥がれ

マイペースなのはあいからわずだったが明るく

誰が見ても好印象を与える少年になっていた。

あっという間に俺と同じくクラスをまとめる中の一人にもなった。

どうでも良いけど小学校二年生でのまとめアルバムを作る際に

アンケートをとられたのだ。

俺と波音は将来結婚しそうな人たちナンバーワンに選ばれた。

嬉しくねえ。

まあそれほど仲がいいってことだと考えてくれ。

決してホモではない。

本当だ。

まあこっから先は言わんでも分かるだろ。

「おい、仁遅いぞ！」

さっさと帰ろうぜ」

呼ばれたな。

「はいはい、今行く」

P Cを鞆に突っ込みよっこらせと立ち上がる。
ったく、世話のかかる相棒だ。

「仁！」

おせーって！」

「波音うるさいぞ」

「うっせえ、遼！」

詩乃も何笑ってんだよ」

「あんたらどこに行くにも一緒だねえ。
本当に仲良しなんだなーって」

「仁！」

はやく来いって！」

今行くっての……。

十秒ぐらいまでやアホ。

了

（ちょこつと外伝）仁と波音と過去話（後書き）

ありがとうございました。

波音と仁はこうして親友になったわけです。

と言いか波音さん、角材は駄目だろ。

でもどうしても波音さんが角材でえいっ☆ってやる場面が書きたかったのです。↑最悪です

全国の田中さんごめんなさい。

あやまるので角材チョップだけは勘弁してください。

それでは、ありがとうございました。

ラスボス

「……で入ったはいんだ。
いいんだぞ？」

そうさ、俺らはいつも一つ。
迷ったんだよ！

今回はちゃんとした訳があるんだ。
聞いてくれ。

右へ行ったり左へ行ったりとうろちよろした結果だ。
仁のP C見取り図も間違いだらけで役にたたないし……。

「ここ右じゃないかな？」

セズクが指差した方向は多分さっき行ったばかりだと思う。
もうお前は黙ってろと。

「シエラ、パンソロジーレーダーは全開なんだろう？
それらしい部屋はないか？」

「んー……ない。」

「どの部屋も全部普通の部屋」

どういふことなんだろうか。
少し意味が分からない。

シンファクシの情報が間違っていたのか？

そして今だから言うが俺はこの地下の湿っぽい、というか
閉塞感が大嫌いなんだ。

地下にもぐるたびにろくなことにあわないからな。

シエラのことしかり、メイナのことしかり。
ハイライトは地下といえはいいのか分かんが。
あれもまたしかりだ。

「シエラ、パンソロジーを妨害する何か最深部の部屋から出てるみたい。

何かよく分からないけど……」

メイナは目をつぶりながらシエラにそう教えた。
おいおいおい、それだろ。

お前らみたいな超古代文明の最終兵器の能力を
殺ぐものっていったら同じ超古代文明のものとしか考えられないだ
ろ。

「メイナ……それだろ……。

間違いなく……」

俺は全身脱力しながらメイナに教えてやった。
論理的に考えるんだ、お前ら二人。

「……え？

なんで……？」

「いや……ね？
だからね……。

（上記に示したのと同じこと言いました）」

「あつ、そっか。

私たちのこの能力を殺ぐ事が出来るのって言ったならそれしかない
もんね！」

はあ……。

もうこいつらはどうしてこうおばかなんだろう。

おばかん……。

「となると、最深部ヘレッツゴーだね？」

セズクさんがわくわくした表情で手をこすり合わせた。

仁は目頭を押さえつつ考えごとの体勢になる。

何かよからぬことでも考えているんじゃないだろうな。

「……大体最深部って言ったら

ゲーム上ではボスが待っていたりするんだよな」

「おいおい、仁。

そういうこと言うとりアルにそういう展開になるからやめろ。

変なフラグたてんな。

まあ今回の難易度はイージーだと思うけどな」

俺は天井を仰いで腰を伸ばした。

歩き続けていたので痛いんだわ、これが。

運動不足、というか一週間ぶっ続けで寝ていたのも影響しているかもしれない。

「まあありえない話でもないと思うけどね……」

仁は腕のPCを外すとポケットにしまいこんだ。

使い物にならないなら腕時計ぐらいにしか利用価値がない。

途中までは鉄製だった壁は気がついたらコンクリート製に変わっていた。

それにせっかく連合郡兵士に着替えたというのに誰にも会わないのはなぜだ？

そう考えながら右へと角を曲がったときだった。

「あっ！

痛たた……。

……っ！

ごめんなさい！」

誰かと思いつきぶつかってしまったのだ。

ちなみに相手はパンを咥えてはいなかった。

当然女性は尻餅を付いて転ぶ。

俺のほうが背が高い& a m p, 質量があるからな。

「こ、こちらこそごめんなさい！」

女性はビククリするほど早く起き上がり頭を下げた。

俺も思わず謝る。

頭は下げなかった。

下げる暇がなかった。

謝罪をしているというのに頭を下げないというなんとも奇怪な姿勢のまま固まっていると

金髪の女性が下げていた頭をゆっくりと上げた。

「ごめんなさい、私の不注意でした」

「え!？」

思わず息を呑んだ。

顔を上げてにっこりと微笑んだ女性。

俺の彼女さんのア Ril・ラミエガロイド・ナスカイアさんが立って
おりました。

タルワナルカ家の末裔。

そしてあの筋肉親父の娘。

仁、おい。

おい、仁、見ているか？

お前が変なフラグ立てたからだからな。

ラスボス出てきたぞ。

難易度がスーパードだったぞ。

いや、見方によっちゃウルトラハードだ。

「……………波音君？」

じゃ……………ないですよ？」

「えっと……………あ……………」

落ち着け、落ち着くんた。

動揺すると逆に疑われる。

「先、行ってるぞ……………」

ボソボソと俺の耳元で仁が呟き

まだ返事を返していないというのに仁を筆頭にみんなが俺を見放し
て逃げていく。

薄情者。

……………。

とりあえず目の前のラスボスを何とかせねば。

「……………お嬢さん何をおっしゃられているのか……………」

筋肉親父は確かすごい高い階級だったな。

敬語でしゃべっておけば言葉面ではごまかせるだろう。

それに今の俺の声は三十代のおっさん声。

ばれる確率は多分一割程度。

このまま押し切れるだろう。

「本当に波音君じゃないんですか？

確かに少し老けて見えますけど……」

「人違いですよ。

第一、波音……でしたか？

どちらなのか検討も付きません。

名前に考えて日本人でしようが……」

上っ面で冷静を装っているように見えるだろう？

でも俺は今心臓ばっくばく。

汗も少し流れてきた。

このしわがマジックだとばれたら……。

少し距離を置こうと思ってア ril が余所見をしている瞬間を計らって二歩ほど後ろへ下がった。

だがその少しの動きを見過ごすわけ無く

「どうして逃げるんですか？」

指摘された。

「人違いだって、お嬢さん」

にっこり笑ってやった。

それを見たア ril は顔を曇らせる。

「……波音君大丈夫かな……。」

私、会いたくなりすぎて幻覚でも見ちゃったのかも。
ごめんなさいね、少尉さん」

今更だが肩の紋章は少尉なんだ。

ちなみに仁たちは一等兵だったりする。

それはおいといてアリの言葉を聴いた瞬間
胸の奥がちくつとした。

ここでマジックをごしごし擦り落として正体を現したいのは山々だが……。

「その波音って言うのは彼氏ですか？」

ついでだしいつも聞けないことを聞いてやるとしようか。

アリのの中の俺は一体どんな印象なんだろうか。

「そうなんですけど……。」

帝国郡の爆撃のときに離れ離れになってしまっ……」

そういえばあのときにかっこよく（※要出典）空に消えたはいいが
なんやかんだで忙しくてメールの一通もしてなかったっけ。

無駄な心配をかけたな。

この仕事が終わったらメール入れといてやろう。

「波音君は天然が入ってて、かっこいいというよりは可愛い彼氏
なんです。

顔に似合わず活発なんですよ。

そしてかなりのバカなんです。

こんなに心配してるのにメールの一つもしてくれない」

はっは……テンションが上がるような下がるような……。

どっちにしろ俺は顔が赤くなるのを抑えることは出来なかった。
恥ずかしいったらありゃしない。

メールはこの仕事が終わったら絶対にする。

今、アリの言葉を聞いて硬く決心した。

「そ、そうなんですか……」

顔が赤いを見られないようにそっぽを向いてそう返しておいた。

地下の淀んだ空気がすばらしく澄み渡ったように思えてきた。

母ちゃん、俺明日もがんばれるよ。

見えないように小さくガッツポーズ。

「それでは、お嬢さん。

私はコレで……」

「あ、はい」

ビシッと敬礼を決める。

そのまま回れ右をして一刻も早く仁を追いかけるために駆け足の体勢に入った。

「アリル？アリル？

どこにいったのお？」

おそらくマダムだろう。

あののんびりとした声はそれ以外に考えられない。

「さようならを言った直後になんですが

お嬢さんどうしてここに？」

今思えば一番初めにこのことを聞くべきじゃなかったんじゃないだろうか。

動揺しまくっていたおかげで初歩的なことを忘れていた。

「私ですか？」

私はお父様とお母様についてきたんですよ？

——あれ？

聞いていませんか？

まあ別にかまいませんけど。

本当はこんな所に来たくなかったんですけど……。

しみったれた空気がちょっと嫌過ぎるので外の空気でも吸おうと思っ
て歩いていたところで……」

ア ril は裾に残っていたゴミを払った。

そして髪の毛のゴムをもう一度ぎゅっと締めなおす。

綺麗な髪の毛だ。

髪フェチじゃないぞ。

「少尉とぶつかったわけです。」

暇だったから散策しようと思ってうろついてみたのですが

一番奥の部屋のをへりで輸送するとかなんとかで……」

!!!!!!!!

なんだって!?

「ちょ、ちょっと待った!

へりで輸送!？」

俺は気がついたら大声を出していた。
だとしたら計画の大幅な修正は必須……。
いやもしかしたら奪うことすら出来ないかもしれない。
声が三十代のおっさんから地に変わったことなんて気がつか
なかつた。

「えっ？

さ、最深部のものをへりで……」

なんてこった……。

今すぐ仁達を呼び戻さないと……。

「じゃあ、お嬢さん私はコレで……！」

非常にまずい展開だ。

まさか俺達がここに来ることを分かっていたんじゃないだろうな。
その可能性はゼロに近いだろうが……。
走り出そうとした俺の腕をアリルが掴んだ。

「な、どうしたんですか？」

「―――ですね？」

「は？」

「波音君ですね？」

今「は？」って言ってみて気がついた。
俺、声が地に戻ってる。

「ち、違うッ!」

「違いますよ!

声が波音君ですっ!!!」

どうしてあなたがここにいます!?

しかもその変なマジックのしわなんですか!?

それに、生きていたのならどうしてメールしてくれなかったんですかっ!!」

This story cont

inues.

ラスボス（後書き）

うひゃああつ。

ア ril さん怖いですね。

いやはやなんともまあ……。。

知り合いの女の子もこんな感じなんですよ。

熱いというか……。ねえ。

それでは、ありがとうございました。

できたてほやほやをお届けしました。

また来週どうかお願いします。

P, S

お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。
これでまたがんばれます！

涙！

「さあ、今度こそ話してもらいます！
どうして波音がここにいるんですかっ！」

ア ril は逃げようとする俺の腕をがっちりと掴んで離さない。
つまり逃げれない俺は大ピンチ。

「お、落ち着け。
話す、話すから！」

「いいえ、落ち着きません！
これで落ち着いていられるほうがおかしいです！」

顔を真っ赤にして俺を上から押さえつけてくる。
ご、ごめんなさい。

「ア ril ？
どこにいったのかしらあ……」

やばい、マダムだ。
足音から考えてこっちに向かってきている。

「大体ですよ——キャッ！？
な、どうしたんですかっ！？」

直感的なヤバさを感じた俺は腕にア ril をぶら下げたまま
そばの薄暗い部屋に逃げ込んだ。
駆け込んだ勢いでドアを思いつきり閉める。

ここならしばらく時間も稼げるだろ。
マダムの気配をうかがい遠ざかるのを確認した俺はアリルに話しかけた。

「いいか、アリ……うつ!？」

急に壁へ思いっきり押さえつけられた。

この体のどこにそんな力があるのかと思うほどの強い力で。
思わず悲鳴を上げそうになった。

何をするんだと問い詰めようとアリルを見ると……半泣きになっていた。

「どうして……メールも電話もしてくれなかったんですか……」

「えっ……いや、すごいワケがあったんだ。

今話すと長くなるんだが」

大体百光年ぐらいは軽く突破するはずだ。

「今言ってください」

「今!？」

「今」

……まいったな、こりゃ。

百光年分話さなきゃならないのか。

「今言ってくれないとまた逃げるじゃないですか……っ!
もう私……こんなに長い間……ずっと心配するなん……てっ……!」

嫌なんです……波音君……」

ア Ril 目に たっぷり たまった涙が頬を伝った。
泣かれた。

「……………」

何も言えなかった。

無言のまましばらくア Ril が泣いているのを眺めるしか出来ない。
こういうときに自分の無力さが分かる。

こんなにも俺はア Ril を心配させていたのか。

ア Ril はこんなにも俺のことを思っていたのか。
胸の奥がほわっとした。

よく分からない衝動が体を突き抜けた。

全身の細胞が一斉に覚醒したみたいだった。

そして俺はア Ril を……抱きしめた。

「は、波音君……! ?」

「ア Ril ……ごめんよ。

確かに俺が悪かった」

「……そうですよ……波音君が悪いんですっ……」

まだ止まらない涙が次々と俺の服にしみを作っていく。
しばらくそのままア Ril の愚痴を聞く。

「波音君は……昔からっ……」

そうやって不満を聞かされていると改めて

自分のマイペースぶりが嫌になってきた。

アリの愚痴が途切れ途切れになったことを見計らって俺はアリに今からすべきことを言う。

「聞いてくれ、アリ。」

俺は今から大きな仕事……やるべきことがあるんだ」

「……………はい……………」

「絶対に俺がここにいる理由はそのうち話す」

「……………そのうち……………」

「あ、いや……………」

えーっと、だなぁ——」

「その大きなお仕事が終わったら——」

アリが腕を俺の背中に回してきてがっちり固定した。涙で濡れてはいるものの強い眼光が俺を取り巻いていく。まるで蛇に捕まった気分だ。

「絶対に私に話してくださいね？」

私ずっと待ってますから……………」

これは、アレか。

俺は絶対に話さなきゃいけなくなっちゃったわけか。なんということでしょう。

っと、そんなことを考えている暇ではない。

へりで運び出すんだ。

ただでさえ少ない時間が削られていく。
それにもうこいつに心配かけたくないな。
また心配かけたら今度は殺されかねん。

「……分かった、約束する」

これは男として当然の選択だろう。
俺はアリの目をしっかりと見据えて約束した。
アリは泣き笑い顔になり

「……気をつけてくださいね」

そういうと俺の背中に回していた腕を緩めてくれた。
俺は最後に強くアリに頷くとドアを叩き開けて走り出した。
この任務には俺だけじゃない。
帝国郡の未来がかかっているのだ。
分かりやすく数字を出そう。
全世界人口三十二億人のうちの帝国郡兵力二億人が助かるのだ。
いや、兵器工場などもあわせたらもつと行くかもしれない。
うっ……、胃が痛くなってきた。

「ハア……ハア……」

走っても走っても仁達の姿が見えない。
なんて速さなんだろう。
約十分ほど全力疾走の努力がちっとも報われない。
とんとんと俺のスピードは下がっていき
最終的には息切れで壁にへたれこむこととなった。
どこか別の場所で行き違ったのか？
それとも俺がまた迷っただけなのか？

どこかの部屋に入ったのかもしれない……。すぐその部屋とかにいるんじゃないだろうか。ア ril に捕まってまだ十五分ぐらいだぞ？

これだけ全力で走っているというのに追いつかないなんて考えられない。

何かがあったということでもいいのだろうか。

とりあえず最深部に行ってみるしか手はないようだ。

今から一つ一つの部屋を見て回るなんて……。

無理だろ。

なえかけた好奇心に喝を入れるように

「S n i e θ」

変な言葉が聞えてきた。

……今のはベルカ語か？

「S h i o t n n s」

一人……いや、二人……？

全力疾走による疲労で額から吹き出た汗をぬぐい、その正体を確かめるために

ゆっくりとその先の部屋へ向かう。

声のくぐもり方から考えて間違いなく部屋内にいるはずだ。

「K j o m a n n d」

『216』と書かれたドアの前に立ちつくす。

ベルカ語をしゃべるなんて、古代の遺跡に決まっている。

ということはあの装置の可能性が高いと言うことだ。

しっかりと腰に収まっている拳銃を無意識に握り締める。

敵という黒い考えを頭から払い、ゆつくりとドアノブを回してドアを開ける。

「……」

誰もいない。

いや、誰も……というのはおかしいか。

結論から言うとな例の銀色の「アイツ」が三匹。

部屋の中でうじゅうじゅうと動いていたのだ。

前回のニセ程大きくないとしても……。

不安だ。

大体直径二十センチと少しといったところか。

丸い形状だ。

それがベルカ語をしゃべっているもんだから気持ち悪い。

この部屋に仁は……いるわけないか。

……仕方ない。

素直に最深部で仁達を待つことにしよう。

のんびりとな。

静かに気づかれないようにドアを閉めた。

見なかったことにしよ。

ヘリが行ってしまったら作戦は失敗。

あいつらどこ行っただよ……。

inues.

This story continues.

涙！（後書き）

ありがとうございます。

今回は少し退屈かもしれませんが・・・。

ごめんなさい。

今からヒートアップしていきます。

なにとぞお付き合いの程を・・・。

ハインリヒ天皇帝さま

まじでどこに行っただあいっつら。

俺は最深部の扉の前でイライラしながら四人を待っているのだが。

一向に誰も来る気配がない。

だんだん薄気味悪くなってきたんだが。

地下のべつとりとした空気が仁達の失踪で現れた不快感を更にあおる。

絶対何か変なのに巻き込まれたのではないだろうか。

迷うことが増えたというか……方向感覚がバカになったんとちゃうだろうか。

これも一つの楽しみと化している俺はもう手遅れなのか？

とか考えながら扉の前で十分間。

いつあの装置がヘリで持ち出されてもおかしくないというのにあいっつらは現れない。

やんぬるかな、探しに行くか。

「よっこらせっ」

重たい腰を持ち上げたときだ。

「波音ー……」

仁の声がかすかに……いや思いっきり聞えた。

「仁っ！！」

仁、どこだよ！」

「波音ー！」

逃げてえええっ!!」

え、は、ちょ、え？

仁の声が次第に大きくなってきた……。

つまりだんだん俺に近づいてきているということ。

逃げてとはどういうことだ？

混乱する頭に四人が銀色の小さな玉に追いかけているのが見えて来た。

ぱっと見て二十はいる。

「お、お前ら一体どこに行ってたんだよ！」

俺はすごい形相で走ってる仁にたずねた。

だが返事は返ってこない。

変わりに

「今それはいいからどけえええっ!!」

といわれましてももうここは扉前でして。

ええ、逃げ場が無いんです。

したがって

「ギャー！」

仁の突進をモロに受けた俺は吹っ飛び扉に思いっきり肩をぶつけることとなった。

頭から星が飛びそうだ。

「いってえ……………」

おい、何するんだよ」

「ごめん！」

止まれなかったんだよっ！」

お前は車か。

俺は謝る仁から床でぽよぽよはねている銀玉に目を移した。
何でこいつらから逃げてんだよ。

どう見ても雑魚じゃねえか。

「こんなヤツ蹴れば一発だろ……」

俺は思いつき振りかぶって

「あ、波音！」

駄目だよ！」

仁が焦って俺を止めようとしたがもう遅い。

銀玉の表面を「そいつら噛むんだよ！」

「あいやー！」

痛みで苦しむ俺の足に銀玉がしっかりと食いついていた。

これだけ硬い軍靴を貫通するほどの噛む力って一体……。

それにこの形、色……。

どう見ても可変式鋼鉄細胞（ESSPX細胞）の塊じゃねえか。
さっき見た部屋にも三匹ぐらいいたぞ。

それより何で追われてんだ。

「まったく私の服がボロボロだねえ」

メイナが所々破れた服をつまんでため息をついた。

「なかなか綺麗だったのに」

「僕はあまり被害が無かったんだけどね♪
マイハニー、僕たちがいなくて心配したかい？」

セズクそれはお前可変式鋼鉄細胞からも嫌われてるってことでしょ
うが。

おいお前ら。

それはどうでも良いから

「とりあえず俺の足のこいつをはがせ。

シエラとメイナ二人いるんだからレーザーなりなんなりで
触れないようにして消せばいいだろうが。
痛いんだよ頼むから早くして」

懇願した。

「あ、そうだな。

言われて見れば確かに……。
触らなければいいんだ」

シエラがなるほどというようにうなづいた。
最近こいつらは富にバカが進行していないか？
話すたびにそう思うことが多くなってきたわけだが。
なんていうか、抜けてるんだな。
頭のネジが百本ほど。

「シエラ早くしてくれ……」

俺がシエラの前に足を差し出すと
シエラは銀玉を両手でしっかりと捕らえた。
触れないようにって言っただろうがよ。
人の話聞いてないなーほんとに。

「ん、行くよ」

シエラの両腕に青い光の線が現れ掌へと伸びていく。

「D i g e z x」（ごめんね）

シエラは掌でもがいている銀玉に一言話しかけると
一気に光を放出したようだった。

目を開けていられないほど強い光が銀玉を包む。
細めていた目を開けたときシエラの掌には何も無かった。

「おおー、なるほど。」

「僕もやってみようかな♪」

セズクもシエラのマネをしようと銀玉に近づく。
ぽよぽよはねている銀玉を一瞬で一匹捕らえ掌同士で挟み込む。

「いたたたっ!!」

そしてかじられている。
だから触れないように遠距離からレーザーでって……。
俺そう言ったよね？

「それっ!」

メイナも勢いよく銀玉を掴むとそのまま赤い閃光でぶち抜いた。ぶち抜いたといっても銀玉を貫通すると同時に消えるほど短いものだ。

忘れてはいけけないのはこの中は銃弾の一発も——ともう説明はいいか。

「コツが分かってきた」

シエラは足で一匹の銀玉を蹴り上げそれを片手で掴むと例の青い光で塵も残らないほどのレベルで分解してしまった。

メイナとセズクさんも負けない勢いでハンティング。

嗚呼可哀想な銀玉達。

世界で一番怖いハンターに追われる気分は最悪だろう。

調子に乗った三人のおかげで銀玉はとうとう最後の一匹になってしまった。

「ラストー！」

シエラが勢いよく掴みかかる。

銀玉はそれを必死にかわすかわすかわす。

「くそっ、ちょこまかとっ！」

銀玉がはねるはねるはねる。

飛んで回ってはねてかわしてしているうちにとうとう隅に追い詰められてしまった。

それをシエラが右手を伸ばしてひょいと銀玉を掴んだ。

「捕まえ——っと!？」

すると激しく身を振じらせ抵抗する銀玉。

一瞬捕まえた事で気を緩めたシエラの手から銀玉は飛び出した。
そして俺の足元にぴったりくつつく。

……ん？

俺盾にされてないか？

ぷるぷると小さい振動が伝わってくる。

怖がっているのだ。

そりゃ目の前で次々と仲間を潰されたら怖いわな。

「つかまえたっ！」

メイナが銀玉をがっしりと掴んだ。

そのまま俺から引き剥がそうとするが俺のズボンにぴったりくつついて離れない。

「にーにー！！」

「おい仁、変な声出すな」

「俺じゃねえ！」

「俺だったらキモイだろうが！」

遺憾の意を発動させた仁は真っ赤になって反論してきた。
違うのか？

「……シエラ？」

「僕が出すか」

で、ですよ。

「メイナさん？」

「ち、違うわよ！」

何で私が出さなきゃいけないんだか……」

「おいおいおいおい。」

セズクかよ、おいおい」

「マイハニー、その声が気に入ったならいくらでも」

「いらん」

じゃあ誰なんだよ？

「にーにー！！」

ほら、この声だよ。

耳を澄ませ方向を探る。

どうやら俺の足元——銀玉から出ているようだ。

意外というか、ギャップがひどいというか。

猫に近いんだけど……なんか違うんだよな。

メイナはぐいぐい銀玉を引っ張るが一向に離れる気配がない。

やれやれとさじを投げてしまった。

「離れないねえ。」

もういいやこのままぶちのめすしかないのかねえ」

銀玉が震える。

んーよく見たら結構可愛いかもしれない。

「メイナ、ちょっと待て。

なんかかわいそうになってきた」

「にー……」

なんか癒される声だし。

「え、でも波音……。

邪魔になるよ？

いいの？」

「にーにー」

あ、癒される。

かわいい。

俺の感覚がおかしいとかそういうことじゃないと思うのだ。

「ほら、こんなに可愛い声出してるわけだし。

直径二十センチ前後とお手軽だし」

俺は足に張り付いている銀玉をひょいと摘み上げた。

ぷにぷにしてて軟らかい。

無抵抗なのは覚悟したからなのか

それとも自分が助かったことに安堵しているからなのか。

「結構軽いし。

決めた、俺こいつ飼うわ」

全員がぎよつとした顔で俺を見た。

「か、飼うの？」

こいつを？」

仁が俺肩に手を置く。

落ち着けと目で訴えてくる。

「うん、丁度ペット欲しかったしな」

「波音、いいか落ち着いて考えろ？」

こいつは噛むんだぞ？」

それにだなあ……」

「まあそういわずに、な？」

俺がきつちり面倒見るし。

そのうち何かの役にたつかもしれないし」

「そーゆー問題じゃない気がするんだがなあ……」

俺はつまんだままの銀玉を肩に乗せた。

銀玉はそこを自分の場所だと理解したのかぴったりとくっつく。

「にー」

「ほら、可愛く見えて来ただろ？」

俺は最高の笑顔でその場で一回りしてみた。

肩の銀ちゃんがきちんと見えるように。

どや！

「全然。」

波音お前バカじゃないのか」

シエラはそういつて肩の銀玉を指ではじいた。

「にっ！」

かぷつと銀玉にかじられる前に指を引っ込める。

さすが最終兵器見事な反射神経である。

名前決めないとな。

そうだなあ。

「名前……何がいいと思う？」

なぜか若干引いている四人に尋ねてみた。

「銀玉」

「却下」

「ブラクラ」

「なんでブラウザクラッシャーなんだよ。
何より長いだろうが」

「ハインリヒ四世」

「カノッサの屈辱させんじゃねーよ」

「んー、銀だもんな。

金属神ルファーとかは？」

唯一まともに考えていたシエラが首をかしげながら言った。
「おおいいなそれは。」

「じゃそれで」

「早すぎだよ、ハニー。
もっと考えたほうが……」

ハインリヒ四世提案者のお前よりマシじゃ。

「よろしくな、ルファー」

「にー！」

かわいいなあ。

こういうのを究極の癒しというんだろうな。

「って！違う！

それどころじゃねえ！！

装置がヘリで運び出されるんだってのに！！

何がカノツサの屈辱だ俺のバカ！！」

思い出すと同時に恐怖がにじよってきた。

間に合わなかったらどうする？

もし連合郡に運ばれたりしたら？

一気にまくし立てたのは仕方ないことだっただろう。

何のんびり名前つけていたんだ俺は。

ハインリヒ四世に突っ込んでる場合じゃ無かった。

ちなみにハインリヒ四世は第一期一四二一年のローマ天皇帝だ。

第一期が千五百年で終わったから今から約二千百年前の人である。

世界最初の科学者でもあつて……。

あーだからそんな暇じゃないってのに。

「すまんちょっと混乱してた。

装置がヘリで……」

「波音、二回目だぞ。

大丈夫か？

それにそのことならシンファクシから連絡があつて……」

シエラが俺の額に手を当てる。

熱があるかどうか確認でもしているのだろう。

「私たちがちょっと寄り道してきたのはそういうこと。

今から説明するから聞いて」

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

ハインリヒ天皇帝さま（後書き）

ありがとうございました。

タイトルを見て「新キャラ!？」と思った方。

ごめんなさい。

変わりに波音さんの方に新しくペットが追加されました。

可愛がってくれると嬉しいです。

イメージでは某ゲームのピンクボールみたいな形だったりします。

お気に入りに入れてくれた方、ありがとうございました。

これからどうかよろしくお願い申し上げます。

外れて欲しい現実と架空世界

「仁、図を出して」

「あいよ」

仁はポケットからP Cを引っ張り出すと
びっぴっといじり、ほれと俺達に見せた。

「今僕達がいるのがここ」

シエラが人差し指で赤丸を叩く。

「で、さっきまで僕達が行っていたのがここ」

なんら他の部屋と代わりのない部屋が赤くマークされる。

「波音がアリルと戦争しているうちに……」

「にーにー」

おー、よしよし。

癒されるではないか。

「聞ってる？」

甘えてくるルファアをなでながら

「聞ってる聞ってる。」

それで？」

そう返した。

本当に聞いているのかな、とつぶやきながら説明に戻るシエラ。

「さっきと同じところから話す。

一応な。

ぜってー聞いてなかったから。

——ごほん。

あなたがア ril と戦争をしているうちに

僕はシンファクシから届いたメールの指令をこなしていたんだ。

『連合郡本部とそこ（現在地）の通信が激しくなったとの事。

もしかしての場合に備え、情報を収集せよ』」

なるほど、通りで。

通路を探してもいなかったわけだ。

「僕はコントロールルームに行って何気なく尋ねた。
いったいどうしたんだ？　ってね」

シエラからバトンを受け継いだメイナが続きを語る。

「そしたらへりで装置を運び出すって言うんだもん。
私びっくりしちゃってさあ……」

メイナはそういつて目を細めた。

ミスったんだな。

まあその後は何か知らんがこいつらはこいつらで頑張っていたのだ
ろう。

探すって言うってもシエラのレーダーとかで簡単に見つけることは出

来たはずだ。

「で、波音のところに行く途中で面白いものを見つけてね……」

俺の肩に居座っているルフアーをなでながらセズクが言う。

「にー！」

がぶり。

「あいやーっ！」

なんだその叫び声。

「で、そのへりはいつ出発なんだ？」

「それが……」

シエラはてへ☆というように頭をなでた。
そうか、入手できなかったか。

「ごめん」

「誤らなくていいよ。」

ま、ずっとここで待機しているわけにもいかないし。
全員そろったことだし中に入って現物を拝ませてもらおうぜ」

そういつて俺は仁に指示を促した。

「さって、ようやく俺の出番ってわけだ」

「頼む」

「任せろ」

仁は扉の前に立つとポケットからひとつのケーブルを取り出した。どれだけお前のポケットには物が入るのかと突っ込みたい所だがやめておく。

なぜなら仁は本気だからだ。

本気の仁を怒らせるとパソのHDDに六TBぐらいのエロ動画を無理やり入れられたりするからな。

（経験者は語る）

仁はケーブルを扉の小さな穴に突き刺した。

「後五分ぐらいで出来る。

のんびり待っててくれ」

電子音を響かせながら仁のPCの液晶についている十二桁ほどの文字がものすごい勢いで回転をはじめた。

「ほう——全部で十一桁か。

ちよろいちよろい」

いやはや俺には一生理解できないことをしていらっしゃる。

ぼーっと眺めているとあっという間に一桁目が『2』で停止した。早い早い。

「で、へりってどんなへりなんだ？

運び出すのに必要な馬力を得るためには相当でかいと思うんだけど」

扉は仁に任せて俺達は仕事の話に戻る。

「うーん、そこが分かっていたら楽なんだけどねえ。
手に入れたのはルートの紙ぐらい。」

まあこれも中の装置を今奪ってしまえば無用なんだけどね」

メイナは胸ポケットから一枚の紙を取り出した。
なかなか精密な地図である。

サイズはA4。

その大きさの地図に赤い線でルートが刻まれていた。

「机の上においてあったのを奪ってきたんだよ♪」

セズクが付け足す。

罨じゃねーの、おい。

こいつらは疑うということをあまりしないからなあ。

とりあえず極秘のルートだろ？

そんなにぼーんと放っておいていいのか？

どうなんだ、連合郡。

ひょっとして連合郡の皆様もバカなのか？

真剣に悩む。

そんな折、ぽんと肩に手が置かれた。

「開いたぜ」

仁がぐっと親指を立てて見せる。

開いたのか。

「お疲れ様」

仁が扉からコードを抜くとガゴンと大きな音がしてゆっくりと扉が開いていく。中は真っ暗でなんも見えん。

「これのほかにセキュリティは？」

仁に尋ねてみた。

入った瞬間びりびりびりとかいうのは勘弁な。

「ない。

ゼロだ」

待ち伏せか？

ゆっくりと銃に一発目の弾を込める。

いざとなったら装置を壊して脱出するぐらいはやってみせる。

敵は壁に銃弾が当たることを恐れてそう簡単には撃ってこないだろう。

だからその一瞬の隙について……。

一步一步進んでいく。

右手は銃に。

左手は探るため前に突き出してある。

「まじでなんも見えないな。

この部屋がどれぐらい広いかさ分らん」

愚痴をたれながら歩く。

と、こつんと前に伸ばしていた左手にひんやりとしたものがぶつかった。

これが装置だろうか。

「シエラ、レーダーは……。

使えないんだったな。

仕方ない、ペンライトつけるか」

「いや初めからつけなよ……。」

メイナに突っ込まれた。

うむ、確かに。

ペン型ライトを捻って明かりを灯すとそれを左手のぶつかったものに向ける。

「おお……。」

ぼんやりとした全体図を浮かべるため装置の周りを三周ほど回った。
なるほどね。

形は軽自動車に酷似している。

大きさは少し小さいが。

なによりトラックの荷台に積みそうでよかった。

さて、装置の大きさは分かったわけだがどうやって運び出そうか。

「メイナ、この装置の大体の重さ分かるか？」

「えーと……。」

約六百キログラム」

とても持てる重さではない。

トラックに一度戻ってロープで引っ張るか？

でもそうしたら装置に傷がついたりするからな。

ぱっと天井のライトに明かりがついた。

あああつ、目がああ！

「おー、少尉か。」

「お出迎えご苦労様」

扉から現れたのは筋肉隆々の……。
「ってかア ril 父……。」

「は、はっ！

「ご苦労様であります！」

全員そろって敬礼を返す。

ア ril 父はつかつかと俺達の前に歩いてきて答礼した。
敬礼を解除すると愛しいのだろうか。

筋肉をなでなでしながら

「んー、今からこの装置をへりで運ぶわけだが……」

ア ril 父は話し始めたのである。

「どんだけ鍛えてるんだあんた。」

「今から運ぶ？」

「嘘だろ。」

「今回のへりはすごいぞ？」

「なんて言っただって最強のへりなんだからな」

最強のへり？

「ってことは武装へりみたいな類だろうか。
ガンシップ？」

「天井シャッター開け！」

ア ril 父が唐突に叫んだかと思うと
それを合図に天井がゆっくりと開いていく。
ゆっくりと空が見えてきた。

「あれがヘリだ」

ア ril 父の指差した方から……。

ああ忘れもしないあのエンジン音が響いてきた。
外れて欲しい。

そういった願いはむなしく突きつけられた現実に崩れる。

《円盤型超空巡洋戦艦メガデス級――》

「こ、これを使って輸送を……？」

「そうだ」

t i n u e s .

T h i s s t o r y c c o n

外れて欲しい現実と架空世界（後書き）

インフルにかかりました。

げほげほ。

死にそう。

でもがんばって更新しましたよ！（ドヤッ

お気に入りに入れてくれた方、本当にありがとうございます。
感謝です。

それではここまで読んでいただきありがとうございました。

Next Bad

嘘だろう？

だがあの死神は紛れもなくそこに存在していやがる。

あの赤い光も大量の武装も。

甲高いエンジン音も、鋼鉄の鈍い輝きも。

駆逐艦からみたあの超兵器そのままだ。

それがここから見えるだけで四機。

この穴を中心に一機が。

その一機の周りを護衛のつもりか、三機がぐるぐると回っている。

「どうだ、少尉。

圧巻だろう？」

ア ril 父がふふんと鼻を鳴らす。

確かに声が出ない。

本能的な恐怖も更に追い討ちをかけている。

シエラとメイナも流石に見たことがないのだろう。

一隻だけかと思ったらまだあったんだからな。

ビックリだよ。

「あ、あの……すばらしいです。

もうなんというか、す、すばらしいです」

どもりながらも感想を述べる。

それを聞いてア ril 父はうんうんと満足そうに頷いた。

「そうだろう、そうだろう。」

なんといっても連合郡すべての超兵器をここに集合させたのだからな」

なんてこつたいですよ。

よくそんなことが出来たものだ。

しばらく超兵器が旋回しているのを眺めている。

四機——なんという威圧感だろうか。

まがまがしいまでの殺気が放たれている気がする。

もしアレが敵として攻撃してくるなら逃げ切る自信なんてゼロだ。

ガガンと、金属音が鳴り響きぴたりと穴の真上に一機の超兵器が

倉庫から伸びてきたアームにより固定される。

円盤型の機体の真ん中付近に穴が開いたと思うとそこから二十本ほどの鎖が降りてきた。

「さあ、これをこの装置の下の土台にセットするんだ。

しっかりと固定したかどうか引っ張って確認もするように。」

ア ril 父が一本の鎖をほれ、と俺に投げて渡す。

「え、いや、あの……」

ずっしりとした鎖を受け取るもやり方がわからない。

「どうした、早くしろ」

たずねようにもこの気迫ですよ。

ええい、当たって砕けろだ。

「は、はい……」

俺は装置の下に敷いてある鉄板をしげしげと眺めた。
所々に穴が空けてある。

ここに鎖のクレーンのようになっている部分を引っ掛けるのか。
一つだけで直径二十センチはあろうかという大きさの鎖を引きずって
装置下の鉄板の穴にクレーン部分を引っ掛けた。

自らの手で、自らのいただきもうしあげようとしているものを
こうやって一生懸命固定しなけりゃならないなんて……。

「あ、あの、すいません。

まさかあの超兵器の下に

ぶら下げたまま運ぶ……ってわけじゃないですよね？」

一つ目の鎖を固定し終わり、二つ目の鎖をア ril 父から受け取ると
きに

思い切って尋ねてみた。

「は？

一体お前は何を言っているんだ？」

ア ril 父はふーとため息を付き額の汗をぬぐった。

といきなり、俺をその強靱な眼力でにらみつけた。

足がすくむ。

怖い。

「こんなに大切な物をぶら下げたまま運ぶわけ無かろうが。
もう少し考えてから発言したまえ」

お、怒ってる。

普通の連合郡兵士がそんなこと聞くわけない。

ア ril 父の言うとおり、もう少し考えてから発言すればよかった。

「はっ、も、申し訳ありません……」

まったく――とぼやきながら作業に戻っていきなさる。

鉄拳が飛んでこなかったただけよかったと思うべきだろう。

この装置が超兵器の中に収納されたらもう完全にアウト。

取り返すなんてこと絶対に無理に違いない。

「よし、固定できたな。

良いぞ、引き上げろ」

ア ril 父がそういつて右手を上げると

装置がゆっくりと鎖に引っ張られ超兵器内へと登っていった。

今ここであの装置の鎖を切って持ち帰りたいという衝動が突き上げてきた、ものすごく。

俺は今、自ら虎の穴の中に獲物を突っ込み、それを気に入った虎から

またその獲物を奪い取る事と等しいことをしてしまったわけだ。

装置は超兵器の中に消え、分厚い蓋がされてしまった。

世界一安全な金庫に入ってしまったわけだ。

「少尉、中を見ておくか？」

急に話しかけられたと思う。

「は、はっ!？」

俺は見事に動揺してしまったがお咎めは受けなかった。

ア ril 父は苦笑した顔でくいと顎で超兵器を指す。

「あの『ホドデデス』の中をだ。
良い記念にはなと思うが」

いたずらっぽく笑う。

「あ、え……いえ……」

ア ril 父はどうだ？といった風に首をかしげた。
思わず目を逸らす。

「出発まであと八時間もある。

見ておいて損するものではないぞ？

私は何度も見ているのだがなんとも神秘的なのだ、これが。

一機撃墜されたというが……」

見てみたいっちゃ見てみたいさ。

超古代文明の塊だからな。

それに中からならあの超兵器の弱点を一つや二つほど見つけること
が出来るかもしれない。

ホドデデスとかやらを撃墜して、装置を奪い去ることも可能かも。
となれば、返事は決まっている。

「わ、わかりまし「冗談だ」

へ？

返事の途中でさえぎられた。

「ん？

どうした、そんな顔をして。

冗談に決まっているだろうが。

はっはっはっは……」

む、むかつくっ——。

せっかくの俺の覚悟をうやむやにしゃがって。

だがいい情報を得ることが出来たのだ。

出発まで後八時間あるということ。

よし、まだ巻き返せるかもしれない。

「それでは、私達はこれで……」

「うむ」

アリル父に敬礼して、最深部の部屋から出た。

しばらくそのまま歩き、十分に離れたところで口蓋を切ったのはシエラだった。

「まさか、あんなにたくさん存在していたなんて」

その声は驚嘆というより不安に溢れている。

俺もびっくりしたさ。

「予想外だったねえ……。

いやはや……」

メイナもふうとため息をついてデコに張り付いた髪の毛を息で飛ばした。

セズクはもう何を言えば良いのか分からないのだろうか。

ぼーっと空を見つめている。

考え事をしているようには見えない。

「なあ、『メガデデス』の同型艦っていくつあるんだ？
百機とかは流石にないと思うけど……」

どうな

巡洋戦艦なんだからそんなにたくさん存在しているわけでもあるまい。

「僕が知っている限りは十二機。

それも後期になってゆくにつれて改良されていくから

一番艦のメガデデスより強力な兵装をつんでいる可能性が高い」

シエラが頭に手を当てながら答えてくれた。

あの四機は来るときに洞窟内で見たあの四機だろうか。

もし違うなら連合郡は少なくともメガデデス含め九機。

ベルカの超兵器を手に入れていたことになる。

そりゃ帝国郡が勝てないわけである。

帝国郡も一つや二つ程度は持ってもよさげなんだがなあ。

ないの？

一つも。

あつたら連敗はしないよな。

当然、装置がホドデデスに持っていかれても

援軍なんて期待しちゃいけないだろうな。

援軍だしてくれるならはじめっから俺達に頼みはしないものな。

やっところさトラックにたどり着く。

こっちの武器はこのトラック一台か。

オクトパスミサイルと、ロケットエンジンと、ドリル。

その他たくさんあるがどれもこれもあの超兵器とタイマンをはれる

かっていったら無理の一言に尽きる。

いや、武器で言えばこちらには最終兵器がいるけど。

総合的に見たら上なんだろうけど、なぜか負ける気しかない。

なして？

「とにかくなにか作戦を拡げないと。

メイナ、あの地図出してくれ」

トラックの荷台に飛び乗る。

十人ほどの眠らせた兵士達が全員そろっているのを確認して

「はいはいさ」

メイナから渡されたヘリの進路図を眺めた。

しばらく森を通った後、山脈を抜けるのか。

ありがたいことにそれほど高度はあげないようだ。

秘密兵器だもんな、仮にも。

自国民にすらばれると厄介なのだろう。

先回りするか？

いや、無理だろう。

うーむ……。

「みんな、どうすればいいと思う？」

「わからないね♪」

分かったから、セズクさんはちょっと黙ってて。

i
n
u
e
s.

N e x t B a d (後書き)

ありがとうございました。

新しくお氣に入りに入れていただいた方。

本当に感謝です。

さて、この次、波音はどうするのでしょうか。
お楽しみに。

P・S

地震、大丈夫でしたか？

がんばれ。

ごめんなさいこの一言しかいえません。

少しでも電力を節電いたします。

東北地方の方々がんばれ！

もし氣分を悪くされた方がいらっしゃったらごめんなさい。

今日、小遣いの五分の一である五百円を募金してきました。

少しでも役にたちますように。

無謀なる作戦

「さて、どうしたもんかね」

ひたすら地図とのにらみ合いが続く。

方法が思いつかん。

もし、ホドデデスを叩き落してしまうとなると装置が危ない。

こちらには二人の最終兵器がいるのだから

ホドデデス自体を攻撃したところで負けることはないんだけど。

ホドデデスの中にもぐりこんでなんとか装置を回収。

そして脱出。

でも約六百キロもの装置をどうやってトラックに乗せる？

あー、不可能なことが多すぎる。

「まず！

ホドデデスに！

潜入しなきゃ駄目なんだよね！」

耳元で叫ぶなメイナ、うつせ。

そう、まずその問題なんだ。

ホドデデス内の人間に化けて侵入することは出来るんだが装置を運び出すことが出来なくなる。

「ホドデデス内にもぐりこんで扉開けて鎖切って。

下からトラックで追いかけて」

「いや、無謀すぎるだろ」

「そうかなあ……」

あいからわずお前は行き当たりばったりか、シエラさんや。」

「この地図によると――。」

ほら、森の中を通る時が絶好のチャンスに見えるだろ？」

全員が仁の説明に頷く。

「連合郡のメインコンピューターにハッキングして調べたんだが
この辺りは地面がぐしよぐしよなんだと。」

トラックにスパイクかなにかしらんが多少なりそれが付いている
と仮定したところで

ホドデデスの飛行スピードに追いつけるわけがない。

たえろケットエンジンを噴かしたとしてもそれは無理。

第一そんなに長い間噴かせるもんでもないだろ？」

合理的な説明ごちでした。

そしてスパイクじゃない。

ホイールニードルだ。

そこ間違えんじゃねえ。

「トラックが下で待っているっていうのは？」

タイミングを見計らって……」

メイナさんのアイディアだ。

それいいかもしれない。

「いいね、それでいこう―」

セズクがもうどうでもいいですといった顔で賛成する。

お前はもう少しやる気出せ。
なんでそんなに低いんだテンション。

「それも無理。」

六百キロもの重量が高度百二十メートルから落ちてくるんだぜ？

今、このトラックがあゝの森に行った所で十分に走れる所は
森を切り開いて作られた一本の道だけ。

それ以外は絶対に百パーセントいや一億パーセント無理」

仁の説明がメイナにガスガス刺さる。

メイナさんはちよつと涙目。

そこまで徹底的に潰さなくてもいいんじゃないかな……。

さてそうしたら余計にどうするのか考えなくては。

作戦……ね。

今思いついたのでいいなら……あるにはある。

時間かかるし当たって砕けろになるんだけど。

でもまあ……。

「仕方ない。」

この俺、永久波音様が今即興で考え付いた作戦でいこう」

俺は地図から目線をはがし全員を眺めた。

「即興!？」

「即興。」

「今考え付いた」

作戦なんて名前だけだ。

作戦という羊の皮を被った無謀という名の狼だ。

「実際は作戦とはとてもいえないものなんだけどな。
うまくいったらお慰みってとこだ」

今のはフラグだ。

大体成功率一パーセントとか言っとくと成功するんだ。
それに俺の作戦はこいつら以外の他人が聞いたら

「Oh, youはcrazyねー」

って言うに違いなほど無謀な物なんだ。

さて全員が興味を示したところで説明に入るとしよう。

「つまりこうなったああなって」(説明中)

○の中の文字通り全員に説明する。

「あーでこうなってうーあー」(説明中)

全員にちゃんと伝わっているのかどうか心配だが
多分大丈夫だろう。

変な確信だけはある。

「うんたらだっただったはい(説明中)。

以上、説明終わり。

何か質問あるやつ挙手」

俺はドヤ顔で見下ろした。

全員何か無理やり吞まされたような顔をしている。

「Oh……crazy……」

仁がぼそっとつぶやいた。

だからこの作戦は羊の皮を（略）。

「質問はゼロでいいな？」

じゃあさっそく作戦に取り掛かるとしよう」

俺は両手を叩き合わせてほら行動開始だと合図した。

「了解。

もうなんか考えるの面倒だからそれでいい」

シエラは物分りがよくて助かる。

早速行動に移しているじゃないか。

麻酔で眠らせた十人をひっぱりはじめている。

まずこの十人を別のトラックに移す。

いつまでもこのトラックの荷台を占拠されていては邪魔にしかならない。

見つかったら面倒だし、目を覚まされても面倒だ。

じゃあ眠らせて隠してまえばいい。

そこで十人にたっぷりと睡眠薬を投入した。

これで二十時間はぐっすりだろ。

「全員トラックに乗れ」。

出発すんぞ」

俺は運転席に、仁は助手席に。

残りは荷台に詰め込み、さあ出発だ。

キーを回してエンジンをかける。

ギアをRに入れバック。

ミラーで後ろを確認しながらハンドルを左にきって車体を旋回させる。

ぶつけないように慎重に。

倉庫の扉から出たところでギアをDにいれアクセルを踏んだ。

ラジオのスイッチを入れボリュームを上げる。

番組が変わり、ロック調になった音楽を流しながらスピードを上げた。

蝉がうるさい。

ずっと来た道を少し戻り、途中で右に曲がる。

ここから一気に山脈へ向かって運転を続けるのだ。

距離は約八十キロと案外お手軽。

時速六十キロで木々の間を縫うようにして作られた道を走る。

「あの山脈だろ？」

うひゃー……怖いなあ……」

仁が遠くに霞のかかった山脈を指差した。

「んー、そうそうそこだ。

標高六百二十メートル地点だな。

小さく見えるけど立派な山脈の裾を担ってるらしい。

詳しくは興味ないから知らんけど。

そこその隣り合っている山との隙間をホドデデスが通るんだとさ」

俺は小さく折りたたんだ地図を片手でひらひらさせた。

この地図が偽物じゃなきゃの話だけだな。

間違いだったらどうすんべーなんて考えない。

ここまできたんだ、一気に行くしかないだろ。

「のどかな場所なだけどな……。俺こういうところに家作って住むのが小さいときの夢だったんだよ」

「あれか。」

木の上のお家ってやつか」

「そそ。」

誰もが一度は思うことさ」

御伽噺は小さいとき誰もが読むものだからな。多少なり影響を与えられるのは仕方のないことだ。それに小さい子の発想力は物凄いからな。

「俺はPCで詳しくあの山について調べておくよ。帝国郡の衛星のおかげでどこでもネットが使えるのはすばらしいね」

「あーよろしく頼む。」

俺は運転に専念するでしょう」

のんびり運転して約一時間とちよつと。

山のふもとにたどり着いた。

このまま一気に駆け上るのだ。

「一応ホイールニードルとかやらを出しておいたほうがいいよな。よいしょつと」

ブレーキをかけたトラックを小さな空き地に止める。

ハンドルの横のカバーを空けてH N N Dとか書いてあるボタンを押した。

トラックから降りてどうやってタイヤからニードルが出てくるのか確認――

というか観察する。

見て見たいじゃん。

変形とかもう熱すぎるだろ。

トラックの横から棒のようなものが出てきたかと思うと地面にざっくり刺さった。

「おお……」

小さく唸ってしまふ。

しばらくしてトラックのタイヤが一輪車内に吸い込まれたと思うとすぐに

たくさんのとげとげがついたタイヤが新しく出現した。

思ったより地味でちよつとがっかりだが男心をくすぐるにはいいもんだ。

このトラックは期待を裏切らないでいる子なのだ。

そんな感じで四輪全てがニードル付きになったところで再び運転席に駆け戻った。

「いやー良いもん見た。

さて行くぞ！」

がたがた揺れる不安定な道をゆっくりと慎重に進んでいく。

「良い景色だなー」

後ろはのんきでいいな、ホント。

運転してるこっちの身にもなれてんだ。

「気楽だよな、あいつらは。
なあ……、仁」

「え？」

「お前、なにサンドイッチ食ってんだよ！
ピクニック気分か！
なあ、ピクニックか！？
ピクニックなのか！？」

「まあそう怒りなさんな。
ほれ……はいあーん」

「ありがと☆」

サンドイッチうめうめ。

「あとどれぐらいでつきそうだ？」

「もう少し……見えた。」

帝国郡の衛星が正しければあそこだろ」

川が削りに削った深い谷が目の前に口を広げていた。
一箇所大きく突き出しているところがある。
そこを前にしてトラックを止めた。
分かりにくいよな、説明。
図で表すよ。

←一箇所突き出した部分

崖 深い 崖
↑前□□□
→トラック

大体こんな感じ。

お分かりいただけただろうか。

わかんなかったらごめんね。

さて、この場所の下をホドデデスが通るのは約五時間後。
川の水面ギリギリを通るらしい。

クレイジーな作戦を我ながら立ててしまったものだ。

トラックから降りて崖の下を見下ろす。

ここから一気に飛び降りるわけだ。

もしばっちりのタイミングでなかったら

このトラックごと一気に川に落ちて終了。

おそらく成功する確率は十パーセント。

これもフラグだ。

多分成功するためには必要不可欠な言葉だからな。

inues.

This story continues.

無謀なる作戦（後書き）

どうもありがとうございました。

お気に入りに入れていただき、感謝の雪です。

さて、ところでここであつと宣伝です。

この『怪盗な季節☆』の外伝の存在をご存知でしょうか？

名前は『しゃくでば！』といいます。

『しゃくでば！』オリジナルのキャラクターも存在しています。

そして全員キャラが崩壊していますw

URL←です。

<http://ncode.syosetu.com/n2021p/>

こちらは本編とは違い毎週金曜日に更新となっております。

もしよろしければ読んで見てください。

『怪盗な季節☆』では見ることでできない波音のボケや

シエラ、メイナの突っ込みが見れますよw

最終兵器以外にもベルカ帝国の遺産の兵器の女の子が出てきます。

そして何より挿絵が豊富w

興味がありましたらなにとぞどーぞどーぞです。

長くなりましたが、ここまで読んでいただきありがとうございます。
た。

激突！決めた覚悟と空飛ぶ俺達

「とりあえずサンドイッチでも食いながらのんびり待とうぜ」

まだ残っていたのかサンドイッチ。

俺にはハム頼むぜ。

シエラがサンドイッチとお茶を俺にほいと渡してくれた。

そのまま目を隣にやるとセズクがラジオを聴きながら

サンドイッチをハムとパンとに解体しながら食べている。

それじゃ意味ねーだろバカ。

もし装置を奪うという目的が無ければただのピクニックにしか見えない。

のんびり食べながら作戦の最終確認をする。

だいたい二時間ぐらいたっただろうか。

流石に何回も作戦の打ち合わせは飽きた。

だから持ってきたトランプで大富豪をしているとやっ

とホドデス艦隊をシエラのレーダーが捉えた。

「来た！」

え？

早くないか？

ちょっとまって今から革命するんだけど。

それに後二時間ぐらい残っているはずじゃ……。

——あ。

ドライブでの移動時間考えてなかった。

だから早く感じたんだ。

「急げええっ！！」

トランプを放り投げ全員が所定の位置にあわてて飛び移る。

俺は運転席、仁は荷台でしっかり体を固定する。

シエラを助手席に持って行き、セズクとメイナは仁と同じように荷台に放り込んでおく。

エンジンをかけ、静かにその時を待つ。

トラックのシステムは全部オールグリーン。

健康すぎる状態だ。

「シエラ、あいつのスピードは？」

仁がP Cにデータを打ち込むために聞く。

「ぴったり五百キロ」

「よっしゃ」

液晶スクリーンをタッチしながらデータを入力しているのだろう。

俺は前向いてるから見えない。

発車……というか発射のタイミングは仁が教えてくれる。

「波音、今から秒読みに入るぜ」

キラッと夕闇に光るものが窓から見えた。

目を細めて正体を確かめる。

ははーん、間違いない。

ホドデデスの艦隊だ。

赤い光を下から噴き出しつつ静かに回転しながら向かってくる。

「二十一―十九―……」

二百メートルちょいの円盤型の巨体を持つベルカの巡洋戦艦。防御力は計り知れないが多少なり装甲が薄い部分があるはずだ。例えば機銃砲塔とか。

「五——四——……」

さてそろそろだぜ。

頼むぜ、みんな。

ホドデデス艦隊の甲高くなってきたエンジン音が鼓膜を叩く。あんなに遠かったのにもうここまで来やがったか。

「三——二——……」

汗ばんだ手でハンドルを握っているおかげでぬめるぬめる。

ホドデデスと護衛のまがましい雰囲気を放つ船体の細部までがくつきりと肉眼で確認できる距離まで近づいてきた。

今からあれに乗り込むんだぜ。

無鉄砲すぎるだろ俺。

まあこんだだけ心強い仲間がいるんだ。

多少なり大丈夫だろう。

「——Go!!!!!!」

仁の声と同時に俺はアクセルを思いっきり踏みつけた。トラックは地面をそのタイヤで削りながら崖へと走る。

「飛ぶぞっ!!」

声を久しぶりに腹から出した。

その勢いでギアをWDに入れる。
今二本のドリルが突き出したはずだ。
変形だ。
浪漫だ。

「うおおあああ！!?」

仁が叫んでいる。

俺も叫びたいぐらいに怖いわ！

フロントガラスから地面が消えた。

トラックの前輪が、続いて後輪が地面から離れる。

見て、見てくれみんな。

俺達今、飛んでる。

ふわっとした浮遊感。

この気持ちのいい一瞬が一時間より長く感じた。

トラックは物理の掟にしたがってしばらく……とはいっても一秒ぐ
らい宙を舞ったが

重力に引っ張られドリルの出たほうを下にして落ちはじめる。

当然このままの状態でホドデデスに突っ込むわけではない。

「シエラ、イージス!!」

「了解」

冷静を失わないのはさすがというべきか。

ブン……とトラックの周りをシエラのイージスが覆ったはずだ。

これで衝撃は幾分緩和されるに違いない。

「つつこむぞおおおおあああああ!!!!!!」

あ、待ってくれ。

問題発生。

ちよっと早すぎたかもしれない。

「あ、ゼロコンマ一秒早すぎたかも、カウント」

「仁の馬鹿ああああ！！！！」

このままじゃ間違いなくホドデスの分厚い装甲にぶつかって終わり。

おっそろしく正確な計算をほめた俺が馬鹿だった。

シエラもメイナも止めれない速度でトラックは落下している。

――終わりか。

絶望に心を塗りがためられた。

と、おそらくホドデスもイージスを張っていたのだろう。

トラックが機銃砲塔にぶつかる寸前に強烈な光が発生した。

そのおかげで一瞬だけとトラックのスピードが半減。

ホドデスのイージスを相殺するとともに無事俺達のトラックは機銃砲塔に突っ込んだ。

がくんと二段階構えの衝撃があったがシートベルトががっちり俺の体を固定してくれている。

していてよかったシートベルト。

ドリルの貫通性で突っ込み、シエラのイージスでトラックの損傷をぐっと抑える。

なかなか理にかなった考え方だと思わんかね？

だが俺は衝撃で腰にダメージを負った。

結構痛い。

「いてえ〜……。『

おい、大丈夫か？」

腰を抑えながら後ろの荷台を振り向いた。

「全員無事だよ。」

シートベルトはすごいねえ、やっぱり」

メイナの元気な返事が返ってきた。

セズクはふうと安堵の息をついている。

仁も元気そうだ。

「シエラ……は無事に決まってるよなやっぱ」

「それどういう意味？」

助手席からむっと怒ったような声が聞えた。
元気だな。

「いや——気にするな。」

とりあえずメイナ、セズク頼むぜ。

敵が来ないうちにさっさと終わらせるんだ」

「まかせな♪」

「ひっさくしぶりの出番だからねえ！」

二人はトラックの荷台から飛び出す。

低く唸り始めた音……おそらく警報だろう。

敵に完璧に気がつかれたに違いない。

ざざっと集まってくる前に済まさないとな。

これだけ派手に突っ込んでおいて気がつかない敵はいないだろう。さてと。

今、このトラックは前方を機銃砲塔部にめりこませ車体の中央までがホドデスに食い込んでいるという状態だ。このままじゃ走れないのは一目瞭然。そこでこの二人の出番というわけだ。

「行くよ！」

俺がOKサインを出すとメイナは右腕をレーザー砲に変えた。

装甲板にほぼゼロ距離と言ってもいいほどの近さで

赤いレーザーがトラック周辺に次々と叩き込まれていく。

装甲ごと崩してトラックを中に侵入させるために。

レーザーを受けた装甲がトラックの重さに耐え切れなくなっていきゆがみ始める。

ドンピシャで装甲が薄いところに突っ込めて本当によかった。

それ以外の場所だったら間違はなく弾かれて崖下の川に落ちていたに違いない。

ガクン、と体が揺れた。

そろそろ装甲板が外れるだろう。

「ラスいちー！」

赤いレーザーがかろうじて一部分でつながっている場所をぶち抜くと溶解した機銃砲塔ごとホドデス内に落下した。

その一瞬を狙ってセズクが右腕のナイフ（にしてはよく切れる）でトラックから機銃砲塔を切断排除する。

うまいことトラックはホドデス内に着地することが出来た。

ここまで無謀の塊だったわけだが案外うまいこと行った。

さすが成功フラグだ。

「よし、戻って来い！」

二人が荷台に入ったのを確認するとアクセルを踏み
さあホドデデス内にてドライブと行こうじゃないか。
このまま一気に装置のところまで向かうとしよう。

「止まれ！！」

「何者だ！！！！」

走りだしたトラックを遮るように銃を持った兵士達が向かってくる
が敵ではない。

「止……とまっ……た、退却っ！！」

「逃げっ！！」

誰もがツインドリルを回しながら疾走してくるトラックを見たら逃
げるだろう。

間違いなく俺だったら逃げる。

「う、撃て！」

「ぶっ飛ばせえーっ！！」

後ろから追撃の火花が飛んでくるが当たる気配がしない。

っと、急カーブが見えてきやがった。

スピードを出し切った状態でサイドブレーキを引いてハンドルを切
る。

トラックの後輪が横滑りをはじめいわゆるドリフトで角を曲がった。
ニードルタイヤの棘とホドデデスの鉄が擦れて火花を散らす。

角を曲がりきりったと思うとバリケードが築かれていた。

その上にガトリング砲が並んでいる。

「行動はやつ！」

俺は思わず突っ込んでしまった。

そんなこと知らんと主張するようにガトリング砲が一斉に火を吹き弾を叩き込んできた。

「無駄」

シエラが小さく呟きその言葉どおり

イーリスによって大きく軌道が曲げられた弾があちこちにばらける。焦りの色を見せる兵士達を蹴散らし

ドリルでガトリング砲ごとバリケードを突き破る。

そのときに火が出たのだろうか。

あっという間に広がった炎は弾薬に引火し、ホドデデスの装甲を突き破らんばかりの火柱になっていた。

そこを俺はトラックで駆け抜ける。

誰も死んでないよな……？

小さな不安がちくりと胸を刺した。

This story continues.

激突！決めた覚悟と空飛ぶ俺達（後書き）

ありがとうございました。

ホドデデス内に侵入成功です！

ちょっとメタ発言多かったかも知れません。

ごめんなさい。

さてこの物語ももう三分の二が終了間近となってまいりました。
もう少しだけお付き合いいただけると嬉しいです。

外伝の『しゃくでば！』もよろしくお願いします。



<http://ncode.syosetu.com/n2021p/>

散る火花、砕ける防壁

燃え上がった炎が視界を赤く染める。

ガトリング砲の弾が次々と飛んでくるが

それらは一つとして我がトラックに傷一つつけることが出来なかった。

まあバリア張ってるから当然といっちゃ当然だがな。

低い警報が鳴り赤いランプがちかちか回る。

『第二一の防壁作動しろ！

早くしろ、急げ！』

唸るような声が生き残ったスピーカーから聞えてきた。

「波音！

今の放送！」

ああわかってる。

きちんと聞えてたさ。

「第二一って言うと……ああ！

目の前ドンピシャだ！」

仁が悲鳴を上げた。

目の前でゆっくりと左右から二枚の扉がしまつてゆく。

「ちいっ！

スピード上げるぞ！」

アクセル踏みます。
スピード上がります。

「え、でもっ！

扉は既に閉じて……」

メイナが俺を止めようとする。
扉？

「はっ、笑わかすんじゃねえ！
何のためのドリルだ！？

いっくぜえええっ！！！」

一つ言っておくがおれは運転席に座ると性格が変わる
——みたいなのは一切ない。

ただ、今は体中をだな。

アドレナリンさんが尋常じゃないスピードで回ってる。

ただそれだけだ。

目の前で完全に閉まりきった第二防壁に向かってスピードをもつ
と上げる。

トラックの巨大な質量とともにドリルの貫通力。

そしてシエラのイージスが加わりいとも簡単に第二防壁は砕け散
った。

巨大な鉄の塊が巨大な力によって捻じ曲げられ、崩壊する。

テンションはさらに上がる一方。

それにしても……。

ホドデデスの全長は約二百メートルちょいだというのになんという
広さだろうか。

円形だからこんなに広く感じるのか？

時速五十キロで飛ばしているというのにまったく付く気配がない。

なして。

半径×半径×円周率で円周の長さが出るんだっけ？
もう忘れた。

「あっ、おい！

次の所を右だぞ！」

仁が運転席を足で蹴った。

聞えてないとも思ってたのか。

「OK！

それと聞えてるから蹴るな、運転席を。

気が散るだろ」

「あー、ごめん、波音。

今の私が間違えちゃったの」

メイナかよ。

荷台では仁とメイナが今二人で一人となって動いている。

メイナがレーダーで艦全体を読み取り、USBに変えた右腕を仁のPCに接続しているのだ。

つまり仁のPCには最終兵器のパンソロジーレーダーを映像化したもの。

ホドデスの断面図とこのトラックが映っているはずなのだ。

ハンドルから片手を離して汗をふき取る。

これでミスはしたくないからな。

と、空気をかき回す音がかすかに聞えた。

おそらくロケット弾——ほらな？

円錐型のロケット弾が向かってきた。

「何としてでもここで食い止めるんだ！
撃てッ！！」

一気に五発ほどのロケット弾がそりゃすごいスピードで突っ込んできた。

だが残念。

こちらにはイージスというものがあるのだ。

ロケット弾はまっすぐに飛ばず、目標――つまり俺達の目の前で大きく曲がり

ホドデデスの装甲を内側から少し削り取った。

今の技術で、ホドデデスの風化した艦の足りない所を補ったのだらう。

容易に鉄板がはがれ、パイプが爆風で捻じ曲がる。

パイプから光が漏れている。

あのパイプはベルカの技術だったか。

案外弱い部分は弱いんだな。

いきなり吹き上がった噴煙と爆風がこのトラックを真横から蹴飛ばした。

「やっばっ！」

トラックは大きく右へ曲がり壁に車体をこすり付ける。

「っ！？」

がくんと強い衝撃が体を押さえ、さっきもらったお茶の空のペットボトルが跳ね回る。

「ゴミ箱ないの？」

うっとおしいんだけど」

シエラが空のペットボトルを右手で掴んで窓から放り投げた。
マナー悪いあげくに、そこ怒る所と違う。

壁がシエラのイージスとぶつかり、大きく凹んでいく。

そのまま引っかけ傷を残しつつ、ロケット弾を撃ってきた兵士達に突っ込んだ。

人のいないところを狙って突っ込んだから死者はいないはずだがやはりあまり気持ちのいいものではない。

人を殺しかけると背中がぞくぞくとしやがる。

そして大事なのは車は急には止まらない。

「そ、それよりも大きく進路をずれちゃった！

早くもとのコースに戻らないと！」

仁が後ろから声を飛ばしてくる。

さっきの衝撃で曲がれなかったからな。

「どこをどう行けば良いのか説明しろい！」

どこからか持ってきたガトリング砲の弾が

ひゅんひゅんと飛んで来るのを無視して仁に怒鳴り返す。

「ここをまっすぐ！」

まっすぐ行けば艦首付近だから

そこからまた行けば良いんだ！

円形ってのは楽だな、おい！」

なるほど艦首か。

艦首……えー？

艦首ってどっちだよ。

まあいい。

「OK！」

仁の指示に従ったければ間違いはないだろ。
ここはさっき通った第二一防壁付近だな。
ここからだとか確か……。

『繰り返す！』

第二一防壁区画より退避しろ！
繰り返す！

第二一防壁区画より……』

急な艦内放送とともに銃声がぱったりやみ
兵士達があわててどこかへと消えてゆく。

「……なんだ？」

ブレーキをかけ、あちこちが燃えている廊下に停車する。
ぼんやりと遠い所にあの第二一防壁の扉が倒れており
黒煙がうっすらと視界を覆っている。

頭だけ出して周囲を確認する。

ちなみに煙はイージス内には入れない。

本当に便利なバリアだ。

出した頭を引っ込めようとして頬を叩くように強い風を感じたのは
その一瞬の間だった。

装甲に穴でも開いているのだろうか？

思わず天井を見上げる。

「お、おい。」

「うおおい、仁！」

ビックな発見してしまったかもしれない。

「んあ？」

どうしたんだよ、変な声出して」

荷台の窓から仁が顔を出した。

俺は指を上に向けて仁にそっちを見ろと促す。

「天井動いてないか？」

それにだんだん遠くなって……」

俺の目がアレなのか仁にもそう見えるのかが知りたい。
ガコン。

鋼鉄の連結器同士が外れましたよー。

そんな音が廊下一杯に広がった。

ずっと嫌な予感が上の視線を前に戻す。

仁と顔をあわせた。

「やべえええっ！！！」

ゆっくりと廊下——つまり通路が降下をはじめていた。

第二一防壁より向こう側の通路が浮いていく。

いや——違う。

俺達が落ちているのだ。

「お前らちゃんと捕まってろよ！」

あわてて頭を引っ込め、運転席にしっかりと座りなおす。

「分かったよ♪」

ぎゅむっと後ろから体をつかまれた。
なぜか静かだったセズクさんだ。

「おま、なんでこのタイミングで出て来るんだよ！
まあいい、行くわもう」

間に合え間に合え。

間に合ってくれ。

あわててハンドルを握り、アクセルを目いっぱい踏みつける。
前輪が浮くほどの急発進をしたトラックは一気に時速一二〇キロまで加速した。

待つわけないじゃん登ってゆく通路。

前も後ろもどんだん登ってゆく。

つまり俺達がいるこの場所だけが
バームクーヘンで切り取ったようにホドデデスから切り捨てられたのだ。

俺達という虫と一緒に。

「ここで落ちてたまるか！」

その時、神の助けが見えた。

さっきぶっ飛ばした第二防壁の巨大な鉄板が
橋のようにして引っかかっている。

俺は迷わずそこにトラックをぶち込んだ。

多少ボディが擦れただろうがそんなけちけちしている場合ではない。
大きく跳ね上がったトラックは

ジャンプ台から飛んだスキー選手のように美しく舞った。

黒煙を上げて落ちてゆく第二区画を尻目に隣り合った第二十区画にドリルで床を削りながら着地する。

駄目かと思ったね。

こんな映画まがいのアクション続けてたら心臓が持たない。止まるぞ、そのうち。

inues.

This story cont

散る火花、砕ける防壁（後書き）

本当にありがとうございました。

いやはや通路の部分、よく分からない方がいらっしやったら
ごめんなさい。

言葉不足だったかも……と反省しております。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

外伝の『しゃくでは！』ともども

どうかこれからもお付き合いしてくださいさるように
心よりお願い申し上げます。（ごわす

←しゃくではURLです。

<http://syosetu.com/usernovelmanaage/top/ncode/152006/>

明日使える豆知識……？

「トラックの調子は？」

大丈夫なのか、こんなに激しく動かして」

仁が話しかけてきた。

ちらっとメーター類を見る。

耐久力値も、トラブル値も全部グリーン。

「大丈夫だろ。」

もともとこんなに激しくはないとしても

凸凹道とかを走るために作られたような車両だからな。

コレぐらい振り回してもご機嫌は良いようだ」

俺は前から気を逸らさないようにして答えた。

「もう少し行ったところ右だつてさ♪」

さっき振り払ったのにセズクがまた抱きついてきた。

「うっとおしいっ！

なんだよ、っっておっと！」

危ない、危ない。

右だな、ここを。

百単位で飛んでくる銃弾を軽くなじり次々とバリケードを突破する。
そして……。

「てか、てめーはいつまで俺に抱きついてんだよ！」

「……んふふっ。

たまにはいいかなあ……みたいな？」

よくねえ。

全然よくない。

「気が散る！

抱きつくなら仁にしておけ！」

俺はホレと右指で後ろを指差した。

「ええっ!？」

何で俺なんだよ、波音！」

仁の悲鳴が聞える。

だって俺ずっとセズクの野朗に……。

たまには変わってくれても——とか思ってもいいだろ？

サイドブレーキを一気に引いて、ハンドルを捻る。

横滑りの状態のまま閉じかけた第四五防壁の隙間をкаろうじて通り過ぎる。

「なっ!？」

道がない!？

ドリフト状態のままブレーキをかけて何とか停止させた。
窓から顔を出して眺める。

「か、階段って……。

おい、本当にここであってんだろぅなあ？」

ひきつしりなしに飛んできていた銃弾は後ろで閉じた第四五防壁に
ふせがれ
もう飛んでこなくなっていた。
まあこれも少しの間だけだろうけどな。
平和ってそんなもんだろ。

「階段じゃない。」

「ここは弾薬を運ぶトコ」

シエラがぼそつと教えてくれた。

お、おお。

そうなんか。

弾薬運ぶトコなんだな。

「この階段みたいに見えるところは多分新しく建造されたんだと思う。
う。」

「だってベルカは弾なんて不要だったし……」

レーザーだもんな。

そして弾を運ぶとか言うこの無駄に広い空間に
トラックを停めたわけなんだがここでいいのか？

というか何で通路とこの弾薬を運ぶトコがくつついているわけ？

言い出したらキリがない疑問が壁の色が違うことから

シエラが言ったとおりここは後から掘るなりなんなりして
新しく作った弾薬道なんだろうな。

「あっ……そうか。」

「この壁一枚抜けたら近いねえ」

メイナさん？

急にどうなさいました？

「よし、そうしよう」

仁さん？

ど、どうしましたか？

「波音、このままこの階段みたいなところ降りて壁ぶち抜いて。
そうすると一気に近くなるから」

「本当だろうな？」と

信憑性を疑いたいところだがメイナのレーダー使ってたもんな。

嘘……なわけないよな。

世界一優秀なレーダーだもんな。

疑うと逆に罰っせられるだろうな。

しゃーない。

この壁の向こうに何が待ってようがもう知らん。

ここまで来たんだ、行くしかない。

固めすぎてがちがちになった決意をさらに固めなきゃいけないときだな。

頬を叩いて気合を入れる。

よし。

行くか！

決意が固まったのを祝福してくれるかのように
上からばらばらと黒い塊……うん。

黒い、丸い塊が降ってきた。

手榴弾……だよなあ。

「手榴弾だからなんだというのか。と

彼は玉露をかき混ぜ、飲みながら言った。
りん、と鈴がどこかであったような気がした」

セズクさんあんた余裕だな。

その某有名作家風にアレンジしてる場合かって。

シエラのイージスに弾かれ

トラックの周りに散らばった手榴弾は一拍置いて一斉に爆発した。

その爆風にお尻を叩かれるようにしてトラックは
のようなもの
階段を一気に駆け下りる。

うえー、見ろよなんて分厚そうな装甲なんだ。

長年の勘から分かる。

これ絶対に無理だろ。

「もっとスピードあげて！

これじゃ無理！」

メイナが「くっ……」と声を上げた。

そんな固い場所を……。

あえて選ぶなんて鬼畜というか外道というか。

道なだけに外道？

俺はアホか。

「仕方ないね☆」

ようやく俺から離れたかと思うと

「セズク？」

セズクは時速八十キロで階段（のような場所）を下るトラックの荷台から飛び出した。

鍛え上げた瞬発力でトラックを一気に追い抜く。

そしてトラックの少し前に着地すると同時に

その右腕を何でも切れるナイフにかえ、その力をもって

前の壁を綺麗にカットした。

そしてジャンプしてまたトラックの中にすんと戻ってきた。

啞然。

やっぱりこいつすげえよ。

ホモだけど。

すげえけどホモなんだよな。

そこが玉（これで漢字合ってるのか？）に傷なんだよな。

「今僕が切ったところにトラックを♪」

言われなくてもそうさせてもらうさ。

少しハンドルを左に回す。

よし……このまま……。

ツインドリルズがセズクが切った装甲にぶつかった。

鋼鉄同士がこすれあいゆがみ、そこだけぽっかりと抉り取られたように穴が出来る。

抉り取られたってか、切り取られたほうが正しいかもしれない。

いや実際に切ってたんですけどね。

その穴の中に我らがトラックは入っていく。

さてこの穴の向こうには一体何が。

どんなものがあるのだろうか。

まぶしくて向こうが見えないのだ。

「またか……」

そのまぶしさを潜り抜けたときまたため息をついてしまった。
何もなかった。

聞きも、装置も……床も。

吹き抜けみたいな空間の中に出てしまったみたいだ。

「おい、仁。

お前信じてよかったんだよな？」

「うむ」

うむ、ね。

フロントガラスから見えるのはパイプ類とコード……。

それと物凄い光。

崖から落ちるときとは違いほんわりと水平に落ちているのが分かる。
まるでエレベーターに乗っているみたいに。

穴から飛びした状態でふわふわと。

「ここは人工重力みたいなのがついてる。

下に近づけば近づくほどスピードは落ちていく。

だからそんなに心配しなくていい」

またさらっと大事な事を。

そういうのは早く言うべきだ。

「この機能が出来るまでこの吹き抜けから落ちて死ぬ人は多かった。

全部あわせて二五人がお亡くなりになった。

大体が整備の時に。

この艦事態が収容できる人数はそもそも……」

はいはい豆知識、明日使えません。

のんびりとスピードが下がる。

本当だ、すげえ。

エレベーターみたいだな、本当に。
トラックはのんびりと床に着陸した。

「ここが機関室？」

仁の問いに

「そよ」

メイナが頷いた。

中央には五つほどの山みたいに大きな機械がおいてある。
そこから赤の光がこぼれんばかりに生み出されていた。

「一括りに言うとなクナニア航空機関。

もうちょっと詳しく言うとなクナニア光反動炉。

原理は知らん」

シエラは説明を放棄した。

知ってるわけないよな。

光は床、壁の配線をつたってエンジンなどへ運ばれていくのだろう。
美しい光景だ。

ハイライトの中で見た光景と似ている。

あそこもなかなか神秘的な場所だった。

ここは赤い光であっちは紫の光だったけどな。

列車砲とかもあった。

ジョンは元気かな。

「波音、ここをつきつてもう二つほど下に行こう。
そうしたらもう装置の部屋につくから」

やつとか。

なんとも長いバトルだった。

「おっけ」

ゆつくりとトラックを発進させた。

あんなに激しかった敵の攻撃は今ばかりと止んでいる。

やっぱりここは未知の場所ということで触れにくいのだろう。
そりゃそうだな。

もし壊してしまったら修理は出来ないんだから。

「ここでもいいんだよね？」

俺は『D2L入』と書かれた扉の前で一度トラックを止めた。

「そうだ……な。」

うん。

第二倉庫ってかいてあるから多分あってる」

シエラがゴーサインを出した。

よし、ラストスパート。

目標は間近。

さっさと装置奪って家帰って風呂入って寝たい。

ues.

This story continues.

明日使える豆知識……？（後書き）

お気に入りに入れてくださった方、本当にありがとうございました。すぐ励みになるとともに

もっともっと面白くしてきたいです。

せっかく入れてくださったのに面白くないと駄目ですからね。

精進していききたいと思います。

そしてこの小説を読んでもいただくことにより

疲れとかを忘れていただける。

そんなよりどころになれたらなって……。

そう思います。

え？

志でかすぎ？

——っ！

が、がんばるからいいんですっ！！

外伝『しゃくでば！』もどうかよろしくお願いします。
それでは。

D a n g e r o u s l i g h t z o n e

「セズク、切れる？」

「まかせといて」

ベルカ語で『第二倉庫』と書かれた扉をセズクは綺麗に切り取った。

「便利なナイフだな」

運転席の窓から関心しながら
倉庫の扉が倒れるのを見学する。

「ありがとう♪」

大きくジャンプして荷台に一気に滑り込んだセズクを確認すると
俺はゆっくりとトラックを進ませた。

「なあ。」

ふと思ったんだが、その便利なナイフで一気に下まで降りれない
のか？」

通路を二十メートルほど進んだところで尋ねてみた。

だって、楽したいなら楽したいじゃない？

肩に乗ったぷにぷにのルファアが欠伸をした。

こいつずっと静かにしてたなあ。

寝てたのか？

ハンドルから手を離して右手でつつく。

「にー」

撫でる。

かわいいなあ。

「波音、ちゃんと前見て運転して。

そして答えは無理。

この床含め機関室周辺の床はとっても強く作られてる。

——まあ、でも初めは倉庫なんてついてなかったんだから
もしかしたら弱くなってるかもしれないけど」

シエラがシートベルトを伸ばしたり縮めたりしながら答えた。
遊ぶんじゃない。

この超兵器、ホドデデスもやっぱりメガデデスと同様
ベルカの超光化学と今の技術との融合体として存在しているようだ。
要するにサイボーグみたいなものなのだろう。

さっきシエラが豆知識として語ったのだが

もともとメガデデスもホドデデスも乗組員は『核』と呼ばれる一人
だけだったらしく

その『核』がない今はこうやって大人数を同様しないと動かせな
いらしい。

『核』が人間なのかどうか気になるところだがまあ今はいいだろ
う。

またそのうち教えてくれるさ。

「じゃあ、試してみる価値はあるってことだね？」

すらりとその右腕を刃に代えたセズクは床をじっと眺めた。
おそらく装甲の厚さでも見積もっているのだろう。

今回やたらお前の出番多いな。

「まあ……そうだね。

でも気をつけて欲しいのは……」

「えやっ♪」

「あっ」

シエラが何かを言う前にセズクは荷台から飛び出し
そのヤバイを床に突き刺していた。
そのままトラックの周りを回りだす。

「んー、僕の心配のしすぎだったか？」

首を傾げるシエラは心配そうにセズクのその様子をじっと眺め続ける。

ゆっくりとトラックの重さに耐え切れなくなった床が傾いていく。
このままだと斜めに落ちる可能性があるため一度セズクに静止を
かけ一息入れて一気に切り取ってもらった。

ふっと宙を舞う感じがしたのも一瞬のことです。またすぐにトラックの
タイヤが地面につく。

天井にはぽっかりと一つの穴。

無事に一つしたの階に着くことが出来たようだ。

装置は確か……

「もう一つ下だったな。

よし、セズクもういっちょ頼むぜ」

仁の励ましにセズクは頷くとゆっくりとまた床にその刃を入れた。

「――っ!!」

その瞬間目がくらんだ。
風が髪をかき回す。

「にーっ!!」

ルファアが耳元で鳴く。

完璧に起きたか、おはよう。

床から目がつぶれんばかりの強烈な光が溢れていた。

光は一瞬にして天井にぶつかる。

何も起きないだろと思っていた俺の予想を遥かに超えることが起こった。

天井が赤くなりやがてドロドロと溶けぽっかりと穴が開いた。

溶解した鉄が床にたれ、白い煙がほっそりと上がる。

「なッ、なんだよ!？」

目を覆った光は十ほどの筋となり、あちこちに乱反射しはじめた。
光の当たったところは溶けて赤い鉄の滝となっていく。

「まずいっ！」

ナクナニア超光の通路を切っちゃったんだ!

波音、とりあえずこのトラックはイージスに守られてるから良いとして

ホドデデス自体がヤバイかもしれないっ!

メイナがイージスで守りながら荷台に引っ張り込んだセズクを
シエラがほらと首で指した。

セズクの自慢のナイフはぽっきりと根元から刈り取られ

ぶしゅつと吹き出た鮮血が水溜りをつくっている。

「メイナ、セズクの治療してやってくれ！」

メイナはその右手をセズクの右腕に押し付けた。

緑の光が湧き出てセズクの右腕を包んでいく。

これであいつは大丈夫だろう。

「仁、このままどこに行けば……!?!」

轟音が俺の言葉をかき消した。

ナクナニア超光が甲板に設置された何かの武装に命中したのだろう。

今までとは桁違いの爆発が天井方向から発生した。

ぽっかりと装甲が消し飛び、空が顔を覗かせている。

さっきセズクが空けた穴からそれが見えた。

『消火にあたれ！』

機関室修理班はやく現場に！』

やかましく、再び鳴り始めたスピーカーと

サイレン音がホドデデスの中を駆け始めた。

明らかな緊急事態を告げる赤のランプも回っている。

蛍光灯がオレンジ灯に切り替わり通路が暗くなる。

床からの光がそのおかげでさらに明瞭に見取ることができる。

乱反射しまくってるじゃねーかよ。

通路のあちこちが溶けはじめていた。

「波音、急ぐよ！」

シエラにせかされ、ちらっとセズクを見る。

メイナの緑の光につつまれ、まだ顔色は少し悪いもののセズクはにやりと俺に笑い返した。

うん、元気だな。

ばっさり切り捨てる。

アイツは死なないだろ。

「あれ、止める事は出来ないのか!？」

噴出される光に顎を向けて聞くが

「無理。」

あれは超空城砦戦艦の武装の一つぐらいと同じぐらいの温度。つまり約一万度程度ある」

触れただけで物が蒸発する温度じゃねーか!

どうやってベルカの人はこの艦を修理したんだ。

気になるところではある。

「とにかく急ぐんだ!

この道をすぐ右に行けばもう一つ下に行ける!」

仁がP Cの液晶を見ながら言った。

了解だ。

俺ももうここに長いこといたくないからな。

時間までもが敵に回ったな。

後ろの三人にちゃんと捕まるように指示して

トラックを急発進させた。

通路の天井が落ち、さっきまで俺達がいた所に落下する。

仁に指示された右の通路に滑り込み、一つ下の階にあっていうまに到着した。

だがそこは既に火の海と化していた。

天井からあの光が漏れている。

その光が別の場所を傷つけ

傷つけられた場所からもあの光が飛び出してきた。

まるで連鎖反応のように。

火の海& a m p; 光の雨というわけだ。

その中をイージスでちぎっては投げちぎっては投げして進んでいく。

光はトラックに何度も伸びてきたがそのたびにイージスが捻じ曲げ

捻じ曲げられた光がパイプや電子機器を破壊し——とまあ

一言で軽くまとめると大惨事だ。

「あっ、あそこだ！」

仁がにゅつと運転席と助手席の間から顔を出してきた。

当然扉は閉まっている。

「あの扉は約二十センチの分厚い扉だ！

このトラックでも無理かもしれない！」

メイナのレーダーから計算したのだろう。

ならその計算は間違いなく正しい。

ここまでできたのに諦めるのか？

否。

セズクが間違っってこの光を出したときはなんてことをしてくれたん

だと思ったが

そのおかげでどうやら倉庫に入れそうだ。

理由は簡単。

ロックは光に溶かされ、扉もその例外ではなかったからだ。

まだ完全に溶けてはいないが赤く光ってるってことは

溶融する一歩前と考えてもいいだろう。

「仁、しっかりシートベルトしとけ！」

俺はぐっとアクセルを踏んだ。

いくら軟らかくなっているとは言え、扉は扉。

扉を突き破るわけだがそのためには当然スピードがいるのだ。
流れる景色が速くなる。

スピードを示すメーターがレッドゾーンに侵入する。

時速百五十キロで……どうだっ！

扉は大きくその体を歪ませのけぞった。

赤く光ったところはやっぱり軟らかくなっていたようで

そこから大きく裂け、二つの破片に変わり俺達の侵入を許した。

ドリルが赤い鉄を切り裂き装置の部屋に転がり込む。

すかさずブレーキをかけ、ハンドルを切って横滑りでトラックを止めた。

装置を持って早く脱出せねば。

「……で、装置は？」

仁が気の抜けたような声を出した。

はっへ？

ないの？

見回した。

「上、上にある」

メイナが指差した方に顔を向ける。

あら、本当だ。

鎖でつるされたままの装置があった。

「セズク、あのクレーンの鎖切れ……ないわな」

「ご、ごめんよ……マイハニー……」

そうだった、弱ってるんだった。
すっかり忘れてた。

「気にすんな。

たまには休め、お前は」

やさしい言葉かけといた。

「ううっ……やさしいなあマイハニーは」

はいはい。

泣いとけ、泣いとけ。

ふうと息を吐いて首を振る。

気分転換だ。

さてと。

「シエラ、イージスはいったん解除してくれ。

トラックをあの下に持っていく。

そうしたら鎖を——」

ぐらっと大きく床が揺れた。

今までとは格段に違う揺れ方だ。

推力を失った——そんな揺れ。

『くっ、こちら艦長！

総員に告げる！

退艦準備に入れ！
繰り返す、総員退艦準備！』

さっきからなっていたスピーカーの声はほとんど無視していが改めて聞くとかなり重要なこと言っていたな。

この倉庫の壁をぶち破る爆発の音でかき消されそうになっていたがこれだけはなんとか聞き取ることができてよかった。
ようするに時間がない。

「シエラ、頼んだぞ！
セズクと仁、メイナは荷台からどいてくれ！」

三人が降りたのを確認後、黒のスイッチを押した。
荷台を覆っていたアルミニウム製のコンテナが左右に広がる。
これで真上から落ちてきた荷物も受け止めれるわけだ。
ゆっくりバックして、装置のおおよそ真下に止めた。

「シエラやれ！」

「まかせて」

シエラの右手レーザー砲から伸びた青の光が鎖を切断した。
装置はそのまま真下——つまりトラックの荷台に。
落ちてきた。
よっしゃっ！

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

D a n g e r o u s l i g h t z o n e (後書き)

ありがとうございました。

ルファーさんここまで出さなかったわけですが

別に忘れていたわけじゃないです。

本当です。

忘れていませんでした、本当です。

ここまで読んでいただき本当にありがとうございました。
感謝です。

外伝、しゃくでば！もどうかよろしくしてやってください。

R 2

鉄と鉄がぶつかった音。

装置は鎖の支持を失い落下する。

そして美しいまでにトラックの荷台に収まった音だった。

六百キロもの落下物の衝撃は流石にすさまじいものだ。

このトラックの前輪がちよつと浮いた。

少しびっくりした。

「よし、乗れ！」

この堕ちる棺桶から脱出するぞ！」

運転席の窓から顔を出して呼びかけつつ

黒のボタンを再び押して左右に開いた荷台を閉じる。

仁たちが荷台の開いた隙間に収まったのを確認して……。
さてここで問題です。

「……どうやって脱出する？」

一瞬の静寂。

「は？」

俺の問いかけに全員が信じられないといった顔をした。
いや、だって。

「俺はこのホドデデスが目的地に着いたときに

トラックでホドデデスの薄いところを突き破って出るつもりだったんだ。

でもさ。

今はその状況になることはないだろ？

だって……」

落ちてるんだから。

その言葉は飲み込んだ。

別に言わなくても全員分かっているに違いないからな。

「どう脱出するって……。

そりゃ……」

仁が倉庫の床に目線を落とす。

「だよなあ。

そこ以外ないよな」

俺も仁に同調する。

この倉庫の外は火と光の海と雨。

こっから出られたところで助かるわけがない。

かといってこのままホドデデスと一緒に落ちるのを

指を咥えて待っているわけにも行かないのだ。

となると答えは必然的に絞られてくる。

この倉庫の床から落ちるのだ。

「しかたないかあ」

俺は運転席から降りて床を空けるスイッチを探し出した。

——だが、ない。

ないじゃないか。

「そりゃ……そうだよなあ……」

小さくぼやいた。

扉の開け閉めなんて現場には普通ないよな。

ましてや倉庫なんて場所なんだから当然っちゃ当然だ。

しかも大切な物（装置）を積んでいたところの床を開くための
スイッチなんて艦橋とかぐらいにしかないよな。

「メイナ、頼んだ」

俺は少しうなだれて運転席にまた乗り込んだ。

「それ以外に方法はないみたいだねえ。」

仕方ない……か。

私がいっちょ十パーセントほどの本気で……」

軍服の腕を捲くりながら帽子を取ってにやりと笑う。

「わかったから早くしてくれ」

「むっ……」

俺の早くしろコールに頬を膨らませながら

メイナは荷台から「よっこらせっ」とおじじ臭い台詞を吐きながら
のんびりと這い出た。

「さって……行くかねえ？」

素早く右腕を砲に変える。

紫と赤の光が脈動して砲を覆い光を放つ。

見るものを不安にさせるような……………。

そんな光。

その砲の銃口を床に向ける。

「波音、念のため少しは遠くへ行った方が良い」

シエラの言葉に素直に従う。

こいつはなんだかんだで正しいからな。

メイナにちよつと待てと告げて

エンジンをつかしてトラックを倉庫の壁に押し付けるようにして固定した。

「メイナ、やっちなえ」

「そらっ、開通だねっ！」

カッと黄色の光がホドデスの約四〇センチもの装甲を

しかも一番分厚いところをぶち抜いた。

一瞬にしてあの鋼鉄の塊が蒸発するのは見ていてすごい爽快感がある。

下から噴き出してくる風がメイナの短い黒稀銀髪を揺らした。

「メイナ、乗れっ！」

トラックを壁から引き剥がし、メイナに乗るように促す。

それと同時にどうやらあのデンジャラスな赤い光が倉庫の壁に到達したようだ。

さっき一度倉庫に穴が開いたのは知っていたが

今回はそれを遥かに上回るの破壊が起こった。

装置を吊り上げたであろうクレーンが倒れ、壁を貫き

すごい勢いで出てきた炎が床を舐め始める。

赤い光が倉庫の中にまで侵入し始め

今まで静かだった倉庫はあつという間に火と光で騒がしくなり始めた。

「なあ、落ちるのはいいんだけど……。

どうやって安全に着地するんだい？」

メイナがイージスで光を弾きながらトラックの中に戻ってきた。

それをチャンスと捕らえたのかどうかは知らないがセズクが一番の。

ここ一番の問題を言う。

おい。

セズクさんや。

「……………」

それをいま俺も考えていたところなんだよ。

いゝい質問ですね。

どうしようか？

少し悩む俺の隣で仁の手がちよいちよいと動く。

「波音、波音。

ロケットエンジン付いてただろ？

それ使えば？」

はーん。

「お前天才だわ、仁」

問題解決。

「行くぞっ！」

また落ちるのか……。

肩のルフアーが俺のポケットに入り込んだ。

「にーっ!!」

かわいい。

俺がアクセルを叩き潰す勢いで踏むと

トラックは一気に、メイナのつくった大穴から外に出た。

俺は前輪が倉庫の床を離れた瞬間にギアをR2に入れる。

つまりロケットブースターに。

マニユアル本によれば噴出方向も変える事が出来るらしい。

超便利。

というかコレ以外の使い道があったのだろうか。

ロケットブースター点火！

ハンドル裏についている噴出ボタンをぐいっと押し込んだ。

トラックが大穴から出ると同時に火を入れたことにより。

落下スピードが急激に減っていくのが分かった。

サイドミラーから確認すると二本のロケットエンジンが

下へ向かって炎を吐いている。

噴出ボタンをある程度の間隔をあけながら連射する。

トラックは重力に従い落ちようとしたがそれをロケットエンジンが許さない。

約三十秒しかふかすことが出来ないようだから丁寧に丁寧に。ある程度落ちたら噴出ボタンを押してスピードを殺す。

それを何度も何度も繰り返す。

そうやって安全に着地しようという魂胆なのだ。

無事脱出した俺達をうらめしそうに睨み付けながらホドデデスは

「見て！」

全身から赤い光を吐き出し淡い炎の線を描いて

近くの山へと激突した。

空気を震わせ、山がえぐれるほどの大爆発が発生した。

黒いキノコ雲がのぼり、空が一瞬明るく染まる。

端から見たら火山の噴火に間違われてもおかしくない爆発だ。

トラックほどある大きな砲塔がばらばらに飛んでいくのも見えた。

「うわ……。」

また一機葬っちゃったね……」

セズクがおいおいと俺に話しかけてきた。

う、うん。

そうだね。

これで連合郡のを二機おしやかにしちゃったわけだよな。

護衛の三機は結局ホドデデスを守れなかったわけだ。

はじめっから計算に入れなくてよかった。

ホドデデスの中に入ったらこっちのものだったしな。

連合郡が誇るベルカの超兵器を自ら攻撃するわけにはいかないし……。

相当護衛の三機は迷ったことだろう。

まさか俺達がトラックで侵入するなんて誰も思いつかないよな。

俺も思いつくまでは考えたこともなかった。

こうやって心でつぶやいてるけど腕は

しっかりと噴出ボタンに集中している。

案外忙しい。

それよりもこのロケットエンジンの青の炎目立つんじゃないだろうか。

小さな不安。

《――です……。》

ホドデデス爆散しました。

なんてことだ……《》

セズクがおそらく周波数を合わせておいたのだろう。

毎度毎度ごくろうさまだ。

トラックの無線傍受装置がようやく声を流し始めた。

それホドデデスの中にいるときに鳴って欲しかったわ、個人的に。

《では、装置はどうなった？》

《おそらく、ホドデデスと一緒に……》

はぁ……とため息が聞えた。

狼狽してる、狼狽してる。

《か、艦長！》

見てくださいっ！

あれはホドデデス内のカメラが送ってきたトラックでは！？》

確かな手ごたえと共にトラックが山道に着地した瞬間だった。

無線がその声を発したのは。

R2ギアをDに戻し、ロケットエンジンが収納されたのを確認する。

ロケットエンジンは後十二秒ほど噴出できれば良いほどの

燃料しか残っていない。

素早くメーター類に目を配ってトラックの状態を確認する。

《映像を僚艦にも回せ！

間違いない！

あれによってホドデデスが落とされたと考えて良いだろう！》

見つけた！

敵が攻撃態勢に入る前に少しでも遠くに。

俺は山道を四十キロほどのスピードを出して走り始めた。

これ以上スピードを上げると俺のハンドルさばきが付いていかない。
ゲームだと全然いけるんだが残念ながら現実。

安全第一だ。

《ホドデデスの仇をとるんだ！

ジクドデスとわがネメラデスはあのトラックを。

ラシアデスはホドデデスの乗組員の救助を頼む。

行くぞ、シグドデス！

ついてこい！》

《こちらシグドデス艦長。

了解した》

一隻がホドデデス墜落地点へと向かっていく。

無線によるとラシアデス。

これは俺達を攻撃してくると思えづらいから
放っておいても害はないだろう。

問題は二隻。

通信によるとシグドデスとネメラデスだ。

それが俺達に向かってきたのだ。

「来たーーーー!!」

仁、うっさいっ!

道がどんどん狭くなっていく。

一瞬でも気を抜いたらこの深い谷底に落ちるに違いない。

二隻の巡洋戦艦の機銃塔がちかちかと光る。

それとほぼ同時に地面を弾が抉り出した。

「シエラ、しっかりイージス頼む!

でないとおつというまに蜂の巣にされちまう」

歯を食いしばってひたすら進む。

「仁とメイナはこの山の道を詳しく教えてくれ。

さっきホドデデスの中でやったみたいに」

「任せろ」

このままマックスの飛行機のところに行くわけだが
それまでにこの二隻を何とかしないと……。――

u e s .
T h i s s t o r y c o n t i n

R 2 (後書き)

ありがとうございました。

お気に入りに入れてくれた方。

ここまで読んでくださった方。

本当に感謝しています。

お気に入り数が増えるたびに

月に届かん勢いではねております。

うれしくて。

では今回はここで。

本当にありがとうございました。

外伝しゃくでは！もどうかよろしくお願いします。

はりきる戦闘神

《敵もイージスを持っているという報告は本当だったか！
弾が全然当たらないではないか！》

まだイージスを持っていると疑っていたのか敵さんは。
ホドデデスに侵入した時点で気づいてたと思ってた。
メイナのカーナビが見えない道を照らす。
これがないと運転なんてとても出来ない。
なぜかって？

答えは簡単、道が暗すぎて見えない。
ライトつけたところで変化があるとは思えない暗さだ。
あつ。

そうか、ライトつければいいんだ。
道理で暗すぎると思った。

でもライトをつけることによりもっと位置が
敵に分かりやすくなるんじゃないだろうか。
ちら、とサイドミラーで追いかけてくる二機を確認する。

その巨体のあちこちで発砲の光をちらつかせながら追ってくる。
その様子はまさに死神のごとくで、100%勝てなそうにない。

オクトパスミサイルは二発ぐらいしか残ってないし
完璧に詰みの状態である。

でもそんなことでも出来ることが一つ。
逃げることだ。

三十六計、逃げるに如かずって言うだろ？

三十六計逃げるに如かず

？〔補説〕 南史（王敬則伝）

作戦はいろいろあるにも関わらず逃げるべきときには逃げて身の安全を確保し

のちの再挙を図るのが最上の策であるということ。

？（転じて）

面倒な事からは手を引き逃げるのが一番よい、というたとえ話。ようするに逃げるが勝ちということ。

この場合？が適応されるだろう。

作戦？

ああ、あるにはあったんだけど全部真っ白になっちゃったわ。さてと。

この整備されていないがたがた道をトラックごと跳ねながらとにかく逃げる。

あまり高くないこの山を降りたら隠れることが出来る
樹海が広がっているのだから。

結論から言うところ踏ん張りどころというわけだ。

《対イージス貫通レーザー用意！
ぶちかませ！》

「波音、これだけは避けて。

いくら僕でも無理。

あのこじ開けられるような感覚がイヤ」

ネメラデス、シグドデス両機が空中で静止して発射態勢に入る。
メガデスの
経験上発射まで少しのタイムラグがあるから

それまでにどこか死角になるような所に入れたら……。

《発射！》

なっ——!?

空を貫く二本の光が伸びていく。

静寂。

そして響くあの甲高い音。

「くっ……!」

そうだった。

確かシエラは言っていた。

一番艦のメガデデスとは違って多少なり改良が加えられた機体がある。

要するに改メガデデス型があるって。

多分あの二隻の充填速度から考えて製造番号は

後ろから数えた方が早いに違いない。

弾道レーザーのタイムラグがほとんどないのがその証だ。

唸りながらハンドルを右に思いっきり捻る。

タイヤをきしませトラックが道から少し逸れ、山肌に取り上げた。

その直後青のレーザーが目の前を横切る。

熱で膨張した空気が弾け、地面がめくれ上がり、大きな岩が宙を舞う。

その下をイージスで守られた俺達が走る。

今度は右すれすれを通っていくレーザーに冷や汗をかきながら

トラックを右へ左へと操って逃げまくる。

《撃てっ!》

三十センチ砲の弾が撃ち込まれてきた。

当然当たらないが砲弾の火薬が使えなくなったわけではない。

地面に着弾した砲弾の爆炎が視界を覆う。

そこを狙ったように横からなぎ払うようにやってくるレーザー。降り注ぐ岩をくぐりレーザー、砲弾の隙間をくぐる。

「っあっ！」

すかさずブレーキを踏んだものの右サイドミラーがレーザーに飲み込まれた。

一瞬にして蒸発したみたいでそこだけが綺麗になくなっている。つとやばい。

前から二本のレーザーがきやがった。

トラックを挟み込むように。

サイドブレーキを踏んでめいっぱいハンドルを切る。

ブレーキとアクセルを調節しながら車体を百八十度回転させた。

レーザー同士のギリギリの隙間をすり抜け

またアクセルを踏み百八十度回転させる。

つまり走ったまま三百六十度回転したんだ。

どうだ、俺の操縦テクをなめんな。

だてに鬼灯のおっさんの訓練を受けたわけではないのだ。

ゲームもしたし、何度も死にかけたけどな。

今ではいい思い出だ。

ちら、とメーターに目を落とす。

荷台の損傷状態が緑から黄色に変わっていた。

どうやら端っこらへんが持っていかれたらしい。

車内に熱された空気がゆっくりと入ってくる。

「山が終わる！」

森が見えてきたよ！」

メイナの声聞き流し、横から来たレーザーを大きく迂回してかわす。

熱でヒビの入ったフロントガラスを通して前を見ると
道は一直線に森の中へと続いていた。
もう少しで逃げれるっ——！

《森に逃げられます！》

敵の悲鳴が聞えた。

どうやら俺の読みは正しかったようだ。

森の中に逃げればこっちの勝ちだ。

《大丈夫、こっちにはパンソロジーレーダーがある！
逃げられはしない！》

希望の光が一瞬にしてブラックホールに吸い込まれた。

さようなら、希望の光。

ってコトは森の中に潜んで

しばらくじっとしてやり過ごすという作戦は無理ってことか。

「上から来る！
避けて！！」

左に車体をすかさず滑らせた。

間違はなくあのまま直進していたらアウトだった位置に

青いレーザーが降り注ぎ、岩が赤く溶けた。

そりゃ鉄も溶ける温度なわけだ。

急に道が岩から土に変わった。

もう森の中にいるようだ。

木にぶち当たるすれすれの所を気合でのりきる。

夜道をこうやって通ること自体が危ないんだが

もし止まったら即死が待っているに違いない。

二本の太いレーザーが木を焼きながらせまってくるのが気配で分かった。

止まった瞬間あれにやられる運命一択だ。

《パンソロジ―起動！

自動追尾装置とリンクさせろ！》

《了解、パンソロジ―起動。

自動追尾装置とリンク開始》

シエラとメイナも使える全方位万能レーダーが射撃を手伝うようになると、すぐに狙いは格段に上がるだろう。

ネメラデスの下部砲台がちかっと発砲の光を煌かせた。

衝撃波を伴った三十センチ砲弾がシエラのイージスとぶつかった。

まさか初弾から当てに来るなんて。

なんて命中力だ。

一機――おそらくネメラデスが俺達のトラックの先に回り、ぴたりと止まった。

待ち伏せでもする気なのだろうか。

もう前にいるって分かっているんだが

この場合も待ち伏せという定義は適用されるのか？

それに俺達の先にいるとネメラデス自体も

シグドデスも誤射を恐れて弾道レーザーを撃てないんじゃないか？

一体何を……。

ネメラデスの艦底がオレンジに光っていた。

眠気なんて一発で吹き飛ばすような強烈な光。

あれはエンジンの光――ナクナニア光反動炉の光とは

また別物の――。

メガデスもそういえばあんな光を放っていたような気がする。

何だったかは覚えて――。

ぱつと頭の中のカプセルが溶けた。
答えが分かった。

「爆撃光!!」

シエラと声が被る。

正解を祝うように俺達のトラックの前に光が落ちてきた。

ぱつと見て小さそうな威力にしか見えないが地面にその光が付いた瞬間

一気に大きく膨れ上がった。

衝撃波でトラックが大きく道から逸れ木にぶつかる。

ドリルとすかさずシエラが研ぎ澄ましたイージスが

木を貫通してくれたおかげでたいした損害は見られないが

これがなかったら完璧に今のでおしゃかった。

ネメラデスの真下をくぐり何とか道に戻る。

だが安心する暇もないままピーピーと計器から音が響いた。

何だ、いったい。

メーターに目を通す。

ドリルへのダメージが九十パーセントを超えていた。

いくらイージスで保護されているとはいえダメージがゼロになることはない。

もともとシエラだけをガードするのが使命だからな。

それをこのトラックぐらい広げたらそりや多少なりガードが薄くなるに違いない。

今説明で脇にやっていたドリルなのだが

木にぶつかった衝撃で回転機構がショートしたようだ。

予備回路も起動しない。

仕方がない。

ここでドリルを破棄するしかないようだ。

ギアをWDに入れ、ブレーキの横にある黒と黄色で塗られたレバー

を踏んだ。

説明書によればコレで装備の破棄が出来る。

ガギョ……、とロックが外れる音と共にドリルが車体から剥がれた。

「メイナ、もうレーダーはいいから少しやってくれないか？」

ネメラデスがまた前に出てきた。

今までよくもやってくれたな？

「ん？」

何を？」

退屈を含んでいたメイナの声が切り替わった。

「一機、一機のイージスに穴を開けて欲しい。

そこに俺……というか仁がオクトパスミサイルを叩き込むから」

「んー……分かった。

今回は私の出番というわけだねえ。

何かわくわくしてきたわ」

メイナはUSBの腕を普通の腕に戻すと荷台の扉を蹴り開けた。

弾道レーザーにほとんどを持っていかれた扉は

拘束具ごと道に転がり追ってきている弾道レーザーに飲み込まれた。

「んっ……」

メイナは小さく唸ると連合郡の軍服の背中を突き破り

醜い鋼鉄の四枚の翼が現れた。

脈動している。

何度みても痛そうなんだが。
俺もし最終兵器だったら絶対あれはやりたくない。

「頼むぜ？」

「ニッ」

「頼んだよ♪」

ルフアーとセズクが俺の台詞にかぶせてきやがった。
お前ら空気だったもんな、ずっと。

「まかせなつて。

私は最強だよ〜？」

にっとな振り向きざまに笑い生じた疾風が車内を駆け回る。
その直後ネメラデスの隅に膨大な光が発生した。

《な、何だ！？》

《かつ、艦長！

せ、戦闘神がっ……！！！！》

《もう一度言え！

何が来たんだ！？》

《戦闘神——メイナですっ！！》

t
i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n

はりきる戦闘神（後書き）

さてさて。

やってきました、メイナさん。

今までだいたい派手な活躍を見せてくれたのは
シエラだったのですが今回はメイナさんです。

ずっと待っていた方（いるのか？）

いましたらもう歓喜してくれて構いません。

次回はメイナさんの本気です。

ではありがとうございました。

一筋の光と炎の森

《対空気銃、弾が無くなってもいい!!!

ミサイルもどんどん使え!!

とにかくメイナを寄せ付けるんじゃない!!!》

ちか、ちかっとネメラデスの表面が光り

閃光が闇にくっきりとした線を残す。

《シグドデス、貴艦はあのトラックを追ってくれ!

メイナは我が艦が受け持つ!》

《了解した。

……貴艦の武運を祈る》

カッ、とネメラデスの上で何かが光った。

金色に輝いてはいたがそれはネメラデスのイージスによって

小さくばらばらに砕けてしまう。

すかさずネメラデスが返したミサイルの山は空中に一つの炎の塊となり

メイナを包み込んだ。

だがそんなの効くわけがない。

ふふん、と唇の端を持ち上げメイナが笑う。

これが未来……じゃなかった。

ベルカが減ぶ約五千年前——過去に行われていた戦いなのか。

「右によけて」

「はいよ」

実質、メイナが一機を引き受けてくれたおかげで
攻撃量は二分の一になったわけだ。

そのおかげで幾分の余裕がわいてきたのもまた事実。
ほくら、ここまでおいで。

と手を叩けるほどの余裕はある。

嘘つきました。

そこまで余裕はありません。

《各砲塔に被弾！

イージスが無力化されています！》

メイナさん張り切りすぎだろ。

どれどれ。

さっき見たときはなんともなかったネメラデスの各所から火が出て
いた。

三本の青い閃光がネメラデスの表面装甲をさらりとなで上げる。

次々と撫でられたところから炎の筋があらわれ、一本にくつつき

火の道がネメラデスの艦体に刻まれていく。

メイナ、このままだと間違いなくネメラデス落とすんじゃないだろ
うか。

《ダメコン急げ！

くっ、A2からD5地区までを分離しろ！

なんとしてもここで食い止めるんだ！》

ネメラデスの艦長が悲鳴に近い声で命令している。

その声を遮るようにして船員の報告が右往左往している。

《ま、また来ますっ！

光波共震砲です!!!」

《艦首及び右舷に被弾！

船体傾斜右に二度！》

ネメラデスの右舷（といっても丸いからどっちわからん）から
炎が一本の筋となっていた。

青い残像を残しながらメイナがネメラデスの周りを飛び
その後ろを一拍遅れてネメラデスの機銃弾が舐める。
速すぎて照準が追いついていないのだ。

「左！」

シエラに教えられるまで気がつかなかった。

対イージス貫通レーザーが迫っていたことに。

これだけはよけなければならない。

ハンドルを右に回して華麗に避ける。

ははっ、楽勝。

道狭いけど楽勝。

「波音。

もしかしたらシグドデスさ……」

「うん」

「今イージス張ってないかもしれない」

「はあ？」

聞き返してしまった。

どうしたんだ、仁。

頭大丈夫か？

あんな万能バリアのイージスを張ってないわけがないだろう。

「僕が保障するよ♪

今、シグドデスはイージスを張っていない」

出てくんな。

セズクは腰についているホルスターから

一丁の拳銃を取り出した。

「だからその根拠は？」

聞き返した俺の肩をぽんと叩いて

「見てて？」

と一言。

「おう」

俺もそう返した。

返した後に気がついた。

見れるかつ！

俺今運転中だ！

「シエラ、見てて」

仕方なしに助手席のシエラに頼む。

「分かった」

セズクが一発の銃弾を……。

敵に気づかれないほど微妙な攻撃をした。

小さな火花がちかちかと弾け、シグドデスに接触したことを教えてくれた。

……らしい。

シエラから横流しに聞いた所によると。

「つてことはオクトパスミサイルを今放ってもいいんじゃないの？」
なるほど。

「仁、このトラックの武装PCとお前のPCをつなげ。

そしてシグドデスのエンジン部にでも一発叩き込んだれ」

仁がケーブルをつなぎ、液晶パネルを叩き始める。

突如ヒビのはいったフロントガラスに敵までの距離や敵のスピードなどが表示された。

ミサイルを放つときはなぜか、こんな感じに近代的になる。

フロントガラスの左上にシグドデスのカメラ映像によって

映し出された巨体が頓挫しそこに緑のマークが

チチチ……と鳴いて照準をつけるために動き回る。

いつもなら即効ロックオンするはずなんだが……。

「くそっ……照準が合わないっ……」

どうやらレーザーがかすったときに後部センサー類をこっそり持っていたみたいだった。

「手動に切り替えて♪
僕がミサイルを操ることにするよ」

悪戦苦闘する仁の液晶を覗き込み

セズクが右手の人差し指をUSBに切り替え仁のPCに差し込んだ。

《ミサイル用意！

しっかり狙っていけよ？

命中させるんだ》

《一番から一八番までの対空ミサイル用意。

段数、三六、セーフティ解除》

《くっ、速いっ——！》

セズクかと思ってびっくりした。

三十六発とかどんだけ撃つつもりなんだ……って思った。

どうやらネメラデス内の無線のようだ。

ネメラデスとメイナは俺達の前上空をお互い絡みあうようにして
飛んで行ったばかりだ。

そして俺達のトラックを抜いていった今

一瞬で二機を一気にしとめるチャンスが来たというわけ。

メイナさんの作戦通り。

後はネメラデスのイージスをこじ開けてくれるのをのんびりと待つ。

完璧な作戦だとおもった。

そうそのときまでは。

昼ドラ風にしてみたがどうだろうか。

「オイ、バカ！」

メイナのアホ！

メガデデス型（連合郡カスタムver）の下部……というか艦底には直径三十センチもの砲弾を放つ砲台がついているのだ。

約六十口径とシンファクシから聞いていたので砲身の長さは約十八メートルにも及び

発射の衝撃を抑える砲台もかなり大型化している。

それが道の上に落ちてきたのだ。

ネメラデスから。

俺達の進路を防ぐように。

「シエラ、吹き飛ばせないか!？」

「流石に無理かな。」

イージスを解除してレーザーぶち込めっていうなら別だけど」

イージスを解除してもらってその一瞬で――。

いや、駄目だ。

シグドデスから、無駄だというのに絶え間なく降ってくる銃弾は一瞬でもこちらがイージスを解除した瞬間蜂の巣にしてやるという意図がある。

つまり、シエラは動かせないバリア役な訳で。

となると避けるしかないのだが横に行っても泥にタイヤを取られる。行きとは違って今は約六百キロの荷物も積んでいるのだ。

となるとブレーキをかけて止まるしかない。

だが、後ろからシグドデスが押しつぶそうと迫っていた。仕方ない。

一度Ｕターンするか。

この二機を戦闘不能にしたらまた戻って……。

――燃料は？

ちらっ。

おい、後四分の一ぐらいしかねーじゃねえか！
この量だとマックスの飛行機へ行けるぎりぎり。
引き返すことすらできないってのか。

《シグドデス！

何をやっている、早くトラックを！》

《分かっている！

落ち着け！》

シグドデスが空中で静止して弾道レーザー砲塔に光を集まり始めた。
徐々に光量は多くなってゆく。

「まずい。

波音、避けれる？」

「バックでか？

無理だ」

《死ね！》

シグドデスの巨大なレーザー砲塔から一筋の光が放たれた。

「とにかく出来る限りやってみる。

上にイージスを集中させて濃度をあげる。

……元はといえば僕たちは波音を守るためについて来たんだからね」

そういえばそうだったな。

お前はまだ俺がベルカの人間だと信じてるのか？

だとしたら相当お間抜けも良いところかもしれない。

ギアをRにいれ、バックで回避を試みる。

いくらシエラでも対イーリス貫通レーザーを防ぐことは出来ないだろう。

だって文字通り貫通するんだぜ？

となるとバックして少しでもシエラの負担を減らしてやるのが吉というものだ。

だがこの考えは読まれていたようだ。

トラックより十メートルほど後ろに着弾したレーザーは幅を縮めるようにじりじりと近寄ってきたのだ。

やられた……。

前は邪魔な砲塔が横たわっていて進めない。

後ろにはレーザーときやがった。

あと一メートルほど。

トラックの鉄板がそろそろ熱で溶け始めるころだ。

逃げれる可能性はゼロ。

助けでも来ない限りは……だけど。

「また来た！」

ネメラデスか……。

空が青く光っていた。

挟み撃ち。

詰み。

チェックメイト

その三単語が頭をよぎる。

だがもう一本のレーザーはシグドデスのレーザーを

斜めから遮るようにして差し込んできたのだ。

えっ、嘘？

と目を点にした俺をお構い無しにレーザーとレーザーがぶつかり合い

お互い中和するように強烈な光が発し、掻き消える。
メガデースにトドメをさしたあの光だった。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

一筋の光と炎の森（後書き）

メイナさん活躍してましたよね？

結構がんばったのですが（メイナさんが）

さて、長かったこの編のバトルもあと少し。

なんか長引かせてしまいごめんなさい。

ここまで読んでいただき本当にありがとうございます。

→

これコピー& a m p; ペーストじゃないですよ。

ちゃんと打ってますw

お姫様

熱波が空気を揺らし、二本のレーザーがぶつかりあう。
助けてくれているってことは味方と考えてもいいのだろうか？

《な、何だ！？

どこから降ってきた！？》

案の定シグドデスの艦長は取り乱したようだ。

《エネルギー減退反応と降下角から場所を特定しろ！
ネメラデスではないだろうな！？》

騒然となっている敵超兵器の艦橋が容易に想像できる。
全員パニックになっているだろう。

《発射位置……不明！

駄目です、謎の錯乱エネルギー体を纏っています！》

《アンノウンってレベルではないだろう！？

あれだけ高出力のレーザーなんだぞ！！

イージス展開装置が不調な今やられたら一卷の終わりだって事を
分かっているのか！？》

なるほど、それでイージスを展開していなかったのか。

レーザーのことだが俺に分からないんだから敵にもわからないに違
いない。

とにかく言えることはこのレーザーはベルカの技術だということ。
横たわる闇に大空のドームがまた光った。

さっきよりも細くなった弾道レーザーが地面に横たわるネメラデスの死んだ砲台を蒸発させる。道を切り開いてくれたのだ。

《今だ、さっさと場所を測定しろ！

どこだ、どこなんだ！！》

焦る敵艦長は発狂寸前と思えなくもないほど

甲高い声を出している。

耳障りなので少しボリュームを下げ俺は仁を振り返った。

「……仁」

「分かってる。

後十秒もあればいけるさ」

俺はこくんと頷いた。

十秒ぐらいならなんてことはない。

空を舞う最終兵器と通常超兵器。

俺がヘッドライトを二回点滅させるとメイナはネメラデスのイージスへとその身を投じた。

イージス同士がぶつかり虹色の光が発生する。

思った以上に強い守りにメイナは一瞬驚いた表情を浮かべた。

が、すぐに余裕の顔に戻り自分自身のイージスの出力を上げ

敵の万能の守りを少しずつ引っぺがしてゆく。

一枚、また一枚と。

破壊のために生まれてきた最終兵器は

同じく破壊のために生まれてきた超兵器に

真っ向からの勝負を挑んだのだ。

だが結果は見えていた。

「あと五秒……！」

俺はアクセルを踏み、トラックを押し出す。
重いエンジン音が森に反響する。

《敵が逃げるぞ！！》

追え！！

レーザーは本部に任せて俺達とはかく奴のもっている装置を奪還するか

今ここで破壊しなければならないのだ！！》

それに気がついたシグドデスの艦長は

レーザーのことをを後回しにしてまた俺達を追い始めた。

その場よりも約四百メートルほど南にいったところで

兵器同士の戦いは繰り広げられていた。

ネメラデスのイージスとメイナのイージスがぶつかり

太陽となった光の点が闇を照らす。

直接見ると失明しそうだ。

《出力を上げろ！

イージスを破られる！！》

ネメラデスの艦長も明らかに先ほどまで余裕が消えていた。

語尾がすごく強い。

《か、艦長……っ！

駄目です、イージスの負荷率が九十パーセントを超えます！！》

苦しそうに呻いた敵の声と同時に

メイナの右腕がイージスの壁を突き破った。

ネメラデスの舷側が被弾の炎を散らす。

中へ侵入した右腕のレーザー砲が光り、

確実にネメラデスのイージス放出口をひしゃげさせたのだ。

これでネメラデスのイージスは無力化したはずだ。

ナイスな働きだ、メイナ。

次は俺達のターンだ。

仁とセズクがペアで照準を合わせているオクトパスミサイルの

緑のシーカーがフロントガラス右上のシグドデスと

左上に新しく追加されたネメラデスに赤く重なる。

「ターゲットロックオン！！」

フロントガラスにその文字が浮き出し、仁が叫ぶ。

ほぼ同時にキーボードのエンターが叩かれる音が車内に響いた。

トラックの横に張り出した鉄箱の扉が開き中に残った蛸が目を覚ました。

鉄の円状になっている拘束具が上下に開き押さえつけていたものはゼロになる。

蛸が獲物を捕まえるようにミサイルは噴煙を上げた。

その噴煙を破り二本の蛸が敵へとプログラムされた通りに狩りをはじめた。

《敵車両、ミサイルを発射！》

《各銃座、撃て！

帝国郡の例の蛸かもしれん！

なんとしてでも撃ち落せ！》

オクトパスミサイルは標的から何本もの銃線が伸びてきたのを悟っ

た。

セズクから送られてくる指令に従い右に避ける。

標的の下装甲はとても分厚く突き破ることは出来ない。

ならどうするか。

オクトパスミサイルを追う様に弾幕が展開され予測射撃の罠を掻い潜る。

メイナに破壊され薄くなった左舷を的確に狙い済ましオクトパスミサイルは

いったんホップアップした後、重力とロケットエンジンの力を借りて一気にそのスピードを上げ標的に突っ込んだ。

シグドデスを狙ったミサイルは一拍遅れた敵射撃を見事にすり抜け敵の艦橋を掠めた後上昇に転じた。

高度約二千メートルまで昇るとエンジンをいったん切り

重力に引っ張られるがますますどい弾頭を下にして落ち始める。

それを待っていたかのようにロケットエンジンが息を吹き返しミサイルを

ぐいっと押し出した。

ネメラデスのイージス放出口が潰されたことにより

拘束具から開放された電子錯乱ミサイル——オクトパスミサイルは音速の三倍のスピードで突っ込んだ。

敵の装甲内に収納されたミサイル格納庫にまで深く突き刺さる。

セズクの言った装甲が薄い部分をピンポイントに突いたのだ。

シグドデスは何と音速の四倍ちよつとで敵の艦橋に直接つつこんだ。

窓ガラスを叩き割り飛び込んできたミサイルにシグドデスの艦長は肝を潰したに違いない。

ミサイルは艦橋の中を暴れたと思うと、壁に広がる射撃管理装置に食らいついた。

《な——! ?》

レ、リーダーが! ?》

《艦長、第八、第十二、第二十通路で火災発生です！
そ、そんな——まだ増える！》

《第四主機炎上！

姿勢を維持することが出来ません！》

ネメラデス内が狂気に飲み込まれたのを無線で確認。

……うまくいった。

ふわりとメイナが荷台に下りてきたときそう確信した。

艦体からメイナとの戦闘を表す煙をたなびかせ

ネメラデスはふよふよと今、危なっかしげに宙を漂いつている。

その中ではあるはずもない出来事に修理班などが駆けずり回っているに違いない。

射撃管理装置をやられたシグドデスはその多数の兵装が実質使用不能になっていた。

巨大な砲塔はぐるぐると明後日の方向にその長い砲身をめぐらせ表面装甲に露出したミサイル発射口が開いたり閉じたりしている。

完璧に二機ともミサイルの働きにより機能を阻害されていた。

だがすぐに立ち直るだろう。

メガデスの時は約二メートルという巨大なオクトパスミサイルだったから

あの装甲を破り死神の主武器を封じることになったのだ。

だが今回は違う。

全長五十センチ余りとかかなり小さくなっておりなんか心細い。

小型化したというのはその分何かが削られているということだ。

ピンポイントで狙わなければ二機のの装甲を破ることは出来なかっただろう。

第二の働きである、動力をむさぼるという働きもあまり期待できない。

ほとんどゼロと考えて間違いない。
ならどうするか？

《くっ、何が起こっている……！？

副長、まだか早く探し出せ！》

《ネメラデスカ！？

こちらシグドデス、よく分からないミサイルが……。それが原因かもしれない！》

決まっているだろ。

こうやって混乱してくれているうちに少しでも距離を稼ぐのだ。トラックのスピードを更に上げる。

敵は非常事態に気をとられそれに気がついていない。

ゆうゆうと逃げる事が出来るというわけだ。

暗闇に混じった二機の超兵器の巨体を後ろに見ながら俺達のトラックはそそくさとこの場を離脱した。

「にー！」

ルフアーが肩に飛び乗ってきてもぞもぞ動く。

くすぐったい。

ぷにつぷにのルフアーのほっぺ（？）を引っ張ってみた。
よく伸びる。

思ったよりも早く俺達のトラックは連合郡倉庫の脇を通過し

輸送機の所へたどり着くことが出来た。

マックスは煙草を揺らしながらボロボロになったトラックを見てふっ、と口元をゆがめる。

焼けたように煙が出ているタイヤはほとんどホイールオンリーで走っていたという危ない状況だった。

損傷感知センサーも相当ダメージを受けていたようだ。

緑ゾーンだったから大丈夫だと思っていたのだが……。

シエラをトラックから降ろし、荷台を輸送機の中に移す作業に入る。

「まさか本当に盗ってくるとは思わなかったぜ。

ったくてーしたやろうだよ、お前らは」

仁はげんなりと疲労の色が濃い。

その淡い顔をぶら下げたまま

「俺は二度とごめんだよ。

ここまで怖い目にあったのは久しぶりだ」

そう呟くとそのまま飛行機の椅子に腰掛けた。

シエラが水を飲みふーっと空を見上げる。

お疲れ様だな。

今はメイナがパンソロジーレーダーで敵が来ないかどうか見張ってくれている。

あれから二機は俺達の反応をロストしたのかまったく攻撃を仕掛けてこなかった。

本部にでも帰ったのだろうか？

嫌な予感しかしない想像を打ち切ってトラックにもたれかかった。

ガシヤンと例の装置が輸送機内の倉庫にしっかりと固定される。

小型クレーンを操っていたセズクが目頭を押さえながら

操縦席から出てきた。

「ふー、流石に緊張したよ今日はね。」

まさか超兵器が出てくるなんて予想も付かなかった」

そういうながらトラックの運転席に乗り込み

ゆっくりと輸送機の中にその車体を収納してゆく。

「波音、今からもう帰れる？」

シエラが俺の右腕を引っ張りながら聞いてきた。
疲れているのだろう。

アレだけ長いことイージスを張っていたのだから。

「うむ。」

目的は達成したんだ。

帰れるに決まってるだろ。

それよりさ。

なんだ？

あの……、何ていうんだ？」

俺は空からびがーっと光が落ちてくるレーザーのイメージを
両手を総動員させて表現した。

その動きをしばらく眺めていたシエラは

「弾道レーザー？」

首をかしげながら答えを教えてください。

そうそう。

「それだ。」

それが俺達を守ってくれただろ？」

マックスは掛けていたサングラスを外して
ハンカチで拭き始めた。

マックスの目はまんまるでな。

本当に綺麗なんだよ。

ビックリするほどに。

それで笑いそうになっちまった。

こらえたけど。

……もし笑ったら帰りの飛行機の操縦が更に荒くなるかもしれんかな。

「なあ、マックス。

帝国郡に超兵器は存在しているのか？」

俺は唐突に聞いてみた。

空から毎日基地を見下ろしているのだから
多少なりの変化なら気がつくと思うのだ。

「あいにく俺はわからないな。

でも超兵器を見たことはあるぜ？

でっかい艦だった。

大体全長は千四百メートル前後と見てもいいんじゃないだろうか？
海に浮かんでいるそのままの艦を陸に引き上げた感じだ」

千四百メートル前後……？

一キロと四百メートルだぞ？

じゃあメガデス型じゃないってこと？

「それ、超兵器なのか？」

疑いの目を向けるとマックスはその深い青の目を俺に向け「さあな」と笑った。

「ただ、ハイライトから一つの超兵器が見つかったってのはマジだ。俺はこいつで」

マックスは輸送機を叩いた。

「その超兵器を運んだんだからな」

ど、どうということだ？

「ジョンが見つけた超兵器を運搬する作戦に参加していたのさ。超大型輸送機千二百機あまりと俺の愛機含め通常輸送機二千八百機。」

帝国郡が持ちうる全ての輸送機を使った作戦だったんだからな。

まあ海に降ろすまでだったけどな。

そこから先はよく分かん。

戦艦が八隻がかりで引っ張っていったのを見たきりだ」

ハイライトに超兵器が眠っていた……？

「大変だったぜ？

それだけ大量の輸送機を置く場所がないから

帝国郡はデカイ犠牲を払ってまでハイライト周辺から連合郡を追い出したんだ」

マックスはメイナとシエラを顎で指した。

「ハイライトにも周辺にも連合郡がいなくなってからだな。

この作戦が発令されたのは。

当然口外禁止。

まあぶっちゃけた話極秘も意味ないほどもう帝国郡の間には浸透しているけどな。

帝国郡の間ではお姫様なんて呼ばれてる」

マックスは煙草を地面に捨てぐりぐりと足でもみ消した。

俺達がこの装置を持ってきたのはもしかしたら……。

帝国郡が超兵器を保有したいがため？

「おそらく『ヴォルニーエル』級だ」

シエラはまだ煙がくすぶる煙草をじっと見つめると
ぽつりとこぼした。

「千四百メートルという大きさから考えると

第三超空制圧艦隊旗艦『超空突撃戦艦ヴォルニーエル』。

それか二番艦の『超空突撃戦艦ニジェントパエル』だと思う。

メガデス級なんてやさしいものじゃない。

ここから上のグレードは化け物と言ってもいいぐらい」

トラックを固定するワイヤーがきしむ音が

沈黙した会話の代わりに鳴った。

t
i
n
u
e
s.

お姫様（後書き）

ここまで読んでいただき感謝です。

ポイント入れてくれた方本当にありがとうございますっ！！！！！

5ポイント×2！

ぐはっ、最高に幸せです。

もう本当に。

興奮して足の小指をタンスにぶつけてしまいました。

本当に感謝です。

ありがとうございました。

『超空突撃戦艦ヴォルニーエル』――『星夜楼』

「ん……、高速で接近する物質を感知。
形状からおそらくメガデス級……」

ネメラデスとの戦いでボロボロになった服を脱ぎ去り
変わりの服を探しながらうろちよろしていたメイナが
急に俺達の間割り込みそう言って来た。

「とりあえず服を着ような、メイナさん」

俺は鼻を押さえながらメイナに言う。

落ち着け、落ち着くんだ。

マックスは俺と話していた為、その会話を必然的に拾ってしまった
ようだ。

まあ男の本能だ、仕方ない。

「ぶっ、お前服着てないのか!？」

誘惑には勝てないのもまた男の本能で

マックスは勢いよく丁度後ろに位置していたメイナを振り返った。
モロに正面から正視してしまったわけだ。

「うわ、本当だぐっはあ!」

マックスは目をひん剥いてゆっくりと倒れていく。
その顔はぐちゃぐちゃに歪み本当に幸せそうだ。

「マ、マックスー!!」

地面に倒れたマックスの頭を抱き上げ
更なる出血を許してはならないと俺はマックスの視界を
持っていたハンカチで覆う。

だがそのハンカチをすぐに取り去りマックスは

「男の浪漫を邪魔するんじゃない」

キリッと決めて見せた。

いや、あんた死にかけてたがな。

「ま、マックス大丈夫かねえ？」

私何か悪いこと——」

「だーっ、お前はこっちに来るんじゃないっ！」

心配そうに覗き込んできたメイナをまた正面からマックスは食らった。

ごぷっと鼻血がハンカチからあふれ出す。

なんて量だ。

それに顔が尋常ではない。

例えるなら戦艦の艦砲を一身に受けたような。

そんな衝撃を食らった顔をしていた。

「ごっはあ！」

「マ、マックスー!!」

「で、あと何分ほどでこちらにつくんだ？」

鼻の穴にティッシュを詰めながらマックスはサングラスをかけなおしメイナの顔を見ないようにして聞いた。

「……約二十分足らずかねえ。

あくまでも予想だけどさ」

メイナは新品の軍服をようやくひっぱりだしてきて前のボタンを閉めていた。

「なら十分だ。

よし、てめえら乗れ！

さっさとこの場から離れるぞ！」

マックスはそういうと右手にもったリモコンのスイッチを押した。

格納庫の扉が遠距離操作で閉まり、マックスと俺とメイナは

主翼のすぐ下についている扉から中に乗り込んだ。

まだ新しい煙草をドアに入る前にもみ消し、マックスは

駆け足でコックピットへの階段を駆け上がる。

その後ろをのんびりとメイナが付いていった。

止まらない赤い滝がマックスの歩いた後の床に刻印されている。

ティッシュ詰めていたのにまだ出るか。

まああれで死ねるなら男の本望だろう。

よって放置決定、もう知らん。

すぐにエンジンが唸りをあげて空気を吸い込み始める鈍い微動が床を伝ってきた。

俺はもう一つ扉を開け、仁達がいる部屋に入り開いている椅子を見つけ座った。

『全員、シートベルトは締めたか？

ケツの穴閉めとけよ、漏らしても知らんぞ。

行きよりも帰りの方がハードだぜ！！！！』

その声には行きに聞いた艶がない。

相当消費しているということか。

おいおい本当に大丈夫なんだろうな。

ふと仁を見るともう青い顔をしていた。

前の座席のバスケットに入っていたエチケット袋渡してやろうか迷う。

考えた挙句面倒なので渡さないことで決定した。

おそらく仁の前の座席にもあるだろう、袋ぐらい。

シエラはシートベルトをしっかりと締め窓から外をぼやんと眺めていた。

メイナはさっきコックピットに行ってこの輸送機のPCとつながっていると思う。

レーダー担当なんだとよ。

こんな奥地で、敵地なんだから当然味方のレーダー援助なんてものはない。

帝国郡人工衛星もすべて叩き落されてしまっている今、メイナさんががんばるしかないらしい。

セズク？

知らん、見たくもない。

ルファア？

ああ、肩で「にーにー」鳴いてる。

とりあえずジュースを入れるあの穴にはさんでおいた。

シートベルトだ。

「にーっ！」

おいこら暴れるんじゃない。

そんないい首の運動の後、顔を正面で固定した。

Gが横にかかったら臍を傷めることになるし肩もこる。

ただでさえ老体だというのにこれ以上の負担はかけられない。

骨が折れちゃう。

『行くぞっ！』

エンジンが熱い空気を吐き出す量が急速に増加してゆっくりとだが輸送機は動き始めた。

木々が倒れ、四百メートルほどの雑な滑走路の上をすべるように動く輸送機はスピードをぐんとあげふわりとした感じで……。

もう何回飛行機乗ったんだろう。

いちいちこの浮遊感を言葉にするの疲れた。

どうやら感覚だけは慣れというものが来ないようだ。

頼ることの出来るものがない感じの不安感がある。

空中というなんとも曖昧な場所にいるというのは

どっしりとした大地から離れた寂しさもあいまって

余計に不安に感じるのだ。

どんどん大地が下に落ちてゆく

仁とまた来たいなと語った小さな村の明かりが離れてゆく。

もはや深夜と言ってもよい時間になっている携帯の時計を見て小さくため息をついた。

のんびりと窓から外を眺める。

ざっとした殺気を覗いた瞬間感じ、思わずカーテンを閉めた。頭に血が上ってぼんやりしはじめ。

まさか……。

『マックス。』

シグドデスとネメラデスが来てるよ。

ラシアデスもおまけでねえ』

俺の嫌な予感って本当に当たるんだな。

メイナの場合に合わないのんびりとした報告が

スピーカーから流れた瞬間そう自覚せずにはいられなかった。

『距離は？』

メイナとは正反対に少しの焦りを含ませた

マックスが状況を掴むためにやりとりをはじめた。

『約一万』

『高度は？』

『五千ちょい』

五キロ程度ならあつという間に見つかっちまう。

「しつこいやつら」

シエラがぼそつと呟きシートベルトを外し立ち上がった。
そのまま格納扉の開閉レバーに手をかける。

「ちょ、なにやってんだよ!？」

仁がその様子を見て止めようと手を伸ばした。

「今から三機とも叩き落とす」

その手を叩いてしれっとシエラは答える。

『待て、シエラ！

この機体はステルスだ。

あいつらには見つからないかもしれ……な……い』

マックスの最後の方の声は凍りついた。

ロックオンされたことを教えてくれる赤のライトが回り短い間隔で警報が鳴ったからだ。

『くそっ、何でだ！

H o l y s h i t ! 』

「ほ、ほーりー？」

聞きなれない言葉を聴こうと仁が聞き返したが答えが返ってくる前に床が斜めになり、機体が大きく左に旋回した。

連合郡のレーザー網を掻い潜ると同時に三機からやってくる攻撃を避けなければならなかったためだ。

もし連合郡のレーザー網に触れてしまうとその瞬間に無条件で約百発もの対空ミサイルが飛んでくることとなる。

泣きっ面に蜂の状態に陥るわけにはいかないから面倒でも連合郡のレーザー網を避けつつ逃げるしかないのだ。

『S h i t !

H o l y s h i t !
』

赤く槍のようなミサイルがきらと月光を浴びて突っ込んできた。マックスは機体を大きく右に旋回させ、その追尾を簡単にかわした。だがその後ろにいた二本目、三本目がすかさずやってくる。

尾翼に付いた二十ミリ機銃がメイナとリンクされそれをぴったりと見据えた。

距離が約百メートルになったときそれは火を吹いた。

ミサイルの動きにしっかりと食いつき、機銃がその銃身をめぐらせる。

一発外したが二発目がミサイルの弾頭を見事打ち抜き、ふくれあがった爆炎の中を

突き抜けて三発目が襲来した。

三発目は一度尾翼ごと撃ちぬかれたにもかかわらずまだあきらめてはいなかった。

上下を司る装置が壊れているのを知らずに

上昇に転じた機体を追おうとしたが尾翼が動かない。

輸送機をすれすれを通ったミサイルは静かに海上を漂うと燃料が切れ、やがて海へ落ちる道しか残ってはいなかった。

『くそ、まだきやがる!』

マックスの声が今までよりも抑えられたような低い声になっていてそれが余計に不安をあおる。

「ステルスじゃなかったのかよ……」

仁の呟きをかき消し出し抜けに

今までとは違う大きさの警報音が機内を埋めた。

な、なんだよ。

思わずびくつとなった体とばくばく鳴り始めた心臓は
これも嫌な予感だとはつきり俺に語りかけていた。

『……入っちゃった』

……。

連合郡のレーダー網にか？

窓からかなり遠くにうつすらとだけ見える岸が光りだした。

点と点が結びつき一筋の美しい光の道が出現する。

美しい、とか綺麗だとか思っている場合じゃない。

あれは全部連合郡のミサイルポッドから対空ミサイルが発射された
光なのだ。

『まずい！』

約百二十ほどの高出力エネルギーた……い……』

メイナの声が途中で止まった。

その後メイナは

『信じられない』

と小さく息を呑んだ。

『どうした？』

早く報告してくれ！』

マックスの歯軋りと同時に

搾り出すかのような声が鼓膜を撫でる。

『み……』

み……？
みかん？

『右後方から超巨大飛行物体を感知。
連合郡の百二十のミサイルは全部そっちへ……』

シートベルトごと体を反転させ窓から右後方を確認した。
窓から覗いた俺も言葉を失う。
な、なんだよ……あれ。

千四百メートルほどの巨大な物体が
全体から赤や青の光を出しながらそこに存在していた。
ぱっと見て戦艦がそのまま浮かんだように見えなくもない。
赤や青の光が波打ち、照らされた数え切れない砲台や
やたらとがった艦首、そしてそれだけでこの輸送機の五倍はあ
ると思えるほどの

大きさを持った固定式の砲台が上甲板に三基。
艦底に二基くっついている。

大きな主翼は四枚、艦首には小さな補助翼が二枚ついていた。
図体のかさに相応の艦橋が鎮座し、窓からうっすらした光が漏れ
ているのは

本当に不気味ささえ感じさせた。
にじみ出る殺気とその艦全体を覆っている。

「……『ヴォルニーエル』……！！」

シエラも「どうして……」と疑問を持たざるをえなかったに違いな
い。

あれがヴォルニーエルか。
第三艦隊の旗艦の超兵器……。

ヴォルニーエル——『星夜楼』の名になかなかふさわしい。

《大丈夫だったか？》

女の声がヴォルニーエルから俺達の輸送機宛に通信が来たらしい。
この声には聞き覚えがある。

『シンファクシ！

来てくれたのか！』

《まったく。

私がいらないとお前はいつも窮地に立たされているのだな？》

ああ分かった。

出撃の時にシンファクシが心配そうにしていたのは
俺達に向けてじゃなくてマックスに向けてなんだ。
なんだよ、ははは……。

《イージス、出力全開。

ミサイルをすべてここで食い止める》

ヴォルニーエルの光が強くなり、空気が張り詰める。

そこに殺到したミサイルは全て見えない壁に阻まれ

ヴォルニーエルを覆うかのように爆発した。

爆炎がヴォルニーエルをくつきりと浮かび上がらせる。

まさにそれは『超兵器』の名にふさわしい圧倒感。

そして威圧感。

味方だというのにいつ殺されるのかびくびくしてしまう。

《ここは私が食い止めよう！

貴官らは先に帰っていてくれ!》

n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t
i

『超空突撃戦艦ヴォルニーエル』――『星夜楼』（後書き）

超兵器、とうとうヴォルさんがでてきました。

星夜楼、せいやろう とよみます。

この野朗みたいに見えますがもう気にしないでください。

僕も書きながらそれ思ったのです。

でもなんか漢字が好きなのでもういいやと妥協した次第。
のであまり名前には突っ込まないでください。

ちうに病じゃないです。

本当に。

ではここまで読んでいただきありがとうございます。

くすぶる紫煙と霞

《マックスとレルバル。

聞えるか?》

『さっきから聞えてるよ。

なんだあ?』

マックスのかったるそうな反応を受け止め

俺もヘッドセットについたマイクをすこし口元に近づけて

「聞えてます」

と短く返事をした。

《こっちは私達が何とかする。

だから速いところ逃げてくれないか?》

シンファクシが後ろで指示を出しながら

俺達に通信をしているようで時折《全開にしろ!》などの
怒号の嵐が一緒にこちらに中継されてくる。

『だが、その超兵器は……』

マックスが珍しく言葉を濁した。

十秒ほど無線が沈黙する。

《……………。

兵装が一切使えないことは承知している。

でも盾になることぐらいは可能だ》

『……シンファクシ………』

《ちゃっちゃと敵をひきつけるだけひきつけて
あとは速度で振り切って私達も逃げる。
少しの間おとりになるだけだ》

『………だが………』

《その装置がやっと届いたんだ。
このヴォルニールを完全に覚醒させることが出来る。
そして帝国郡の希望であるこの超兵器をみすみす元帥の私が
壊すわけがなからう？》

ふん、とマックス臆病かげんを戒めるかのように
鼻で笑ったようだ。

『姉貴………』

マックスの本当に心配そうな声に思わず背筋が凍った。
というか姉ちゃんだったのか。

《なんだ？

それに姉貴と呼ぶなと何度言わせるんだ？》

『………死ぬな』

マックスそれ以上は駄目だ。
完璧な死亡フラグになる。

案外バカに出来ないんだぞそのフラグ。
やめとけ、本当に。

「えっと、シンファクシ。

シエラを置いていこうか？」

そのフラグをへし折るには少しでも勝利の要素を
加えておいたほうがいいだろうという勝手な判断だった。

《……いや別に構わない。

このヴォルニーエル一隻だけで十分やりあえる。

マックス！》

こ、断られた……。

『な、何だあ？』

マックスは急に自分に話が振られたことに驚いたのか
声が裏返りつつも応答していた。

《さっさとレルバルをつれて逃げるんだ。
分かったな！》

『……了解だ。

任せてくれよ。

おいお前ら！

しっかりと捕まっておいてくれよ！？』

マックスの声がスピーカーの網を破って出てきたかと思うと
機体が軋み大きく右へと旋回した。

Gに耐える鼓膜に

《かかってこいよ、三機ともっ……！》

というシンファクシの勇む発言が飛び込んでくる。

Gに耐え切れない首が自然と窓の外を向き

しぼんだ肺が空気を口から漏らした。

《イージスの出力は常に全開だ！

一機たりともここを通すんじゃない！

なんとしてもあの輸送機を帝国郡の希望を守りきるんだ！》

窓から見えるヴォルニール全体の光量が一気に増したようだった。

星空が掻き消えるほどの強い光が超兵器を覆い

三機のメガデス級を真上から照らし上げる。

《機関全速！

方位二一〇に進路を取れ、右八十度ちょい艦首上げ！》

ヴォルニールの艦尾から紫の光が長く伸びた。

ハイライトでもみたあの奇妙な光だ。

ナクナニア超光と呼ばれるベルカの万能光……。

ヴォルニールの巨体を見つけたメガデス級の三隻が

まるでその光を食らうかのように襲い掛かった。

まだ機体から煙を出しているにも関わらずヴォルニールの前に出たのは

おそらくネメラデスだろう。

上部に着いた三十センチ砲から煙がたなびき砲弾が飛び出す。

それをいなし敵を撃ち落とす絶好のポイントに達したのに関わらずヴォルニールは兵装を解き放つことは出来ない。

だがそれはあまり問題ではなかったようだ。

ネメラデスの艦長はヴォルニエルの異常な接近に気がついたに違いない。

泡を吹いて緊急回避を指示したときにはもう遅かった。

ヴォルニエルの尖った艦首がネメラデスの右舷に突っ込んでいったからだ。

火花が大きく弾けネメラデスの砲台が基礎からもげ落ちる。

右舷という翼が砕け散り

洋上に鋼鉄同士がこすれあう悲鳴が長く尾を引いた。

右舷をもがれたネメラデスは急速に高度を下げてゆく。

やがて大きな水柱をたて、水面へとその巨体が飲み込まれた。

全長二百メートル強、十六万トンもの物体の衝突を受けた海面が大きくうねり飛び散った水は二百メートルあまりも吹き上がった。

ネメラデスを落としたときヴォルニエルは艦首にイージスを集中していたようだったといて良いほど無傷だった。

落ちて行くネメラデスを見たのか即座にシグドデスが迎撃体制に入る。

対イージス貫通レーザーが発射され空に青い柱が伸びた。

《ちっ……！

左舷光タンクに注光！

傾斜と同時に左舷エンジン後進、右舷エンジン全開にしる。

きついのが来るぞ！》

ヴォルニエルの全長千四百メートルちよい、質量百十六万トンの巨艦が

見るものを圧倒する三次元運動を展開する。

空から降りてきた対イージス貫通レーザーをその巨体でありながら左に大きく旋回することにより皮一枚で避けて見せた。

機動性も半端じゃなく高いようだ。

左に旋回した艦体は水平をすぐに取り戻し左舷も全開にして重力も借りて

一気に速度を上げた。

そしてその艦首先には対イージス貫通レーザーを放ち機動性の鈍ったシグドデスがいた。

この時、シグドデスの艦長の緊急回避の命令は悲鳴にしかならずコンマ三秒の後にヴォルニーエルの鋭く上がったバルバス・バウ部分

シグドデスを真正面から串刺しにしていた。

ナクナニア航空機関が割れたシグドデスからあの危ない光があちこちに花火のように飛び散る。

そしてその光がシグドデスの弾薬に引火したのか膨れ上がるような炎が上がり

ヴォルニーエルの半分を覆った。

その炎を艦首で引き裂き星夜楼が高度を上げる。

燃え尽き、ばらばらになったシグドデスだった超兵器の大小ばらばらの部品は海面に落ちていった。

『……無茶ばかりするなあ』

マックスもその光景を目の端で見っていたに違いない。

ぼそっと呟いたのが聞えた。

俺もそう思うぜ、マックス。

ヴォルニーエルと残りの一隻は窓の後ろに流れ見えなくなった。

ぐんと輸送機の機首が上がり高度も上がってゆく。

《すぐに私達も行く。

先に行って待っていてくれ。

貴官の幸運を祈る》

『……そっちこそ』

これの交信を最後にヴォルニーエルとの通信は途絶えた。
俺は窓の外に張り付いていた目を引き剥がし座席に深く腰掛ける。
目にかかるものがあるので拭ってみると大量のべったりした
汗が額を覆っていた。

いつの間にかこんなに大量に汗をかいていたらしい。

『連合郡のレーダー網を抜けた。

もうシートベルトを外しても大丈夫だ』

きつかったシートベルトよさらば。

伸びをしようと思い立ち上がる。

だがそれを邪魔する警報に俺は小さく舌打ちした。

『海面に敵艦隊を捕捉！

ごめん、完璧に見逃してた！』

メイナもきつとパンソロジーでヴォルニーエルの戦いを見ていたの
だろう。

あれだけすごい戦いはめったに見れるもんじゃないからな。
かといって仕方ないで済ますつもりはない。

「バカ、何やってんだ！」

手に取ったマイクでメイナを思わず怒鳴りつけた。

『ご、ごめんって……。』

っ、敵艦隊ミサイルを発射！

目標は間違いなく私達！』

「……僕が行く」

「シエラ？」

シエラは頭に載せたヘッドセットを外し座席の上に置いた。
とことこと歩いて開閉レバーの前に立つ。

ぐいっと下から上にレバーを上げるとくるくると赤ランプが回り
ゆっくりと格納庫の扉が開いた。

まだそれほど高くない高度のおかげで吸い出されなかったが
もう少し高かったら間違いなく吸い出されてたぞ今の。

シエラは両腕を広げると目を閉じた。

背中から盛り上がるようにして銀色の翼が現れる。

服の破れ目から見える白い皮膚とは対照的な銀色に

痛々しさを覚えないでもないが本人はまったく痛くないらしい。

「じゃ、行って来る」

赤く見える月を背にした顔に影がかかり、赤紫の瞳だけが光っている。

その目がずっと細まり俺の顔をみて笑ったのだと理解した瞬間
風を残してシエラはもうそこにはいなかった。

自動でしまつてゆく格納扉の隙間の向こうで銀の流星が
下の艦隊に向かって堕ちて行くのだけが分かっただけで。

俺はふと思いついて下部銃座に入ろうと床のハッチを開けた。

輸送機の中央より少し機体の尻側についている銃座は

全体が強化防弾ガラスで覆われている。

磨かれたガラスのおかげで三百六十度をぐるりと見渡すことが
この場所だけで出来る唯一のことだった。

そのガラスの中には椅子が一つつるされるような形で置いてありそ

の椅子の前には

黒々とした機銃とそれを操るシステムがおいてあった。

ハッチが開くと人が一人やっと入れるような隙間が出来て
その中に体を押し込んだ。

下もガラス張りになってるので気を抜けばまっさかさまに
落ちてしまうという連想をどうしてもしてしまう。

ちなみに俺高いところ嫌いなんだ。

じゃあ何で入ったんだって話だけどまあ気にするな。

椅子から少し体をずらし薄い雲海をガラス越しに見る。

薄い雲の下がちかちかと光っているのが分かった。

おそらくシエラが戦っているのだ。

ひととき大きな光が発され白い雲の中にうっすら黒煙が混ざる。

おそらく一隻撃沈されたのだろう。

「おい、波音」

呼ばれたのでハッチ口を見た。

仁だ。

「どうしたんだ？」

仁は答えず手招きをした。

疑問に思い、また発した一つの光を後に銃座から出る。

銃座から出た瞬間目の前におにぎりが出された。

「お腹減ってないか？」

いきなりどうしたんだよ……。

俺結構色々考えてたんだぞ？

でもまあ言われて見れば――減ってるかもしれない。

あまり考えもせず『こんぶ』と書かれたおにぎりを受け取った。
ビニールを破りぱりぱりの海苔が巻かれたおにぎりをかじる。
塩の効いたただの海苔がなぜかすごくおいしく感じた。

思っていた以上に敵の妨害工作は無く無事にアフリカの
帝国郡基地にたどり着くことが出来た。

シエラは艦隊を駆逐艦の一隻のみ残して全部潰してきたらしい。

甲板一杯にまで負傷者と生存者を乗せた駆逐艦の艦長に

「あとはよろしく」とだけ言って。

皮肉だぞお前それ。

「レルバル、お疲れだったな」

輸送機から降りたときマックスは煙草を咥えて空を見上げていた。
太陽が昇る前のうつすらとした明るい空に消えた星達の形跡を眺め
マックスの隣に座る。

しばらく沈黙が乾いた風と一緒に流れていた。

「……なあ、あの装置はよ。

一体どれほどの価値があるもんなんだ？」

マックスは格納庫から降ろされ、輸送車両にのせられた装置を顎で
しゃくった。

俺は空を見たまま

「さあ？

分かるわけないだろ俺が。
シンファクシにでも……」

口を押さえた。

シンファクシの弟であるマックスにそんなこと言うなんて
なんてバカなことを言ったのだろうか。

「……姉貴もバカだよなあ。

俺達を守るためにわざわざ来るなんてよ。

——それもわざわざ……」

マックスは煙草の灰をポケット灰皿に入れると俺の隣に足を投げ出
して座った。

無精ヒゲの目立つ顎を右手でなぞりながら空を見上げる。

「あんな装置のために……」

「……………」

俺は何も言えずに次第に太陽光の霞が増してゆく滑走路に目線を落
とした。

今飛び立とうとしている二機の戦闘機をしげしげと眺める。

「ベルカ守護四族の末裔だかなんだかしらねーがよ。

なんで姉貴はここまでがんばるんだろうな？

バカなのか賢いのか分かりゃーしない。

お前もだよ、レルバル。

まさか本当に取ってくるなんて誰が思った？

今だから言うが俺は失敗するに二十ドルも賭けてたんだぜ？

見事に外れちゃったよ……」

マックスは煙草を大きく吸い込んだ。
赤く光った炎で煙草が短くなる。

「この連合郡と帝国郡の戦いもいつになったら終わるんだろうな。
俺がまだガキだったときからずっと続いてるんだぜ。
いい加減講和を結んだりしても良いと思うんだがなあ」

揺れる紫煙が空にゆっくりと昇っていく。
ぽつんと明るい空に暗闇が出来た。

「俺が生きているうちに戦争は終わるんだろうか？
俺達の子供までこんな理不尽な戦いだけはさせたくないもんだ。
いくら守護四族のネメルシエア家だとしてもだ」

その暗闇が次第に大きくなってゆき艦の形に変わり始める。
はしゃぐ心を抑えて

「……マックス」

「なんだ？」

「帰ってきた」

俺は暗闇を指差した。

「……本当だな」

マックスは煙草を灰皿に放り込むと笑って立ち上がった。

「元帥さまのお帰りだ」

腰に手を当て今までの憂鬱を吹き飛ばしたように
笑顔になるマックスを見て俺も胸をなでおろした。
これでひと段落ってところだな。

T h i s s t o r y c o n t

i n u e s .

くすぶる紫煙と霞（後書き）

ありがとうございました。

さて一気にラストへ向けて進んでいきます。

おかげさまでもう八十話になりました。

第一話はもう二年前に書いたことになるのかな？
今度計算してみます。

こんなに長いのに……。

本当にありがとうございました。

飛行機雲

ヴォルニエルの艦首が青い澄んだ海を割り
次に緑色に塗られた喫水下が海に沈みこんでゆく。

静かに波をたてながらヴォルニエルは栈橋から
約四百メートルほど離れたところに停船した。

艦首と艦尾に付いたE字型の錨が海面に落とされ小さく水柱が立つ。
艦橋のハッチが開いて中からシンファクシが出てきた。

小さくてもよく分かる。

あいからわずびっちりと服を着こなし、メガネをかけた姿は
こっちに手を振っていた。

『元帥のお帰りだ。』

幹部は直ちに第一集会場に集まるように』

そばに立っていたスピーカーから美声が響きマックスが
デコにかかった金髪を撫でる。

「さて、じゃあ第一集会場へ向かうとするか」

マックスが俺の背中を押すようにして誘う。

「ん……分かった」

俺はマックスの後ろを離れないようにして
とことこ帝国郡の中のひととき大きな建物の中に入った。
広いも広い。

ひんやりとアフリカらしくない空気を溜め込んだ木造の建物の中は
中が本当に広いのだ。

ももとは乾ドックだったのだから広いのは当然といえば当然だけどな。

ここで戦艦や駆逐艦が作られていたと考えるとすごく胸が躍る。まだかすかに潮の香りが残っており、天井にある無数の窓からやわらかい太陽の光が斜めに差し込んでいる。

軍事基地にはいささか合わない穏やかな景色だったがすぐにそこもわいわいとしてきたむさくるしい猛者たちが並ぶ場所が変わった。もちろんその中に俺も仁もマックスもいる。

シエラとかは特別席が用意されている。

中将だから。

くそっ……！

俺は少佐だからのんびりと地面に起立しているわけだ。

シンファクシは陽光の中、元クレインだったであろう

鉄骨の上に立つとぐると少佐から大将までの

いわゆる幹部がならぶ集会場を見回した。

「作戦は成功した。

これより我が帝国郡は連合郡への復讐へうってでることとなる」

わっと歓声が上がった。

「私達は装置を手に入れた。

そして一つ超兵器を持っている。

力には力を持って対抗するべきだった。

だが今まで我が軍にはそれすら許されてこなかった」

シンファクシはメガネを外して天井を見た。

その先には無くなった英霊などが見えているのだろう。

キッと目を見開き

「だがもう違う。

我々は――力を！

連合郡を破滅させれるほどの力を手に入れたのだ。

諸君、我々の夜明けは間違いなく近い。

世界に再びベルカの――故郷の旗を立てようではないか。

世界に寄生しているゴミを掃除してな。

――こほん。

さて、生産部門から割り当てを改めて決めて行きたいと思う」

余談なのだが帝国郡は

戦闘部門、開発部門、医療部門、生産部門など大きく四つに分かれている。

戦闘部門は空軍や海軍、陸軍などこれまた三つに分かれ

空軍は戦闘機管理機関、輸送機管理機関など。

海軍は輸送部隊、戦艦部隊、機動部隊などに細かく分かれていく。

それら全てをまとめているのが最高司令官にして元帥のシンファクシだ。

ちなみに戦闘部門空軍輸送機管理機関（長いなあおい）の最高責任者がマックスで

医療部門全体の最高責任者がラフファクシらしい。

ラフファクシを覚えている方いるのだろうか。
分かる？

あの再生カプセルの人。

シンファクシの双子のあの人。

シンファクシとラフファクシ、マックス。

――なんか一人浮いている気がしてならない。

……輸送機部門なだけに。

どうですか、このギャグ。

自分的には結構気に入っているんだぜ？

「……によってそのレルバル少佐により
この装置は手に入れることが出来た」

ぼけーっとしていたおかげでまったく聞いていなかった。
シンファクシが俺を指していて少将や大佐達の目が俺を射抜いてい
る。

ここに上がって来いといわんばかりにシンファクシの指が激しく上
下していた。

あわてて隣のマックスを見てその横の仁に視線を平行移動させた。
二人とも小さく口を

「がんばれ」

の形に動かすのみ。

ええー……。

俺今からあの上に行くんだよ。

何かアドバイスとか……ないの？

俺は覚悟を決め一歩踏み出した。

「すいません」といいながら屈強な男達の森を通り抜け
シンファクシのいる台の上にたどり着く。

「こっちこい」

ぐいと袖を引っ張られかなり近くにまで寄せられた。

「全員、聞け。」

こいつがレルバル少佐だ」

頭に手がぽんと置かれた。

シンファクシ身長高い。

一八〇センチあるんじゃないか、この人。

「まだ若い、一六歳だ。

だがこんな大きなことをやりとげた。

子供の力を借りてまで得たこの力だ。

これを絶対に忘れるな。

私達が出来ないわけがない。

こいつのおかげで……」

この後三分ぐらいで演説は終わった。

あまり長くはない。

長い演説は校長先生で十分だ。

全員解散の命が下り、屈強な男達が回れ右をして
自分達の所属の所へと戻ってゆく。

きびきびとしたその動きを眺めながら俺はシンファクシに話しかけた。

「あの装置にそこまでの価値があるのです？」

シンファクシは髪をさらっと揺らして外していたメガネをかけた。
シエラと同じ赤紫の目が細まり

「説明しなかったか？」

笑いを含んだ声が返ってきた。

「私は一度言ったことは二度も言わない主義でな。

——この装置はナクナニア超光を生み出すための
重要な位置部品なんだよ。

今まで連合郡の奴らに圧倒されていた戦況を
これで覆すことが出来るほどの価値がある。

我らの勝利を握る鍵といってもいい」

結局言ってるじゃないですか。
シンファクシは虚空に目をむけ

「分かった？」

と諭す様に言った。

「は、はあ……」

と生返事を返すと

「前にあったときは部下ではなかったから丁寧に接したが
今はもう私の部下だからな、少佐は。

これからまた任務についてもらうときが来るだろう。
そのときはよろしく頼む」

まだ若い顔に苦労の色が浮かんだ。

「今回見たいに無茶苦茶な展開にならないならお受けしますよ」

俺はやれやれと胸についた勲章をいじりながら答えた。

今回の作戦の成功によってシンファクシから与えられたものだ。

「心配するな。

それほど大事なことを高校生に任せる気はない。

それもまだ十六歳の若者には……な」

シンファクシはそういつて何か言いたげな目を向けた。

俺は首をかしげ「何か？」と述べたが

「いや……」

とシンファクシは顔を背け、階段から降りていつてしまった。

何かざらついた感触が残る俺はそのままシンファクシが

第一集会場からその姿を消すまで鉄骨に腰掛けた。

大体五分ほどひんやりした空気を楽しむと

俺は集会所から出て綺麗な青に染まった空を見上げた

どこまでも突き抜けるような快晴。

ごとくと空気を震わせ、上空を哨戒している一機の戦闘機が飛んでいく。

一本の白い筋がその後を追う様にしてついて行き

太陽が昇った空に白い絵の具を塗りとくった。

>i25176—2340<

携帯をポケットから取り出して時間を確認する。

午前七時半。

あと三十分ほどで朝飯の時間になる。

もうこんな時間か。

俺は近くに海があるため多々潮を含んだ甘ったるい空気を胸いっぱい吸い込み

食堂へ行こうと歩き出した。

重いエンジン音が響いたのはそのときだ。

耳を振るわせるその音は確実に近づいていた。

四機のエンジンをそなえ、黒く電波吸収剤で塗られた大型機がその機体をこすり付けるようにして滑走路に着陸した。

まだ完全に止まっていないうちにドアが開き、ジョンとおっさんが出てくる。

二人は談笑していたもののどこか思いつめたような目をしており

手を振っている俺に気がつかずに建物の中に入ってしまった。
何か物寂しさを感じながらその二人を目で追っていたが
そのおかげでジョンの持っていた黒い鞆から一枚の紙が落ち
無風の熱を持ち始めた滑走路にへばりついたのを見過ぎさなかった。
俺は着陸する戦闘機などが来ないのを確認してその紙を拾い上げる。

「？」

『伝説についての考察』

と明朝体で書かれたその紙には誰もが知っているあの絵本の
伝説についての解釈が書かれていた。

「大切なものが消えるとき

三つの死は姿をあらわす。

死は力を使い地上を無に戻す。

死は鬼神となり

恐怖の中で消えていく。

大切なものを失った悲しみと共に」

改めて見てみるとこの死つてのはかなり自分勝手だな。

大切な物が消えそうならその力を使って守れば良いのに。

絵本ではどうだったのか……？

『この伝説は約五千年まえから今日に至るまで世界中に知られてい
る。

この時代は……』

伝説——か。

中途半端な所で終わっている紙の裏をめくり続きを探した。

だが文字一つ書かれていない白い裏面が太陽光を照らし返しただけだった。

俺は紙をそのうちジョンに渡すためにポケットに入れた。

『騎士団の栄光』

何でそんなおとぎばなしをジョンが論文にしてまで

熱心に研究しているのかは知らないがどうせろくな物ではないだろう。

三つの死とか書かれている時点で胡散臭い。

前まで俺は三つの死はシエラとかメイナの最終兵器——と
考えていたんだがどうなんだろうか。

この伝説どおりに行けばあの二人は世界を滅ぼすだろう。

とめることが出来る奴なんて誰一人いるわけがない。

大切な物なんてあいつらにあるのか？

そういえば昔セズクは連合郡が俺を殺しに来るとか言っていたが……。

大切な物ってもしかしたら俺——？

連合郡は俺という存在を消すことによって一度世界を掃除しようとしている……？

そんなバカな。

ジェットエンジンが焼けた空気を吐き出す音を聞きつけて俺は

あわてて思考の渦から抜け出した。

滑走路脇に移動して戦闘機のタイヤが滑走路を舐めるのを見物する。

気温は徐々に上がりはじめ

既にしつとりと汗ばんだ体が涼を求めている。

嫌な予想だ。

物事が全て伝説どおりに進むわけがない。

ばかばかしい。

俺はため息と同時にその考察を吐き出した。

「波音、早く来いよ。
皆まってんだぞ」

振り返ると仁が胸に光る俺と同じ勲章をつけた体を
ボードで扇ぎながら手を振って来た。

「ほいほい」

一滴垂れた汗を掌でぬぐい、俺は仁に続いて食堂へ入った。
自動ドアを通り抜けこれまた広い食堂を見回して顔なじみを探す。
俺達と同じ勲章をつけたセズクがいたので
その隣によいしょと腰掛けた。

「何食べる？」

人数分の氷水を運んできたメイナが聞いた。
俺は机の上を眺めてメニューを探す。

「にー」

机の上でルファアが転がりながら置かれたコップの
水を飲もうとぴょんぴょん跳ねていた。
どこに行ったのか分からなかったがここにいやがったか。

「メニューは？」

ルファアが大きく開けた口の中に水を少しずつ流し込んでやりつつ
セズクに聞いた。

「これ」

紙一重。

頬をかすめてメニューが突き出された。

あ、あぶねえ。

紙で手を切ったことのある人はいるだろう。

だが俺は小さい頃メニューの薄い保護プラスチックで手を切ったことがある。

かなりざっくり言っただけ今でもトラウマと化していて

メニューを扱うときは慎重に扱うようにしているのだ。

それを……このバカ最終兵器シエラは

のほほんとした顔で俺にメニューを突き出した姿勢のまま立っているのだ。

「さ、さんきゅ……」

怒るにも怒れず俺は萎えた戦意を机にメニューを叩きつけることで発散した。

プラスチックの中に紙が挟まれた『朝食めにう』と書かれたメニューに

写真つきで載っている食べ物を物色する。

どれもおいしそうで迷う。

たっぷり三十秒は悩む。

——よし、サンドイッチにしよう。

u
e
s.

飛行機雲（後書き）

どうもありがとうございました。

今回はのんびりとした空気――？
なのかな。

をかもし出してみました。

どうでしたか？

ようやく訪れた平和。

波音はいったい次はどのような流れに巻き込まれるのか。
楽しみにしていてください。

それでは。

できたてほかほかをお届けしました。

ふとしたこと

コーヒーと一緒に運ばれてきたサンドイッチを口に入れる。
よく考えたら俺サンドイッチまた食べてるやん。
昨日もトラックの中で食べたぞ。
しかも狙ったかのようにハムやし。

「にー」

俺の腕にスリスリしてサンドイッチをねだるルフアーに
仕方無しにパンだけ与えながらコーヒーをすすする。
にっがあ……。
テーブルの端の白い容器を開け二つの角砂糖を投下。
スプーンでかき混ぜる。

「新聞いる？」

「いる」

ミルクもたっぷり入れ、混濁した色になったコーヒーをわきに置いて
シエラが俺に渡した帝国郡新聞を広げた。

「あ、僕のりんごが」

小さな悲鳴が横で上がりセズクがショックそうな顔をした。
ルフアーがセズクのりんごをかじりにかじっているらしい。
いらっとしたようにセズクが皿の上でころころ転がるルフアーをつ
まみ上げ
でこぴんを食らわそうと指を曲げた。

そして射撃用意の号令、弾が発射される。

「あうたあー！」

弾はがっちりと捕獲されてしまっていた。

指が伸びた刹那、ルフアーが口をあけセズク指に噛み付いたのだ。

「こいつ……」

涙目になりながらもセズクはルフアーを机の上に戻して

少し離れると食堂のおばちゃんに新しいりんごを頼んでいた。

俺はすっかり苦味の抜けたコーヒーを飲み干すとほとんど読んでいない新聞に目を落とした。

ベルカ語でかかれてるじゃないですか。

もし俺が小さいときからずっとぷりおっさんに教えられてなかったらこの新聞なんてとてもじゃないけど読めないだろう。

それに皆はちゃんと読めて……るんだよな。

まあ別にいいか、言葉なんて曖昧なもんだ。

考えるだけ無駄ですな。

と、肝心の内容は……と。

『爆撃の街。』

死者二千二百人。

重傷者五千人突破か？』

重たい。

上のような大見出しが二ページ目にきていた。

ちなみに一ページ目は装置についてのことだ。

建物の中に運ばれていく例の装置が写真で載っている。

なぜ一番の貢献者である俺の写真がないのが多少なりの不満だっ

たが

別に目立つことはあまり好きじゃないので五分五分でよしとしよう。それよりも二ページ目のこの重たい見出しだ。

俺は記憶の中にある爆撃の光景をひっぱり起こして記事を斜め読みした。

日本帝国、中部州鯨江市の縮小地図が

建物が多々残っているのみとなったのをあらわす写真の隣に鎮座していた。

俺が住んでいたところは真っ赤に染まっている。

九十パーセント以上が消失してしまった唯一の場所らしい。

説明書きによると。

鬼灯のおっさんのビルもきつと無事では済んでいないだろう。

頭に付着してきた死のイメージを拭い去る。

今回の爆撃により何が変わったのかというと簡単に

連合郡内では国民の危険意識の上昇により

減り続けていた軍事費の大幅増加が認められたようだ。

迎撃にでた戦闘機はどうかとかどうのこうのの一部から批判は出ているものの

政府の言うことに絶対的な信用を置くようになって国民は疑うことすらせずに政府の言っていることを鵜呑みにするだろう。

金のためだけに自国の領土に爆撃をするさまは

愚かの一言に尽きるというかもうコントといってもいいのではないだろうか。

踊らされる側に踊らされる側が見事に踊らされている。

見事なまでの連携プレーだ。

新聞を折りたたみコーヒーのお変わりを受け取りに行こうと立ったときだった。

ふと今、ある約束を思い出した。

そうだ、ア ril に全てを話さなければならぬ。

うぎゃー嫌だ。

だって絶対俺なじられる。

ちぎっては投げ、ちぎっては投げされる。

四肢に五トントラックをぶら下げられたような

ずんとした重みを感じつつ

空になったコーヒーカーップの底をぼんやりと見つめる。

俺は腕を伸ばしてりんごをむさぼるルフアーをむんずと驚掴みすると
足早に食堂をあとにした。

何人かの兵とすれ違いながら出来るだけ

人気がない休憩所のベンチを探し出し腰掛ける。

電話帳を開き、ア ril を選択する。

そのまま通話ボタンを押して朝日を返す液晶を見つめる。

三回ほどのベルが鳴ると

『呼び出し中』から『通話中』に液晶表示が変わった。

俺も男だ。

よし、こい。

心を決める。

『はい？』

「あ、もしもし俺だけど」

『名前出てるんで分かりますよ？』

いちいち言わなくても大丈夫です。

それにオレオレ詐欺なんていまどきもうやりませんよ？』

「もしもし、わしだけど」

『わしわし詐欺もう無理かもしれませんね。』

それで約束を果たしに電話してきてくれたんですよね？』

いたって普通の会話にしか見えないだろうがこれ実際は全然違う。
声の凄みとか本当にヤバイ。

うひゃあああ……怖い、怖いよ。

母ちゃん助けて！と叫びたくなるほど。

「あ、あのー……」

恐怖に打ち勝つんだ。

それしか方法はない。

がんばるんだ俺。

ふぁいと、自分えいえいおー！

『約束でしたよね、

全てを話すって。

ずっと待ってたんですよ。

あの倉庫で約束してからずーっと。

それで一体どんなことを私に教えてくれるんですか？

期待してますよ』

もうくじけそう。

話すものを屈服させるようなすっごい重力だ。

光すら吸い込むのではないかと思わせるほどの――。

まるでブラックホール。

アリアルブラックホールだ。

「話すと長いんだ」

ため息交じりに言ってみた。

あきらめてくれないか、これで。

『どうぞ』

「……………」

もくろみはたった三文字で打ち砕かれた。

電話でよかった。

もし面と向かってだったら俺は耐え切れない。

逆に聞きたい、耐えられる奴いる？

アイルブラックホールの前ではすべてが吸い込まれる以外の
選択肢というものを残していない。

つまりあり地獄。

たえ悪いけど。

「じつは……」

もうずっと待たせている。

話すしかないのだ。

俺は話した。

シエラたちのこと。

ベルカ、超兵器。

そしてバイトのこと。

『それであそこに……』

話し終わるまでには大体十分ほどかった。

途中ちよくちよく冗談を交えながら話していた為
あまり疲れは感じなかったが喉が痛い。

「……警察に通報するならしてくれてもいい」

通報するなら俺はあきらめて牢に入ろうと思う。

『いや、しませんけど。』

何で自分から彼氏を失うようなことをしなければならいんですか。

それにしても——たまに新聞とかに載るレルバルって人波音君だったんですね』

どこか面白そうに話している。

俺は話し疲れたため相槌のみしかうてない。

「……うん」

『——なんか嬉しいかもしれませんね』

えっ？

いや常々少しおかしいところがあるとは思っていたが……。

『私だけしか知らないことを波音君が教えてくれた。
秘密を共有するのって楽しいと思いませんか？』

「ま、まあ……」

一理あるっちゃあるか。

『それにやっと話してくれました。』

ここでも嘘をつかれるんじゃないかと心配でしたが……。そんなことなくてよかったです。

正直に話してくれてありがとうございます』

何にもいえなかった。

ここまであっさり受け入れてくれるとは。

俺は予想もしていなかった。

少なくとも少しぐらいは難航すると思っていた。

見事に良い意味で期待を裏切ってくれた。

『それで、いつ帰ってくるんですか？

あと一週間で文化祭だそうですよ？』

……学校か。

たまには行くでしょう。

『まあ校舎は多少なり壊れてしまったみたいですけど。青空教室と同じ類で青空文化祭をやるみたいです』

こちよこちよと鼻をくすぐった学校生活の一部だった。

文化祭か、中学校とは比べ物にならないぐらいに

大きい催しがたっくさんあるんだろぅなあ。

「そっか、

わかった。

今週中にでも帰る事にするさ。

てかア ril はもういるのか？

鯨江市に」

「ええもう帰ってますよ。

帝国郡の下手な爆撃のおかげで

家も綺麗さっぱり無事です」

「そっか」

連合郡幹部のお家に連合郡が爆撃をするわけにはいかないもんな。

「詩乃とかは無事なのか？」

『――みんな無事ですよ。』

私の家のシェルターでかくまっていたので』

よかった。

クラスメイトは皆生きている。

遼や冬蟬、彗人兄さんも生きている。

マダムも生きてるに違いない。

というかあの人が死ぬわけがない。

知らず知らずのうちに俺はルフアーを

ぎゅっと握り締めていた。

「に……に？」

嬉しいはずなのになんだろうか。

胸の端に巣くっていた不安はじりじりとその領土を広げつつあった。

t i n u e s .

T h i s s t o r y c o n

ふとしたこと（後書き）

ありがとうございました。

ここまで続いてきましたがいやはや・・・。
大変でした。

それ以上にこれを読んでくださる方。

ポイントを入れてくれたりお気に入りに入れてくれたりしてくださる方。

あなたが来てくれるからがんばれます。

絶対に感動の作品にしあげてやるぜ！

のでお付き合いくださると嬉しいです。
よしっ。

ケーキⅡ砂糖の塊

『それで——どうしたんですか？
急に黙って……』

「ん？

いや……大丈夫。

続けてくれ」

そう答えた俺の声は見事に上ずっていた。
完璧に動揺が伝わったに違いない。

『……？』

不思議に思ったのかア ril までもが黙ってしまい
気まずい沈黙が満たされてきた。

なんでこう俺は下手なんだ。

何か話題は……。

この気まずい雰囲気を消し飛ばせる話題——。
今感じている不安の解消法でも聞いてみるか。

「……あのさ」

気まずい沈黙にそっとメスを入れた。

『？』

「嫌な予感がさ」

『はい』

切れ切れでだが俺は何かを確かめるように
ゆっくりと確実にア ril に話しかけていた。

「嫌な予感……ってか胸騒ぎがおさまらなかったらさ。
どうしてる？」

どうしてる？ って聞く俺もどうかしてる。

というか学校の話してたのにいきなりこんな話を
突きつけられたア ril は混乱するんじゃないだろうか。

『んー、そうですね。』

一番効果が高いのは……甘いものでも食べることですかね』

ア ril はしばらく黙り込んだあとそう教えてくれた。

率直な感想としては女子だと再認識した。

あいにく俺は甘いものあんまり好きじゃない。

ただ一つアイスは別だぞ、アイスは。

あれはすばらしい。

「やってみる。

他には？」

『寝たり……？』

とかですかね』

ね、寝るのか……。

『波音君なら寝るだけで治ってしまいそうですし……。

私は寝ても治らないと思いますけど』

ああ、つまり俺は常々寝ているようなお間抜けだと。
そういいたいんだろう。

悪いか、俺は寝ることが大好きだ。

「――そうか」

ちよつとがっかりした感じの声で返してみた。

『つと、もうこんな時間。』

私学校に行くので切りますね』

時計を見ると八時。

確かに学校の時間だな。

「おう。

ありがとうな」

お礼をしっかり言って

『どういたしまして♪

では』

電話の切断ボタンを押した。

甘いもの、寝る（俺限定かもしれない）……か。

よし、ちよつとやってみるか。

俺は小走りで食堂に舞い戻った。

通り過ぎるガチムチ兄さんたちに変な目で見られたけど
あまり気にしないようにしよう。

はじめのうきうき気分がごっそり削げ落ちたテンションで食堂のドアを開けた。

「あっ！

どこ行ってた？」

肩に乗せたルフアーを机において

俺は人数がすっかり減った食堂の中央テーブルに座った。それを見つけたシエラがよってくる。

「甘いものが食べたくて。

それもたくさん。

持ってきてくれ」

びしっ指を一本立てて注文した。

シエラは目をまんまるにして

「波音も甘いもの食べるんだ……」

とつぶやきながらもショートケーキを持ってきてくれた。

「おかわりは自由じゃけんね」

愛想のいいおばちゃんが俺に手を振る。

あざっす。

あまり食べたことがないからどんな味かすら忘れてた。とりあえずいただきます。

ショートケーキにフォークをぶすり。

「にー」

ルファアの口に苺を入れてやった。
おそるおそる口に入れる。

「……………」

シエラがじっとこっちを見ていた。
気になる。

「なんだよ」

「いや……」

変なやつだな。

ショートケーキの感想だがただただ甘い。
甘すぎる。

「甘ッ！」

なんでこんなに甘いんだよ！」

シエラを少しにらみつけた。

「えっ……だって。」

——ショートケーキだし」

僕なにか悪いことした？

とでも尋ねたげな目をして俺を困惑の色で認識している。
ごもつともな意見である。

「もういっこ食べる」

「えっ、わ、わかった……」

また苺をルフアーに与え平らげた皿をどかせる。

使いまわしのフォークでショートケーキを削り食べ削り食べる。

なんだかんだで文句を垂れつつ結局五個ぐらい平らげた。

その勢いといったら。

途中でやってきたメイナが引くぐらいのスピードでショートケーキと

口の間を往復したのだ。

食堂でケーキと奮闘すること約二十分。

俺は無事に勝利を収めて個室への道を歩いていた。

ちなみにこの個室、ミッション成功のご褒美みたいなもので

幹部クラスの部屋を一つもらったのだ。

うっぷい。

胃の中に大量の砂糖をつめこんだので

満足してお腹をさすりつつ俺は睡眠のために個室に向かっていった。

えーと、ここだ。

『レルバル少佐』と書かれた八二号室。

渡されたカードでロックを外し開いたドアをくぐった。

何のことはない。

ベットが一つ、テレビ、パソコン、冷蔵庫、タンス。

それと小さなシャワー室があるだけだった。

部屋の割合に不釣り合いな小ささの窓の下には

青い海がずーっと広がっていた。

窓を開けると潮の香りがつんと昇ってきた。

タンスをあけパジャマを引っ張り出す。

布団に入る前にパジャマに着替えるのはもはやマナーだろう。

結構軟らかい布団に入り、肺から空気を抜いた。

海の音が耳に心地よい。

これはぐっすり眠れ……うっ。

気がついてしまった。

体がべたべたするじゃないかよ……。

やっと居心地の良い姿勢が見つかったというのに。

俺はベットから重々しく起き上がった。

脱衣所で下着を全てを脱ぎ捨て

風呂場のシャワーのパイプを捻る。

ぼーっとお湯が流れるのを眺めつつ

温度を確かめるという意味で足先を浸してみた。

ちょうどいい温度だったので椅子に腰掛けつつ湯を浴びる。

湯気でうつすら白がかかった視界を自分の体に向けた。

別に何のことはない。

いつもどおりの万全な自分の体が水を滴らしているだけだった。

そういえば白人は腋臭が多いって聞いたんだが本当なんだろうか。

なぜかセズクが頭に浮かび苦笑して頭をお湯の中に入れた。

他でもお湯を使っていたのか急にお湯の温度が上がって

あわててシャワーの先を他のところに追いやった。

「あつつ……」

少し水をプラスしてシャワーの雨にダイブした。

ほかほかと良い湯だ。

何も考えずにこうやってぼけっとしているのが

個人的に一番好きだったりする。

ボディソープの柔らかな臭いの石鹸を取り

体中にぬりたくってタオルでごしごしこする。

泡が隅々までいきわたるとまた一息ついた。

緑色の容器からシャンプーを手に押し出し

頭に塗ってあわ立てる。

泡が入らないように目を閉じた。

妙な胸騒ぎはおさまってきてはいた。

ただの一瞬の気の紛れだったんだろう。

それが一番良いポジションにある理由だった。

俺の家は無事なんだろうか。

ふと家のぬくもりが思い出された。

新聞で見た俺の家のある場所は唯一赤く塗られていたところ。

一番被害の大きいところだ。

パソコンとかもあったんだけどなあ。

それに家族の、姉ちゃんとかの写真とかも。

あまり覚えてないけどそこに俺の家族は確かにいたんだよなあ。

仁には考古学者の親父さんがいるし。

連合郡のアホ。

変な気持ちを泡と一緒に水に流した。

シャワー室から出てバスタオルで体、頭を拭く。

椅子にかけてあったパジャマをはおり、ベットに飛び込んだ。

疲れていた。

やっぱり。

あつという間に眠気が襲ってきた。

風邪を引いたらかなわないのでむそつと起き上がり

開いている窓を閉めるついでにカーテンを閉め、クーラーを入れる。

よし寝るぞ。

「ふう……………」

天井を眺めるも間もなく、ぐっすりと眠りの渦に巻き込まれた。

んで、目がさめたら午後六時だった。

九時ぐらいに寝たから約九時間。

その間ずっと、布団の中でごろんごろんしていたことになる。

妙な胸騒ぎは落ち着きを見せ、カーテンの隙間からは

オレンジ色の夕日が壁に細長く伸びていた。

ぼさぼさになった髪をくしでとかして整える。

なんとなく気分がのったので俺はパジャマから

軍服に着替えて外に、港に行ってみた。

たくさんのかもめが空を舞い、小さな白い漁船が並んでいる。

その人たちが帝国郡の紋章の入った服を着ていなかったら

どこか寂れた漁村と間違えただろう。

水平線より少し上にいる太陽に照らされ

キラキラと水の反射を返す海は澄んだ色をして

俺のとどめない不安を一度、また一度と波が押し寄せるたび

薄めていつてくれているようだった。

ヒビの入ったコンクリートに

大小たくさん貝が付着していて、かにがその上を歩いている。

ガスタービンの煙を吐きながらミサイル巡洋艦が遠くに

黒い影となって滑っていた。

その後ろに戦艦などが続いている。

低い汽笛が夕日に響きかもめの群れがぱっと散った。

かもめの姿を目で追い鋼鉄の城達に目線を落とす。

遠くに見える人差し指ほどの大きさでも

奇妙な形をした艦に視線が止まるのは必然だった。

『ヴォルニーエル』

今、その超兵器は水上に浮かびその翼を休めていた。

所々で火花が散っている。

おそらく修理中か何かなのだろう。

「ベルカ……か」

口に出したはいいものの

その言葉は行き場所を無くしてやがて地面に落ちた。
俺の靴の上をかにが一匹歩いていた。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

ケーキⅡ砂糖の塊（後書き）

ありがとうございました。

お気に入りに入れてくれた、方。

もっと気に入ってくれるようにがんばっていききたいと思います。

それでは。

本当にありがとうございました。

苦しい将来、迫る闇

「おい、レルバル」

はつきりとした声が後ろから飛んできた。

誰だろうか。

そう思いながら振り返ると

額に脂汗を浮かび上がらせた兵士が俺に手を振っていた。

何か用だろうか。

俺はかがんで地面からてごろな石を一つつまみあげた。

つるつるの感触を少し楽しむとそれを思いっきり海に放り投げる。

水面に波紋が広がって小さな水柱が立った。

「……………」

海ともう少しでキスしそうなぐらいに傾いた太陽を眺め

赤い日が戦艦たちを黒く浮かび上がらせていた。

それを見届けると俺は兵士の近くに行った。

「どうしたんで？」

結構俺を探したのであろう兵士は汗を拭かずに

さっさと用を終わらせたいとハキハキ短く完結に俺に用を伝えた。

「シンファクシ元帥がお呼びだ。

至急」

俺の出番ですか。

一体何だろうか。

「了解……」

小さく呟きまた目を細めて海を見た。

次第に風が強くなってきたており帽子を抑えようとしたまさにそのとき急に吹いた海風が帽子を飛ばし、砂の上に落とした。

「風が強いな」

兵士がそう話しかけてきたのに適当に相槌をうつて

ぼんやりと何かを思いながらそれを拾い上げ、砂を払う。

帽子のつばの上に付いた帝国郡の紋章が俺を眺めていた。

綺麗な金色の光が海をただ美しく浮かび上がらせていた。

前髪が風になびく。

軍艦特有のとげとげしいシウルエツト。

特異な雰囲気をもとう超兵器。

上空を一機の飛行機が飛んでいた。

緑と赤のランプを光らせながら高度を下げていく。

「おい、急げよ」

兵士にそう言われ後ろから迫る夕闇に追いつかれないうちに

俺はシンファクシのところに行くことにした。

ここで少し愚痴ろうと思う。

何でこんなに遠いわけ？

シンファクシの部屋まで果てしなく遠い。

大げさに言うのと十四万八千光年ぐらいあるんじゃないかと思うぐらい。

俺は放射能除去装置——コスモクリーナーでも

取りに某二重惑星にまで歩かされているんじゃないか？

そう思うぐらいに遠いのだ。

一步一步道を確かめながら歩いてようやくたどり着いた。

時間にして約三十分、遠すぎて泣けてくる。

そういえば俺のほかにはシエラとかは呼ばれているのだろうか。

気になるところだ。

まあ中にいるだろうきつと。

服の袖は折ってないな、汚れは付いていないな。

念のため隅々まで確かめる。

よし、完璧な服装だ。

しわもない。

ゆっくりとドアをノックした。

「レルバル少佐、参りました」

「うむ入れ」

くぐもったシンファクシの声を確認してノブを回して中に入った。

「参りました」

敬礼する。

今、俺はこの人の部下だから敬意は払わなければならない。

シンファクシは自分の机の上においてある金魚を眺めたまま

「うむ。

待っていたぞ」

かすれるような声で言った。
めずらしい。

いつもはハキハキとしているというのに。
なぜか今のシンファクシには何か弱ったオーラがあるように思える。
嫌な予感だ。

黙っていたらいつまでたっても用件を良いそうにないので
俺から話を切り出した。

「それで、急な用とは？」

琴線には触れないようにたずねる。
明らかにシンファクシは動揺した。
さっそく触れてしまった。

だが流石は元帥でシンファクシは動揺を抑えると

「……こなして欲しい任務がある」

重苦しくそう話し出した。
はあ。

まあそれ以外に俺を呼ぶ意味はないわな。

「――全然OKです。
それで、一体何です？」

また黙りこくったシンファクシに切り込む形でたずね返した。
なかなか用件を言わないシンファクシに
少しだがいらだちを感じていたこともある。
そんなにためらうことなのか？

メガネの奥の赤紫の目が暗く沈んでいた。

「レルバル。」

「お前は我が帝国郡に忠誠を誓うか？」

また重たい雰囲気止めを刺すようなことを言う。

「はい」

少し間を空けて返事を返した。

忠誠を誓うか？って言われたらはいとしか言えないだろ。

元帥の前でNOなんて言ってみろ。

八つ裂きにされて超兵器の燃料にされちまう。

「なら私の頼みを聞いてくれるはずだ」

回りくどい。

だから俺は何をするんだ？

シンファクシは俺に何をして欲しいんだ？

はやいこと言ってくれないか。

イライラが声には出ないようにしてじっと続きを待つ。

シンファクシは金魚の水槽をデコピンして
指を組んだ。

「ある人物を……殺して欲しい」

……………。

「——は？」

ぞつと背中に冷たいものが伝った。
何を言ってるんだ、この人は。

「失礼ですが俺は……」

これは断らなきゃいけないだろ。

ココまで無血を貫き通してきたんだから。

間接的になら人を殺したかもしれないけど……。

でも直接手にかけたことはない。

あ、ハイライトのヘリコプターのプロペラを撃ったあれはどうなる
んだろう。

ちゃんとパイロット脱出したんだろうか。

「分かっている。

殺しはやらないんだろ？」

組んだ指の向こうでシンファクシの口が歪んでいた。
笑ってやがる。

「ならなぜ俺に……」

分かっているならなぜ俺に頼むんだ。

「任せれる人間がお前しかいない。

我々帝国郡が大々的に動くと

連合郡のやつらを刺激する結果になるからな」

もっともらしい理論だ。

これ以上戦闘が激化したらたまらないからな。

「特殊部隊とかで……」

隠密が仕事の奴に頼めばいいじゃないか。
別に俺を使わなくとも。

「それが出来たら苦労はしない。

詳しいことはあまり言えないが動かせない状況にあるのだ。

つい先日の話になる。

我が軍はミサイルによる連合郡軍事衛星の破壊を試みたのだ。
だが失敗した。

このことが余計に連合郡を刺激する結果となり
今現在二十四時間ずっと監視を受け続けている」

そうやって分かるのはやっぱりスパイがいるからなんだろうな。

連合郡に帝国郡が監視されるのは当然かもしれない。

俺達が連合郡からあの装置をうばったとなるとなおさら。

メガデス級をはるかに上回るヴォルニール級まで出てきたのだ
から。

連合郡の帝国郡に対する警戒は今までにないほど厳しいものとなっ
ている……と。

当然隠密部隊なんて送り込もうとするそぶりを見せたら
よりいっそうターゲットの周りの監視は強力なものになる。

「当然、シエラ、メイナもマークされている。

あの二人が行く所勝利しかないからな。

そこで、貴官の出番というわけだ」

やっぱりマークされているよな。

「……」

「ひどい任務なのは分かっている。

だが、こいつをなんとかしない限り戦争は終わらない。

このままだと、シエラとメイナがいうと

帝国郡は連合郡に時間も無く潰される。

ここからあの艦隊が見えるか？

帝国郡にはもう海上戦力はあの艦隊しか残っていない。

陸軍、空軍も消費が激しく戦線は簡単に拡張できないのも事実だ。

つまり私達は今完璧なまでに追い詰められている。

ここに爆撃機が来るのも時間の問題だ。

今までは迎撃することが出来ていたが

最近ではそれもままならなくなってきた」

そんなに追い詰められていたのか。

棒切れと戦車（だったか？）ぐらいにまで差が開いている

連合郡と帝国郡の技術の差はとても埋めれるものではない。

圧倒的な技術力と財をもつ連合郡は弱体化してゆく帝国郡に

もうじき止めをさせるところまでできているのだろう。

だから何としてもヴォルニーエルという超兵器を取り出す必要があった。

少しでも多くの希望を持っていたいから。

勝利をつかめても連合郡の一部を削っただけという虚しさは

帝国郡の士気をも低下させていたに違いない。

泥沼というよりは一方的な虐殺。

それを止め、巻き返すことが出来る鍵がこいつなのだ。

たった二十の国の集まりの連合郡が

百六十もの国の集まりの帝国郡に勝てるわけがないという先入観も

今ではもうこなごなに打ち砕かれてしまった。

そうシンファクシは語った。

「つまり、戦争を起こしている張本人を殺せと？」

「いや、そこまでは行かないのだが……。

我々が連合郡のとある奴の言うことを聞かせるため……とでも言った方が良さだろうか？」

ふうむとシンファクシは唸った。

「でも俺は人殺しは……。
失礼します」

そういつて後ろに三步下がリドアノブに手をかけた。

「お前の両親を殺した奴に関係があると言ったら？」

俺は部屋から出かけた足を止めた。
振り向く。

「どういふことですか？」

シンファクシは指を組むのをやめて背もたれに
ぎっと深くもたれかかった。

「お前の両親が鬼灯と仲良しだったのは知っているな？」
鬼灯って、おっさんだよな？

「はい」

「今からお前が狙うことになる標的の親は

鬼灯にとっての数少ない心許せる親友……。
そう、永久家の人間を」

シンファクシがコーヒーを一口飲んだ。

「まとめて殺すように指示を出したのだ。
次はお前の家族だと脅迫を突きつけた上だな。
そうやって恐怖で人を従わせる」

「……………」

つまり俺の家族は……おっさんを脅すために
標的の親によって殺されたと……？
ただの脅しのために。

俺の家族は……。

俺の顔色が変わったのを悟ったか
シンファクシが一気においつめてきた。

「鬼灯は妻と親友を一度に失ったことから分かるな？
決して、鬼灯は屈しなかった。

あくまでもベルカ守護四族の一員として裏切らなかった。

もし鬼灯が連合郡に負けていたら……。

財閥の財力、権力を使ってこのアフリカの地には核の炎が揺れて
いただろう」

「……………」

「その張本人の娘が標的だ。
私の父、母をも殺したあいつの娘を殺し
あいつに同じ苦しみを味わわせるのだ。」

そして帝国郡の操り人形となってもらう。
そのために必要な犠牲となってもらうのだ」

シンファクシの目に怒りの色が灯っていた。

俺の家族を殺し、おっさんの家族。

そしてシンファクシの両親までもを……。

許さない。

絶対に許さない。

相手側のミスじゃない。

連合郡の故意な殺人。

「で、誰なんだ？

俺が殺す標的は」

俺の声は 自分でも驚くほど冷静だった。

冷たい怒りがじりじりと心臓を焦がしていた。

「やってくれるか」

シンファクシは引き出しから一枚の写真を取り出し、俺に渡した。
ぺらっと表を向けた瞬間俺の表情は凍った。

「——っ！」

……なんで？

そんな………嘘だろ？

アリル——！

「そいつを殺すんだ。

そうしないと私、そして天国の両親も浮かばれない」

「し、しかし……」

「どうした？」

「いえ……失礼します」

「――頼んだぞ」

俺は廊下に出ると大きなため息をついた。

アリの父があんな……。

嘘と思っていた現実だった。

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t
i

n
u
e
s.

苦しい将来、迫る闇（後書き）

ありがとうございました。

殺しを頼まれた波音。

自分の掟にしたがうのか。

それとも……屈するのか。

自分の愛している人を。

——殺せるのか？

では、ここまで読んでいただきありがとうございました。

失うもの、これからのこと

自分の個室に戻っても頭がふらふらしていた。
現実を受け入れるのを拒んでいるのだと。

そうおぼろげながら理解はしていた。

ベッドにもたれ、冷や汗でべとついた服を脱ぐ。

気持ち悪いからであって、露出狂じゃあないぞ。

シャツとパンツだけの姿で窓のカーテンを開けて

窓から外を気晴らしになるかと見渡した。

もう一度いうが露出狂じゃないからな。

偏光仕様であっちからこっちは見えないしな。

青くカラーリングされた三機の戦闘機と

その周りを男達が笑いながら整備をしている。

爆撃されたら一発で吹き飛んで消える命。

俺に任されたのはあの命を守ることにもなるのだろう。

人を殺すなんて。

物を盗んできた俺が人の命を盗む？

怪盗——てかコソ泥とかいって俺が殺人者になる？

こんなことを思うのは俺らしくないと思うが——。

それぐらいに頭が混乱していた。

「マイハニー！」

セズクのお兄さんが来ましたよー！」

がらにもないことを考えていたせいかな。

あのアホの接近にも気がつかなかった。

歓喜の色に染まった顔で拳を振りバカ力でぶっとんだドア。

それをぎりぎりまで右にかわしベクトルのにもすごい力を持つ

ドアの鋼鉄がガラスを突き破って外へと落ちていった。

俺を殺しかねない威力にぞっとするも体の反射神経に感謝しつつ反撃に移ろうとしたが、先ほどの考え事で少し鈍った隙を突かれた。がっちりと俺の両肩を奴は掴んでいた。

「つつかまえた♪」

にたりと歪んだ口元に黒い恐怖を覚えながら抵抗する。

セズクの体重を思いっきり受けた体が軋み

足が耐えれなくなって後ろへと体が傾斜する。

いくら久しぶりのハッスルタイムだからってはやぎすぎだハゲ。

俺の両肩を掴んでいる手を両腕で掴み

後ろに倒れる勢いを利用して思いっきり壁へとアホをたたきつけた。壁にかかっていた花の絵がずり落ちて、気絶しているセズクの頭に当たる。

少しぶつけた腰を押さえつつ

「ったく……」

のびたセズクの頭の上を飛ぶひよこたちを見ないようにして新しい服を

タンスの奥からひっぱりだして着用した。

どうでもいいけどひよこって飛べないよな。

大人になっても飛べないよな。

俺はまじまじとひよこを見つめた。

何で飛んでるわけ、謎極まりない。

ひよこじゃない何かなのか？

深まる謎は置いておいて

セズクが目を覚まさないようにさっさと逃げることにする。

起こさないようにそっと……。

静かに……物音一つたてないように。

「……………甘いよ」

俺がドアから出る寸前真後ろからその声が聞えた。

両肩にセズクの手が触れるのを感じた瞬間

ぐるんと天地が一回転した。

天井が回って、地面が高い。

頭を打つ、と理解して受身を取ったのにもかかわらず

ぽすっとベットのの上に俺の体は落ちていた。

「くっ………！」

すかさず立ち上がろうとしたが眉と眉の間。

まあつまり眉間にセズクの指がぐぐつと頭を押しており

どんだけ力を入れても起きれない。

「じゃあ、いただきますーす」

わさわさとセズクが両手を動かした。

「ちょっ！

おい！！」

下へぐぐつと頭を埋め込んでセズクからの距離を開けると同時に
両手を駆使してセズクの体を押す。

「くのっ………」

ちつくしよお。

踏んだり蹴ったりだ。

てか考え事してる場合じゃない。
このまんまだと俺のはじめてが危ない。

「離れ………ろっ！」

一生懸命にセズクの体を引き離そうとがんばる。
セズクはそんな俺の顔を見るとにっと笑い

「……………」

すっと俺から離れた。

「……………？」

一瞬ほうけたもののあわてて体を起こす。
セズクは少し歩いて俺から離れたところにある椅子に座り

「——何かあったのかい、波音？」

全てお見通しだと言わんばかりの顔で
セズクは両手を絡ませて唐突に俺に尋ねてきた。

「い、いや………別に………」

何で分かったんだ？
それにアイルを殺すなんて内容を
セズクに………いや誰にも言えるわけがない。

「———そう？」

でも嘘を言っても僕にはすぐに分かるんだよ？」

びしいっと指を突き出してそういった。
否定はしない。

何度もお前は俺の心を読んでるからな。

「本当に何にもないよ。

なんで何かあると思った？」

平常を装って話しかけた。

これでセズクさんの読心術を学ぶことが出来るかもしれない。

「……………愛……………かな」

バカだった。

まじめな答えが返ってくると思った俺が大バカものだった。

あ、そうですか。

愛ですか。

「愛……………」

「そう、愛だよ」

俺の頬にびしっびしっ少しずつ伸びてきた指が
今の愛の気合でぶにゅっと突き刺さった。

「……………で、何だってえのさ？」

一体お前何しに来たんだよ」

その指を払って、俺はセズクを睨んだ。
セズクは「ほほえましいなあ」と呟いて

「そうふてくされることないだろう？」

まあ十分にその顔も可愛いんだけどね♪

クスクス……」

おい、笑うなホモ野朗。

俺のふてくされた顔はたちまち呆れ顔に変わった。

でもこいつなら……。

もしかしてセズクなら俺の今の気持ち分かってくれるかもしれない。

——駄目でもともと、聞いてみるか。

「……たとえなんだけどさ」

セズク頬杖を突きながら俺をきょとんと見返してきた。

「どうしたんだい？☆」

「例えだよ。」

もし、セズクがさ。

愛する人を殺せって言われたらさ。

どうする？」

俺は話していた。

セズクは目を細め、少し驚いた顔をしていた。

俺が急にそんな話をするとは思ってもいなかったのだろう。
急に話す気力が萎えて

「いや、なんでもない。

忘れてくれていいよ」

あわてて話をきろうとした。
だが被せるようにセズクは

「愛する人……ね。

僕には昔、愛する人がいてね……」

そうポツリと口に出した。

確かに聞いたことがある。

ハイライトで俺と二人っきりの射撃訓練中に
セズクは教えてくれた。

「その女の子——言っ
てなかったかな？

シャロン……っ
ていうんだ。

シャロン・C
V・ヴィルクリズ」

俺は嫌いじゃない名前の響きだ。

その名前を出したときうつすらセズクの目に
涙の曇りが見えた気がした。

「僕はその娘を……守
ることができなかったんだ。
愛する人を目の前で失
ったんだよ」

……………。

セズクは瞳を閉じてふうと息を吐いた。
おでこに手を当て目を開けたセズクは

「その娘はね、波音。

どうでもいいけどそ
っくりなんだ」

にっこりと笑っていた。

「は？」

聞き直そうと首をかしげた。

「波音にそっくりなんだよ」

俺？

確かに髪は長いと思うけど……。それでも女子の髪よりは短いぞ。完璧に俺男の髪型してるんだぞ？

「そのきょんとした顔なんて本当にそっくりだ。

僕はもしかしたら……。

シャロンに出来なかったことを……。

波音、君にやっているのかもしれない」

セズクは髪をかきあげた。

「ベットに押し倒すみたいなことをか？」

今しがた押し倒されたベットのしわを伸ばしながら反駁してみる。

「や……まあ。

否定は……しないかな。

そ、その話はいいんだよ」

少し赤くなったセズク。

「どの話？」

いじわるっぽく攻めてみる。

「別に僕はシャロンをだね。

あーんなこととかそういうことを
やってみたいな♪なんて思っていたわけじゃないんだ」

「うん」

「ほ、本当だよ？

別にベットがどうのこうの——」

「分かったから、次行け、次」

顔が真っ赤になっている珍しいセズクをはたいた。
脱線した話を軌道に戻す。

「……で、愛する人を殺す……だっけ？」

水差しの水を丸ごと飲み干し
少しこぼれた水を袖で拭いた。
うん。

「僕なら絶対に拒否するね」

すまし顔だった。

何の曇りもない。

そうだな。

そうだな！！

「……だよな。」

でもさ。

もしその一人を助けたら何百万人と死ぬんだったら？」

さっき言ったのと同じすまし顔で

「そんなの簡単だ。」

非常に悔しいことなんだけどね。

——愛する人を失うしかないんだ」

セズクはあっけらかんと言いつつ放った。

足元がぐらりと崩れたような感覚がして頭を右手で押さえた。

「なんで……？」

残った左手でベットの布をぐしゃぐしゃに掴んだ。

何か知らんがあげて落とされた気がする。

「……簡単だよ。」

個より多を人間は優先するものだからさ。

戦争も例外じゃないんだ。

人間の営みは常に何かを失うことで成り立っているんだよ。

今日はそれが自分の番になっただけのこと。

逆らえない濁流に飲み込まれる番だったってだけのこと」

「……………」

やるせない気持ちだった。

「あ、でも」

俺は完全に沈黙した。

それをみていたたまれなくなったのか

「――失いたくない。

どうしても守りたいなら……守れるよ。

変わりに何かを失うことになるとは思うけど。

じゃあ僕はもう出て行くことにするよ♪」

セズクはそう言ってドアから手を振りながら出て行った。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

失うもの、これからのこと（後書き）

ありがとうございました。

お気に入りに入れてくれた方、ありがとうございます。

波音にそれそうおうの意味の分からないアドバイスをしたセズク。

彼が部屋を去るときに残した意味の不明な言葉。

波音はその言葉をどう受け止め

どう行動していくのか。

まだまだ精進せんと。

これからもわくわくさせるような小説にしたいです。

どうか応援よろしくお願いします。

では、ここまで読んでいただき

本当にありがとうございました。

（これコピペみたいになってますがちゃんと打ってますよ！）

いやそういう意味じゃない。

その次の日、俺達は日本に帰った。

シエラたちと一緒にシンファクシたちに手を振る。

帝国郡の全員が見送りに来てくれていた。

「ありがとうー！」

とか

「また来いよ！」

と口々に言っ来てくれる。

皆日々の連合郡の戦いで疲れていて

俺達を見送ってくれる時間もないはずなのに……。

日本から出たときはシエラにつられて

帰るときは二人、いやセズクも入れて……うん。

五人か。

仁も入るからな。

それだけの人数で大空をものすごいスピードで飛んだ。

大体二十分ほどボーっと下を通り過ぎる雲を眺めていた。

大きい雲、小さい雲。

その下で時たま町の光が光っていた。

「ついたよ」

シエラがそう思ったと思ったら地面に靴の底がついて
よろけてこけそうになった。

周りを見渡す。

俺達の街はボロボロで大小さまざまな瓦礫が散らばっていた。
あれだけうっとおしかった蟬もいない。

ちらほらと人はいるものの疲れきった表情を頬に貼り付け
やけに大きく見える目が俺達をにらみつけていた。

あらかたの人は避難しているようだからおそらくここにいる人達は
自分の意思で残った人なのだろう。

「にしてもなあ……」

俺は『I LOVE ○○』と書かれたシャツの裾をつまんだ。
ダサい。

あ、どうでも良いがもう一般人の服に着替えてあるぞ。
いつまでも帝国郡の軍服なんて着てたら連合郡兵士に連れて行かれ
てしまう。

しばらく街の酷さに慣れないままぼつと歩いた。
すっかり変わってしまった街でようやく
見慣れた建物が残っているのが分かった。

その建物は俺の唯一無二の親友、仁のお家だからだ。

「親父……」

仁が玄関先を指差した。

その先をたどると仁の親父さんが玄関の前でへたれこみで啞然と空
を眺めていた。

「もしかして俺死んだって思われてる？」

仁が半分笑ったよう分からん複雑な表情で俺に聞いた。

俺はさあと肩をすくめた。

知らんがな。

「まあ、いつてやれよ。

親父いいいいいいー！みたいな感じでさ」

仁は俺に「そうだな」と軽く嬉しそうに笑顔をこぼして親父の所へと駆けて行つた。

「おおっ、仁っ！！！」

涙を流して息子を抱きしめる父の姿がぐっと胸に来た。目にたまつた水を払いそーっと仁に気づかれないようにその場を離れた。

そこから一分も歩かないうちに自分の家の前についた。家は無事っちゃ……無事だった。

人の頭ほどのコンクリート片が壁にめり込んでいたり三台の車が突き刺さっていること以外は。

しかも中に入ると冷蔵庫の中はくっせーわ、水はでねーわ。仕方ないっちゃ仕方ない。

我慢する。

ここは俺の街だ。

親父たちの唯一の形見の家が傷ついているのを見るのはあまり良い気分ではない。

しゃがんでお気に入り黒い植木鉢をぽんぽんと叩いた。ぐるっと反転させると黒に細かい破片が突き刺さっていた。がっつりとコンクリートのパンチを受けている。

「はあ……………」

植木鉢をこれ以上壊れないように丁重に置いて空を見た。突っ込んだ車どうしようか。

もしこれが柱代わりになってバランスが保たれてたりとか、ないのか？

ありえないか？

「シエラ、ひっぱってひっぱって」

とりえあえずシエラに引っ張ってもらった。

もちろん最終兵器の力で。

崩れそうな気配があったらすぐに元に戻してもらおう。

たとえ崩れたとしても幸運なことに回りに人はいないし。

俺の家に突っ込んだのは普通サイズの乗用車。

あと二トントラック。

なんでわざわざ俺の家に突っ込んだできたのか。

トラックは荷台が大きく凹んでいたがまだ動くようだった。

運転席に乗り込んだセズクに頼んでどけてもらう。

車二台はシエラとメイナに処理してもらって……。

俺は散歩する。

「じゃ、あとよろしく！」

シュビと手を上げて走り出す。

「逃げるな！」

がっしとつかまれた。

やっぱり無理だったか。

「トイレ、トイレ」

「駄目」

「もれそう」

「うそつき」

俺が手伝うにも人間じゃないお前らの何をどう手伝えば良いのか。
そう聞くと

「家の中の掃除」

即答された。

いや、あぶないだろ。
崩れたらどないすんねん。
なあ、セズクさんや。

「柱の補強はしておいたよ♪」

セズクが汗をキラキラさせつつ手を広げ、回る。
いらんことしやがってからに。
しかもこのタイミングである。

「僕が穴を補修するよ。」

波音たちは家の中の掃除にかかって。

あ、車その辺にほうっておけば良いと思うよ。

あの鼻が曲がりそうな臭いの方が深刻だからね」

「あいあい」

そう答えて中に入った。
すぐに外に出た。

家の中に入ると既に臭いが充満していた。
なんで冷蔵庫の扉を閉めなかったのかと後悔させられる。
くっさぁ。

穴をつまんでもなお、かすかに残った隙間から入ってきた臭いは
しつこいまでに鼻腔にからみついてくる。

俺達三人は苦痛に顔をゆがめながらも冷蔵庫を外に引きずり出した。
その拍子に扉が開く。

「ぐおおお……」

悶絶した。

気絶してもおかしくないほどの臭いだ。

「はやぐじめろ！」

鼻をつまんで涙目になりながら冷蔵庫を指差した。

「うん」

メイナが扉を蹴って閉めた。

臭いが風に流れてどこかに行くまで鼻の封印は解除しないでおく。

「どうする？」

「さぁ」

メイナはすまし顔で眠そうに欠伸をした。

「ヴおういい？」

「んー？」

うん、良いよ」

それでようやく鼻の封印を解除。

「っはぁ、はぁっ！

息が出来んかった。

とりあえずこいつは一番後回しだ。

家の中を早くもとの状態に戻さないで。

ポツポツと残っている周りの家にも迷惑だからな」

シエラ、車を投げて遊ぶな。

切るな、壊すな、穴を開けるな。

暇か、暇なのか、てかこっちこい。

俺の話を聞け。

「今聞いてた？」

シエラの近くに行って話しかけた。

「ん？」

こいつ……。

「よし、穴ふっせぎ終わった。

窓もつけたペンキも塗った。

完璧だ」

シエラに文句を言う前にセズクが額のハチマキを外し
真っ黒の新しいトンカチを置いて地面に転がった。

すばらしい出来だ。

でもこれだけは言わせてくれ。

さっきから文句ばかり言っていると思うけど

頼むから言わせてくれ。

「I LOVE HANON とか別にいらねーから。
なんで書いたの？」

ねっころがつてるセズクにのたもうた。

「愛ゆえに」

意味分からん。

「消して」

「えー!？」

信じられないといった表情で見られた。

そりゃそうだろう。

でかでかで赤（しかも蛍光塗料）で書かれてるんだから
たまったもんじゃない。

それと名前を赤で書くな、縁起が悪い。

「ったく……」

頭を掻きながら家の中に入った。

「波音、これどうする？」

食品類だろ？

「捨てとけ、捨てとけ。
臭いだけだし」

「りょーかい」

シエラが玄関から出たのと引き換えにセズクが入ってきた。

「これでどうかな？」

自信満々だ。

「どれどれ」

俺は玄関から出てセズクの後に続いた。

「どうだ」

セズクがどやーと壁を指差す。
パンチを一発。

「げほっ、何で？」

「あのなあ。
赤から青とかそういう意味じゃないんだよ。
この文字をやめろって言ってんだよ。
やりなおし」

「えーっ!？」

信じられないか？
だが事実だ。

セズクを放って置いてまた家の後片付けに戻る。

「出来たよー！」

早ッ！

今俺中に入ったばかりやで？

「どれどれ」

「今回は自信があるんだー♪」

ほーそうかい。
どらどら。

「どう？」

パンチを一発。

「げばらっ！」

「いや、だからそういう意味じゃない！
何だよ！

I LOVE 形式をやめろって意味じゃない！
何で『私は永久波音が好きです』にしたんだよ！
違うよ、何で和訳したんだよ！」

「どう違うんだい？」

「いやね、あのね。

もう文字要らないから。

普通に回りとおんなじ色で良いから」

「それじゃ僕の愛が「愛とかどうでもいいからやめろ」

ったくもお。

また家に入って掃除を続けた。

後三回ぐらいセズクはやってきては

文字の大きさを小さくしたりフランス語とかにしていたが

俺が変わりにペンキを塗ってセズクを家の掃除に回すという名案で
ようやく壁のペンキ塗りが終わった。

朝方に帰ってきて夕方になるまで作業は続いた。

「残りはまた明日だな」

俺は伸びをしながら腰を叩いた。

あの冷蔵庫も片付けたしな。

どうやったかって？

簡単だ、シエラのレーザーで蒸発させた。

倉庫の扉を開け、中にある自家発電機を作動させる。

たっぷり入っている灯油のメーターを確認してレバーを引いた。

黒い煤煙が噴き出して倉庫の中に充満する。

「げほっげほっ……」

咳をしながら倉庫の壁についているスイッチを捻った。
電球が点滅して……よし。
付いた付いた。

いざというときのためにエネルギーは大事にせんと。
自家発電機のスイッチを切り倉庫から出た。

まあ、今がそのいざというときだと思うけど。

倉庫の扉を閉めて鍵をかけた。
すっかり夕方だ。

今までちらほらとしかいなかった人が戻ってきたようで
人氣がわっと増し始めた。

皆簡易プレハブ小屋の中に籠っていた。
みんなが笑顔だった。

「波音君！」

物思いに沈んでたそんな時であった。
後ろから呼ばれたのは。

ラスボスや。

ラスボスさんのお出ましや。

「おう！」

笑顔で返す。

これで大丈夫だろ。

きっと大丈夫、怒られはしないはず。

「おかえりなさい」

すごい笑顔でにっこりそういわれた。
頭痛が痛いみたいな文章だな。
まあそれはいい、置いておく。

「ただいま」

ア rilさんに手を上げて返事を返す。

「ところで学校は？」

あー。

「行く」

「あと三日で文化祭ですよ」

そっか……。

「絶対行く、また明日迎えに来てくれ。
久しぶりすぎて間違いなく寝坊するから」

「はいはい、分かりましたよ。」

「明日七時四十五分ぐらいに来ますね」

えっまだ早いだろ。

——とは言えず。

「分かった、よろしく！」

「では、また明日会いましょうね！」

アリルはそう言うのとたたたつと駆けて行った。
ズキンと胸が痛む。
そっか……。

俺、この人——アリルを……。

少しでも忘れていたと思ってたんだがな。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

いやそういう意味じゃない。(後書き)

どうもありがとうございました。
暑いですね。

本当になんとかならないものでしょうか。

では、ここまで読んでいただき……。
と略しちゃだめでしょうか？(笑)

冗談です。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

あ　ろ　っ　と　お　ぶ　す　た　ー　ず。

その夜は倉庫の中で寝ることにした。

理由は色々あって、まず家の中だとたくさんのヤバイ要素が……。

それにエアコンが付かない家はただのサウナだ。

ならば外で寝た方が良いに決まってる。

窓ガラスも割れてないんだぜ？

床に散らばってるのを掃いてどっかやってもまだ不安だろ。

寝返りをうったしゅんかんぶすりっ！

ギャーにはなりたくないわけだ。

そんなわけで外で寝ることにした。

「最終兵器……か」

コンクリート片によって所々に穴が開いた屋根の倉庫で仰向けになった。

電気のない街はこんなに夜空が綺麗に見えるんだな。

いままで電気がばしばし付いてたからなあ。

街灯だけだけど。

そういえばシエラと出会ってもう結構たつ。

はじめて出会ったときはボコボコにやられたものだ。

とにかくボコボコに。

そして気を失ったよな。

あれからまたずいぶんたってメイナさんとも出会った。

最初は「シエラが二人いる、意味不明」

と思ったものだ。

その時と比べて二人とも人間らしくなってきた。

初めのときこそ冷たい機械だったのに。

まああのひどい臭いを気にせずに

家の中で眠れるところとかは便利だと思うけどな。

肌寒くなってきたて薄い毛布を胸までひっぱりあげた。

それにしてもまあ俺もよくここまで耐え切れたもんだ。

なんだ、また回想か？

そう思うだろう。

残念ながらそうなんだ。

何か寝る前になるとこうやって昔のことを思い出す。

癖なんだろうな、これはもう。

死なずにここまで来たのも

人を殺さないという方針を一貫していたおかげかもしれない。

赤い色に光る星を右の人差し指で覆った。

でも——俺はこの方針をゆがめることになるだろう。

俺の両親を殺し、おっさんの妻。

シンファクシの両親などがこの世から消えた元凶。

アリの父を……。

アリの父を帝国郡に引き入れるために。

俺は……ア리를。

恋人を殺さなければならぬのだ。

なんで？

なんで俺はアリ父じゃなくてア리를殺さなきゃならない？

シンファクシは言った。

「アイツに同じ苦しみを味わさせ

その心の隙を付いてこっちに引き入れる」

と。

うろ覚えでごめん。

言っていなかったかもしれないけどまあ言ってただろ。

これが俺がア리를殺す理由。

人差し指を下ろした。

むくりと起き上がって倉庫の壁に並んだ一つの拳銃を手を取った。

親父は相当警戒心が強かったのか、拳銃が五個ぐらい常に

ここにはストックされている。

もちろん、違法ではあるけど。

仕事柄、案外許されていたようだ。

黒の金属はいつまでも冷たく、シエラ達とは違う。

人と触れることでぬくもりを持つことはあるがそれも短い間。

あとは虚しい冷たさが残るだけ。

そういえば俺は昔おっさんに頼まれて記憶媒体を集めていたよな。

そもそもおっさんに頼まれて集め回った記憶媒体や宝石は

一体どこに消えたんだろうか。

何に使うつもりだったのだろうか。

中には何が記録されていた？

ふとおっさんの日記を思い出した。

あの中にヒントがあるのかもしれない。

それと同時にもう一つ思い出した。

おっさんは確かにT・Dを見つけたと書いていた。

ならシエラの一人称を変えさせるほどの影響力をもったT・Dはど

こへ？

あまりにも謎である。

というか俺が『怪盗レルバル』とかバカみたいに呼ばれてた時期が

なつかしい。

全然そんな仕事をしていたようには思えない。

まあ一種の黒歴史みたいなもんだから思い出したくもない。

「……星、綺麗だな」

ふわっと夜風が髪を揺らした。

溢れんばかりの星が空にちりばめられている。

自然ってすげえなあ。

己の小ささを嫌でもひしひしと感じる。

先ほど考えていた謎。

T・Dはバーフォードに送られたと書いてあった。

バーフォードってのはおそらくシンファクシの親父だろう。

でも起動しなかった。

あと少しおっさんの日記読めたらなあ……。

「ん……？」

待てよ………？」

鬼灯のおっさんのビルは今、空？ ↓ Yes.

人はいる？ ↓ No.

なら行けば？ ↓ Of course.

俺は布団から出た。

何気ない感じで壊れかけの一台の車に乗り込み

ちよっと配線をいじり倒してエンジンをかける。

おっさんのビルまでそう遠くない。

片側のランプが壊れた車のアクセルを踏んで走らせた。

道は思った以上に被害を受けてなくてすいすい走れた。

んで、すぐについた。

下から五二階建て、ヘリポートも入れると五三階建てのビルを見上げる。

電気がついている階は一箇所もなく

ガラス張りの壁は黒一色に塗られていた。

「何で来た？」

後ろから急に声をかけられ振り返る。

なんだシエラか。

「ん、少し確かめたいことがあってな……。
いや違う、違う。

何でお前ここにいるんだよ」

「目が覚めたから。
暇だったしちょうどいいかなって」

つけている黒の眼帯を外してシエラが言った。
家に帰れというべきか。
でもいて損はしないだろ。

「そうか」

まあ念には念を入れておくべきだな。

「丁度良い一緒に来てくれ」

「りょーかい」

シエラは少し嬉しそうに笑った。

手の中にある拳銃にはない暖かさ。

コンクリートの階段へ一步を踏み出して登る。

ガラス扉の割れた正面ロビーに入ると頭の中にある地図を呼び起こした。

えーと、非常階段は……こっちだな。

この部屋の右端にある。

非常灯は十階ぐらいまでならついてるから
蹟くことなくすいすいけるだろ。

「行くぞ」

こくんと承諾の意を示したシエラをつれて階段を登る。
おっさんの部屋は確か四七階だったよな。

こつこつと自分の足音だけが大きく聞えた。

さて、俺はここで一つ心配していることがある。

またあの生物いるんじゃないだろうな。

ニセの野朗。

あれは……怖い。

あれは怖い。

もうあんな目にはあいたくない。

死にかけたんだぞ。

そうお困りの俺へ。

大丈夫。

今の俺にはシエラがいる。

「？」

振り向いた俺に不思議そうな目で見返してきたシエラにとりあえずのガッツポーズをする。

「……どしたの？」

最強、いや最怖のガードウーマンがいるし。

恐怖神なんだからな、何といっても。

すいすい進んで十階の踊り場に到達した。

ここからは非常灯すら消えており

この暗闇の中を歩くのは至難の業だ。

ココまでは記憶&mp;非常灯が

しっかりしていたから来れたもののここからは無理。

懐中電灯がたしか……。

もう一度頭の中の地図を呼び出した。

踊り場の左右に最低でも二つの懐中電灯が壁にくっついていいるはずだ。

どこら辺だっけな。

手を伸ばして壁をまさぐった。

こつんと固い出っ張ったものに手が当たる。

これか。

円柱になっているところをぐいとひっぱった。

よし、視界はこれでクリアーに。

「あれ？」

電気がつかないな。

シャカシャカと振る。

おそらく接触が悪いだけなんだろう。

懐中電灯はちかちかと弱々しい光を出した後本気で光りだした。

「ついたついた、行こう」

「ん」

シエラをつれて

二十階、三十階、四十階と昇っていく。

ここで俺は気がついた。

あれ、なんか臭くね？

あまり気にはしたくないが……。

四一、四二……四六、四七……。

「ここだ」

「ん」

鼻にまとわりつく臭いがさらに強くなった。

何かが腐ったような……。

——ああ。

死体だろうな。

あの頭の割れた研究員が

フラッシュバックしてきて吐きそうになった。

シエラは鼻をつまんで

「くさい」

ね。

俺もそう思うわ。

でもお前家の中で寝てたんだから別に大丈夫だろう。

あの冷蔵庫の臭いにも耐え切ったんだろ？

懷中電灯の光の輪に穴が写った。

銃弾が粉碎した壁だ。

あちこちに残っている銃痕。

ぽっきりと折れたモップが床に転がっていた。

これでニセを殴ろうとしたんだっけな。

あの夜の爆撃から誰も入っていないんだな。

苦い記憶が遠慮なく戻ってきた。

大きくえぐられた壁。

ニセがロケット弾でえぐった跡だ。

たしかこのまま……。

ドアのぶっ飛んだ『第九一研究室』。

ここに俺の蹴りをくらったニセが入り込んで

ロケットポッドをコピーしたんだ。

このまま行くと……。

高価な木で出来たドアに金のプレートがかかっていた。

『鬼灯の部屋』

来たときにはこんな風になってるなんて気がつかなかった。

小さい穴が開いた壁を通り抜け、扉を蹴破った。

ばらばらにちらかった椅子。

机の上には血がついたあのPCが置きっぱなしになっていた。

「よし、あれ持って変えるぞ」

「どれ？」

「あのPCだよ」

PCを絞り込んだ懐中電灯の光に浮かび上がらせた。

inues.

This story continues.

あ ろつと おぶ すたーず。(後書き)

遅れてしまってごめんなさい。

親と話し合いをしました。

大学受験のお話です。

さって勉強と同時並行でがんばろう、小説。

では読んでくださりありがとうございました。

圧倒的な恐怖。

「こんなの持って行って何になるの……」

不思議で仕方なさそうにシエラはPCを持ち上げた。

「まあまあいいから。

頼むぜ、シエラ」

俺は窓から下を見下ろした。

真っ暗の街が眼下に広がり地面のない地獄に吸い込まれそうな感覚に頭がくらくらした。

「……波音、これ持てない」

「へ?」

いや、今お前持ち上げてたやん?

俺の勝手な解釈だったか?

「このケーブルとか切ってもいい?」

首を捻る。

PCの下からどるっとケーブルが束になって生えていて机とつながっていた。

これは取れないな確かに。

「どーするかな」

俺は懐中電灯を持ったまま机に座った。
電気もないだろうから、ここじゃあな……。

ここでデータも取れないだろうし。
懐中電灯をケーブルに当てて切ってもいいやつかどうか判断しないと。

シエラからP Cを受け取ってケーブルをたぐる。

「波音！」

シエラが小さく叫んで急にガラスの割れた窓から何かが入ってきた。
P Cを思わず手放してズボンにずばらに突っ込んだ拳銃の
安全装置をはずして銃口を向ける。
窓から入ってきた何かは人の形になると

「大人しくしなさい。」

我々はV e l c aのものだ」

こっちにアサルトライフルを向けてそう言った。
焦りつつも何とかばれないように
銃を隠して殺意を感じ取られないようにする。
格好からして特殊部隊だろ。

それに俺昔こいつらに会った気がする。
別人だったけどこの特殊部隊に。

「V e l c aつつつても連合郡の一組織だぜ。
静かにしておけよ、ふふへへ……」

一番端の男が急に喉を鳴らした。

「おだまりっ！」

何だこれ。

「仮にも私たちは特殊部隊なのよ？
そんなに情報をばらしていたら駄目じゃない」

女の人に怒られたさっきの一番端の男は

「へいへい、ごめんなさい」

ひねくれたように謝った。

なんか……うん。

ありがとう。

本当にこんなアホみたいな特殊部隊いるんだ。

「何見てるのよ？」

いやあ……。

見たくて見てるわけじゃあないんだなこれが。

女の人は

「じゃあ手分けして探すのよ！

早くしなさい！」

ほとんど右腕を振り回す勢いで部下達に命令を下した。

「そんなわけだから……。

ごめんよ、おじょうちゃん達」

一番端のとはまた違う物腰柔らかそうなお兄さんが

すまなそうに俺達に言った。

いや俺は男だけど。

そんな心の突っ込み聞えていると良いんだけど。

「おっと、ぼっちゃんもいたね。

へへへ……」

何だわざとか。

俺こういう笑い方嫌いだ。

ふざけやがって。

怒りがわいてきた。

沸点低いけど怒りわいてきたコノヤロー。

「さっ、早いとこさがすよ！

時間は限られてるんだからね！」

女の人がもう右腕を回して命令してる。

五人のうち、四人がおっさんの部屋のあちこちをひっくり返し始めた。

ゴミ箱の中や机の引き出し。

ベツトの下まで。

そこは男心的にちょっと遠慮してあげて欲しいところである。

あ、でもおっさん言ってたっけ。

「大丈夫、すべてはHDDの中だ」

親指ぐっと立てて。

そういう問題じゃねーだろクソジジイ。

死んだらあんた、HDDどうするの。

俺に処理任せるとか言ってたけど俺どうすればいいの。

詩乃泣くぞ。

ガサガサ音が漂う中一人は銃を俺達に突きつけつまらなそうにガムを噛んでいる。

くちやくちや音に混ぜながら、おそらく暇つぶしだろう。

話しかけてきた。

「それにしても坊主。

なんでこんなところにいるんだ？」

それは俺の台詞だ。

なんであんたら連合郡はいつも俺の邪魔をしてくるんだか。

ここは正直に答えるべきじゃないな。

何かいい嘘を言わないと。

「PCを忘れたから。

取りに来ただけだ」

完璧な嘘だ。

これなら誰もがだまされるだろう。

「つてえと、お前は鬼灯家の人間か？」

「いや鬼灯の友達だ。

娘さんのな」

「ボーイフレンドってワケか。

で、そっちのお嬢さんは？」

男はガムを紙に包んでポケットに入れた。
マナー良いじゃないか。

胸ポケットから一本の煙草を取り出し火をつける。

「僕？」

シエラの顔を始めて真正面から見るようになった男は言葉を途中で切った。

いや切らざるを得なかったというべきか。

「そうお前——！？」

男の啞えていた煙草がぼろっと床に落ちた。そしてつけていたゴーグルをあげて

「た、隊長、隊長！」

結構な大声で隊長を呼んだ。

ばれた——っ！

さっき隠した拳銃のグリップをぎゅっと握った。

シエラがいる以上使わなくても大丈夫だとは思うが……。

「どうしたのよ？」

女が隊長だったようで作業を邪魔されたことにむすっとして男に突っかかる勢いでやってきた。

「きょ……恐怖神です！」

男が震える手でこっちを指差す。

女の隊長もゴーグルを取って

「は？」

そんなバカなことがあるわけじゃない！」

一瞬のフリーズを乗り切って隊長は俺達二人の顔を鑑定するかにようにじっくり見てきた。

「どっちがその恐怖神なのよ？」

ふうと眉をひそめ目頭を抑えた隊長は疲れた表情だったが

「お、女のほうでさあ！」

そう聞くと顔が引き締まった。

隊長はふーんとシエラに一瞥をくれると

「……何？」

シエラは面倒そうに隊長の顔を睨んだ。

機嫌が悪そうな顔をしている。

喧嘩を売られたと判断しているのだろう。

「――へえ。」

これが最終兵器ねえ」

「た、隊長？」

隊長は部下の制止を聞かずに腰から一丁の拳銃を取り出した。それをシエラに向ける。

唇をぎゅっと引き締め僅かな隙間から

「悪魔めっ……！」

その言葉と乾いた音が鳴り、銃口から白い硝煙が昇った。
薬莢が床に当たって金属の音をたてた。

至近距離で撃たれたにも関わらずシエラは動じなかった。
万能の守りにいぶられた銃弾はシエラをはずれ壁に刺さっていた。

「イージスね。」

「じゃあこれはどう？」

隊長は拳銃、アサルトライフルを外すと黒の手袋を外した。
すらっと細長い指に赤いマニキュアが正反対の印象を与えてくる。
その指が全てくっつき銀色の金属に変わると鋭い刃となり
懐中電灯の光をたたえた。

シエラは少し驚いた表情でその光景を見下す。

最終兵器モドキ。

セズクとおんなじやつだ。

「驚いた？」

「さっきは止められたわよね」

隊長は短い髪を結んでいたゴムを外して目を見開いた。

「――ならこれはどう？」

風のようなスピードでその刃をシエラに向けて突き出した。

「死ねッ！」

俺の目には確かにシエラが少し笑った気がした。
隊長が突き出してきた刃をシエラは素手で掴んだ。

「なっ……!？」

隊長の反応を待たずして面倒そうな表情を維持したまま
シエラが掴んだ刃を覆うように一瞬青の光が走って

「ぎゃああああっ!!」

隊長は右手を押さえて地面に膝を付いた。

シエラが離れた刃が床に静かに突き刺さった。

断面図から煙が昇りその刃をシエラが足で踏み潰した。

隊長の手は千切られていると言うよりは切断されていた。

断面図から血が噴き出し、隊長の顔が痛みに染まる。

「ねえ、波音」

頬に付いた血を右指でさらりと撫でシエラが聞いてきた。

許可を求めているのだ。

殺人の。

歪んだ笑いの頬に一筋の赤い線が付いている。

それが余計に不気味だった。

赤紫の目と黒稀銀髪が雲の切れ目から現れた月で光っていた。

「……うん。」

もう好きにしろよ……」

ここで駄目といってもシエラは聞かないだろう。
完全にスイッチが入っているからだ。

俺が殺さなけりゃ誰が殺しても良いのか？

そんな疑問クソくらえだ。

止めれるなら止めてる。

あまりに力差が歴然すぎるのだ。

そういう時人間はただ指を咥えて見ているしかないのだ。

それに今シエラがやってくれなきゃ俺は確実に死ぬ。

全員の注意が逸れている隙に俺は机の下にすべりこんだ。

情けないけど俺は足手まといにしかならん。

「……………」

さっきまで普通の手だったというのにシエラは

一瞬にしてその両手をそれぞれレーザー銃に変えていた。

その門から赤の光が発射されシエラに残った左手を刃に変え

襲い掛かってきた隊長の頭を飛び散らせた。

血しぶきが壁に広がり次に煌いた赤線が顔のない体を焼く。

壁にぶつかるほど勢いよくとんだ元隊長だった体は部下にぶつかり

隊長の体ごと部下の体をまた一本のレーザーが貫いた。

そのレーザーがさらに細かく分かれまだ命の残った体を四散させる。

確実に息絶え原型がなくなった体から一丁のアサルトライフルが落

ちる。

残りの三人がシエラに銃を放つが全てが空中にて。

いつもどおりに軌道が湾曲してシエラには当たらない。

仲間の血を全身に被った男が齒軋りをした。

「化け物かっ——！」

そうだ。

シエラは、恐怖神はまさに化け物。

身をかがめ、一瞬にして接近した最終兵器に

アサルトライフルを向けるも銃身が刀によって二つに切れた。中につまっていた銃弾がばらばらと床にこぼれる。引き金を引くような形で残っていた右手ごと。

その男が右手を失った痛みを感じる前にシエラの黒に青い線のはいつた刀が男の首と体と別れを告げさせていた。糸の切れた操り人形のように倒れた兵士を乗り越え

「Shit！」

接近戦を挑んできた一人のパンチを身のこなしで避けたシエラは右腕を勢いの乗った兵士の腹へとめりこませた。

「がふっ……」

兵士の口から大量の血が流れシエラはその血を汚い物を避けるように足を上げて避けた。

体を突き破り血がぬらぬらと光る右腕は血の糸を引いて兵士の命を拭い去る。

残り一人。

「うっ、うわあああっ！！」

最後はこうなるのだ。

ドアから逃げて行った兵士。

右手に付いた血を舐め取りその右手がまたレーザーに変わった。

逃げる兵士をパンソロジーリーダーでキャッチしながら

シエラは壁へとレーザーを発射した。

壁に穴を開けながら進んだレーザーは正確に。

一ミリのズレなく最後の一人の脳天に穴を穿った。

中枢を失った体がめちゃくちゃに動き男は地面に倒れる。

それでもなお体は動いていたがめっちゃくちゃにされた
脳が勝手に指令を出しているのか、神経がいかれてしまったのかは
俺には判断は付かなかった。
なぜ見えてるのかって？

シエラの眼帯をつけてるからだよ。
ちょうどあったのを拾ったのさ。

「終わり……」

シエラは右手の血をぱっぱと払った。
床の染みがまた一箇所増える。

「終わった！」

鼻を押さえながら俺は机の下から出た。

「……うっ」

血の臭いが充満した部屋。
五人の命を吸い取った恐怖神は満足そうに俺に微笑んだ。
とにかくこのPCをもってさっさとここをおさらばしよう。

「これ」

「あ、ありがとう」

シエラに眼帯を渡して俺はPCを持ち上げた。
でもPC取れないんだよな。
仁をつれてくるんだった。

死後痙攣している兵士を見ないようにして本棚にもたれた。

そういえばさつきシエラの眼帯でこの部屋を見たとき
何かよく分からないものが見えた。
一瞬だったが……。

「ちよつとごめんなさい……」

肉塊に謝ってどいてもらう。
確かこの本棚だったよな。
思いつき蹴飛ばしてみた。
血を吸い込みふやけた本が落ちる。

「これだ……」

奥に赤のスイッチがあつた。
自爆スイッチとかだったらいやだな。
おっさんのことだからそんなことはないだろうが。
人差し指で思いつき押し込んだ。
カチ。
本棚の中で何かが聞えた。

ues.

T h i s s t o r y c o n t i n

圧倒的な恐怖。(後書き)

ありがとうございました。

久しぶりの戦闘シーンだった気がします。

やはり最終兵器ですね。

時々自分で怖くなります (自画自賛乙

では本当にありがとうございました。

→

これに変わる挨拶が欲しいところです。

超兵器を超えた兵器

部屋の床が揺れた。

モーター音が高まると一気にスピードが出て
部屋の床がずるつと激動した。

「おっとっ……」

「っ——！」

シエラが躓いて床にぺたんと座りんだ。

俺は倒れないように近くの机に手について体を支える。

部屋の床ごと回ったようで今まで本棚があったところに
ぽっかりと人が通れるぐらいの穴が開いていた。

こんな大掛かりな仕組みだったとは。

「……行くの？」

シエラが不安そうに床を足で叩く。

さっきこけかけたからなあ。

よろけた姿を思い出して少し口が緩む。

「何笑ってるの。」

まさか……見た？」

無言で口の端を吊り上げた。

「——っ。」

殺す」

シエラの両腕が瞬間的なレーザー砲に変わる。
中の小さな歯車が軋み火花が散っている。

落ち着け、落ち着け。

両腕を上げて静止した。

「なーんてね」

冗談には思えないんだよ、だから。

シエラの元に戻った白い手を眺めて前もそんなこと
されたなあと思いはせた。

「で、行くの？」

額にかかった髪をあげて、シエラは嫌そうに俺を見た。

「行かざるをえねーだろ。」

「行こう、行くぞ」

そんな嫌そうな顔知らん。

「えー……。」

「早く帰りたい……」

なんで付いてきたんだよ。

ぐちるシエラの背中を押して穴の中に入った。

念のためパンソロジーリーダーは起動しておいてもらう。

危なかったらすぐに教えてもらいたいし。

すぐに穴は終わりめちやくちや広い場所に出た。

暗くて分からなかったがその気配を感じた俺は

意識せずに口が動いていた。

「広いところに出たなあ」

「暗いのに分かるの？」

「いや、なんとなくだけだよ。

周りを遮るものがなくなった気がする」

「懐中電灯は？」

「いまつける」

穴に入る前に消していたんだよ。

スイッチをぐいっと押した。

「柵……？」

ぼそっとシエラがつぶやく。

「その奥にあるだろ。

よーわからんものが」

懐中電灯をふよふよ左右に作動させた。

柵の奥に一本の太い何かが存在していた。

銀色の金属に所々赤や青の線が走っている。

「これって……」

シエラが額に手を当てた。

「何だよこれ？」

俺は懐中電灯の光をずっと上から当ててみた。
柵から身を乗り出して下にも光を向ける。

「うわっ、高っ！」

本当に高かった。

地下まで届きそうな吹き抜けだ。
このビルにこんなもんが……？

「シエラ、これって……」

振り返った丁度のタイミングにシエラは答えてくれた。

「弾道レーザー」

「弾道レーザーってあの？」

脳に焼き付いていたのはあの光。

空が光って降ってくる死の光。

メガデス級のしか見たことはないがあの――。

「そう。」

超光を凝縮してそれを一気に空へと射出する兵器。

レーザーは空中で曲がり目標へと降り注ぐ。

海をも越える射程を持つてる」

だろうな。

俺はこいつに嫌ってほど辛酸を舐めさせられたからな。
よく覚えてるわ。

「この弾道レーザーはもう完成して……」

シエラは柵を飛び越え吹き抜けの中に落ちていった。
死ぬことはないと思うけどドキッとするよさすがに。

「あっ！

お、おいっ！」

それに一人ってのもまた恐ろしい。

ニセみたいな奴がまた現れたらどうするんだよ。

あっという間に闇に飲み込まれたシエラを追って

探し出した螺旋階段をダッシュで降りる。

たっぷり十分はそれでもかかった。

降りきった頃には息は上がってるし体力の消費もすごい。

でかい装置の前で腕を込んでいるシエラの肩を掴んだ。

「はあはあ……。

お、おまえなあ……」

「……………」

息を整えるまではあはあやってから
落ち着いたところでまたシエラの肩を叩いて言った。

「……………」

「なあ、いったいさ——」

「――てる」

小さな声で流れたせいで聞えなかった。

「え？」

すまん、何て言った？」

俺もしかして耳遠いのかな。

結構な頻度で聞き返してるよな？

「もうこれ完成してる」

シエラは眉をひそめつつ目をつぶった。

パンソロジーの手で装置を上から下まで撫でているのだろう。

「下手すればルフトハナムリエル級にまで及びそうな威力……。

どうしてこんなもの？

掘り出してきたとは考えづらいし……。」

「なあ」

頭にはじけたことがあった。

不確かかもしれないが言っておきたい。

知って欲しい。

あくまでも推測でしかないのだが……。

「ん？」

「俺はさ。」

昔からおっさんに頼まれて宝石とかを盗みつつ
メモリーチップ、超光化学記憶媒体を盗んできたじゃん？」

「聞いたことはあるから知ってる」

「それじゃないか？」

「メモリーチップ？」

「うん」

「解読できたっていうわけ？」

「ベルカ独自の技術だよ……？」

「お金だっけかかるだろうし……」

「だから俺は宝石を盗まされてたんじゃないか？
これをおっさんが作るために」

「でも――」

口を開きかけたシエラはまた口を閉じた。

「それにさ……」

俺は少し前から疑問に思っていたことがある。

メガデス戦の最後を覚えている方はいるだろうか。

それにまだ記憶に新しいロシアデスやネメラデスとの戦いも。

あのとき、どこからともなく弾道レーザーが飛んできた。

シンファクシは帝国郡には超兵器が一隻しかなく

しかもあれは俺が盗んできた装置を持って帰らなければ

兵装の一つすら動かせなかったはずだ。

なら誰がああのレーザーを撃ってくれたのか。

今答えが分かった。

鬼灯のおっさんだ。

連合郡がどこからレーザーが放たれたのか測定できなかったのにはまさかビルの中に巨大な砲身が潜んでいるとは予想もしなかったため。

なんだ、結構簡単に謎が解けちゃった。

「……というわけ」

俺はちょっと得意げにそう締めくくった。

懷中電灯の光を回りにあててみた。

変な形の機械や変な形のガラス瓶。

変な形の机の上にまともな形のP Cが置いてあった。

「ちょっと、そのP Cつけてみてくれ」

上にあったおっさんのと同型P Cだ。

「電氣ないよ？」

あ。

うっかりしてた。

シエラが歩き回る靴の音が反響しはじめた。
何を考えているのやら。

「これかな？」

暗闇からシエラの声が聞えたかと思うと

明かりがバツとつき、網膜を突き上げた。

「お前、何したんだよ」

まぶしさに目をほそめながらシエラを探した。

壁際に立っていてシエラはブレーカーらしきものに手をかけていた。

PCが小さくピツと音をたてて起動をはじめた。

あちこちのかい機械も唸りをあげる。

天井まで電灯が順番に点灯してゆき天井が見えた。

その天井の蓋のようなものがゆっくり開いていき月が見える。

簡単に上二行を説明すると

天井がゆっくりと開いて中の砲身が露出したわけ。

分かった？

それよりも心配なのは外に光が漏れたらまた面倒なことになるな。

連合郡にも当然、おっさんにもばれるわけだ。

そうなると本当に面倒なことになるんだ。

とにかくはやいことPCを……。

エンターキーを連打しながら起動を待つ。

おそいおそいおそい。

『あなたにアクセスする権利がありません』

やっと起動したと思ったらこれだ。

『パスワードを入力してください』

えーと、帝国郡じゃあないわな。

詩乃？

違う。

ナリサ？

違う。

ええ！。

駄目だな、これは。

i
n
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

超兵器を超えた兵器（後書き）

ありがとうございました。

ルフトハナムリエル級というのは何度が出したと思うのですが
ヴォルニール級を超える超兵器です。

メガデス級はいわなくても分かるかと思われませんが……。

では本当にありがとうございました。

ぽつんとした黒

「とにかくもうここから出よう。

うだうだやったところで変わらんし」

じつとりと汗ばんできた額に風を送りながら
俺はシエラにそう言った。

「じゃあ何で来た……」

「うっせ。

あ、電源切っとけよ。

もしかしたら俺も入っちゃいけない場所だったかもしれん」

「分かってる」

シエラに電源を落とさせて階段をあがる。

そのまま割れたガラスなどを踏み越えて俺達はビルの外に出た。
車に乗り込み、エンジンをつける。

片方割れたヘッドライトが道をくつきり映す。

「乗ったな？」

「うん」

アクセルを踏んでスピードを出した。

そのまま家へと走せる。

「PC取れなかったな」

シエラは隣で残念そうだ。

「……そうだな。

でも分かったことも多い」

鼻から息を吐いた。

「弾道レーザーとか？

今まで集めていたメモリーチップとか？」

「うむ、その通り。

案外答えは近くにあったな。

灯台下暗しとはよく言ったものだと思うよ」

「と、灯台もと……？」

ルームミラーに反射したシエラの顔が

あまりにも難しい顔だったため拍子抜けした。

それと同時に笑いもこみ上げてきた。

「もっと日本語を勉強するこったな」

「……灯台……」

ちらつと明かりが車内に差込み、サイドミラーから後ろを確認した。

ボンネットの出っ張った大型のトラックがやって来ていた。

おそらく連合郡の陸軍に所属しているのだろう。

爆撃の復興のお手伝いさんと言う訳だ。

邪魔になると悪いので車を路肩に止めてやり過ごすことにした。

この車の二倍じゃきかないような質量をもったトラックは積もったコンクリート片や土砂を巻き上げて見えなくなった。月明かりが強かった空はもう東の方から白くなってきていた。時計によれば早朝四時。もうこんな時間か。

車を路肩から出してまた道を走らせた。

「今日は学校行くの？」

シエラがドアについたゴミを指で払った。

「ん……行く。」

行かざるを得ないと思う」

この瞬間に頭にアリル顔が浮かんた。怖っ。

行くなって公言した以上行かんといかん。

——今のなかなか良いセンスのギャグだな。覚えておこう。

「じゃあ僕達も行こうかな。

久しぶりにでも」

「遼が喜ぶな。

行かんといかんわけだ」

「遼かあ……。

僕あまり好きになれないな」

クソがつ！

スルーかよ。

胸に若干の虚無感を抱いた。

残念極まりない気持ちのまま車を家の前にとめた。

煤の付いたドアを閉める。

懐中電灯を車の中に投げ込み家に入ろうとしてやめた。

中は臭いのだ。

冷蔵庫、あいつのせいで。

まだ臭いが取れてなかったはずだ。

そうだったそうだった。

思い出したよ。

「じゃ、ここで」

俺はシエラのためにドアを開けたんだぜ？

といった表情を試してみた。

「え？」

家の中で寝ないの？」

「ご遠慮しておくよ。

兵器には分からない不愉快さがあるんでね」

俺は手を軽く振って頭を垂れた。

「あー、臭いか。
なるほど」

分かってるじゃないか。
そうだよ、それだよ。

「うん。」

分かってくれて嬉しいよ。

じゃあまた明日！」

「はい、おやすみ」

思った以上にシエラは何も聞いてこなかった。

鉄の扉を開き俺は倉庫にまたこもった。

壁に持っていった拳銃を置く。

全然使わなかったな。

すっかり冷たくなった寝場所にもぐった。

学校か。

久しぶりだなあ。

携帯の電源を切って枕元に置いた。

で、起きたら朝になってた。

朝の九時。

「まじかええ!？」

急いで飛び起きて制服に着替えた。

朝食とか食ってる場合じゃない。

扉を開いて外に出た。

「あ、おはよ」

メイナがのんきに水なしで飲み込める歯磨粉で歯を
しゃこしゃこしながら体操していた。

多彩なことをしているな、またあんだ。

俺の姉のだった星型のパジャマを着てまだ眠そうにあくびをしている。
る。

「おい」

メイナの垂直ボンバーヘッドを掴んだ。

「痛い！」

な、何？」

メイナの寝癖を引っ張った。

まだ眠そうだったから起こしてやろうという気持ちだ、これは。

「今日、学校だよな？」

「そ、そうだけど……。」

痛い痛い、ひっぱらないでえ」

というか怒りが。

学校なのにのんきにそんなこととしていていいのか。

また俺は遅刻からじゃないか。

「何でまだ着替えすらしてないんだ？」

メイナの寝癖を放した。

「ひぐう……。」

あたまのてっぺんを撫でながらメイナが呻いた。
本当にもう……。

俺も寝坊した身だから正直これは理不尽な八つ当たりだと自分でも思う。

反応が面白いからやめられないとまらない。
ごめんな、メイナ。

「早く用意して来い。
それとシエラもたたき起こせ」

早いとこ学校いかなきゃならん。
遅刻だ。

今更焦るのめどうか。

水道は……出ないので。

ウェットティッシュで顔を拭く。

うお、煤がめっちゃ取れた。

口の中は帝国郡から持ってきたくちゅくちゅぱーがあるので
これで済ますことにする。

「俺は先に行ってるぞ」

「えーっ！

わ、分かったよう」

メイナによろしくと伝えて少し早歩きで家の敷地から出た。
五分ほど歩いて頭が冷えてきた。
なんでこうなった……。

ああ言ったものの。

学校に行ったところで面白いことがあるわけでもないんだよなあ。

今日、休もうか……。

あ、駄目だ。

殺される……。

金髪お嬢様のあいつに殺される……。

行くだけ行こう。

のんびり歩いて行こう。

出来るだけ時間をかけるんだ。

タンポポが綿毛だ。

それにしても。

少ししか歩いていないのにひどい有様だな。

ずっと前まで奇麗に舗装されていた道には

大きな穴が開き、その脇に小奇麗にまとまっていた店なども
全部吹き飛ばされていた。

あちこちに散らばっているのはコンクリート片だろうか。

ここにひとつ、おそらく人形の腕だろう。

それが落ちていた。

昔写真で見たような光景。

まだ信じられない。

穴に足を突っ込まないようにして学校への道を歩く。

怪我をした人が呻いていたり……ということはなかった。

案外復興が進んでいるようだ。

「うわぁ……」

五階建ての校舎は見るも無残に崩壊していた。

鉄筋が顔を覗かせ、タイルは剥げ落ちていた。

第六まであったはずの校舎は見当たらない。

でもばらばらだった校舎に反して先生達の威勢の良い声が
青空の下で響いていた。

校舎の復旧を急ぐブルドーザーやショベルカーなどの重機の音にも

負けていない。

ちなみにこの重機は鬼灯重工業の製品だ。

鉄がぐにやりと歪んだ校門についた。

おそらく爆弾で溶けて歪んだのだろう。

危ないものを触るように校門からそつと中に入った。

一枚のボードが出されて

『1－Aはこちら』

と書いた紙が貼ってある。

その一年D組みバージョンを探した。

「ここかぁ」

運動場の右端。

そこに書いてある場所へ行くことにした。

赤の矢印に沿るようになって歩く。

運動場まではすぐだった。

二年生、三年生の枠を超えて一年生の場所にたどり着いた。

D組は……ここか。

「はい、それで第一期九二四年。

このごろ……おお、永久。

来たのか」

桐梨の黒に焼けた顔が笑っていた。

「永久！」

「おーっす！」

次々話しかけてくるクラスメイトに返事を返しながら

桐梨に指された席に座った。

「はやく座れ。」

流木、うるさいぞ!」

「すみません先生」

遼はぺろっと舌をだした。

委員長だというのにのんきなやつだ。

「で……第一期九六四年。

さっきから四十年後に……」

日差しが斜め上から差込み髪を、頭を焦がした。

女子なんかは頭にタオルを載せたりして紫外線に対する準備の周知なこと。

埃をかぶった自分の机をはらって椅子に息を吹きかけた。

机も日光によって熱くなっていた。

生肉を置いたらこれ焼けるんじゃないか?

あまり使っていない新品同様の鞆を机の上において椅子にもたれ掛かる。

「波音君?」

む。

後ろを振り向いた。

「まじかー……」

机に頭をぶつけた。

「なんですかその反応は。
ピースです」

ア rilさんがVサインをしながらにつこり笑顔でこっちを見ていた。
俺の後ろの席なのね。

「おっす、永久」

こちらと同じくVサインの男だ。
お前がやっても可愛くないぞ。

左にいたのは冬蟬だ。
で、前は田中で……。

左は……いない？

しおれた花が挿してある花瓶が置いてあるだけだ。
——そっか。

よく見ると人数が若干減っていた。

みんな爆撃でやられてしまったのだ。

死んでいないにしても家が焼かれたりして

毎日の生活すらままならないのだろう。

そう考えると家が焼かれずに残っていた俺は

本当に幸せ物だったのだ。

ぼつんと心の隅に黒いしみが広がった。

連合郡の予算獲得のための犠牲だなんて知ったら……。

「よっ、波音！」

メガネがきらりと光った。

右後ろに仁はいた。

なかなか良い席順にめぐり合ったものだ。

「で……だ。」

この時の天皇は……」

桐梨のつまらん授業もよく聞える。

帰ってきたという実感がないわけではないが
クラスメイトの欠けた教室は

風が通りやすくなった気がするのだった。

This story cont

inues.

ぽつんとした黒（後書き）

ありがとうございました。

次からはまたもうすこしシリアスになります。

文化祭なども出来たら書きたいと思っています。

波音はどうするのか。

ア ril さんを。

波音は……。

ではこの辺で。

また来週！

くだらぬ嫉妬、ねたみ。

「よし、起立。」

礼、さようならだ」

桐梨が教材を教壇の上で整えて適当にあいさつをした。

授業は午前中で終わって蜘蛛の子を散らすように運動場は帰宅する生徒で溢れた。

俺も帰ろうとほとんどからの鞆をひっさげて椅子を机の下に入れた。

「波音君っ！」

さっさと帰ろうとする俺を後ろから呼び止める人物。

ア ril さんはぐいっと俺の制服の裾を掴んでいた。

「一緒に帰りましょうよ？」

朝、迎えに行っても起きなかったわけですし」

ア ril はポニーテールの金髪を結いなおして

「えっ、来たのか？」

「行きましたよ？」

七時四五分にね」

まったく俺のデコを突いた。

「いたッ」

「起きてこなかった罰です」

だって。

聞えなかったんやもん。

「おーおー、お熱いこった」

さつとアリの後ろを見ると片手にPCを持った仁が唇をゆがめているところだった。
おそらく笑ってる。

「おい、仁やめろ」

仁のメガネが変にきらつと光りやがった。

その仁がくいつと俺に顎で隣を示す。
なんだ？

横を振り向くと、鞆をもった最終兵器の二人が立っていた。
おそらく俺と帰るのを待っているのだろう。

俺はアリルさんに捕まった今、一緒に帰れる保証はない。

「あー、シエラ、メイナ」

先に家に帰るように言っておこう。
そうしよう。

「ん？」

「？」

二人はほとんどおんなじタイミングで目をぱちぱちさせた。

どうでもいいけどこの最終兵器二人は四時間目がはじまる前に教室に飛び込んできた。

なんというか、俺がついたのは二時間目の始まりだったので約五十分プラス二十分、七十分間何をしていたのやらと内心あきれた気がする。

ここで記憶が曖昧なのは四時間目はまた桐梨の授業で寝ていたからだ。

真上から照ってくる日差しが逆に心地よくてな。

つつい……えへ♪

今にはしまったことじゃあないし別にええやろ？
許してくれな。

「俺、なんか捕まったから先に帰っておいてくれ。

セズクが多分飯作って待っていてくれると思うから。

あ、川の中につけてあるコクァコーラ飲んで良いぞ。

俺はもういらんから。

それと、自家発電機はあまり動かすな？

もう燃料が少なくなってる。

多分、少し盗まれたと思うんだ。

俺のご飯は多分要らない。

食べて帰ってくると思う。

じゃ！」

俺はふーっと息を吐いて一息で言い切った。

「分かった、行こ、シエラ」

「うん」

二人は手をつないで教室（といっても板張り）から出て行った。

「あ、ちょっと！」

「まってよお二人さくん！」

「シエラ、メイナ〜！」

「あっ、仁てめえ！」

いつからあの二人を名前で呼ぶようになったんだこら！
てかあの二人がシエラとメイナって名前だったってのも
俺ははじめて知ったんだぞ！？」

「ウルセー、バカ！」

遼と仁が口汚く争いながらその後ろを追いかける。
疲れる友人達だ。

「おい、お前ら待てよ！」

「俺も忘れんなよー！！！」

「……ったく……」

冬蟬と隼人兄さんが走って遼たちの追撃した。

詩乃と綾は学校にすら来ていない。

二人が財閥のご令嬢だということを考えるといたしかたないような
気がする。

だれが好き好んでまたいつ爆撃されるか分からない街に娘を置いて
おくというのか。

ア ril はいるけどなあ。

友人が消えると、ア ril は急に俺の裾を掴んだ。

もう二十トンぐらいの勢いで俺をぐいぐいと引っ張り始める。

「な？」

ど、どうしたのさ？」

「いいから早く帰りましょう？」

「は、はい」

俺のバランスを取るために右に伸ばした腕が国語の宇佐先生に当たった。

げっ、まずい。

「こら！」

永久、お前！」

怒ってる！

「うっおっ、ちょ、すいません！」

ア ril は俺の狼狽ぶりなんて知らずに引っ張る、引っ張る。

「待て、逃げるのか！？」

泥だらけの地面に落ちたプリントを拾うために屈みながら
宇佐先生は右の拳を上げた。

「不可抗力です！」

「生徒指導部行きだー！」

それは死刑宣告です先生！

「それだけは勘弁してうわっ！？」

「ご、ごめんなさい！」

後ろの裾をつかまれている俺は今逆向きにア ril に歩かされていることになる。

ぶつかった人に謝りつつ、校内から出て町中を引っ張りまわされる。いい加減に離してくれてもいいだろう。

「ちょ、ア ril さんストップ！」

「……………」

無言。

歩みは止まらない。

「ちょ、おいっ！

ストップ、お願い止まって！」

裾を掴んだ手をぱしぱし叩いてア ril にメッセージを送った。

「……あ。

そうですね、ごめんなさい」

我に返ったのかア ril はようやく裾を離してくれた。

しわしわになった裾をひっぱりながら自分より頭一つ下にあるア ril の顔を眺める。

頬は熱で上気して薄いピンクで、太陽光を返す金髪がまぶしい。流石ロシアらへんの血筋だ。

いいじゃない。

俺達黄色人種とは異なった、白人の血だ。

「は、恥ずかしいですよ波音君。
どんだけ眺めるんですか？」

あっ、そうか。

俺眺めてるんだった。

笑ってごまかすんだ、俺！

「あは、あはは……。

ごめんなさい。

えっと……？

俺はア ril さんの家に行けば？」

違うだろ、永久波音？

今こそシエラにすらスルーされたギャグを使うときだ。

「行かんといかんのか？」

「……………」

ア ril は無言で首を縦にふった。
肯定の意味でいいんだろ？

「行かんといかんのか？」

「……………」

反応がない。

「……寒い」

がーん。

頭を鈍器で殴られた気分だ。

「じゃ、じゃあ行きますか」

泣いてねーよ。

これは目から汗が出てるだけだ。

「あら、波音ちゃんじゃない！！
よかったわあー！！」

ア ril 家の階段エレベーターを使ってあの長い道のりを登り
門の中に入るとマダムが頭にタオルを巻いたまま出てきた。
おそらく風呂にでも入ってあがりたてなんだろう。
ちなみにマダムの服はちゃんとしていたぞ。

「生きていたのねえ？
めでたいわあ……」

マダムはつつと近寄ってきて

「本当によかった……！！」

そういつてぎゅっと俺を抱きしめた。

「ちょ、大丈夫でしたよ。

マダム落ち着いてください」

顔に一気に血が上って赤くなった。

うっひい。

三十路とはとても思えんボリュームが当たっててうははは。
ごほん。

「お母様、私の彼氏です!」

ア ril がマダムの腕を引っ張って俺から引き剥がそうとする。

「分かってるわよお。

取りはしないわあ?

よかったわね、ア ril 。

波音ちゃんがいきっているってのがわかって」

マダムはちらりと笑みを含みア ril を見た。

「このこったら。

波音ちゃんが行っちゃって……。

二日ぐらい丸々泣いていたのよ?

私も流石に気が気じゃなかったわあ」

思い出したようにくすくすと上品に笑うマダム。

ア ril は顔を真っ赤にして

「お母様!?

恥ずかしいんであまり言わないでくださいよ!」

マダムの腕を軽く叩いた。

「いえ、大丈夫です。
続けてください」

いやあこういうの聞くの楽しいなあ。

俺のS心が少し動いちゃったよ。

「波音君!？」

ア ril は「信じられないです……」とつぶやいて庭の隅の方でうずくまった。

地面を指で擦ってすねているようにも見える。

「うふふっ。

まるで昔の私と夫みたい。

なつかしいわあ。

詳しくは中で話すわね?

暑いしささ中へどうぞ」

マダムは目を細めた。

「と、とりあえず離してください」

俺はだんだん息がつまってきて……。げほ。

「あら。

「ごめんなさいね」

マダムははっとしたように俺を解放してくれた。
ああ、空気がおかしい。

「もー！

お母様！！

私の彼氏なんですよ！！」

アリルは隅っこから戻ってきてまたマダムに怒り出した。
怒るといっても、じゃれあうみたいな感覚だぞ。

「はいはい、分かってるわよ」

仲良いなあ。

家に入れもらいつつ後ろから見ていてそう思った。
母さん——ね。

もう顔もあまり思い出せないな。

親父ももう思い出せない。

アリル家の廊下が少し眩んで見えた。

高貴なつくりになっている家。

これもアリルの父が……。

「おー、我が息子！

来ていたのか！？」

ぞわっと自分の中の何かが目を覚ました気がした。

得体の知れない怒りが胸の奥の火山から噴火しそうだ。

よくも——。

よくも俺に話しかけることが出来るものだ。

俺の両親を殺し……。

シンファクシの両親。

おっさんの妻、つまり詩乃の母ちゃん。

ドアから顔だけを出す形でアリの父は当然俺の内面の熱を知ることもなく俺を優しい目つき見ていた。

「あ、こんにちわ。

お邪魔しています」

心の中を知られてはならない。

俺は皮一枚下に心の混濁を悟られないようしまいこんだ。

仮にも俺に好意を持って接してくれているのだ。

こちらもういくら恨みがあるとはいえ……。

「いいあいさつだ、我が息子よ。

よしよし。

もうこんな時間だ、昼食食べていくだろう？」

怒りをも上回る嫌な予感がした。

飯……？

あ。

さーっと血の気が引いた。

「よし。

おい、セバスチヨウ！

セバスチヨウはいるか？」

アリル父は大声でセバスチヨウとかいう人を呼び始めた。

「私の名前は谷氏闘志朗です、だんな様」

俺達の後ろからヒゲまで真っ白になったおじいさんが出てきた。
典型的な執事だ。

「至急昼食のメニューに一つ『わたくしめにゅー』追加だ。
客人……というか私の息子だ。
沢山食わせてやりたい」

わ、わたくしめにゅー……。

悪気は……ないんだろう。

悪気は。

多分。

でも……あ、ほら谷氏さんって言われたおじいさんが
俺を哀れみを含んだ目で見てるじゃん。

やっぱり、ア ril 父、あんた食感おかしいんだよ。
なんで誰も止めないんだよ。

「食べるよな？」

ア ril 父のひげ面の満面の笑みがずいと俺に近寄ってきた。
断るわけには——いかないよな。

「あっ……はい。
はい」

「よーし！

先に行って待っていてくれたまへ。

私はこれがもう終わりそうなのでこれが終わってから行く」

ずいぶんと先を歩いていたア ril はようやく父の存在に気がついた

のか

「お父様っ！」

走ってア ril 父に抱きついた。

「おっ、ア ril お帰りっ！」

笑って娘を抱き上げる父。

和む風景だろう普通は。

だけど俺は……嫉ましかった。
なんでだよ。

なんで……。

心が叫んでいた。

t i n u e s .

T h i s
s t o r y
c o n

くだらぬ嫉妬、ねたみ。(後書き)

ありがとうございます。

できたてほかほかをお届けいたしました。

ここまでありがとうございます。

どうかこれからもお付き合いくださいますようお願いいたします。

またそのメニューか。

「ほおら、たくさん食べるんだぞお……?」

ア ril 父が仕事を終わらせて食堂に入ってきた。
なにやら両手一杯に持ってる。

例のメニューの一部だな、間違いなく。

俺終了間際な件について。

「は、はいっ!」

でも素直に返事をするしかない。
情けない。

「ふむ、いただきます……だな」

ア ril 父が食堂の椅子に座って手を合わせてみんなで箸を持った。

「いただきますですっ!」

ここで余談なんだがア ril とかが箸を持って食べているのを見るの
が何か好きになりつつある。

変なフェチだな、俺。

箸フェチ?

箸もちフェチ?

「たあくさんあるからなあ。

いっぱい食べるんだぞ、我が息子よ」

まあ予想通りぎったんぎたんの筋肉料理をお腹の中に
たらふく詰め込む……いや詰め込まれたな。

「も、もう無理っす」

食い始めて二十分ほどでもう俺は音を上げた。
これ以上は無理。

「何を言っているんだ。

ほら、もっと食べろ」

ほっぺたにぐいぐいと押し付けられてくる卵（白身だけ）がすごく
恨めしい。

せめて塩かマヨネーズください。

「いや勘弁してください。

お願いしますから」

次々進めてくるア ril 父の特製メニューを断って
腹を押さえながらごちそうさまをして食堂から離れた。
逃げれてよかった。

「ふむう……」

ア ril 父は困ったような顔をしてもくもくと卵（白身）を頬張って
いる。

「は、波音君大丈夫ですか？」

心配そうに覗き込んでくるア ril に手を上げて大丈夫と諭す。

あまり俺にふれるんじゃないねえっ。

戻してしまうからな。

腹を押さえてよろよろ向かった先が玄関だった。

「もう帰るんですか？」

ここまで俺の後ろを心配そうについてきたア ril さんが
ちよつと泣きそうな顔でそう言ってきた。

「ん……いや。」

どうすっかなあと」

鞆も食堂横に置き忘れたからなあ。

どつちにしろまた中に戻らんといかん。

ア ril ははにかんだ。

「なら、私が勉強を教えてあげますよ！
ね？」

良いアイディアでしょ？」

数学……。

ア ril ……。

くつつけちゃいかん二つな気がしてならんぞ。

「うーむ。

よし分かった。

やる、やります」

ご飯だけ食って帰ったなんて分かったら印象は最悪だろう。
それにまあ俺も俺でな。

いや言わないけどよ。
悟ってくれ。

「良い判断ですっ！

じゃあお母様、私達は勉強してきますよ！」

ア ril が扉の向こうのマダムに聞えるように大声を出した。
ア ril 父の皿にマヨネーズを追加してあげながら

「はいはい、行つてらっしゃい」

ふふっと上品に微笑むマダムは小さく俺にガッツポーズをしていた。
いやがんばらねえから。

何を？

何を俺にガッツしろっていうんだ？

「波音君、行きましょう？」

おそらくア ril はマダムのさっきのしぐさを見ていなかったんだろう。
う。

純粹なまでな眼で俺を上目遣いで見てくるのは心をほじくられる思
いである。

「お、おお」

食堂の入り口においてある机の上から鞆を取ってア ril の後ろをた
どる。

この広い屋敷じゃこの方が居てくださらないと一瞬で迷うという恐
ろしい仕様になっている。

対泥棒用の意味もあるんじゃないか？

ここを知っている人じゃないと間違いなく出れなくなる。

「はい、どうぞ」

五分ぐらい歩いた。

これだけでもうどれだけ広いかわかるだろう。

家の中で五分って普通じゃありえない広さだぞ。

それだけ歩いてようやくア Ril さんの部屋に着くんだからもうやばい。

「お、おじゃまします」

遠慮しながら入ったは良いものの、なんら変わらぬア Ril の部屋だった。

唯一つ違うのは街の……。

——なんでもない。

「じゃあまづは理科からですね」

地獄タイムの始まりの鐘がなったのを俺は確実に感じ取った。

「ただいまーがふ」

俺は家に倒れこんだ。
疲れきっていた。

「おかえりーってどうしたのさ？」

メイナがエプロンで手を拭きながら迎えに来てくれた。
ご飯を作っていたんだろう。
それかもう出来上がっているか。

「つかれただけだぁ」

ふーとって鼻から息をはいてピクピク震える右手を押さえた。
邪気眼じゃないぞ。

これ痙攣しているだけだからな。
というのもア Ril さんのすごい授業はもう筆舌に表しがたいのだ。
まさか化学記号を全部暗記させられるとは思ってもみなかった。
別に覚えなくてもいいーじゃん、俺二年生になったら文系行く予定だし。

半分投げながらもア Ril の必死に教えてくれる顔を見てるとがんばらなって気持ちにはなった。

またまた余談なんだけどさ。

いつもはポニーの人があるきっかけで髪を下ろしたりするとドキッと来ない？

あるあるだろ？

俺はドキッとする派だったよ。

じりりと携帯がなった。

寝転んだままポケットから携帯を取り出して耳に当てる。

「はい？」

『波音か？』

私だ、ちょっと頼みたいことがある』

独特なハスキーボイス。
間違いなくおっさんだ。

「おっさん!?!
どこなのさ?」

『結構近くに居るぞ。
ある山のとっぺんに乗っている家を知っているよな?
あの大豪邸だ。
そう波音の彼女の家だ。
ちよつと忍び込んでメモリーチップをかつさらってきて欲しい』

いきなり仕事の話かよ。
しかもお前、たったさつきまでお世話になっていた家に……。
そんなことできるわけねーだろ、普通は。

「嫌って言ったら?」

『そうだなあ。
まあ、嫌って言うわけないだろうからあえて何も言わないけどな。
玄関を見てくれれば分かるだろ?
午前二時になったらその車に乗り込んでくれ。
以上だ』

拒否権はなし……か。
そんなことよか情報が足りなさ過ぎる。

「ちよつ、メモリーチップはどこにあるんだよ?
超光学記憶媒体は?」

『俺のビルから奴らが盗んだ奴だ。

発信機がついている、それを感知する装置も一緒に入れといた。
じゃあ頼んだぞ。

逆探知されるからな』

まあなんとかなるかな。

「はいはいさ」

俺は携帯のボタンを押した。

ブッ、プープー。

ボタンと閉じてもう一回ポケットに入れる。

「つたくよお」

玄関のマットが気持ちいい。

ゴロゴロしながら文句を言いたい。

「誰だった?」

セズクが両手にたくさんピーマンの肉詰めを持って立っていた。

普通においしそうだから困る。

ん、いい臭い。

「ん、今夜仕事だってさ」

くんくんと鼻を動かしながら俺はセズクに話した。

「へえ、そうなのかい? まあ僕も今夜帝国郡本部にちよつと行く用事が出来たんだ。

残念だけど波音、今夜は熱い時間を……」

ごほん。

そんな熱い時間を過ごした記憶はないぞ。

第一俺は夜はお前とは別室だろうが。

ばかちん。

「変なことは言わなくていいぞ。

飯にしようぜ」

あんだけたくさん食ったのにまた腹減ってきた。

卵は消化が早かったりとかするのだろうか。

「ああ何て冷たいんだろう。

でもそんな波音も素敵だなあ♪

クスクス、照れているのかな？」

笑うセズクを置いて台所まで歩いた。

食って寝て風呂入って用意。

誰が得するのかわからん入浴描写は省略するぞ。

今日ア ril に教えてもらったところをもう一回見直しておく。

全部化学記号を覚えていることが分かったらゲームをつけた。

ぼけーっとやっているうちにあつという間の午前二時。

俺は家の前に止まっている黒い車に乗り込んだ。

運転手も誰も居ない。

俺が運転しろということだろう。

『よお。

乗ったか?』

カーナビにおっさんの姿が映り車内のスピーカーから声が出た。
明らかに俺があっちからは見えているのだろう。
おっさんは俺だけを見ている。

「おっさん？」

色々聞こうとする俺を手で押し止め

『今からこの車でアイル家へ向かうんだ。
後ろのトランクを開けてみな？』

俺の後ろをおっさんは指した。

「ん？」

俺は車内から出てトランクを開けてみた。
一つの得たいの知れない金属で出来た鞆が入っている。
それを持って車の中に戻った。

「これが？」

カメラがどこにあるのかは分からないが
液晶に映っているおっさんに見せ付けるように鞆をぐりぐりつと押し付けた。

『その中には金庫を自動で開けてくれるやつとか。
はりがねとか色々入っている。
もちろん銃もな。
受信機も入っているはずだ』

それが全部この中に……？

ほえーすげえ科学の進歩だな。

帝国郡のトラックもすごかったが、これもすごいな。そんだけあれば十分だ。

はじめるとするか。

『よし、じゃあ頼んだぞ。』

うまくいったら何か買ってやる』

ほう。

アイスか何かおごってもらおうとしよう。

「今の話忘れんといてや。

財布握って待っててくれ」

かつこよさげな台詞を言ってみたかった。

ただそれだけで最近プレイしたゲームから引用してみた。

『はいはい』

おっさんは呆れたように笑うと液晶から消えた。

変わりにカーナビが起動した。

俺は運転席に座って車を動かした。

「静かだなあ」

エンジン音がゼロで本当に静かなのだ。

こんな車があるなんて知らなかった。

それに黒塗り、完璧に闇に溶け込む目的で作られたとしか思えない。まあヘッドライトつけているから意味ないんだけどな。

復旧が進んできた道は帰ってきた直前と比べてがたがたが少なくなっているように思う。

脇に車を寄せて車の後ろにたたんで置いてあった服に着替えてみた。

「よっし……」

真っ黒な服だ、俺もしかして今かっこいい？

カッターシャツを黒くしてみただけの奴に見えるが感謝だ。

これもらっておこう。

帽子はいらんだろ。

邪魔だしな。

T h i s s t o r y c o n t

i n u e s .

またそのメニューか。(後書き)

出来立てをお届けいたしました。

よろしかったらめしあがってくださいまし。

まだほかほかでございますよ。

ではありがとうございました。

狂気の正気

「おっさんのビルから盗まれた奴か……」

ア ril 家の前に止めた黒い車のトランクから鞆を引っ張り出して手に持った。

まずは門の警報装置をくぐりぬけなきゃな。

っていつてもカメラを出さなきゃいい話だから楽。

インターホンを押さなきゃいいんだろ、確か。

白い手袋をばっけから取り出して両手につけて口で引っ張りにぎにぎした。

エレベーターには何の仕掛けもないことが分かってるから登りはそれで行くことにする。

深夜二時半、俺は真っ暗中、真っ黒な服で彼女の家に忍び込もうとしていた。

事情を知らないただの骨の髄までド変態である。

っと、携帯の電源は切っておかないと。

マナーモードでも鳴られたら困る。

よし。

エレベーターに乗ってとりあえず門までたどり着いたど。

階段を上がらなくていいから楽だなあ。

この仕組みを知らない人はここだけで体力の半分を根こそぎ持っていられるぞ。

この家は小さな山の中に建っているんだ。

だから昇る途中で何か得体の知れない生物を見た気がする。

犬っぽい何かを。

それは襲ってはこなかったけど……。

ぞくりとした何かが体を巡ったのは分かった。

夜闇に月が今夜は明るい。

その明るさがシンファクシの言葉を思い出させた。

——今はおっさんの任務に集中しろ、バカ波音！

頭を叩いて門に近づいた。

鍵穴なんて洒落たものがあるわけがない。

昼間の間にぱちっていたカードを通すだけだ。

悪く思わんでくださいよ、あのア ril 父の執事さん。

名前なんだっけなあ。

カードキーの氏名欄を見た。

ああ思い出した、谷氏闘志朗さんだ。

ごめんなさいね。

カードキーを通すと小さく門が静かに開いた。

左右を見回し警戒装置が作動していないのを確認して中に入る。

誰にも見られないように頭を低くして小走りで玄関に近づいた。

玄関に行く途中でどの部屋に明かりがついているのかだけ見ておいた。

真っ暗な部屋しかないから流石にこんな時間にまで起きている奴なんておらんやろ。

玄関の鍵を開けるためにカードキーを差し込んだ。

だが機械はそれを小さな拒否と共につつぱねた。

「ちっ……」

小さく舌打ちしてトランクから折りたたまれた丸い道具を取り出した。

玄関から少し歩いて一つ隣の部屋の窓の下に陣取った。

持参した懐中電灯で中を照らして中に誰もいないことを確認する。

「この音嫌なんだよなあ……」

丸い道具をガラスに押し付け力を入れて回した。

いわゆるガラスカッターみたいなやつだ。

消音ゴムを下に引いてから普通は使う。

それでも少しはあの身の毛がよだつような音が髪を逆なでした。

ガラスカッターの刃が一周して元の位置に戻るとくいつと軽く引く張った。

この消音ゴムは吸盤になっているからガラスがその部分だけ外れて穴が出来る。

底から穴に手を入れて鍵を開けた。

「――でよお」

手を止めた。

「分かるわ。

あるある」

――！

見回りか？

見られたらまずいよな。

隠れる場所――ここしかないか。

ささっとそばの植木に隠れた。

月が明るいおかげで銃を持った二人の兵士が談笑しながら見回っているのがはっきり見えた。

今夜は盗みに向かないなあ。

明るすぎる。

俺の前を通っても兵士は俺に気がつかなかった。

そのままトークを続けながら兵士は建物の角を曲がって消えた。

「ふー……」

緊張した。

服のしわまではっきり見えるところまで来ていたからな。もう一度作業を再開する。

鍵を開けた窓をゆっくりと開いて、先に靴を投げ入れた。

また回りを見回して誰も見ていないことを確認して中に入った。

カーテンを閉めて足音を立てずにドアの隙間から廊下を伺う。

真っ暗な廊下にぽつぽつと豪華なライトが光のスポットを作っているだけだった。

隙間を閉じて鍵をかけた部屋の中にいるうちにトランクのロックを外した。

スポンジのようなものに包まれた掌サイズの受信機を取り出して電源を入れる。

『FOZUKI』の文字が浮かび上がり

『受信を開始します』とメッセージが表示された。

緑の液晶に白い点が点滅していた。

そこにア ril 家の見取り図をデータ投影する。

液晶板の端を触ってぐるりと立体で眺めてみた。

一階の端っここかあ。

何の部屋なのだろうか。

記憶を思い出すがあいにくこの家には二回ぐらいしか来たことないから分らん。

一階にあるだけマシというものだった。

二階とか三階まで行くとこの迷宮の攻略が更に困難になるところだった。

とにかく行ってみるっきゃないな。

靴を脱いでゴム靴にはきかえる。

足音を消してくれるこの靴は結構暖かくて冬には嬉しい、夏はうざい。

白い手袋の端を噛んでもう一度上まで引っ張りあげた。

鍵を外してドアから出た。

麻醉銃を持って来るべきだと考えつつも警戒しながら先に進む。
実弾の入った銃は持ってきたが正直使いたくない。

中にも見張りの兵士がいるのかと思ったがそんなことはなかった。
外だけだったなあ。

広い中廊下を液晶を見ながら歩き回って案外簡単に例の部屋にたどり着いた。

例の部屋の扉は他の木造とは違い金属で出来ていた。

電子ロックになっていて他とは違う雰囲気を感じている。

解除は面倒そうだが何ともならないものでもない。

やっぱり仁も連れて来るんだった。

隣のドアが開いて寝巻き姿のマダムが姿を現したのはそんなときだった。

まずい、こっちに来る。

条件反射のようなスピードで右腕を上に向け、左手でベルトをつまんで小さなでっぱりを押した。

小さな鉤爪が先についたワイヤーが右腕の袖から天井に射出され食い込む。

続いて俺の体が引っ張り上げられて、マダムが俺の姿を見る前に天井にへばりつくことが出来た。

俺の下を気がつかずに通るマダム。

廊下の角を曲がって見えなくなったが

また戻ってくる恐れがあるので近くの部屋に一時避難することにした。

ワイヤーを回収して天井にへばりついた鉤爪を引っこ抜いて静かにそばの部屋のドアノブを捻った。

キーンと音が出て冷や汗が出たものの誰も来なくて良かった。

この部屋で少し時間を潰そう。

これが間違っていた。

俺は本当に大バカものだったのだ。

その部屋に入った瞬間に自分のバカさ加減を呪った。

小さく灯された豆電球。

そのオレンジ色の光に映し出された部屋は俺が昼間に猛特訓を受けていた部屋。

ベットの上ですうすうと小さな寝息をたてているのはこの部屋のボス。

そうここは彼女のテリトリー。

ザ・ワールド。

「彼女を殺すんだ」

あまりにもはっきりしすぎた声だった。

腰のホルスターから拳銃を取り出して後ろに銃口を向けた。

誰も居ない。

幻聴か何かか？

緊張が生み出す何者かの声――？

シンファクシに頼まれたあの任務。

くそっ、またこの任務の影かよ。

……もしかして今が一番絶好調のタイミングじゃないか？

俺はアリの寝顔を眺めつつ考えた。

もしメモリーチップが消えたのが分かったらこの屋敷の警戒は更に嚴重な物となるだろう。

そうなると彼女を殺すのは事実上不可能となる。

メモリーチップなら連合郡にでもまた忍び込めばいい。

それは最終兵器二人の力押しで何とかなるしな。

だけど彼女は違う。

アリルがもぞもぞ動いたびにびくびくしながら考えた。

彼女は他人の手で消したくはない。

なんといっても俺の彼女なんだから。

なら俺が――やるしかない。

俺の苦しみを――。

知らずに笑ってられるア ril 父から笑いを拭い去るためにも。そしてそのターゲットが今日の前で無防備に寝ているのだ。

俺は自分の中の蛇が目を覚まして冷静を食っているのを感じた。

正気を失っていた。

正気が消え、代わりに狂気がまわりついてくる。

重くべたつく狂気は俺の意志とは反して行動を起こしていた。

震える手で腰から拳銃を取り出してサプレッサーを銃口に取り付けて遊底を引く。

カチツと小さな音がして確かに初弾が装填されたのを教えてくれた。安全装置を解除して銃口をア ril へ向ける。

心臓を狙うのが一番だろう。

自家発電によりクーラーが存分に使えるおかげかやたら薄い服で寝ているア ril を前にそう思った。

寝息と連動して上下する生々しい膨らみに、垂直になるように弾を撃ち込むことにしよう。

刃を噛み締め引き金に指をかけた。

表面上ではパニックになっているのに内面では驚くほど冷静だった。

「んー……」

ア ril がもぞりと寝返りをうった。

豆電球のオレンジの光りに浮かび上がる姿が、エロい。

というかこれほとんど下着姿じゃねーか？

急速に殺意が萎えた。

狂気が消えたがまだ拳銃は俺の手の中にあった。

あわてて安全装置をかけてホルスターにしまいなおした。

俺は今何をしようとしていた？

彼女を殺そうとしていなかったか？

俺は——俺は——。

くそっ。

頭を冷やせ。

別のことを考えるんだ、永久波音。

そういえばまだ俺は彼女とキスすらしていないなあ。

なぜか知らんが毎回誰かに邪魔をされるのだ。

何者かの悪意が働いているとしか思えない。

あー駄目だ。

エロ過ぎるだろ。

汗で張り付いてるんだぞだって。

うん、ごめんね、なんか。

にしてもえっちなあ。

いかん、別の本能の蛇が目覚ましそうだ。

邪念だ、邪念、どっかいけ。

狂気は消えたが今度は邪念がっ。

高鳴る鼓動を押さえつけてポケットから取り出した受信機に目を無

理やり動かした。

マダムはもう行っただろう。

こっそりとドアを開けて出ようとしたとき後ろにぐいと引っ張ら

れた。

「……波音君？」

体がびくくううってなった。

目を擦りながらアシルが俺の服の裾を掴んでいたのだった。

いやおま、タイミングよすぎ笑ってしまったよ。

殴って気絶させるのも大人気ない気がするしな。

てかポニーじゃないアシルさんも素敵すぎるんだが。

さっきも言ってたよな？

いつもとは違う髪形の女の子ってなんか可愛いつて。

さて今はそんなことをいっている場合じゃないっていう。

「波音君ですよね？」

なんでこの人毎回すごい
の？
バリ三なの？

t
i
n
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n

狂気の正気（後書き）

ありがとうございました。

さてさてここからどんどん波音はどくなっていくのか。

→

日本語おかしいなあ。

また来週にお会いしましょう。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

失いたくない

「いや、あの……」

口の中がからからに乾いて混乱した。
バリ三人間ア ril だな、この人は。

「どうして……ここに？」

もにゃもにゃと寝起きであろうともア ril さんは確かに俺を感知していた。

普通の人ならばれないだろ……ってレベルなのに。
なんてお方だこの人は。

抵抗しても俺とばれてるみたいだし……。

「OK、分かったよ」

両手を挙げて降参の意を示した。

「いい判断です」

ずるりとア ril の手から服の裾が離れる。
負けた……。

「それっ……て……」

ア ril は俺の腰辺りを指差していた。

「ん？」

俺が振り返ったときにちらと銃が見えたのだろう。

ア ril はすっかり怯えきっていた。

この銃は邪念の元だからな。

もう少しで俺は彼女を撃つところだったわけだし。

「こ、これはだな、そのだな。

護身用であってだな」

「……………何です？」

うまく言い訳をさせてくれないのもこのお方の特徴だった。

なんというか、目が違うのだ。

フィルターで嘘をこそぎ落とし、真実を手に入れることがとても上手であって…………。

何より、嘘とつくともとても悲しそうな目をするのだ。

あざらしとでも言えればいいのか？

一生懸命に作った弁当が捨てられていた、そんなレベルの悲しい目。しかも無言でそれをする。

…………勝てないだろ？

違うか、男性諸君。

「どうして、ここに？」

私を殺しに…………来たんですか？」

裾を引っ張りながらも目を逸らす。

ア ril の目からは明らかな強い軽蔑の色が現れていたからだ。

まともな神経していたらこんなの真正面から見れない。

そりゃサプレッサーをつけた銃を持って、自分の部屋に人がいたら
そう思うわな。

その思考回路は正しいといえた。
今は憎むけどな。

「違う、違うんだよ」

首を振って否定するも駄目どころ。
全然聞く気がないんだもんなあ。

「……………」

ちなみにひそひそ声だぞ、この間も。
でないとばれちまうけんな。

「何が違うって言うんです？」

さっきだって私に銃を向けていたじゃないですか？」

頭を鈍器で殴られたような衝撃がした。

がーんじゃないくごいーんって感じではあったが。

鈍器というか魔法瓶？

「おま…………え？」

起きてたの？」

じゃああのせくすいぽーずは必然？

いや、自発的？

自発の助動詞はる、らる、でよかったかな。

古典の話ですよ。

ってバカなことて鼻の下を伸ばしてないで……。

「当然です。」

私は眠りが浅いのでドアが少しなるぐらいで目を覚まします」

うぐっ……。

言葉につまるじゃないか。

「……そうか」

見られてしまったのか……。

脱力した俺はため息をついて、床に座り込んだ。
そのまま腰から外した銃をアリルに渡した。

「えっ、これ……」

驚くアリルに俺は優しく話しかける。

「――持っていてくれないか？」

俺は……そいつがあると駄目なんだよ」

驚くアリルに俺は少し微笑んだ。

駄目なんだよ。

邪念というか、自分の憎しみを見てしまったから。

「何が……あつたんですか？」

話したら嫌われるよな……。

「……月が、明るいな」

「はぐらかさないでください」

この人やっぱり鋭すぎて涙出るわ。

ここまで自分の意図がばれだどやるせない気持ちになる。

「……………」

黙りこくって受信機を一瞬だけ見た。

白は変わらず同じ場所で点滅している。

俺から銃を受け取ったアリルはベットから降りた。

そのまま机に向かって歩き何かごそごそしはじめた。

薄暗かったが部屋内に豆電球以上の明かりが灯った。

ことりと机の上に重たいもの——銃を置く音も聞える。

「波音君……どうしたんですか？」

その一連の作業の後、アリルは俺の顔を覗きこんできた。

話すしか……ないよな。

「——言ってもいいのか？」

お主は俺を絶対に軽蔑することになるぞ？」

ゆっくりと後悔するかもしれないという事だけは伝えておく。

ちなみにお主ってのはお前って意味だ。

お前って人から言われたらなんかイラッって来ないか？

それを防ぐために俺が勝手にお前の代わりに使っている言葉だ。

前もメールで使ってた。

「……言ってください」

アリルの決意を感じた。

「聞いても俺を嫌いにならないで……ほしい」

もう一度、確かめる。

いいんだな？

「なりませんよ。

何言ってるんですか？」

安心した。

普通に俺は話した。

前回電話で言ったこととかは省いたがシンファクシの任務。

鬼灯のおっさんのビルのこと……なんか全部。

簡単に簡潔に。

頭痛が痛いだなこれ。

「……ってわけ。

俺はへたれだから殺せるわけがないんだ。

これからも殺すことなんて出来るわけがない」

話し終わった。

これだけで十分は話していた。

喉が痛い。

「私の父がそんなことを……。

波音君、ごめんなさい」

ア ril は俺に頭を下げて謝ってきた。

でも正直ア ril に謝られたところでどうしようもない。

「いや、もうどうしようもないことだしさ。

謝られても、俺どうしたらいいのか……」

ア ril は頭を上げて机の上の銃を手を取った。
しばらくそれを胸に抱き何かを考えるように目をつぶっていた。
俺は話しかけることが出来ずにそれを眺める。
やがてア ril は俺に銃を差し出した。

「何……？」

ろくな反応が出来ずに俺は聞き返した。

「これで私を撃ってください」

今度は魔法瓶以上のレベルで殴られた。
大型タンカーぐらい。

「はぁ!？」

「うるさいですよ」

俺の口を抑えたア ril はその銃口を眺めた。
俺は今、お主を絶対に殺さないって言ったばかりじゃないか？
信じられんと呟いた俺の言葉を否定するように

「私の父がした罪は……私の罪でもあります。

私の彼氏の波音君の両親を奪ったのが私の父ならば……。

私はこの身をもって謝罪したいです。

ごめんなさい、と。

私の父が帝国郡を売って、そのときに四万人が少なくとも死亡したそうです。

直接ではないですが盗み聞きしてしまいました。

……私は生まれながらにして血に浸かった殺人者の娘。
薄々は気がついていました。

私の家は元ベルカ守護四族の一つ。

それがどうして連合郡にいられるのか……。

——分かっていました。

でも認めたくなかったんです」

ア ril はそう言って固まる俺の手に銃を握らせた。

俺が来たことによってそのことが確信に変わってしまったのだ。

「……………っ！」

俺の手が懺悔の思いで震えている。

こうなることを自ら望んでいたわけじゃない。

だがこれはシンファクシの任務の……絶好の機会。

まだそう考えることが出来ることが自分でも不思議で仕方がなかった。

「さあ、撃ってください」

ア ril は自ら銃口を胸に押し付けた。

確かな軟らかい肉の感触が銃の冷たい固い金属を通して手に伝わる。

俺は気がついた。

かすかに銃も震えていることが。

ア ril は無理をしている……。

ここで俺が引き金を引くと即、死に至る恐怖に打ち勝てずに震えているのだ。

怖いのだ。

「――バカだな」

それは違う、と否定させてもらおう。

俺は撃たない。

俺の手から力が抜け銃を床に落とした。

ごとん、と床に銃が落ちる大きな音がしたが気にもならなかった。

「俺はこれ以上失いたくないって言ったべ？」

だからこんなもの今は必要ないんだ」

立ち上がってアリの肩を掴んだ。

「これ以上なぜ俺が失わなきゃならない？」

また小学生のときのような気持ちはまっぴらごめんだ。

金平ゴボウと同じぐらいにな」

静かな沈黙が訪れた。

「でも……それじゃ波音君は満足しないんじゃないですか？」

ためらい、言葉につまりながらもアリルは俺を上目遣いで見てきた。
その姿勢は反則だろう。

「満足する、満足しないとかじゃないんだよなあ。

人間として失っちゃいけないものがあるんだ。

それを失いたくないだけ。

ましてやこんなバカな俺をここまで好いてくれる奴ならなおさら
失いたくないね」

これは今の空気なら言えるっ、と思って言っただけで。

家に帰ったらぐおおおっていいながら部屋を転げまわるんだろうな。

「は、波音君……」

この空気っ！

絶好の俺の初キスチャンス！

初めの草食系の空気なんざしらねえ！

俺は俺のままに生きるっ！

——落ち着くんだ。

素数を数えろ、一、四、八、よし。

落ち着いてるな。

「ありがとうございます、波音君——」

軍曹、行きます。

俺は男になります。

唇が、俺の唇がアリの唇と重なるっ——！

わけはなかった。

次の瞬間に邪魔が入ることなんて全然考えてなかった。

あの銃のゴトンという音で多分気がつかれたのだろうと思う。

それか窓に穴が開いているのが見つけられたか。
いずれにせよバタバタと足音がして扉が大きく開いた。
それは事実だ。

「お嬢様、大丈夫ですか!？」

電気が薄明かりのかかっている部屋をかき消すように一気につけられると

三人ほどの兵士が瞬間的にア rilルを掴み、扉から脱出させた。

「は、放してくださいっ!」

俺の手はあっというまにア rilルから離れ、いい感じの空気はぶち壊し。

「このコソ泥がっ!!」

距離から考えて四メートルもないところから兵士の持っていた銃が火を吹いた。

銃口が向けられるという条件に反応して反射的に床に伏せる。

熱い金属が頭の上を通り、ア rilルの部屋の壁を碎いた。

「くそっ!」

俺はア rilルの部屋のガラスを破り外へ飛び出した。

地面にうまいこと着地して、兵士が来る前に走り出す。
顔は見られていないだろう、マッハでマスクつけたし。

「さて、この野郎!」

後ろから怒号が聞え地面が銃弾でえぐれ、粉が飛んだ。

銃で応戦しようにもアリの部屋におきっぱなしだなあ。

一番まずい状態になっちゃったな。

……絶対に月が明るいせいだ。

e s.

T h i s s t o r y c o n t i n u

失いたくない（後書き）

波音はア ril を絶好の機会にも関わらず殺しませんでした。
それはシンファクシに。

帝国郡に逆らうという結果になってしまったわけです。
それにおっさんの任務にも失敗。

どうするんでしょうね、彼（他人事

ではここまで読んでいただきありがとうございます。

月明かり夜空

「逃げるぞ、追え！」

絶対に捕まえるんだ!!」

俺は必死で逃げた。

乗ってきた車は……見つからなければいいんだが。

正々堂々と、目の前に止めたから絶対にもう発見されていると思うけど。

木々の隙間を潜ってとにかく少しでも遠くへ逃げないと。

「はぁ、はぁ……」

息切れがして乳酸が筋肉を締め付けている。

酸欠の頭がぐらくらする。

所々から突き出した小枝が服を切って肌を引っかき鋭い痛みを残す。

「探せ！」

A班はそっち、B班はあっちだ！」

かすかに聞える俺をせかす兵士達の声は悪魔の囁きだった。

あの声がある所に行けば俺の人生が終了する。

捕まってたまるかつ！

木々の隙間からこぼれる月明かりのおかげで地面はよく見えた。

本当に今夜は明るいな。

いまいまいかがりだ。

「いたか？」

「いや、こっちじゃない」

前から声が聞えたためすぐそばの木の陰に身を潜めた。
顔を少しだけ出して確認する。

銃を持った兵士が二人セットになってうろついているようだ。
これは全兵力の一部に過ぎないだろう。

敵は全部で軽く四十人はいるはずだ。

全部倒すなんて無理だ、絶望的だ。

最終兵器じゃあるまいし。

「はぁ、はぁ……」

バクバク飛び出しそうな心臓を上から押し付け息を整える。

俺はこれからどうする？

トランクはアリの家だ。

銃もおいてきた、今ここにはあるわけがない。

あのトランクとかを見られるだけで連合郡は一発で俺を永久波音だと特定するだろう。

靴なんかにDNAが付着しているに決まっているから。

鬼灯重工は受信機から戦車まで作っているからそっちはすぐにばれることはないと思うが……。

時間の問題だろう。

月の光が少しゆるくなり空をまた見た。

黒い雲がうつすらと月の顔にかかっていた。

「……………はぁ……………はぁ……………」

少しはこれで俺にも運が向くといいんだがな。

鼻で笑いながら木に背中を預け座り込んだ。

さっきの兵士達はどこかへ行ってしまった。

また走り出す前に少しでもこの動悸を抑えておかないと。

二度大きく深呼吸をして目を閉じる。

ひりひりと痛む腕なんかには大きなみみず腫れがいくつもあるだろう。

任務、失敗か……。

おっさんになんて報告しようかなあ。

とにかく家に帰ろうと手段を考える。

山を降りてバス……あるわけがない。

車は見つかっている。

そこら辺に転がっているチャリはないか……？

「なんだ……？」

がさりと音がしたほうに目を向けた。

そしてあるものを認識して俺は凍りついた。

草むらの中光る二つの光点を見つけてしまったからだ。

犬——というには鋭い目つき。

狼だろうか？

動物は詳しくないからよく分からないが……。

犬とは別の力強さがあった。

アリの家の前、階段でみたあいつだろう、おそらく。

いやあいつだ間違いない。

「……………」

目を逸らしたら襲い掛かってくると聞いた気がする。

ゆっくりと、狼は俺に近づいてきた。

来るならこい。

飛び掛ってきたら、返り討ちにしてくれるっ！

前門の兵士、後門の狼だ。

でもこの諺、というか故事成語使い方が違うよな。

そもそも前門の虎、後門の狼っていうのは板ばさみでやばいっ——
ってことじゃなくて

一つの災難を逃れても、またもう一つの災難が襲ってくることを示唆しているらしい。

つまりこの場合は俺は泣きっ面に蜂と言ったほうがしっくりくる。

それは横の地面にでも置いておく。

そう、狼だ。

狼は鋭い目つきで俺を睨んできた。

「……わん！」

あほらしいけどわんとか言って威嚇してみる。

効果なし。

更に一步一步と距離を詰められる。

食われる——！

覚悟して目をつぶった。

ほっぺたにねちよつとした何かがついた。

「？」

片方はそのねちよつが入らないように片目を開けて確認した。

狼は俺に頭を差し出してきた。

おそろおそろ頭を撫でてみる。

ふわふわだ。

しかも野生にしては毛が綺麗につくろってある。

明らかに人が飼っているな。

俺に何の躊躇なく頭を差し出てきたのが何よりの証拠だ。

ルファーももう少しかわいかったらなあ。

ボールだろ、あれじゃ。

最近ずっとコップの中にゆんべるくつと寝ているところしか見えないわ。

ため息をつく俺の服を噛んで狼はくいっくいと俺を引っ張ろうとした。

ついてこいつてか。

「どこに行った!？」

まだそう遠くには行っていない筈だぞ？」

俺の服をかんだ狼はぱつと静かに飛び、俺の前に出た。

なるようになりやがれ。

狼についてくことにした。

ばれないように頭を下げて、音もたてないようにゆっくりと。

何分そうして狼の後ろについていっただろうか。

膝が地面と擦れて痛い。

手に感覚がなくなってきた。

残暑があるせいで汗が滴って目に入って痛い。

「なんでこうなるんだよっ——!」

呻きながら手で額をぬぐった。

狼はある建物の前で止まった。

鉄製の壁に木製のドアがやたら印象的だ。

電子ロックの緑と赤の光が交互に壁に光っている。

その建物の影から誰かが出てきた。

狼はその影に電光石火ですりより鼻を鳴らしている。

また雲が切れ始め周りが明るくなり始める。

「遅かったですね。

大丈夫ですか？」

金髪、ぽにて。

「……なんで？」

影から狼の頭を撫でながら現れたのはやっぱりアリルだった。

「ありがと、マルク」

狼にそう話しかけながらもアリルはじっと俺を見た。

「これ……」

そういつて、彼女が足元からよいしょっと重そうに俺にトランクを差し出した。

どこに隠していたんだ。

「……ごめん」

俺は頭を下げた。

「何で謝るんですか？」

トランクを受け取って中を確認する。

受信機から何から何まで入っていた。

俺の脱いだ靴、そして銃も。

集めるの大変だっただろうなあ。

「波音君は……超光学記憶媒体を探しているんですよね？」

驚く俺に「見ちゃいました、それ」とアリルは笑って付け加えた。それというのは、推定では受信機のことだろう。少し液晶が割れているが逃げて落とした時に割れたと見るのが正解だ。

「……ごめん」

「だから何で謝るんですか？
私は大丈夫ですよ？」

「……おめん」

「お祭りですよ、それ？
私ははじめてみたときすごくビックリしました」

「……せめんと」

「コンクリートとの違いが分からないです」

「……あーめん」

「キリスト教ですか？
私は仏教ですよ、名前はアレですが」

「ラーメン」

「もう謝罪の言葉から離れすぎてますね。
あーめんを基準にしてどうするんですか？」

アリルのツツコミを聞き流しつつずっしりした銃をトランクの中に

投げ込んだ。

これは絶対にもう手にしない。

「誰だ！」

は、と後ろをふりむいた。

一人の兵士がこっちに向かってきているのがかすかに見える。
ア ril は俺の耳元にそっと口を近づけると

「私が注意をひきつけるので後ろからお願いします」

俺は小さく「了解」と、建物の影に隠れた。

「お、おじょうさま!？」

どうしてこんなところに!？

一体何をなさっているのですか!

ここは危険です、早く中へ!！」

兵士はア ril だと分かると急に態度を変えて建物を指差した。

「実はマルクが脱走してしまっ……。

それを今見つけ——」

俺は兵士が俺に背を向けた瞬間に兵士に音もなく近づいた。

首後ろにチョップして腹を殴りつける。

「うぐっ……」

兵士は呻いて地面に倒れた。

「かつてえ……」

殴られる方も痛い、殴る方もいたいのだ。
防弾チョッキ着ていたのだろう。

ダメージがあまり通らなかった気がする。

「この服を奪ってください。

超光学記憶媒体のところへは私が案内します」

なるほど、そういうことか。

「でもおぬしが俺に手を貸した……なんてばれたら？」

アリルは暗い表情をした。

「――父は……」。

いえ、私は罪を償いたいだけです。

父の犯した大きな罪を……」

俺は気絶する兵士から服をもぎ取った。

「ちょっと後ろ見ていてくれよな」

パンツ一丁になるからな。

「はい！」

なんでちょっと嬉しそうなんだ？

まあいい。

黒い服を脱いでトランクに放り込んだ。

次に兵士の服を身にまとう。

銃も奪って顔を見られないように帽子を深く被る。

「すごいですねえ。

本物の兵士みたいですよ……」

「ありがとうございます」

アリルは月明かり輝く夜、俺に

「私についてきてください」

「了解だ、お嬢様」

手を貸してくれた。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

月明かり夜空（後書き）

ありがとうございました。

出来立てほかほかでござんす。

さあさめないうちに召し上がってくださいまし。

いたずらをする子供のように

「マルク、ここで待っていてくださいよ？」

「……じゃあ行きましょう」

ア ril は狼の頭を撫でながら言い聞かせていた。

「あ、ちよつと待ってくれ」

トランクを開けて中から取り出した注射器を兵士にぶつ刺す！
睡眠薬を投与して、見つからないように建物の影に隠した。

「えーつと、番号は……」

注射器をトランクの中に戻して兵士服のしわを伸ばした。
ア ril は頭を抑えつつ扉の電子ロックの番号を入力する。
小さくはじけた電子音の後横に開いた扉の中に入った。

「早く来てくださいよ？」

「ほいほい」

俺はトランクを持ち上げた。

月の顔が雲に汚されていく。

暗くなった森の中を眺め警戒の目を光らせながら中に入った。
通路をぐんぐん進むア ril に対して俺はそろそろと進む。

「そんなに警戒しなくてもこの防犯装置は全部私が切ってますよ？」

きよろきよろしなくて大丈夫です」

アリルがおかしそうに体を揺らした。
笑ってやがる！

「ないならはじめっからないって言ってくれよ……。
かなり神経を削るんだぜ？」

ないと分かったとたんにぼろつと愚痴がこぼれた。

「少しはスリルがないと楽しくないでしょう？」

もっとも……。だな。

「そうだな……。
すまんかった」

「アリル！？

どおこに行ってたのよお！！」

あの建物から入って十分ほど歩いた。

最後のひとつのごつつい豪華な扉を開くと廊下にてマダムが心配のあまり顔を青くして

寝巻き姿でむんすと腕を組んで立っていた。

その横にいる筋肉をぴくぴくさせている男はアリル父だ。

謎の動きだな、筋ぴく。

尊敬する動き、男の浪漫だ、筋ぴく。

「異常はなかったか？」

ア ril 父はゆったりとした寝巻き姿でア ril の無事を喜んでいようだった。

俺を見ながらそういつてきたが念のため俺は後ろを振り返った。

「お前だ、お前」

誰もいない。

俺か。

「はっ、異常はありませんでした！」

連合郡式の敬礼をして報告を返した。

「そうか……。」

賊め、どこに隠れた……？」

唸りながら腕を組むア ril 父は目を細めた。

そばにある椅子を引っ張り出してその上に座り足を組む。

「ん？」

と、ア ril 父は俺の持っているトランクに目をつけたようだった。

「おい、それは何だ？」

人差し指で指していくいくと曲げる。

渡せと、催促しているのだ。
ちょっとやばいかもしれない。

「中を見せてみる」

「はっ……！」

つとと——！

俺はトランクを持ち上げた。

そのとき、危なく落としそうなフリをして側面の小さなスイッチを押す。

「はっ、これは連合郡本部より届いたワインであります」

「えっ……？」

小さく息を吞んだア rilルの方は向かないようにして
ア rilル父の前でロックを外して中を開けて見せた。
中央にどんと鎮座するワイン。
このトランク、二重底になっているのだ、実は。

「おおお……」

ア rilル父は声を漏らした。

ワイングラスが二つそのワインの脇に添えられている。

そのグラスもまた小細工が施された高級な品物。

それにこのワインも本物のブランド品なのだ。

一本軽く五十万はするらしい。

俺はあまりワインのことを知らないから何とも言えないのだが。

「よし、行っているぞ」

ア ril 父は今俺が入ってきたばかりの扉を指差した。
もう一度外に出て警備をしてこいと言っているのだ。

「はっ、了解であります」

俺はトランクの蓋を閉めて床に置き敬礼した。

ア ril 父もそれに対して敬礼を返してくる。

このままもう一度外に出るしかないよな。

上に行ったらばれるだろうし……。

このワインを食堂に届けるといった使命をでっちあげてみるか？

とにかく怪しまれないうちに退散して方法を考えよう。

俺がくると右ならえをして転換した。

と、つんつんと肩を叩かれた。

「？」

振り向いた俺のすぐ横に立つア ril 父。

びっくりした。

「ワインを置いてくるついでにア ril の警備も頼む。

もしまた賊がア ril を狙ってくるようなら生死は問わない。

——殺せ」

俺にだけ聞えるように小さく最後の言葉は付け足された。

「はっ……！」

ではお嬢様、参りましょう」

それにぞつとしたようなものを感じながらも俺はトランクを持ち上げてもう一度敬礼を返した。

「はい。」

「おやすみなさい、お父様、お母様」

アリルはわざとらしく欠伸をして俺についてくるように手で引っ張った。

「では、失礼します！」

「頼んだぞ」

アリルの後ろを警備するように銃を持つ。

二人一緒に歩いて廊下の角を曲がったところで

「ばれるんじゃないかとドキドキしました。」

「もう手が汗びっしょりです」

「あー、俺も結構びびったわ。」

「結構怖かった」

アリルと俺は会話を再会した。

さっきまで乾いていた額の汗をぬぐう。

トランクも持ってきたし、うまいこといった。

アリルは天井を見て

「ここは地下です。」

「一つ上に上がりましょう」

地下なんてあったのか……。

「地下って……。」

それになんでこんな壁が金属製なんだ？」

ア ril は「いい質問ですよ！」と言って

「核攻撃にも耐えられるような仕組みになっているんです。
放射能にも対抗できるように鉛も含まれています。」

このもう一つ下に行けば食糧を生産するフロアもあるんですよ」

アーコロジ ー っ て わ け か 。

さすが、連合郡幹部のお家だな。

「さあ、上に行きましょう。」

もう兵士はいないと思います。

さっとやっちゃってくださいね？」

いたずらをする子供のような純粹な顔をしてア ril はそう述べた。

「了解だ。」

お嬢様の頼みとあらば」

滑らかな階段を上って分厚い四重の扉を押し開けた。

暗闇の廊下。

「えーっと、たしかここに……」

何かがはじけるような音がしてぼんやりとした明かりがついた。

「夜はこれが最大なんです。
父はあまり目がよくなって……」

同じくぼんやりと映るア ril がえへへと笑う。
目が悪いようには見えなかったが。
しばらく二人とも黙って歩いた。

「さ、つきましたよ」

ア ril は嚴重そうな扉の前で止まった。
案内所に行きそうだな。

トランクのボタンをもう一度押して、ワインをひっこめた。
その下から蛸のような機械を取り出す。

これを金庫のくるくる回すところにかぶせた。

上からぐいっと何度か押して、しっかり張り付いているのを確認してスイッチ ON。

静かに蛸の頭が回転しだした。

後はいいつに任せればいい。

次は電子ロックだ。

ドライバーをトランクから取り出してネジを外した。

金属のカバーを横にずらして中を覗く。

「これか……？」

配線のカバーを爪でむしりとった。

むき出しになった銅の部分にクリップをつける。

クリップの先はトランクの超小型ハッキング PC に繋がっている。

コードを差し込んで PC を起動。

PC が電子ロックの解析を始める。

こんなもんかな……。

「な、何かすごいですね……」

「ん？」

「そうか？」

俺よりも仁の方がすごいで、PCは。

「すごい……です」

蛸の動きが止まった。

PCの液晶に二十桁の数字が全て浮かび止まっている。
ガコンと、重たい音がしてロックが外れた。

「よっし、開いた。」

「ア ril、ここで待っててくれ」

俺は機器をトランクの中に詰め込みながら金庫の中を覗いた。
真っ暗で何も見えない。

「私はこの先の防犯装置を知りません。
気をつけてください」

少し心配そうな顔が可愛い。

「おう。」

「ありがとうな」

金庫の中に入った。
自動で電気がつく。

「せまっ！」

思わず避けんだ。

縦横、二メートルぐらいの大きさしかない。

人が二人は入れるかどうかだろ。

その狭い空間に机があつてその上に入れ物に入つた小さなチップがあつた。

超光学記憶媒体だ。

みーつけた。

「いただきますよー」

誰かに聞えるように呟いてそれをつまみ取つた。
ポケットに入れる。

「よっし、OK。
かえるべさ」

ひどい目にあつたが、これでおっさんの任務は達成だ。

「おめでとうございます、波音君！」

少し膨らんだポケットをみてアシルがほめてくれた。

i
n
u
e
s.

いたずらをする子供のように（後書き）

ありがとうございます。

これで丁度百話目です。

長かった。

でもまだ続くという・・・（笑）

嫌でなかったらあともう少しお付き合いください。

お主の罪じゃない

「つと、これおいておかないと」

ふと思いついて金庫の中から出てきたばかりなのにまた中に戻る。トランクの中から超光学記憶媒体にそっくり偽物を取り出した。ケースから本物を取り出して偽物の中に入れてもとの場所に置く。

「これで私の罪も……」

アリルがほっとため息をつく声が聞える。ポケットに増えたかすかな重みを感じながら俺は金庫から出た。

「正直俺はアリルに罪なんてないと思うぜ？」

金庫の扉を閉じてまた元のようにロックをかけた。これでまたしばらく時間を稼ぐことが出来る。

「え……？」

ポケットとりだしたチップをトランクに突っ込みながらアリルを俺は見上げた。

「アリルに罪なんてないって。俺はそう思う」

腕時計で時間を確認した。

三時。

まだ家を出て一時間しかたっていないのか。

「波音君……」

はっとしたような目つきになった顔にでこぴんをした。

「いたっ……」

「いつまでもそんなこと考えるなよ。

話した俺も悪かったかもしれないけどさ。

そんな自分を責めることじゃないだろ？

お主のとーちゃんがやったことをお主が償う必要なんてないよ」

「な？」とのんびりと言いつつ。

アリルはしばらく考え込んだように顔を伏せると

「……じゃあ今から通報します」

おい。

冗談でもそれはやめてくれ。

「それだけは勘弁してくれ。

——よし、終わり。

さっさと帰りたいぜ」

俺はトランクのロックをぱちんと閉じた。

よっこいしょっと、トランクを持ち上げる。

「私が連れて行きますよ。

お父様とお母様は地下でしょうし……ね？」

あらやだ、ア ril さんったら悪い顔。

直接的に泥棒の逃走をお手伝いしてくれるというわけだ。

「頼む。

間違いなく俺は迷う」

兵士の服装に乱れがないかしつかりとチェックする。

「じゃあついてきてくださいね？」

無言で頷いた。

トランクがなぜかずっしりと重くなったように感じる。

「——なんていうか、ありがとうな。

今日は」

歩き出してしばらく俺もア ril も話さなかった。

その沈黙に耐えれなくなったから話しかける。

「いえ……」

「——……………」

会話終了。

ますます重くなったように感じるトランクを窓の外に投げ出したい

気分にはげられた。

気まずいんだよ。

結局それだけの会話だけで玄関まで来てしまった。

なんで急に黙ったんだろう。

「玄関に着きました。

波音君が乗ってきた車ですがおそらく兵士達が確保しているはず
です。

そこですすね……」

ア ril はぼそぼそと俺に案を公開した。

確かにそれで行けば万事 OK だな。

流石だ。

「じゃあそれで」

「お疲れ様です」

俺はア ril の隣に立って俺が乗ってきた車のところまでやってきた。
あのクソ長い階段はリフト使ったよ。
あれ使わないと足が棒に変化するまですぐだ。

「おう」

すぐく体つきのいいおっさんが目を光らせて俺を隅から隅まで眺め
る。

少し体が震えた。

「ふーむ……」

何かを考えるようなしぐさをした後

おっさんの目は俺から離れア ril を見た。
その瞬間にするどい目つきがまん丸になった。

「お、お嬢様!？」

一体どうなさったので!？」

その声を聞いた車を囲っている残り三人の兵士もおっさんの隣に整列した。

敬礼をす四人を前に

「この車はこの兵士が連合郡本部まで持っていくそうです。
ので、出してやって欲しいと思ひまして……」

ア ril は正々堂々とおっさんに命令した。

「わ、分かりました。

おい」

おっさんが顎でくいとすると三人の兵士は車のタイヤに押し込
であった止め具を外した。

「どうぞ」

俺はトランクを持って促されるがまま車に乗り込んだ。

「では、後はお願いしますね」

ア ril は運転席の窓から話しかけてきた。

その顔はいたずらに笑っている。

月が背後に浮かび、金髪がきらきらと輝いていた。

——綺麗だ。

これが俺の彼女だってんだから鼻の下を伸ばさずにはいられないな。

「はっ、了解しました」

頬が赤くなったのを悟られないようにして車のエンジンをかけた。

おっさんたち、四人の兵士にも敬礼をしてアクセルを踏む。

静かに走り出した車のミラーにどんどん小さくなっていく五の人影がテールライトに赤く浮かんだ。

がたがたといろんなところに乗り上げながらも車を自分の家の前に止めた。

「うー、疲れたー」

腰を叩きながらトランクを座席から引っ張り出す。

この中だ、いつおっさんに届けるかな。

「おっかえりーっ!!」

夜中にふさわしくないホモ野郎の声が玄関の扉から発せられた。

本能的に身を曲げた俺の前を一枚の扉が通過する。

本当にぎりぎりの場所をだ。

例えるなら……うー……。

赤点が四十点だとして四一点取ったみたいな。

そんなことよりこいつだ。

なんでドアの開け方を知らんのだ。

「ただいまー」

俺は通った瞬間に破れたであろう服の裾を引っ張りながらただいまの挨拶を言った。

「おかえりー！」

ほほえましいセズクさんの笑顔に吹き飛ばされた扉は虚空へと消えていった。

多分地球の裏側まで行ったんじゃないか？

人工衛星真っ青なスピードで飛んでたからもしかしたら人工衛星になってるかもしれない。

今頃流れ星として輝き、世界のどこかでカップルが幸せを祈ってるかもな。

「つかれたー」

トランクをセズクに預けて玄関に座り込み靴を脱ぐ。

あーこの靴うっとおしかった。

奪い取った他人の兵士の靴だから足にフィットしなかったんだよな。足を高速で回して筋肉をほぐす。

「おかえり、波音。

ごはんにする？

お風呂にする？

それとも……」

あー。

あぶないな、次にく言葉は。

「風呂にしてくれ」

次にく言葉は絶対に聞きたくない。

「ごはんにする？」

お風呂にする？

それとも……」

「風呂にしてくれ」

言わせない。

言わせたが瞬間俺の理性が崩壊しそう。
恐怖で。

「それとも「風呂」

被せるようにして封じ込めたった。

セズクは「つれないなあ……」と愚痴って口を尖らせる。

つれるもなにもなんで俺が釣られなきゃならんのだと。

しかもそれにつられたら色々と危ないだろ。

ぎりぎりチョップです、そういうのは。

「あー疲れた」

二階へ続く階段を登る。

「風呂、沸いてるよ。

入ってきたら？」

自分の部屋に入って服を脱いだ。

新しいパンツとシャツを持って風呂場にGO。

しっかりと鍵を五つぐらいつけて湯船に浸かった。

なんでこんなに鍵をつけているのかは言わなくても分かるんじゃないだろうか。

風呂はほんわか暖かい。

幸せになる。

ささっと汗を流しシャンプーをつける。

ボディソープも塗りたいくって泡にまみれながらも一度シャワーを浴びる。

さっぱりして風呂から上がって歯を磨く。

そしておやすみなさい。

意識は夢にダイブした。

「おっきてー！

おっはよーっ！！」

む……。

頭をかち割るような轟音。

そして衝撃。

「ぐふおっ」

腰にドスンとのしかかる重み。

うぐぐ……。うぐぐ……。

「起きろ」

シエラか……。

声が無愛想だから一発で分かったわ。

「えいっ！」

「めんっ」

メ、メイナか……。

元気な最終兵器だな二人して。

ここに、T・Dなんか加わったら三人になるってことだろ？
俺耐え切れなくて死んじゃう。

二人でここまで大変なのに。

「お、起きた。

起きたから降りろ、地球は青かった」

体の上ののった二人分の体重がずっとどいたのを感じた。

あー、朝からなんて起こし方をしやがる。

「おはよ、ご飯できてるよマイハニー」

うっすら開いた目に朝日がまぶしい。

ドアにやれやれと微笑しながら立っているのはセズクさん本人だ。
ホントこいついつ寝てるんだろう。

「ご飯か……うー」

最終兵器の二人を押しつけて洗面所へと足を引きずって歩いた。
お水を顔につけてごしごし擦る。
歯ブラシに歯磨き粉をつけてしゃしゃかする。

「あーさっぱりした。
おはよう」

セズクの用意した食卓の前に座った。

鮭と味噌汁、白いご飯が湯気を立てて並んでいる。
健康かつ。

日本食ばんざい。

「いただきます」

いやぁ俺は鮭なんかあったらいちいち骨をとらないと気がすまなくて。

でも鮭の皮とかおいしいよね。

そう思わない？

俺一番おいしいところだとおもうよ、皮。

「後五分で出ないと遅刻決定だよ」

セズクの言葉に味噌汁を吹いた。

「なんでもっと早く起こさなかった!」

電光石火で口に飯を突っ込む。

「いってきます!」

最終兵器姉妹はのんびりと食ってやがる。

いいよな、最終兵器は。

飛べばいいんだもん。

もしくは本気で走るだけで一瞬にして学校だろう？
くそっ。

「おそいですよ、波音君！」

「おせーぞ波音」

壊れた玄関から出たらア ril と仁がやれやれと待っていてくれた。

「すまん、わざと」

「反省の色見せろよ」

仁の「あいからわずのんびりした野朗だな」という言葉を返すように

「んなことより遅刻すんぞ」

そう言い返した。

「誰を待っていたと思っているんですか……」

腕を組んでじーっと静かに俺を見てくるお方に

「すまん」

睨まれたので思わず謝った。

「で、波音は鞆も持たずにどこに行くつもりなんだ？」

あつ。

「ちょ、ちょっと待ってて。

鞆持ってくる」

「やれやれ、ですね」

「だな」

ため息つくな、二人して。

凹むんだぞなかなか。

ダッシュで自分の部屋に戻って机の隣にある鞆を取ってきた。

まだのんびり味噌汁をすすっている最終兵器二人の横を通り過ぎて

「いってらっしゃい♪」

セズクの笑顔に俺は送り出された。

「待たせたな！」

玄関から飛び出すようにして二人の間に降り立つ。

「待ちましたね、確かに」

「ほら、行くぞ二人とも」

仁がはーと頭を振りながら鞆を頭の上に載せた。

何を言うのかと待ち構えてみれば

「バランスー」

やかましい。

何がしたいんだ。

「ほら、仁行くぞ」

「えっ、ちょ無視？」

すまん、何て突っ込めばいいのか分からなかった。
バランスかよ！

とでも突っ込めばよかったのだろうか。
誰か教えてくれ。

俺は何て突っ込めばよかったんだ。

「ちょっと小走りで行きましょうか？
間に合わないかも……ですし」

アリルは鞆を俺に差し出してそういった。

「なんで俺に鞆差し出してるの？」

「持ってください」

へ？

俺はアリルの顔を見た。

「持ってください♪」

「いや、へ？

俺が？

持つの、俺が？」

「はい♪」

な、なして。

持つけど。

逆らうと後々怖いから持つけど。

しぶしぶ俺はアリののちを受け取った。

「波音、俺のもの」

「しゃーなしやな。

待っててくれてたし」

「おっ、ありがとう」

俺は仁からのちを受け取るとそのまま地面に落とした。

「よし、行くぞ」

仁は俺の手元を凝視した。

何が起こったのか理解できないようだった。

「お、おい待てよ。

のち……俺の……」

「ん？

あれ！？

「どうやら、仁の鞆は俺の手にフィットしないようだ」

「おい、波音……」

「ごめん、やりすぎた」

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t
i
n

u
e
s
.

お主の罪じゃない（後書き）

ちよつと最後の方ふざけすぎましたかね。

昔の方を読み返してみればけっこー波音のつぶやきが多くてですね。

あ、こんなだったなあと。

初心わするるべからずっていうのは本当ですね。

では、ありがとうございました。

改めての自己紹介

「今日は学校は午前中で終わりなんですよ」

「まじで？」

「やったっ！」

残暑が残る九月。

仁、ア Ril と一緒に学校へ向かって歩く。

俺は二人分の荷物を持ちながらだけどな。

結局、仁の荷物は自分で持たせることにした。
だって重いんだもの。

雲ひとつある空の下、鞆の持ち方を変えた。

「おっもたい……」

「だ、大丈夫ですか？」

「やっぱり私が持っておいたほうが……」

俺は首を振った。

「いや、吾輩が持つのだ！」

「吾輩……」

なんかもう意固地になっていた。

ここでア Ril さんに持たせたら何か俺が負けた気がする。

「もう少しだぞ、波音がんばれ」

もう無理、重たい。

べりーへヴいーだぜ、これ。

汗が滲んできてだんだん体温が上がってきた。

暑い、重い、何とかしてくれ。

がんがんなべを叩く音が響いてきた。

な、何だこれ。

何の音だ？

「やべっ、はじまるぞ」

「波音君、急ぎましょう！」

軽々と走っていく二人。

色々とちよっと待てや。

あの音、チャイムの代わりにならしているんだろう。

まだ校舎の修復は出来ていないからな。

瓦礫だけは取り除けた感じだもんな。

そして俺は……二人分の荷物……。

しかもこれも仁の二倍ぐらい重い。

原因を考えながらふと思いついた。

そういえばアイルさん、鞆の中にたっくさんの教科書入れてなかった？

それが原因ですっごい重いですけど。

ものっそい重いですけど！

心の叫びは絶対聞えてないな。

「おそいですよ！」

二人はもう校門についていた。

いつの間にこんなに差がついたのかは知らんが
約五十メートルもの彼方から俺にわざわざ教ええくれるのはいいが
――。

俺、お主のせいであんなになっているの分かっているのかな……。

「永久〜！」

遅刻はゆるさんぞおおお！！！！」

お残しはゆるしまへんで……。

じゃない。

俺の後ろからぐいぐい追い上げてくる一人の男。

結構ととのった顔立ち、そしてスーツ。

あまり特徴のない、一見どこにでもいる男性だが……。

今俺がいーっちばん会いたくない男だ。

誰かって？

聞いてない。

桐梨の野朗だ。

「永久〜！！！」

とまあなんかすごい感じに説明してみたが、桐梨は豆粒のごとく小さい。
遠近法的にすっごい遠く。

遅刻しそうなのはあんたのほうじゃないのかと。

その遅刻しそうな人が「遅刻はゆるさんぞおおお」とか。
片腹痛いわ。

（爆）とか（核爆）ってついてもおかしくないぐらいやわ。

アリの荷物と自分の荷物を腹に抱えて少し早く歩く。

これで十分に間に合うだろ。

遅刻しそうになったら「桐梨先生も遅刻しました」って言えば何と

かなる。

その言い訳が使えないのは俺が桐梨に抜かれてからであり
豆粒のように小さい距離にいるというのにあいつに俺が抜かれるわ
けが

「遅刻したいのか？」

化け物か？

「先生！？」

流石生徒指導部所属。

生徒を鍛えに鍛えているうちに自分をも鍛えてしまったのだろう。

「はい永久遅刻ー」

あつという間に俺を抜かしてゆく。

俺も負けじと走って追いかけるが一步及ばなかったようだ。

目の前で無常にも切られた遅刻切符。

くっそ……。

「明日は文化祭だ。」

三日間連続して行われるぞ。

二四時間、合計七十二時間ずーっとな。

市からお金が出ているしこの地域の人全員にこの校舎は開放さ
れる。

夜は花火、昼は屋台。
プールも開放してるぞ、金魚すくいとかに」

午前中、文化祭の用意で全部使った。

学校内は驚くほど変わっていた。

昨日の夜のうちに先生とかががんばったようだが……。

それにしてもすごい変わりようだ。

あちこちに屋台が立ち並び、校庭には盆踊り用の台みたいなのも立っていた。

三日間で二万人は軽く来るらしいから市としても学校としても稼ぎ時というところか。

どうやら今年も例年通りに学校をこの地域全員に開放するらしい。爆撃で破壊された町人たちの元気にもなるだろうとのこと。

そんなこの小さな市にしては大きなお祭は前夜祭、文化祭、終夜祭と三段階で構成されている。

まぎらわしいがこの三日間をまとめて文化祭と呼ぶそうだ。

市の職員や本物の屋台がやって来てこのでかい敷地に生徒のを含め四十近い屋台が並ぶ。

花火もやるとか何とか。

いや、すごいな。

実質鬼灯に支えられているようなこの市の財政は鬼灯の言うがままに動くんだろうな。

「それじゃあここで終わるぞ。

この三日間を楽しんでくれ。

学生服だと飯が一割引らしいぞ」

「よっしゃ！」

桐梨の一声でクラスが盛り上がる。

「じゃあまた明日。」

起立、礼、さよーなら」

「さよならー」

クラスの皆は我先にと教室から飛び出していった。

俺達もそれに漏れずのんびりとだが教室を後にする。

お腹減ったなあ、それにしても。

詩乃達は文化祭の実行員だか何かで学校に残るらしい。

綾もそういつて詩乃と一緒にどこかへ行ってしまった。

あれだけF様とか言ってた遼とその取り巻きはあいからわずだったがメイナとシエラと×2になったことで少しは落ち着いたようだ。

俺はぶん殴りたかったけどな、面倒だし。

「明日は文化祭ですか……。」

たのしみですね！」

帰り道の途中アリルが話しかけてきた。

「たしかに」

目を細めるシエラ。

「文化祭かあ。」

私、はじめてなんだよね。」

そりゃ最終兵器として過ごしていたわけだからな。
はじめてじゃないと逆に驚くわ。

「文化祭かあ。

中学校のときどんなんだっけなあ……」

思い出そうと頭を抑えるが思い出せない。
どんなんだっけ、記憶に薄いな。

「その……波音君からきいたんだけど……」

楽しい話題から一変。

ア ril さんが身長に物事の琴線に触れないように手探りで話しかけていた。

「？」

シエラにおそろおそろ話しかけるア ril 。
何かを決めたような顔をしている。
何を言うつもりなんだ？

「……その——」

少しためらうように首を振る。
手をぎゅっと握り何かを考えているようだ。

「言ってみて？

私、気になるじゃん？」

メイナの明るい声に決意を後押しされたのか

「シエラちゃんとメイナちゃんは……」。

その……さ、最終兵器って本当なんですか？」

二人はきょとんと俺を見た。
何で俺を見るんだ。

俺は顔を背け仁を見る。

仁も俺を見ていたため俺は左右から顔に挟まれることとなった。

仕方なく空を見る。

あ、あの雲戦艦に見える。

「えーっと……」

五人の間に沈黙が広がっていく。

「えー……」

その中に気の抜けたような俺の「えー」が響く様はまさに滑稽だ。
これはあれですか。

仲間の秘密をばらしたものに對する罰ですか。

いや確かに俺が悪かった。

本当にみんなごめん！

ぬるま湯に足をつっ込んだような、なんともいえないじゅくじゅくとした感情が心を少し食った。

「そうだよ」

これは俺じゃない。

じゅくじゅくしたぬるま湯をあつつあつのお湯に変えたのはシエラだった。

さっぱりした彼女の顔が俺達四人の視線を集める。

「そ、そうだよ！

私はプロトタイプだけ……。

S・Dって名前を与えられたわ。

今はメイナのほうが気に入ってるけどね」

はじめはきょとんとワケが分からないといった顔をしていたメイナもここで言ってしまったほうが楽だと気がついたのか肯定の道を選んだようだ。

「僕はF・D。

当然、シエラのほうが気に入ってるよ。

姉さんのS・Dとは双子」

あらためての自己紹介だな。

俺は永久波音。

……聞いてないってか。

改めて言うなど。

「なるほど……。

じゃあ超兵器を叩き落したり第十二艦隊を全滅させたのも……」

「僕……と姉さん」

少し笑ったようにシエラが言った。

「え、ちょっと今なんで少しためたの？」

「……理由なんて物はない」

何だそれちょっとかっこいいじゃないか。

俺も今度使おう。

「そうですか……。

なるほど、なるほど。

波音君の言っていることは本当だったんですね……。
てつきり嘘ではぐらかそうとしているのかと思っていました」

おい！

俺はそんな風な人間に見えるってことか？

「なんかすつきりしました。

これからもよろしくね、最終兵器のお二人さん？」

アリルと最終兵器の二人は握手した。

「明日の文化祭が楽しみだ」

仁がうーっと呻いて伸びをした。

「理由なんて物はない」

「うん、何が」

使い方間違えたかな、俺。

仁に鋭くつつこまれちまったよ。

i
n
u
e
s.

改めての自己紹介（後書き）

次は文化祭です。

そして……ラストへと。

もう少しでこの物語も終わりです。
多分。

後一年ぐらい続きます、おい！ですね。

ではここまで読んでいただきありがとうございました。

その日は早く寝た。

明日が少し楽しみだったからだ。

布団に入る前に何を明日はしようかという思考にふけた。
こんなにわくわくするのは久方ぶりだった。

……で、目が覚めると朝だった。

気がついたら寝てしまっていたらしい。

物凄いどす黒い圧力を感じて俺は夢から目を覚ましたのだ。

「やあ、波音おはよう♪」

セズクが俺の顔ギリギリでにつこりと笑った。

これか、どす黒い圧力。

おはようじゃねーよ、近すぎ。

目が覚めた俺の神経ナイス。

もう少し遅かったらどうなっていたことか。

「な、は？」

お、おはよう……どいて？」

コーヒーのいいにおいがセズクから漂ってくる。

いつもの習慣どおりにコーヒー飲んで新聞とか読んで。

料理とかつくって、俺を起こしに来てくれたに違いない。

「ちえ、あと少しだったんだけどなあ……」

でも、それが危ないんだ。

危険は身近に潜んでいるって言うのは本当だな。

もう少しおそかったらあーいうことになっていたに違いない。
俺はゆっくりと、セズクを押しつけて布団からはいでた。

「ちえー……」

「起こしにきてくれるのはありがたいけど襲うのはやめてくれ」

俺はセズクさんデコピンして立ち上がった。

「おはようございます」

あくびをしながら、台所へ繋がるドアをとろとろと開く。
するとよく焼けたハムエッグを持ったア Rilさんがエプロン姿で挨拶してきた。

なんだ、ア Rilさんか。

「あー、おはよう」

もうなれた。

何があっても驚かない。

シエラ達と出会って誇れるのは神経が図太くなったこと。
それぐらいかな。

洗面所で顔を洗う。

今回はセズクがいつの間にか買ってきてくれていたサクセスで洗ってみた。

仕上がりさっぱり、いい感じだ。

歯を磨いて飯をくらふ。

一割引になると噂の制服を着て……よし行ってくるぜよ。

「じゃ、行ってきます」

しゅびと、迅速にお金の入った鞆を持った。

「あ、波音？」

今日は僕も一緒に学校へ行くよ？

お祭って聞いたし……ね？」

俺はあんぐり口をあけてセズクを見た。

「来るの……？」

マジで？

本気なのか？

やめとけて、兄さん。

ろくな目に会わないって。

「いやかな？」

と、さびしそうな顔をされた。

「いや……そんなことないけど」

さびしそうな顔は少し反則だろう、と思う。

俺はやっぱり心から善の人だから？

こういう顔されると承諾するしかないんだ。

「じゃあ行くね？」

そう、俺がOKを出したら、即効セズクは笑顔になった。

あ、おれだまされたな、と思う瞬間である。

罨だったか。

蟻地獄だったか……。

「シエラとメイナは？」

そういえば朝から姿が見えない。
生きてるのかな。

「もう行ってますよ？」

いま何時だと思って……」

あきれたように教えてくれるア ril さんに疑問を持って俺は時計を見た。

九時じゃん。

時計の短針と長針が九十度、直角を作っていた。

「えっ、嘘っ……？」

「残念ながら現実だよ？」

さ、行こうか、そろそろ」

現実だってことぐらい分かってるわい。

いつの間に着替えたのやら、セズクはすごくぴっちりしたかったこい服を身に纏っていた。

ワイルド系……とでも言うべきか。

こう、男の俺から見てもすごくかっこいい。

あらためてセズクのイケメンさに驚く。

こいつこんなにかっこよかったのか。

日ごろの行いが悪いおかげで全然意識していなかった。

「さ、波音君、行きますよ？」

アリルに手を引かれて部屋から出る。

「文化祭たのしみだね♪」

なんか、セズクさんの十八歳を見てしまった気がする。
今まで見たことがないぐらいにわくわくしてる、この人。

「んー、気持ちのいい朝だね」

玄関の鍵を閉めながらセズクが日光を体中に浴びた。
金髪がまぶしい。

道を歩く。

ただそれだけだ。

「ねえ、あの人見た？」

「見た見た、超かっこいい！」

道を歩くだけで通行人女性がセズクを見る見る。
ガン見されまくってる。

俺がセズクだったら恥ずかしくなるぐらいに。

「なんか、疲れますね？」

俺は黙って首を縦に動かした。

ア ril さんの言うとおり。

俺も何か疲れる……。

やっぱりもてる男が隣にいと男としての……プライド？

いや、彼女居るから別にいいんだけどさ。

でもなんか……プライド的にむかつく……。

セズクが道を歩くだけでここまですごいとは。

こいつがホモって言ったらきゃーきゃー言っていた女性はどうな顔をするのだろうか。

大声で「こいつホモです」って叫びたい。

そうしたら俺が異常者扱いされるかもしれないけど教えてやりたい。さて、学校に近づくにつれ、人はどんどん増えた。

見ろ、人がゴミの……。

「うわあ、すごいですねえ……」

ア ril は目をまん丸にしていつもとは違う学校の様子を眺めた。
俺もこんなに沢山の人が集まるのを見るのははじめてだ。

「ねえ、あの人だれ？」

「隣に居るのは永久だろ？」

とりあえずリア充は爆発しておけ」

そんな声が聞えてくるにもかかわらずセズクはさわやかだ。
ニコニコと笑って愛想を振りまいている。
もお……。

セズクは彼女いたんだっけ。
まだホモじゃないときに。

「じゃ、俺とアリルはここで教室行かなきゃ行けないから……」

確かに出席したとだけ、丸つけてこないと。
欠席扱いにされてしまうぜ。

「ん？」

分かったよ、マイハニー」

おい！

「ぼっ、ここでその呼び方はやめろ！」

誰かに聞かれたらどうするんだよ。

もし誰かに聞かれたら最悪ってレベルじゃないぞ。
例えば、詩乃とか、綾とかさ……。

「ししし……。

聞いちゃった」

あー、やっぱりか。

遼とかだったらいんだが……。

「って、詩乃!？」

一番最悪なお方だったよ。

というかいつの間に？

くのいちか？

SHINOBI?

『文化祭実行委員』とかかれた腕章をはめた詩乃はニコニコと俺を

肘でつつく。

「波音？」

もしかして三角関係だったりしない？」

ドロドロ関係を期待している顔だ。
だが残念だかそんなことは

「するね♪」

「お前は黙っとけ！」

ややこしくなる！

「えー、波音君……。
ひどいです……」

えー、お主もそこのるんかい。

「いや、違うから。
おい、詩乃、バカ、おいぐふ」

ぱしぱし叩く俺の腹に一発かまして

「あー、波音聞いた？
私達またビルに戻ってきたから」

詩乃はしれっと長い髪を風に揺らした。
そうなんだ。

「じゃ、また遊びに行くからおやつとか出せや」

俺は詩乃に美味しいものを要求した。

パンチのお返しといわんばかりに右指でほっぺたに突き刺す！
指す、刺す、射す！

「や」

そういうと詩乃は俺の手を捻った。
いててて。

本当に強いんだから少し手加減してくれよ！

「じゃ、デートを楽しみなよ？
ばいばい」

詩乃はアリの耳に噛み付くぐらい近くでそういうと
手を振って人ごみの中に消えていった。
人ごみに流されて……。

「……………！」

アリがまっかになってうつむく。

そこもそこでかわゆす。

で、やたらきゃーきゃーとうるさい声が聞えると思ったらセズクが
女子に絡まれているだけだった。
セズクだし仕方ないか。

小さく手を振ってセズクを置いて教室に行く。

「波音ちゃん、久しぶり〜♪」

また少し歩くと今度はマダムが俺達を見つけ、話しかけてきた。
人ごみの中でも目立つ金髪がこっちにマッハに近い速度で来るのは
それはもうまたすごいものだった。
金髪って目立つし。

「あっ、久しぶり……？
なんですかね、マダム」

二日ぐらい前にあった気がします。
ひどいめに会いました。
夜中に忍び込んでひどい目にありましたです。

「おお、我が息子！
元気か！！」

大声でのしのし人ごみを掻き分け……いや押しのけ……。
いや、ちぎっては投げちぎっては投げしながらアイル父が近づいて
きた。

「おかげさまで……。
二人とも今日はお祭に？」

それ以外ないだろ、俺のバカ。
一体何を聞いているんだ、俺のバカ。
二人は笑いあう。

「ああ！
いいものだな、祭は！
久方ぶりだよ！
今年はないものと思っていたが……！」

いやあめでたい」

めでたいか？

そして声がでかい。

ア ril 父も「お父様……」っていつてるし。

「今年は苦勞したみたいですよ？

実行委員会とかががんばったらしいです」

裏情報をア ril 父に言う。

ア ril 父は「なるほどなあ」と言って脇につまれた瓦礫に視線を落とした。

ア ril 父はあの爆撃が帝国郡ではなく連合郡の仕業だと知っているのだろうか。

「そんなことより、この筋肉を……」

あわてて話題を変えるようなマネをしたことから知っているのだろうとは思うが……。

やっぱり多少なり後ろめたいのだろう。

「あ、波音ちゃん？

あとでまたあいましょうね」

ア ril 父の筋肉自慢タイム終了。

マダムがア ril 父の腕を掴んで仲良くくつつく。

本当に仲がいい夫婦なのだろう。

「あっはっはっは！

お前と二人きり——なんて……！

いやあなつかしい」

「あなただったら……もう！」

あの二人熱々だな。

百度で沸騰してるな。

さっさと教室に行ってサインしてこよう。

そんで色々買って……。

楽しみになってきた。

爆撃の被害にあった町でもこんなに沢山の人が生きていて

そしてこうやって楽しんでいることに少し驚いた。

人って強いな。

T h i s s t o r y c o n t

i n u e s .

100D o (後書き)

仲がいい老人の夫婦を見ているとなんだかながみますよね。
ぼくもあんなふうな老後を過ごしたいです。

人って強いですよね。

では、ありがとうございました。

once again

教室へ行き、教卓の上に置かれた紙にチェックする。
教室内に残っていた生徒の外へ繰り出す流れに乗って
俺とア ril は仲良くあちこちの屋台を回る。

「あ、私、チョコバナナ食べたいです」

「あつ、お、おう」

バナナで。

その隣にあるのはから揚げか。

「じゃあ俺はから揚げをだな」

む、高い。

だがっ——！

俺は、俺は……！！

葛藤に悩まされることなく買った。
普通にうまい。

「むぐむぐ……」

ア ril さんは豪快に頬張るし。

チョコバナナかあ。

いいなあ、俺も買おうかしら。

いや、待て。

待つんだ、永久波音。

他にも箸まきとか、焼きソバとか色々あるんだ。

ここでお金を使いまくっていいものか。

「あ、チョコバナナください」

俺はそういつて店のおっちゃんに三百円を手渡した。

そんなこんなで誘惑に負け続けた結果持ってきたお金の三千円はあつという間に使い切り

財布から出てくるのはゴミクズだけとなった。

「とほほ……」

「は、波音君……」

私が変わりに出しましょうか？」

「いや、それは……いい」

とほほ……。

でも後二日ぐらいあるもん。

いいもん、まだ時間はあるんだもん。

「おうおう、熱いねエ」

なんか茶化されたと思ったら、冬蟬と彗人兄さんだった。

花壇のでっぱりに座り、二人してフライドポテトをつまんでいる。

「太陽より熱いぜ？」

俺はにやっと笑って冬蟬に手を振る。

そして素早く近づいて一本抜き取った。

「あ、おいつ」

「ありがとう」

うん、うまい。

「しかたねーなあ……」といって冬蟬はもう一本恵んでくれる。

「さんくす」

そういつて一本を口に放り込んだ。

「うまうま」

「だろ？」

俺はもう一回お礼を言っつてその場を離れた。

冬蟬もいつも無口の彗人兄さんも笑つて手を振り返してくれた。

「あ……、う。」

うーむむ……、波音君、波音君」

なんだ？

「私、焼きソバ食べたいです」

「ほないこか、お金ないけど」

食べながらあっちこっち歩き回つた成果、お腹は減らなかつた。
言葉には言い表せないほどたっぷりと楽しんだわけだ。

「きゃー！」

セズクさまっ、こっち向いてくださいっ！」

見なかった、俺は見なかったぞ。

「はいはい♪」

アイツお祭というよりかは女を楽しんでいる感じじゃないか？
何しに来たんだよ（；´Д｀）↑今の俺の顔はこんな感じ。

そんな感じでうろうろうろついで射的したりしているうちに時間は
どんどん過ぎていった。

気がつくと夜はどっぷりとその膜を垂らし、電球のような星がちら
ほらと輝いていた。

そろそろ花火が始まるためか、皆校庭に座り込み場所取りをはじめ
ていた。

俺は実はなかなかのスポットを知っているんですよ。

屋上ですよ、屋上。

唯一崩れなかった校舎で、出入りは禁止にされていたが……。

まあ内緒、内緒。

ばれはしないだろう。

立ち入り禁止のロープを潜り抜け誰一人いない、二階建ての校舎の
階段を登る。

屋上へ繋がる重たい鉄の扉を開くと涼しい夜の風が階段を吹き荒れ
た。

それと同時に俺の携帯が小さく唸り、午後八時になったことを教え
てくれる。

取り合えず俺とア ril は、長年雨風にさらされてボロボロになった
机を見つけ

手で軽く埃を取ってその上に座ることにした。

「波音君……。
私考えたんです」

下に広がる屋台に群がる人は減る気配を見せない。
このまま三日連続は本当にすごいと思う。
赤と白の電球のコントラストが素敵だ。

「何を？」

あわててア ril さんの話に神経を傾けなおした。

「私……、波音君と一緒にいれてほんとうによかったな……って」
……………。

「おい、何だよ急に」

俺はア ril の顔を覗きこんだ。
変なこと考えてるんじゃないだろうな？

「いえ……。
要するに本当に幸せだな……って！」

ア ril はにっこり笑って空の星をつまむようなしぐさをした。

「……ああ」

俺も……って続けようとして恥ずかしくなった。
つまり口をつぐんだわけだ。
言えなかった。

こういうときの自分のチキン具合に自分でイライラする。

「その……。」

波音君？

やっぱり私は——」

しばらくの沈黙に刃をいれるようにアリルは切り出した。
死ななきゃならないんでしょうか？

その口の動きは上がり始めた花火の音にかき消された。
でも俺には聞えていた。

「何言ってるんだよ！」

俺はアリルの肩を掴んだ。

思わず力が入ってしまうほどに俺は動揺していた。
何度言わせる気だ。

「いいか？

何度も俺は同じことを言うのは好きじゃない。

自分の、俺の大事な物を失いたくはないんだよ！
失うのが……怖いんだよ！」

また一つ花火が上がった。

アリルの驚いた顔が目の前一杯に広がっている。

何度その顔をして俺を惑わせるつもりなんだ。
おい。

「俺は——！」

いいか、俺がお前を必要としているんだ！
だから……」

花火の光に呼応して、アリの顔も赤や緑に変わる。

俺は、彼女を思いつき抱きしめてやった。

言葉にはできないことがある。

俺は口下手だし、バカだから口が回らなかったんだよ。

頭一つ下にあるアリを撫でる。

「だから……死ぬとかさ。

そんなこと言わないで欲しいんだ」

耳元で囁くように締めくくった。

静かに力を緩めアリの放す。

あー、やりすぎたかなあ。

嫌われたか、もしかして俺は。

と、アリさんは目をつぶっていた。

あ、はい。

分かった。

ことごとく邪魔される、アレな。

でも、俺はチキン……。

やるしかない。

男にはやらねばならないときがある。

よし。

やるか。

俺はアリの顔にゆっくりと近づいていった。

俺も目をつぶろう、そうしよう。

すいませんね、チキンなもんで。

何をどうしたらいいのか……。

花火が上がり閉じた黒の視界に赤が、緑が、青が主張する。

アリの唇と俺の唇が触れ合う……。

その五秒前。

花火の音に似ているが違う音が“真上”から落ちてきたのだった。花火のようにたまやーな芸術が上がる……そんな音ではない。

巨大な質量が明らかな殺意を持って空気を切り裂くような音なのだ。ア ril さんを思わず引き寄せ上を見た。

俺達の身長ほどあるほどの体に三本の黄色い線が入っている。

涙が落ちてきたような、黒に塗られたそれは

俺達の真上ぎりぎりを通り過ぎたかと思うと校庭に落ちた。

と、それから光がほとぼしり校庭に巨大な火柱が出現した。

何が起ったのかはわからなかった。

ただ、火柱を背にするような感じでア ril をかばいながらガラスが割れる音や人々の悲鳴、物が崩壊していく音。

そして鋭く体を打ち付ける衝撃波を全身に感じていた。

また二個、三個と復旧の進んだ街に爆弾が落ちる。

一瞬にしてプレハブは吹き飛び、そこに生きていた人々の姿はなくなっていた。

燃え始めた街が薄暗く空を照らす。

やまない花火が、今の一瞬で千人は即死した時間に花を添えた。

「そんな――！」

俺の腕の中でア ril が呻く。

「とにかく下に行け！」

こんな崩れるところにいるのもヤバイ！

急げ――！」

上を見ると埋め尽くさんばかりの数の爆撃機が空を飛んでいた。ありえない。

どうして、またここに爆撃をしてきたんだよ。

一体何が狙いなんだ？

レーダーを吸収する特殊塗料を鉄の上に塗りたくった黒が、今の空の色だった。

帝国郡、連合郡が共に自分の軍の象徴として使用している

『曲菱型』——『ワープダイヤモンド』が主翼に輝いている。

人々が逃げ惑う列に、爆弾が落ちる。

二秒前までは確かに生きて、笑い、泣き、それぞれの人生を過ごしてきた人が。

たった一発の爆弾によってその身をばらばらに分断され死んだ。

第一波が過ぎるまでここは動かないほうがいいのかもしれない。

だが衝撃波や前回の爆撃で痛めつけられたこの校舎は悲鳴を上げていた。

考える俺の思考を斜めにぶった切る、鼓膜を振動させる甲高い音。

死を纏った鉄の塊がこっちに近づいていた。

丸い、弾頭の形は——崩れない。

つまりまっすぐ俺に向かってきているということ。

「アリル、逃げろ！」

俺はいいから——！

よくはない。

俺も逃げたいのだが足が動かないのだ。

アリルもそれは感じているのだろう。

だんだんと大きくなってきた爆弾は俺の体を一瞬で押しつぶすだろう。

コンクリートに当たることによって反応した信管がその中の火薬を

爆発させ

校舎ごともう命のない自分の体を切り裂くだろう。

死にたくはない――な。

何度目だろうか、死が迫るのは。

人間なれというのは恐ろしいもので恐怖はあまりもう感じなかった。せめてア ril だけでも助かって欲しい。

開いているドアを蹴り、閉めた。

さっきの倍ほどの大きさとなった爆弾はあきらめた俺に一直線にぶつかってくるようだった。

鋼鉄の扉がア ril を助けてくれるだろうと、そう考え俺は生を諦めた。

と、黒い嵐がやってきたかと思うと爆弾がその場から消えた。

セズクが横っ飛びに落ちてくる爆弾を蹴り飛ばしたのだ。

飛んでいった爆弾は遠く離れた山を、その身をもって削り取った。

「――大丈夫かい、ハニー？」

……かけえ。

こいつやっぱりかっこいいわ。

いや、ホモに目覚めたとかじゃそういうのじゃない。

だから落ち着いて欲しい。

「あ、ありがとう……！」

そうだ、ア ril！」

生きてるか……？

鉄の扉を開きその後ろにうずくまる彼女を見たときほっと胸をなでおろした。

「いまから言うことを……」

ア ril を扉の後ろから引っ張り出し、何かを言おうと思った。
だが言葉が遮られた。

今度は爆弾じゃない。

あの青い光が……。

シエラ達が弾道レーザーと呼んでいるあの光が……。

「嘘、冗談だよな？」

おっさんのビルから放たれていた。

以前のシエラとの探索であるのは知っていたがどうしてこのタイミングで……！

空を埋め尽くさんばかりの爆撃機を狙っているのだろうか。

空が光一筋の光が爆撃機編隊のど真ん中をなぎ払った。

溶けた鉄の悲鳴をあげ、主翼の取れた機体がきりもみしながら弾倉に入っている子供を振りまく。

地面に落ちた爆撃機は大爆発を起こしてまた大きな柱を築き上げた。

「はいいところここから逃げようぜ！

な、セズク！」

その見るものを圧倒させる光景から無理やり目をはがし、セズクの脇を突付く。

「……あっ！」

小さくセズクが声を発した。

おっさんのビルが……目を離した一瞬で燃えていた。

そのビルの体になお追加で大量の爆弾が叩き込まれている。

「おっさん！」

声にならない声を出して俺は叫んだ。
腕の中でア ril が震えている。

「ごめん、波音！
遅くなった！」

空からふわりと風圧をまとして降りてきたのはメイナとシエラだった。

待ちわびたぞ！

「メイナはア ril を頼む！

俺はシエラとおっさんのビルに行つて来るから！

セズクはシンファクシに報告をつ——！」

そういうと俺はア ril に

「自分の家のシェルターに避難しているんだ。
分かったな？」

「で、でも……！」

波音君、私またあんな心配な思いをするのは……！！！」

俺はア ril さんのデコを弾いた。

「いたっ」

「俺は死なないから。
な？」

ほら、
行け！」

ues.

This
story
contin

o n c e a g a i n (後書き)

出来立てほかほかをお届けいたします。

ア ril さんと波音の文化祭は散々でしたね……。

さて、ここからどう転ぶのか。

たのしみにしていて欲しいです。

では、ありがとうございました。

一人

俺はメイナにア ril を預けるとシエラの腕に掴まった。
もちろんいつもの移動方法、T字型である。

「おっし、行ってくれ！」

メイナ、ア ril を頼んだぞ！」

「任せときなつて」。

私は無敵だからね」

「シエラ、俺達も行こう。

おっさんのビルだ」

「分かった」

俺達が飛び、メイナも飛んだ。

セズクもアフリカの帝国郡に知らせるために飛んだとき
一発の爆弾が着弾。

大空に吹き上がった火柱にまわりつかれ今まで立っていた校舎は
コンクリートを撒き散らして崩れていった。

少し心が痛み、目を覆う。

また目を開けたとき、下を見ると荷物を持って炎の海を逃げ惑う人
々。

小さな子供もいる――。

「ごめんな……」

それを見ないように目をつぶっておっさんの燃えているビルをひた

すら目指した。

壁が大きく抉り取られあちこちから黒煙を吐き出しているビルはギリギリで立っているようにも見えた。

屋上のヘリポートは大きくその口を開けており、その口からはあの巨大なレーザーの砲身が覗いていた。

砲身の先にガラスのようなものが取り付けられている。

電気のようなバチバチしたものがその周りをまわりつきうっすらと輝いている。

「砲身内部より高エネルギー……。」

波音、ふせて」

屋上に着地した瞬間にシエラに頭を抑えられた。

体を吹き飛ばすほどの風をまとしてすぐ横を青い光が空へと伸びていく。

煙をかきちらし雲に穴を開けてレーザー光は夜空に吸い込まれていた。った。

風がやむとすぐに俺はシエラを除けて立ち上がった。

「俺はおっさんをみてくるから、シエラは爆撃を頼む！」

極めて小さなエンジン音を響かせ、また鉄の塊がビルのすれすれを飛んでいった。

「じゃあ、波音。

——死なないで」

「当然だろ」

シエラは飛び掛ると同時に青いレーザーを腕から吐き出した。

一筋の光となった弓が次々と空を覆う死鳥を落としていく。すぐに反撃の機銃の火を吐き出した爆撃機の間を潜り抜けまた一つ。弓に射られた獲物は地面へと落ちていった。

見とれそうなくらい激しい戦いだったがそんなことよりおっさんが先だと思いなおして階段の扉をこじ開けた。

うっすらと非常灯のついたビルの中は走るには簡単だった。

衝撃波によって割れたガラスが廊下に散らばっている中を大声でおっさん呼びながら走る。

念のために壁の扉にしまつてあつた銃を取り出した。

敵がない可能性は否めない。

といってもほとんど警戒なんてせずに一気に四七階まで下る。

前回はここから先でニセとの戦いになったのだが……。

ロケット弾でぽっかりと穴が開いた壁――よしここの廊下の角を曲がればすぐだ。

おっさんが部屋にいてくれればの話だが。

「つつあ!？」

あわてて側の壁の鉄棒を掴んだ。

あぶない、なんだこりゃ。

ぽっかりと廊下が消えていた。

間違いない爆弾がここに落ちてそのダメージでナイフで切り取ったかのように消えたのだ。

一つ前の爆撃だと、壁ががしがし爆弾跳ね返していたというのに……。

兵器は常に進化するっていうのは本当なんだな。

廊下の角で小さくくすぶっている炎が目には痛い。

外の赤が、ここからははっきりと見えた。

また灰と化すために燃えている、赤い街の上を黒い爆撃機が乱雑し

ている。

思い出の場所が――全部消えている、燃えている。

一度目は免れた場所もこれじゃあ……。

しかるべく我が家も燃えてしまったと考えるべきだろう。

まだやっていないゲームとかあったんだがなあ……。

どうして、こんなことが出来るんだ？

兵器の実証試験などではないだろう。

今回は連合郡の予算獲得のためだったようだが……。

今回は一体なんの目的があって？

「くそっ……！」

何にせよ、少数の白髪のクソジジイどもが自分の手元に金を増やしたいが為だろう。

いつも犠牲になるのは弱者ってことだ。

少し残った瓦礫を足場にして崩れた先へと急いだ。

ニセの戦いのときにばらばらになったあの部屋の扉を破り中に飛び込んだ。

ここにいなかったら下にいてこのレーザーを放つ指揮をとっているのだろう。

もしくはもう逃げた後……か。

電気は消え、窓の外から赤い光だけがこの部屋の中を照らしていた。いつもこの部屋は本の臭いやおっさんのタバコの臭いが充満していた。

それは今回も異例ではなかったが、少し違っていた。吸うだけで吐きそうになるほどの血の臭い。

その臭いの元をたどった。

「おっさん！」

叫んだ俺はまたすぐに言葉を失った。

ニセの後、綺麗に整理整頓されていたであろう部屋の中は無残に崩れ、本は棚から滑り落ちていた。

その中に壊れた人形のように倒れている人影が一つ……。

赤い沼に沈んでいるその人――。

血をすって膨らんだ本の傍らでぴくりとも動かない。

「おっさん！」

俺は駆け寄って人形を抱き起こした。

すっかり冷たくなった体にはべったりと血が付着して、手がすべる。震えながらも顔を確認した。

「――嘘」

あわてて名札、特徴的なほくろをも確認する。

嘘であって欲しい……そんな思いを現実には軽く突き放した。

百パーセントおっさんだった。

額に一つの焼けたような穴がある。

おっさんの目は見開かれ「信じられない」と訴えていた。

思わず手を離れた。

再びおっさんの体が沼に沈む。

「おい！」

おっさん！

おい！」

もう触れなかった。

現実なんて見たくなかった。

だから呼んだ、答えてくれると思ったかった。

親のように自分を育ててくれていたおっさんは……。

もう動かなかった。

——なんで。

なんでなんだよ……。

「ううう………」

声を殺しながら泣いた。

それでもしないと耐えれなかった。

俺を小さいときから育ててきてくれた。

親が、まさに今死んだのだ。

手元の銃を握り涙をぬぐう。

滲む視界に窓の外の炎、黒煙、そして爆撃機が映った。

全部俺の大事な場所はいとも簡単にこうして奪われていくというのか？

「連合郡めっ——！」

憎かった。

シエラ達を連れて連合郡本部に乗り込んでやろうか、とまで考えた。

膝におっさんの血が付着して、凝固する。

白いYシャツは赤に染まっているだろう。

更に強く銃を握ったときぬるっとした感覚で銃を落とした。

手についたおっさんのまだ固まりきれない血だ。

金属が床にぶつかりキーンと甲高い音を出す。

そのおかげで妙な所で俺は我に返った。

これは俺達が連合郡にしてきた事と変わらないんじゃないか？と。
大量の艦を沈めたシエラ。

超兵器を叩き落したメイナ。

直接俺が殺した人はいないとしても……。

けしかけたのは俺といっても過言じゃないんじゃないだろうか。

いや間違いない俺がけしかけたんだ。

あいつらは俺を守るとかいいうわけの分からない名目の元動いていたから……。

俺は自分の掌を見た。

血がたっぷりと爪の間にまでしみこみ、外の赤と一緒に浮き出していた。

今まで、俺は自分の手が――。

『白』だと、そう信じて動かなかった。

自分でも気がつかない内に白は赤一色に……。

ペンキで、剥がれないようにニスまでつけられてべったりと塗られていたのだ。

おっさんは憎みが回りにまわって……俺に殺されたようなもんじゃないのだろうか。

悲しみよりも虚しさが占める頭を、ビルの柱がきしむ音が占領した。

ビルの崩壊が近いのだろう。

俺はここから離れようと立ち上がった。

おっさんが死んでいるのを確認した、もうここに用はなかった。

詩乃は――生きているのだろうか。

爆撃でやられたのだとしたら……。

ベルカ守護四族の一つの血筋が途絶えたこととなるんじゃないのか？

おっさんの目を閉じさせ、落ちた銃を掴もうと手を伸ばす。

「っ!？」

その俺の腕を、一本のレーザーが掠めた。

あと少しずれていたら貫通していただろう。

「誰だ！」

俺が振り返ると一人の見知らぬ男がその手をレーザー砲に変えて立っていた。

ホリが深くて鼻が高い。

若干の髭を生やした口が薄い唇をよけい貧相に見せていた。

その口がうっすらと開くと

「――ガキか」

その男は俺を石を見るような目で見ると割れた窓から飛び出していた。

「な――」

あわてて銃を握って窓の下を覗く。

「セズク……じゃないよな？」

金髪や黒髪、沢山の人が、空を飛んでいた。

皆それぞれ背中に青い線のついた翼を持っている。

「モドキってやつか……？」

セズクと同じ。

V型とか言っていたアレか？

「シエラ――！」

そしてそのモドキが集まっている所には最終兵器F・Dシエラがいた。

戦いを次から次へと挑まれながらも最終兵器は余裕の表情で次々と襲い掛かってくるモドキに対して手のナイフで首を跳ね飛ばし、蹴りで体を粉碎する。

怯まずに飛び掛って来たモドキの首を掴み、光で蒸発させる。

だが、次から次へ滝のように襲い掛かってくるモドキに少しいらだちを感じているのもまた事実のようだった。

払ってやろうと、銃で狙いをつける。

シエラにあたりそうでもアイツならイージスで何とかなるだろう。

問題は俺に――。

人を『殺す』という覚悟があるかどうか。

今までは偽善者ぶっていたお陰でこれは正しい、これは駄目、と判断して行動に移せていた。

もう、今では出来なかった。

今までに『白』だと、そう信じてやまなかった手が……。

実は赤になっていた、何てすぐに受け止めることなんて出来ない。額のじんわりと滲み出す汗が目に入った。

「っそ……！」

汗を拭い銃を再び手に取り、窓の外に向けた。

そのときだった。

「やっぱりお前は殺しておくべきだな」

あの男が俺の真正面に立っていた。

うっすらと笑った顔は殺しの喜びに歪んでいた。

「なっ――！？」

とっさの判断が遅れ、男の蹴りを思いつきり腹に食らってしまった。その衝撃で銃を離してしまい舌打ちする。

そして一拍遅れ、とんだ俺の体は本棚に背中から叩きつけられた。

「この男で泣いていた——ということとは。

貴様、レルバルだな？」

男はおっさんの顔を見下ろした。

「なんで……それを？」

背中を押さえ痛みに歯を食いしばりつつ言葉をつないだ。

男は「簡単なことだ」と部屋においてあるPCを指差した。

嗚呼、もう少しまともな理由が聞けると思った俺が大間違いだったわ。

「なんかいられるとやっかいなようだ。

『やっかい』という簡単な理由で死んでくれないか？

なに、爆撃で死んだ人カウンターが一だけ回るだけだ。

誰も気にしないだろうよ」

男はそういつて近くにあった銃を手に取り、俺に投げて寄越した。

「取れ。

ハンデをやろう」

こいつもセズク同様のV型最終兵器モドキ。

生身の俺が勝てる相手じゃないことは確かだ。

逃げるしかない。

だが……どこへ。

俺は手にずっしりとした鉄の重みを感じた。

こいつでこの男を殺す――。

そんなことも出来るわけがない。

殺人者にも偽善者にもなりきれない自分が情けなかった。

「どうした？」

早く撃て、俺を。

貴様にその度胸があるかどうかだが」

男が挑発してくる。

「俺は死ぬ覚悟が来ている。

貴様は出来ているのか？」

男は俺をせせら笑った。

「覚悟がないくせに銃を持つ。

その愚かさが分かるか？

人を殺さないように銃を持つなんてこと。

出来ると思っていたのか？」

e s.

T h i s s t o r y c o n t i n u

一人（後書き）

おっさん……。

今までありがとう。

さようなら、おっさん……。

ってなりませんでした？

なりませんでしたか……。

次は戦闘がメインになるのでしょいか。

何はともあれ読んで頂、ありがとうございました。

迷い

男は俺を見ると「ふん」と笑った。

力なく銃をおろしてしまった俺に男は一気に間合いを詰めてくる。そのスピードを借りて足を振り上げた男は強烈な蹴りを俺の顔めがけて放ってきた。

「――！」

条件反射、と言うしかないスピードで何とか左手でガードする。

「ほう……？」

「いっつ……」

男の蹴りの力に左手の関節が悲鳴をあげる。

すまないが、そんなこと構っている暇なんてない。

刺すような痛みが来る前に、右手で男の顎へ一発叩きこんだ。

確かにそこにあったのは命中――だったのだが、さすがはモドキ。

素早く体ごと引っ込めてパンチの衝撃を緩和する。

素早く三メートルほどの距離を開けてまた男は口を開いた。

中の口が赤い。

「もう一度だけ言うぞ。

銃を取れ、レルバル。

でなければ……貴様は死ぬ」

「……………」

このモドキにも家族とかがいる――はず。
一人ぐらい泣いてくれる人がいるはずだ。
そう考えてしまうととても戦う気持ちなど起きなかった。

「へたれだなあ、おい。」

俺が殺した鬼灯の男のように」

男がさらっとそういった時も怒りすら出てこなかった。
やっぱりか。

こいつか。

そんな二言だけしか頭の中を回らなかった。

「この男もお前と一緒にだったよ。」

人はあまり殺したくない……とか。

偽善者にも程があるってもんだぜ。

その偽善の下では何人もの人が死んでいるっていうのにな」

俺は銃を握ってはいた。

だが使う勇気がでなかった。

今撃てば確実にこいつの息の根を止めることは出来る。

「連合と帝国の争いに首を突っ込んだんだ。」

いつか、殺されることぐらい分かっていたんだろう？」

「……………」

べらべらと話しやがって……。

胸糞悪い野郎じゃねーか……。

「そもそも……だ。」

貴様は人を殺さない——とか言っておきながら
銃を握っているじゃないか」

「……………」

「——沈黙、か」

にたにたと狂気の色を放ちながらしゃべる男。
今なら——殺せるか？

やるしかない……。

でなきゃ、俺が……殺される。

握りすぎて生暖かくなつた銃のグリップを握る手に力を入れた。
この銃口を男に向けて、引き金を引くだけ——。

「じゃあ、死んでもらおうか？

あばよ、腑抜け」

笑う男の後ろから何かが襲い掛かった。
金の閃光のようなスピードで。

「うおっ!？」

ちっ、貴様!!」

「……………!？」

輝くパツキンのイケメン。

「うるさいよ♪」

一筋の太刀筋が男の首を横切る。

外の炎の赤で輝く金髪。

それを赤に染めて、セズクは——命を刈り取った。

ごろんと首が転がり、血雨を降らすかのような勢いで首から赤が噴き出す。

「ごめんね、ハニー。

待たせちゃったね？」

はたたつ、と血が滴る右手の刀を普通の手に戻しながらにっこりと笑うその顔が、今は怖い。

頬についた血をふき取ろうともせずにセズクは俺に手を伸ばしてきた。

血のついていない、左手の方だ。

「立てるかい？」

セズクの手を取った瞬間に、涙がボロボロこぼれてきた。

緊張感が涙を止めていたんだろうか。

その緊張をセズクが排除してくれたおかげでダムが壊れたように涙が出た。

「う……うう……」

「ど、どうしたんだい？」

情けない話だ。

自分でとめようとしても止まらなかった。

おっさんが死んだ……。

それが俺のせいかもしれない……。

「うつ、うわあああん……」

セズクはきょんとしていたが、泣きじゃくる俺の肩を叩いた。
ぽんぽんと、はじめは遠慮がちだったが
最後には背中をなでてくれた。

「大丈夫だよ♪」

誰も波音を責めてやいないんだから」

「うう……うあうう……」

もう日本語にすらなっていない音の高低で何とか返事らしきものを
搾り出す。

何も伝わっていないだろう。

でも何かをこうやって伝えるしかなかった。

伝えたかった、自分の思うことを。

おっさんという親が死んだこと。

それによりふと、あることを悟ったことを。

「波音……?」

大丈夫……なのかい?」

俺の顔を無理やり上げさせ、セズクは心配そうに覗き込んできた。

「……うん」

まるで俺が幼児みたいじゃないか。

生意気なところも、今ばかりはとも出す気にはなれなかった。
減らず口もたたく気になれなかった。

「アリルは……？」

仁、詩乃は……？」

急に思い出したように心配になったのは友人のことであつた。

鳴いたカラスがもう笑つた、とそんなスピードで俺はセズクに聞いていた。

セズクはさすがに少し驚いた顔をしたものの

「みんな無事だよ」

さあここから出よう？」

と、俺の髪の毛をくしゃっと撫でた。

セズクに手をひっぱられ、立ち上がった。

さっきまでの俺の心を見透かしたように、セズクは言ってきた。

「波音……、自分がおっさんを殺した……とか思っているんだろう？」

自分が産み出した連鎖がおっさんを作り出しそれがおっさんを巻き込んだと。

そう思っているんだろうね？」

ふふっと口の端を上げて、やさしく微笑むセズク。

まるで俺の心を読んだかのようにそのまんまである。

こいつは本当にすごいなあ。

顔か？

顔に出ているのだろうか？

「それは僕がはっきりとここで否、と否定させてもらうよ？

波音自身の手で人を殺さなかった。

ならそれは無実で白なんだよ。

その辺を歩いている爺にだって誰かを殺したことになる。

だから波音。

自分を責めるなんてバカなことしちゃ駄目だよ？」

一気にセズクは俺にそう言ってくれた。

めったにべらべらとしゃべらないこいつがここまでしゃべるなんて。心がすつと軽くなった気がした。

ひとまずありがとう——だな。

「立てるかい？」

「……うん」

セズクの手をとり立たせてもらう。

本の間に埋もれるようにして倒れているおっさんは

思ったより安らかな顔だった。

なぜだか知らないが少し笑っているような気がしないでもない。

そう思いたい。

俺はおっさんに笑いかけた。

「——ここまで俺を育ててくれてありがとう。

さようなら、おっさん」

これだけでいいだろう。

おっさんは余り複雑な挨拶は好まなかったからな。

セズクの手に乗まって窓の外を見る。

すっかり爆撃はやんでいた。

だが妙な明るさがある。

赤や青の、力強い光だ。

恐らく、超兵器——。

それもとてつ大きな。

「ヴォルニーエルが来てるのか？」

それはもうヴォルニーエルしかありえないだろう。
星夜楼だ。

全長一キロを軽く超える巨大戦艦。

「ああ。

僕が呼んだんだよ♪

シンファクシは嫌がっていたけどね。

「連合郡本部を直接攻撃できるって言ったのさ」

セズクにつれられて所々崩れた階段を下りる。

「そこ、気をつけてね♪

崩れてるよ？」

「お、おう」

階段の窓から見て判断したのだが超兵器はぼろぼろの街をその巨体で守っているようだった。

ビルの入り口から走って出たとき俺はびびって一度足を止めた。

ビルの中からじゃ見えないことが見えたからだ。

爆撃は止んだんじゃないかった。

まだ続いていたのだ。

だがその勢いも衰えつつあったのは確かだった。

大量の爆撃機が超兵器からのレーザーでぶち抜かれてゆく。

目に残るあのオレンジ色の光は光波共震砲といっただろうか。

それが空を覆うように飛んでいる爆撃機を次々と叩き落していつて
いる。

舷側に着いた高角砲のような形の砲台から光が出るたびに一機、また一機と死鳥は落ちていく。

超兵器をこんな近くで見るのは初めてだった。

船底にもびっしりと砲台がついている。

軽く四十メートルを超えそうな砲塔の砲身は、焼けたように赤い光を放っていた。

超兵器の船底にはそれだけじゃなく奇妙な模様が刻印されていた。シエラやメイナの翼にもあるような。

幾何学模様だ。

それは見るものの頭に恐怖をこびりつかせるものだった。

「武装も稼動してる……。

ってことはイージスも張れるってこと？」

味方なら……安心だ。

シエラでもない限り落とせないだろう。

「そ」

ただ、あの超兵器にはまだ謎が多くてね。

まず第一に艦橋が狭すぎるというか……。

もともと一人だけしか乗れないようになっていたというか……」

と、セズクが話しはじめたとき、横にシエラが下りてきた。

こいつもまた血を頭からたっぷりかぶったみたいな格好をしているやがる。

「生きてたか」

「ああ」

血で染まった恐怖神。

これも俺を守ってくれている、そのための血。

「生きてたか……って、まるで俺が死ぬと予想したみたいなの？」

「……………」

「無視かよ、おい」

俺がしっかりしなくてどうする。

人を殺したくないのは当然だ。

だけど、俺は。

連合と帝国の争いに首を突っ込んでしまった。

顔ももう割られている。

またいつ襲い掛かってくるか分からないのだ。

そういえばずっと前セズクは言っていた。

『何かを守るには何かを失う』

みたいな事を。

俺はアシルを守ったからおっさんを失ったのか？

とにかくシンファクシに報告しよう。

ありのままを。

そしてからでも遅くはないだろう。

守りたいものを守る方法を考えるのは。

「『騎士団の栄光』……か」

御伽噺の題名を空に浮く星夜楼にそっと呟いた。

e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t
i
n
u

迷い（後書き）

ありがとうございました。

がつつりと遅れてすいません。

でも、何とか。

ぎりぎりセーフで滑り込みました。

ここまで読んでいただき本当にありがとうございます。

すいません。

「なあ、シエラ。」

俺ちよつとシンファクシと話がしたいんだ。

星夜楼の中に連れて行ってくれないか？」

俺は空を見上げながらシエラに話しかけた。

シエラはしばらく考えたように腕を掴んでいたが

「分かった」

そういうとこくんと小さく首をかしげた。

「さんきゅっ」

「艦首に降ろすね？」

「了解だ。」

あ、でもゆっくり頼むぞ？

痛いのにやだかな？」

「……そんなことしない」

本当かいな。

シエラは降ろすときに勢いよく地面にたたきつけるように落とすのだ。

それがまた痛い、痛い。

足の裏がじーんと来る。

「波音、気をつけて」

セズクが空を見ながら目を細めた。

超兵器とビルの隙間から見える空にはまだ爆撃機が飛んでいる。

「シエラがいるから大丈夫——だと思いたい。
ありがとうな、セズク」

「……ハニーにありがとうって言われたっ——！
やつほいつ！」

うぜえ。

言わなきゃ良かったよ……。

「じゃ、シエラ頼むわ」

「ん」

俺はシエラが差し出した手を掴んだ。

「行くよ？」

一瞬にして地面は遠く離れた。

地上からおよそ二百メートル付近を飛んでいる超兵器にたどり着く
までの時間は

ほとんどゼロに近かったと言ってもいい。

それぐらい早かった。

「イージス……。

どうしようかな」

シエラがヴォルニールルの甲板に降り立つ前にぴたりと空中で止まった。

前言撤回だな。

ゼロ以上かかりそうだ。

「破っちゃえ」

「いいのかよ……」

ぶん、と耳に小さな音が入ってきた。

イージス、最終兵器が纏う最強のバリアが起動した音だ。

「ん——」。

よし」

シエラは一人で勝手に気合を入れると右手をおりゃーと突っ込んだ。強烈な光が発し、イージスに隙間が出来たようだ。見えないから分からないんだけど。

「ついたよ」

のんびりと最終兵器がだべったとき、足が硬いところについた。

鋼鉄に覆われた超兵器の甲板のようだ。

後から帝国郡に付け足されたであろう機銃などに取り付いている兵士がぎょつとしたような顔で俺を見る。

「シンファクシは？」

俺は少佐の紋章を見せながら兵士の近くに寄っていった。

ベルカ語じゃないと通じないからベルカ語で話しかけたんだぜ？
えらくね？

それに加えて両手を挙げて、敵ではないと教えながらだ。

それに安心したのか一人の兵士が甲板の中央に塔のようにそびえる
艦橋を指した。

「ありがとう」

紋章をポケットにしまって小さく頭を下げた。
兵士はまた機銃の操作にあわてて戻っていく。

「遠いなあ」

「ね」

遠くにかすむようなところにあるなあ。

そこを目指して歩く。

いい運動になることは間違いないだろう。

それにしてもこの戦艦はでかい。

艦首付近は溝のようなものが三つ、あった。

その奥には軽くそれだけで空母を上回るような巨大な固定式の砲台
が三つ並んでいる。

何より甲板上を走っている模様だ。

生き物のように強弱を出しながら光っている。

奇妙なものだ。

固定式砲台の隙間をくぐってさらに奥へと進む。

「すげえ……」

三本のオレンジ色のレーザーが爆撃機を喰らうところだった。

そのレーザーを発射したのは三連装の砲塔である。
一つの砲塔だけで軽く四十メートル前後はあるだろう。
それがぐるりと三連装の砲身をめぐらせ、空へと咆える。

「っ！」

三連装の砲は図太い砲身からまた図太いレーザーを放って死鳥を払っている。

爆風が一切来ないのはどういうわけか。

「この発射の衝撃はイージスで防いでいるから大丈夫。
でも、もし、イージスがないと波音は今間違はなく死んでた」

火山の噴火のようなすさまじい光とともに甲高い音がまた空へと伸びてゆく。
なるほど。

イージスってやつは偉大なもんだな。
それがなきゃ俺は今、三回ぐらい死んでいたわけだから。
衝撃波で。

「艦橋まで遠い。

シエラ、連れて行ってくれ」

目測するだけで軽く三百メートルはあるぞ。

結局面倒になった。

歩くのがだるい。

足が痛い、眠い。

「しかたないなあ」

やれやれと、ダダをこねる子を慰める顔をする最終兵器。
なんだよー。

俺がそんなに餓鬼ってことかー！

「ありがとっ」

そんな心の言葉、言うわけには行かない。
正直自分でも餓鬼だとおもうんだ、俺は。

「かつこいいなあ……」

戦争なんかは嫌いだが戦艦なんかは俺、結構好きなんだ。
ロマンだろ？

男のロマンだろ？

大艦巨砲主義は男のロマンだろう？
違っかつ！

「ほら、つかまって」

またシエラに手を引っ張られ少し空を飛んだ。

「あぶねえ！」

俺の足ぎりぎりのところを機銃の弾が通り過ぎる。

「気をつけろ！」

ぺこぺこと頭を下げまくる兵士に怒号の一声を浴びせた。
通り過ぎた爆撃機から一つの爆弾が降ってくる。

それはイーリスによって九十度角度を曲げられ予想通り超兵器に命

中はしなかった。

だが、あの爆弾がこっちに降ってくるのを見ているのは余りいい気分ではない。

また一つの砲塔が咆哮した。

捻じ曲がった主翼と砕けた胴体がばらになり、重力にしたがって爆撃機が落ちてゆく。

空は蜘蛛の子を散らしたように、爆撃機が出来る限りヴォルニーエルから遠ざかろうとしていた。ようやく諦めたのだろう。

「入り口は一つしかないんだ。
すぐその前に降りるから」

その様子を眺めているとシエラにおいつ、と頭を蹴られた。
何も蹴ることないじゃないですか。

「……つてえ……。」

了解だよ、いつてえ……」

頭をなでなでしたかったが片手だけでつかまるのもまた怖い。
仕方なしに頭を振るしかない。

でもぜんぜん痛みが和らがないんだなあ。

と、バキバキ、何か巨大なものが碎ける音がした。

一瞬首の骨でも折れたのかと思いヒヤッとしたがそうではないようだ。

「波音、ビルが……」

シエラが小さく息を呑んだ。

下を見るとおっさんのビルが黒い煙を吐きながらゆっくりと倒壊し

ていくところだった。
むき出しになったレーザー砲は赤く溶けたようにひん曲がり
その砲身に走っていた模様は脈が止まったように暗い。
はじめはゆっくりだった倒れ方も、もう一発、爆弾の花が咲くと急
激に勢いを増した。
根元から折れた五十階建てのビルは大きくその身をよじり、崩壊し
てゆく。

「おっさん……」

安らかに眠ってくれ。

本当に——いままでありがとう。

また涙が出そうになってきた。

どうして人が消えてからこんな風に思い出すんだろう。

もっとたくさん、話しておけばよかった。

詩乃は、もうおっさんが死んだことを知っているのだろうか。

詩乃自身がベルカ守護四族の一人だとおっさんは話したのだろうか。

足が艦橋の基部につく。

案外ゆっくり飛んでいたんだな。

「さ、中に。」

早く行こう」

シエラに手を引かれ、また熱くなりかけた目頭を揉む。

女の前で泣くなんて情けないことはしない。

セズクの前で泣いたし。

そのおかげで吹っ切れた気がする。

涙ってのはやっぱり大事だな。

「ここ？」

「うん」

ロックをはずし、中へと入る。
暗い。

そしてすごく狭い。

まるで刑務所のようなだ。

その通路の奥に後からとってつけたような柵がついたエレベーター
が一つだけある。

「さ、乗って」

シエラがどうぞのポーズで俺をエレベーターに誘導した。

「お、おう……」

なんか怖いなあ。

俺とシエラが乗るだけでもうエレベーターはいっぱいだ。
太ったかな、俺。

「さすがに狭いね……」

もともと一人しか乗れないような設計だし仕方ないっちゃ仕方な
いっか」

そうなんだ。

なんかうつすらと昔聞いたな。

なんだっけ、『核』がどーのこーの言ってたよな。

ゴゴン、とエレベーターが動き出し体がずっと軽くなった。
やっぱり何回やってもこれは慣れないな。

大事なところがごほんごほん。

「鼻がなくならないようにね」

思わず顔を引っ込めた。

レーザーの類でもあるのか？

「――……。」

無くなったら困るから顔引っ込めとくよ」

つまり、壁で鼻が削れるよって？

そういうことか？

「それがいいよ」

俺の反応を見て笑ってやがる。

エレベーターを覗き込むように壁を見るとシエラにジョークを飛ばされた。

案外最終兵器ジョークも悪くない。

動いたときと同じようにエレベーターは急に止まった。入ったときとは逆側の壁が開き、開けた空間に出る。

「光波共震砲砲塔二番、三番。

右舷二十度、俯角三十度、エネルギー装填開始」

「高角砲十五番から二十番同一目標にロック。

合図とともに斉射」

「敵機撃墜。

敵脅威レベル四十二パーセントに低下。

半数以上を撃墜しました」

その空間は電子音が鳴り響き薄暗い。

夜だから——とかではなく画面などの見落としがないように、ということなのだろう。

ライトではなく液晶からもれる明かりでうつすらと中が見えるくらいだった。

その空間に元気なオペレーターの声がこもる。

「シンファクシ。

波音が来た」

狭い艦橋（といっても二十メートル四方はある）の真ん中に鎮座する一つの椅子。

その椅子の背もたれからちらりと見える金髪。

それがシンファクシの頭だとすぐに分かった。

雰囲気からして怖いもん。

俺をとって食いそうなもの、この人。

頭から頭蓋骨ごとばりばりと……。

怖い。

「……ふむ」

と、頷くように動くと、くると椅子ごとこっちを向いた。

足を組み、セクシーだ。

眼鏡は今は外している。

シエラと同じ赤紫の瞳が俺の姿を認めるとシンファクシの口が開いた。

「レルバル少佐。

私が下した任務はちゃんとこなしてくれたんだろうな？」

……来た。

いつか説明しなければならには思っていたけれど……。

この圧力。

恐怖という圧力に俺は押しつぶされそうだった。

手の汗がやばい。

「――は」

俺は蚊の鳴くような声をやっとしさしぼりだすだけだった。

その声がかき消されるように

「一機撃墜！」

イージス百パーセントを維持！」

オペレーターがまた叫ぶ。

シンファクシの後ろの液晶から一機の機体が火を噴きながら落ちていくのが見えた。

コックピットから三人ほどの人間がパラシュートを開いて脱出している。

その人間をレーザーは射ることなく次の目標へとロックをスライドさせた。

「どうなんだ、レルバル少佐！」

ちゃんと答えろと、そう言っているんだ！

私の目を見ろ！」

「はっ！」

びしつと背筋を伸ばした。

オペレーター達がふと心配そうな顔でシンファクシを見た。
この人が怒るのはめったにない事なのだろう。

「また一機撃墜！」

敵脅威レベル二十％にまで低下！」

そうやって報告する声も少し震えていた。

「は……その。」

シンファクシ元帥……」

俺はあいからわずの蚊の声だったが

アリルを殺すことが出来ない理由をきちんと伝えようと必死だった。
それにおっさんが死んだことも伝えなければならない。

まとめて言ったら俺が混乱しそうだ。

でも言わなきゃ。

言わなきゃ——喰われる。

「何だ？」

早く報告をしろ」

明らかにいらいらしている。

「実は……すいません元帥。

俺に殺しは無理でした——」

素直に自分の非を認め誤る。

「——そんな……」

シンファクシは俺が頭を下げたことにえらい困惑しているようだった。

「む、無理——そうか。

すまなかったな、そんな任務を任せて」

シンファクシはがっくりと肩を落とすどこを抑えた。

きれいな姉ちゃんなのにこういうところにジジ臭さがあるのが少し残念だ。

それにその姿もすごく美人なのがすごい。

頭痛が痛い。

「本当にすいません、元帥」

俺はもう一度頭を下げた。

「いや、かまわない。

教えてくれないか。

一体どうして殺れなかった？」

頭を上げたとき、シンファクシは眼鏡を拭いていた。

「それは……」

俺は言葉につまった。

なんというべきか。

連合軍側に居たアリルを彼女としたからか？

人を殺したくないからか？

なんといえればいいんだろう。

「その……」

どもる俺を見てもらえないとふんだのか

「ア ril と波音は恋人同士だから」

「シエラっ!？」

シエラがシンファクシににこりともせず報告しやがった。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

すいません。(後書き)

ありがとうございました。

いやあ、シエラさん何をするんでしょうか。

驚きですね。

ちなみに、ヴォルニールは全長1400mです。

長い、でかい、すげえ。

さすがは超兵器……と言った所でしょいか。

(ちなみにこれ一回書いて全部消えていたりします。

大変だった……、くそっ)

では、ここまで読んでいただき本当にありがとうございました。

怒号の嵐

「恋……人？」

シンファクシが怪訝な目を向けてくる。
俺はその場で立ち尽くす。

「あ、いや……」

艦橋の中が静まった。

みんな俺達の会話に聞き耳を立てているのだ。
余計に話したくなる。

これもシエラが言わなかったら……。

このおばかさんがっ——！

俺の怒りの痛みを食らうがいい。

俺は思いつき、シエラの足をシンファクシから見えないように踏みつけた。

「痛っ！

な、何……？」

シエラが少し涙目になって俺を見てくる。
だがここで無視。

「ねえ、何なの？」

何で今、僕の足を踏んだの？」

「……………」

「ねえって」

しつこく聞いてくる。

ここで返事したら負けなのだ。

というか、シンファクシがこっちを見てるんだよ。

バカシエラ、俺に今話しかけるな。

「……………ふっ」

でも、少し面白かったので笑いが鼻からはみ出た。

世界広しと言えども最終兵器を笑うなんてことが出来るのは俺だけじゃないか？

「こんのお……………」

膨れっ面をした最終兵器は俺を睨んでくるがここでもまた無視。
完璧に俺のペースだ。

ただ、予想外だったのは

「いったあ……………」

シエラも俺の足を踏み返してきたことだ。

この野朗、ええ度胸や。

少しぷっちんきたわ。

天下の足踏みボーイと呼ばれた俺の力を貴様は知らないだろう。

お前は俺を怒らせたんや。

きーっちりとその礼はさせてもらうでえ……………？

さあ、くたばれ。

我が連打足踏みの前にその膝を屈するがいい。

「痛い……！」

波音、あのね……」

「ふふ。

お前は俺を怒らせたんだ。

それ相応の痛みでその罪を償ってもらおうぞ」

呆れ顔のシエラ。

俺はますます調子にのってシエラの足を踏む。

「何をしている？」

しまった。

シンファクシが俺を凝視していた。

不自然に動く体に目をつけたのだろう。

見つかっちゃった。

「はっ、いえ……。

あの、その……」

何て言う？

天下の足踏み喜太郎とでも言っておくか？

でもシンファクシのことだ。

下手に変なことを口走ったらそこから突っ込まれる。

で、ジャッキでぼこぼこに口を開かされるに違いない。

「あの……その……」

いつまでたっても言い出そうとしない俺に痺れを切らしたのか

「――……よい。
不問にする」

シンファクシもシエラとどっこの呆れ顔で俺にため息をついた。
なんか、ホント、すいません。
失望ばかりさせてしまいました。

「……で、その恋人というのは本当なのか？」

ここ戦場なんだぜ？

シンファクシの後ろのスクリーンではまだ超兵器の砲が火を吹いて
爆撃機をがんがん叩き落しているんだぜ？

そんな中俺に聞か、普通。

独特の恋話の雰囲気、外の戦場とはまったく違った雰囲気としてこ
の中に流れていた。

人の恋話にシンファクシも興味津々なことから、やっぱり女だなあ、
と実感する。

ぶっちゃけほっといてくれ。

「え……と。

その……」

「早く発言したまえ。

どこまでいった？」

いくも何もどこも行っていない。

キスすらしてねーんだぞ、毎回変な邪魔が入るお陰で。
なんでもかは知らんが。

邪魔されている方としては果てしなく腹が立つんだが。

「えーとですね……」

仕方ない、言うか。

言うしかないか。

と、俺が腹を決めて口を開いたときだった。

「また一機撃墜！

シンファクシ元帥！

これで敵の脅威レベルはゼロになりました」

わっと、艦橋内が沸きあがる。

シンファクシは俺から目を離れた。

髪の毛を整えた後シンファクシは立ち上がって

「よくやってくれた。

一旦、ここはひくこととする。

ここは敵地のご真ん中だからな。

機関全速で直ちにこの空域を離脱だ。

一気にアフリカの帝国郡本部まで帰ることとしよう。」

シンファクシがそういつて席に座った。

目は俺を見ている。

あーあ、逃げれると思ったんだけどなあ。

駄目でしたか……。

「で………だ。

レルバル少佐、貴様どこまで行ったのか正直にだな……」

シンファクシの話を遮るように甲高い音が鳴り響いた。

目と目の間にしわを寄せてむっとした表情のシンファクシに

オペレーターが状況を伝える。

「元帥！」

通信が入っています！

発信源は……ハンザと名乗っています！」

シンファクシの顔にさっと、怒りの色が差した。

顔が険しくなり、手に鉄製のペンを持つ。

それをくるくる回しながら

「私に回せ。

秘匿回線で取る。

コード25141Aだ」

シンファクシは座席についた電話を取り耳に当てた。

「了解です」

オペレーターがコードを打ち込み決定ボタンを押す。

お、何だ。

この調子だと俺は恋話をのろけなくてすむんじゃないか？

だべるのはあまり好きじゃないんだよ。

ちなみに、のろける、もだべるも言うとおんなじ意味の動詞だからな。

分からない人のために一応言っておく。

「通信、開きます」

オペレータの張り詰めた声に、さっきまで勝利に沸いていた艦橋の中がしんと静まった。

シンファクシも緊張の面持ちで受話器を握り締める。

《久しぶりだなあ、シンファクシ》

なんか聞き覚えのある声だな。

確かこの声……。

もしかしてハンザって……ア Ril 父!?

かけえ、名前。

俺も永久ハンザとかが良かった。

波音ってお前……。

「やあ、ハンザ。

久しぶりだな」

シンファクシも皮肉に聞える返事を返した。

売られた喧嘩を買ったわけだ。

ここで互いにだんまりの時間が来る。

「ハンザってア Ril 父?」

シエラがこそつと俺に聞いてくる。

「多分……。

こんなしゃべり方するとは思わなかったけどな」

俺もこそつとシエラに返した。

「……用件を聞こうか」

シンファクシが折れて、ようやく口を開いた。

この二人、本当に仲が悪いんだな。
怒りというよりかはアシル父を殺す手段を今シンファクシは考えているに違いない。

なにより彼女は今超兵器を手に行っているのだ。
すぐにでも殺すことが出来るだろう。

それより驚いたのは俺はこんな声をしたアシル父を見たことがない。
こっちが本当の面だったと言うことだろうか。
いつも見せているのは表でこっちが裏……。

《なあと、簡単なことよ。

一つ頼みがあるだけだ。

とってお前にも頼みたいことがな》

シンファクシは顎をかすかに動かし、部下に命令した。
目で承諾を述べた部下は液晶に浮かぶボタンをいじる。

「頼み……だと？」

貴様、ふざけているのか？

死にたいのか？」

《いやあ？

本気も本気さ。

本気と書いてマジと読むぐらいにな》

おっさんジョークか。

おもっしょねーぞ、おい。

場が一気に白けたぞ。

何でこの場で使おうと思ったのか理解に苦しむ。

「ふん……」

笑ってんなよ、元帥！

どんだけ沸点低いねん！

そのシンファクシに一人の部下が近づき、耳元でこっそりと報告した。

「目標、ハンザ宅にセット完了です。

合図で一斉射撃できます」

その声はこっちに意図的に漏らしたのか、はっきりと聞き取ることが出来た。

オペレーターなりの配慮だったのだろう。

これは、シンファクシがその気になればア ril 父の家は吹き飛ばす……ということ。

連合郡の爆撃を受けなかったあの無傷なところ。

そこに次々とレーザーが叩き込まれることになるのだ。

超兵器の、最終兵器並みのレーザーがな。

《……で頼みというのはだな。

その、なんだ。

非常に言いにくいことなんだが……》

「……………」

ア ril 父の声は恥ずかしがっていた。

急にア ril 父の威厳がぐくと下がった。

シンファクシもそれを感じたのだろう。

頭の上に大きな？を浮かべている。

そして、このときのア ril 父の声は俺を息子として見ているときのようだ。

感情を隠せない人なのだろう、多分。

諜報とか、スパイとかには不向きだな。

人の上に立つ……としては情熱的でいいのかもしれないが。

「言いくいこと……？」

何だ。

言え、機密事項か？」

機密事項だと余計にいえないでしょう、元帥。
落ち着いてください。

《いや……。

俺達一家を、帝国郡にかくまって欲しいんだが》

へ……。

俺ですら混乱するというのにシンファクシが混乱しないわけがない。
ましてやそれがオペレーターとかになるとなおさらだろう。
そんなわけで一瞬の間が空いた。

「ふざけるな！！！」

シンファクシは顔が赤を通り過ぎて青になっていた。

手に持っていたペンをへし折る。

すげえ握力だ。

あれ、鉄で出来てるんだぞ。

それをへし折るなんて……。

絶対にこの人は怒らせたら駄目なタイプだ。

「貴様が我が一家にしたことを忘れたとは言わせん！
無関係な永久家まで巻き込んだではないか！

それも鬼灯という平和を望む一家を引きずり出すために！
貴様は一体何を考えていえるんだ！！
このいかれた人殺しが！」

人殺し——。

《……俺は歳を取った。

もう、小さなガキが空襲に怯え、人の死に怯えるのを見たくないんだ》

アリル父は疲れ切った声をしていた。
ぐったりと張りが消えていた。

「勝手なことを言うな！

貴様が連合に寝返らなければこの戦争ははじまらなかった！
この世界戦争で何人死んだと思っている！
一億を超える人間が死んでいるんだぞ！？」

《……。

本当に俺は愚かなことをしたと……。

娘に——言われて分かったんだ。

娘は俺の今までやったことを全て俺に言って聞かせた。

そこで俺は我に返ったんだ。

自分の娘に嫌われるようなことを俺はやっていたのか、と》

アリル……。

言ったのか、親父に。

認めたくはなかっただろう、自分の父が人殺しだと。

俺は嫌だ。

自分の親が人殺しなどと絶対に認めたくない。

「貴様……！」

《頼む。

俺は殺してくれて構わない。

ただ、妻と娘だけは……》

「……………」

《守るものがあるとは……、こんなにいいものなのだな》

アイル父の声はさっきまでの声とは逆のものだった。

守るものがある……？

妻と娘ということか。

自分勝手だ。

俺の肉親、姉を殺しておいてその台詞か。

ues.

T h i s s t o r y c o n t i n

怒号の嵐（後書き）

ありがとうございました。

シンファクシ、どんな心境なんでしょうね。
波音も……どんなことを考えているのやら。

ア ril 父、ハンザって名前です。

かけえ。

なんだこの名前、にくたらしい。

交渉術

「よからう。

妻と娘をまずこちらに寄越してもらおうか」

シンファクシの冷めた声が張り詰めた空気を揺らした。

腕を組み、その目はハンザ、つまりアリル父をじっと見つめている。めがねが液晶の光を弾き俺からはシンファクシが何を考えているのか読み取れない。

《……すまない》

アリル父が薄っぺらい謝りを出した。

少しでもシンファクシの機嫌を取っておこうということなのだろう。その意図に気がついたかどうかは明らかではないが

「ただし、貴様が変なまねをしたら……。

遠慮なく殺す。

覚えておくがいい」

シンファクシは聞いているこっちがひやりとする殺気を含んだ声を返していた。

そのまま受話器を元の場所に叩きつける。

「くそ……。

忌々しいクソ男だ」

シンファクシはそういつて首に手を回した。パキパキと骨がなる音がする。

「出てきました！」

いち、に……、三人います！」

オペレーターが液晶に豆粒のように映る人物を目を細めてみていた。シンファクシはにたりと笑うとオペレーターの頭を小さく叩く。

俺も出てきた三人を見たくて小さな窓から外を覗き込んだ。

窓の外には燃え盛る街と真っ黒な空だけが映っていた。

ただ一箇所を除いて――だが。

炎の海の中、陸の孤島となったア ril 家の前。

あのクソ広い中庭のような場所にまた米粒のようなみつつの人影が出てくるのが見えた。

「拡大しろ」

シンファクシのその言葉で俺は場所を移動した。

今度は大きな液晶パネルを見ることとする。

液晶に映った三人が拡大されてゆく。

制服姿のままのア ril、そしてア ril を少しお姉さんのようにしたマダム。

その二人の肩に手を置いているのはア ril 父、筋肉がすごい。

「無事みたいだね」

シエラがその映像を見て俺に「ね？」と首を傾げてきた。

ああ。

良かった、無事で。

メイナが連れて行ったア ril は怪我一つもなしに立っていた。

「元帥、これを」

「ん？」

ああ、すまない」

シンファクシに一人のオペレーターが自分のヘッドフォンを渡した。それと同時に艦橋内スピーカーのスイッチを捻る。

この乗組員に不安を抱かせないための配慮だろう。

お陰でスピーカーから流れてくるア ril 父の声は俺の耳にもぼつちり届く。

《……こちらが見えるか？》

ア ril とマダムがしゃべる声がかすかにその通信の後ろから聞える。超兵器に驚き、言葉を発さざるをえないのだろう。

そりゃ驚くわな。

出てきて全長一キロを超える巨大な戦艦が空に浮いていたら。

「ああ」

ぶつきらばうに答えてシンファクシは腕を組んだ。

何かを考えているのだろうか。

《俺は……どうすればいい？》

まるでこちらが見ていることを分かっているかのように

液晶の中のア ril 父が両腕を広げてわかりませんのポーズをした。

「……そこで待っている。

今、我が艦から迎えを出す」

シンファクシはマイクにそう吹き込むと飛行甲板につなぎ司令を下した。

迎えといってもあれだ。

垂直離陸が出来る戦闘機だ。

《こちら飛行甲板です。

三機のF27を発進させます》

「目標は暴れるかもしれん。

慎重にな」

《はっ！》

三機が超兵器の後部に設けられた大きなヘリポートから飛び立ってゆく。

船体が巨大なお陰でこういうのもつめるようになったらしい。

もともとはついていなかった設備らしいが。

エレベーターのようなものでついている。

一体何機収納しているのやら。

第一期一九八〇年に建造された日本帝国の《戦艦大和》が確か五機つんでいたから……。

軽く二〇機程度は積んでいるのか？

軽空母並だな、これはすげえ。

飛び立ってすぐに『お迎え』の船はア ril 家の広大な敷地内に着陸した。

《……これに乗ればいいのか？》

巻き上がる煙に覆われ見えなくなるア ril 父が少し不安なのか部下に赤外線レーダーに切り替えさせる。

戦闘機からでる排気のそばに人の形をした三人が立ち、それぞれ分かれて乗り込んでいるのが見えた。

「早くしろ。
遅い」

シンファクシは明らかにいらいらしていた。
一刻も早くこの場所からどきたいのだろう。
なんていったって敵地のど真ん中だもんな。

《さ、ア ril、早く。
気をつけて……そうだ。
さ、お前も早く乗るんだ。
私は最後でいい、早く》

ア ril 父は娘と妻をせかしながら自分も半分だけ乗り込む。
二人がきちんと乗り込んだのを確認してようやく最後の足を戦闘機の中に入れた。
三機の戦闘機はぶつからないように適度な距離を保ってア ril 家から離れる。

「艦橋からロバート隊各機へ。
直ちに状況を報告せよ。
荷物は無事か」

《はっ……。
今三人を収容した。
今から帰艦します。
なお、荷物は心配されたように暴れる気配はありません。
いたって静かです》

「ここで命を捨てるほどバカじゃないか」

その報告を聞いてシンファクシは小さくそう呟く。

「一度通信を切る。」

貴隊の帰艦を心から待っている」

《こちらロバートワン、了解しました》

ぶちん、とスイッチを切る音がした。

艦橋すれすれの所を三機の戦闘機が横切る甲高い音が聞える。
無事に収納に成功したのだ。

戦闘機が入ってくる場所を一時的にイージスを消しさる司令を出して
シンファクシはつかれきった顔を天井に向けると椅子に座り込んだ。
長いため息をつき目をつぶる。

お疲れ様です、元帥。

それはいいのですが俺はいつまでここにこうやってスタンダップし
てりゃいいんです？

永遠、なんて言わないで下さいね？

「……っふー……」

目をつぶり深呼吸をする若い元帥は足をまた組みなおした。

明らかにその顔は疲労に包まれている。

この方、ちゃんと寝てるのかな。

美人が台無しな気がするよ。

「さて、レルバル少佐。

思わぬ邪魔が入ったな。

次は貴官のことだが……」

しばらく目をつぶり疲れを取っていたのだろう。
少しの時間がたったと思ったらシンファクシは俺を問い詰めようと
身を乗り出した。

「はい」

やっぱり根掘り葉掘り聞かれるんだろうか。

あははーうふふー【禁止用語】とかまで。

だから、俺はどこも進んでないんだって。

なんて言おうか。

シンファクシは俺がDTじゃないよっ、て言うまで質問をやめそう
にない。

残念、俺はDTだ。

「と、思ったが疲れたからもういい。

しばらく不問としよう。

貴様には第二十四区画の一一九〇部屋をやる。

そこでアフリカに帰るまでのんびりするがいい」

え、行っているの？

「はっ！」

少し返事が遅れてしまった。

もう俺は不問？

ということは用無し？

っしょ、きた。

「帰りはのんびり行くぞ。

二日ぐらいかけて帰る。

貴様の相方、仁は隣の部屋だ。

またその隣にシエラとメイナがいる」

仁もう来ていたのか。

道理で姿が見えないはずだ。

「あの、セズク……は？」

俺が気になって尋ねたとき後ろからがばっと抱きつかれた。

「ひゃっ!？」

「——ここだよ♪」

「ばっ、離れろーっ!

抱きつくな、俺の胸をさわさわするな!」

やめんかい!

気持ち悪いだけなんじゃっ。

「えいっ」

「マイハニーはかわいいごぼう!？」

俺の胸を揉みあげてくるこの男のわき腹にシエラの蹴りが入った。
イケメンさんには不釣り合いな「ごぼう」とかいう音をたててセズク
が艦橋の壁に激突する。

「あまり暴れるなよ」

元帥は部下が持ってきたコーヒーをすすった。
とめようよ、元帥。

「が……ふ……」

壁は流石は超兵器というほど頑丈である。

セズクがぶつかっても凹みもせずにセズクの体を受け止めて見せたのだ。

分厚い装甲のお陰だろう。

俺はそう思うとセズクから目を離して元帥に戻した。

「さて、鬼灯の野朗もこの艦に乗せて連れて帰るとするか。

一体どこにいるのやら……」

コーヒーを全部飲み終えてシンファクシがそうぼやいた。

俺はその呟きを聞いてしまった。

聞かなきゃよかったと思う。

「あっ……」

だけどそれで思い出したのもまた事実だ。

あまり伝えたくない出来事だが伝えなければならない。

「その……元帥」

俺は静かに元帥に話を切り出した。

そつと、だぞ。

割れ物注意だ。

八つ当たりで俺が殺されかねんからな。
まだ死にたくはないし。

「どうした？」

俺の声になにやら不穏な色を嗅ぎ取ったか
シンファクシは顔を緩ませず返事を返してきた。

「その、おっさん……あ、いえ。

あの、……鬼灯のおっさんが……死にました」

俺は小さくだが確実にシンファクシに伝えた。
戦闘機のエンジン音が近くなり、遠のいた。

「―――！」

シンファクシは椅子のひじおきを叩いた。
またオペレーターの間中がびくりと震える。

「俺が行ったときにはすでに……」

シンファクシは小さく「そうか」といっただけだった。
コーヒーマグを握る手が小さく震えている。
シンファクシは目を閉じてうつむいた。

「それと……」

「何だ？」

「まだ何かあるのか？」

「……その。」

おっさんには子供がいるんです。

詩乃という……子供が」

俺がそれを伝えたとき、シンファクシは目を見開いた。

「それは本当か!？」

よかった、守護四族の一族が消えるところだった!」

「おうおうおうおう」

俺の肩に手が置かれ興奮で自我が効かない元帥に揺さぶられる。

酔う、酔う。

元帥ストップ、やめて。

「その子も……一緒に連れて帰るとしよう。

レルバル少佐、連れてきてくれないか?」

まだ興奮しているのか頬を赤く染めて俺に命令してきた。
断るわけにはいかないだろ。

「分かりました。

シエラ、行くぞ」

俺は敬礼をしてシンファクシに背を向けた。

「頼んだぞ!」

今だ壁にもたれかかって動かないセズクさんとその横に立つシンファクシは

俺になぜか笑顔だった。

ホモ野郎の笑顔はきつと、嫌な笑顔だろうな。
エレベーターに乗り込み扉が閉まる。

「……ふー。

すげえ緊張した。

こわかったあ……」

ようやく一息つくことが出来た。

元帥怖いんだもん。

「おつかれさま」

俺の隣に立つシエラは「うーん」と伸びをした。

お主も疲れていたか。

そりゃあれだけ長い

「というか、お前な。

どうして恋人同士ってばらしちゃったのよ。

アレがなければもっとスムーズにだな」

俺、お前って呼び方は極力使わないようにしているんだがたまに使ってしまふときがあるんだ。

今みたいに。

俺が抗議するのをさらりと受け流すかのようにシエラははにかんだ。
なんだ、何か言いたいこともあるのか？

「でも、あそこで僕が言わないと……」

エレベーターが止まった。

シエラに背中を押され艦橋から外に出る。

「シンファクシ、きつとア ril の家に爆撃光を叩き込んでたよ?」

「……………」

そうか……。

言われて見ればその通りだ。

あの元帥のことだ。

間違いなく即効でア ril の家を消し飛ばしていただろう。

「さ、つかまって。

行くよ」

シエラが俺に手を差し出す。

俺はちらりと、霞みのように小さなヘリポートに目を移した。

三機の戦闘機はそこに着陸して羽を休めている。

無事にここにたどり着けたのだろう。

「さ、飛ぶよ」

シエラの機動力はいわずもがな。

あっという間に地表すれすれを飛ぶ。

湧き上がる火の粉を消し飛ばし、俺達を通った後の火は消え焼けた道になっている。

「すぐ下の学校から探そう。

レーダー使える?」

「使えるよ。」

でも名前までは分からないからいろいろと確かめなきゃだけど」

「あと俺を頼むから火の中にくべるようなまねはしないでくれよ？」

俺は下を見た。

あつつそお……な火が舌をちろちろと出して舐めようとしている。
シエラのイージスがなかったら今頃熱で窒息死しているだろう。

「下は灼熱地獄なんだ。

俺は人間で、よわっちい存在なんだ。

だから落とすなよ？」

弱い存在……。

「分かった」

シエラは俺を見ないで返事だけした。

自分で言っただけだった。

セズクに話をしたとき、あいつは……。

『何かを救うには何かを失う』って。

そう言っていた。

俺がおっさんを失ったことによってアリルが……。

そういうことなのか？

「降りるよ？」

急に高度が下がった。

学校の燃える校庭が下に広がっている。

もともと屋台の並んでいた校庭は肉が焼ける臭いやビニールなど焼けて出る

黒い黒煙に覆われていた。

「だから！

ここは火の海だろうっ！

人の話を聞いていたのかお前は！」

「ごめん」

謝って済むなら警察はいらねえっ！

T h i s s t o r y c o n t

i n u e s .

交渉術（後書き）

ありがとうございました。

少し早めに投稿させていただきました。

実はおいら、今週の土曜日、日曜日と入試なのです。

そんなわけで……ええ。

ちよつと早めの更新です。

読んで頂きありがとうございました。

ついでにいうと14日はおいらの誕生日でした。

さあ、プレゼントとしてポイントを入れるんだっ↑オイ

背筋が凍る思いだぜえ、ふうははあ。

「えへへじゃねーんだよっ！

俺が死んじゃうっ！」

せせら笑うシエラに小さく突っ込みを入れつつ下界に目を凝らす。
煤が空気と共に舞い上がり炎の赤のグラデーションが映える。

「別にいい」

少し考えてからさらっとシエラは俺に笑った。

その笑顔はまぶしいものだ。

最終兵器だつてのにそんな顔するんだな。

「……………ひどいな、あいからわず。」

俺はぷいっと彼女の顔を見ないようにしてふてくされた。

まったくもってひどい。

はじめてあの遺跡で出会ったときといってることがまるで違う。

心変わりか。

お兄さんはかなりさびしいよ。

ちくりちくりと悲しみを心に下を探しつくす。

「見落とさないで」

「分かってる。」

シエラもレーダーちゃんとやれよ」

「え…………分かった！」

元気だな、急に。

どうした情痴不安定か。

「何が分かったんだ？」

「レーダー使うってこと」

「え……………」

もう、何で——こう。

おーばかさんなんだろうか。

楽しいからいいけど、こういうときぐらいはまじめにだな…………。ブツブツ口に出さないように愚痴を垂れる。

と、校庭でちらりと何かが動くのが目についた。

やや、これは報告申し上げつかまつるぞ。

「おい、シエラ、あれ！」

「……パンソロジーに反応。

生き物ではあるみたい」

唸りつつ最終兵器は報告した。

あるみたい…………って？

「形は？」

「丸」

丸？

聞き間違えたか？

丸い生物って何がある？

こたつの上でまるまるくなる猫？

「もっかい言って」

「丸」

聞き間違えじゃない——だと？

じゃあなんだ。

丸って何だ。

「丸って……や、とりあえず見に行こうぜ」

掴んでいる手をぱしぱしと叩いた。

「生き物なら助けてやりたいし」

「分かった。

どのへん？」

最終兵器は眠たそうに位置を聞いてくる。

頭に霞みでもかかってんのか。

「あのあたり。

あの赤いところ、まだ燃えてないところあるだろ？」

校庭の隅にあるまだ火が届いていないところを指差した。

「わかった。

そこに降りればいいだろ？」

何かこえーよ、その言い方。

いつも昔にくらべて表情は豊になってきたから分かるけど
昔の無表情のままだったら怒ってるようにしか聞えないよ……。

「よっ……と。」

どれだ？」

地面に足がつくやいなやシエラに聞いた。

「あれ」

そつと人差し指を向けた先に

「にーにー！」

可愛い鳴き声のその物体がびよんぴよんはねていた。

おやおや……。

その物体は大きく飛翔すると俺の肩に飛び乗った。

軟らかい。

「ルフアー？」

「にー！」

……すっかりこいつの存在を忘れ取った。
がっつりと頭から欠落していた。

よく生きてたなあ。

生きてるのがすごいな。

——でもこいつシエラと同じ細胞から……。

いや考えるのはやめておこう。

俺の肩に乗っているのも最終兵器だなんて考えたくない。

ESSPX細胞なのは分かったけどもうあれだ。

うん。

バイオテクノロジーってすごい。

「よーしよし」

ルフアーを上からつまむ。

プリンのように軟らかい。

「にーにーっ」

すりよってくるルフアーの頭をなでなで。

「波音。」

ペットはいいけど詩乃を探すのが先」

シエラは冷静にルフアーを触った。

「あ、軟らかい——！」

「だろ？」

少し笑みがこぼれた最終兵器ほどほえましいものはない。

や、ア ril には敵わんけど。

いや前言撤回。

両方かわいい。

優柔不断な俺はまじでアホだ。

「ぷにぷに」

「おい、おい。」

お前詩乃を探すって言ってただろうが」

触るのに夢中のシエラに注意する。

するとその言葉を聴いていたかのように

「にー！」

シエラに触られながらルフアーが肩ではねていたかと思うと地面に降りた。

ボールみたい。

地面に落ちたショックで少し弾んでやがる。

「にー！」

丸が下を指した矢印に変わる。

そういえば変形するんだったな。

ESSPX細胞の塊だもんな。

矢印が下を向いているってことは何かを発見したってことだろう。ひょっとするとこの下に人がいるのかもしれない。

「シエラ」

「……いる。」

一人、奇跡的な組み合わせで隙間に納まってる」

「瓦礫、飛ばせるか？」

ここは校舎の壊れた瓦礫が積もる場所だ。

人以上の大きさがあるのがごろごろしてる。

俺はシエラにどうぞのポーズで場所を譲り渡した。

「まかせて」

シエラは右手を差し出すと瓦礫が何かに弾かれたかのようにそれだけで吹き飛んだ。

吹き飛んだ瓦礫はまだ少し形の残った校舎に刺さる。

コンクリートとコンクリートがぶつかり破片が飛び散る。

「まだもうちょい」

ルフアーはまだ下を指している。

次々と飛ぶ瓦礫が次第になくなり、校庭の土が見えてきたときだ。

「いた！」

黒髪が目に入った。

あわてて瓦礫の隙間から助け出し顔を見る。

「詩乃だ！」

いたぞ！」

あらかたどこら辺にいるのか分かってよかった。

実行委員なんてこのテント周辺にしかないからな。

「おい、しっかりしろ！」

大きなお声を出して詩乃に呼びかける。

このときゆすったりはしない。

逆に悪化させたりしたら嫌だし。

何よりにわかの治療は死に繋がることもあるからだ。

「は……のん？」

頭を打ったのか血が出ている。

詩乃の頭を支える方の手はもう血でぬるついていた。

あわててシエラに詩乃を預け

「はやく詩乃をヴォルニーエルへ！」

俺はもう少し生存者を探してみる！

あとメイナ呼んで来て」

命令を下した。

頼んだぞ。

「分かった」

最終兵器は丁寧に詩乃をイージスに包んで持ち上げると光の尾を曳きながらヴォルニーエルへと飛び去った。

「あつつ……」

周りから迫る熱がすぐに来た。

シエラの飛び去ったとは肺を焦がすような灼熱の空気が体を包む。
空へと立ち上る黒煙を下から見上げるのは何かものおかしい。

こういう光景、見たことがあるな。

昔おっさんが作ったゲームのような景色が目の前にありありと浮か
んでいた。

今考えてみればあれ、結構よく出来たゲームだった。

「誰かいませんかー！」

誰かー！！！」

「にーにー！」

大声で周りに呼びかける。

返事の代わりに風がごとく唸り俺の服を少し焦がした。

鼻を突き、むせ返る臭い。

思わず咳き込み、胸を押さえた。

「誰かっ——！」

誰か……げほっげほっ……！！」

誰でもいい。

返事してくれ。

同級生なんて贅沢は言わない。

どこにでもいそうなおっさんで構わない。

だから……。

「誰か……」

「にーにー！」

肺に潜り込んだ煙は何度も俺の咳を引き起こし大声を消してゆく。
しぼんだ肺が空気を取り入れようと膨らむもまた煙が入り込み咳を
誘発する。

次第に息がつまってきた。

膝について空気を求めて口を開ける。

「だ、だ……ごほっ」

だんだん目の前が暗くなってきた。

酸素が足りない。

周りで燃え盛る火のせいだ。

シエラに命令して、えらそうにしていたから罰が当たったのだろう。
諦めかけた俺を蹴り飛ばすように急に空気が冷え、ゆっくりと迫っ
ていた火が爆風に吹かれ、消える。

それと同時に煙なんかもかき消され急に息がしやすくなる。

「お待たせ」

メイナがすっと降りてきた。

短髪が揺れる。

シエラの同じ赤紫の瞳が煤まみれの俺を映した。

「ありゃ、やっぱりすごいねえ……」

私のリーダーに映ってる人影をみても……」

メイナは髪をかきあげながらふっとため息をついた。

ルファアが跳ねながら矢印から丸に戻り俺の肩に乗りなおす。

「生きている人はもういないねえ」

逆に詩乃が生きていることが奇跡だったってことだ。

メイナが差し出してきた手を掴み立ち上がらせてもらった。
小さくお礼を言ってから

「よし、もういいだろ。

……帰ろう」

足元にあるものを見ないようにしてメイナに伝えた。

冬蟬や彗人兄さんは……。

死んでしまったのだろうか。

今は――考えたくない。

足元に転がった焼け焦げた肉の塊を見てそう感じた。

手の形だったのだろう、恐らく。

動物などにはないであろう細く鋭い骨の除く肉……。

「あまり見ないほうがいいと思うよ？」

やんわりと注意してくる。

「……ああ」

メイナのイージスがなかったら俺はこの仏と一緒に転がることになるだろう。

成仏してくれよ……。

「行こう」

火の勢いがまた増してきた。

メイナに捕まり上空で待つヴォルニエルへと飛ぶ。

ヴォルニエルのイージスは解除されていたためそのまま甲板に降

り立った。

そこからまた俺の街を見下ろした。

赤一色に染まる街。

……連合郡め。

俺の家があつたはずの場所はぽっかりと大きな穴が一つ開いているだけだった。

部屋の中にあつたはずのたくさんのゲームやCDなんかを思い出して少し憂鬱になる。

唯一の家族との思い出の場所。

それが一発の爆弾で吹き飛んでしまった。

涙が出る領域を超えてなんか呆れた。

軍服を着て甲板をかける兵士達は皆勝利にわいている。

俺はその兵士達の間を潜り抜け歩く。

一人だけ、なんだか惨めだった。

「ねえ、波音。

部屋に行かない？」

俺の隣を歩いていたメイナがくいつと手を引っ張った。

部屋……。

シンファクシが俺に与えてくれたあの部屋か。

見ておいても悪くはないよな。

「行く。

仁もいるんだよな？」

誰かと話していないとやるせなかった。

今度は飛ばずに歩いて艦橋までたどり着いた。

その艦橋の根元に新しく付け足されたっぽい扉をこじ開け、中に入る。

鉄の臭いが鼻をつまむ。

それを我慢して手すりのついた階段を下った。

「ほら、開けるよ?」

「おう」

メイナが十五ヶタほどのパスワードを入れると軽いメロディーと共に扉のロックが外れた。

「H i g n e a」(どうぞ)

ベルカ語でメイナは俺に譲るしぐさを見せた。
たいした気遣いだ。

扉を開き、中に入ると戦闘艦とは思えないほど綺麗な廊下に出た。
しかも結構広い。

「へえー、中はこんなになってたんだあ。

私は何度か超兵器の中に入ったことあるけど
ここまで綺麗なのは一隻だけだったよ」

メイナがきよろきよろを周りを見渡しながら飛び跳ねた。

テンション上がってますな。

確かにいつまでも俺のようにセンチメンタルにいるのもどうかと思うが……。

切り替えの早さには本当に驚かされる。

「おーい!」

後ろから声が聞えたから振り返ると仁がいた。

ぴょんぴょん跳ねている。
ウサギか。

「よお、仁」

俺はつかつかと早歩きで仁に近づきヘッドロックをかます。

「ぐえあ」

「仁ー！」

泡を吹いて倒れた仁をあわてて助け起す。
そこまで行くとは思わなかった。

すまねえ。

それにしても……。

「よく生きてたな」

仁は「いてて」と呟きながら

「いやあ、もう駄目かと思ったんだけどよ。

セズクが助けに来てくれたんだ。

な？」

俺の後ろにいるセズクに目配せした。
いつの間に。

「ああ♪」

俺が振り返ったときには既にホモ野郎はぴったりと俺に密着してい

やがった。

「ひゃっ!？」

また後ろから抱きつかれた。

おまえなあ……。

「離せ、気持ち悪い」

嫌悪を込めた言葉をぶつける。

だが蛙の面に水。

まったくもってケロとした顔でセズクは俺の耳に息を吹きかけてきやがった。

ぞくぞくつと鳥肌が立つ。

ちなみに今のは、蛙とケロをかけている。

お気づきになった方も多いと思う。

「落ち着け、バカ」

「大丈夫、落ち着いてるよ♪」

僕はいつも冷静に興奮しているだけで」

それ駄目な感じだー!

「お前、バカだろ、本当にッ!」

それにしてもこいつの怪力は何とかならないのか!?

廊下でもみ合っていると（喧嘩的な意味で）邪魔だろうに。

「やだなあ♪」

そんな事と言っても体は喜んでそげぶ」

とうとう見かねたメイナがセズクを蹴り飛ばしてくれた。
すつとんだセズクは壁にぶつかり轟沈する。
本日二回目じゃないか？

「詩乃をつれてきた。

それに……」

俺がセズクを横目に仁に話しかける。

ここまであったこと、全て話しておかないと。

口をまた開いたときだった。

また背筋を凍らせるような声が……。

「波音君っ！」

n u e s .

T h i s s t o r y c o n t i

背筋が凍る思いだぜえ、ふうははあ。 (後書き)

ありがとうございました。

波音アホの子でした、やっぱり。

次回、ア ril さん登場。

そしてヴォルニールはアフリカへ……。

さてどうなるのやら。

では来週をお楽しみに！

後ろは振り向かない。
振り向いてたまるか。
絶対に、絶対に振り向かないぞ。
決意を決める。

「……？」

波音君？」

ぎゅっと、温かいものに手が握られた。
小さいけど温かい……。
これをされて無視は無理だわ。
決意が崩れる。
あきらめてア ril さんに話しかけることにした。

「……………」

どうした？」

俺は観念して俺の手を握った主、ア ril を見た。
ほっぺを膨らませ、むっとした顔で俺を見上げているア ril さん。
上目遣いとか反則ですけど。

「波音の友達だね、ハロー☆」

セズクがやや固まりながら俺とア ril の小さな隙間に潜り込んできた。
何をするつもりなんだ。
ア ril の顔に苛立ちが浮かぶ。

「いえ、彼女です」

ア ril は笑いながらセズクをおしのけ、俺にね？と尋ねてくる。
まあ……事実だからな。
否定はしないぞ。

「いーや、お友達だね♪」

だって、波音は僕のものだもの♪」

それこそいーや違うね。

なして俺がお前のものなんだよ。

いつからだ、その基準は。

頭に茸でも群生してるのか。

「いえ、波音君は私のものですっ！」

そうだ、それもちよつとどうかと思うけど一応正しい……はず。

いけいけ、ア ril さん。

俺は応援するぞ。

「じゃあ君は波音のあーんな所にほくろがあるのを知っているのかい？

星型の……だよ？」

ん？

俺にそんなほくろあるのか？

あーんな所ってどんな所だ。

というかいつ見た、言え。

「えっと……。」

し、知ってますよそのぐらい！」

赤くなりながらア ril はセズクに噛み付く。

セズクはうつすら笑いを貼り付けながら

「へえ……？」

波音には星型のほくろなんてないはずだけどなあ？」

と、意地悪く反撃に出た。

これだけでこいつのやらしさが滲み出してるな。

やらしいわあ。

「ん？」

一体どういうことなのか説明してほしいなあ♪」

によよとア ril を言い負かしたことにいい気になり調子に乗り始めるセズク。

「えっと、その……」

ア ril が困った顔になり、そろそろ助けてやるか、と俺は重い腰を上げた。

別に見ててもいいんだが目覚めが悪いことになりそうだ。

「やれやれだな。

俺達は自分の部屋に行くとしようぜ？」

二人の肩に手を置いて提案してみる。

それに便乗したメイナが

「わ、私もそうした方がいいと思うよっ！
ね、仁？」

と追加砲撃してくれた。

「お、おうよ。」

とりあえず部屋に行こうぜ」

キマリだな。

目から火花を吹き出してばちばちしている二人はこの際に
一気にばらばらにしてしまった方がいいだろう。
この超兵器の中で喧嘩されても困るしな。
全員で歩き出そうとしたがセズクだけは

「ちょっと野暮用♪」

といって、近くの階段を登って姿を消した。
野暮用……。

あいつが野暮用ね……、気になるじゃないか。
別に深く追求しようとは思わないけどよ。

「なあなあ、ちよいちよい、おいおい」

「呼びすぎですよ。」

「どうかしたんですか？」

「父上とかはどうしたんだ？」

歩きながらア ril さんに問いかけた。

ハンザさんの行方が気になるじゃないか。

俺を息子と言ってくれたお方だぜ？

俺の親父たちを殺した張本人だけでも……さ。

「シンファクシ……さんでしたっけ？

そのお方と話しています」

ア ril は地面においてある空き缶を不思議そうに眺めて通り過ぎた。
あちゃー。

あの二人は会わせたらまずいだろうに。

絶対に駄目だろう、常識的にも。

仁が空き缶を蹴り飛ばし壁に当たって気の抜ける金属音がこだまする。

それと同調するように急に小さな音が支配しはじめた。

「……動き出した」

「ひょい!？」

耳元で呟かれたお陰でビククリしてしまった。
シエラか、どこにいたんだ。

「よっ、です!」

「ういーす」

お前らは部活中の男子高校生か。

違うだろうが、ア ril とシエラさんでしょう？
もうちょっと、ナデシコ的にいかないものか。

「どこ行ってたんだ？」

仁がさっき蹴飛ばした空き缶を拾いつつ投げてゴミ箱に入れた。

「シンファクシと話してただけ。

それより、部屋どこ？」

「えっと……この近くだと思うんだが……」

仁の持つ地図をシエラが横から覗き見する。

俺は少し離れて小さく設けられた窓から外を見た。

まだつけられて新しい窓、元の超兵器にはなかったものなのだろう。そこから見た外は赤く、暗かった。

比較的俺達がすむ街は海に近いためもう海岸線が見えてきている。

「お、ここだここだ」

俺がその景色に釘付けになっている間に仁が部屋を見つけて、声をあげた。

俺は窓際から離れこっそりと部屋の中を覗き込む。

船内奥深くに設けられたこの部屋はけっこう……いや案の定狭い。そりゃそうだ。

「うわぁ……鉄臭いですね……」

ア ril が天井から床までを見て感想を述べる。

仁は隣の部屋とか聞いたけど……。

シンファクシ元帥間違えた系？

意外とおっちょこちょい？

「俺と波音が同じ部屋でシエラとメイナが隣のお部屋か……」

間違えてるじゃないですか、元帥。

一人一部屋なんてバカなことはないと思いましたよ。

戦艦だからそういったスペースは考慮されないよな、流石に。
仕方ない、あきらめよう。

「私はお父様とお母様のところに一度戻りますね？」

俺の裾を引っ張ってそういうとア ril は廊下の角を曲がって行った。
迷わなきゃいいんだが……まあ大丈夫だろう。

「おう。」

じゃあまた……」

少し大きな声を出して角まで追いかけて見送る。

「はい！」

金髪を揺らしてア ril はかけていった。

部屋に再び戻って頭を掻く。

金属製の天井に床、壁。

蛍光灯が添えつけられた机が一つとベット。

ちなみに二段ベットである。

木製かと思って触ってみたが金属製だった。

とことん自然物を排除しているなあ。

申し訳ないようにプラスチックの小さな植木が机の上においてある
のがせめてもの情けと言えた。

「じゃあ僕達は自分の部屋に行くから……」

シエラがその植木を触って全ての興味が失せたのか

「じゃーねー♪」

メイナと一緒に部屋から出て行った。

そしてドアが閉まる……それが合図だ。

ボタン、と。

俺と仁は走って先を争った。

一歩踏み出した仁の首筋を掴み、とどめると同時に俺の体を前へ押し出す。

「ぬおおおおお」

仁がゆらりと後ろに倒れる瞬間に俺の左足を掴みやがった。

バランスを崩した俺の体がつんのめり、二段ベットの上に肩がぶち当たる。

鈍痛に歯を食いしばり反撃のために仁を蹴った。

顔なんか蹴られた日には人間、驚くのだ。

驚くとひるむ。

ひるんだ仁が力を緩めた隙にさっと左足を引き抜き、無事に二段ベットの上を確保した。

多分五秒以内の出来事だったと思う。

「くっそ……」

いてて……」

俺が蹴った鼻を押さえつつ仁が起き上がった。
赤くなってる。

「すまん。

そんなわけで俺が上な？」

勝利のVと笑顔。

敗者は地面にのた打ち回ってればいい、ふははは！

「はいよ……。

ったくもう……。」

口を尖らせて仁は下に引っ込んだ。

それにしてもシャワーないかな。

この煤まみれの体を洗いたい。

肉が焼ける、嫌な臭いもする。

いつの間にか熱によって溶けかけた痕がある携帯を取り出して時間を見た。

時間帯は午前一時前。

シャワーを探して部屋を見渡す……。

あるわけないか。

ここはホテルではないのだ。

幸いにしてあまり汗はかいてないし……。

服だけ着替えて……。

「じゃあ俺、大浴場行ってくるわ！」

「おう、行ってらっしゃい」

仁はそういつて走って部屋を出て行った。

さて、シャワーがないとなると……っておい！

「俺も行く！」

ちょっと待てや！」

あわてて部屋から飛び出した。

まさかこんなところにあるとは……。

驚きである。

本当にここは戦艦の中なのだろうか。

極めて謎であると共に自分の誤解に頭が痛くなる。

部屋からエレベーターを登り艦橋基部に向かう。

機関によって生じた熱がお湯を沸かしているみたい。

丁度いい湯加減でばんばんばんばんである。

分厚い鋼鉄にくりぬかれた小さな窓を開け下を見ると

永遠に続くかもしれないと錯覚させられるほど広大な甲板に

米粒よりも小さな人がちよろちよろしているのがかすかに見えた。

甲板に走っている奇妙な模様のお陰で明るい明るい。

蛍光灯要らないんじゃないかってぐらいに。

窓を開けて何かが足りないと思っていたがふと分かった。

風だ。

微速で進むこの船はイージスで守られているお陰かまったく風がない。
いい。

それはそれでどこか悲しい。

「ZndienEn♪

LeHenAmEs?Ie♪」

一緒に風呂に入っている数人の兵士が歌を歌っている。

小さな帝国のあるお話だ。

俺はその歌をバックにお湯に使ったまま外を見た。

真っ暗な海が広がり真っ黒な空が包み込む。

帝国郡と連合郡の戦争はいつまで続くのだろうか。

もう街が爆撃されるのも……。

人が死ぬのも見たくはないのだ。

海と空という決して相容れない存在を見るとふとそう考えてしまった。

水と油を見るだけでこれを考えそうだな、俺は。

俺だけが悩んだところでどうしようもないことだというのに。それに……。

『大切なものが消えるとき

三つの死は姿をあらわす。

死は力を使い地上を無に戻す。

死は鬼神となり

恐怖の中で消えていく。

大切なものを失った悲しみと共に』

この言葉もよく聞くが……。

そういえば昔、シエラは続きがあるとかどーとか……。

気のせいかな？

まじめに考える俺の前に飛沫を立ててアヒルのおもちゃが着水した。その衝撃で

「ぐわっ」

と鳴きやがる。

仁が手に持ったアヒルのおもちゃを俺に投げつけてきのだ。

「…………おい」

気持ちも分かるが……。

アヒルを掴んでぷにぷにした。

o n t i n u e s .

T h i s
s t o r y
c

111 (後書き)

ありがとうございました。

だんだん受験が近くなってきました。
うう、怖いなあ……。うう、怖いなあ……。

死神超兵器

最大でマツハ五は出るらしいこの超兵器は戦う必要がない今、のんびりと空を漂っていた。

日が昇り、また落ち、また昇る。

途中何度か海に着水して整備したり。

甲板で急にバーベQしたりと、とにかくのんびりと。

ヴォルニールで過ごして三日目の朝。

日に焼けすっかりと海の生活になった頃だった。

明日にはアフリカにつくとシンファクシに伝えられそのときに
どうやら詩乃が目覚めたらしい、と耳に入れて俺はさっそく医務室
へ飛んだ。

「あ……波音」

「おう」

黒目にうつすら不安のかすみがかかった詩乃に手を上げてあいさつした。

今まで緊張に縛られていた顔つきがほっとしたように軟らかくなる。

「気分はどうだ？」

「悪くないか？」

ベットの傍まで行って椅子を引き出し、座る。

「分からない。

頭にぼーっと霞がかかってるわ」

「じゃあ大丈夫だろ」

廊下を威勢良く走る兵士達の声が近づき、また遠のいてゆく。
窓から差し込む日の光が詩乃の包帯の隙間から覗く黒髪をキラキラと光らせていた。

「ここは……どこなの？」

それにその服って……」

おどおどと病室を見回し俺の目を見つめてくる。

ぐるぐる頭に巻かれた包帯を触り、不安に胸を焦がしているのがよく分かった。

「まあ、おちつけ。

聞いて欲しいことが山ほどあるんだ。

いいニュースも、悪いニュースも……な」

「ニュース？」

「ん。

大量にあるぞ」

詩乃が頷くのを待って、俺は全てを話した。

静かに俺の話を聴いてくれた。

実は詩乃の親父から頼まれて……。

なんてことも全部話したさ。

隠す必要はもうないんだ。

ぐだぐだと笑い話を挟みながら話してたら三十分ぐらいあっという間にたっていた。

「それで……か。

波音が学校しょっちゅう休みっぱなしだったの」

話し終ったとき、詩乃は俺をなんとも言えない表情で見ている。恐怖の色すら見えたためあわてて

「まあ、俺はほとんど役立たずだったけどな。

シエラとか、メイナだよ、この功績のほとんどは」

と付け足した。

「まさか、シエラちゃんとメイナちゃんが最終兵器だったなんて。考えもしなかったわ。

そりゃ体育で何でも一番と二番になるわけだね」

詩乃はからからと笑った。

笑い事で済ますことが出来るお前がすごいと、俺は思うぞ。

「これで終わり。

全部話したぞ」

俺は近くにあった水差しをとり、喉に流し込んだ。

乾ききった喉にじんわりとくるぜ。

「私は、ベルカのある子孫だった……ってことか。なるほどなあ……。

なんかそんな気はしてたんだけど」

弱々しく俺を見て笑った。

まあ厳密には全世界の人間がベルカの子供だけだな。

「ショック、流石にでかいだろ？」

近くのりんごを手に取り、剥いてやる。
大きな一個を八つに切り

「ありがとう」

その一つをフォークで刺して小さな口の中に入れてやる。
いわゆるあーんだ。

これ、ア ril に見られたら俺殺されるんじゃないか？
ぎたぎたにされるんじゃないか？

「何か聞きたいことはあるか？」

りんごをかじり取る繊細な音と
窓から入ってくる陽の明かりに目を細め、
気を取られた植木をいじる。

あ、これは本物なんだ。
俺の部屋にも置いといてくれればいいのに。

「あまり……できれば風呂に入りたい」

詩乃は困ったように俺を見た。
残念だったな。

「ははは、それは俺には無理な要求だ。
そういうのは俺じゃなくて看護婦に頼むもんだ。
第一俺は男だからな。
残念でした」

詩乃にもう一つりんごを与えてやる。
それをまたかじるのを眺めながら

「元氣そうでよかった。

俺はそろそろ行くとするぜ」

立ち上がって椅子を机の下に入れた。

「りんご、ここに置いとくからな」

詩乃の手に取れるような近くにりんごの乗った皿を置いておく。

「じゃ、また来るから」

「うん、待ってる」

「じゃ」

扉に向かって歩き、自動ドアが開く。
ふちに手をつき出ようとしたとき

「波音」

後ろから呼び止められた。

「何だ？」

「ばーか」

いきなりなんだよ。
笑ってるし。

「アホ」

俺は病室から出てふーと息を吐いた。
どーも病室の空気は体には合わない。
何か嫌なことを思い出しそうだ。
甲板に出ておいしい空気でも吸うとしよう。
そうしよう。

俺の足は自然と甲板に向かった。
と言っても物凄く船がでかいお陰で十五分ぐらいじゃすまない。
エレベーターを使う。

これまた新しいぴかぴかのエレベーターに乗り込み艦橋基部から外へ出た。

重たい装甲扉を押し開けるとそこはもう海と空でございます。

「んー……」

まぶしいぐらいに青天である。

そういえばそろそろ着水の時間だったっけ。

シンファクシのこだわりだか知らないが朝十一時から午後四時ぐらいまではこの船は着水して

水上航行に切り替わるらしい。

船は揺れてなんぼ、とのこと。

アホかと。

ゆっくりと高度が下がってゆき、やがて艦首が大きな水しぶきを作
って着水した。

続いて船体がのめりこみ、巨大な質量を飲み込んだ海が悲鳴を上げる。

こまかい雨のようになった海水がイージスに弾かれ海面に降り注ぐ。

「ふうー、ああ!!」

大きく伸びをして太陽をいっぱい浴びる。

これ、イージスがなかったら船から放り出されてるよなあ。

わいわいと当番以外の兵士が甲板に出てきた。

炭とか金網とか肉とかベーコンとかもってやがる。

近くの砲台なんてお構いなしで火をつけるし、危ない。

舷側に張り付いた補助エンジンの出っ張りでみんな思い思いの休憩を満喫している。

中にはパラソルまで広げる奴がいるのだから……まったく。

愉快的な軍隊である。

全長一キロを超えるこの戦艦は艦首から艦尾までが一つの巨大な島のようなものだからな。

一種の人工島ともいえる。

ゆっくりとイージスが解除され、穏やかな風が吹き始めた。

船体が大きいためあまり揺れはない。

シンファクシ涙目である。

どうやら兵士達のストレスを和らげる効果もあるんだとか。

と言うかこっちが本当の理由だろう、多分。

軍艦だからあまり娯楽はないのは確かだ。

テレビもないし、ゲーム機もない。

ストレスを開放するにはこういうのが一番いいんだと。

俺は手すりに掴まってのんびりと海を眺めるのだ。

超兵器に切り裂かれた海が白い息を吐き出す。

水の碎ける音、流れる音。

のんびりとした午前である。

本でもとってこようか。

そう思い立ちまた艦橋基部内に入ろうとする。

途中で鼻歌を歌いながら中年の男が機銃を磨いていた。
滑り止めの効いた鉄の床を靴裏で踏みしめ、空を仰ぐ。
全部が真っ青だ。
雲が一つもない。

「おい、そっち行ったぞ！」

「レルバル少佐、取ってください！」

視界にボールが広がりあわてて手を伸ばすも遅かった。
鈍い鈍痛が鼻っ柱を蹴り上げ仰向けに倒れる。

「だ、大丈夫ですか少佐！？」

駆け寄ってきたがちむちのお兄さん達に大丈夫、と伝えて
傍に転がり落ちたボールを手渡した。

「少佐も一緒にどうです？
バスケットボールでも」

焼けた肌にムキムキの筋肉男たちの中に入って俺が何をできると言
うのか。

丁寧に断らせてもらう。

壁に手を着いて立ち上がり海の方角を見た。

双眼鏡なんか持ってきたんだよ、実は。

海は何かと面白いからな。

目にレンズを当てぐるりと眺め回す。

キラ、とその中何かが光ったのは錯覚だと思った。
はじめは。

ワイヤーか何かが光ったのだ、と納得したかった。

光ったそれは俺の目にすら認識出来ないほど程度の小さいものだったからだ。

海面が光っただけ——か？

ぞくつとする明らかな殺意を持っている。

レーダーをかい潜るような低空で向かってくる『それ』。

ようやく円錐の精錬された形、小さな翼が見え始めた。

数は……十より多い。

ヴォルニーエルの乗組員たちはまだ気がついていないのだろうか。

ブリッジに知らせなくては……。

距離は——およそ五千。

目測で計算して無線機を取り出した。

通話スイッチを押すよりも早く鼓膜を破る勢いでサイレンが鳴り響いた。

バーベQなどをしていた兵士達がきばきと配置についてゆく。

もちろん火の始末は忘れない。

サイレンと共に機銃にとりついた男は俺に

「どっちだ!!」

と大声でサイレンに負けないようにがなりたてた。

「あっち！」

「十時の方向!!」

方角を指し示し男に教える。

「どいてろ!!」

スコープを覗いた男は目標を発見したのか、三連装機銃を発射した。

空気の裂け目を率いて鉛が空を舞う。
水柱を立ててミサイルに何発かの弾が着弾した。
膨れ上がる爆発を潜り抜け残りのミサイルが襲い掛かってくる。
距離はおよそ二千。
と、ようやく風が頬を叩くのをやめた。
万能の守りイージスが作動したのだ。

「これで……」

ほっと安心した俺達は完全に傍観者の立場を取っていた。
だがミサイルは突っ込んでくる。
普通のもの三倍はある巨大な物だ。
それが大きくホップアップしたかと思うと急降下。
一般的な対艦ミサイルと変わらない動きだ。
どうせイージスが避けてくれるだろう。
みんながそう思いミサイルから目を離した。
いつもならそこで強制的に方向性を変えられたミサイルは目標を認識できずに

海へ落ちる道しか残ってはいないはずだった。
安心してきっていた。

イージスに触れたミサイルの弾頭から強烈な光が発せられるまでは。
シエラやメイナがメガデスと戦ったときに見たあの光だ。

赤にも、青にも捉えられる光――。

まさか、あのミサイル……イージスを？

答えあわせのつもりだろうか。

ミサイルは艦首に一発ぶつかったかと思うとその弾頭を炎に変えていた。

後に続くミサイルたちが超兵器の甲板に一つ、二つと花を咲かせた。
熱風で閉じた目の端にばらばらになった人がちらりと映る。
熱風が肺を叩き一瞬息が詰まる。

続いてやってきた衝撃波が手すりに体を叩きつけた。

「う……！」

大きな悲鳴とサイレンが鳴り響き超兵器が焼ける悲鳴。

目に映るのは大きな火柱と燃え盛る甲板。

そして火を消そうと駆けずり回る兵士達と折れ曲がった砲身だった。
血で染まった甲板、転がった頭……。

連合郡はいつのまにあんなものを創りあげていたんだ？

悲鳴と怒号が甲板を駆けずり回り碎けた機銃が転がる。

手伝いに入ろうとした俺の頬をゆっくりとまた風がなで始めた。

万能の守りイージスが弱まっているのだ。

イージス放出口だけをさっきのミサイルは狙い済まして攻撃してきたのだろう。

黒煙が空へと伸びその黒煙をかき消すように三隻影がゆらりと滲み出してきた。

「冗談だろ——？」

視界に映ったのは……。

円盤型超兵器三隻だった。

inues.

This story continues.

死神超兵器（後書き）

ありがとうございました。
もうどこが怪盗なのかと。

本当に。

そう突っ込みたいところでしよう。

僕もです。

声を大にして言います。

どこが怪盗なんだー！！

不意打ち

俺はあわてて艦橋内に飛び込みエレベーターなどを使わずに階段で駆け上がった。

興奮でアドレナリンがどくどくで疲れなんか感じない。

中枢部が低いところに設けられていることもあり

あっという間にシンファクシのところにたどり着いた。

ほとんどドアを蹴破るようにしてこじ開け中に飛び込む。

「負傷者は!？」

この戦艦の副長らしき人物とオペレーターが激しい会話をしている。

「およそ二百……!」

オペレーターは苦痛に顔をゆがめるとそばに立つ副長にそう伝えた。

「なんてことだ――!」

副長は小さく唸り爪を噛む。

短く刈り上げた頭に申し訳ない程度に帽子が乗っている屈強な男のしぐさとしては

何か少しかわいいものだと思ってしまった俺はもう末期なのかもしれない。

「ダメージコントロール!

各班、状況を知らせ!」

金髪を乱してシンファクシがもう一人のオペレーターに怒鳴ってい

る。

それでも液晶に添えられたディスプレイからは目を離さない。液晶には簡略化したヴォルニエル全体を示した図が投射されていてその図の一部が赤く染まり、点滅している。あのミサイルが命中した被害箇所であることは一目瞭然であった。状況知らせ、の合図を受けた各班から艦橋内に膨大な報告が飛び込んでくる。

副長はそれを冷静に図に書き入れてゆく。

『艦首イージス放出口一から六まで大破!』

「艦首イージス一から六……と」

図は一旦消え、変わりに艦首の図がクローズアップされた。炎上中を示す火のマークと共にぱっと見て十ある丸いやつの内六つが破損、機能停止を示す赤で光っていた。

『左舷一から四、六、過負荷率限界! 煙を吹いています!』

「左舷……一から四、六……と」

副長はさっきと同じように左舷をクローズアップさせ赤を眺める。

「五が生きているのが幸いか……!」

唸るように五番イージス放出口をにらむ。

『艦尾放出口一から六まで大破! 出力が落ちています!!』

今度は艦尾……。

ずれた帽子を直して副長は艦尾をクローズアップした。

『艦尾班からブリッジ！

浸水停止、量およそ四百！』

「よくやった！」

水滴のマークが消え、さっきからうなぎのぼりに増えていた数字は四百で止まった。

艦尾は比較的被害が大きいようだ。

「機関は！？」

それを思っか機関班にシンファクシは叱りつけるように無線に言葉叩きつけていた。

機関は船の心臓。

やられたら終わりだ。

『損害なし。

全力で行けます！』

シンファクシは安堵の息を漏らして椅子に崩れ落ちた。

頭に手を乗せて汗を拭う。

視線をうつろに図に移したときにようやく俺に気がついたらしい。

「レルバル少佐どうした？」

しゃきつと元に戻って俺に報告を求めた。

なぜ俺がここに來たのか、言わなくてはならない。

「元帥、連合の超兵器が三隻……」

順序を持って話したかったが俺は口下手。

なんかわけの分からん感じになってしまった。

後悔の波が襲ってくる。

元帥はああ、と小さく唸ると後ろのレーダーを指差した。

ノイズ交じりの大きな光点が三つ光っている。

「それはさっきレーダーに捕らえた。

攻撃してこないところを見ると何か用事でもあるのだろう……」

用事？

イージスが無くなって丸腰のだというのに？

考えが深くなってゆく。

罨じゃないのか、元帥。

シンファクシは椅子の上で髪にカチューシャをはめていた。

前髪がうっとおしくて仕方ないらしい。

オペレーターが耳からヘッドホンを外してシンファクシに叫んだ。

「元帥！

通信が入っています！

場所は――敵超兵器です！」

ほら來た、とシンファクシは俺に目で伝えたと

「回せ、映像は拒否してな」

机の上にある一つの小さな受話器を取った。

耳にはめるタイプのやつだ。

艦橋内に放送を垂れ流しにするためシンファクシはパチンと小さなスイッチを押した。

朝日の立ち込める中でその緑色の光が異質な光を放つ。

《こちら連合郡超兵器、クシムデスだ。
帝国郡超兵器の艦長か？》

男の声だった。

いきなり無礼な呼びかけ方だ。

「ああ」

いや、あんたは元帥だろ。

案の定シンファクシも少しカチンと来たようで乱暴にマイクに返事を吹き込んでいた。

《これは美声……。

はじめまして、私はシフエです。

いきなりですが本題に。

私たちはあなた方を死なせたくはない。

どうです？

降伏しませんか？》

シンファクシは目配せをした。

俺に紙とペンをもってこいと合図している。
映像通信を封じた一つの理由がこれだろう。

「降伏だど？」

オペレーターから渡された紙とペンをシンファクシに渡す。
こうやってひそかに策を練ることが出来るからな。
相手にこちらの動きが筒抜けだとそうはいかない。

《そうです。

あなたはの声は美しい。

決して悪いようにはしません》

声フェチかってぐらい声にこだわってんな、この人。
頭が幸せにも程がある。

「成分——お——まし——」

艦橋にひそひそと入ってきた男がそつと紙にペンを走らせているシンファクシに耳打ちした。
声フェチの敵が五月蠅くて何を言っているのか聞き取れなかった。

「私が……？」

何を言っているんだ？」

くしゃくしゃとベルカ語がかかれた紙は俺が読む間も無く副長に渡された。

副長はそれに目を通しさつとシンファクシを見るとPCに何かを打ち込んだ。

《そのままの意味ですよ。

あなたは私が聞いてきた中でもトップを争う美声だ。

海の藻屑としてしまうのはもったいない》

ねつとりと耳に絡み付いてくるこの声は俺からしたら鳥肌物だった。

もう映像を見なくても脂ぎった中年の親父が頭に浮かぶ。

おなかには出てるだろ、多分。

一日中艦橋内でラーメンすすってる、そんなイメージの声だ。

と、さっき「成分」と言っていたが何だったんだろう。

あの男は今も長々とシンファクシに耳打ちして……あ、今終わったのか。

一礼するとドアから出て行った。

「……分かった。

私も部下の命が惜しい」

そこまで俺達のことを……元帥！
一生あなたについていきます！

《……では？》

「降伏するでしょう」

は！？

いきなり覚悟をへし折られた。
折るどころじゃないわ、ぶち碎かれたわ。

「げ、元帥何を……むぐ」

「落ち着いてハニー♪

これは一つの作戦だよ♪」

この声……。

俺がシンファクシに詰め寄ろうとしたとき、セズクに口を抑えて抱きかえられた。

作戦？

《まずハンザ一家を渡してもらいましょうか？

裏切り者には即、死を。

これは掟ですから》

無線はあいからわず気持ち悪い。

掟とか言ってるよ。

何時代だ。

「了解した」

シンファクシは完結にそういうとマイクのスイッチを切った。

《おい、マトルデス。

艦尾から近づいて回収だ》

敵の無線だけは筒抜けに聞えていた。

マトルデスとやらの艦長はその命令に従う。

《了解しました》

距離にして約五百からゆっくりと近づいてくる一機の超兵器。

あれがマトルデスだろう。

ヴォルニーエルと比べてはるかに小さいがそのまがまがしさは引けを取らない。

「マトルデス——炎神……か」

小さく眩き口の中にざらつきが残るのを感じた。

ベルカ語で名前をつけたのは何でだろう。

「元帥、ただいま。」

今見てきたけどアレはベルカの遺産じゃない。

連合郡の創りあげたただの空飛ぶ戦艦みたい」

「うわっ、メイナ!？」

急に背中の後ろで声がしたせいでびびって飛び上がった。

窓からすっと入ってきたながらメイナが小声でシンファクシに言ったところだった。

お前どこから入ってきてるんだよ。

びっくりさせるんじゃないっ。

「そうか、よし。」

分析と結果は一致しているな」

「そのようです」

副長は報告紙とメイナの報告を聞き比べて総合的に判断した。

ベルカの遺産じゃない……?」

つまりあれは連合郡が自分の技術で作ったものだってことか?

超兵器技術を持ち、超兵器を作る……。

そのことって連合郡にとってすごいことじゃないのか?

世界にとっても——だけど。

ベルカの技術を完全に把握したってことでいいんだろ?

「メイナ、それって……」

「大丈夫。」

あいつらは意味も分からずにコピーしただけ。
出力も安定してない、使えない機関を―――だけど」

「じゃあベルカの技術は完全には漏れてないってことか？」

「うん」

……こればれてたら攻撃されるぞ。

きちんとマイクは切れているんだよ……な？

念のため確認する。

切れてるわ、さすが元帥。

メイナとの会話を打ち切りヴォルニエルの図を眺める。

黒煙は大分収まってきてはいるようだがやはり赤い損傷マークが痛々しい。

《おし、艦尾にたどり着いた。

ハンザ達を出せ》

急にスピーカーを震わせたのはやる気のなさそうな女の声。
やる気出せよ。

「出すよ。

それと……これはその前菜だ。

もらってくれるだろう？」

いきなりシンファクシはマイクにそれだけ完結に吹き込んだ。
何をするつもりなのだろうか。
前菜？

《は？

前菜？
《》

俺もあんたと同じ考えです。

前菜ってなんじゃ。

メインディッシュの前に食うあれだよな、前菜。

シンファクシはマイクのスイッチを切ると

「撃て！」

と命じた。

反射的に後ろの窓を振り返る俺。

そこには一隻の炎神がよろよろと危なげに漂い艦尾上空にて静止していた。

「敵にイージスの展開は認められていないよな？」

副長がそばのオペレーターに問うている。

「は、ありません」

オペレーターは指を立てて安全を意味した。

ヴォルニールにも弾道レーザーはついている。

あのなぎ払う奴な。

その巨大な発射口が次第に光量を増してきたようだった。

「充填率八十％……」

《敵超兵器に高エネルギー反応！

弾道レーザーかと！》

「発射！」

《マトルデス避ける！》

ヴォルニール艦尾の上に鎮座する一隻の超兵器を極太レーザーが貫通した。

下から伸びてきた光線は避ける間も与えずマトルデスの命を狩った。

《な——！》

敵は絶句して黙り込む。

中央を挟み取られた敵超兵器は艦尾から後方二百メートル付近にその身を沈めた。

しばらく浮いていたが黒い煙をぽっぽっ吐く。

と思うと大きな水柱を立てて真っ二つにへし折れた。

海に長く尾を引く鉄の切り裂かれる悲しみの声。

《嘘だろ……？

おい！》

弾薬庫にでも引火したのだろう。

天にまで届くほどの水蒸気爆発を残して海面はまた静に戻った。

《謀ったな……！》

さきほどまでのねっとり声はなくなっていた。

焦りと怒りが身を包み、窒息しそうなほど締め付けられている。

そういった感じの声だった。

その声に対してシンファクシは冷静に

「謀るものにも……。」

我々は攻撃しないとは言っていない」

と返した。

敵がスピーカーの後ろで息を呑むのが分かった。

《降伏する――の意味を分かっているのか!?》

こればかりは敵が正しい気がしてきたわ。

「我々は敵同士だ。

戦争にはルールなんてない。

どれほど敵を喰らい、どれほど自分を生き長らえさせるか。そこには憎しみは生まれても消して妥協などは生まれない」

《っ……!》

この野郎……!!》

「そういうことだ。

連合郡には我々帝国郡全員が強い憎しみを抱いている。

憎しみは憎しみしか生まない……なんてあくびが出るような理論を振り回し

平和を望むようなやつもいると思うが。

世界を見ろ。

例えば二つの国が憎しみあっていて軍事関係で対立していたとしよう。

どちらかがその関係で軍事関係を縮小したらどうなる？
たちまち片方に攻め込まれ、滅ぼされるに決まってる。
ライバルは少ない方がいいからな」

シンファクシは受話器を半ば耳から取り外していた。
敵の声などもう聞きたくはない、といった感じに。

《あの超兵器の艦長は……！

俺の妹だったんだぞ——！》

あのやる気のなさそうな声の人か。

「そうか。

そいつは残念だったな」

シンファクシはさらりと受け流し戦闘命令を下した。
三回ブザーが鳴り響き兵士達が所定の位置につく。

《貴様らは……我々が沈める！

その美声が恐怖に歪む様、聞かせてもらおう！》

「ふん。

勝手にするがいい」

ぷつんと音声途切れ、シンファクシは受話器を乱暴に机の上に置いた。

元帥、かっこええ……！

「さて、奴らが来るぞ。

総員戦闘準備を早く！

急げ——！」

i
n
u
e
s.

T
h
i
s

s
t
o
r
y

c
o
n
t

不意打ち（後書き）

ありがとうございました。

やばい、シンファクシ元帥が悪に見える。

まあ警戒を怠った方も悪いのです。
では。

目

高まってゆく戦闘体制。

艦橋内でもシンファクシをはじめこの状況を楽しんでいるものがあるようだった。

「元帥！」

敵超兵器が航空機部隊を展開！！」

レーダー担当者がレーダーを見て悲鳴を上げた。

艦橋内は電子機器の見落としがないように電気が消されている。

窓にもその光をなるとけ入れないように特殊なコーティングがされている。

まあ、メイナさんはそれをぶち破ったわけなんですけど。

お陰で今はなんか明るい。

俺は、天井に貼りついたレーダー効果範囲の液晶を見上げた。

黒い画面に二つだけだった光点がどんどん増えてゆく。

超兵器に比べ光点は小さいもののその破壊力は計り知れない。

頭の引き出しによれば昔の対戦では最強といわれた戦艦を沈めまくった実績があるのだ。

航空機による飽和攻撃に船は基本耐えれない。

まあこのヴォルニールは知らないが多分……。

「いくらなんでも多いですね……。

近くに空母でもいるのでしょうか」

腕を組み知恵を絞るようにレーダー画面を見つめる。

冷静を副長は装っているようだったが顔は紅潮していた。

死と隣り合わせのこの職場は彼にはぴったらしい。

「かもしれん。

リーダー、範囲を広げてみる」

「はい！」

シンファクシがリーダー担当者に話しかけ光点の後ろの彼方まで範囲を広げた。

その様子には全てにおいて無駄がない。

初心者 of 俺がここにいていいのだろうか。

詩乃でも身に行こうかしら。

思考半ばのせいかな

「シエラは？」

するどく俺に問を突きつけてきた元帥に

「は……。

不明です」

申し訳なさそうに答えることしか出来なかった。

なんか、情けない。

シンファクシは低く唸ると考える姿勢に入る。

いかに自分がぬるま湯につかっていたかがよく分かる。

帝国郡の兵士としてこのお方は小さいときから苦勞を積んできたんだろう。

金髪の中に一本の白髪を見つけてしまい、ふとそんなことを思ってしまった。

そんな折、くいくいとメイナが俺の裾を引っ張った。

なんだ、どうした。

このクソ忙しい時に。

「私行って来て？」

どこへ。

「戦いに、ってことか？」

黙って首を縦に三回振った。

むずむずとさつき割った窓から出て行きそうだ。

そんなメイナをシンファクシは「待て」と押し止めた。

「シエラとメイナ。

イージス最大時の効果範囲は？」

その言葉を加えながらシンファクシは電卓を取り出した。

「んー……と」

メイナは少し考えると

「約六百……ってとこかな」

と両方の指を三本広げてシンファクシに見せた。

六百メートルってことか。

まあ本来最終兵器のイージスは自分だけを守ればいいからなあ。
あまりそう広くは――。

広いけどな、十分。

精神的ばうわあって説明を受けた気がする。

それだけで十分すごい。

「二人にはこの艦の防御に徹してもらう。
イージスで守ってくれ」

元帥は最終兵器の肩を叩いてウインクした。
イケメンすぎるだろ。

「え……」

嫌そうな顔をしてメイナは頬を膨らませた。
戦いたいらしい。

うずうずと手を広げたり閉じたりしてる。
生まれながらの最終兵器はすごい。
普通は戦いなんてしたくないだろ。

「この艦のイージスが消えた今、敵は結構な戦力を投入してくるだろう。」

我々が乗っているのが超兵器ならなおさらだ。
きっと敵はこの攻撃にこの海域は愚か
近くのひとつと全ての戦力を注ぎ込んでくるはずだ」

シンファクシは一度言葉を切ってモニターの被害状況を示す図を見た。
被害甚だしい。
黒煙が出ているところもまだあり、余計にそれが痛みに拍車をかけた。

「敵の超兵器が量産されたのならそれも編入してくる、と考えて不自然はない。

艦を浮上させ敵の出方を見る！

……わかったなメイナ。
シエラにも伝えてくれ。

イージスを張って、守ってくれ……。
この艦を、部下を……」

シンファクシのお願いにメイナの戦闘意志が屈した。
膨らませた頬を縮ませ、ため息をつく。

「分かったわよ……」

やれやれと、手をひらひらさせて窓から最終兵器は出て行った。
割れた窓、手に刺さらなかったのか。

まあいい。

それは置いておこう。

よいしょ。

「……で。

てめーはいつまで俺にしがみついてんだ？」

問題はむしろこっちだ。

気持ち悪いんだよお婆か。

「あ、ばれちゃった？」

セズクさん、てへへぺろ。

「離れろ」

気持ち悪い。

ただそれだけだ。

あと執拗に耳に息を吹きかけてくるな、やめろ。

「ヤダ☆」

「は？」

「何で？」

お前、流石にそれはいらつとくるぜよ。
お主じゃなくてお前だからね、もう。

「ヤダカラ☆」

理由になつてねえ。

きちんと理由で述べろ。

日本語かベルカ語でいい。

「いいじゃない、別に。

減るもんじゃないし……ね？」

いや、減る。

俺の中のプライドが減る。

大根おろし機にかけられた大根みたいに。

わけわからんたとえだ。

そういえば豆知識だが大根おろしをするときはゆっくりすること。

早く終わらせようとマッハで擦ると辛くなるぞ。

何でかは知らん。

「うるさいぞ、二人とも。

邪魔にならないようにこれの実験台にもなってくれ」

シンファクシにぽんとボタンを渡された。

実験台って……。

渡されたボタンを眺める。

普通に四角い台があり、そこに一つの小さな赤いボタンがついていた。

何だこれ。

「押してみろ」

言われるがままに押してみる。

ぱかつ、と天井についていた金属箱が開き中からによー、とヘルメットみたいなのが二つ伸びてきた。

ヘルメットを手取る。

頂点部から一本のケーブルが延びて天井に繋がっている。

配線が絡み合い、なんかアンテナみたいなのもついている。

スイッチも一つ。

あやしいっす、なんですかこれは。

「これをかぶれと？」

聞いてみた。

これを？

明らかにマッドサイエンティスト臭がする物質なんです。俺これ被った瞬間にビリビリとかやめてくださいよ、元帥。

「そうだ」

ためらいもなく部下に実験を強いる上司ってどうなんですか。労働条件的に。

「いやいやいや」

拒否。

下手すれば俺死ぬかもしれない。

ちなみにこの会話の間も俺はセズクに抱きつかれてる。
誰かなんとかしろ。

「大丈夫だ。

安心してつけろ」

って言われましても……。

シンファクシは、俺の手からヘルメットを奪い取った。
セズクを蹴って俺から引き剥がし

「この船に元から備わっている機能をちょっと……な。

もともとこの船はひとりだけで扱っていたらしく……。

『核』と呼ばれる人たちがな。

その機能を少しだけ修復できたからこの際、試してみようと思っ
てな。

レルバル少佐に人殺しは出来ないだろうから……。

セズク、お前がやってみろ。

レルバル少佐はこいつの補助をしてくれればいい」

と言葉をならべセズクにヘルメットを押し付けた。

昔はこの巨大艦をたった一人だけで……？

すげえな、それ。

なんか、一回だけ聞いたことがある。

もうあまり覚えてないけどな。

「これをつければいいんですよね？」

ヘルメットを回して変な物がないか確認している。
やっぱり疑うよな、普通は。

「そうだ」

はやくつけろ、とせかすようにシンファクシは返事をした。

「やってみますか……♪」

セズクは近くの椅子を引き寄せ、そこに座った。
頭にヘルメットを乗せて、目をつぶる。

「スイッチを入れろ」

シンファクシの静かな司令でセズクのヘルメットにスイッチが入れられた。

「……………!!?」

はっ、と息を呑むセズク。
目をつぶっている。

つまり耳とか何かで感じた、ってことか？

「これは……?」

何だ。

すごく気になるじゃないか。
……気になるじゃないか。

「外……?」

外?

そと?

外がどうして見えるのさ。

「元帥!

第一砲塔のコントロールが効きません!

制御神経が何かに乗っ取られたように……!」

急にオペレーターが金切り声を出した。

弾かれたように副長が窓へと走ってゆく。

「げ、元帥!

一番砲塔が……!」

副長が窓を除いた瞬間血相を変えた。

「どうした?」

シンファクシは席を立つと副長の元へ歩く。

そしてにやりとほくそえんだ。

俺もメイナが割った窓から首を出した。

一番砲塔というからには艦首付近だろう。

「なんじゃありゃ!」

一番砲塔がぐいんぐいん動いていた。

右へ左へせわしない。

生き物のように砲身をめぐらせ、上下に俯角を合わせている。

「敵との距離およそ二万！
戦闘態勢をとってください！」

レーダー担当者の搾り出した声により全員が我に帰った。
そうだ、こんなおもちゃで遊んでいる場合じゃない。
窓から離れようときびすを返す。

ぴったりのタイミングで一番砲塔が火を吹いた。

目を焼くような三本のオレンジ色の光が伸びてゆく。

その先には空に黒いしみとなり始めた一点がある。

しみの前にオレンジ色の光はとどまると綺麗に広がった。

青空の中輝く花火のように。

五つほど煙を引いて——敵機が落ちてゆく。

「これがベルカの……」

小さく俺は呟いていた。

畏怖の対象だろ、こんなの。

セズクがやったんだろ？

「機関圧力よし！

元帥！」

艦橋内に溢れる活気。

それは生と勝利に固執している者の息吹。

「うむ。

ヴォルニール、浮上開始！

エンゲージだ！」

ぐん、と体が斜めになり体が後ろに押し付けられた。
海を蹴り、ヴォルニーエルが空へと飛翔したのだ。

水蒸気が巻き上がり空を曇らせる。

光を纏う翼はぼんやりと青空の中でもはっきりとした存在を持っている。

超兵器は光の線となり空へとその身を投じた。

窓から急いで離れ、俺も残っているもう一つのヘルメットを被った。
横にある小さなスイッチを入れる。

それを見つけたのかシンファクシが説明してくれた。

「レルバル少佐。

貴様のはいわば『目』とでも言うべきものだ。

その『目』はまさに万能だ。

それをつかってセズクに目標を指定してやれ」

目ね。

「セズク！

一番砲塔は貴様の物だ！

好きに使うがいい！」

シンファクシは楽しそうな口ぶりだった。

実際わくわくしてるのかもしれない。

シンファクシ元帥、はじめもっと優しい言い方だったじゃないですか。

貴官、とか。

気がついたら貴様になってるんですけど、何ですか。

ぶつぶつ思いながらも俺はヘルメットをつけると目を閉じた。

金属製のぼつんと出っ張っているスイッチを押す――前に。

椅子、椅子を探し座った。

シートベルトなんかがないのが少し残念だがまあいい。
もう一度目を閉じてヘルメットについたスイッチを押した。

「……………！！！」

頭がきゅつと吸い取られるような感じがした。

「高度、五百に到達！」

「よし、上昇中止！」

水平飛行と共に巡航速度を維持だ！」

「了解！」

シンファクシたちの声は聞える……。

だけど、視界がおかしい。

俺は艦橋にいたはず……なのに。

どうして甲板にいるんだ？

自分の周りに屈強な男達が機銃を持って空を睨んでいる。

「あの……」

無視される。

そりゃそうか……。

今俺の体は艦橋にあって、ここにあるわけじゃないからな。

空とか飛べるのだろうか。

体は艦橋にあるんだ。

落ちたところでヘルメットを外せば問題ないだろう。

思い切ってスピードをつけて……そそりたつ舷側から飛び降りた。
落ちない。

少し高いところにポツンと置かれた。

ために右足を出してみる。

落ちない、しかも前に進める。

左足……。

風の囁き、海の声、雲の気配。

全てを感じることが出来た。

後ろを見るとヴォルニエルの巨大な船体が空気を切り裂いて昇っていくところだった。

黒煙をうっすらと引き、凹んだ装甲が痛々しい。

置いていかれる――、という危機感と共にジャンプしてみた。

空を飛ぶ感覚、とはこういうことなのだろう。

自分が思うままに動けた。

ヴォルニエルが蹴った海が蒼くにごりはるか下に渦巻いていた。

歩くようにして空を俺は移動できた。

最終兵器の気分だ。

そつと小走りに空を飛び、連合郡戦闘機まで行ってみた。

セズクに目標を指定するのが俺の役割だからな。

こうやってうかうかと遊んでいるわけにはいかない。

思うだけで彼方だった戦闘機は間近に迫っていた。

そつと寄り添うようについていく。

たくさんのミサイルや爆弾をつんだすらつとした攻撃機だ。

マルチロールとでも言うべきか。

それに一人の男が乗って操縦桿を握っている。

無線つきのヘルメットにせわしなく話しかけ笑っている。

今から人を殺しに行くというのに……。

そつと、キャノピーを触る。

冷たいが中の人の熱を感じることが出来る。

それと同時にぞつとした。

これが、『目』か。

エンジンが熱い排気を出して鉄の鳥を一步、一步と前へと押し出し

ている。

その足をくじく。

セズクに目標を指定するタグをこの戦闘機につけた。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

目（後書き）

ありがとうございました。
クリスマスですね。

プレゼントですか？
ポイントをr y

冗談です。

読んでいただきありがとうございました。

あ、プレゼントはポイントでr y

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3330/>

怪盗な季節☆

2011年12月25日15時47分発行